

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第11集

將 監 名 遺 跡

平成17・19・20・22・23年度 浜松労災病院増改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2012

静岡県埋蔵文化財センター



SB202（北西から）



SB213（北東から）

卷頭図版 2



S702出土土器



SZ19出土土器

卷頭図版 4



環濠 3 出土土器



環濠 5 出土土器

卷頭図版 6



SK518出土土器



土器棺集合

卷頭図版 8



SR401出土土器

序

将監名遺跡は浜松市東区将監町に所在する遺跡で、浜松労災病院の増改築工事に先立って、発掘調査が行われました。平成17年度より調査を開始し、平成23年度をもって資料整理を終え、報告書を刊行する運びとなりました。

将監名遺跡は、天竜川によって形成された平野上に位置する、弥生時代の集落跡です。200軒近い竪穴住居の跡や、土器棺、方形周溝墓といった墓域が発見され、遺物も豊富に出土しました。その多くは土器ですが、西遠江でよく見られる土器以外にも、三河や尾張地域で使用される土器なども多量に発見されました。弥生時代において、この集落に住んでいた人々が他地域と盛んに交流を行っていたことが伺えます。土器以外にも、銅鐸の舌といった特殊な遺物も発見されました。銅鐸の舌は全国的にみても発見例は少なく、静岡県内では3例目となります。浜松市内でも銅鐸が多数発掘されており、遠江地方は銅鐸祭祀の東限にあたる事から、将監名遺跡周辺でも、銅鐸が持ち込まれた可能性があります。これらの発見から、将監名遺跡は、弥生時代の中期から後期にかけて、大規模な集落が形成され、周辺の同時代の遺跡の中でも拠点となる役割を担っていたと考えられます。周辺の遺跡の情報と併せて、将監名遺跡周辺の歴史を知る上で、重要な成果となりました。

本書が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、現地調査及び資料整理並びに本書の作成にあたり、独立行政法人労働者健康福祉機構ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2012年3月

静岡県埋蔵文化財センター所長

勝田順也

例　　言

- 1 本書は静岡県浜松市東区将監町25に所在する将監名遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は浜松労災病院増改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、独立行政法人労働者健康福祉機構の委託を受け、静岡県教育委員会の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施し、平成23年度以降は、静岡県埋蔵文化財センターが同研究所の業務を引き継いで実施した。
- 3 将監名遺跡の確認調査・本調査及び資料整理の期間は以下のとおりである。
確認調査 平成16年 7月
本調査 平成17年 4月～平成18年 3月 実掘面積 2,915m²
平成19年 4月～平成20年 3月 実掘面積 3,194m²
平成20年 4月～平成21年 3月 実掘面積 1,194m²
資料整理 平成22年 7月～平成24年 3月
- 4 調査体制は以下のとおりである。

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

平成17年度

所長兼副理事長 斎藤 忠	総務部長兼常務理事 平松 公夫	調査研究部長 石川 素久
総務部次長兼秘書課長 鈴木大二郎	主幹兼経理専門員 稲葉 保幸	保存処理室長 西尾太加二
総務係長 佐藤美奈子	事業係長 野島 尚紀	
調査研究部次長兼資料課長 栗野 克己		
調査研究部次長兼調査研究一課長 中嶋 郁夫		
調査研究部次長兼調査研究二課長 佐野五十三		
調査研究員 伊藤 嘉考 大谷 宏治 中谷 哲久		

平成19年度

所長兼副理事長 斎藤 忠	事務局長兼常務理事 清水 哲	事務局次長 稲葉 保幸
事務局次長兼秘書課長 大場 正夫	総務係長 芦川美奈子	
会計係長 杉山 和枝	事務局次長 佐野五十三	
事務局次長兼調査課長 及川 司	保存処理室長 西尾太加二	
西部調査係長 富樫 孝志	調査研究員 足立 順司	武田 寛生 村松 健史

平成20年度

所長兼常務理事 清水 哲	次長兼総務課長 大場 正夫	総務係長 山内小百合
会計係長 杉山 和枝	次長兼調査課長 及川 司	次長兼事業係長 稲葉 保幸
保存処理室長 西尾太加二	西部調査係長 富樫 孝志	
調査研究員 溝口 彰浩	村松 健史	

平成22年度

所長兼常務理事 石田 彰 次長兼総務課長 松村 享 専門監兼事業係長 稲葉 保幸
総務係長 澤 みやこ 調査課長 中鉢 賢治 調査第三係長 溝口 彰啓
調査研究員 井鍋 誉之

静岡県埋蔵文化財センター

平成23年度

所長 勝田 順也 次長兼総務課長 八木 利真 主幹兼事業係長 村松 弘文
総務係長 澤 みやこ 調査課長 中鉢 賢治 主幹兼調査第一係長 富樫 孝志
常勤嘱託員 大竹 弘高

- 5 本書の執筆は大竹弘高、富樫孝志が行った。
- 6 本書の編集は静岡県埋蔵文化財センターが行った。
- 7 現地での基準点測量、景観写真、レーザー測量および写真測量は㈱フジヤマ・㈱デジックに委託した。
資料整理での土器の復原・実測・トレース作業に関しては、一部を㈱フジヤマに委託した。
石器の実測・トレース作業に関しては、一部を㈱ラング、㈱シン技術コンサルに委託した。
土器実測図・遺構実測図のトレース作業に関しては、一部を㈱ラングに委託した。
出土した炭化遺物の樹種同定業務を㈱古環境研究所に委託した。
- 8 発掘調査及び資料整理においては以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。
伊藤通玄 篠原和大
- 9 発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。なお、一部出土品については浜松労災病院ロビーにて展示されている。

凡　例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

- 1 本書で用いた道構・遺物などの位置を表す座標は、世界測地系を基準とした。
- 2 調査区の方眼設定は、上記の国土座標を基準に設定した。
No.29地点（X = -142070.0m, Y = -68180.0m）= (0, A)
- 3 本書で使用した地図は下記に記した。
国土地理院発行地形図（縮尺二万五千分の一）浜松・磐田
国土地理院発行地形図（縮尺五万分の一）浜松・磐田
- 4 出土遺物は4桁の通し番号（=遺物番号）を付して取り上げた。報告書中の挿図番号とは同一でない。
- 5 道構図実測図の縮尺は、1/30、1/40、1/60、1/150を原則とし、それぞれにスケールを付した。
- 6 本書で扱う遺物実測図の縮尺は土器1/4、石器1/1・1/2、木製品1/4・1/6・1/8、玉類1/1を基本とし、それぞれにスケールを付した。
- 7 色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帳』（農林水産省技術会議事務局監修 1992）を使用した。
- 8 土層名は第2章第1節の基本土層図（第5図）に表示した名称を用いる。また、「川江・鈴木（1997）基本土層」は『将監名遺跡発掘調査報告書』（川江・鈴木1997）を参考に作成した。
- 9 第1章第2節のグリッド配置図（第2図）は、浜松市発行の浜松市地形図（1:2,500）を複写し、加工・加筆した。
また、第1章第2節の遺跡分布図（第4図）は、国土地理院発行1:25,000地形図「浜松」を複写し、加工・加筆した。
- 10 道構の略号は以下のとおりとする。
S B : 積穴住居 S K : 土坑 S Z : 方形周溝墓 S D : 溝
S R : 流路 S E : 井戸 S X : 不明道構
- 11 第3章第3節（1）道構では、住居内の炉跡、焼土の範囲は網掛けで示した。
- 12 弥生土器については篠原和大氏の見解に従っている。
- 13 山茶碗については遠江編年（松井1993）を用いた。
- 14 貿易陶磁については小野正敏氏の見解に従っている。
- 15 石器の使用石材については伊藤通玄氏による石材鑑定の結果に従っている。
- 16 石器の写真図版（図版139～152）では、以下の略号を用いた。
住居址：住　　土坑：坑　　環濠：環　　方形周溝墓：周　　流路：流　　包含層：包

参考文献

- 小野正敏 1994 「日本の貿易陶磁」 国立歴史民俗博物館資料調査報告書5 国立歴史民俗博物館
佐藤由紀男・荻野谷正宏・篠原和大2002「遠江・駿河地域」『弥生土器の様式と編年 東海編』木耳社
川江秀孝・鈴木敏則 1997「将監名遺跡発掘調査報告書」浜松市博物館
松井一明 1993 「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究』NO.25
横田賢次郎・森田 勉 1978 「太宰府出土の輸入陶磁について」『九州歴史資料館研究論集』4

將監名遺跡

目 次

卷頭図版

序

例 言

凡 例

第1章 序 論	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	2
第3節 地理・歴史的環境	5
第2章 発掘調査の成果	9
第1節 調査概要	9
第2節 遺 構	21
第3節 遺 物	133
第4節 將監名遺跡出土炭化材樹種・炭化種子同定	315
第3章 ま と め	329

写真図版

報告書抄録

図版目次

卷頭図版

卷頭図版 1	SZ02 (北西から)
	SB213 (北東から)
卷頭図版 2	SZ02出土土器
卷頭図版 3	SZ19出土土器
卷頭図版 4	環濠 3 出土土器
卷頭図版 5	環濠 5 出土土器
卷頭図版 6	SK518出土土器
卷頭図版 7	土器箱集合
卷頭図版 8	SR401出土土器

写真図版

図版 1	1 区 全景	
図版 2	2 区 2 面 環濠と住居	
図版 3	SB102 全景	SB102 遺物出土状況 1
	SB102 遺物出土状況 2	
図版 4	SB104 全景	SB104 遺物出土状況 1
	SB104 遺物出土状況 2	
図版 5	SB101 完掘状況	SB104 完掘状況
	SB109 完掘状況	
図版 6	SB211 全景	SB212 全景
図版 7	SB213 全景	
	SB213 遺物出土状況 1	
	SB213 遺物出土状況 2	
図版 8	SB214・215 全景	SB214 釣跡
	SB215 釣跡	
図版 9	SB217 全景	SB216 完掘状況
図版10	SB218 全景	SB218 遺物出土状況 1
	SB218 遺物出土状況 2	
図版11	SB219 完掘状況	SB219 釣跡 1
	SB219 釣跡 2	
図版12	SB220 遺物出土状況	SB220 釣跡
	SB203 遺物出土状況	
図版13	SDK02 遺物出土状況	SDK01 遺物出土状況
	SK252 遺物出土状況	SK247 遺物出土状況
図版14	SK244 遺物出土状況	SK245 遺物出土状況
	SK230 遺物出土状況	SK233 遺物出土状況
	SK246 遺物出土状況	SK234 遺物出土状況
	SK229 遺物出土状況	SK255 遺物出土状況
図版15	環濠 5 全景	
	環濠 5 遺物出土状況 1	
	環濠 5 遺物出土状況 2	
	環濠 5 遺物出土状況 3	
図版16	環濠 5 遺物出土状況 4	
	環濠 5 遺物出土状況 5	
	環濠 5 遺物出土状況 6	
	環濠 5 遺物出土状況 7	
図版17	環濠 4 (2 区) 全景	
	環濠 4 (2 区) 遺物出土状況 1	
	環濠 4 (2 区) 遺物出土状況 2	
図版18	SZ19東溝 全景	
	SZ19東溝 遺物出土状況 1	
	SZ19東溝 遺物出土状況 2	
図版19	SZ02 (2 区) 完掘状況	
	SZ02 (2 区) 南溝 遺物出土状況	
	SZ02 (2 区) 北溝 遺物出土状況	
図版20	SR101 鞘出土状況	
	SK218 山茶碗出土状況	
	SE203 完掘状況	
		図版21 SR103 全景
		図版22 3 区 1 面 全景
		図版23 SB303・312 完掘状況
		図版24 SB305 完掘状況
		図版25 SB306 遺物出土状況
		図版26 SB311 完掘状況
		図版27 SB318 遺物出土状況
		図版28 SK301 遺物出土状況
		SE310 遺物出土状況
		図版29 SZ03 完掘状況
		SZ03西溝 遺物出土状況
		SZ03西溝 鳥形土器出土状況遠景
		SZ03西溝 鳥形土器出土状況近景
		図版30 SZ04 完掘状況
		SZ04北溝 遺物出土状況
		SZ04西溝 遺物出土状況
		SZ04北溝 遺物出土状況
		図版31 SZ05 完掘状況
		SZ07 完掘状況
		SDK03 遺物出土状況
		SDK04 遺物出土状況
		SE301 完掘状況
		図版34 4 - 1 区 2 面 全景
		図版35 4 - 2 区 2 面 完掘状況
		SB405 遺物出土状況
		SB408 遺物出土状況
		図版37 SB417 完掘状況
		SB404・410・418 完掘状況
		図版38 SK405 遺物出土状況
		SK446 遺物出土状況
		SK439 遺物出土状況
		SK445 遺物出土状況
		SK456 遺物出土状況
		SX401 完掘状況
		図版40 環濠 3 遺物出土状況 1
		環濠 3 遺物出土状況 2
		図版41 SZ11 完掘状況
		SZ11 遺物出土状況 1
		SZ11 遺物出土状況 2
		SZ11 遺物出土状況 3
		SZ11 遺物出土状況 4
		図版42 SZ11 完掘状況
		SZ14 主体部完掘状況
		図版43 SZ21 遺物出土状況 1
		SZ21 遺物出土状況 2
		SZ21 遺物出土状況 3
		図版44 SZ19 (4 - 2 区) 主体部完掘状況
		SZ19 (4 - 2 区) 遺物出土状況 3
		図版45 SDK06 遺物出土状況
		SDK07 遺物出土状況
		SDK08 遺物出土状況
		図版46 SDK10・11 遺物出土状況
		SDK12 遺物出土状況
		SDK14 遺物出土状況
		SDK13 遺物出土状況
		SDK15 遺物出土状況
		SDK18 遺物出土状況
		SDK20 遺物出土状況
		SDK21 遺物出土状況
		図版47 SR406 鳥形土器製品出土状況
		環濠 2 遺物出土状況
		図版50 SE401 遺物出土状況
		SE404 遺物出土状況
		SE404 土層堆積状況
		図版51 5 区 1 面 全景

图版52	5区2面 全景		图版95	环濠出土遗物 (9)
图版53	5区2面西侧 全景	5区2面 完掘状况	图版96	环濠出土遗物 (10)
图版54	SB522 遗物出土状况	SB522 完掘状况	图版97	SZ出土遗物 (1)
图版55	SB501 床面挖出状况	SB504 完掘状况	图版98	SZ出土遗物 (2)
图版56	SB505 床面挖出状况	SB515 完掘状况	图版99	SZ出土遗物 (3)
图版57	SB523~525 完掘状况	SB529 完掘状况	图版100	SZ出土遗物 (4)
图版58	SB519 床面挖出状况	SB520 完掘状况	图版101	SZ出土遗物 (5)
图版59	SB502~503 完掘状况		图版102	SZ出土遗物 (6)
	SB507~510 完掘状况		图版103	SZ出土遗物 (7)
图版60	SB514~515 完掘状况		图版104	SZ出土遗物 (8)
	SB511~513 完掘状况		图版105	SZ出土遗物 (9)
图版61	SK518上层 遗物出土状况		图版106	SZ出土遗物 (10)
	SK518下层 遗物出土状况		图版107	SZ出土遗物 (11)
图版62	SK506 遗物出土状况		图版108	SZ出土遗物 (12)
	SK507 遗物出土状况		图版109	SZ出土遗物 (13)
	SK509 遗物出土状况		图版110	SZ出土遗物 (14)
图版63	SK526 遗物出土状况		图版111	SZ出土遗物 (15)
	SK536 遗物出土状况		图版112	SZ出土遗物 (16)
	SK517 遗物出土状况		图版113	SZ出土遗物 (17)
图版64	SK514 遗物出土状况		图版114	SZ出土遗物 (18)
	SK521 遗物出土状况		图版115	SZ出土遗物 (19)
	SK528 遗物出土状况		图版116	SZ出土遗物 (20)
图版65	SK544 遗物出土状况		图版117	SZ出土遗物 (21)
	SK556 遗物出土状况		图版118	SZ出土遗物 (22)
	SK567 遗物出土状况		图版119	SZ出土遗物 (23)
图版66	环濠 1 完掘状况		图版120	SDK出土遗物 (1)
	环濠 4 (5区) 完掘状况		图版121	SDK出土遗物 (2)
图版67	环濠 3 (5区) 完掘状况		图版122	SDK出土遗物 (3)
	环濠 3 (5区) 土层堆積状况		图版123	SDK出土遗物 (4)
图版68	环濠 2 (5区) 完掘状况		图版124	SDK出土遗物 (5)
	环濠 2 (5区) 遗物出土状况		图版125	SDK出土遗物 (6)
图版69	SX501 完掘状况	SX502 完掘状况	图版126	SDK出土遗物 (7)
	SX503 遗物出土状况		图版127	流路出土遗物 (1)
图版70	SZ13 (5区) 完掘状况		图版128	流路出土遗物 (2)
	SZ13 (5区) 遗物出土状况 1		图版129	流路出土遗物 (3)
	SZ13 (5区) 遗物出土状况 2		图版130	流路出土遗物 (4)
	SZ13 (5区) 南溝 土层堆積状况		图版131	流路出土遗物 (5)
图版71	SZ24 完掘状况		图版132	流路出土遗物 (6)
	SZ24 遗物出土状况		图版133	流路出土遗物 (7)
图版72	SB出土遗物 (1)		图版134	流路出土遗物 (8)
图版73	SB出土遗物 (2)		图版135	流路出土遗物 (9)
图版74	SB出土遗物 (3)		图版136	流路出土遗物 (10)
图版75	SB出土遗物 (4)		图版137	流路出土遗物 (11)
图版76	SB出土遗物 (5)		图版138	包含层出土遗物
图版77	SB出土遗物 (6)		图版139	出土石器 (1)
图版78	SB出土遗物 (7)		图版140	出土石器 (2)
图版79	SB出土遗物 (8)		图版141	出土石器 (3)
图版80	SB出土遗物 (9)		图版142	出土石器 (4)
图版81	SK出土遗物 (1)		图版143	出土石器 (5)
图版82	SK出土遗物 (2)		图版144	出土石器 (6)
图版83	SK出土遗物 (3)		图版145	出土石器 (7)
图版84	SK出土遗物 (4)		图版146	出土石器 (8)
图版85	SK出土遗物 (5)		图版147	出土石器 (9)
图版86	SK出土遗物 (6)		图版148	出土石器 (10)
图版87	环濠出土遗物 (1)		图版149	出土石器 (11)
图版88	环濠出土遗物 (2)		图版150	出土石器 (12)
图版89	环濠出土遗物 (3)		图版151	出土石器 (13)
图版90	环濠出土遗物 (4)		图版152	出土石器 (14)
图版91	环濠出土遗物 (5)		图版153	古代~中世道構出土遗物 (1)
图版92	环濠出土遗物 (6)		图版154	古代~中世道構出土遗物 (2)
图版93	环濠出土遗物 (7)		图版155	古代~中世道構出土木製品
图版94	环濠出土遗物 (8)			

挿図目次

第1図	将監名遺跡の位置	1	第60図	SB529・531・533実測図	73
第2図	グリッド配置図	2	第61図	SB530実測図	74
第3図	将監名遺跡周辺の地形	5	第62図	SK245・248・230・252・255実測図	76
第4図	遺跡分布図	7	第63図	SK244・314・302・310実測図	77
第5図	基本土壇図	9	第64図	SK428・419・424・412・434・443・447・456 実測図	78
第6図	全体図1（弥生時代中期中葉）	11・12	第65図	SK506・507・526・514・528・524・517実測図	79
第7図	全体図2（弥生時代中期後半）	13・14	第66図	SK518・521・509・536実測図	80
第8図	全体図3（弥生時代中期末～後期前半）	15・16	第67図	環濠1・2・3実測図	82
第9図	全体図4（弥生時代後期後半）	17・18	第68図	環濠1・2・3遺物出土状況図	83
第10図	全体図5（古代中世以降）	19・20	第69図	環濠4実測図、遺物出土状況図a	84
第11図	SB102・105実測図	22	第70図	環濠4遺物出土状況図b・c	85
第12図	SB102遺物出土状況図	23	第71図	環濠4・5遺物出土状況図d	86
第13図	SR211・212実測図	24	第72図	環濠5実測図	87
第14図	SB211・212遺物出土状況図	25	第73図	環濠5遺物出土状況図a	88
第15図	SB103・SK101実測図	26	第74図	環濠5遺物出土状況図b	89
第16図	SB104・312実測図	27	第75図	環濠5遺物出土状況図c	90
第17図	SB109・101・106・107・108・306実測図	28	第76図	SZ02実測図	92
第18図	SB313・303実測図	29	第77図	SZ02遺物出土状況図a・b	93
第19図	SB305実測図	30	第78図	SZ02遺物出土状況図c・d・e	94
第20図	SB304実測図	31	第79図	SZ02遺物出土状況図f・g	95
第21図	SB315実測図	32	第80図	SZ03実測図、遺物出土状況図a・b・c	96
第22図	SB317・322実測図	33	第81図	SZ04実測図、遺物出土状況図a・b	97
第23図	SB310・320・321実測図	34	第82図	SZ06・7実測図、遺物出土状況図a・b	98
第24図	SB318・301実測図	35	第83図	SZ06・7主体部実測図、遺物出土状況図	99
第25図	SB302・307実測図	36	第84図	SZ01・05・08・09実測図、遺物出土状況図a	100
第26図	SB311・316実測図	37	第85図	SZ11実測図、遺物出土状況図a	102
第27図	SB319・401・403・416実測図	38	第86図	SZ11実測図、遺物出土状況図b・c・d・e	103
第28図	SB418実測図	39	第87図	SZ12実測図	104
第29図	SB410・402実測図	40	第88図	SZ14実測図、主体部実測図	105
第30図	SB404実測図	41	第89図	SZ15実測図、遺物出土状況図a・b	106
第31図	SB219・412実測図	42	第90図	SZ16実測図、主体部・遺物出土状況図a・b	107
第32図	SB414・220実測図	43	第91図	SZ19実測図	108
第33図	SB213実測図	45	第92図	SZ19主体部実測図、遺物出土状況図a・b	109
第34図	SB218・214実測図	46	第93図	SZ19東溝遺物出土状況図（上層）	110
第35図	SB215実測図	47	第94図	SZ19東溝遺物出土状況図（下層）	111
第36図	SB406・417・216・221・222実測図	48	第95図	SZ21実測図、主体部・遺物出土状況図a・b	112
第37図	SB411・405実測図	49	第96図	SZ22・23実測図	113
第38図	SB504・409・408実測図	50	第97図	SZ13実測図、遺物出土状況図a・b・c	114
第39図	SB511・512・513・501実測図	51	第98図	SZ10・17・18・25実測図	115
第40図	SB502・503・520実測図	52	第99図	SZ24実測図、遺物出土状況図	116
第41図	SB505・517・518実測図	53	第100図	SDK01・02実測図	119
第42図	SB413・419・423実測図	54	第101図	SDK03・04・05・06・07・08実測図	120
第43図	SB425実測図	55	第102図	SDK09・10・11・12・13・14実測図	121
第44図	SB427・428・429・430・431・433実測図	56	第103図	SDK15・17・18実測図	122
第45図	SB420・441・450実測図	57	第104図	SDK19・20・21・22・23実測図	123
第46図	SB435・434実測図	58	第105図	SR401実測図	124
第47図	SB424・436・437・506実測図	59	第106図	SR401遺物出土状況図a	125
第48図	SB447・458実測図	60	第107図	SR401遺物出土状況図b・c	126
第49図	SB448・422実測図	61	第108図	SR401遺物出土状況図d	127
第50図	SB440・421実測図	62	第109図	SR401遺物出土状況図e	128
第51図	SB446・449・454実測図	63	第110図	SE101・204・203・205・301実測図	130
第52図	SB456・438実測図	64	第111図	SE401・404実測図	131
第53図	SB442・452・453実測図	65	第112図	SR101・105・SD102・104実測図	132
第54図	SB507・508・509・510実測図	66	第113図	SB出土遺物（1）	134
第55図	SB514・515実測図	67	第114図	SB出土遺物（2）	135
第56図	SB521実測図	69	第115図	SB出土遺物（3）	136
第57図	SB522実測図	70	第116図	SB出土遺物（4）	137
第58図	SB523・524・525・526・532実測図	71	第117図	SB出土遺物（5）	138
第59図	SB527・528実測図	72			

第118回	SB出土遺物（6）	139	第180回	環濠出土遺物（12）	212
第119回	SB出土遺物（7）	140	第181回	環濠出土遺物（13）	213
第120回	SB出土遺物（8）	141	第182回	環濠出土遺物（14）	214
第121回	SB出土遺物（9）	142	第183回	環濠出土遺物（15）	215
第122回	SB出土遺物（10）	143	第184回	環濠出土遺物（16）	216
第123回	SB出土遺物（11）	144	第185回	環濠出土遺物（17）	217
第124回	SB出土遺物（12）	145	第186回	環濠出土遺物（18）	219
第125回	SB出土遺物（13）	146	第187回	環濠出土遺物（19）	220
第126回	SB出土遺物（14）	148	第188回	環濠出土遺物（20）	221
第127回	SB出土遺物（15）	149	第189回	環濠出土遺物（21）	222
第128回	SB出土遺物（16）	151	第190回	SZ出土遺物（1）	224
第129回	SB出土遺物（17）	152	第191回	SZ出土遺物（2）	225
第130回	SB出土遺物（18）	153	第192回	SZ出土遺物（3）	226
第131回	SB出土遺物（19）	154	第193回	SZ出土遺物（4）	227
第132回	SB出土遺物（20）	156	第194回	SZ出土遺物（5）	228
第133回	SB出土遺物（21）	157	第195回	SZ出土遺物（6）	229
第134回	SB出土遺物（22）	158	第196回	SZ出土遺物（7）	230
第135回	SB出土遺物（23）	159	第197回	SZ出土遺物（8）	231
第136回	SB出土遺物（24）	160	第198回	SZ出土遺物（9）	232
第137回	SB出土遺物（25）	161	第199回	SZ出土遺物（10）	233
第138回	SB出土遺物（26）	163	第200回	SZ出土遺物（11）	234
第139回	SB出土遺物（27）	164	第201回	SZ出土遺物（12）	235
第140回	SB出土遺物（28）	165	第202回	SZ出土遺物（13）	236
第141回	SB出土遺物（29）	166	第203回	SZ出土遺物（14）	237
第142回	SB出土遺物（30）	167	第204回	SZ出土遺物（15）	238
第143回	SB出土遺物（31）	168	第205回	SZ出土遺物（16）	239
第144回	SB出土遺物（32）	169	第206回	SZ出土遺物（17）	240
第145回	SK出土遺物（1）	172	第207回	SZ出土遺物（18）	241
第146回	SK出土遺物（2）	173	第208回	SZ出土遺物（19）	242
第147回	SK出土遺物（3）	174	第209回	SZ出土遺物（20）	243
第148回	SK出土遺物（4）	175	第210回	SZ出土遺物（21）	244
第149回	SK出土遺物（5）	176	第211回	SZ出土遺物（22）	245
第150回	SK出土遺物（6）	177	第212回	SZ出土遺物（23）	246
第151回	SK出土遺物（7）	178	第213回	SZ出土遺物（24）	247
第152回	SK出土遺物（8）	179	第214回	SZ出土遺物（25）	248
第153回	SK出土遺物（9）	180	第215回	SZ出土遺物（26）	249
第154回	SK出土遺物（10）	181	第216回	SZ出土遺物（27）	250
第155回	SK出土遺物（11）	182	第217回	SZ出土遺物（28）	251
第156回	SK出土遺物（12）	183	第218回	SZ出土遺物（29）	252
第157回	SK出土遺物（13）	185	第219回	SZ出土遺物（30）	253
第158回	SK出土遺物（14）	186	第220回	SZ出土遺物（31）	254
第159回	SK出土遺物（15）	187	第221回	SZ出土遺物（32）	255
第160回	SK出土遺物（16）	189	第222回	SZ出土遺物（33）	256
第161回	SK出土遺物（17）	190	第223回	SZ出土遺物（34）	258
第162回	SK出土遺物（18）	191	第224回	SZ出土遺物（35）	259
第163回	SK出土遺物（19）	192	第225回	SZ出土遺物（36）	260
第164回	SK出土遺物（20）	193	第226回	SZ出土遺物（37）	261
第165回	SK出土遺物（21）	194	第227回	SZ出土遺物（38）	262
第166回	SK出土遺物（22）	195	第228回	SZ出土遺物（39）	263
第167回	SK出土遺物（23）	196	第229回	SZ出土遺物（40）	264
第168回	SK出土遺物（24）	197	第230回	SZ出土遺物（41）	265
第169回	環濠出土遺物（1）	200	第231回	SZ閑連遺構出土遺物	266
第170回	環濠出土遺物（2）	201	第232回	SDK出土遺物（1）	268
第171回	環濠出土遺物（3）	202	第233回	SDK出土遺物（2）	269
第172回	環濠出土遺物（4）	203	第234回	SDK出土遺物（3）	270
第173回	環濠出土遺物（5）	204	第235回	SDK出土遺物（4）	271
第174回	環濠出土遺物（6）	205	第236回	SDK出土遺物（5）	272
第175回	環濠出土遺物（7）	206	第237回	SDK出土遺物（6）	273
第176回	環濠出土遺物（8）	207	第238回	SDK出土遺物（7）	274
第177回	環濠出土遺物（9）	208	第239回	SDK出土遺物（8）	275
第178回	環濠出土遺物（10）	210	第240回	SDK出土遺物（9）	276
第179回	環濠出土遺物（11）	211	第241回	SDK出土遺物（10）	277

第242図	SDK出土遺物（11）	278
第243図	SDK出土遺物（12）	279
第244図	SR出土遺物（1）	281
第245図	SR出土遺物（2）	282
第246図	SR出土遺物（3）	283
第247図	SR出土遺物（4）	284
第248図	SR出土遺物（5）	285
第249図	SR出土遺物（6）	286
第250図	SR出土遺物（7）	287
第251図	SR出土遺物（8）	288
第252図	SR出土遺物（9）	289
第253図	SR出土遺物（10）	290
第254図	SR出土遺物（11）	291
第255図	SR出土遺物（12）	292
第256図	SR出土遺物（13）	294
第257図	SR出土遺物（14）	295
第258図	SR出土遺物（15）	296
第259図	SR出土遺物（16）	298
第260図	SR出土遺物（17）	299
第261図	包含層出土遺物（1）	301
第262図	包含層出土遺物（2）	302
第263図	包含層出土遺物（3）	303
第264図	包含層出土遺物（4）	304
第265図	包含層出土遺物（5）	305
第266図	包含層出土遺物（6）	306
第267図	包含層出土遺物（7）	308
第268図	中世遺構出土遺物（1）	311
第269図	中世遺構出土遺物（2）	312
第270図	中世遺構出土遺物（3）	313
第271図	中世遺構出土遺物（4）	314
第272図	SB214炭化材出土状況図	318
第273図	特監名遺跡の炭化材（1）	319
第274図	特監名遺跡の炭化材（2）	320
第275図	特監名遺跡の炭化材（3）	321
第276図	特監名遺跡の炭化材（4）	322
第277図	特監名遺跡の炭化材（5）	323
第278図	特監名遺跡の炭化材（6）	324
第279図	特監名遺跡の種実	327
第280図	特監名遺跡の種実 ササゲ属	328

挿 表 目 次

第1表	特監名遺跡工程表	4
第2表	周辺遺跡一覧表	7
第3表	基本土層对照表	9
第4表	方形周溝墓一覧表	91
第5表	土器査量一覧表	117
第6表	特監名遺跡における炭化材樹種同定結果	318
第7表	特監名遺跡における炭化種実同定結果	326
第8表	特監名遺跡 イネ炭化果実計測値および イネの粒形とその大きさ：試料21(24) H (-4)	326

挿 写 真 目 次

写真1	遺構掘削作業	3
写真2	遺構実測作業（1）	3
写真3	遺構実測作業（2）	3
写真4	現地説明会	3
写真5	整理作業（土器復元）	4
写真6	整理作業（実測）	4
写真7	整理作業（トーレス）	4
写真8	遺物写真撮影	4

第1章 序 論

第1節 調査に至る経緯

本報告の将監名遺跡は、浜松市東区将監町に所在する。浜松市東区は浜松市の全7区内で最も面積が小さいが、人口は中区について多い人口密集区域である。今までこそ商業施設や新興住宅地の進出により、大都市の一翼を担っているが、かつては織維工業の工場が多く存在する工業地帯であった。本遺跡上にあった浜松労災病院は、労働災害による負傷者並びに職業性疾病に罹患した勤労者に対して十分な医療を施し、早期社会復帰の支援をするために、昭和42年に設立された。以来、周辺住民や労働者の多様なニーズに応え、より高度な医療を提供するために、各部門の設備充実と診療科の増設が図られてきた。その様な動きの中で、増加しつつある職業病に対し、より専門的な治療を施すことを目的として、さらなる診療科の増設の必要性が高くなかった。また、東海地震が懸念される昨今において、施設の老朽化による耐震性の問題の解決は急務であり、免震構造を加えた新病棟が建設されることとなった。

将監名遺跡の周辺では、山の神遺跡や宮竹野際遺跡などの複数の時代に渡る遺跡が調査されている。また、浜松労災病院の西側に隣接するマンションの建設時にも発掘調査がされており、弥生時代の遺構が発見されている。そのため、今回の調査でもそれに連絡した成果が予想された。このような状況から、増改築工事着手に先立って、静岡県教育委員会文化課（当時）により、試掘調査が行われた。その結果、遺跡の存在が確認できたため、静岡県教育委員会文化課及び独立行政法人労働者健康福祉機構との間で、埋蔵文化財の取扱いに対する協議が行われた。その結果、財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所に発掘調査業務を委託することが決定され、平成17年度より静岡県教育委員会文化課の指導のもとで調査が開始されることとなった。



第1図 将監名遺跡の位置

第2節 調査の方法と経過

1 調査の方法

特監名遺跡の発掘調査は、浜松労災病院の増改築工事を行いながらの調査であったため、工事の工程表に従って、調査を行った。調査対象地を工事区画に準拠し、1区、2区、3区、4-1区、4-2区、5区に区分した。

重機による表土除去が終了した後、日本測地系に準拠し、基準杭とグリッド杭を設定した。試掘調査の結果から1面（弥生時代後期以降）と2面（弥生時代中期）に分かれており、各面について掘削を行っていった。鋤籠などを用いた人力による掘削を行い、遺構検出に努めた。遺構検出を実施した後、包含層掘削、遺構掘削を人力より慎重に行っていった。まず1面において遺構掘削の終了した遺構から、個別の遺構図の実測、写真撮影、遺物の取り上げを行い、調査区の1面全体の遺構掘削が終了した後に、高所作業車およびラジコンヘリコプターによる空中撮影・写真測量を実施した。1面が終了した後に、2面の調査に移り、同じ作業工程によって遺構検出、遺構掘削、図面作成、写真撮影を行った。図面は住居などを30分の1で実測し、方形周溝墓は全体図を75分の1で実測し、主体部は40分の1もしくは20分の1にて作成した。写真撮影は作業風景といった記録写真は35mmフィルムにて撮影を行い、遺構掘削終了時の写真は6×7フィルムにて撮影を行った。高所作業車からの遺跡全体写真は4×5の大型カメラにて撮影を行った。

現地での調査が終了した後に、現地の事務所にて出土遺物の洗浄・注記作業・台帳作成といった基礎整理作業を行った。遺物の出土量が多量であったため、注記作業に関しては、注記用機械を借り上げて作業を実施した。



第2図 グリッド配置図

2 調査経過

平成17年度 将監名遺跡

調査期間 平成17年6月～平成17年11月

調査面積 2,915m²（延べ5,830m²）

調査内容 エネルギーセンター棟建設地にあたる1区と本棟建設地の2区の調査を実施した。造構は、竪穴住居跡22軒、方形周溝墓4基、土器棺墓2基、土坑71基、溝状造構29条、環濠2条、大型河川1条、小穴多数を検出した。弥生時代以降の遺物として、古墳時代の木製の靴が出土し、中世の井戸の跡から、曲物を転用した井筒が出土した。

平成19年度 将監名遺跡

調査期間 平成19年6月～平成20年3月

調査面積 3,194m²（延べ6,388m²）

調査内容 平成17年度調査区の南側と西側にあたる3区、4-1区、4-2区の調査を実施した。主な造構としては、竪穴住居跡140軒、方形周溝墓18基、土器棺墓20基、環濠2条、その他、土坑、溝状造構、小穴多数検出した。特に竪穴住居跡の数が多く、造構密度が80%を超えるほど激しく切りあっており、調査は難航した。遺物の量も当初の想定を上回り、膨大なものとなった。県内では3例目となった銅鐸の舌、独鉛石などの特殊な遺物が多数出土した。

平成20年度 将監名遺跡

調査期間 平成20年4月～平成21年3月

調査面積 1,164m²

調査内容 前年度調査区の南側にあたる5区の調査を実施した。現地調査は8月初旬まで実施し、8月以降は、遺物の洗浄・注記・分類仕分けなどの基礎整理作業を行った。現地調査での主な成果としては、竪穴住居跡33軒、方形周溝墓1基、環濠1条、その他土坑、溝状造構、小穴多数を検出した。



写真1 遺構掘削作業



写真2 遺構実測作業（1）



写真3 遺構実測作業（2）



写真4 現地説明会

調査の方法と経過

平成22・23年度 将監名遺跡 保存処理・資料整理

調査期間 平成22年7月～平成24年3月

調査内容 平成22年度の整理作業の開始に先立ち、整理の円滑な進捗を図るために、将監名遺跡の現地事務所においても、出土遺物の洗浄作業、注記作業、出土遺物の台帳作成、図面の整理などの基礎整理作業が進められた。平成22年度においては財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所本部事務所と島田整理事務所の2カ所において土器の分類・仕分け、接合・復元、実測等の作業が進められた。平成23年度からは、静岡県埋蔵文化財センターにその業務が引き継がれ、島田事務所にて整理作業が行われた。遺物実測、各種版組・トレース、原稿執筆、編集作業は島田事務所で行い、遺物の写真撮影は静岡県埋蔵文化財センターで行った。遺物と写真等記録類は、台帳を作成し、必要に応じて検索ができるように整理して収納した。

第1表 将監名遺跡工程表

	平成17年度	平成19年度	平成20年度	平成22年度	平成23年度
現地調査	1・2区	■			
	3・4-1・4-2区		■		
	5区		■		
整理作業		---	---	■	---



写真5 整理作業（土器復元）



写真6 整理作業（実測）



写真7 整理作業（トレース）



写真8 遺物写真撮影

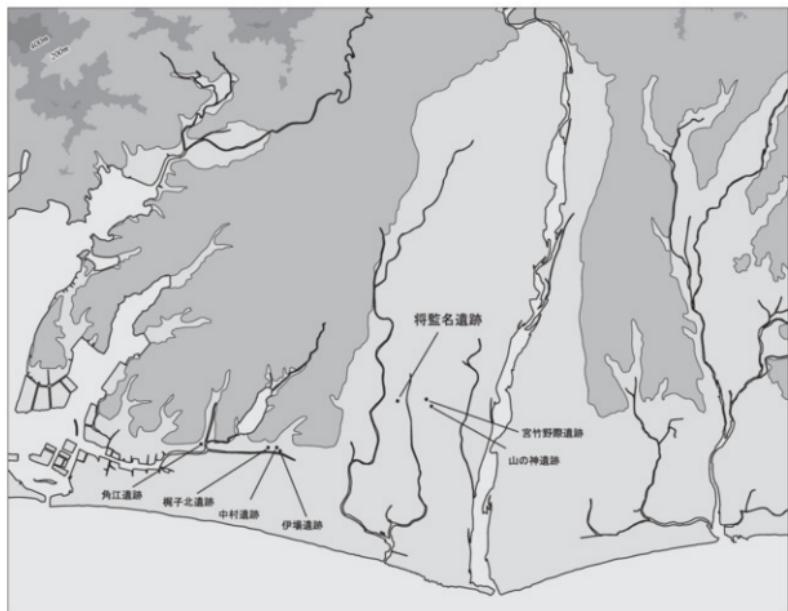
第3節 地理・歴史的環境

1 位置的環境

将監名遺跡は浜松市蒲地区に所在し、JR浜松駅から北東へ約2.5km、三方ヶ原台地の裾から東へ約2.5km、天竜川から西へ約4kmに位置している。

浜松市の地形は北部の山間部、三方ヶ原台地、台地と天竜川に挟まれた沖積平野、南部に広がる沿岸低地帯に分けられる。天竜川は長野県諏訪湖を源流とする総延長213kmの急流河川である。上流部は狭窄部と盆地が連続して伊那谷川を形成し、一部は愛知県にかかる。下流域は静岡県天竜区二俣町で平野に出て、遠州灘までは25kmに満たない。下流域の東には磐田原台地、西には三方原台地があり、これらの台地間を流れている。現在の天竜川は大規模な舗装が行われ、一本の流路になっているが、「天竜」という名が表すとおり、古くから、暴れ川として恐れられていた。『続日本紀』によると古代の天竜川は「鹿玉河」と呼ばれ、天竜川の西側を流れる安間川あたりを流れていたが、12世紀後半の『遠江国池田荘立券状』によると、天竜川の本流が磐田原台地の近くを流れている。

17世紀には天竜川は、現在の天竜川の流れに当たる「大天竜」と、「小天竜」の2つ以上に分かれていたことが『武家事記』から窺える。このように、沖積平野の旧地形は天竜川の流路が変化し、氾濫を繰り返することで、自然堤防、後背湿地、流路が入り組んだ地形となっている。将監名遺跡は、この沖積平野の後背湿地上に存在する遺跡であり、周辺においても数多くの遺跡が分布している。



第3図 将監名遺跡周辺の地形

2 歴史的環境

縄文時代以前 浜松市域では、ナイフ形石器の出土が確認されていることから、旧石器時代より人々が活動していたと考えられる。しかし、旧石器時代の遺跡は磐田原台地において多く確認されており、三方ヶ原台地では旧石器時代の遺跡は稀である。

縄文時代に関しては具体的な人々の活動の痕跡が確認されており、縄文時代中期から晩期の規塚遺跡、後・晩期の長者平遺跡などの集落の遺跡が調査されている。これらの調査から、縄文時代までは平野部と山間部の中間や三方ヶ原台地上に定住していたことが分かっている。将監名遺跡の所在する天竜川沖積平野に人が進出していくのは、宮竹野跡や山の神遺跡の調査により、押型文土器の土器片が出土したことから、縄文時代晩期以降と考えられる。しかし、遺構などは検出されておらず、具体的な人々の活動は把握できない。

弥生時代 縄文時代から弥生時代への移行期に関係する遺跡は、奥浜名湖周辺地域において確認されている。それに対して天竜川の沖積平野では、弥生時代前期までの遺跡が確認されていない。山の神遺跡において、弥生時代前期の土器が出土したが、遺構が検出されていないため、具体的な生活の様相は不明であった。

縄文時代までの海進と海退の繰り返しによる泥土の堆積が、沖積平野を水稻耕作に適した土壤にしていき、人の居住が可能になるまでに地盤が落ち着いたことにより、弥生時代中期以降には人々が平野部へ進出していくと考えられる。中期の遺跡としては、天竜川平野の南端の砂礫帯にある梶子北遺跡、中村遺跡が挙げられる。梶子北遺跡では、集落の一部が検出され、遺物も多く出土していることから、この地域の拠点集落と考えられる。一方で、将監名遺跡周辺においては、山の神遺跡など後期の遺跡が主体である。そのため、将監名遺跡もこれまで弥生時代後期の遺跡と考えられてきたが、過去の調査では、中期の遺物を含む環濠が検出されたことから、中期の遺跡である可能性が指摘された（川江・鈴木 1997）。

弥生時代後期になると人の進出がさらに活発になる。天竜川平野の南端の砂礫帯においても伊場遺跡や梶子遺跡など代表的な遺跡が確認されている。将監名遺跡周辺においては、山の神遺跡で弥生時代後期前半の集落の存在が確認されているため、当該期における将監名遺跡周辺では、山の神遺跡が人々の居住の中心であったことが窺える。他にも天竜川平野の南部では、飯田遺跡群や長上遺跡群など弥生時代後期の遺跡群が知られる。そのため、弥生時代後期前半では天竜川平野に広く集落が展開していくことが窺える。

弥生時代後期後半の遺跡は後期前半に比べて少ないとから、天竜川以西の平野部においては弥生時代後期後半に至ると集落が廃絶していくようである。

古墳時代から奈良・平安時代 浜松市域において前期古墳は確認されておらず、磐田原台地において多く確認されている。それに対して集落遺跡は弥生時代より途切れることなく継続しており、佐鳴湖周辺では梶子・大平遺跡などが知られる。これらの調査では、同時代の遺跡であっても弥生時代からの集落の様相をそのまま残している遺跡と、集落内で柵列による区画や、堅穴住居と掘立柱建物が分けられて存在している遺跡などがある。この事から、古墳時代前期において、すでに集落間や集落構成間で格差が生じていることが窺える。古墳時代中期になると浜松市域においても古墳の築造が開始される。孤塚古墳、妙法塚古墳、入野古墳などが挙げられる。集落の遺跡としては伊場遺跡などが挙げられるが、調査例が少ないため大平遺跡に見られるような集落構造のその後の変化が不明瞭である。

7世紀になると、浜松市域も大和朝廷の中央集権体制の中に組み込まれていく。現在の浜松市域は



第4図 遺跡分布図

第2表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	舟塚名遺跡	弥生・中世	6	天王中野	弥生～奈良
2	宮竹野原遺跡	縄文～中世	7	木船廣寺	奈良
3	山の神遺跡	弥生～中世	8	木船洞跡出土地	弥生
4	田見合遺跡	弥生～古墳	9	飯田遺跡	弥生～中世
5	箕輪遺跡	弥生～平安			

遠江国とされ、浜名郡、引佐郡などいくつかの郡に分割され支配されていた。梶子遺跡、城山遺跡、井通遺跡など官衙的な性格を持った遺跡が発見されていることからも、律令体制による支配が進んでいたことが窺える。将監名遺跡周辺でも、宮竹野際遺跡で掘立柱建物群が検出され、陶馬、円面鏡、布目瓦など官衙に関連した遺物が出土している。また、宮竹野際遺跡では条里制水田跡と考えられる溝状の構造が検出されている。

鎌倉時代以降 平安時代末期には、律令制の崩壊により、土地の私有地化、有力貴族や寺社への土地の寄進が進んでいく。将監名遺跡の付近でも蒲氏による水田開発が行われ、それらの土地は伊勢神宮に寄進され「蒲御厨」になっていく。宮竹野際遺跡の調査で、中世の畦畔の直下から、古代条里制水田の大畦畔が検出されたことにより、古代から中世の土地開発は古代からの条里区画を利用して行われていた可能性が指摘できる。12~13世紀には、このような水田開発に伴い、低地に隣接する微高地に次々と集落が形成されていく。

14~15世紀にかけて、浜松市域ではそれまでの中世集落が急激に衰退していく。政治情勢の変動、自然環境の変化や島畑經營といった開発の進展といった要因が挙げられる。15世紀以降は、それまでの条里制区画にとらわれない自由な開発が行われるようになり、浜松市域でも荘園が解体していった。

江戸時代以降は、将監名遺跡周辺も浜松藩の統治下に置かれ、水田地帯の一角に島畑が存在する農地として活用され、その状態は昭和初期に至るまで続いた。昭和以降は工業地帯が進出し、工場の撤退した後は、商業施設の進出と市街地化が進んでいく、現在に至っている。

〈参考文献〉

- 岩本 貴ほか1996『角江遺跡II 遺物編1（土器・土製品）』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
中村雅之・大野勝美ほか2006『宮竹野際遺跡』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
勝又直人1996『角江遺跡II 遺物編3（石器・金属製品ほか）』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
川江秀孝・鈴木敏則1997『将監名遺跡発掘調査報告書』財団法人浜松市文化協会
佐野五十三・中嶋郁夫ほか1996『角江遺跡II 遺構編』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
鈴木一有2000『山の神遺跡5次』財団法人浜松市文化協会
鈴木敏則2005『梶子北（三永）・中村遺跡—弥生時代—』財団法人浜松市文化協会

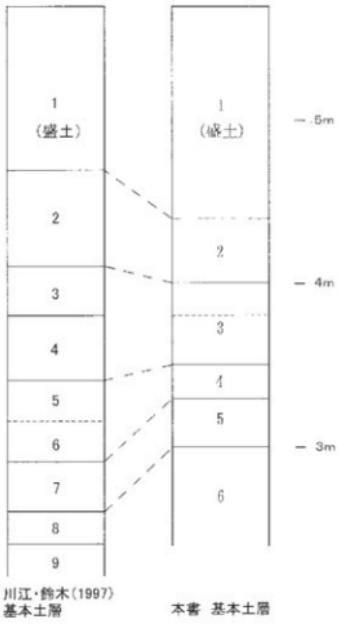
第2章 発掘調査の成果

第1節 調査概要

1 基本層序

今回の調査における基本層序は概ね6層確認することができた。将監名遺跡では今回の調査以前に、財団法人浜松市文化協会によって、浜松労災病院の北西に位置するマンションの建設時に調査が行われている(川江・鈴木1997)。そのため、ここでは財団法人浜松市文化協会による調査時の基本層序との対応関係を明らかにしておきたい。

まず、1～2層は表土層である。1層は砂礫混じりの粘土層で、将監名遺跡周辺で土地の造成が行われた際の盛土である。続く2層は灰オーリーブ色の砂質土層であり、開発が行われる以前の表土にあたる。1、2層は以前の調査時と同様の堆積状況を示す。3層は暗オーリーブ色の粘土層であり、厚さ45cmを測る。3層からが遺物包含層であり、古代から中世の遺構、遺物を含んでいる。この3層の最下段が中世の遺構面にあたり、浜松市の調査時の3、4層に相当する。4層は暗灰黄色の粘土層になる。弥生時代の土器片を多く含んでおり、厚さ20cmほど堆積している。弥生時代後期以降の遺物包含層であり、浜松市調査時の5、6層に相当する。4層の最下段が弥生時代後期前半～後半の遺構確認面である。5層は暗褐色粘土層で、厚さが約30cm堆積しており、土器片、有機物を多く含む。弥生時代中期の包含層にあたり、浜松市の調査時の7層に相当する。最下層の6層は黄褐色粘土層であり、弥生時代中期の遺構確認面である。この6層は、浜松市の調査時の8、9層に相当し、6層以下は基盤層である。



第5図 基本土層図

第3表 基本土層対照表

川江・鈴木(1997) 基本土層		本書の基本土層	
層位名	年代	層位名	特記事項
1 盛土		1 盛土	
2 灰褐色粘土	盛土前の表土	2 灰オーリーブ色砂質土	
3 茶褐色粘土	中世の包含層	3 暗オーリーブ色粘土	古墳時代～中世の遺構確認面
4 黒褐色粘土	古墳時代の包含層	4 暗灰黄色粘土	弥生時代後期 遺構確認面
5 黑褐色粘土	弥生時代後期の包含層	5 暗褐色粘土	
6 黄褐色粘土	弥生時代中期～後期の包含層	6 黄褐色粘土	弥生時代中期 遺構確認面
7 黑灰色粘土	弥生時代中期の包含層		
8 青灰色粘土	基盤層		
9 青灰色細砂			

2 遺跡の概要

将監名遺跡は過去に、近隣のマンションの建設時にも調査が行われている。その調査では環濠の一部と見られる溝が数条検出されており、今回の調査でもその環濠の延伸部が検出されることが想定された。過去の将監名遺跡の調査では中世遺物の出土が確認され、周辺の宮竹野際遺跡や山の神遺跡では中世遺構が検出されたことから、平成17年度の調査では中世面を第1面、弥生時代以前を第2面として調査が開始された。第1面の中世面では、流路、井戸が確認できたのみであるが、弥生時代以前の第2面に関しては、住居址、土坑、環濠、方形周溝墓、土器棺墓等が多数検出された。当初の予想を超える出土量が確認され、出土遺物から住居址、方形周溝墓、土器棺墓には弥生時代中期から後期までの時期差が認められた。そのため、平成19年度以降の調査では、弥生時代後期以降を第1面、弥生時代中期以前を第2面として調査が行われた。遺物の出土も膨大な量におよび、遺構の切り合いも激しく、遺構の判断も難しく、調査は困難を極めた。

発掘調査の成果から、整理作業では確認できた遺構面をおよそ3つに区分した。第1面は弥生時代中期、第2面は弥生時代後期、第3面は古代、中世以降に大きく捉えられる。

弥生時代中期 弥生時代中期にあたる第1面からは、主な遺構として住居址、土坑、環濠、方形周溝墓、土器棺墓が検出された。第1面で検出された遺構の中でも弥生時代中期中葉に該当する遺構と、弥生時代中期後半に該当する遺構に分けられる。弥生時代中期中葉（第6図）にあたる遺構は、環濠、住居、土坑で、弥生時代中期後半（第7図）にあたる遺構は、住居址、土坑、方形周溝墓、土器棺墓である。環濠1は検出遺構の中でも最も古く、将監名遺跡の始まりに位置付けられる遺構である。環濠2～5は、いずれも中期中葉頃に相当する。住居址は弥生時代中期中葉から中期後半まで時期差が認められる。弥生時代中期中葉に相当する住居址は5区に西側に集中している。弥生時代中期後半に相当する住居址は、調査区の中央付近と、3区を中心とする調査区の南東側に集中しあよそ2群に分けられる。検出された土坑もほとんどが弥生時代中期中葉～後半に位置付けられる。そのため、当該期が将監名遺跡の中心時期であろう。

弥生時代後期 弥生時代後期にあたる第2面では方形周溝墓、土器棺墓、流路が主要な遺構である。弥生時代後期の遺構についても、遺構から出土した遺物から、弥生時代後期前半（第8図）と後期後半（第9図）の二つの時期に区分できる。後期前半の主要な遺構としては方形周溝墓と土器棺が検出されている。方形周溝墓は4～2区の中央付近、3区の東側より集中して検出されており、およそこの2群に分かれて分布する。土器棺墓は方形周溝墓群より離れた場所に埋葬されたものも複数存在するが、多くは方形周溝墓の周溝付近や方台部より検出されている。埋葬時期もほぼ同じと見られる。弥生時代後期後半の遺構としては、4～2区の北西側より幅が広く非常に浅い流路が検出されている。

古墳時代～中世 古墳時代から中世の遺構（第10図）は第3面で検出され、流路、井戸が主要な遺構である。古墳時代から中世の間でも、人の居住の痕跡は見られないが、井戸が検出されていることから、水場として利用されていたことが窺える。

第2節 遺構

1 住居址

住居址はすべて第2面から検出されており、弥生時代中期中葉から後半に位置付けられる。平面形は方形、長方形、楕円形、隅丸方形、隅丸長方形に分類でき、それぞれ壁溝を伴うものと伴わない住居址がある。住居址の分布は、5区西側の住居址群、調査区中央付近の住居址群、3区を中心とした住居址群の3群に分けられる。時期は、5区西側の住居址群は中期中葉のものが中心で、他の2群は中期後半が中心である。

SB102（第11、12図） 検出部分から判断して楕円形に近い形状と思われる。遺構の南部分が調査区外に出ている上に、流路や溝に切られているため、規模は明確にできない。住居址内から多くの土坑が検出されているが、柱穴に当たるものははっきり確認できない。床面では焼土を検出し、炭化木材も多く出土したことから、焼失住居の可能性がある。中央付近で検出した焼土は炉跡の可能性がある。遺物は土器と石器（第113図-10～20）が出土し、出土レベルから上層と下層に分けることができる。上層からは大型の壺（第113図-19）や磨製石斧（第113図-20）などが出土し、下層からは壺、甕などが出土した。時期は中期中葉である。

SB105（第11図） 検出できたのが北西部の1/4程度のため、規模は不明だが、平面形は隅丸方形である。

SB211（第13、14図） 住居址の半分程度が調査区外に出ている上に、北西部を別の住居址に切られているため、規模や形状は明確ではないが、平面形は楕円形と推定できる。床面は確認できたが、壁溝、柱穴、炉跡といった付属施設は検出できなかった。遺物は、土器（第115図-41～48）が床面から出土しており、その時期から、中期後半に位置付けられる。

SB212（第13、14図） 南東隅の1/4程度を検出したに過ぎないため、遺構の規模は把握できないが、検出部分の形状から、隅丸方形になると思われる。出土した遺物（第115図-49～51）から中期中葉に位置付けられる。

SB103（第15図） 方形周溝墓の溝に切られている上に、大半が調査区外に出ているため、規模と形状は明確ではない。壁溝、柱穴、炉跡といった遺構も検出できなかつたが、焼土と炭化木材が多く出土していることから、焼失住居の可能性が指摘できる。遺物は、土器と石器（第114図-21～28）が出土している。土器の時期は中期中葉が主体である。

SB104（第16図） 遺構の半分以上が調査区外に出ているため、遺構の規模は明確ではない。壁溝は南東部分のみ検出できた。床面で土器（第114図-31～37、第115図-38、39）が集中して出土し、炭化木材も出土した。床面の中央付近では炉跡の可能性がある焼土を検出した。また、床面東側では大型土坑SK157を検出したが、遺物が出土しなかつたため、性格は不明である。

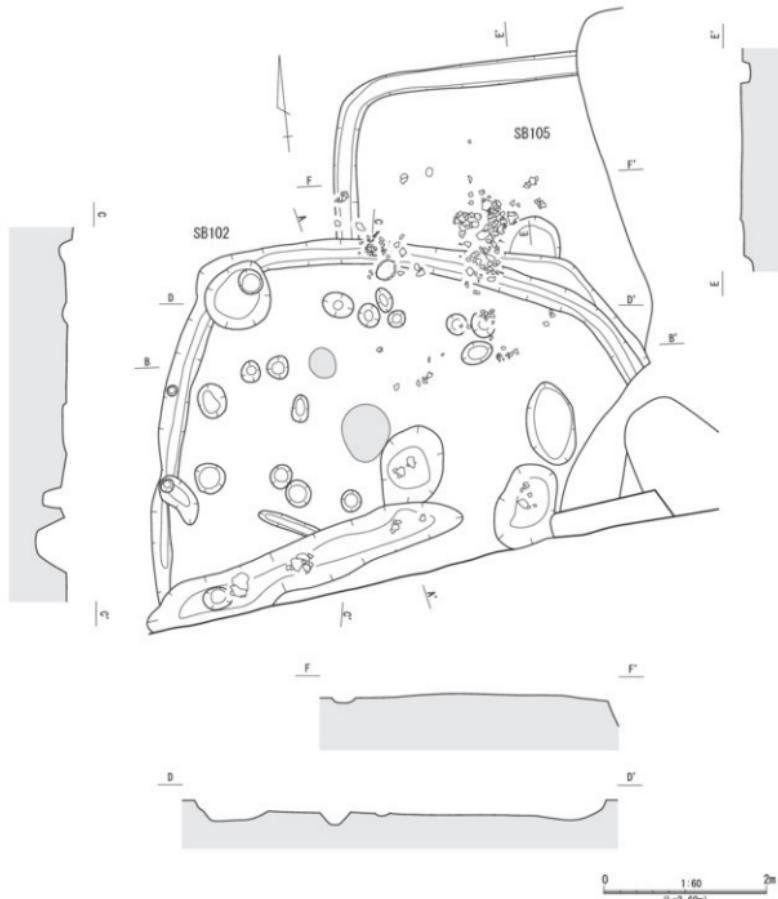
SB312（第16図） 規模は長軸8m、短軸5m程である。壁溝が二重に検出できることから、建替えが行われたらしい。また、壁溝の東部分が切れていることから、ここに出入り口があったと思われる。床面では柱穴を検出した。遺物は土器（第116図-52～57）の他に、台盤状土製品（第116図-58）、打製石鎌（第116図-59、60）が出土した。出土遺物から中期後半に位置付けられる。

SB109（第17図） 遺構の半分程度が調査区外に出ているため、規模は明確ではないが、検出部分の形状から、楕円形に近いと推測できる。壁溝は検出できたが、柱穴、炉跡にあたる遺構は検出できなかつた。遺物は壺（第115図-40）が1点出土した。

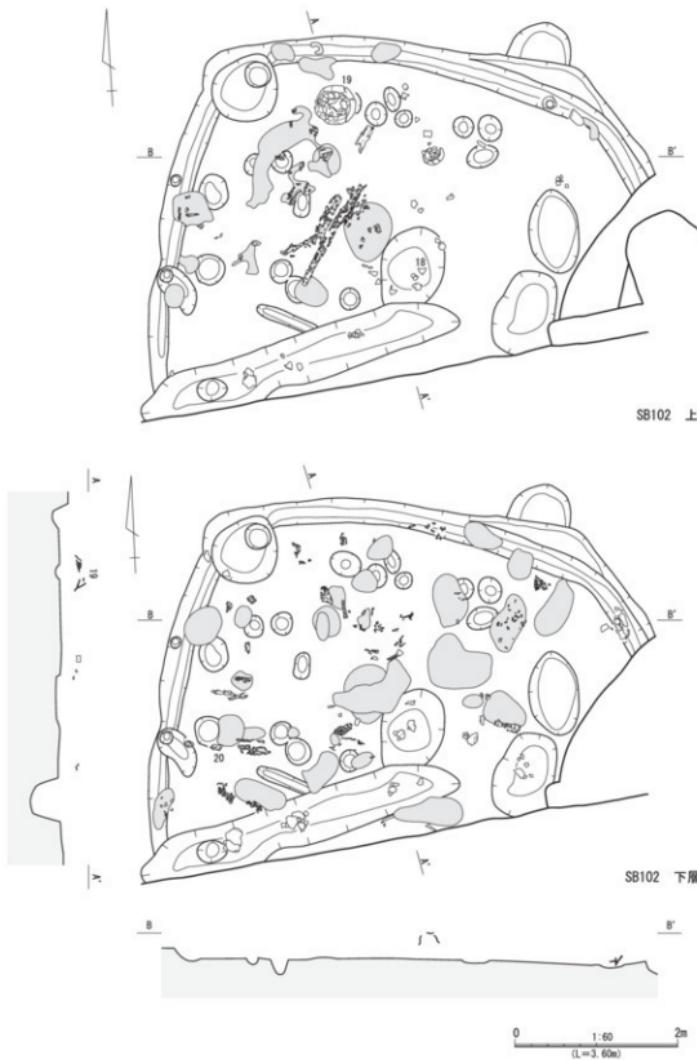
SB101・SB106・SB107・SB108（第17図） 4つの住居址が切り合っている。どの住居址も調査区外に出ている部分が多いため、個々の規模、形状の把握が難しいが、比較的広く検出できたSB101は円形か楕

円形、SB106は隅丸方形になると思われる。構築順序は、SB106→SB101→SB108と想定できるが、SB107についてはSB106より先行するものの、SB101とSB106とは切り合いを確認できない。SB101に伴う土坑を多数検出したが、柱穴に相当するものは明らかにできなかった。また、焼土を数か所検出したが、炉跡になるかどうかははっきりしない。遺物（第113図-1～7）は、SB101の床面中央付近で土器が出土した。土器の他には、壁溝付近で敲石が出土している。出土遺物の時期から、中期後半に相当するであろう。

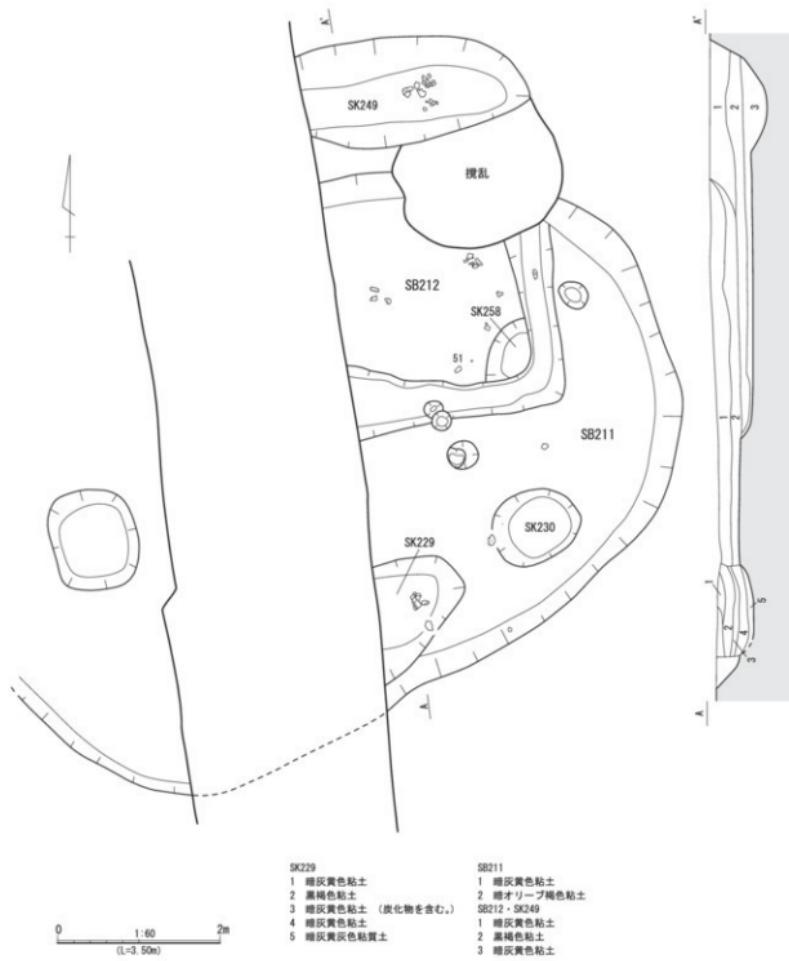
SB306（第17図） 住居址の中央に調査時のトレンチがかかっている上に、西側を検出できなかつたため、形状と規模ははっきりしないが、土坑と遺物の分布範囲から、図中に破線で示した範囲が住居址になると思われる。北西隅で、四線文系土器を含む土器（第118図-116～125）が集中して出土したことから、中期後半に位置付けられる。



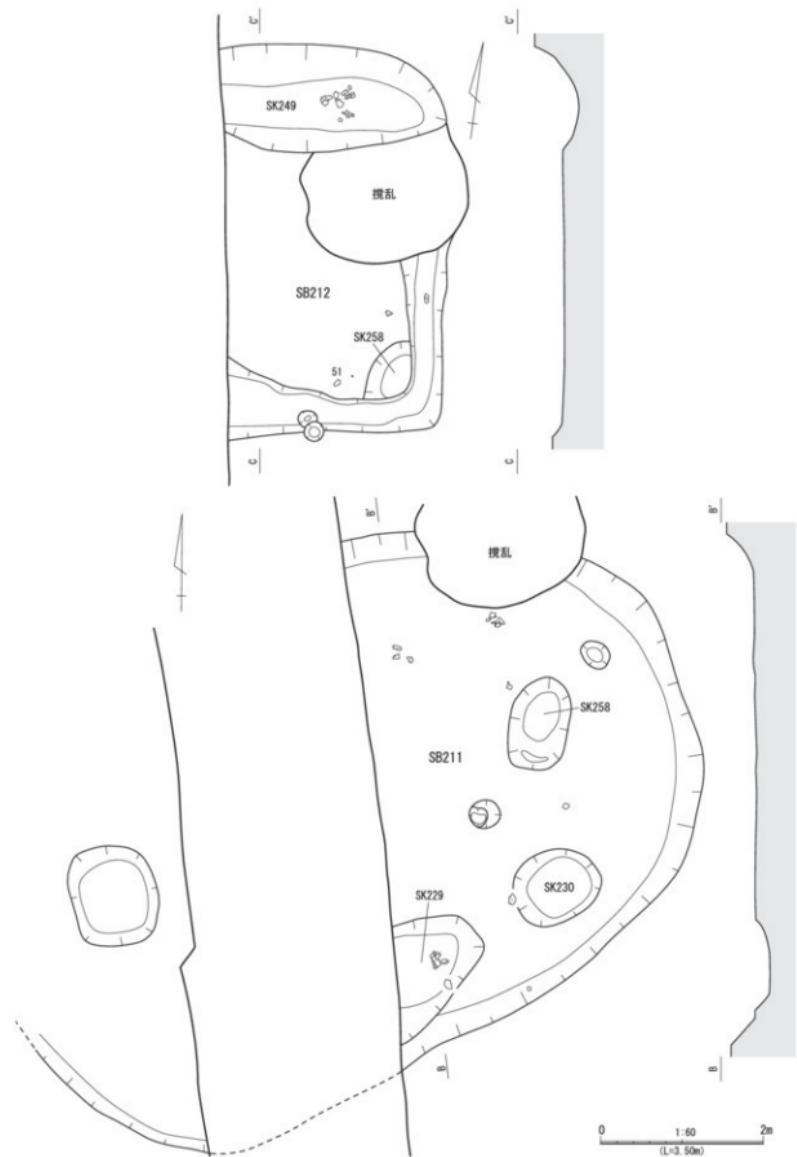
第11図 SB102・105実測図



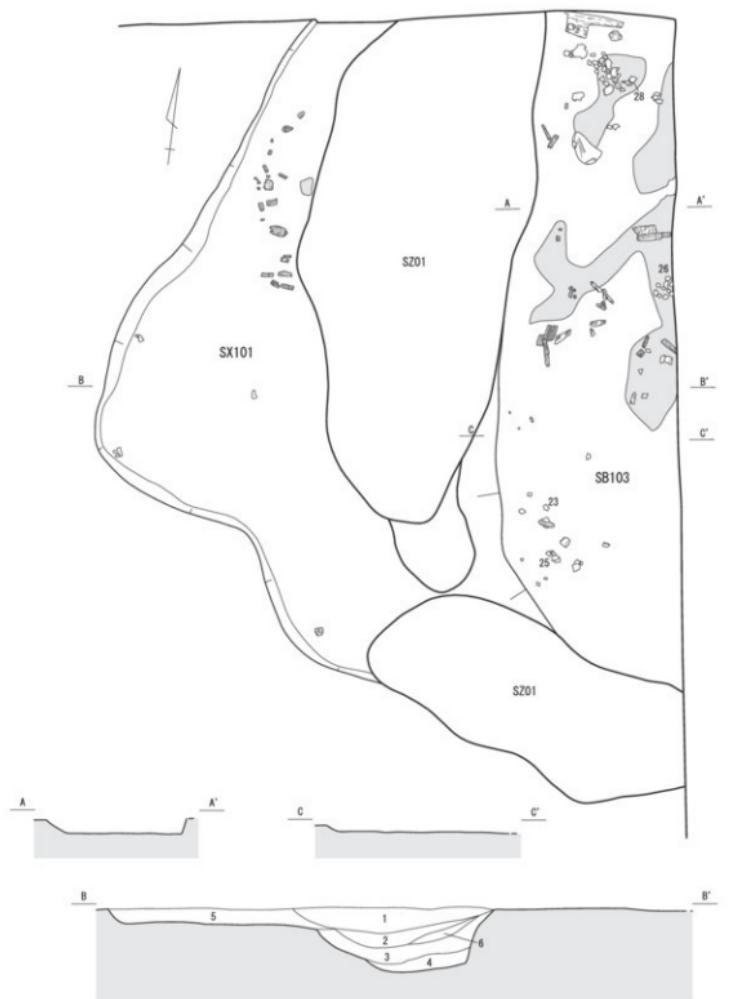
第12図 SB102遺物出土状況図



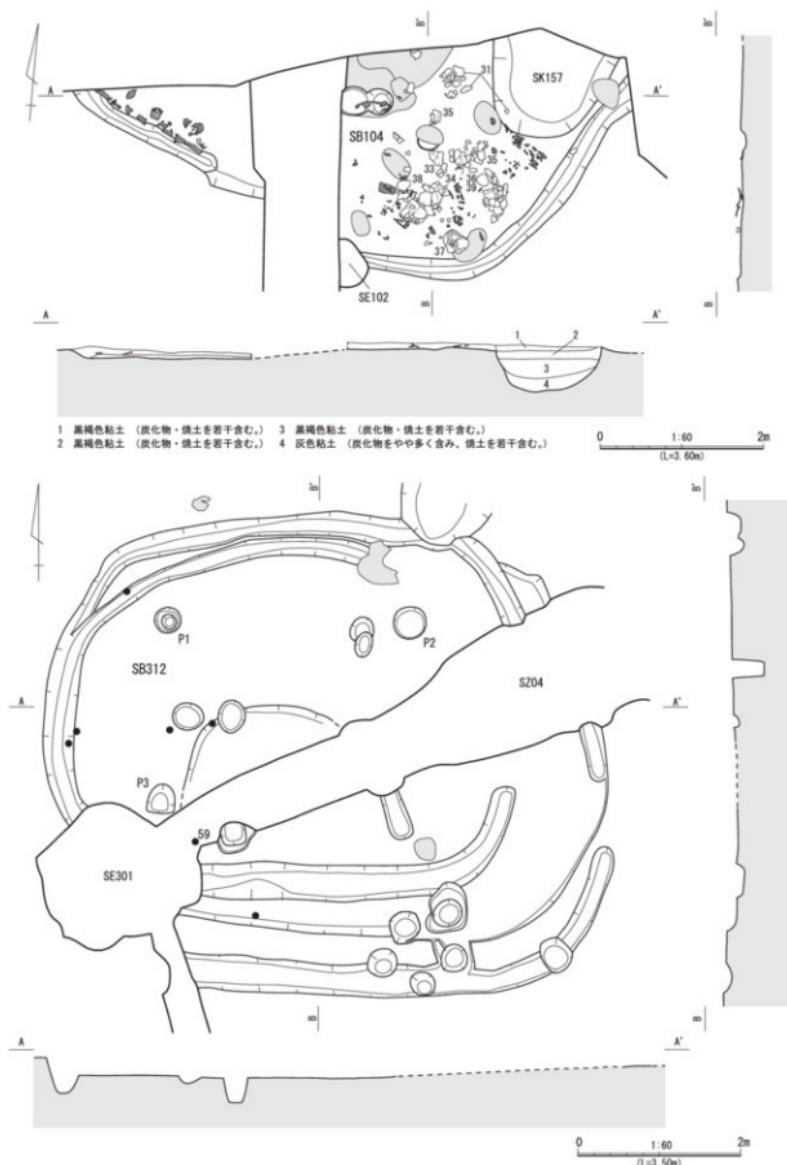
第13図 SB211・212実測図



第14図 SB211・212遺物出土状況図

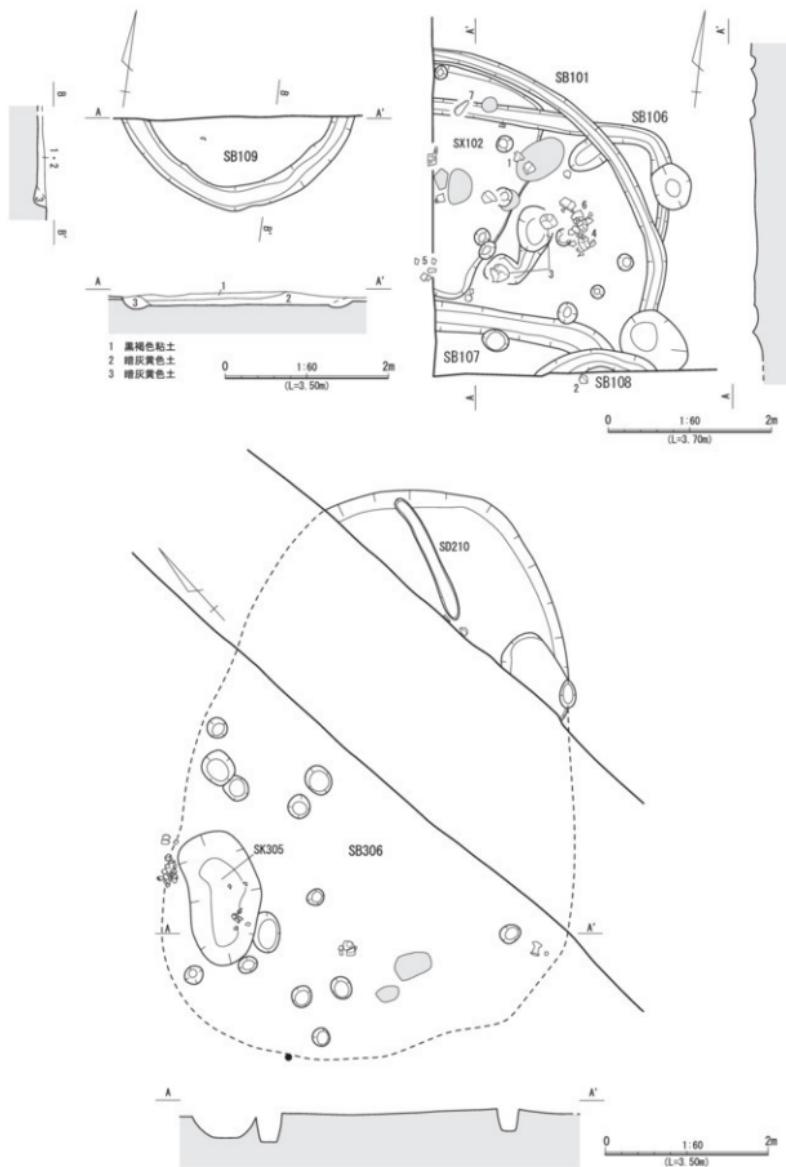


第15図 SB103・SX101実測図

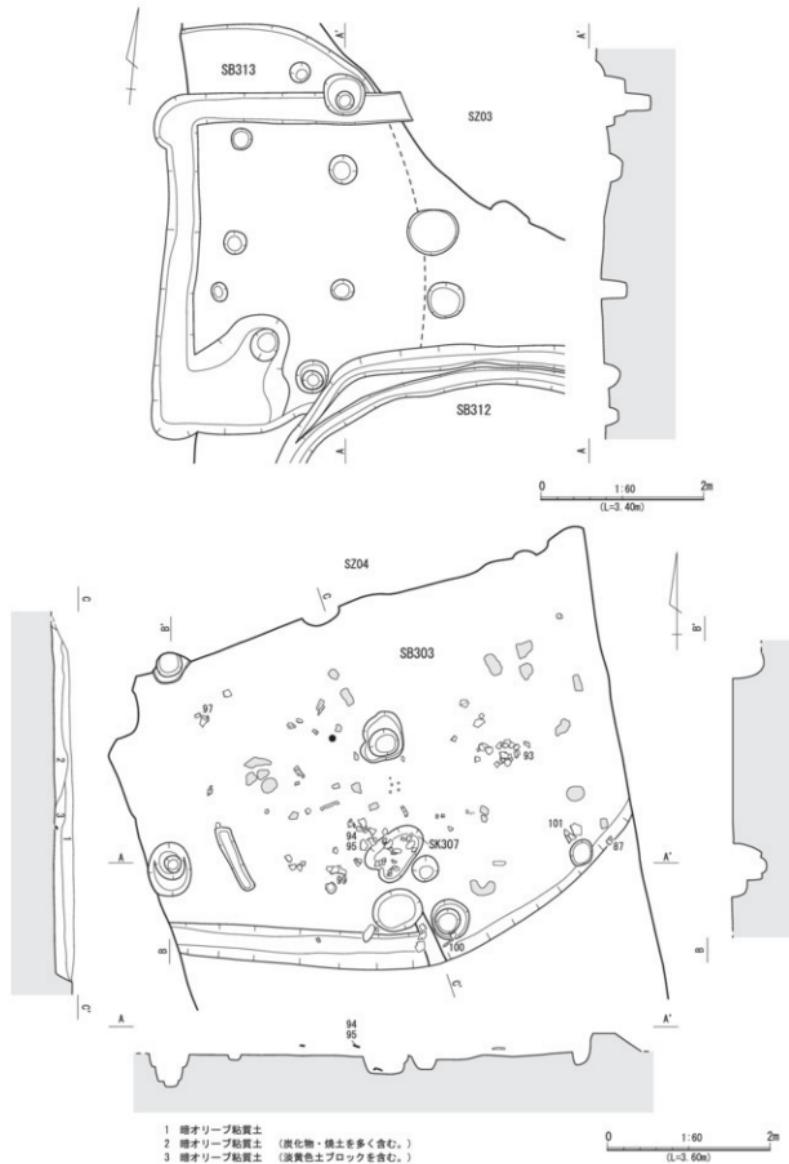


第16図 SB104・312実測図

遺構（住居址）



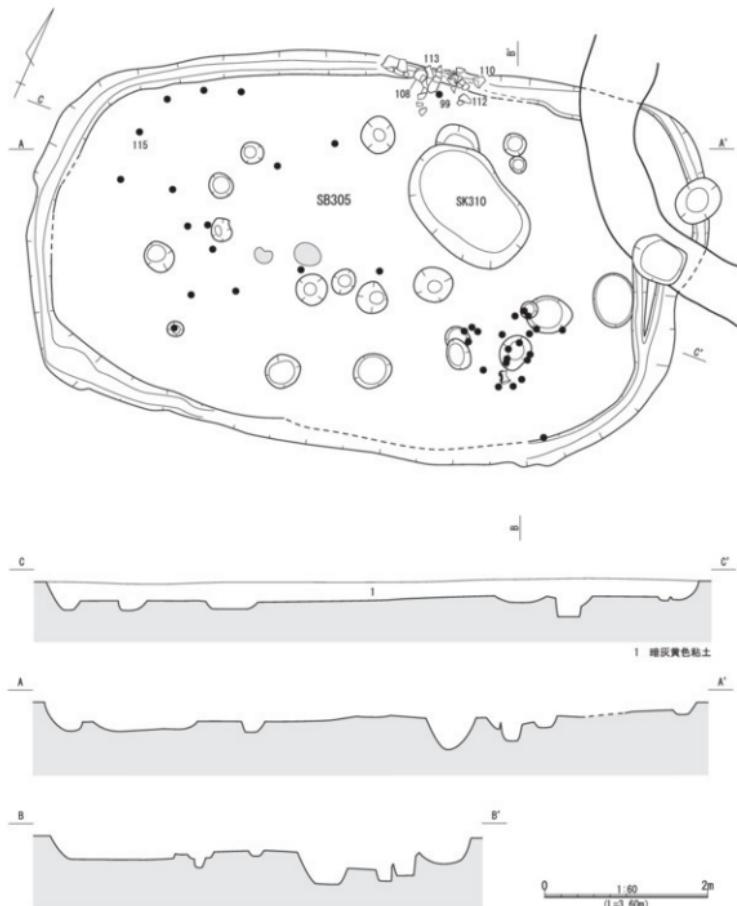
第17図 SB109・101・106・107・108・306実測図



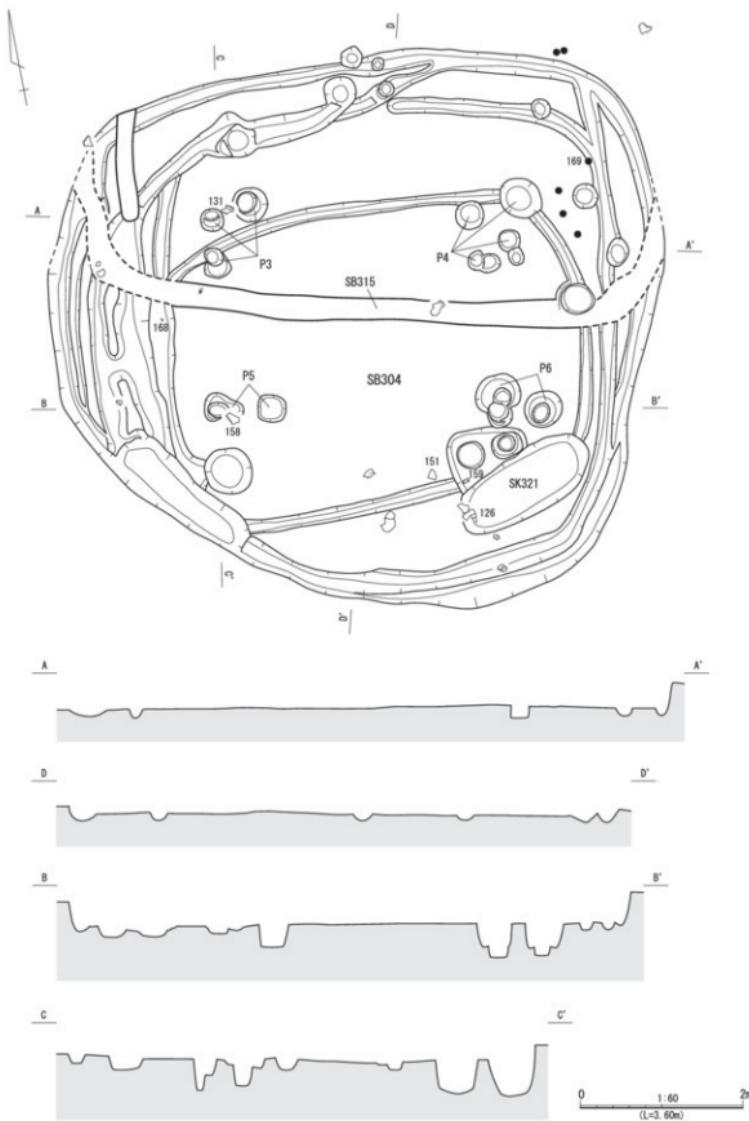
第18図 SB313・303実測図

SB313（第18図） 西側に搅乱が入っているうえに、中央部分を他の遺構に切られているため、形状と規模は不明瞭である。床面で多数の土坑を検出したが、柱穴にあたるものは明確でない。出土した土器（第116図-61～74）から、時期は中期中葉頃に位置付けられる。

SB303（第18図） 方形周溝墓の溝に切られているため、規模、形状は判然としない。墓溝の一部を検出し、土坑も検出したが、床面全体での位置がわからぬいため、柱穴になるかどうか判断できなかった。床面で遺物（第117図-87～102）が出土しており、時期は中期後半に位置付けられる。



第19図 SB305実測図

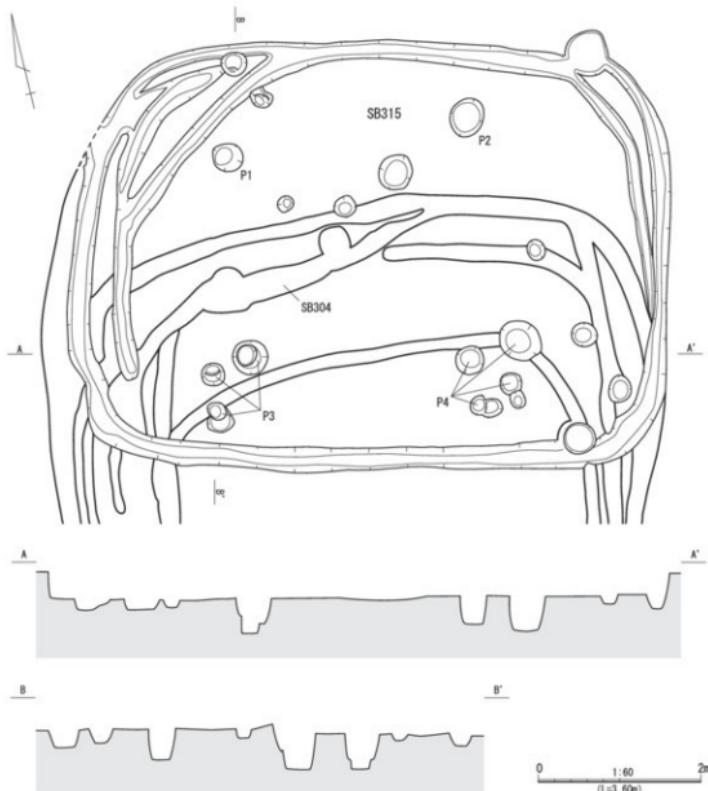


第20図 SB304実測図

SB305（第19図） 長軸8m、短軸4.9mの橢円形を呈する住居址である。床面で小穴を多数検出したが、柱穴に当たるものは明確ではない。また、床面中央付近では炉跡と思われる焼土を検出した。遺物は、土器と石器（第118図-103～115）が床面で出土しており、特に北側壁溝と床面東部に集中している。出土遺物から中期後半に位置付けられる。

SB304（第20図） 長軸5.4m、短軸3.8mの規模で、隅丸方形に近い形状である。柱穴が4ヵ所でまとまって検出できたことと、壁溝が何重にも検出できたことから、何度も建替えが行われたことがわかる。出土した土器（第119図-126～167）から中期後半に位置付けられる。土器以外には磨製石斧（第119図-168）、打製石鎌（第119図-169）が出土した。

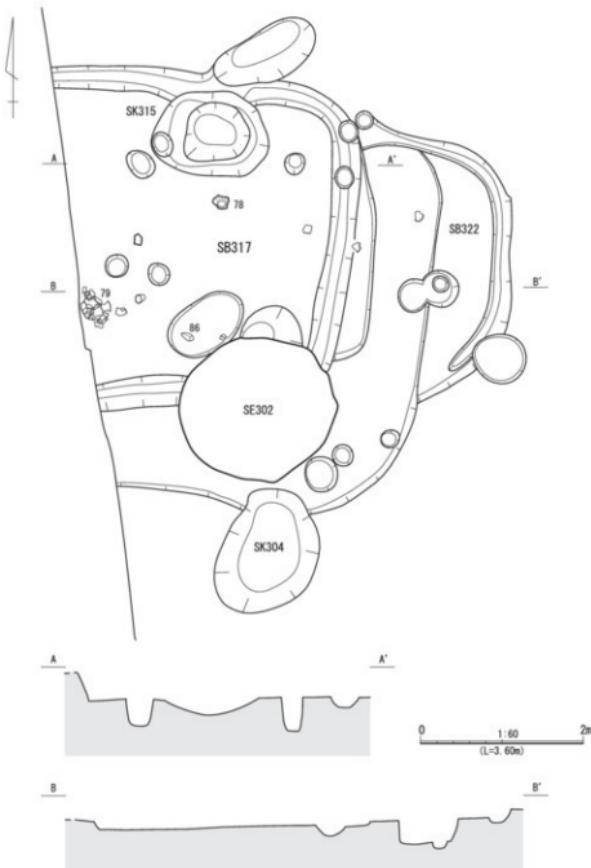
SB315（第21図） 長軸8.1m、短軸4.5mの規模で、隅丸方形である。住居址の北東部分と北西部分で、少なくとも2本の壁溝を検出したため、建替えが行われた可能性がある。床面で土坑が多数検出されており、それらの中でもP1～P4の4つは、東西約3m、南北約2mの間隔で配置されたことから、柱穴と思われる。遺物は、土器（第116図-75～77）が出土しており、中期後半に位置付けられる。



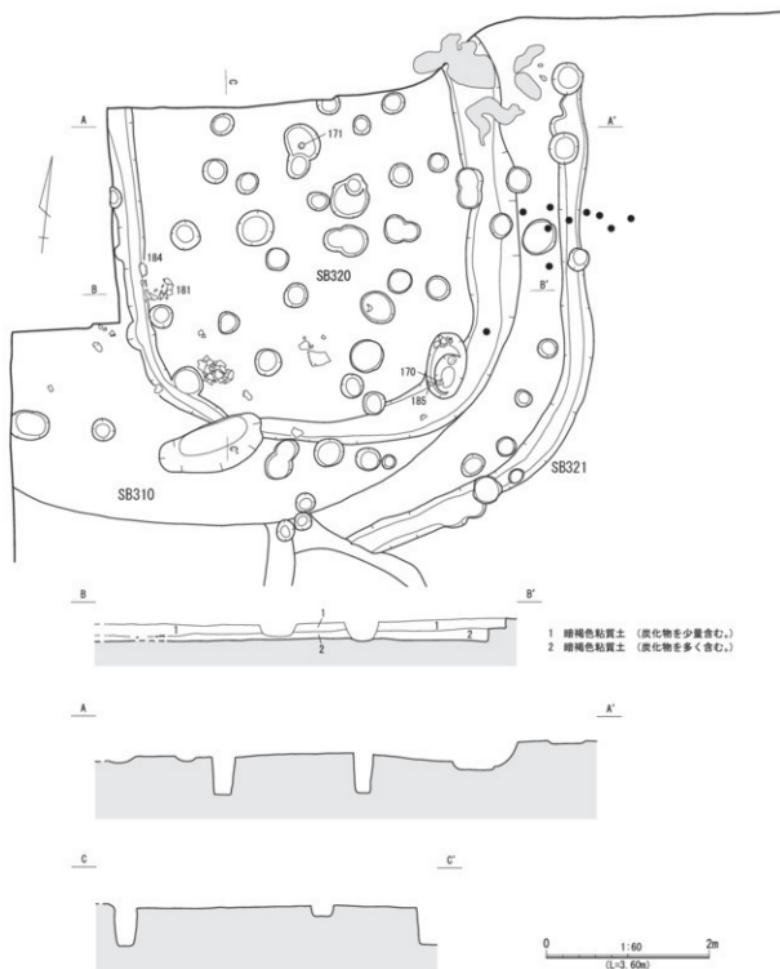
第21図 SB315実測図

SB317・SB322（第22図） 西側が調査区外に出ているため、規模や形状は判然としないが、SB317は隅丸方形で、SB322は梢円形に近いと思われる。また、SB317とSB322の間で、2軒の住居址を検出したが、検出できた部分が少ないため、別の住居址なのか、SB317、SB322の建替えなのかも含めて詳細は不明である。遺物は、土器と石器（第116図-78～86）が床面で出土した。

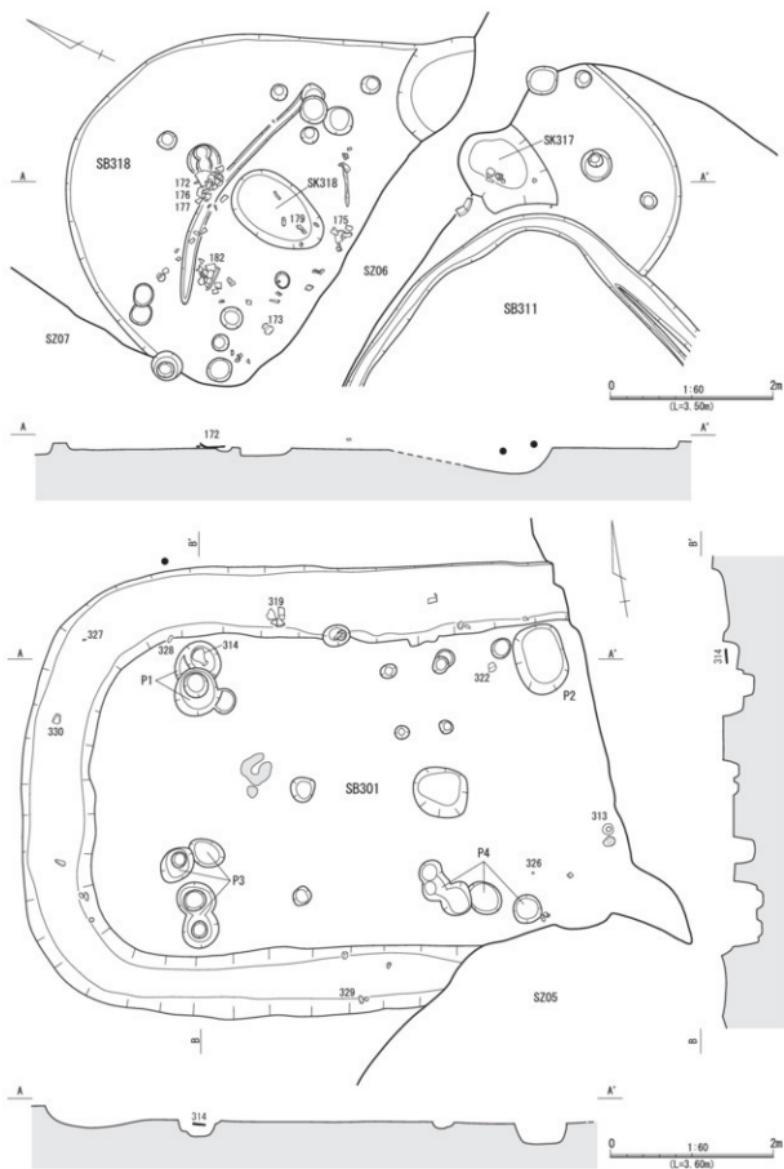
SB310・SB320・SB321（第23図） SB320は隅丸方形と思われ、短軸は4.1mだが、住居址の北側が調査区外に出ているため、長軸は不明である。床面から大小多数の土坑を検出したが、柱穴にあたるものは明確にできなかった。SB310とSB321は検出できた部分が少ないので、造構の状況は明らかでない。遺物は壁溝付近で検出した土坑で集中して出土した。遺物（第120図-170、171、181、第121図-184、185）は、SB320から出土しており、中期中葉が主体であることから、SB310とSB321もこれに近い時期と思われる。



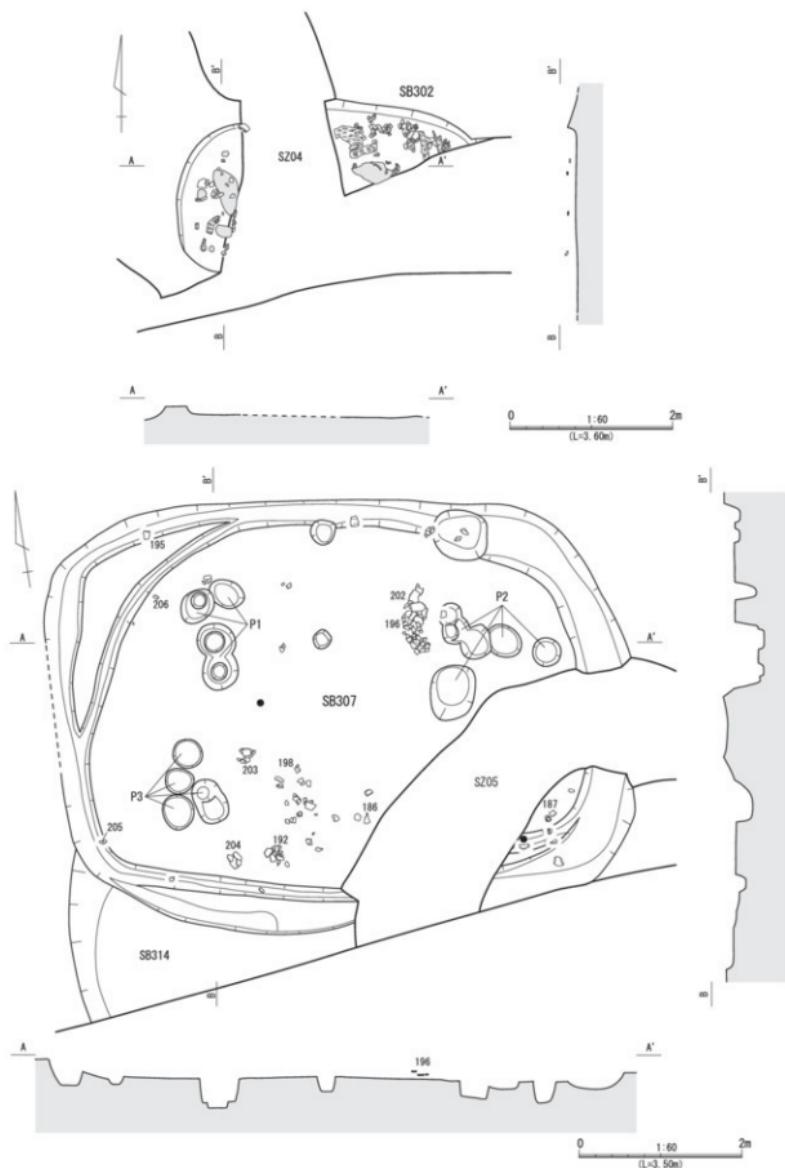
第22図 SB317・322実測図



第23図 SB310・320・321実測図



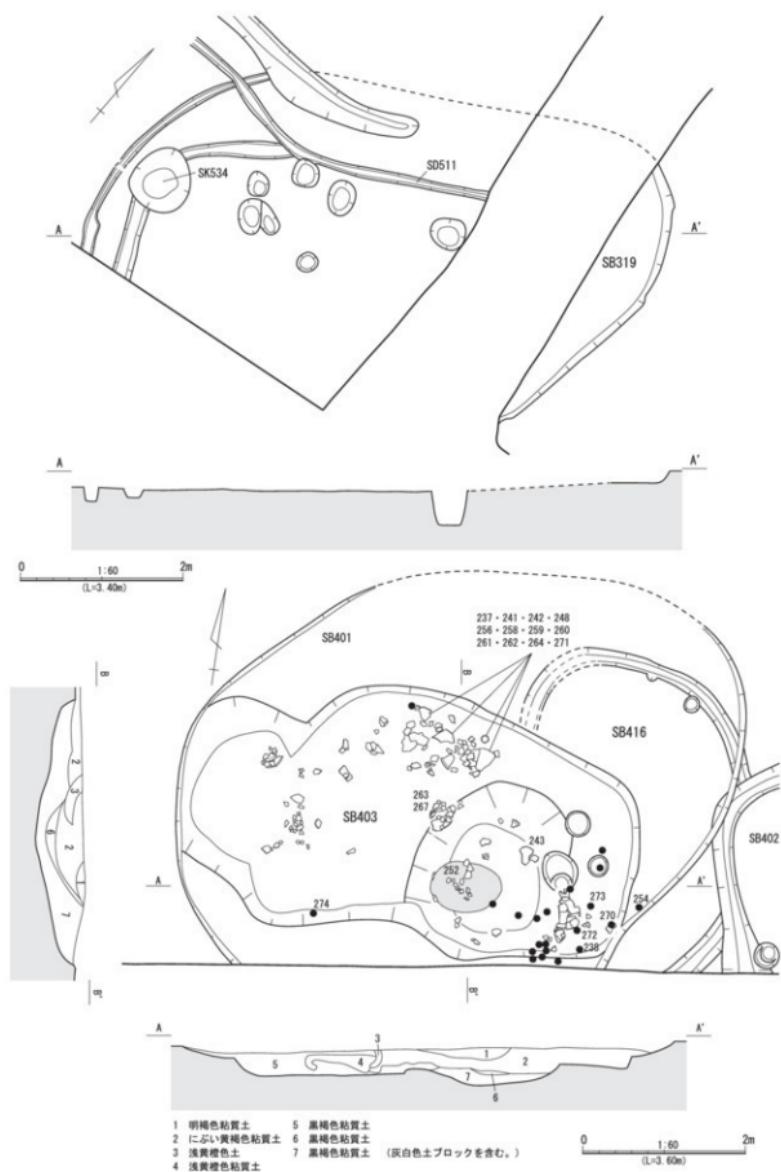
第24図 SB318・301実測図



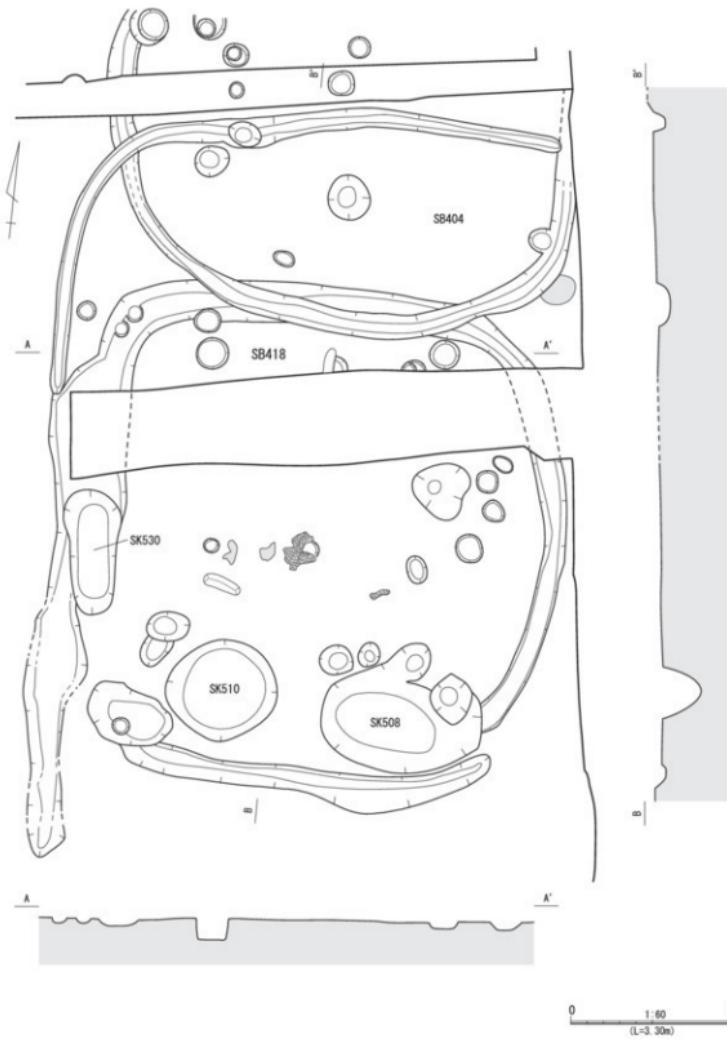
第25図 SB302・307実測図



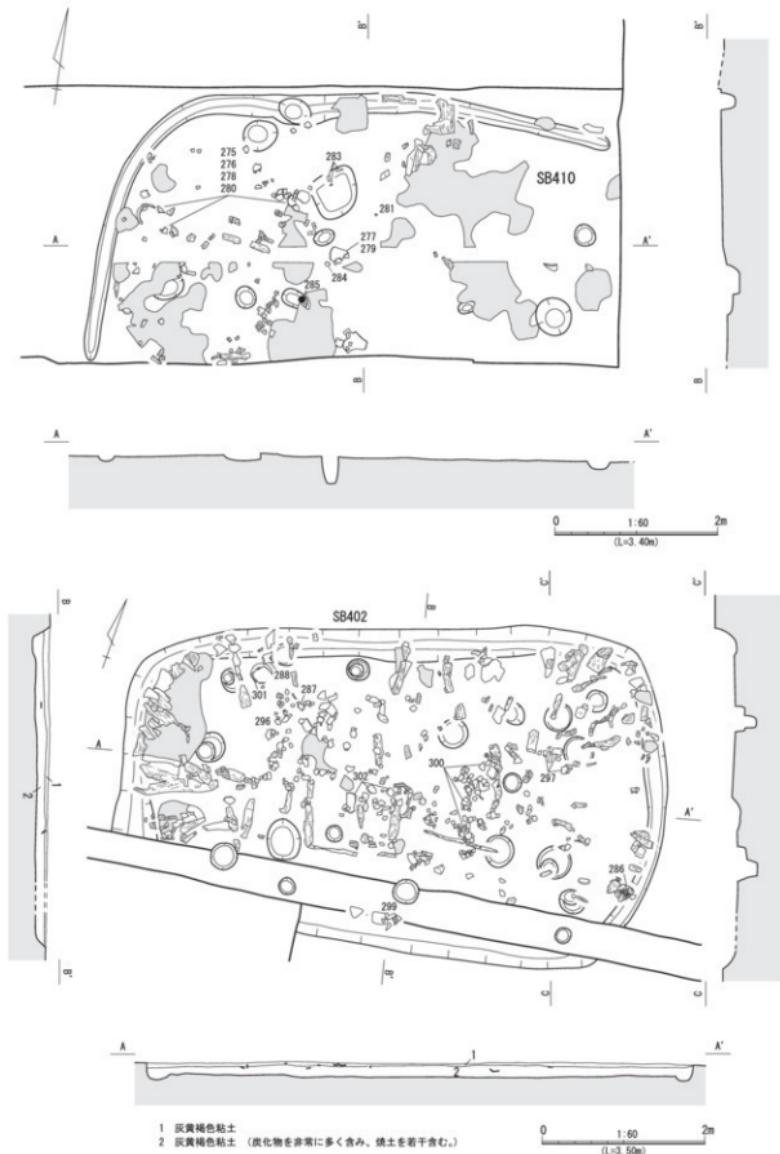
第26図 SB311・316実測図



第27図 SB319・401・403・416実測図



第28図 SB418実測図



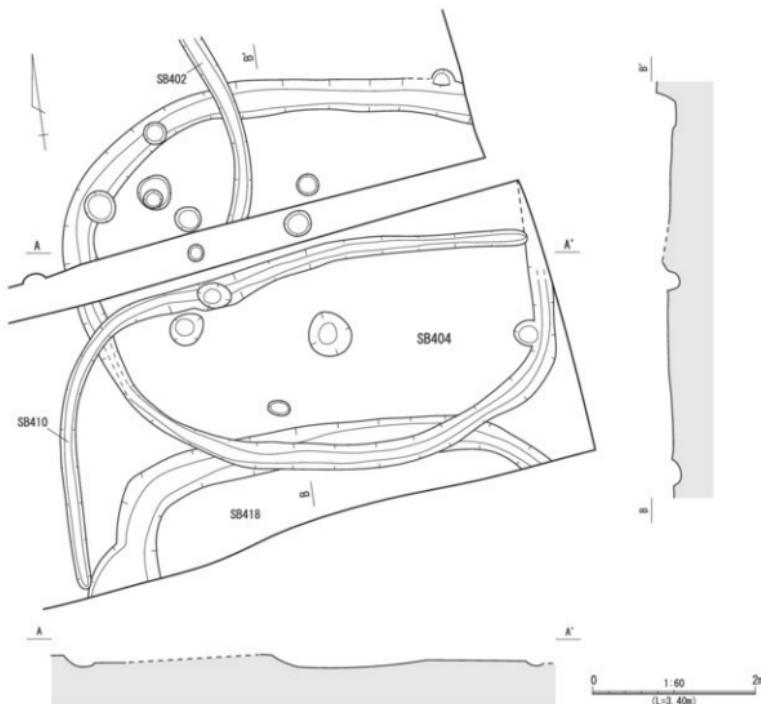
第29図 SB410・402実測図

SB318（第24図） 方形周溝墓の下で検出した梢円形の住居址である。上面を方形周溝墓に壊されているため、残りは良くない。床面で土坑を検出したが、柱穴に当たるかどうか、はっきりしなかった。遺物は土器（第120図-172～180、第121図-182、183）が出土しており、中期後半に位置付けられる。

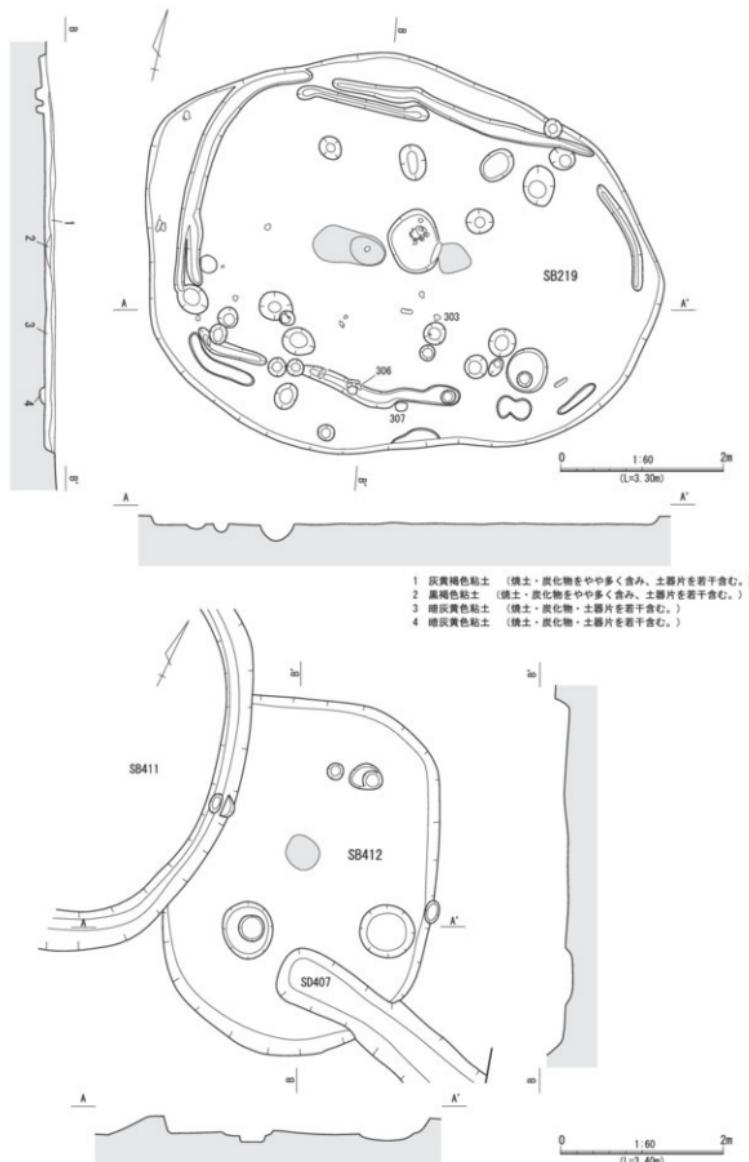
SB301（第24図） 開丸方形の住居址で、東側を搅乱で破壊されている。規模は短軸5.6mで、長軸は不明である。住居址の西部分でやや深い土坑P 1～P 4が検出されており、この4つは柱穴と思われる。P 1に切られている土坑では完形の細頬壺（第129図-314）が出土した。土器の他には、壁溝の北西隅と床面の南東隅から有孔磨製石鎌（第129図-326、327）が出土している。この他にも土器と石器（第129図-313、315～325、328～330）が出土している。

SB302（第25図） 梢円形の住居址だが、方形周溝墓に大きく切られているため、規模は明確ではない。柱穴や炉跡といった遺構は検出できなかったが、床面には焼土と炭化木材が多く分布していることから、焼失住居と思われる。遺物はほとんど出土しなかった。

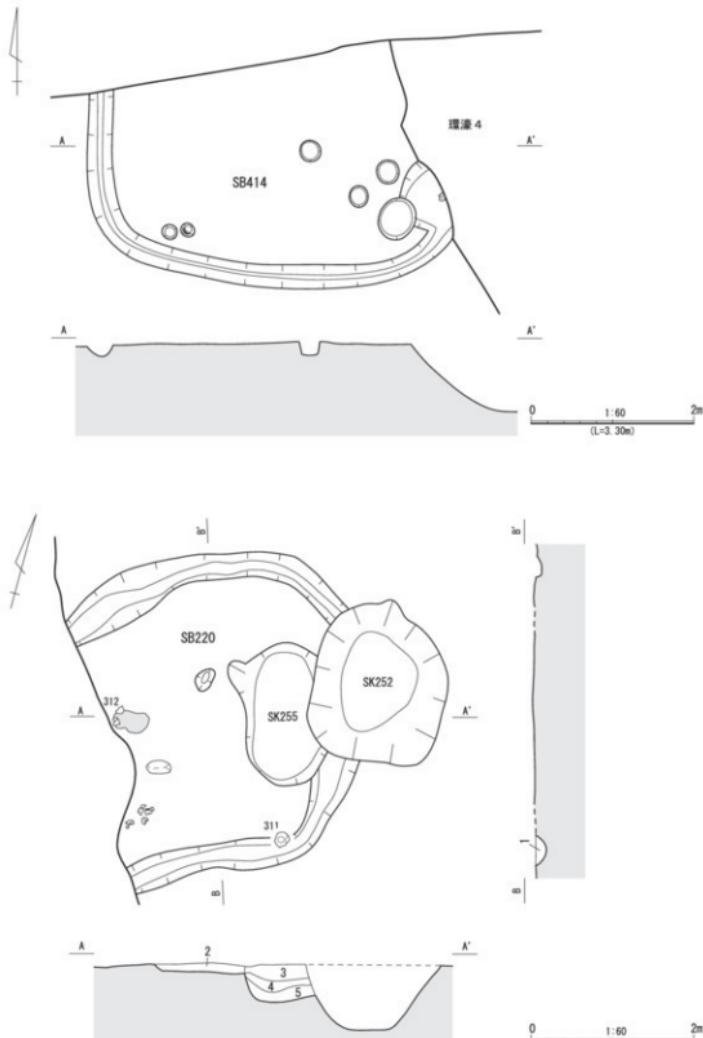
SB307（第25図） 柱穴は3カ所で4個ずつまとめて検出できたことから、建替えがあったことは明瞭である。柱穴の残る1カ所は方形周溝墓で壊されている。遺物（第122図-186～206）は、床面で出土した。出土遺物から中期後半頃に位置付けられる。



第30図 SB404実測図



第31図 SB219・412実測図



- 1 オリーブ褐色粘土（土器片を若干含む。）
- 2 オリーブ褐色粘土（燒土・炭化物・土器片を若干含む。）
- 3 灰青褐色粘土（燒土・炭化物がやや多く、土器片を若干含む。）
- 4 灰青褐色粘土（燒土・炭化物がやや多く、土器片を若干含む。）
- 5 黒褐色粘土（炭化物がやや多く、燒土・土器片を若干含む。）

第32図 SB414・220実測図

遺構（住居址）

SB311・SB316（第26図） SB316は長軸9.1m、短軸6.6mの楕円形で、SB311は検出できた部分が少なく、規模と形状とも不明瞭である。両住居址の切り合いは必ずしも明瞭ではないが、SB311の方が古いと思われる。出土遺物は、SB316で第123図-226～233が出土し、SB311では第123図-207～225が出土した。出土遺物の内容は、壺（第123図-207～217、227～230）、甕（第123図-219～221、231～233）の他に、台付甕の脚部（第123図-222）、小型壺（第123図-226）、片口鉢（第123図-218）があり、骨製紡錘車（第123図-223）、磨製石斧、有孔磨製石剣（第123図-224、225）も出土した。また、炭化木材が床面と壁溝内で出土した。時期は両住居址とも中期後半である。

SB319（第27図） 半分以上が調査区外に出ているうえに、他の遺構にも切られているため、形状、規模とともに明確ではない。柱穴や炉跡は確認できず、遺物も出土しなかった。

SB401・SB403・SB416（第27図） 3軒の住居址が切り合って検出された。SB401は長軸7.3mのやや不定形な楕円形を呈している。SB416は他の遺構に切られているため、形状や規模の把握が難しい。SB403は長軸5.7m、短軸5.9の規模で、不整形な形状である。新旧関係は不明瞭で、特にSB403とSB401は切り合いが不明瞭である。遺物はSB403の床面で多量に出土しており、壺（第124図-235～254）、甕（第125図-258～271、第126図-272）、高环（第124図-255）、鉢（第124図-256）が出土しており、嶺田式、瓜郷式、凹線文系などが混在している。土器以外には、石鍤（第126図-273）、土玉（第126図-274）が出土した。また、台盤状土製品（第124図-257）も出土している。

SB418（第28図） 6m四方の隅丸方形の住居址である。床面の中心付近で炉跡と思われる焼土を検出した。

SB410（第29図） 壁溝を検出し、壁溝に囲まれるように遺物や焼土が出土したため、住居址と判断した。東側と南側が調査区外に出ているため、規模の把握は難しいが、平面形は隅丸方形であろう。炉跡や柱穴にあたる遺構は検出できなかったが、焼土と炭化木材が多く出土したことから、焼失住居と思われる。遺物は壺（第127図-275、276）、甕（第127図-277～280）、石鎚（第127図-281、282）、磨製石斧（第127図-283、284）、管玉（第127図-285）が出土した。土器には凹線文系の甕（第127図-280）が含まれている。

SB402（第29図） 長軸6.7m、短軸4mの隅丸方形である。土坑が多く検出されているが、柱穴にあたるかどうかははっきりしない。床一面に炭化木材と焼土が分布していることから、焼失住居である。遺物は、土器（第128図-286～302）が床面で出土した。

SB404（第30図） 長軸5.84m、短軸4.8mの楕円形である。柱穴、炉跡は検出できなかった。

SB219（第31図） 長軸6.6m、短軸5mのやや歪んだ楕円形である。住居址の中で壁溝と思われる溝を数条検出した。また、土坑も多数検出したが、柱穴に当たることははっきりしなかった。中央付近では炉跡を検出した。遺物は、壺（第129図-303～305、308～310）、甕（第129図-311、312）、石器（第129図-306、307）が出土した。

SB412（第31図） 規模は長軸4.4m、短軸3.3mで、楕円形に近い。床面では柱穴を検出し、中央付近では炉跡を検出した。遺物は、壺（第137図-468）が出土している。

SB414（第32図） 住居址の北側が調査区外に出ているうえに、東側を環濠4に切られているため、規模は明確ではない。平面形は隅丸方形と考えられる。炉跡、柱穴と言った遺構は検出できなかった。遺物は、甕（第137図-472、473）、敲石（第137図-474）が出土している。

SB220（第32図） 住居址の西側を環濠4に切られているため、住居址の長軸は不明であるが、短軸は3.9mである。柱穴は検出できなかった。床面中央で炉跡を検出した。遺物は、壺と甕（第129図-309～312）が出土した。土器以外には、住居址内の南東隅で石器が集中して出土した。

SB213（第33図） 長軸7.5m、短軸6.6mの隅丸方形である。床面で土坑を検出しており、四隅にまと

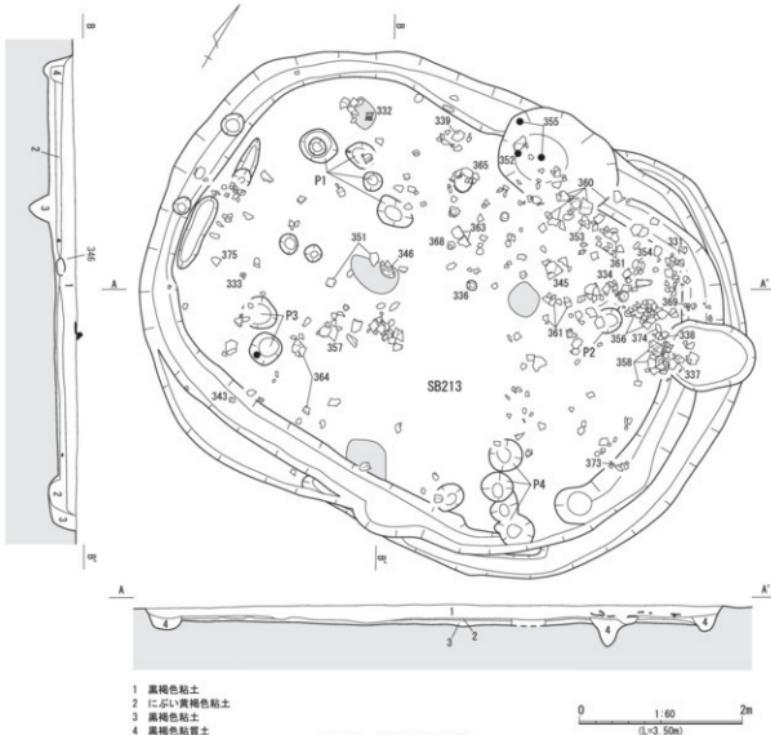
まるものは柱穴であろう。遺物（第130図-331～350、第131図-351～358、第132図-359～375）は、多量の土器が床面一面で出土しており、特に北東側に集中して出土した。遺物の時期から中期後半に位置付けられる。

SB218（第34図） 長軸6.2m、短軸4.1mの楕円形である。炉跡、柱穴にあたる遺構は検出できなかつた。遺物は、土器（第133図-393～405）が床面中央でやや集中して出土した。遺物の時期から、中期後半に位置付けられる。

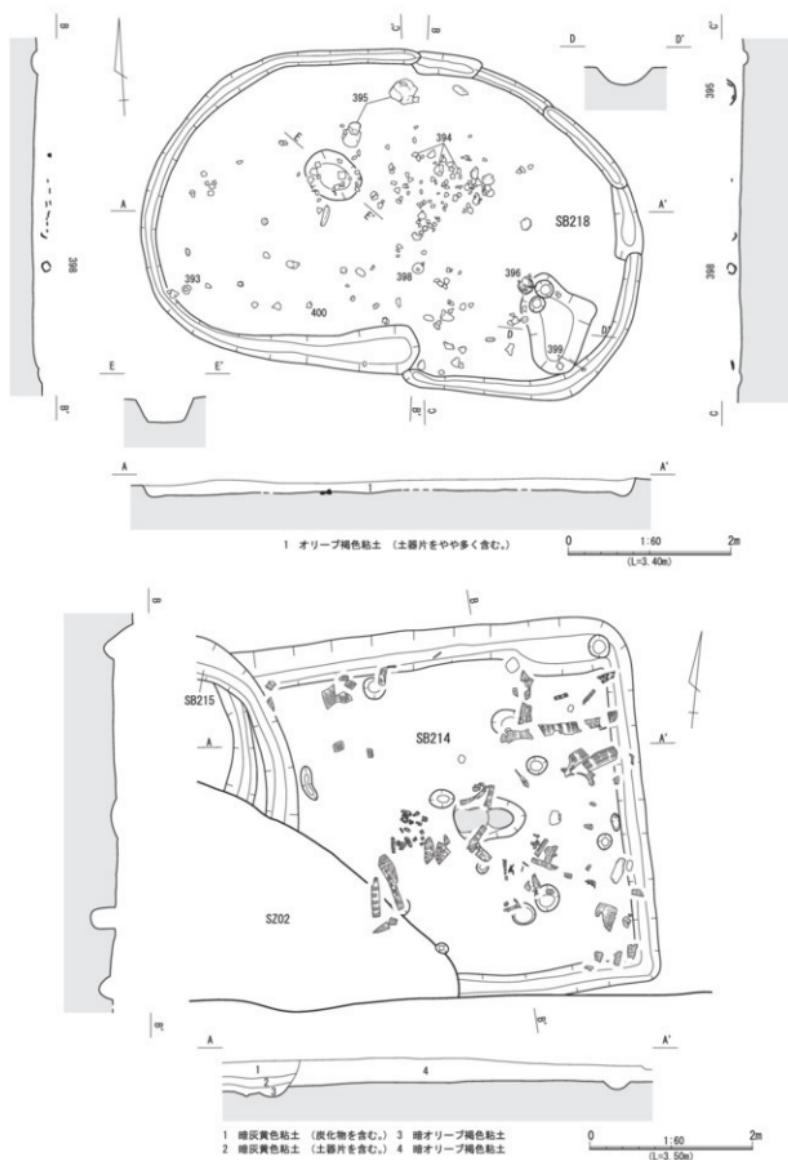
SB214（第34図） 隅丸方形の住居址で、西側をSB215とSZ02に切られているため、長軸は不明だが、短軸は約4.6mである。遺構の中央付近で炉跡と思われる焼土を検出した。遺物は中期中葉の土器（第133図-376～381）が出土している。床面で炭化木材が多く出土していることから、焼失住居と思われる。

SB215（第35図） 他の遺構に切られた部分が多いが、長軸5.6m、短軸4.4mの楕円形の住居址である。柱穴は、P1～P3を検出しており、1.6～1.8mの間隔で配置されている。また、床面の中央では炉跡を検出した。遺物は、中期中葉の土器（第133図-382～386）が出土している。

SB406・SB417（第36図） SB406がSB417を切っている。SB406は長径5.76m、短径4mの楕円形である。床面中央付近で焼土を検出されており、炉跡と思われる。遺物は、壺（第134図-415～419）、甌（第134図-420～422）、石器（第134図-423）が北西部分で集中して出土した。出土遺物から中期後半に位



遺構（住居址）



第34図 SB218・214実測図

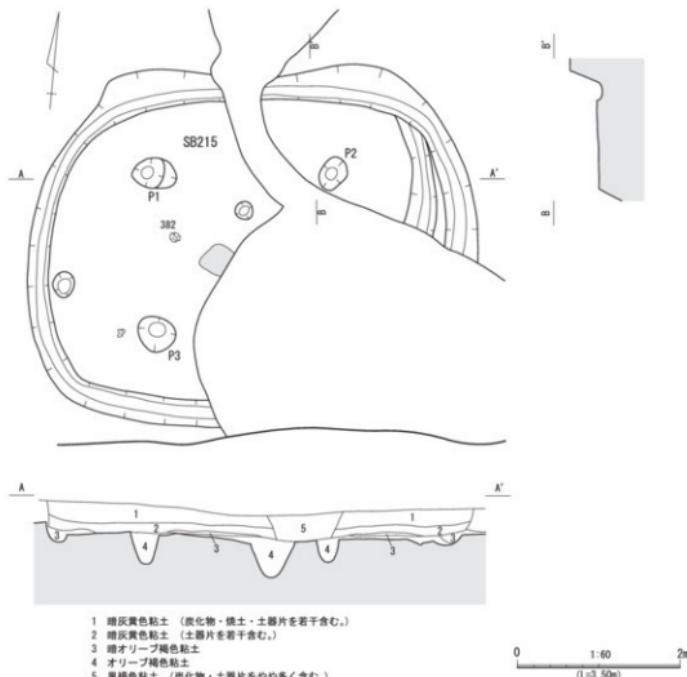
置付けられる。SB417は長軸5.1m、短軸3.44mの隅丸方形である。壁溝は確認できなかった。

SB216・SB221・SB222（第36図） 3つの住居址が切り合っており、SB221とSB222は検出できた部分が少ないので、平面形がはっきりしない。SB216は長軸5.3m、短軸約4mの楕円形である。遺物（第133図-387～392）はSB216に伴うものが多い。また、SB216では、東端の床面から壁溝にかけて、炭化木材が集中して出土した。

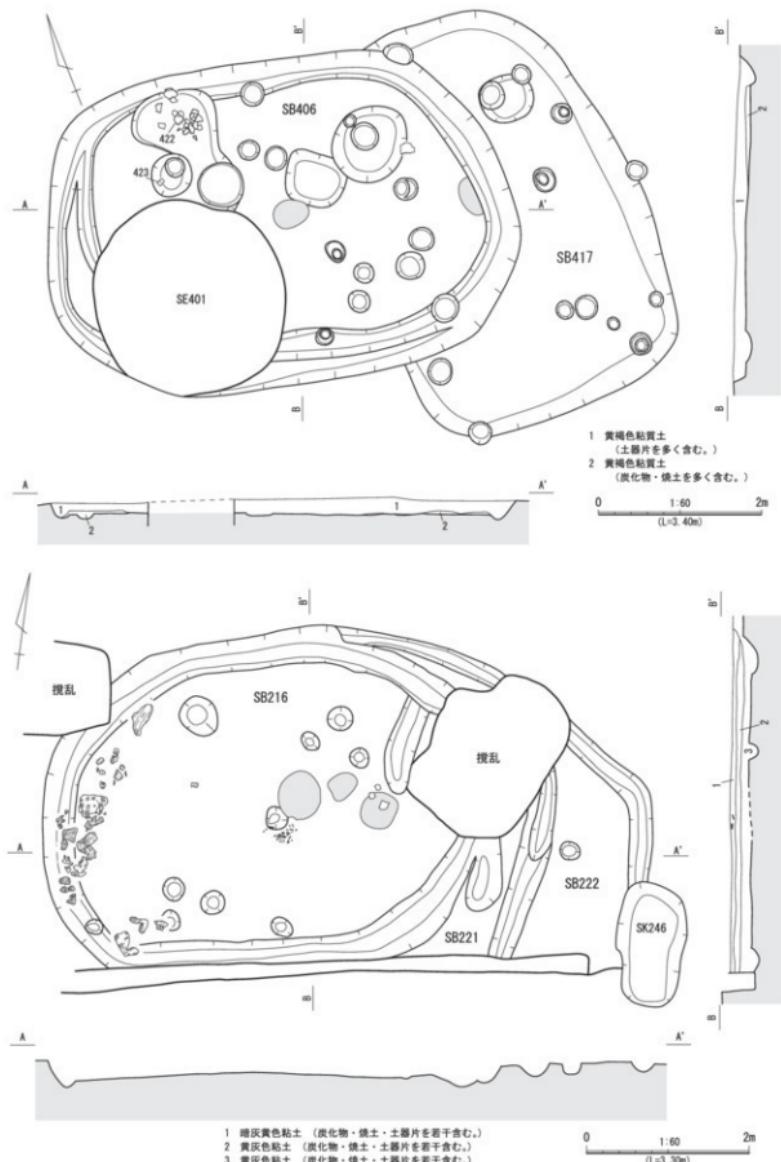
SB411（第37図） 長軸7.04m、短軸5.6mの規模で、隅丸方形を呈している。土坑が多数出土しているが、柱穴にあたるものははっきりしなかった。壁溝を2本検出した部分があるため、住居址の建替えが行われた可能性がある。床面の中央付近で焼土が2カ所検出されており、炉跡の可能性がある。遺物は土器（第134図-430～435）が北側壁溝付近で集中して出土しており、土器以外では遺構西側の土坑から、磨製石斧（第134図-436）が1点出土した。出土遺物から中期後半に位置付けられる。

SB405（第37図） 長軸4.8m、短軸3.06mの規模で、不整形な長方形を呈している。床面で土坑を検出しておらず、P1～P3が柱穴になると思われる。壁溝が南北側で切れているため、ここに出入り口が設けられていた可能性がある。遺物は土器（第134図-406～411）や石鎌（第134図-412）、磨製石斧（第134図-413）、石皿（第134図-414）が出土している。また、床面では炭化木材が出土した。出土遺物から中期後半に位置付けられる。

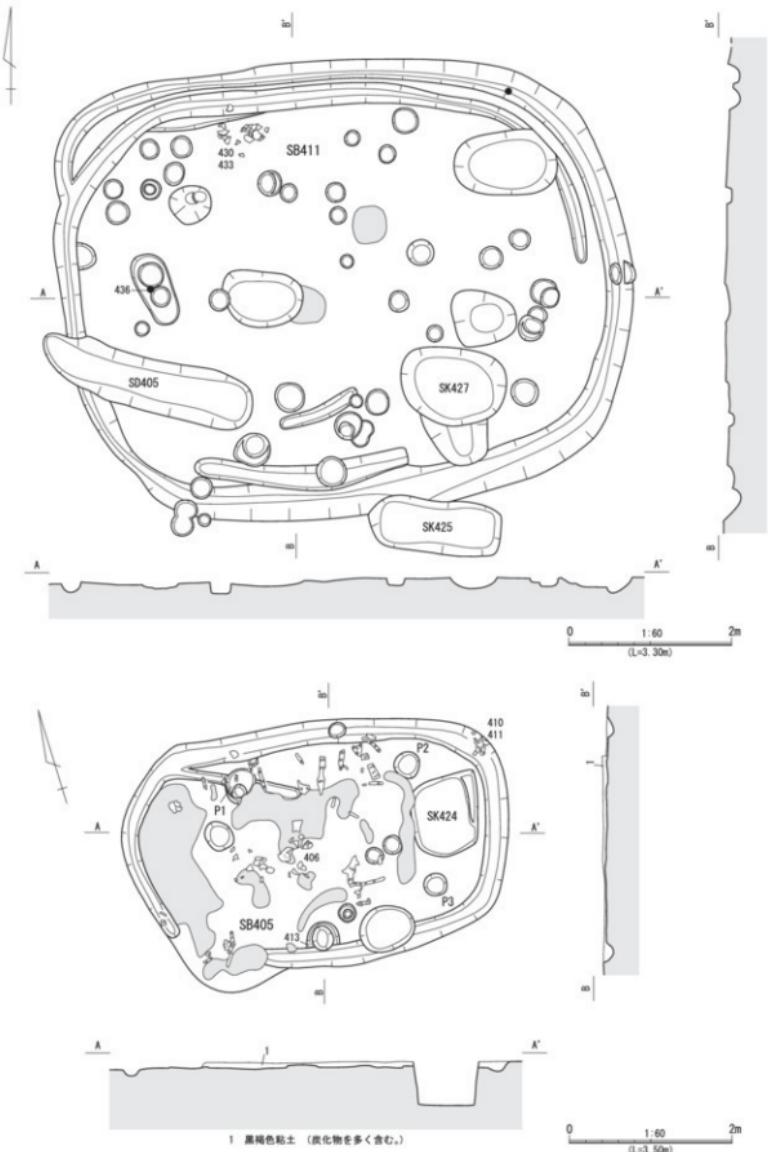
SB504（第38図） 長軸4.5m、短軸6.76mの規模で、不定形な円形を呈している。壁溝は東壁に沿った



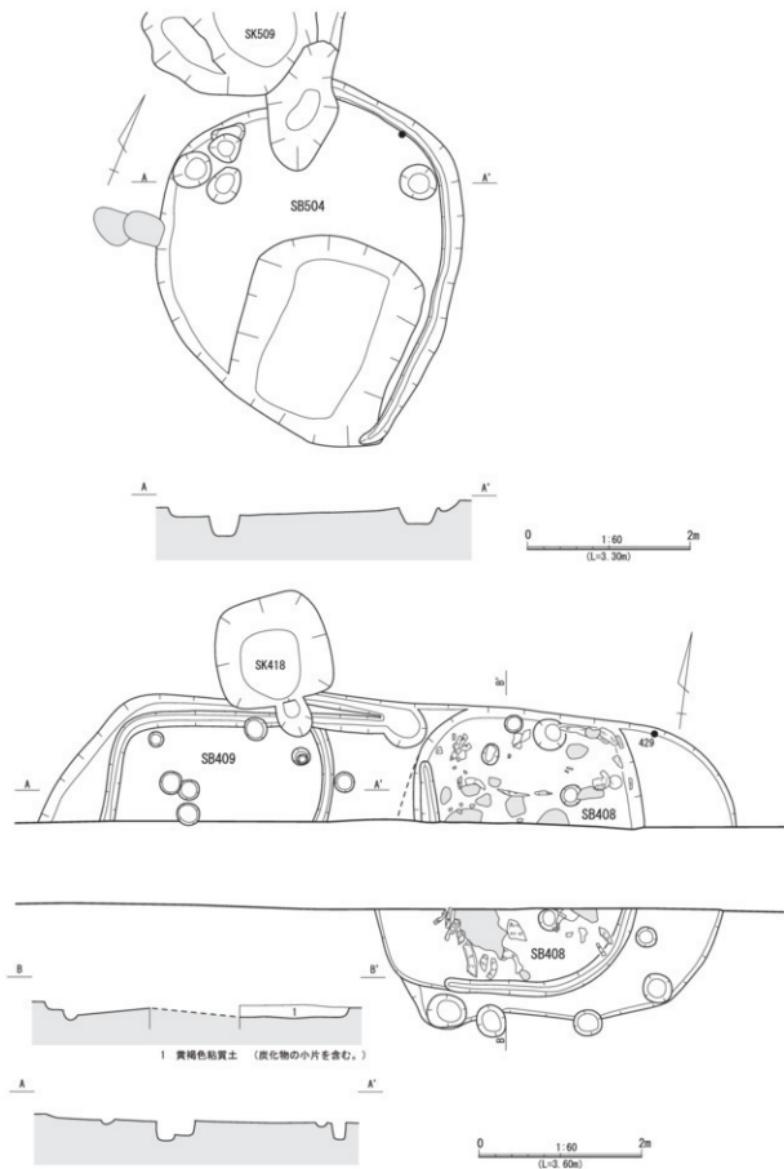
第35図 SB215実測図



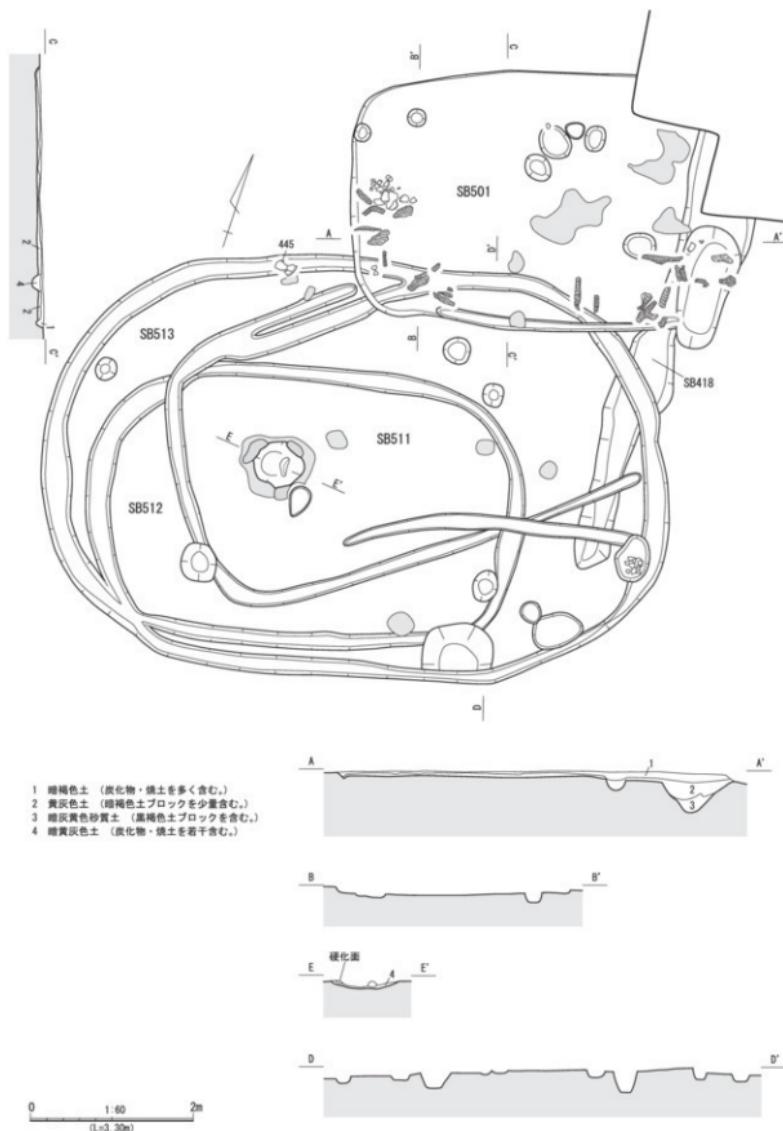
第36図 SB406・417・216・221・222実測図



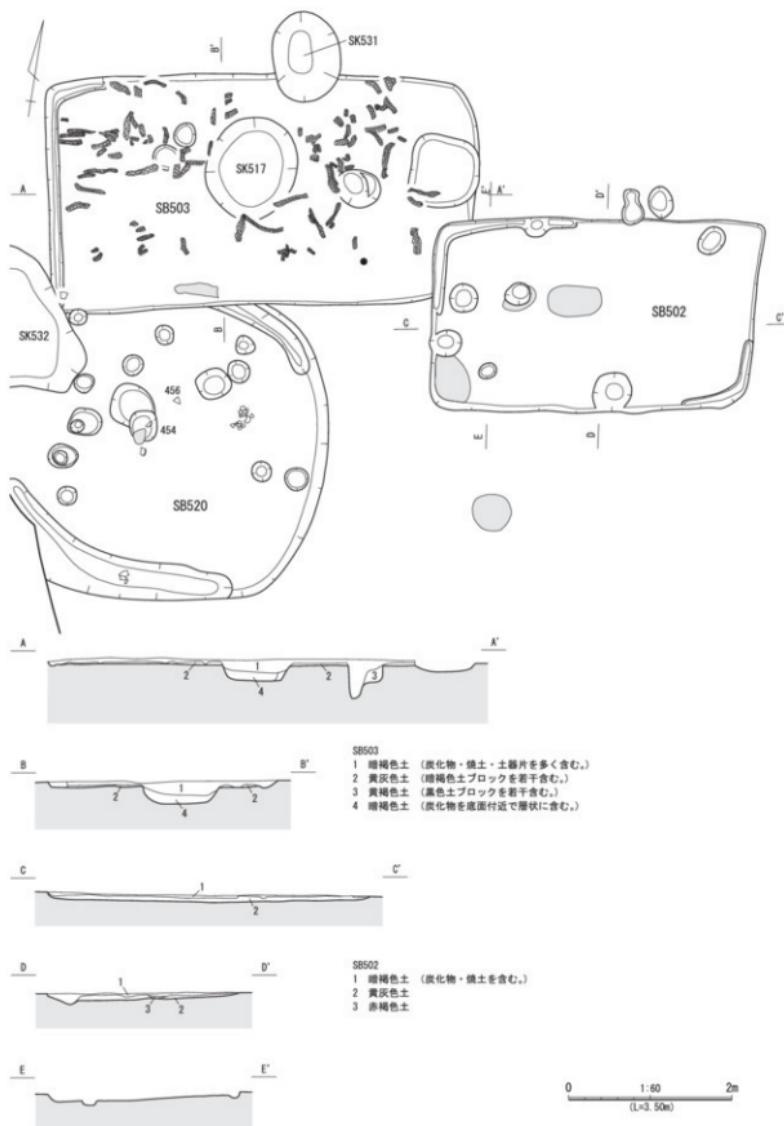
第37図 SB411・405実測図



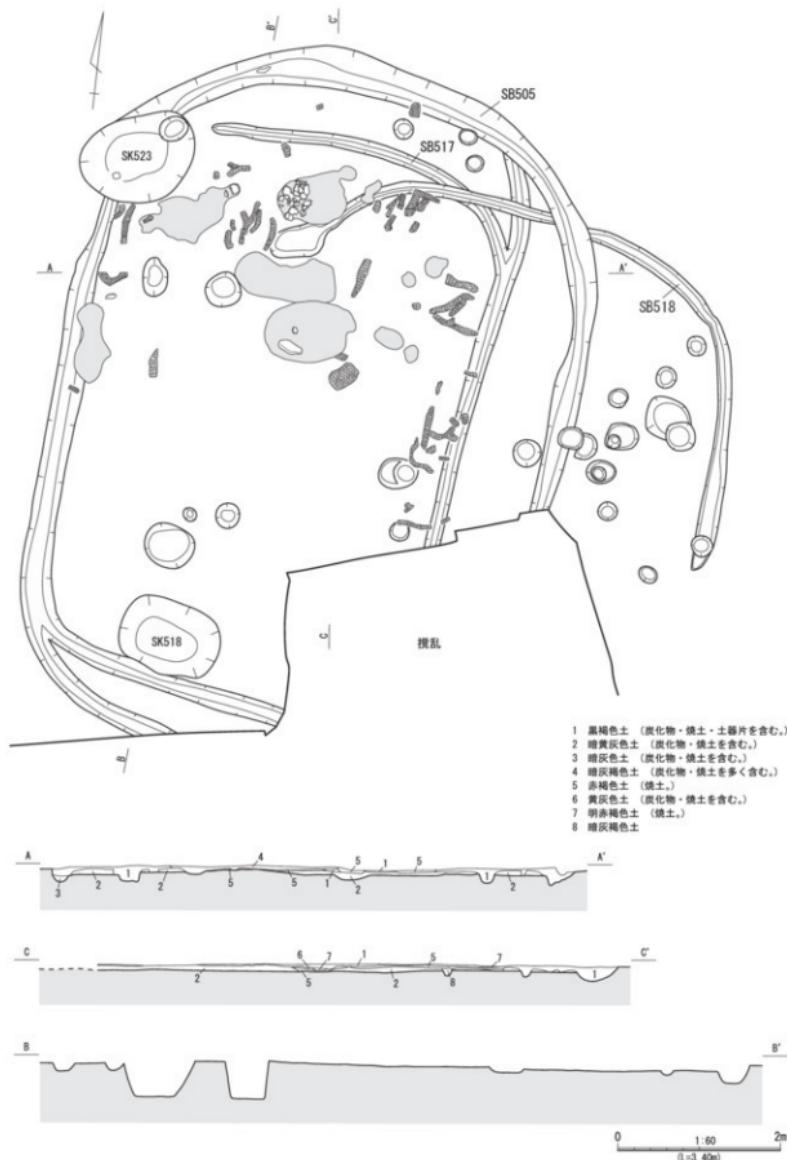
第38図 SB504・409・408実測図



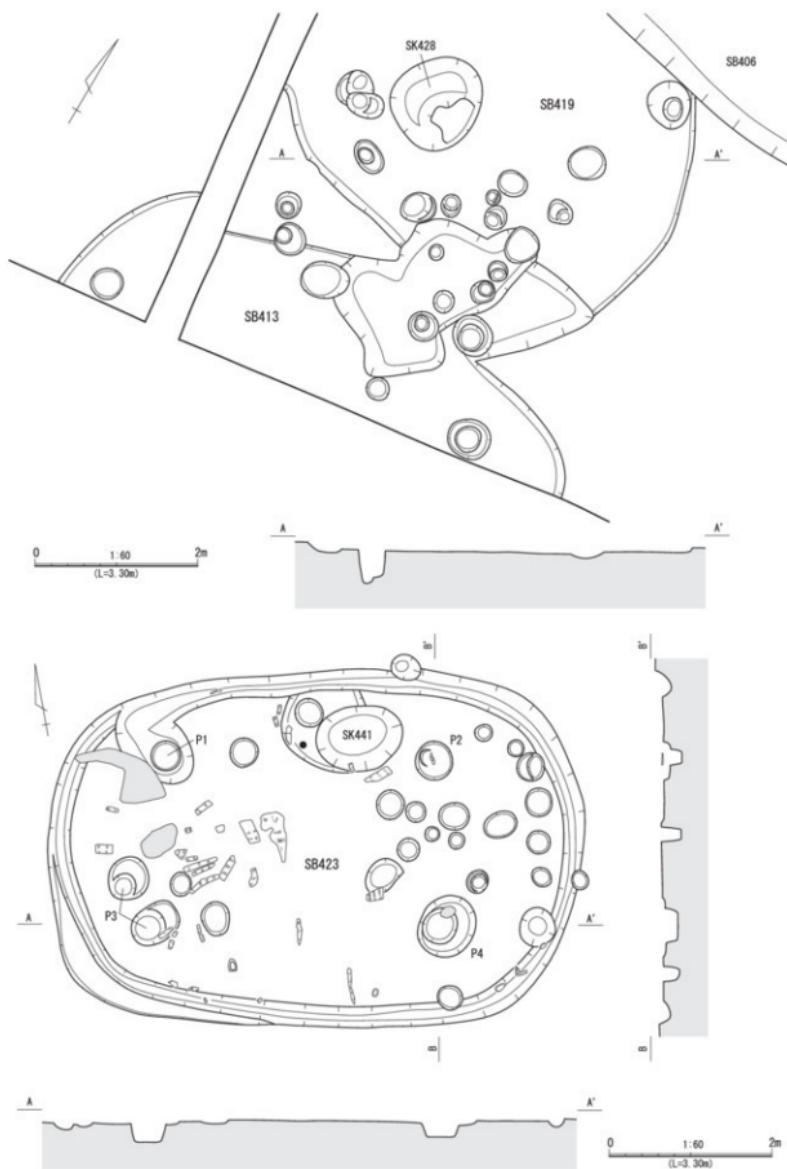
第39図 SB511・512・513・501実測図



第40図 SB502・503・520実測図



第41図 SB505・517・518実測図



第42図 SB413・419・423実測図

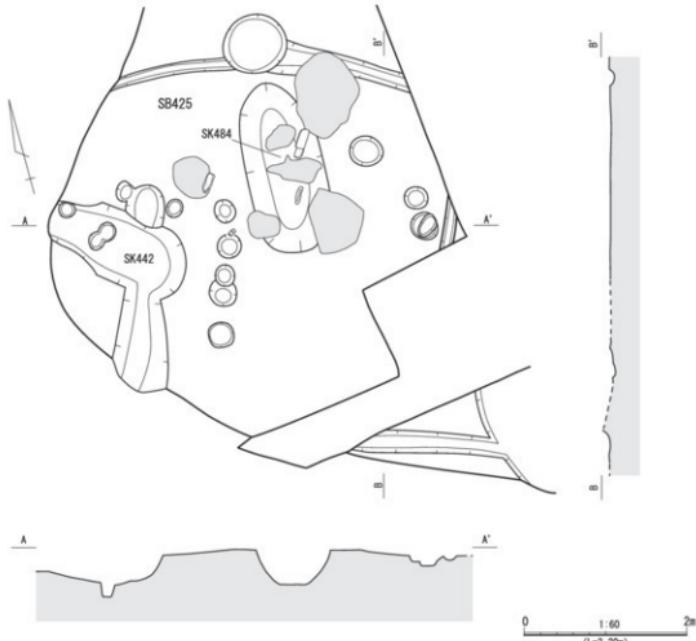
部分だけ掘られている。遺構の南側半分を土坑に切られている。床面で検出できた土坑は柱穴であろう。遺物は、土器（第135図-460、461）と磨製石鎌の一部（第135図-462）が出土した。

SB408（第38図） 長軸は3.5mの楕円形に近い形状である。東側で、住居址と思われる遺構を検出したことから、建替えが行われた可能性がある。床面で焼土と炭化木材が多量に出土したことから、焼失住居の可能性が高い。遺物は、壺と甕（第134図-426～428）と石錐（第148図-429）が出土している。時期は中期後半に位置付けられる。

SB409（第38図） 遺構の南側半分が調査時のトレンチにかかっているため、規模は不明だが、検出部分から、隅丸方形の住居址と思われる。遺物は、壺（第134図-424、425）が出土している。

SB511・SB512・SB513・SB501（第39図） 4つの住居址が切り合っている。SB501は長軸5.0m、短軸3.2mの隅丸方形である。壁溝、炉跡、柱穴は検出できなかったが、床面で焼土と炭化物が出土したことから、消失住居の可能性がある。SB511はSB513に切られている上に、北東側が検出されなかつたため、長軸は不明だが、短軸は3.5mの隅丸方形である。柱穴、炉跡は検出できなかった。SB512は長軸5.4m、短軸3.5mの隅丸方形である。SB513は長軸7.7m、短軸5.2mの楕円形である。SB511～513の中央付近で礫を伴う炉跡が検出されたが、どの住居址に伴うのかは明確ではない。礫は、炉の支柱石として用いられたと思われる。構築順序はSB512→SB511→SB513→SB501である。遺物は、壺と甕（第135図-437、438、440、446）が出土している。

SB502（第40図） 長軸4m、短軸2.4mの隅丸方形である。北西隅と南東隅で、壁溝の一部を検出し、床面の中央付近で、炉跡と思われる焼土を検出した。遺物は壺と甕（第135図-447～449）が出土している。



第43図 SB425実測図

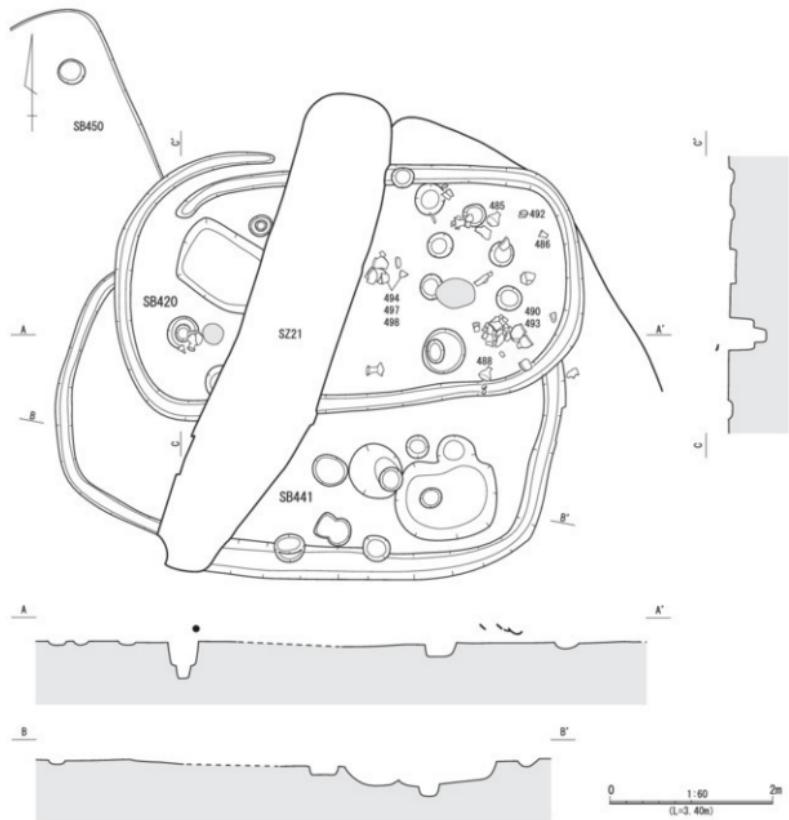


第44図 SB427・428・429・430・431・433実測図

SB503（第40図）長軸5.1m、短軸2.8mの隅丸方形である。西側で壁溝を検出した。炭化木材が多く出土したため、焼失住居の可能性がある。遺物は壺と甕（第135図-439、450～453）が出土している。

SB520（第40図）西側が調査区外に出ており上に、北西側をSB503に切られているため、規模は明確ではないが、検出部分から楕円形になると思われる。遺物は、壺と甕（第135図-454～459）が中央付近で集中して出土した。

SB505・SB517・SB518（第41図）3つの遺構が切り合っている。これらのうちSB505とSB517の南東側が搅乱を受けている。SB505は長軸7.3m、短軸5.1mの隅丸方形で、SB517は短軸6.3mの隅丸方形である。SB518は南側が検出できていないため、規模と形状は明確ではない。構築順序はSB518→SB505→SB517である。SB505とSB517の床面中央付近で礫を伴う炉跡が検出されたが、どちらの遺構に伴うのか明確ではない。また、SB505とSB517では、炭化木材と焼土が多く認められたことから、焼失住居の可能性がある。遺物は、SB505の床面で、壺（第136図-463、466）、鉢（第136図-464）、甕（第136図-465）、骨



第45図 SB420・441・450実測図

角製の紡錘車（第136図-467）が出土した。遺物から中期後半に位置付けられる。

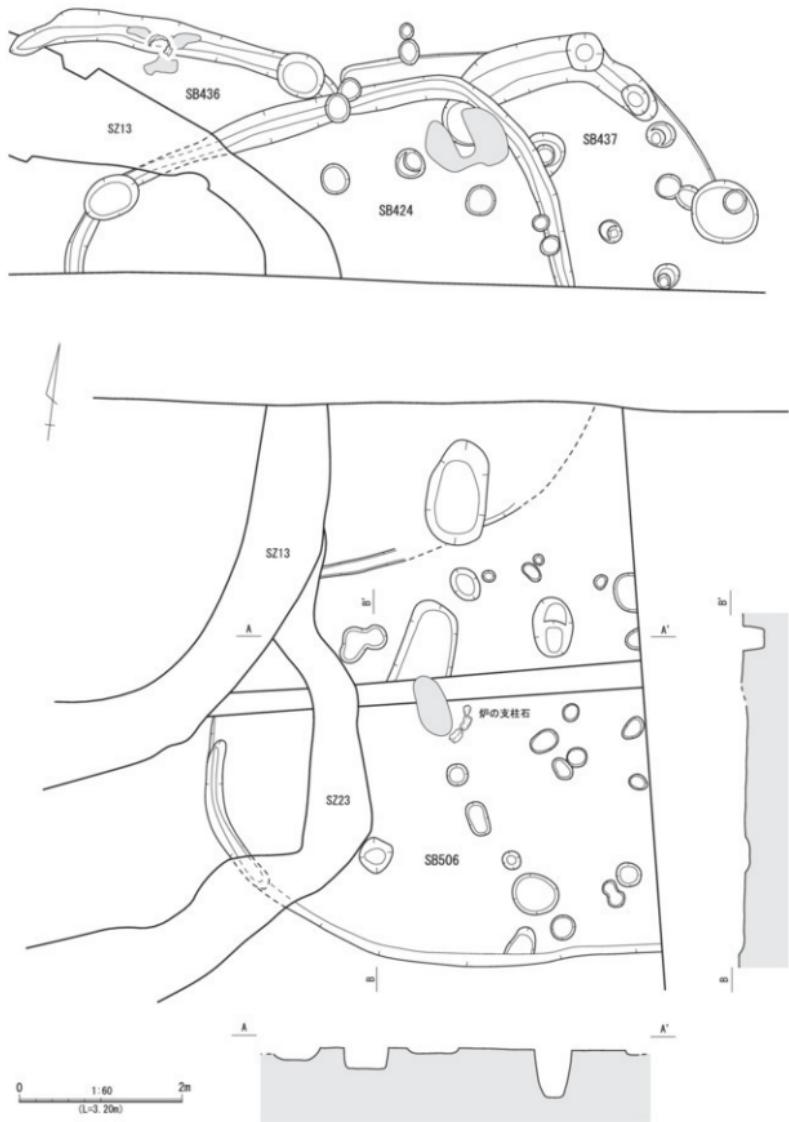
SB413・SB419（第42図） SB419は、北側をSB406に切られているため、規模は明確ではない。検出部分から梢円形に近いと推定できる。SB413も大部分が調査区外に出ているため、規模と形状は明確ではない。両住居址とも、壁溝、炉跡、柱穴といった遺構は検出できなかった。また、SB419とSB413が切り合っている部分に別の遺構が入っているため、両者の新旧関係は明確ではない。遺物はSB419から台盤状土製品（第137図-470）と甕の底部（第137図-471）が出土している。

SB423（第42図） 長軸6.6m、短軸4.4mの隅丸方形である。土坑が多数検出されており、その内P1～P4が柱穴の可能性が高い。床面西部分で炭化木材が出土し、焼土を複数検出したことから、焼失住居の可能性がある。遺物は、床面で壺や甕（第139図-505～508）と石器（第139図-509、510）が出土している。

SB425（第43図） 北側の壁溝のみ検出できた。住居址の東側がトレンチと調査区外にかかっている上



第46図 SB435・434実測図



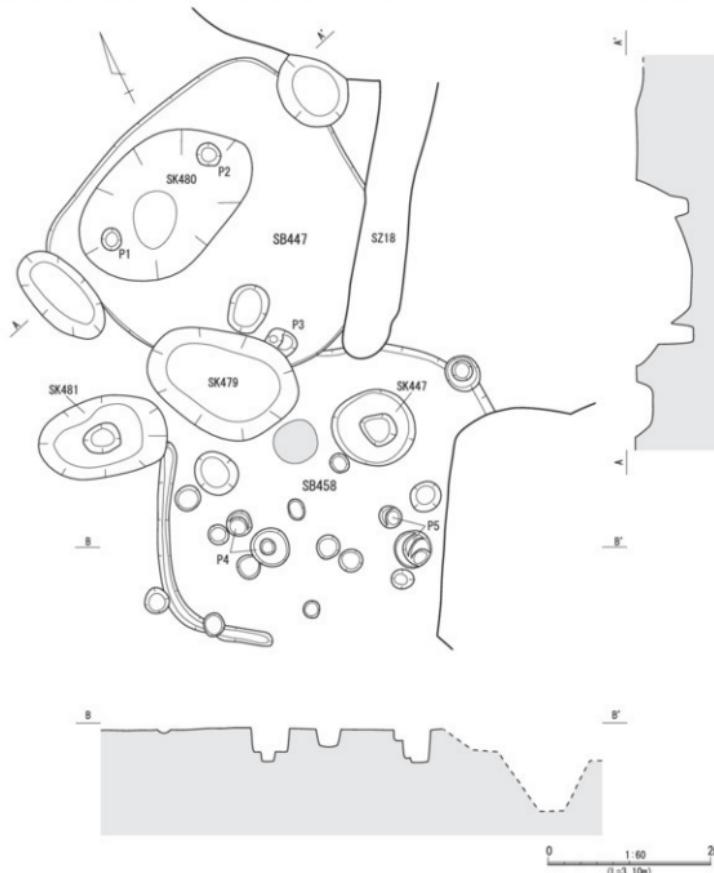
第47図 SB424・436・437・506実測図

遺構（住居址）

に、西側を方形周溝墓に切られているため、規模と形状は明らかでない。土坑と焼土を検出したが、柱穴、炉跡にあたるかどうかははっきりしない。

SB427・SB428・SB429・SB430・SB431・SB433（第44図） 6つの住居址が切り合っている。SB427は隅丸方形で、それ以外の住居址は円形か梢円形になると思われる。構築順序は、SB427が最も古く、SB429、SB431、SB430がそれに次ぎ、SB428が最も新しいと思われる。炉跡・柱穴は、どの遺構も明確なものは確認できなかった。遺物は、SB427で壺（第139図-512～514）、SB431で壺（第139図-515）、SB432で壺（第139図-516）、SB433で壺（第139図-517～520）甕（第139図-521）が出土し、時期は弥生時代中期中葉である。

SB420・SB441・SB450（第45図） 3つの住居址が切り合っている。SB420は長軸5.8m、短軸3.7mの隅丸方形に近い形状を呈している。遺物は、SB420で甕、高坏、壺（第138図-484～498）、蔽石（第138

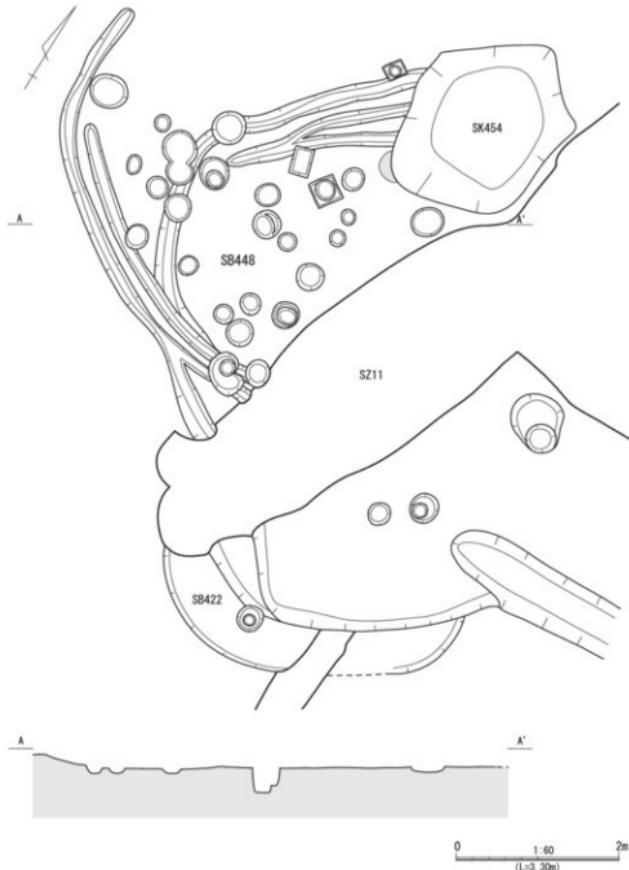


第48図 SB447・458実測図

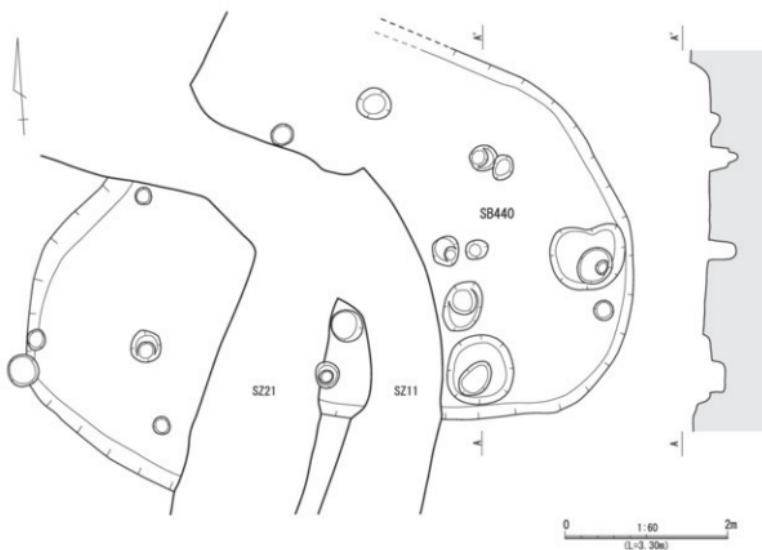
図-499) が出土した。凹線文系の甕、白岩式の壺に比定される土器が含まれている。構築順序は、SB450→SB420→SB441である。

SB434・SB435 (第46図) 両住居址とも円形に近い隅丸方形で、構築順序はSB325の方が先である。住居内遺構については、SB435の中央付近で焼土を検出し、炉跡になると思われる。また、SB435の床面では土坑を検出したが、柱穴に当たるものは明確にできなかった。遺物はSB434で甕 (第139図-522)、SB435で壺 (第139図-523~525) が出土している。

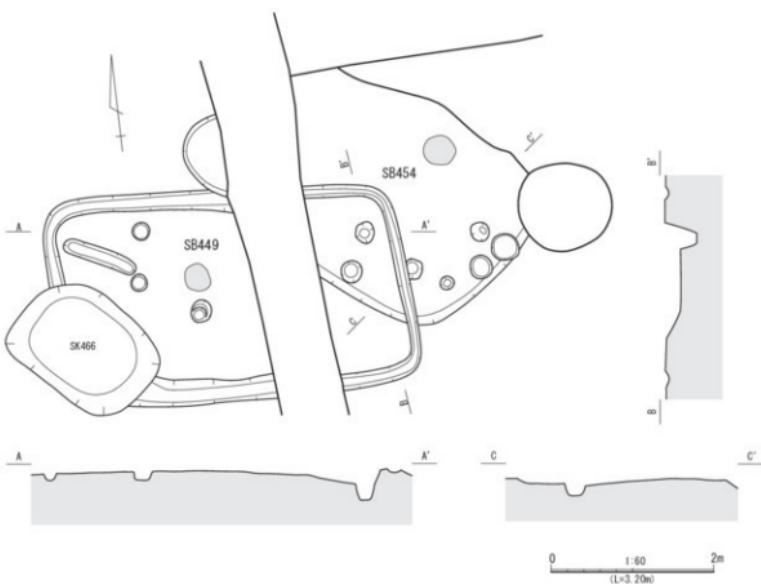
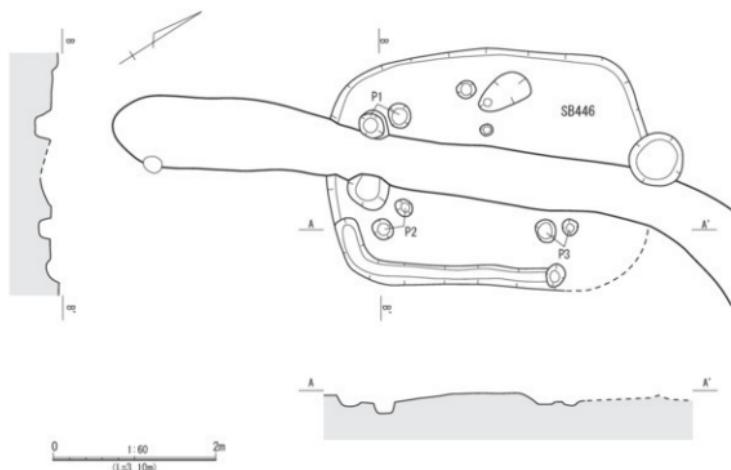
SB424・SB436・SB437・SB506 (第47図) SB424は隅丸方形に近いと思われるが、検出できた部分が少ないため、規模は明らかでない。SB436とSB437も検出できた部分が少なく、規模と形状は不明である。壁溝は検出できたが、炉跡・柱穴は検出できなかった。SB436は壁溝付近で土器が1点出土した。SB506はSB424の南側で検出され、SZ13とSZ23に切られている上に、東側が調査区外に出ているため、規模と



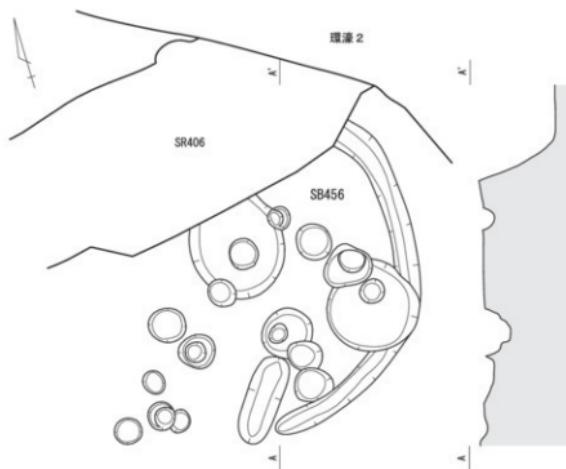
第49図 SB448・422実測図



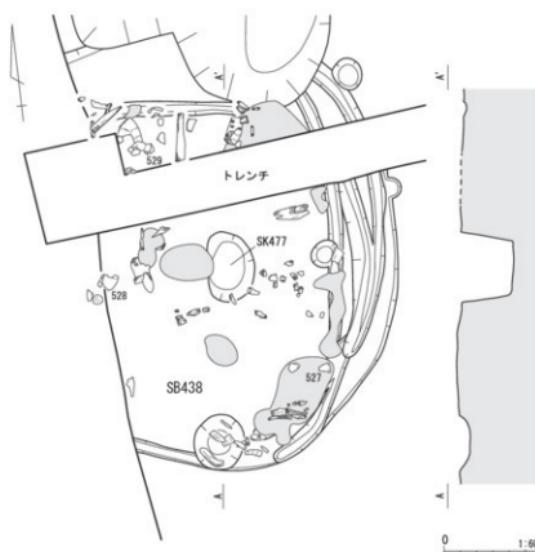
第50図 SB440・421実測図



第51図 SB446・449・454実測図

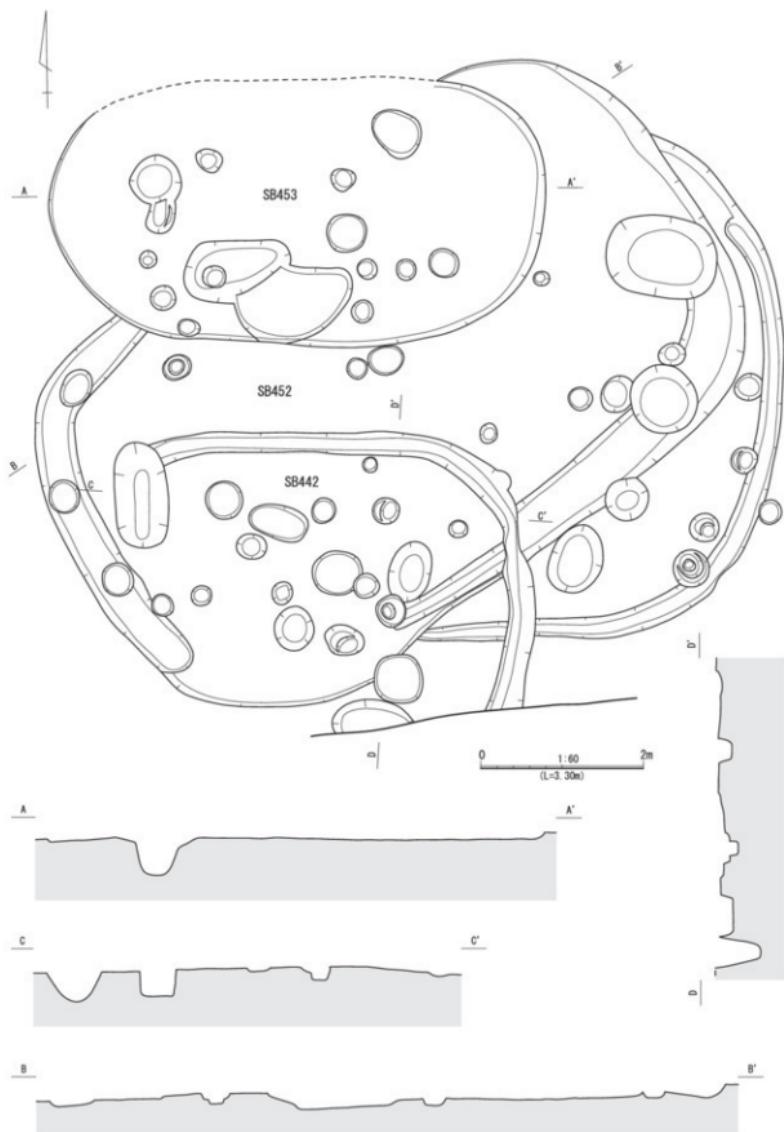


0 1:60 2m
(L=3.00m)

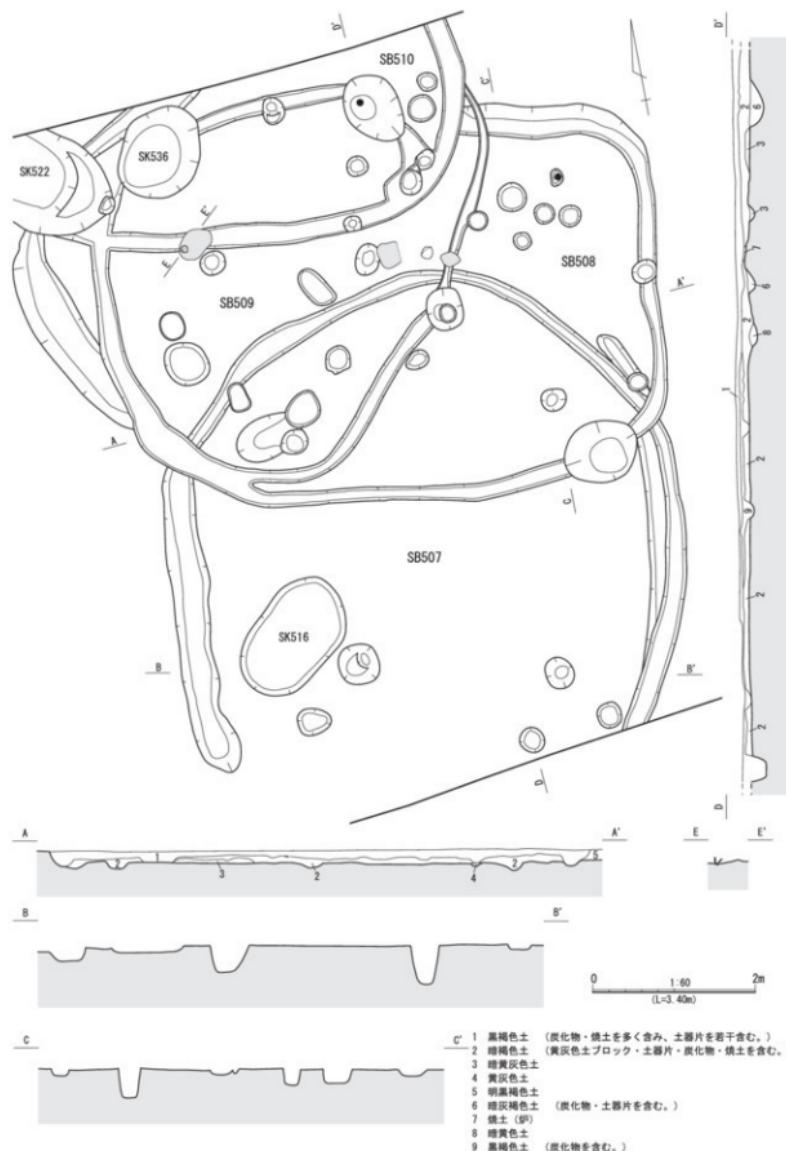


0 1:60 2m
(L=3.00m)

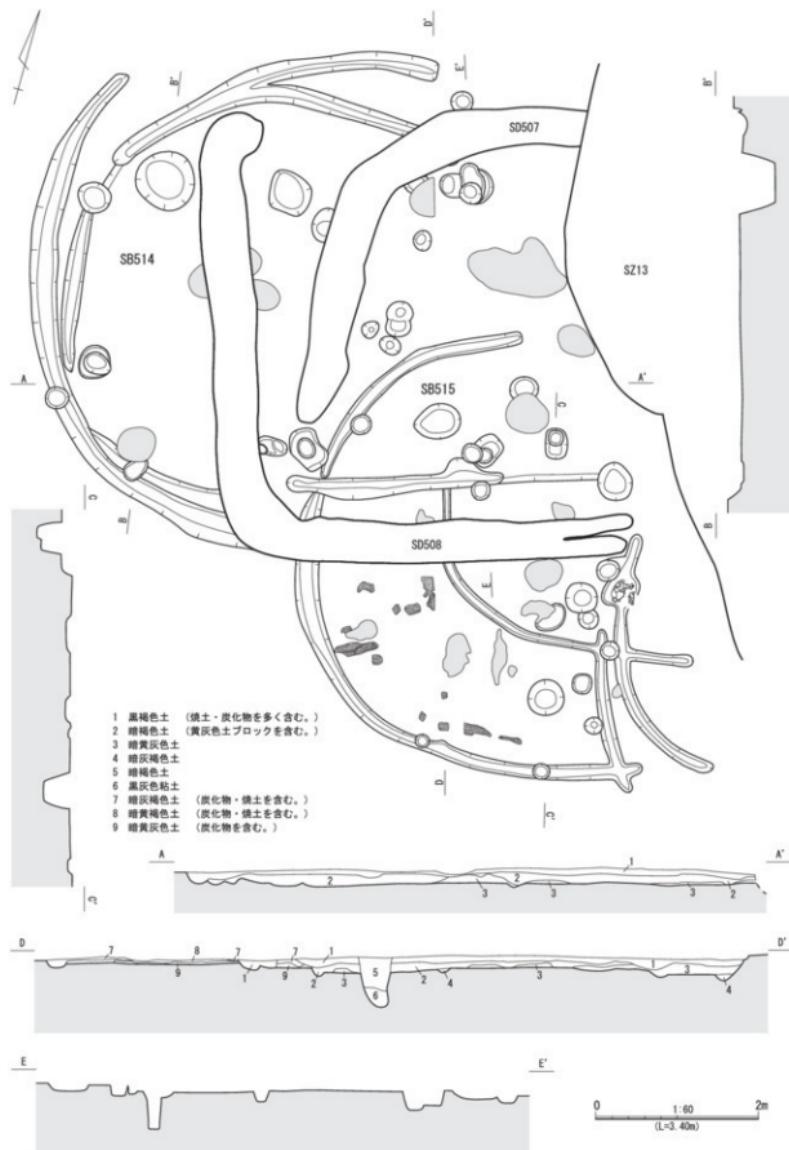
第52図 SB456・438実測図



第53図 SB442・452・453実測図



第54図 SB507・508・509・510実測図



第55図 SB514・515実測図

形状は明らかではない。壁溝は検出できず、柱穴も検出できなかったが、床面中央で炉跡を検出し、炉石が3点出土した。

SB447・SB458（第48図）二つの住居址が切り合っており、構築順序はSB458の方が先である。SB447は3.6m四方の規模で、やや不整形な方形を呈している。壁溝、炉跡は検出されなかったが、床面で検出したP1～P3は柱穴と思われる。SB458は北西隅をSB447に切られている上に、南東側が調査区外に出ているため、規模は明らかでない。西側で壁溝を検出し、床面の南西側では、柱穴P4とP5を検出した。床面の中央付近では炉跡と思われる焼土面を検出した。

SB448・SB422（第49図）SB448は中央をSZ11に切られている上に、検出できなかった部分もあるため、規模と形状は明らかでない。壁溝が複数検出できたことから、建替えがあったと思われる。SB422は大部分をSB448に切られているため、規模と形状は明らかでない。遺物はSB422で壺（第139図-501）、高环（第139図-502～504）が出土した。

SB440（第50図）2つの住居址が切り合っているため、ともに規模は明らかでないが、平面形は歪んだ梢円形になると思われる。壁溝、柱穴、炉跡といった遺構は検出できなかった。遺物は壺、甕（第140図-531～541）が出土しており、中期中葉頃に位置付けられる。

SB421（第50図）遺構の西側を環濠に切られている上に、検出できた部分が少ないため、形状、規模は明らかでない。床面北側で柱穴と思われるP1を検出した。遺物は、磨製石斧（第139図-500）が出土した。

SB446（第51図）長軸4m、短軸1.9mの隅丸方形である。南東側で壁溝を検出した。床面では3カ所で柱穴を2つずつ検出したことから、建替えがあったと思われる。

SB449・SB454（第51図）SB454は南西側をSB449に切られていることから、SB449がSB454に先行する。SB449は長軸4.4m、短軸2.6mの隅丸方形である。床面の中央付近で炉跡と見られる焼土を検出した。壁溝は確認できず、柱穴も検出されなかった。SB454は検出できた部分が少ないため、詳細は不明だが、隅丸方形になると思われる。床面の中央付近では焼土を検出し、これが炉跡の可能性がある。遺物は、壺と甕（第140図-551～555）が出土した。

SB456（第52図）北側を流路に切られており、壁溝も南側で切れているため住居址の範囲は不明瞭である。また、床面で多くの土坑を検出したが、柱穴に当たるものは明らかでない。遺物は壺と甕（第140図-556～557）が出土しており、中期後半に位置付けられる。

SB438（第52図）西側が調査区外に出ているため、規模は明らかでないが、平面形は梢円形になると想われる。住居址の東部分で少なくとも3本の壁溝を検出したことから、建替えが複数回行われたと推定できる。焼土も多数検出しており、それらのうち中央付近の焼土は炉跡の可能性が高い。遺物は、丸子式の壺（第139図-526）、甕（第139図-527、529）、鉢（第139図-528）が出土している。

SB442（第53図）南側が調査区外に出ている上に、検出できた範囲も少ないため、形状や規模は把握できない。床面では土坑を多数検出したが、柱穴に当たるかどうかはっきりしない。遺物は、中期後半の土器（第140図-542～545）が出土している。

SB452（第53図）長軸8.9m、短軸5.5mの隅丸方形である。柱穴、炉跡は検出できなかった。遺物は中期後半の土器（第140図-546～549）が出土した。建替えが複数回行われている。

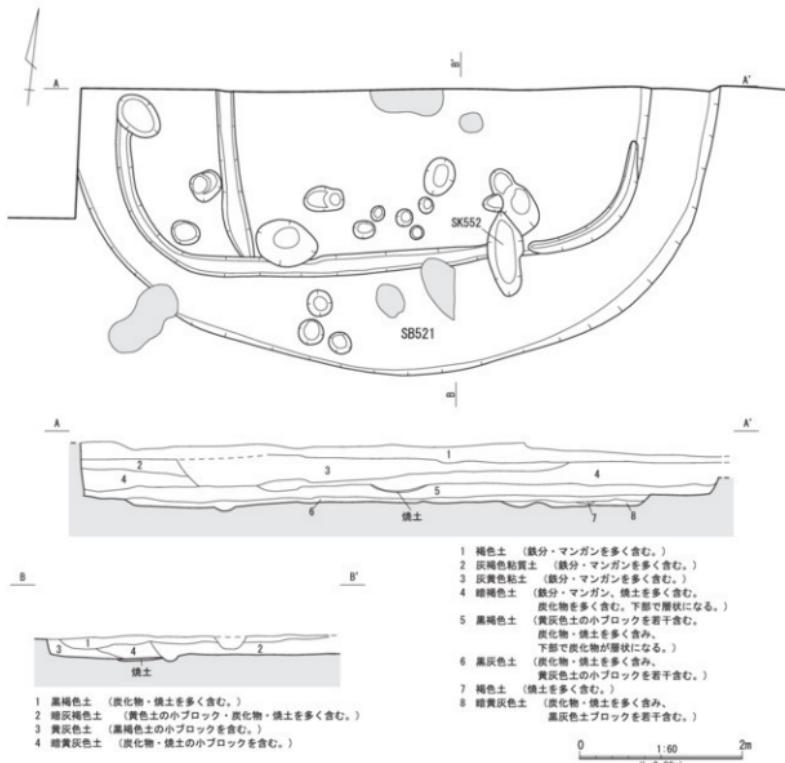
SB453（第53図）長軸6.1m、短軸3.1mの梢円形である。壁溝、柱穴、炉跡等の住居内施設は検出できなかった。遺物は中期後半の土器（第135図-450）が出土している。

SB507・SB508・SB509・SB510（第54図）4つの住居址が切り合っており、構築順序はSB507→SB508→SB509→SB510である。SB507は長軸6.4mの歪んだ梢円形を呈している。SB508は長軸7m、短軸4.8mの隅丸方形である。SB509は歪んだ梢円形である。SB510は大半が調査区外に出ているため、規模や形状

は明らかでない。SB508は、中央付近で炉跡と思われる焼土が検出された。遺物は、SB507で壺や甕（第141図-558～564）、SB508で壺や甕（第141図-565～569）、SB510で壺と甕（第141図-570、571）が出土している。出土した土器から中期後半に位置付けられる。

SB514・SB515（第55図） SB514とSB515は、ともに住居址の東側を検出できなかつたため、形状と規模ははっきりしない。壁溝を数条検出できたことから、建替えがあったと思われる。両住居址とも、床面に多量の焼土が見られ、SB515では炭化木材も出土していることから、焼失住居と思われる。両遺構が切りあつてある部分に別の遺構が入っているため、切り合いは分からぬが、SB515では中期中葉の土器（第141図-585～588）が出土しており、SB514では中期後半の土器（第141図-572～584）が出土している。また、SB515では凹石（第141図-589）も出土している。

SB521（第56図） 遺構の半分以上が調査区外に出ているため、全体の形状は明らかでない。掘り込みが二重になっていることから、建替えがあったと思われる。そのうち、内側で検出した住居址では壁溝を検出した。双方の切りあいは不明だが、土層の堆積状況から内側の住居址の方が新しい。床面では土坑を多数検出したが、柱穴にあたるものは判然としなかつた。また、炉跡と思われる焼土も検出した。

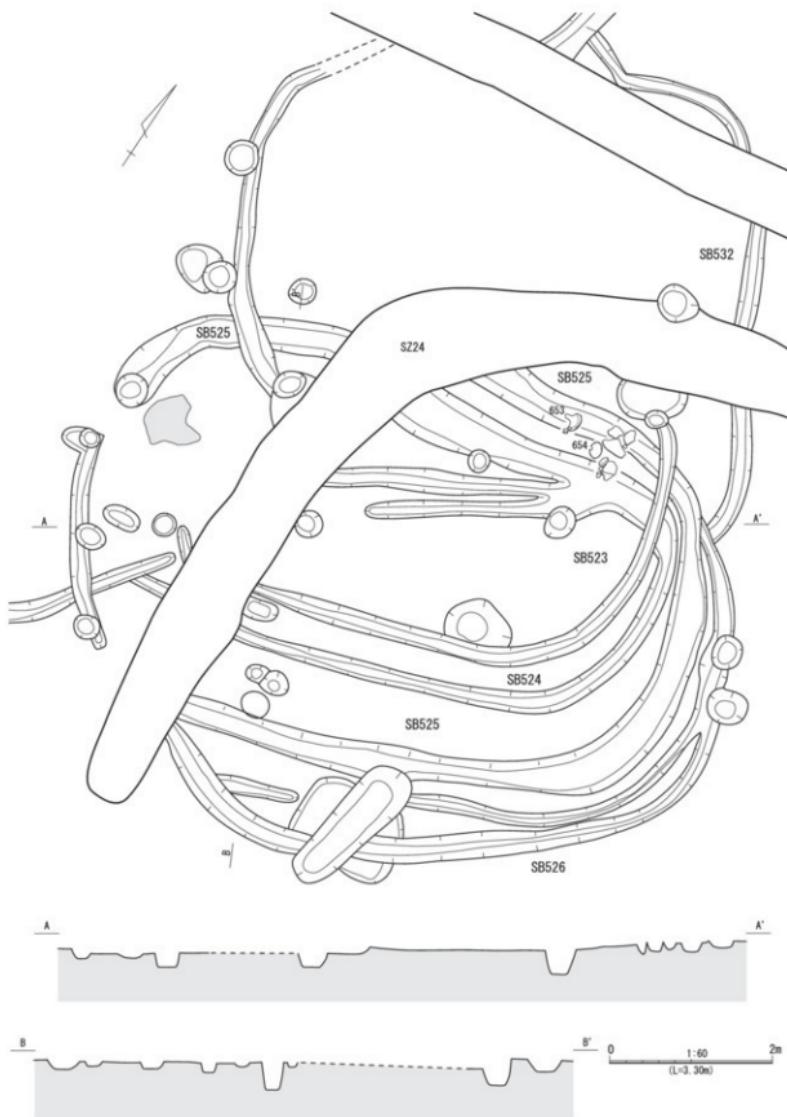


第56図 SB521実測図



- 1 黒褐色土 (黄灰色土をブロック状、マーブル状に含む。炭化物、土器片を多く含み、埴土を若干含む。)
- 2 黒褐色土 (黄灰色土ブロックを含み、炭化物層が繊維状に入る。)
- 3 黄灰色土 (黒褐色土ブロックを若干含む。)
- 4 黑褐色粘土 (炭化物・埴土を多く含み、黄灰色土ブロックを含む。)

第57図 SB522実測図



第58図 SB523・524・525・526・532実測図

遺構（住居址）

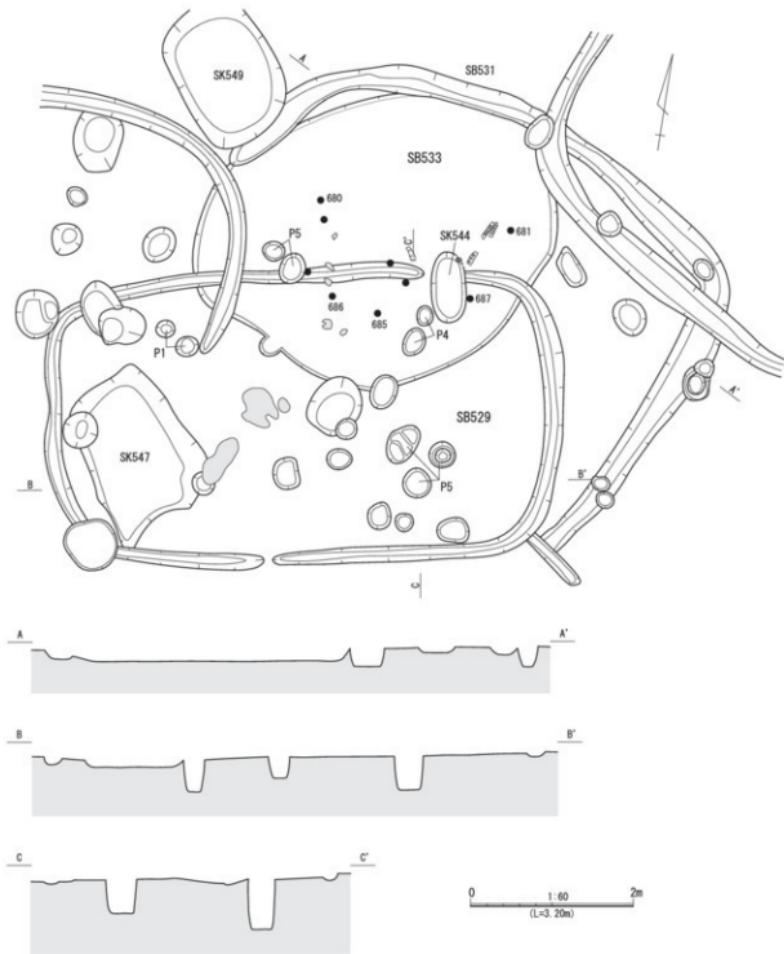
時期は、出土した土器（第141図-590～613）から中期後半に位置付けられる。また、磨製石鎌（第141図-614）も出土した。

SB522（第57図）住居址の南東部分では壁溝が少なくとも3本確認できたことから、建替えがあったと思われる。平面形は隅丸方形である。遺物は、土器（第142図-615～634、第143図-635～644）が床面南東部分で集中して出土した。出土遺物から中期後半に位置づけられる。土器以外には磨製石斧の一部（第143図-645）と打製石鎌（第143図-646）が出土した。

SB523・SB524・SB525・SB526・SB532（第58図）5つの住居址が切り合っている。SB525は長軸7.9m、短軸5.2mの規模だが、他の住居址の規模は明らかでない。平面形は、SB523～SB526は隅丸方形と思われる。いずれの遺構からも柱穴・煙跡といった遺構は検出できなかった。構築順序はSB526→SB525→SB524→SB523である。出土遺物はSB523で壺、甕（第144図-647～650）、SB524で壺、もしくは甕（第144図-651、652）、SB525で壺と甕（第144図-653～657）、SB526で高杯（第144図-658）が出土している。時期は、SB532で出土した679は中期後半に位置付けられるが、それ以外は中期中葉である。



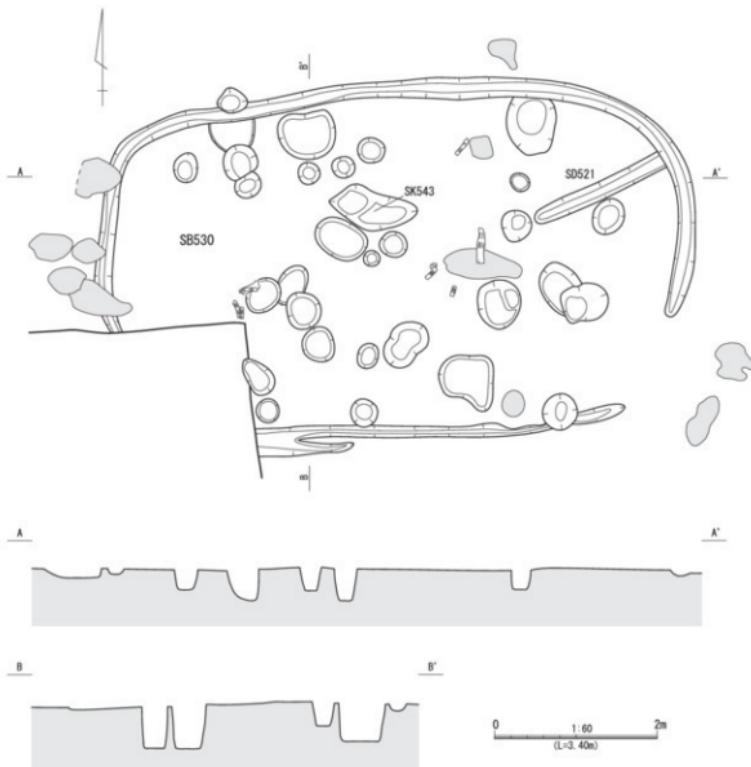
第59図 SB527・528実測図



第60図 SB529・531・533実測図

SB527・SB528（第59図） 2つの住居址が切り合っており、構築順序はSB528の方が先である。SB528は、北側が調査区外に出ているため、長軸は不明だが、短軸は5.3mで、隅丸方形である。P1～P3は柱穴と考えられる。SB527は検出できた部分が少ないため、規模と形状ははっきりしない。SB528からは、第144図-663、664の土器が出土していることから、中期後半に位置付けられる。

SB529・SB531・SB533（第60図） 構築順序はSB533→SB531・SB529である。SB533は直径3.8mのやや歪んだ円形で、P4、P5が柱穴になると思われる。遺物は床面で壺、甕（第144図-680～687）や炭化木材が出土した。出土遺物から中期中葉に位置づけられる。SB531は南西側を検出できなかったため、長軸は不明だが、短軸は3.2mの方形である。遺物は、壺、甕（第144図-669～678）が出土している。SB529は長軸6.4m、短軸3.8mの隅丸方形で、壁溝は北東と南西で一ヵ所ずつ切れている。P1～P4が柱穴になるとと思われるが、P4はSB533の柱穴になる可能性もある。遺物は、甕（第144図-665、666）が出土している。SB529の床面の中央付近では焼土を検出しており、炉跡と思われる。出土遺物からSB529、SB531、SB533は中期中葉に位置づけられる。



第61図 SB530実測図

SB530（第61図） 長軸7.6m、短軸4.4mの隅丸方形である。壁溝が南東隅で切れているため、ここに出入り口が設けられていた可能性がある。床面で多くの土坑を検出したが、柱穴に当たるものは明らかにできなかった。床面では焼土、炭化木材が多く出土しているため、焼失住居の可能性がある。遺物は、壺、甕（第144図-667、668）が出土している。

2 土坑

弥生時代の土坑の数は非常に多いため、ここでは遺物が多く出土した土坑を中心に報告する。時期は、弥生時代中期後半のものが多く、中期中葉、後期のものは少ない。今回、検出した土坑のうち、長楕円形の土坑は、長軸1.3m～2.3m、短軸0.9m～2m程度の大きさで、遺物が多く含まれていた点で注目できる。

一括性の高い資料としてはSK456、SK518、SK526が挙げられる。また、SK536は砾詰土坑であり、土器、石器は出土していないものの、同一石材が多量に充填されていた。

SK245（第62図） 長楕円形の土坑である。段掘りになっている。底部穿孔土器（第145図-1）、石斧（第145図-2）が出土している。

SK248（第62図） 長楕円形の土坑である。遺物は埋土の3層から、平底の甕（第145図-5、6）が出土した。口縁部の形状から中期中葉であろう。

SK230（第62図） 楕円形の土坑である。遺物は底から浮いた状態で出土しており、小型鉢（第145図-3）、壺胴部片（第145図-4）が出土した。中期後半であろう。

SK252（第62図） 不整形な楕円形で、断面は段掘り状になっている。2層と4層から壺と甕など（第145図-8～15）が出土した。12は台盤状土製品で、13は小型の台付甕である。時期は中期後半である。

SK255（第62図） 亜んだ楕円形の土坑で、SK252に切られている。

SK244（第63図） 長楕円形の土坑である。北半で遺物が出土しており、高環脚部（第146図-20）、敲石（第146図-24）が出土している。中期後半であろう。

SK314（第63図） 隅丸正方形を呈する。鉢（第147図-30）が出土している。

SK302（第63図） 他の遺構により切られているため、平面形は不明である。遺物量は少なく、敲石（第147図-25）、壺口縁部片（第147図-26）が出土した。中期後半であろう。

SK310（第63図） 楕円形を呈する。土坑内には炭化材が認められる。壺と甕（第147-27～29）が出土した。中期後半であろう。

SK428（第64図） 楕円形を呈する。壺（第149図-60）、長胴の甕（第149図-62）が出土した。中期後半であろう。

SK419（第64図） 楕円形を呈し、段掘り状を呈する。単純口縁の壺（第149図-64）が横位の状態で出土した。

SK424（第64図） 隅丸正方形を呈する。壺と甕（第149図-56～59）が出土した。中期後半であろう。

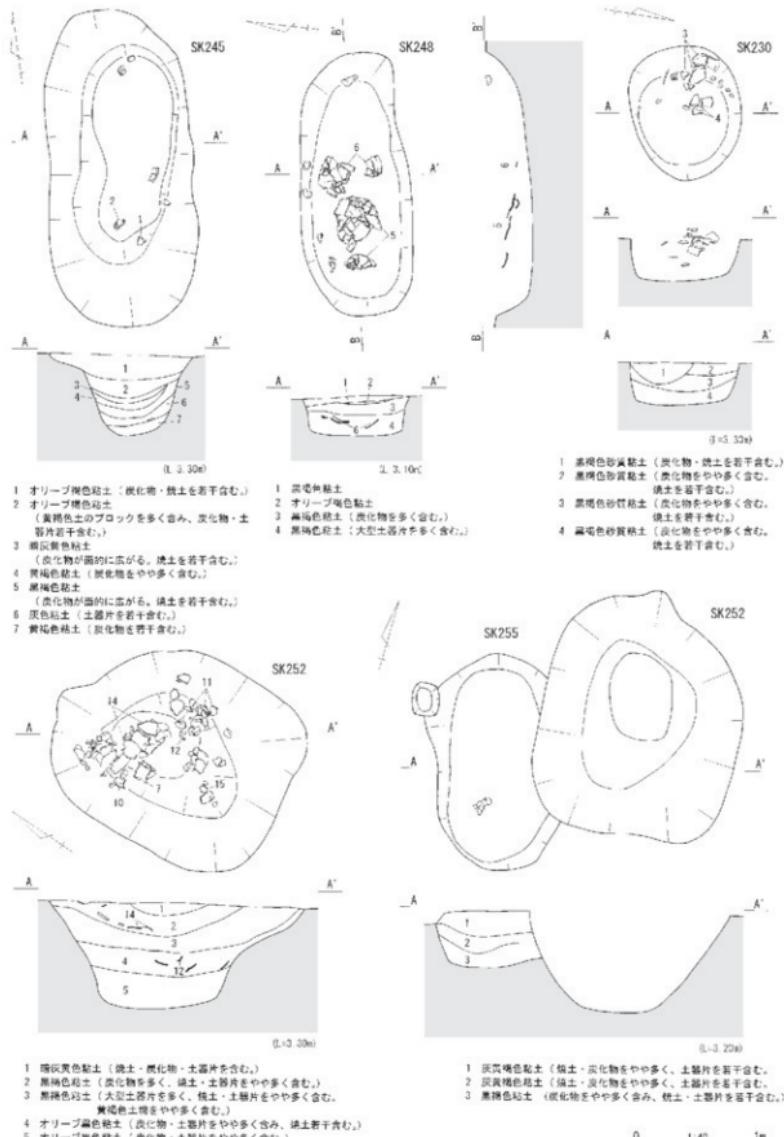
SK412（第64図） 不整形な楕円形を呈する。壺と甕（第149図-52～55）が出土した。中期後半であろう。

SK434（第64図） 楕円形の土坑である。壺と甕（第151図-93～97）が出土した。特に96、97の土器の遺存状況は良好であった。中期後半であろう。

SK443（第64図） 隅丸方形の土坑で、底部付近をかろうじて検出できた。中央で第151図-98の甕が出土した。中期後半であろう。

SK447（第64図） 円形を呈する土坑である。甕（第152図-114）が出土しており、後期に属するであろう。

遺構(土坑)



第62図 SK245・248・230・252・255実測図

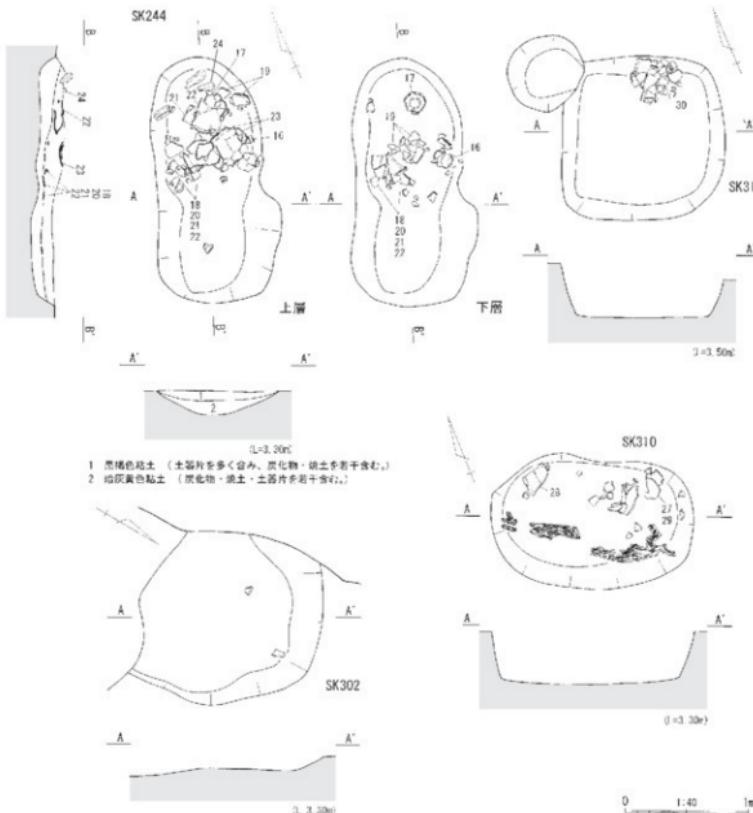
SK456（第64図） 楕円形を呈する土坑で、壺、甕、高坏（第151図-99～104、第152図-105～113、115）が出土した。土器には白岩式土器、長床式土器、凹線文系土器が含まれている。

SK506（第65図） 長椭円形を呈する。壺と甕（第159図-215～217）が出土した。215と216は同一個体で、嶺田系の土器と思われる。中期中葉であろう。

SK507（第65図） 長椭円形を呈する。壺、甕、高坏（第159図-218～222）が出土した。時期は中期後半である。

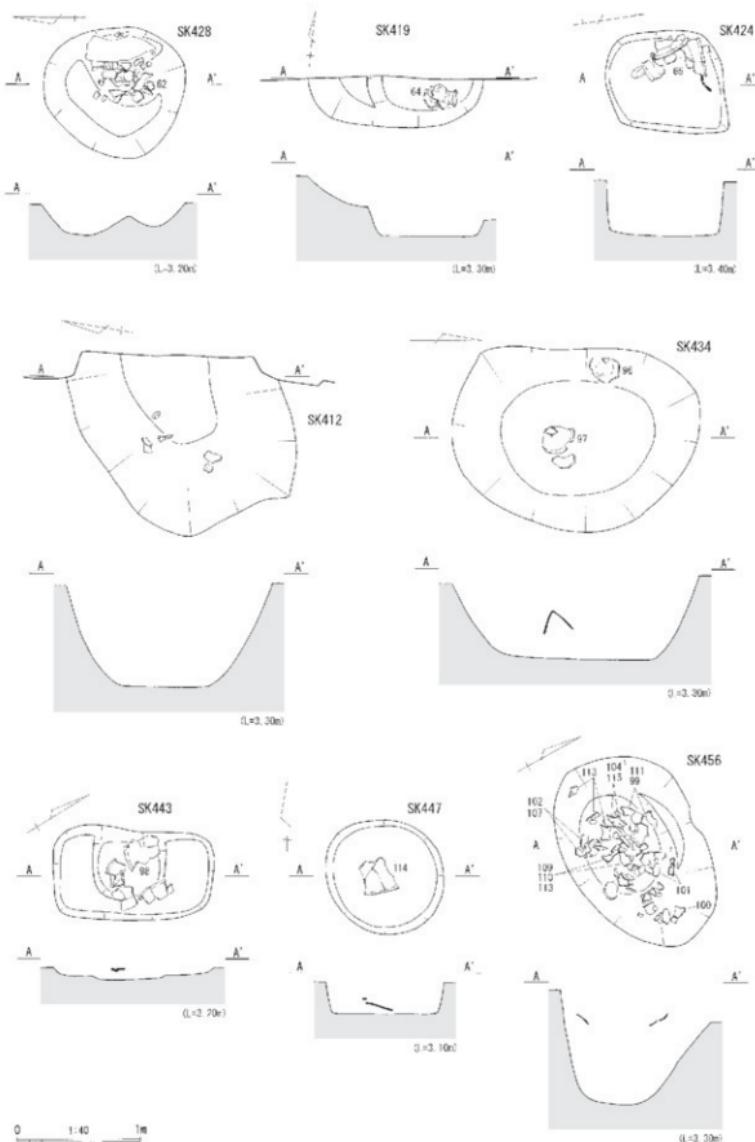
SK526（第65図） 楕円形を呈する土坑である。壺と甕（第159図-223、第160図-235）、台盤状土製品（第160図-236）、敲石（第160図-237）が出土している。中期中葉の土器も見られるが、主体は中期後半である。

SK514（第65図） 長椭円形の土坑である。壺と甕（第160図-238～241）が出土した。中期中葉から後葉であろう。

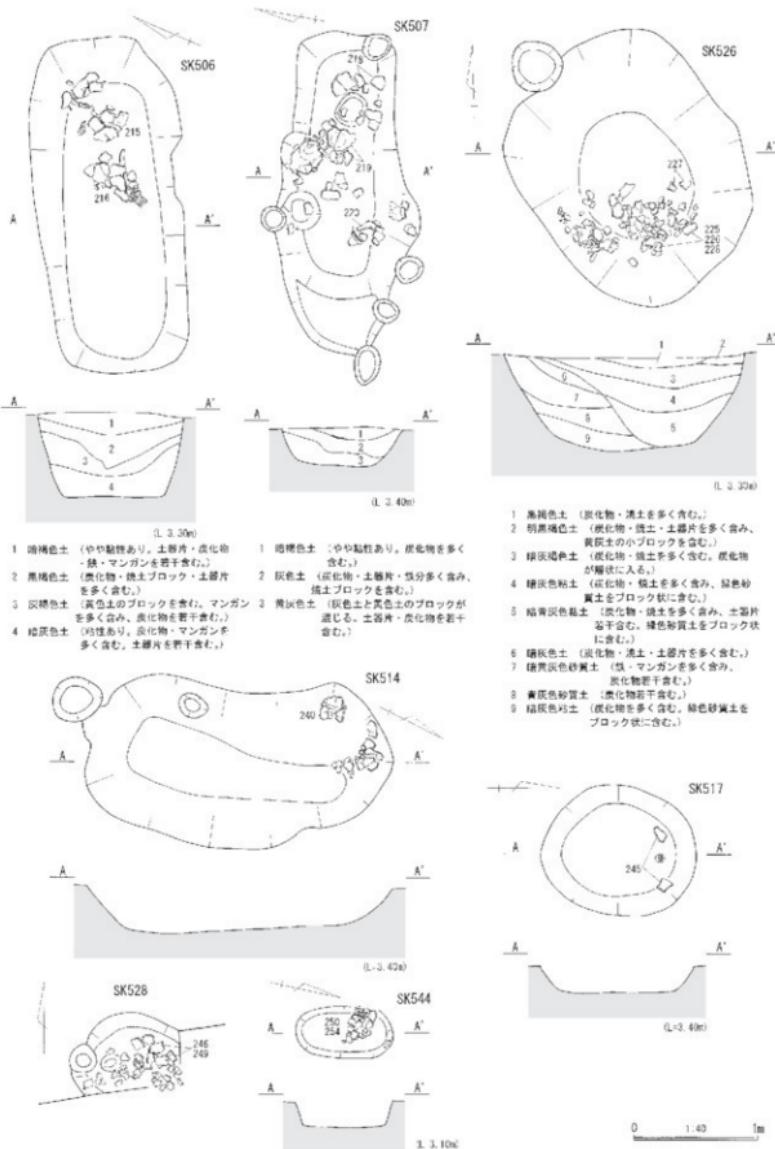


第63図 SK244・314・302・310実測図

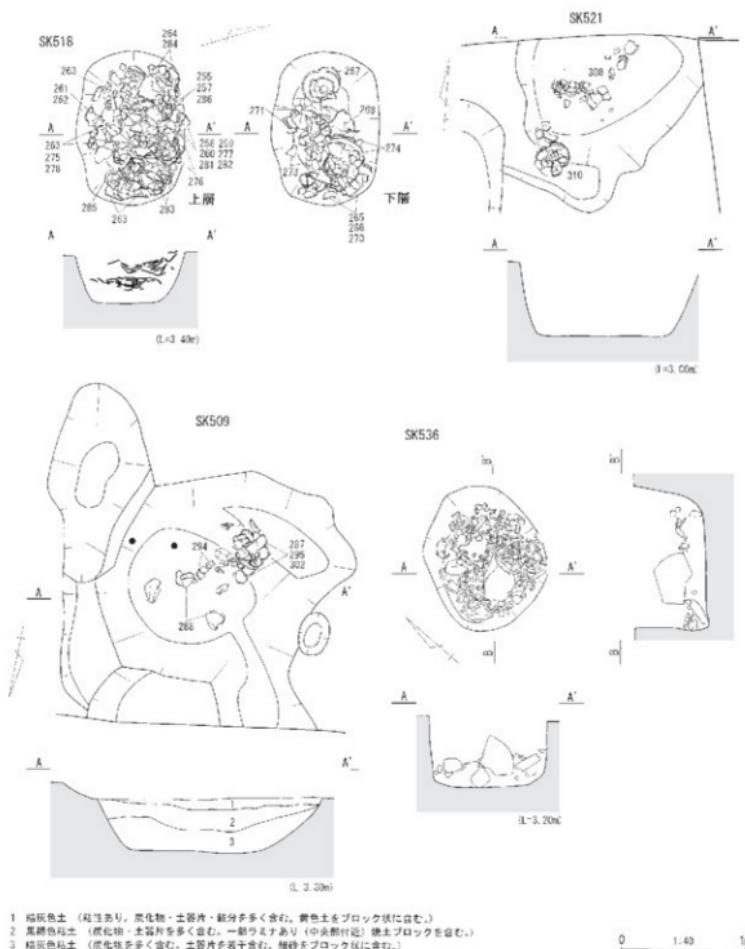
遺構（土坑）



第64図 SK428・419・424・412・434・443・447・456実測図



第65図 SK506・507・526・514・528・544・517実測図



第66図 SK518・521・509・536実測図

SK528（第65図） 調査区の外に出ている部分があるため、平面形は不明である。壺と甕（第160図－246～249、253）が出土している。中期後半と思われる。

SK544（第65図） 長楕円形の土坑である。壺と甕（第160図－250～252、254）が出土している。中期後半であろう。

SK517（第65図） 円形の土坑で、壺と甕（第160図－242～245）が出土している。中期後半であろう。

SK518（第66図） 楕円形の土坑である。土坑内に土器が集積しており、一括性の高い資料である。遺物の出土状況から上層と下層に分離できる。遺物は壺と甕（第161図－165図）で構成され、壺が7割、甕が3割である。壺、甕ともに黄褐色系を呈する。壺は単純口縁が大半を占め、広口壺が多く認められる。甕には台付甕が含まれている。

SK521（第66図） 不整形な楕円形を呈する。壺と甕（第167図－304～310）が出土した。310は口縁部が短く外反する平底の甕である。中期後半であろう。

SK509（第66図） 複数の土坑に切られているため、平面形は不明である。壺（第166図－287～292）、台付鉢（第166図－293、294）、台付甕（第166図－295）、有孔磨製石鑿（第166図－303）等が出土した。

SK536（第66図） 楕円形を呈する土坑である。土器や石器は出土しなかったが、土坑内に礫が充填されていた。

3 環濠

5本の環濠を検出した。ほとんどの環濠が北西側から南東側へ弧を描いて延伸する。住居分布域の東側で検出したことから、集落の東縁を区画する環濠であると思われる。遺物の出土状態とその内容、他の遺構との切り合い関係から複数時期に渡ることが明らかである。環濠1は弥生時代中期中葉の古段階に相当し、将監名遺跡で検出した遺構の中でも最古段階の遺構である。環濠1が廃絶した後、環濠2が掘られ、環濠3、4、5が併存する時期へと変遷していく。

環濠1（第67、68図） 5区の西側に位置する。調査区を縱断するように、北西から南東に延びている。4-2区にもこの環濠と繋がる遺構が存在したはずであるが、発掘調査時には検出されなかった。確認できた環濠の規模は、長さ13.6mで、幅2.5m、深さ0.9mである。環濠の断面はV字になっている。遺物は、壺や甕（第169図～第170図－1～54）が出土しており、特に北端でまとまって出土した（第68図-a）。土器以外では、敲石（第170図-55）が1点出土している。底面に近い層で丸子式、瓜郷式古段階の壺、甕の一部が出土したことから、弥生時代中期中葉の古段階に位置付けられる。

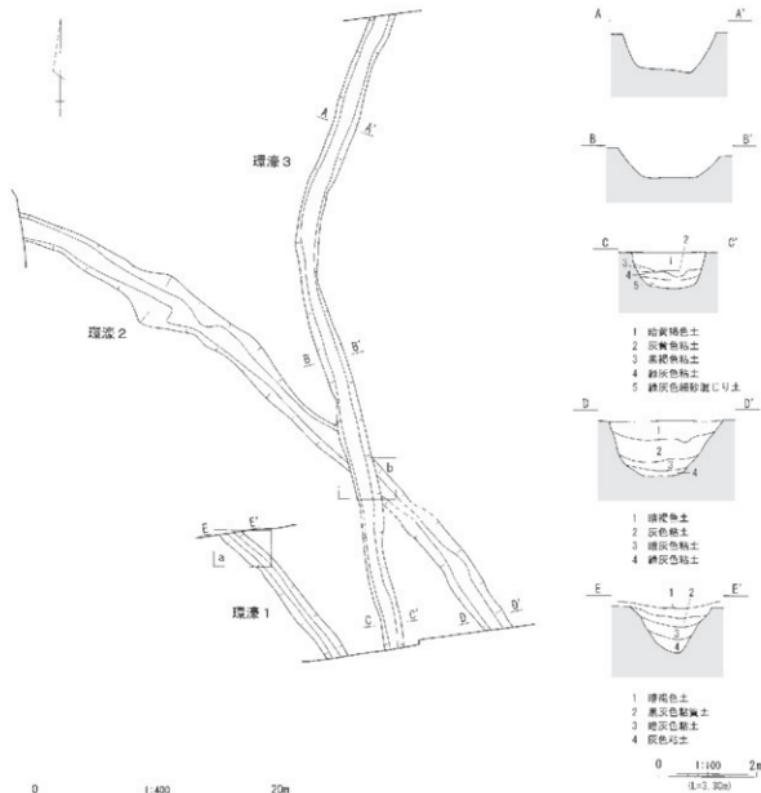
環濠2（第67、68図） 4-2区の西から5区の南にかけて調査区を斜めに横断して検出された。北西から南東へ弧を描くように延伸し、環濠1とほぼ平行している。中央付近を環濠3に切られている。規模は長さ52m、幅2.8m、深さ1.1mで、環濠1よりやや幅の広い環濠である。断面は底面が平坦で、壁が急に立ち上がる角張ったU字型を呈している。遺物は底面付近で、壺や甕（第171図、第172図）が出土している。中期中葉の後半の遺物が主体のため、環濠1より構築時期が新しいであろう。

環濠3（第67図） 4-2区から5区を縦断している。4-2区から南西方向に延びており、4-2区の中央付近で南方向に折れるように方向が変化している。長さ54m、幅2m、深さ0.8mの規模であり、断面は、底面平坦で、壁面が緩やかに立ち上がる逆台形になっている。環濠2を切っていることから、環濠3の方が新しい。遺物は、環濠2と3が切り合っている部分（第68図-b）で集中して出土した。遺物には壺や甕（第173図～第176図-150）、磨製石斧（第176図-151～153）が含まれる。出土した土器は、中期中葉から後半にかけてのものが中心で、環濠の存続期間はやや長かったと見られる。

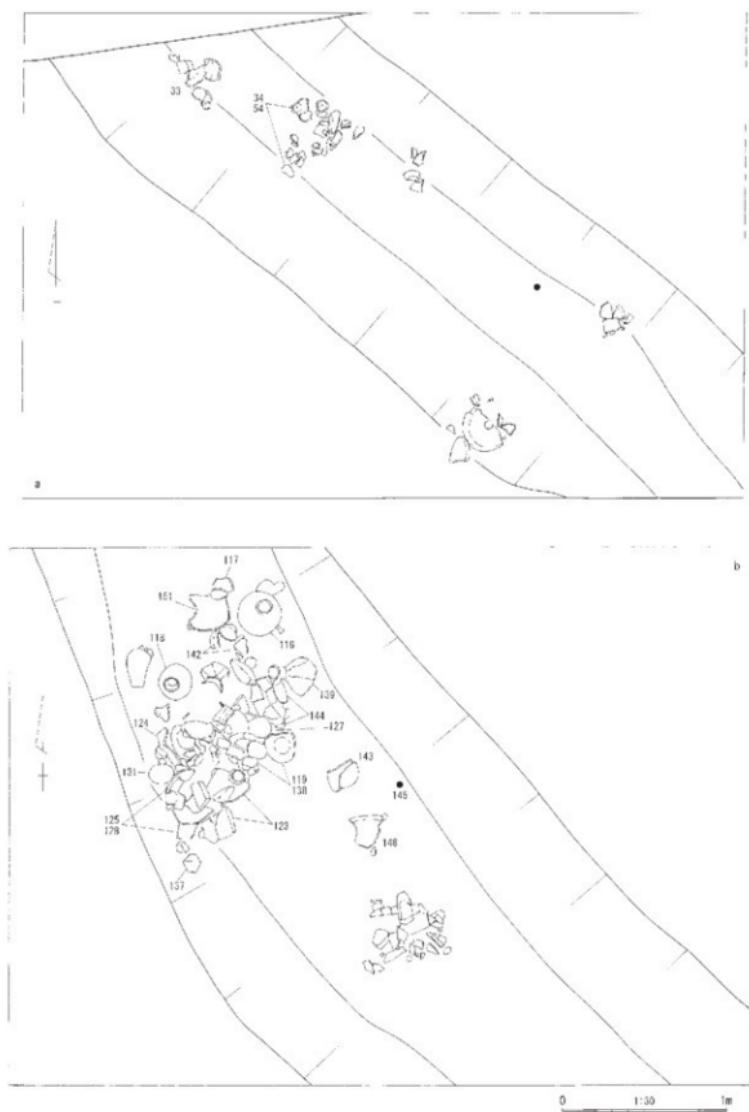
環濠4（第69～71図） 2区、4-1区、5区を縦断して検出された。北西方向から南方向へ緩やかな

弧を描いている。北端は流路に切られ、南端は搅乱を受けている。規模は長さ45m、幅3.2m、深さ1.1mである。環濠の北部分と中央付近（第69図-a、b、c、d、第70図、第71図）では、土器（第177図～第180図-191）、紡錘車（第180図-192）、敲石（第180図-193）がまとまって出土した。遺構の中央付近（第70図-d）では、土器が上層と下層に分かれて出土した。土器には嶺田式、尾張貝田町式、瓜郷式の土器が出土している。弥生時代中期中葉から中期後半の土器が主体であり、環濠3とほぼ同じ存続期間であったと思われる。

環濠5（第72～75図） 調査区の北側を、北西から南東にかけて横断して検出された。遺構の北側を流路に切られている。規模は全長75m、幅2.6m、深さ1.5mである。環濠の底面は平坦で、側面は緩やかに立ち上がる。環濠の東部分（72図-a、c、第73図）では、土器が特に集中して出土し、北西部分（72図-b、72図-c、第74図、第75図）でも土器がまとまって出土した。土器は、壺と甕、高杯（第181図～189図-299）から構成されている。土器以外では、敲石、砥石などの石器（第189図-304～311）が出土し、台盤状土製品（第189図-300～303）も出土した。出土土器から弥生時代中期中葉から中期後半に位

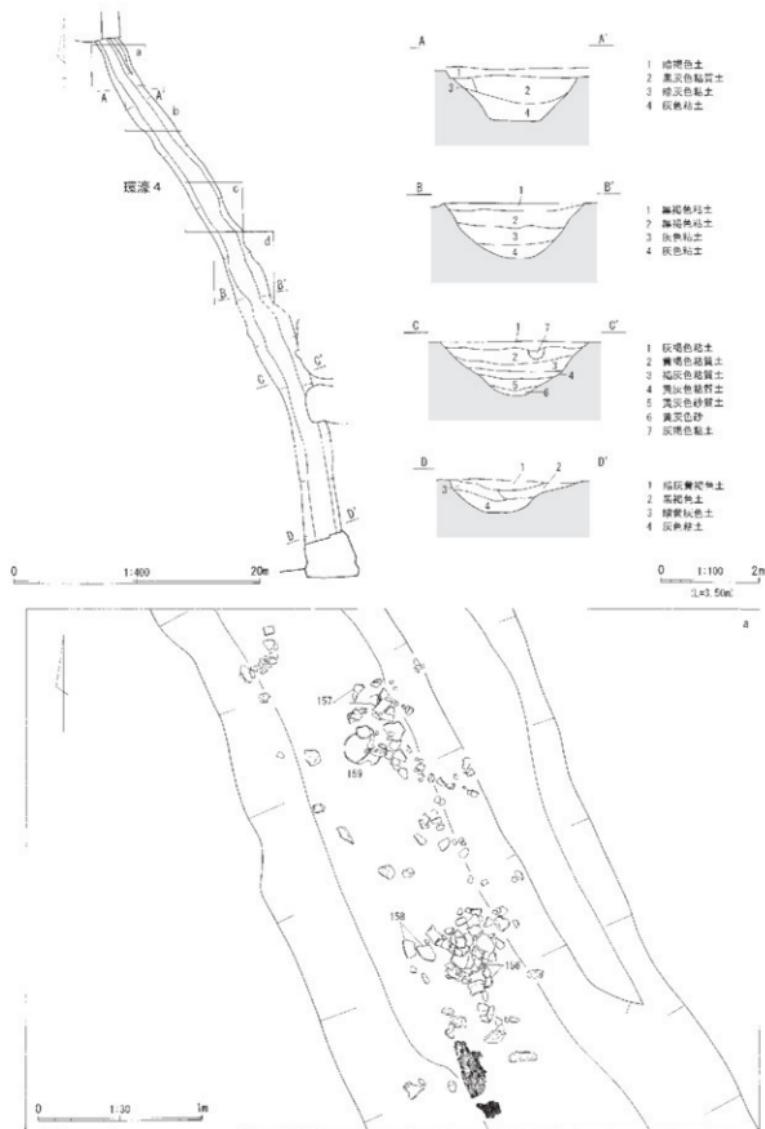


第67図 環濠1・2・3実測図

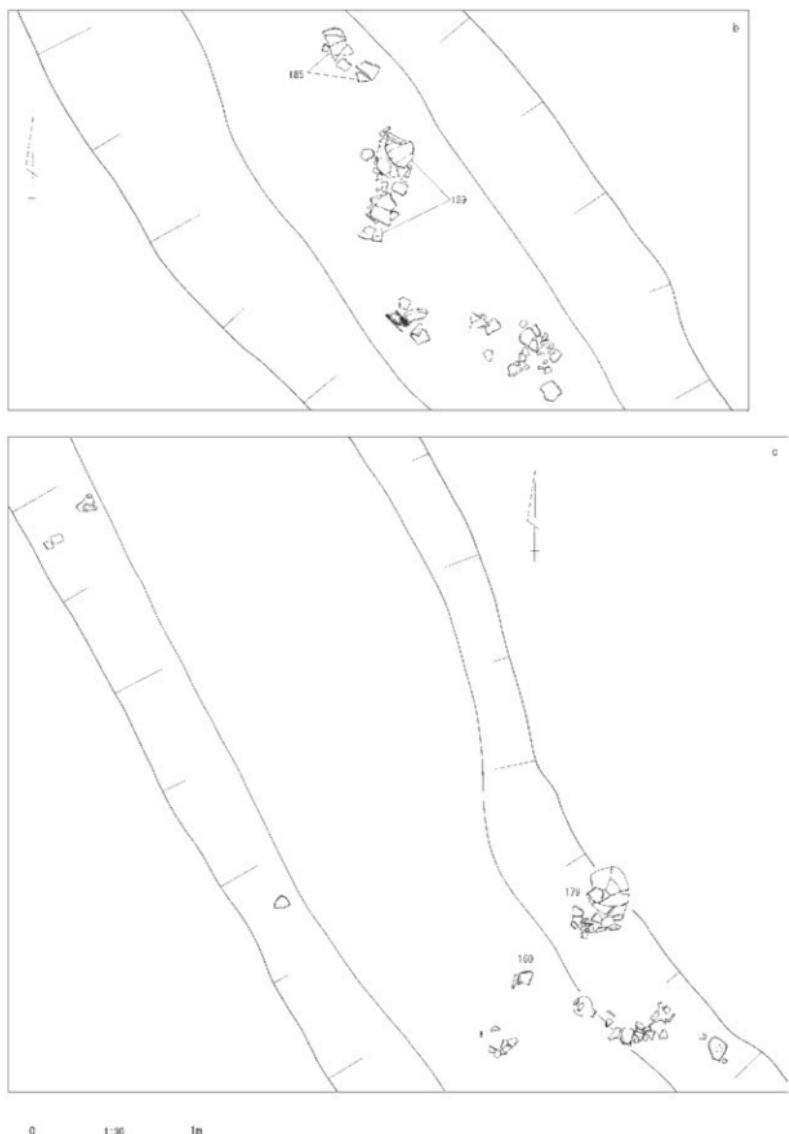


第68図 環濠1・2遺物出土状況図

遺構（環濠）



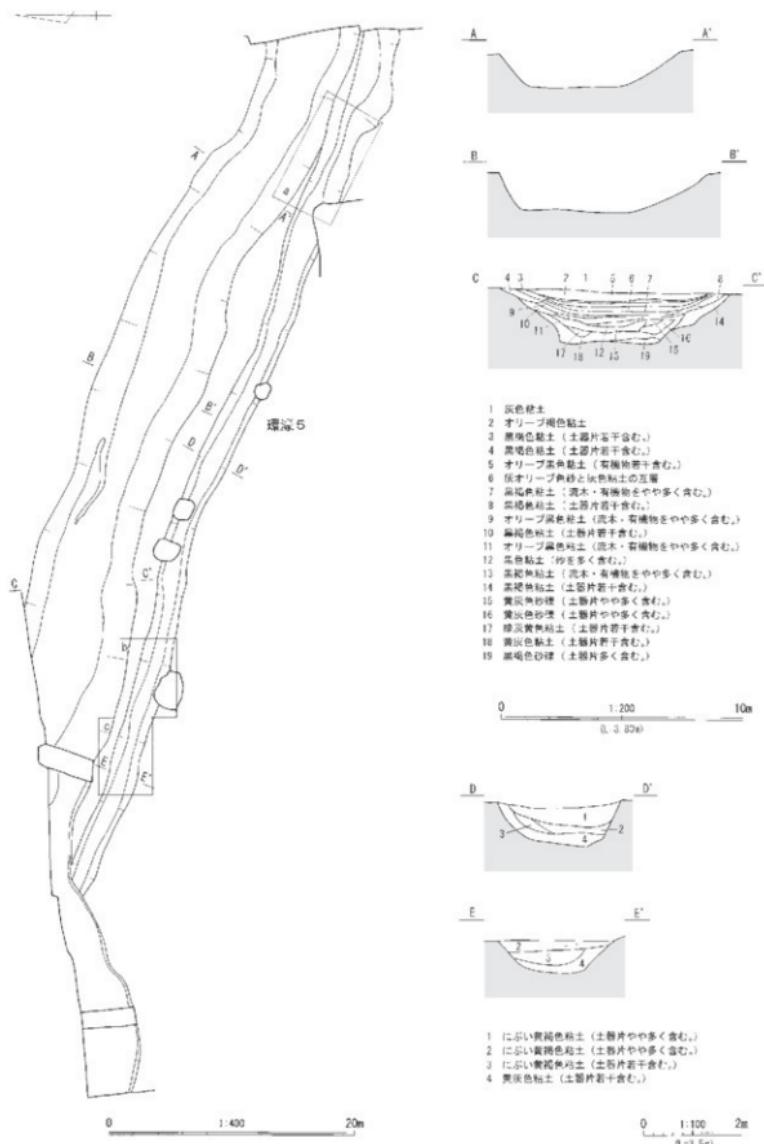
第69図 環濠4実測図、遺物出土状況図a



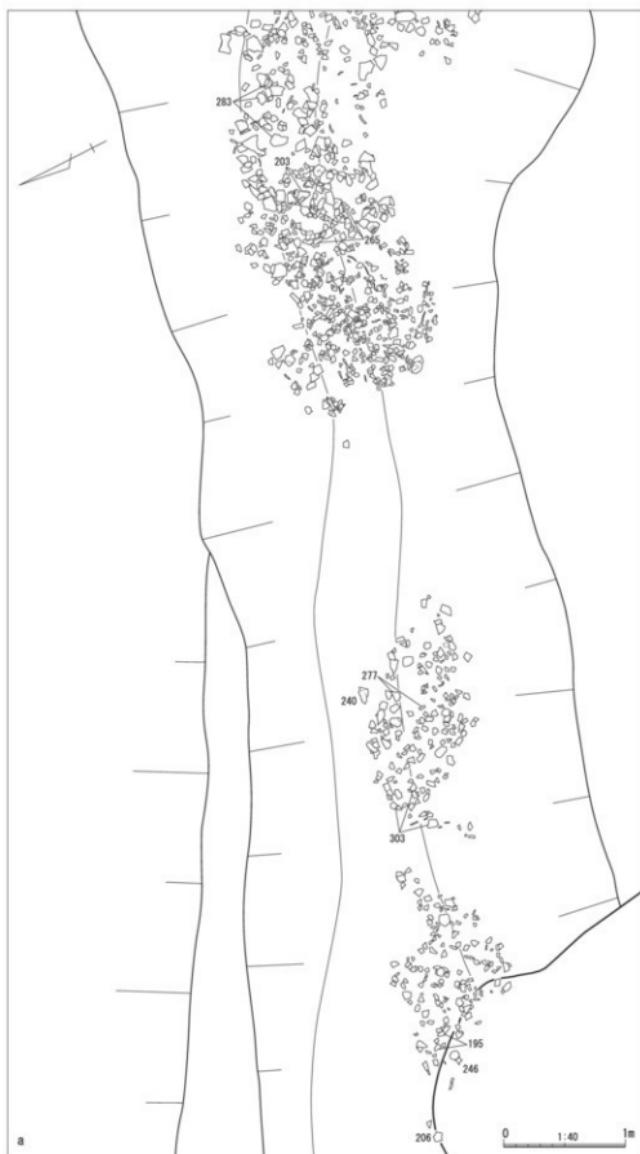
第70図 環濠4遺物出土状況図b・c



第71図 環濠4遺物出土状況図d



第72図 環濠5実測図



第73図 環濠5遺物出土状況図a



第74図 環濠5遺物出土状況図b



第75図 環濠5遺物出土状況図c

置付けられ、瓜郷式、嶺田式、貝田町式など各地の土器が出土していることから、環濠3、4とほぼ同時期と思われる。

4 方形周溝墓

方形周溝墓として確実なものは25基検出し、可能性のあるものを含めると39基検出した。分布から、調査区の中央付近を中心とする一群と、調査区の北東側を中心とする一群といった二つの墓域に分けられる。両墓域では構築時期が異なり、出土遺物から方形周溝墓は、弥生時代中期後半～中期末に位置付けられるものと、後期前半に位置付けられるものの2つの時期に大きく分けられる。周溝の形状で分類すると、周溝が切れ目なく方台部を全周するもの、方台部の四辺で周溝が途切れるもの、途切れた部分を細い溝で繋ぐものに分類される。SZ02、09、21、22は方台部の四辺に周溝を掘り、各周溝を細い溝で繋ぐか、あるいは陸橋を持つもので、出土遺物は中期後半頃の土器が出土している。上記以外の方形周溝墓は、周溝が方台部を全周するもので、出土遺物は弥生時代中期末から後期前半に位置付けられる。このことから、中期後半頃には四辺に陸橋を持っていた方形周溝墓が、後期前半には周溝が方台部を全周する形態へと変化したことが窺える。

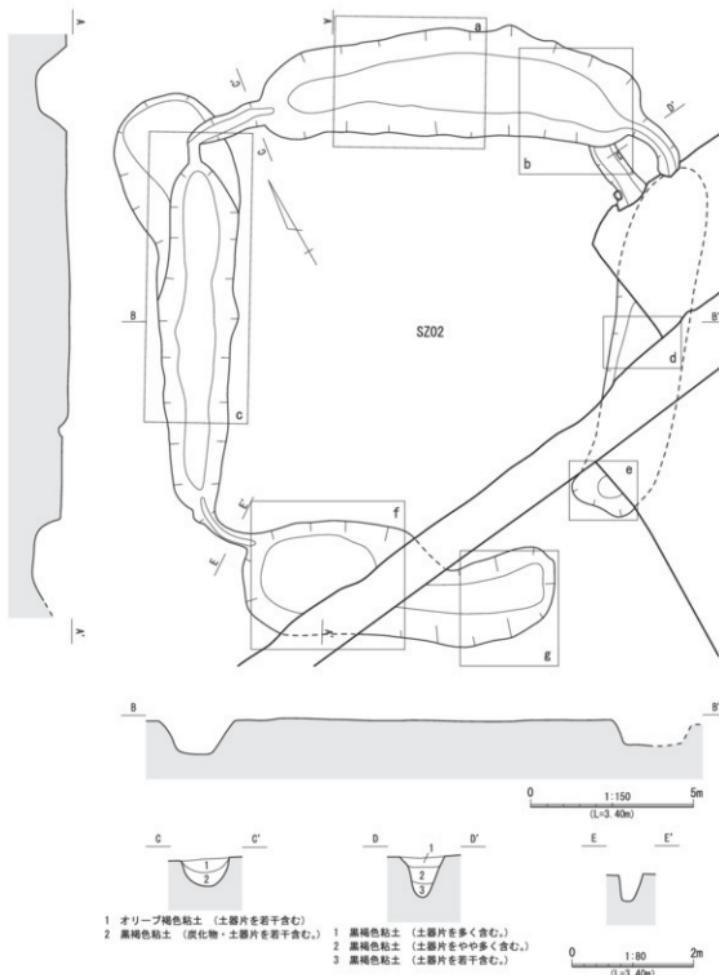
SZ02（第76～79図） 規模は、周溝を含めて長軸19m、短軸16mで、検出した方形周溝墓の中では大型である。周溝の規模は、最大長16m、最大幅3.3mである。周溝は幅0.8mの細い溝で繋がれているが、南側隅だけは、周溝を繋ぐ細い溝が確認できなかったため、ここだけ陸橋が存在した可能性がある。周溝の深さは1mで一定しており、周溝を繋ぐ細い溝も深さが一定している。主体部は検出されず、方台部では遺物も出土しなかった。遺物（第190図-3～第194図-69）は周溝内で出土しており、特に北側の周溝底面と上層から多数の土器が出土した。北側周溝の中央付近（77図-a）では、底に近い部分で壺（第192図-26）、甕（第192図-33、40）が出土した。北側周溝の東隅（77図-b）でも遺物が集中して出土しており、壺（第191図-5、7、第192図-23）、甕（第193図-42）が出土した。西側周溝（78図-c）でも壺（第190図-4、9、11、第191図-22、第192図-25、27、29）、甕（第192図-35）、高坏（第192図-32）が出土した。東側周溝は、大部分が調査区外に出ており、中央付近と南隅の一部だけが検出できた。東側周溝の中央付近（78図-d）では、壺（第191図-17、19、21）、甕（第193図-38、41）が出土した。38の甕は倒立した状態で出土した。東側周溝の南隅（78図-e）では、甕（第193図-

第4表 方形周溝墓一覧表

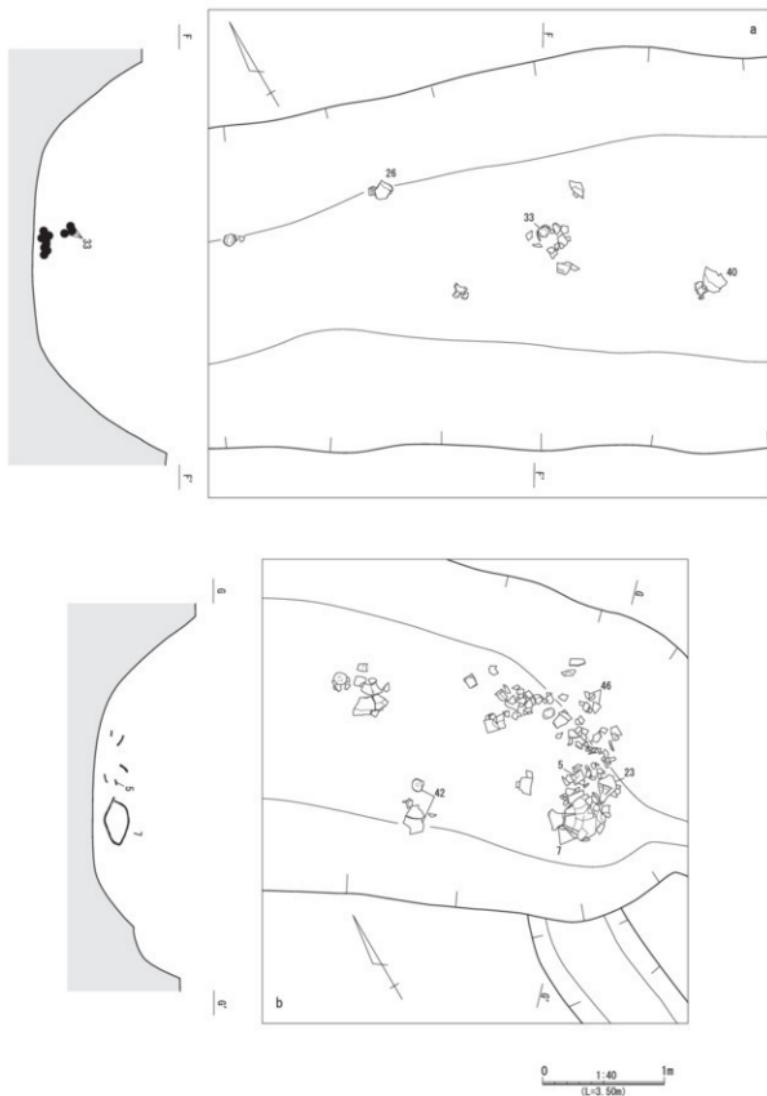
	長軸	短軸	主 体 部	周溝の形態	時 期	備 考
SZ01	—	—	検出されず	方台部の四辺に掘る	後期前半	
SZ02	19m	16m	検出されず	方台部の四辺に掘る	中期後半	
SZ03	—	—	検出されず	方台部を全周する	後期前半	鳥形土器が出土
SZ04	—	—	方台の土坑	方台部を全周する	後期前半	
SZ05	—	—	検出されず	方台部を全周する	後期前半	
SZ06	—	—	方台の土坑	方台部を全周する	後期前半	
SZ07	—	—	方台の土坑2基	方台部を全周する	後期前半	
SZ08	—	—	検出されず	方台部の四辺に掘る	後期前半	
SZ09	—	—	検出されず	方台部の四辺に掘る	後期前半	
SZ10	—	—	検出されず	方台部の四辺に掘る	後期前半	
SZ11	16.3m	14.2m	検出されず	方台部を全周する	後期前半	
SZ12	10m	10m	検出されず	方台部を全周する	中期末	周溝内に土器箱を検出
SZ13	10m	10m	検出されず	方台部を全周する	後期前半	
SZ14	10m	10m	方台の土坑	方台部を全周する	中期末	
SZ15	14.8m	12.6m	土槽附1基	方台部を全周する	後期前半	
SZ16	12m	—	方台の土坑2基	方台部を全周する	後期前半	ガラス小玉と管石が出土
SZ17	—	—	検出されず	方台部を全周する	後期前半	ガラス小玉が出土
SZ18	—	—	土槽附3基	方台部を全周する	後期前半	
SZ19	—	—	方台の土坑	方台部を全周する	中期後半	周溝内に土器箱を検出
SZ20	—	—	検出されず	方台部の四辺に掘る	後期前半	
SZ21	11m	11m	方台の土坑	方台部の四辺に掘る	後期前半	
SZ22	11m	9.7m	検出されず	方台部の四辺に掘る	中期後半	
SZ23	8.5m	7.5m	検出されず	方台部を全周する	後期前半	
SZ24	—	—	土槽附	—	後期前半	
SZ25	—	—	検出されず	—	後期前半	

遺構（方形周溝墓）

37) などが集中して出土した。南側周溝では、西隅（79図-f）で壺（第190図-12、第191図-16、第192図-28）、壺（第192図-34）、敲石（第194図-60）が出土し、東隅（79図-g）では、壺（第190図-10、第191図-14、18、20）が出土した。

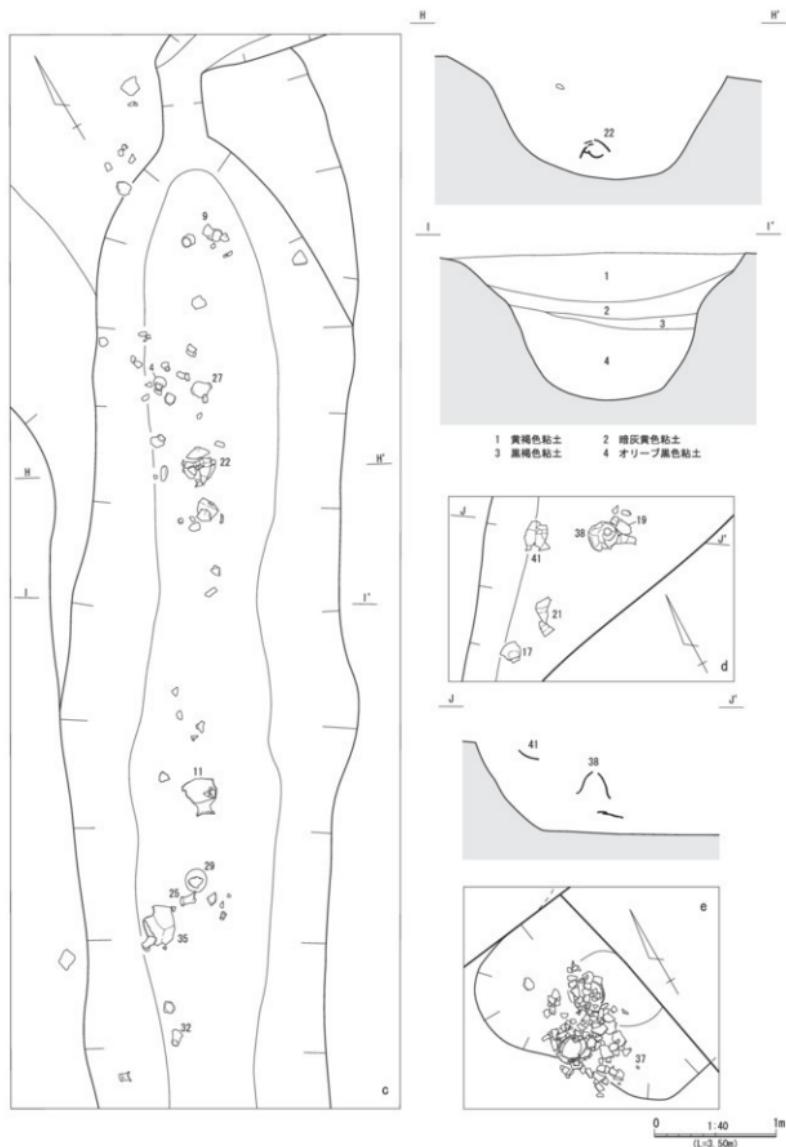


第76図 SZ02実測図

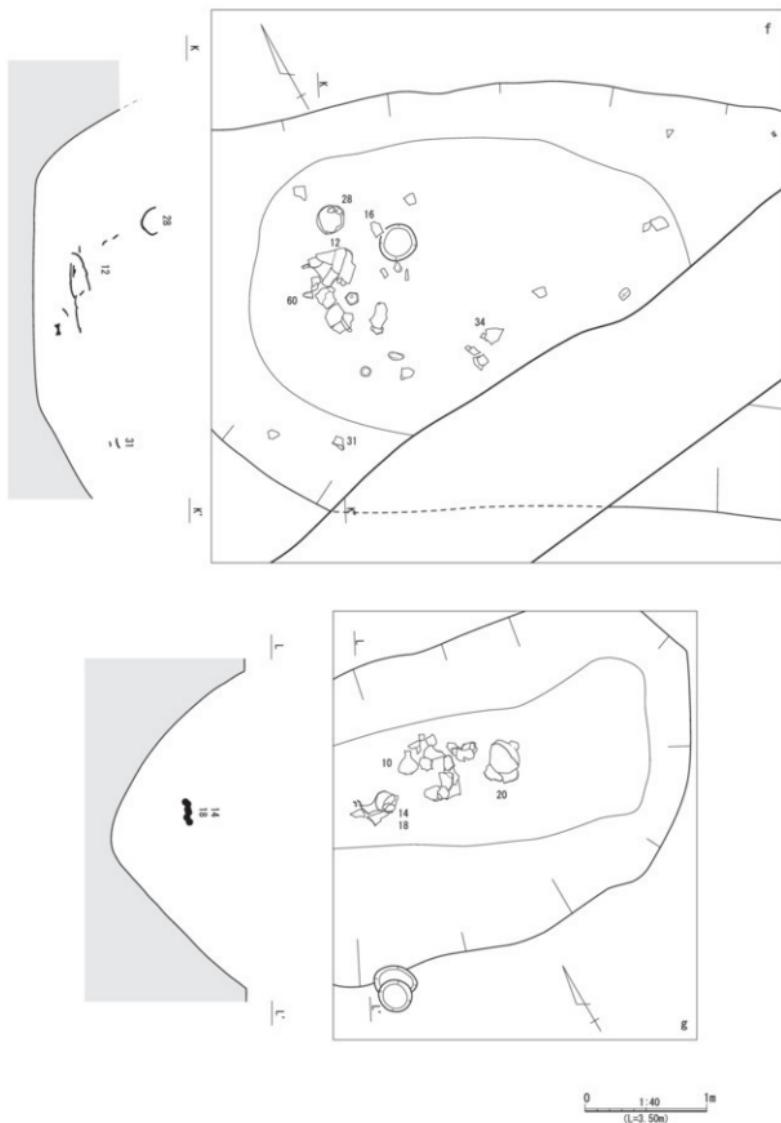


第77図 SZ02遺物出土状況図a・b

遺構（方形周溝墓）

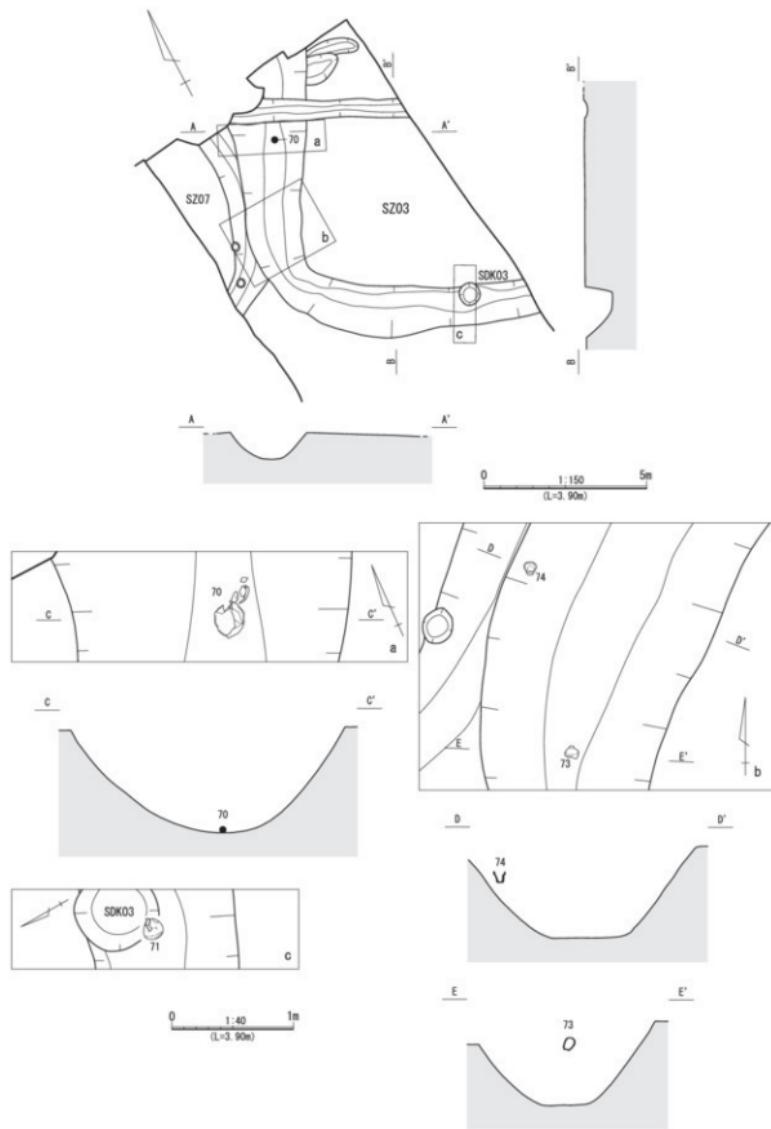


第78図 SZ02遺物出土状況図c・d・e

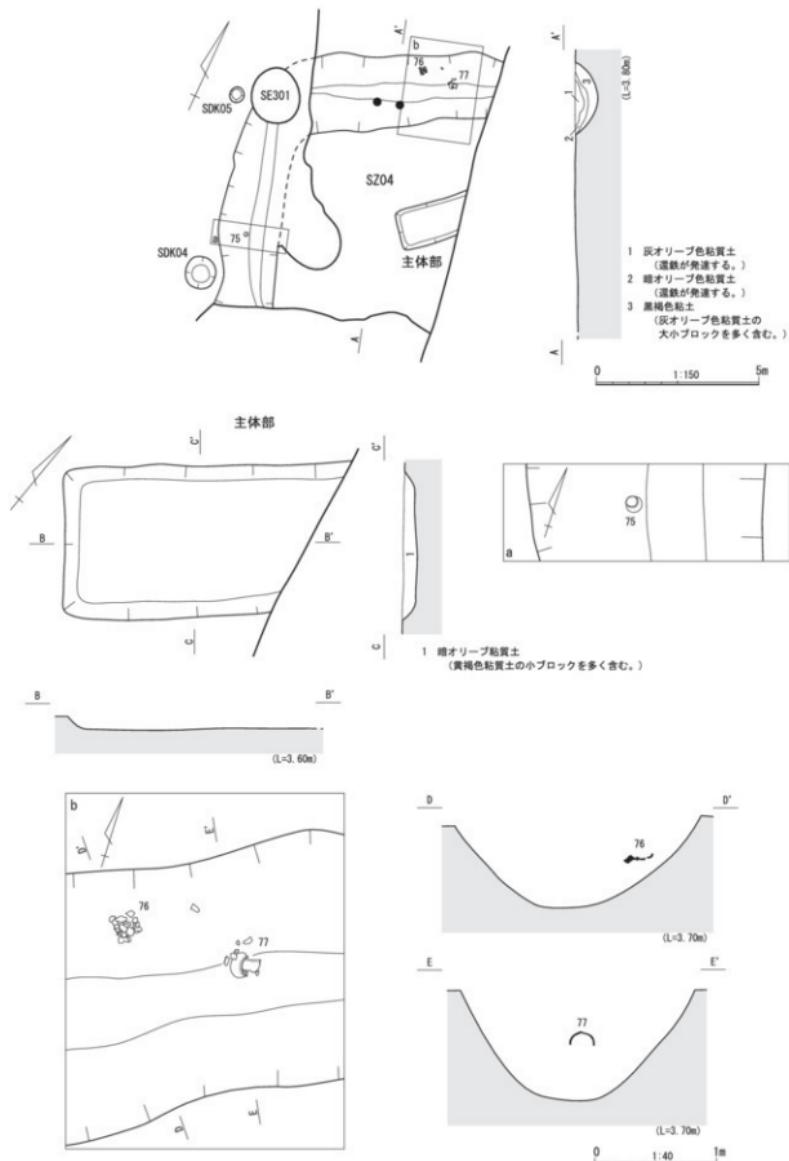


第79図 SZ02遺物出土状況図f・g

遺構（方形周溝墓）

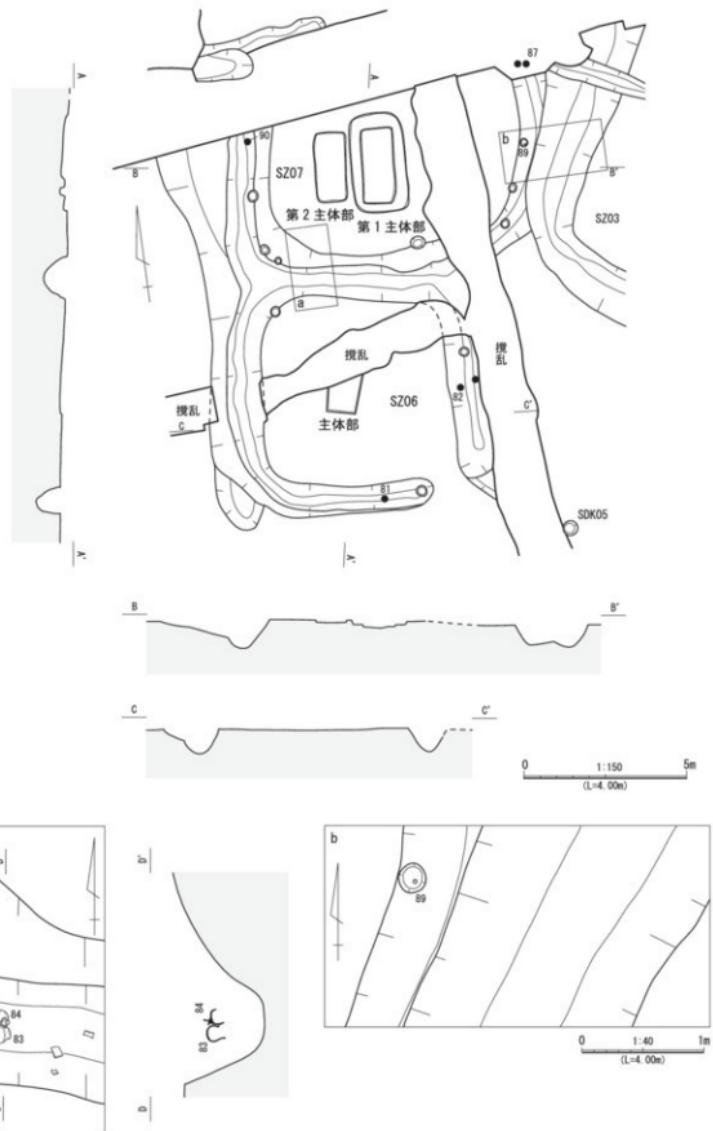


第80図 SZ03実測図、遺物出土状況図a・b・c



第81図 SZ04実測図、遺物出土状況図a・b

遺構（方形周溝墓）

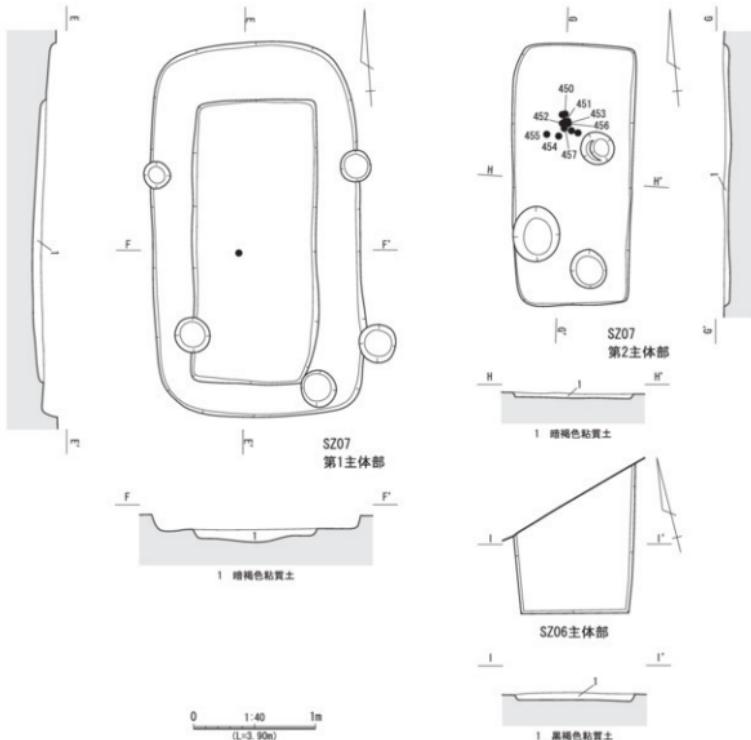


第82図 SZ06・07実測図、遺物出土状況図a・b

周溝内で出土した土器は、方台部での供獻用に使用された壺や甕などが、周溝内に落ち込んだものと思われる。時期は弥生時代中期後半頃に位置付けられる。

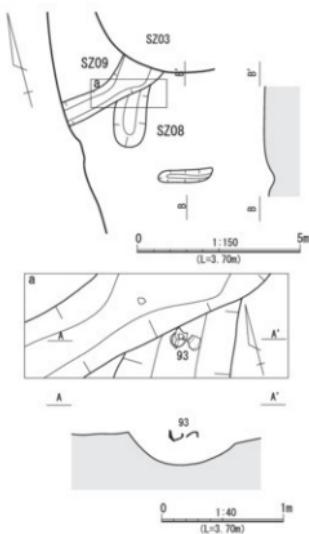
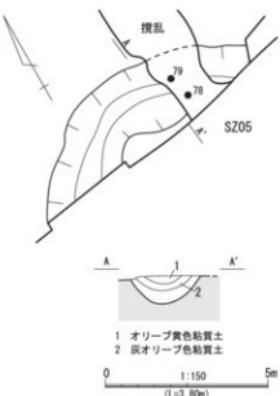
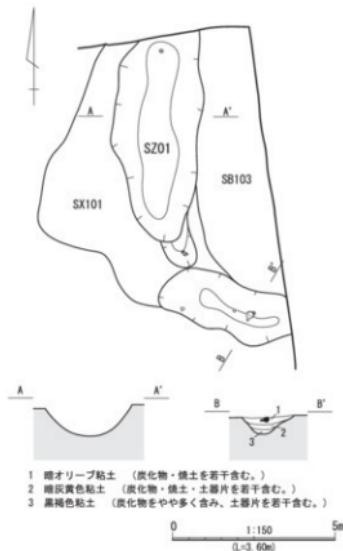
SZ03（第80図） 道構の東側が調査区外に出ており、検出できたのは半分程度のため、形状や規模は明確ではない。主体部は検出されず、方台部では遺物も出土しなかった。周溝の規模は幅1.5m前後、深さ約0.9mで、周溝が方台部を全周すると思われる。周溝の南東側では土器棺のSDK03が検出されており、SZ03に伴うと考えられる。遺物は周溝内で出土しており、西側周溝の中央付近（80図-a）では、底面で鉢（第195図-70）が出土した。周溝南西隅（79図-b）では、上層で高環の脚部（第195図-74）が出土している。特記できる遺物として鳥型土器（第195図-73）が周溝内に転がり込んだ状態で出土した。南側周溝の東側（79図-c）では胴部に穿孔のある細頸壺（第195図-71）が出土した。出土遺物から弥生時代後期前半頃に位置付けられる。

SZ04（第81図） 方形周溝墓の北東側に当たる部分を検出した。方台部の中央付近で主体部を検出したが、遺物は出土しなかった。周溝の規模は幅2.5m、深さ0.7mで、周溝が方台部を全周している。道構の北東側では土器棺SDK05が検出されており、SZ04に伴う可能性がある。遺物（第195-75～77）は周溝内から出土している。周溝の北側（第81図-a）では、ワイングラス形の高環（第195図-76）と甕



第83図 SZ06・07主体部実測図、遺物出土状況図

遺構（方形周溝墓）



第84図 SZ01・05・08・09実測図、遺物出土状況図a

(第195図-77)が出土しており、周溝の西側(第81図-b)では鉢(第195図-75)が出土した。出土遺物から弥生時代後期前半に位置付けられる。

SZ07(第82、83図) 遺構の北側が調査区外に出ていたため、規模は明らかでない。周溝の規模は最大幅1.4m、深さ0.9mで、方台部を全周している。東側はSZ03に切られており、南側はSZ06に切られている。方台部の中央で、主体部を2基検出した。第1主体部(第83図左)は2段掘りになっている。上段の全長は3.1m、幅1.7mあり、下段の全長は2.4m、幅1mである。主体部内からは骨製品1点の他に、ガラス小玉が多数出土している。第2主体部は1段掘りで、全長2.15m、幅1mである。主体部からガラス小玉が出土しており、第1主体部と第2主体部で合計366点のガラス小玉(第196図-94~459)が出土した。土器は、壺、甕、高环(第195図-87~90)が出土しており、東西の周溝で壺(第195図-87)、高环(第195図-90)、胴部に穿孔のある壺(第195図-88)が出土している。出土遺物から弥生時代後期前半に位置付けられる。

SZ06(第82、83図) SZ07の南側周溝を切っているため、SZ07よりも新しいことになる。方台部中央付近で主体部を1基検出した。北側に擾乱が入っているため、全長は不明であるが、平面形は長方形に近いと思われる。遺物は出土しなかった。周溝の規模は幅1m、

深さ0.7mで、周溝の南東隅だけが切れていることから、ここに陸橋が存在した可能性がある。遺物（第195図-81～86）は周溝内で出土しており、北側周溝の東（82図-a）で高环（第195図-84、85）、鉢（第195図-83）がまとまって出土した。

SZ01（第84図） 西側と南側の周溝の一部を検出した。周溝の全長は不明だが、西側周溝が幅約2.5m、深さ1mあり、南側周溝が幅約1.5m、深さ0.5mである。周溝は方台部を全周せずに、四辺に陸橋のある形態だったと思われる。遺物は、周溝から壺（第190図-1、2）が出土した。

SZ05（第84図） 周溝の一部のみが検出されただけであるため、全体の形状は不明だが、規模は幅2m、深さ0.8mで、周溝が方台部を全周する形態であったと思われる。遺物は、周溝から高环の脚部（第195図-78、79）が出土した。

SZ08・09（第84図） SZ09は南側周溝の一部、SZ08は西側周溝と南側周溝の一部を検出した。SZ03・04・06・07に切られているため、規模、形状の把握は難しい。構築順はSZ09が先である。遺物は、西側周溝（第84図-a）で、上層から小型壺（第195図-93）が出土した。

SZ11（第85、86図） 全体の規模は長軸16.3m、短軸14.2mで、周溝の規模は幅3.5m～3m、深さ1mで方台部を全周している。主体部は検出されなかった。遺物は周溝内から出土しており、北側周溝（85図-a）では、下層と上層で壺、甕、高环（第197図～第201-505）が出土した。特に北側周溝の西隅では遺物が集中して出土した。西側周溝の北側（86図-b）では底面で高环（第199図-479、480）が出土しており、西側周溝の中央付近（86図-c）では高环（第199図-482）と甕（第201図-502、503）が出土した。南側周溝の西隅（86図-d）では罐（第198図-472、473）、高环（第199図-481）、片口鉢（第200図-497）、甕（第201図-501）が出土し、東側周溝（86図-e）では壺（第197図-464）、甕（第201図-499）が出土した。出土遺物から後期前半頃に位置づけられる。

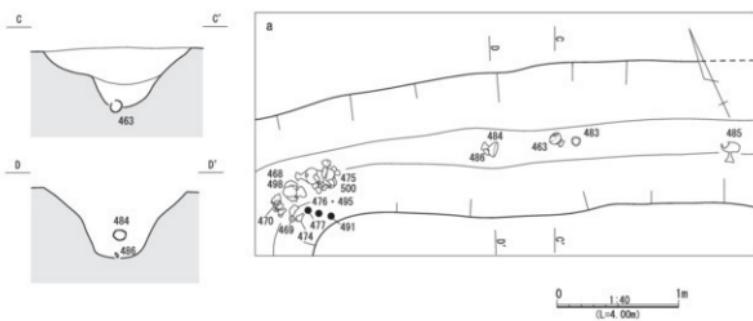
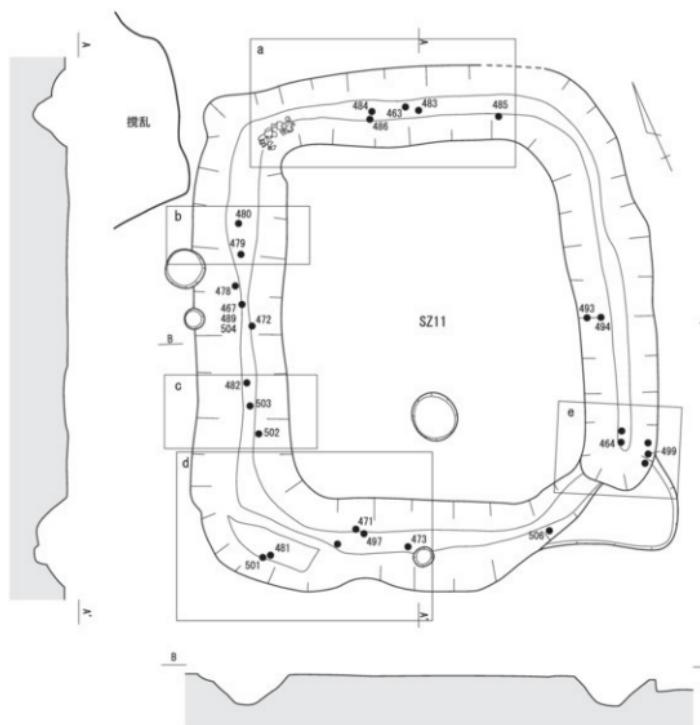
SZ12（第87図） 周溝を含めて約10m四方の規模である。周溝の規模は最大幅1.5m、深さ0.5mで、方台部を全周している。主体部は検出されず、方台部では遺物も出土しなかった。北西側でSZ14と切り合っているが、両者の新旧関係は明確ではない。周溝を共有している可能性もある。遺物は周溝の北隅と南隅で壺・甕、敲石（第202図）が出土しており、出土遺物から弥生時代中期末に位置付けられる。

SZ14（第88図） SZ12の北東に隣接して検出した。周溝を含めて約10m四方の規模である。周溝の規模は幅1.5m、深さ0.7mである。西側周溝と方台部に擾乱が入っている。検出状況から周溝が方台部を全周する形態と思われる。方台部の東側で主体部を検出した。規模は長辺2.5m、短辺1mで、2段掘りになっている。また、主体部で遺物は出土しなかった。周溝内からは第203図に示した遺物が出土しており、凹線文系の壺（第203図-523）が含まれる。南側周溝では有孔磨製石鏟（第203図-532）が出土した。出土遺物の内容から、弥生時代中期末に位置付けられる。

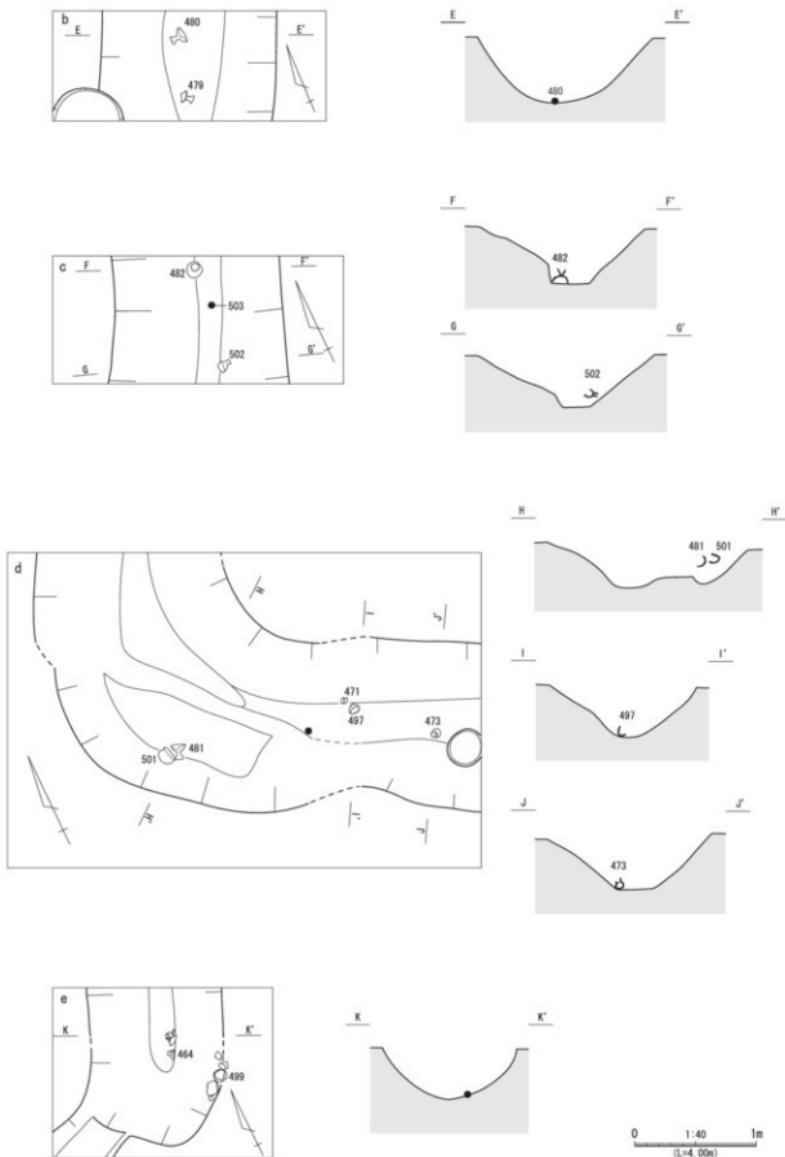
SZ15（第89図） 周溝を含めて長軸が14.8m、短軸が12.6mの規模である。方台部がやや小さく、約7.5m四方である。全体の形状が不定形であり、周溝は幅も深さも一定ではない。周溝の幅は最大で5.5mあり、深さは最も深い所で0.9m、最も浅い所で0.4mである。主体部は検出されなかったが、方台部からガラス小玉（第206図-588～636）と管玉（第206図-587）、壺（第206図-535）が出土した。周溝からは壺や甕（第204図～第206図）が出土しており、西側周溝の北寄り（第90図-a）では大型の壺（第205図-553）が出土している。南側周溝（90図-b）では、壺（第204図-551、552、第205図-556、557、569、570）と石斧未完成品（第206図-585）が出土した。

SZ16（第90図） 調査区外に出ている部分がある上に、西側に擾乱が入っているため、全体の形状は明確ではないが、周溝を含めた規模は、長軸が少なくとも12mあると推測できる。周溝の規模は幅が3m～1.5m、深さ0.7mである。周溝が方台部を全周する形態と思われるが、周溝の南隅だけは切れており、ここに陸橋があった可能性がある。方台部では主体部を2基検出した。第1主体部より第2主体部の方

遺構（方形周溝墓）



第85図 SZ11実測図、遺物出土状況図a

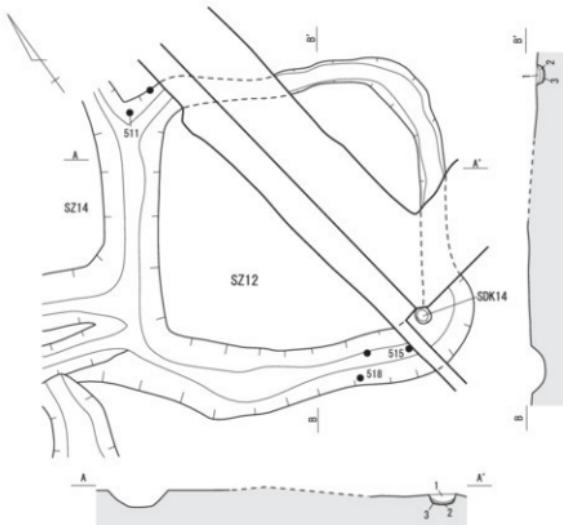


第86図 SZ11実測図、遺物出土状況図b・c・d・e

遺構（方形周溝墓）

が先行する。第2主体部では、第90図-bの範囲でガラス小玉と管玉（第207図-661～676）が出土し、主体部の外側第90図-aでもガラス小玉（第207図-651～660）が出土した。方台の南隅では打製石鎚の未製品（第207図-677）が出土し、周溝からは壺（第207図-640、641）、甕（第207図-647）、高环（第207図-646）が出土した。

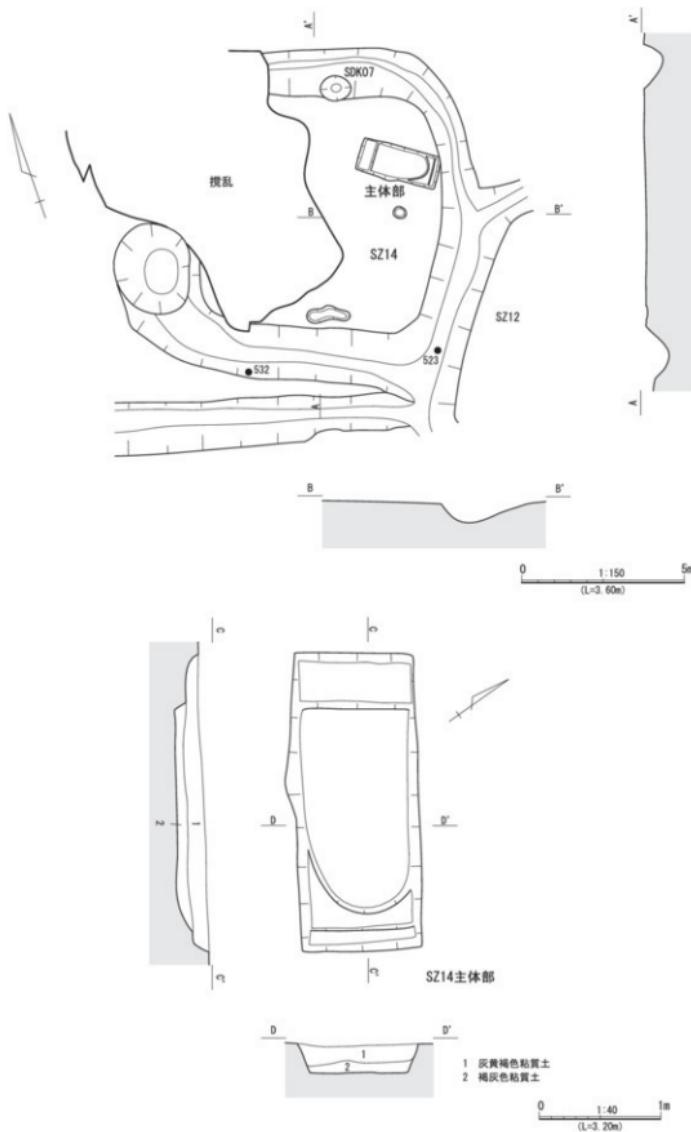
SZ19（第91～94図） 調査区の外に出てる部分と攢乱を受けた部分があるため、規模は不明確だが、方台部は東西方向で最低10mあったと思われる。周溝の規模は長さ8m、幅2.5m、深さ1.4mであり、方台部の四隅に陸橋のある形態である。方台部の中央で主体部を検出した。遺物は周溝内で出土しており、南側周溝（第92図-a）では壺（第208図～第210図）、甕（第211図-702～第212図-714）、高环（第211図-701）が出土した。西側周溝（第92図-b）では大型の壺（第209図-688）が出土した。東側周溝（第93図、94図）では土器が大量に出土した。遺物は上層と下層に分かれて出土しており、上層からは壺（第214図-725～735）、甕（第215図-736～739）、骨製紡錘車（第215図-740）などが出土した。底面付近では壺（第216図～第219図）、甕（第220図-773～第223図-792）、台付鉢（第220図-770）、片口高环（第220図-768）、台盤状土器製品（第223図-795）などが出土した。出土遺物は在地の土器に加え、四線文系の土器や白岩式に類似する土器など、天竜川を挟んで東西の土器が混在して出土した。今回の調査で検出した方形周溝墓の中では、最も多く遺物が出土しており、また残存状況の良好な土器が多いことも特記できる。



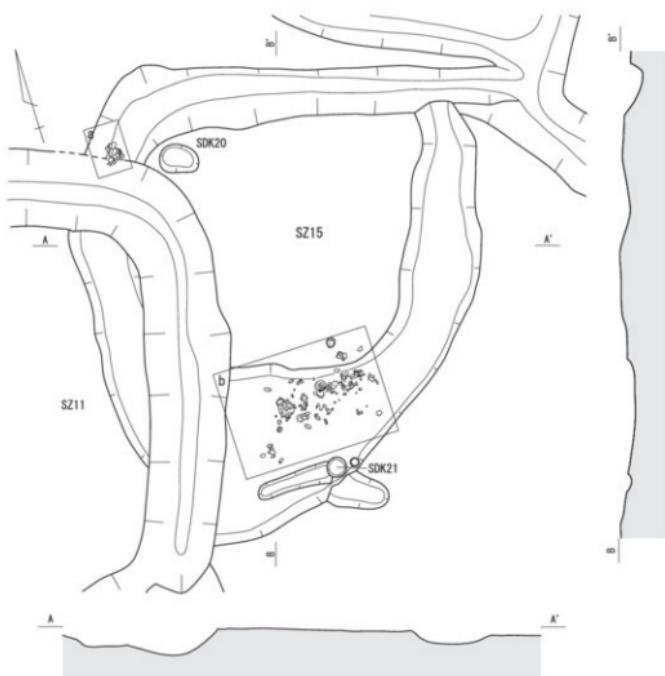
- 1 黄褐色粘土（土器片を若干含む。）
- 2 深オリーブ色砂質粘土（土器片を若干含み、最下部に白色砂を若干含む。）
- 3 赤灰黄色粘土（土器片を若干含む。）



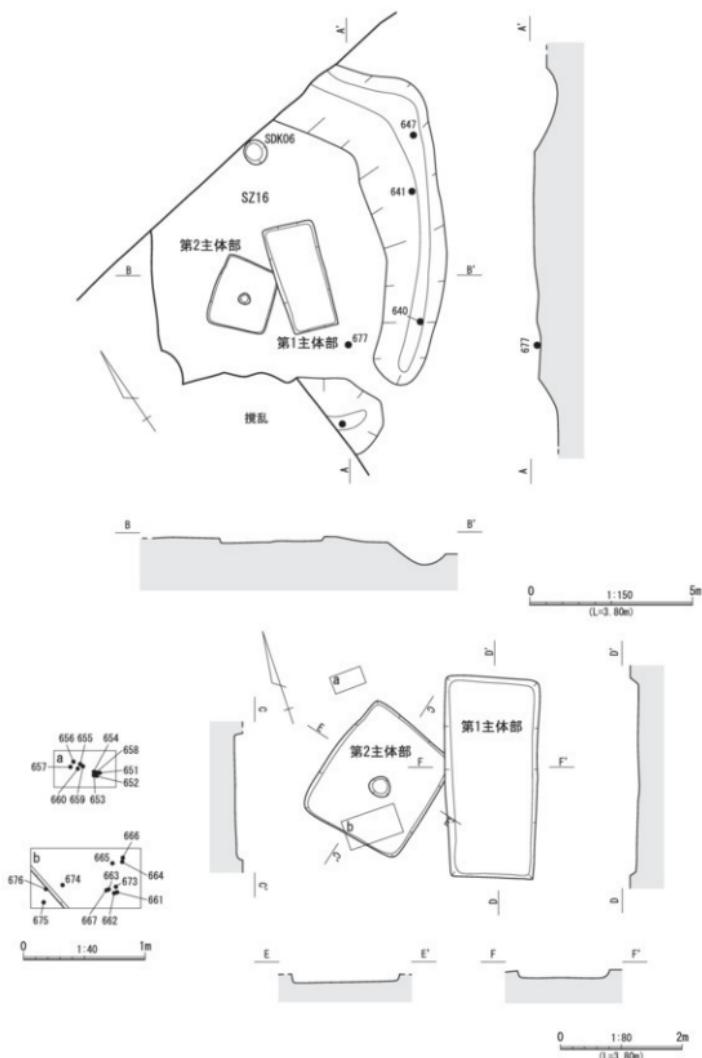
第87図 SZ12実測図



第88図 SZ14実測図、主体部実測図



第89図 SZ15実測図、遺物出土状況図a・b



第90図 SZ16実測図、主体部・遺物出土状況図a・b

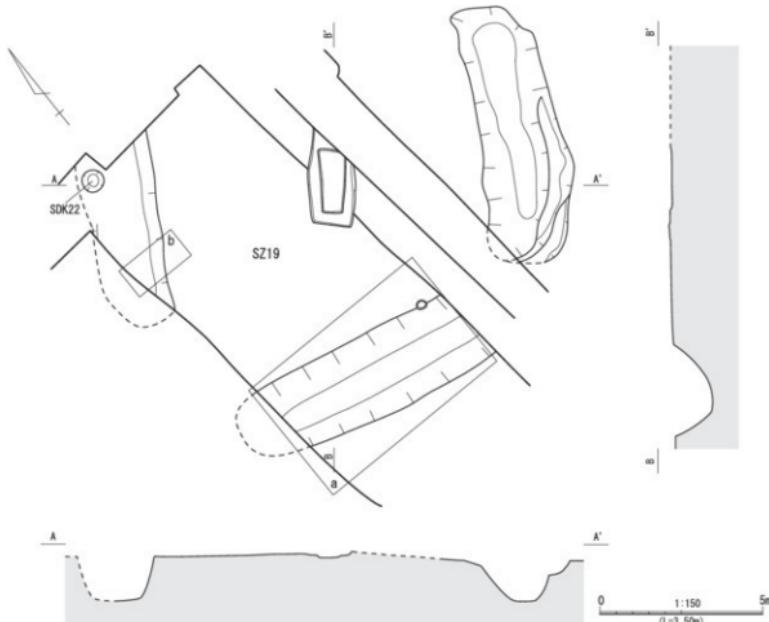
遺構（方形周溝墓）

SZ21（第95図） SZ15の直下で検出した。全体の規模は、周溝を含めて約11m四方である。周溝の規模は長さ約7.2、幅1.3m～1.7m、深さ0.8mである。南東隅では周溝が細い溝でつながっているのに対して、北東隅と南西隅では周溝が切れている。また、方台部の南部分で土坑が検出されており、これが主体部になると思われる。遺物は周溝内から出土しており、西側周溝（第96図-a）で壺（第224図-800、802、807、808、第225図-809、810、812）、高环（第225図-814）、鉢（第225図-816）が出土した。南側周溝（第96図-b）では壺（第224図-801、803、805、806）が出土した。

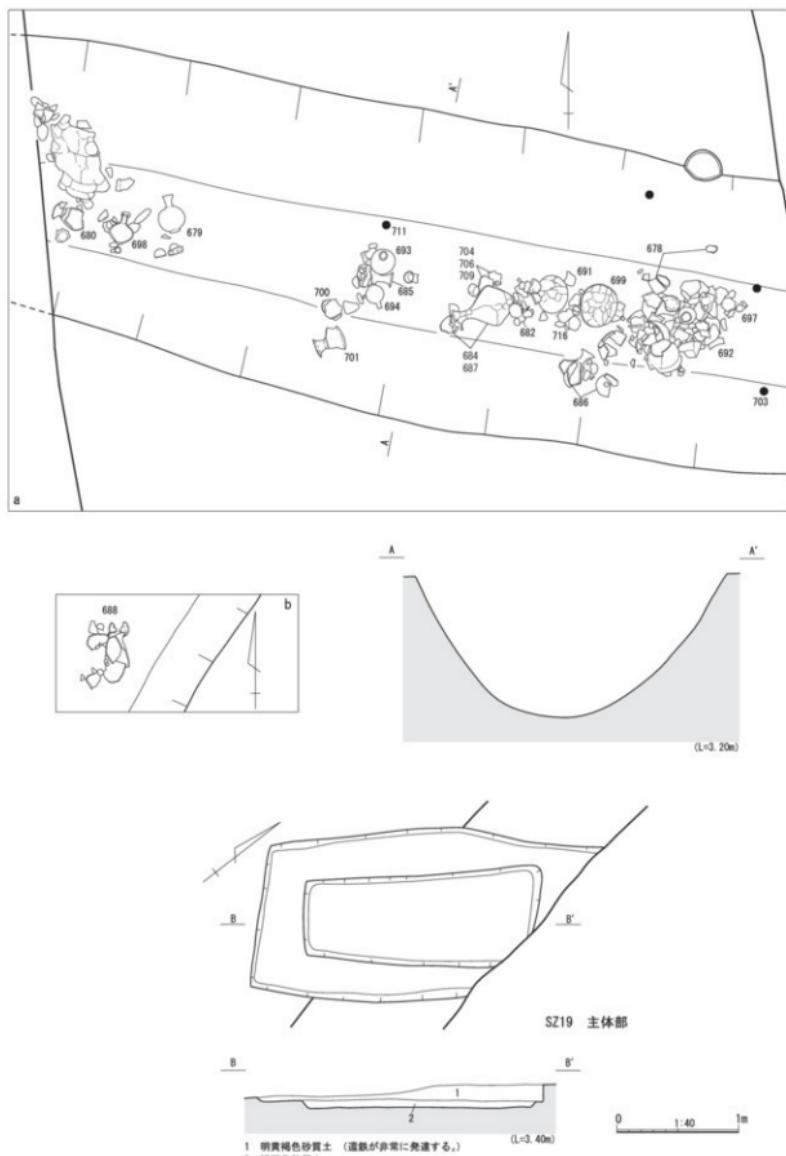
SZ22（第96図） 検出できた範囲が狭いため、規模は判然としないが、少なくとも長軸11m、短軸9.7mはあったと思われる。周溝が切れている部分があることから、四隅に陸橋を持つ形態である。検出した溝の規模は長さ5.5m、幅1.5m、深さ0.5mである。主体部は検出されず、方台では遺物も出土しなかった。遺物は周溝内で出土しており、南側周溝から壺（第225図-831）、甕、高环（第225図-829、830）が出土し、西側周溝からは壺（第225図-818）などが出土した。陸橋の部分では完形の壺（第225図-817）が1点出土した。

SZ23（第96図） 規模は長軸8.5m、短軸7.5mで、方形というよりも梢円形に近い。周溝が方台部を漸周する形態で、周溝の規模は最大幅1.5m、深さ0.5mである。周溝内から壺、甕（第227図）が出土した。

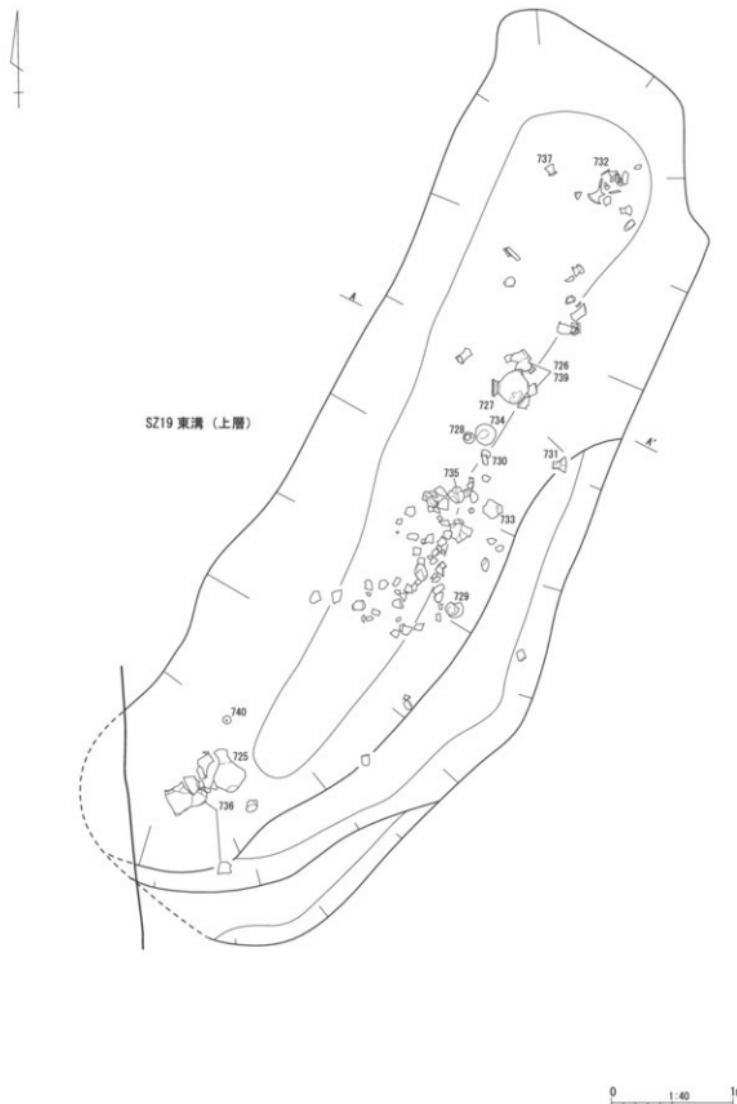
SZ13（第97図） 周溝を含めて約10m四方の規模である。周溝の規模は最大幅2.4m、深さ0.6mで、方台部を全周している。方台部からは主体部は検出されず、遺物も出土しなかった。遺物は周溝から出土しており、西側周溝の北西隅（89図-a）で、壺（第226図-838～840）、甕（第226図-855）、高环（第226図-847）が出土した。また、西側周溝の中央付近（89図-b）では瓢形土製品（第226図-851）と



第91図 SZ19実測図



第92図 SZ19主体部実測図・遺物出土状況図a・b

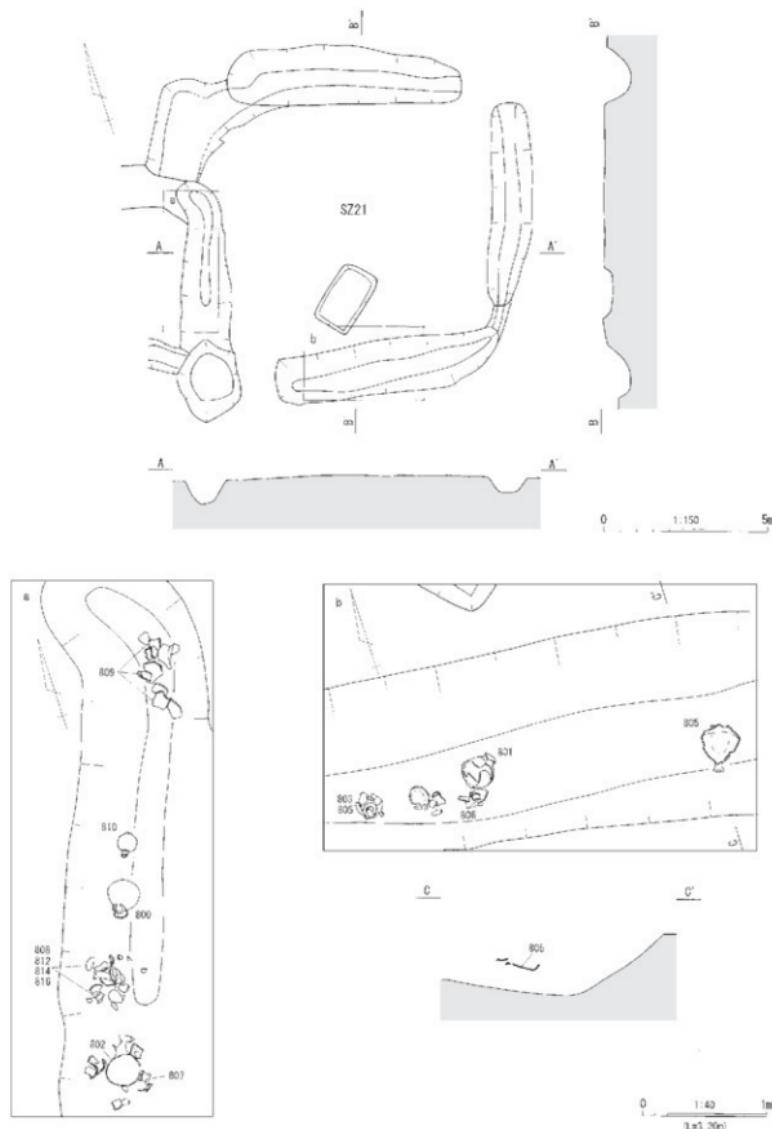


第93図 SZ19東溝遺物出土状況図（上層）

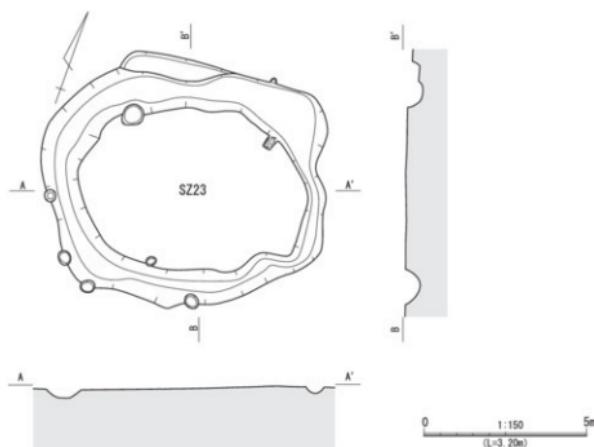
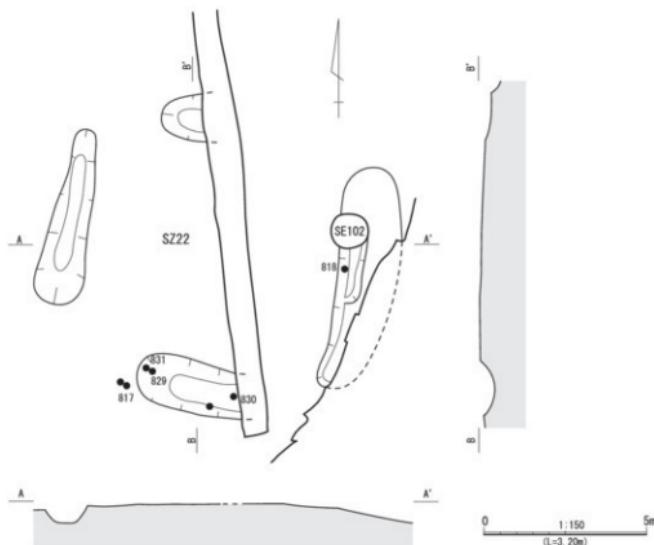


第94図 SZ19東溝遺物出土状況図（下層）

遺構（方形周溝墓）

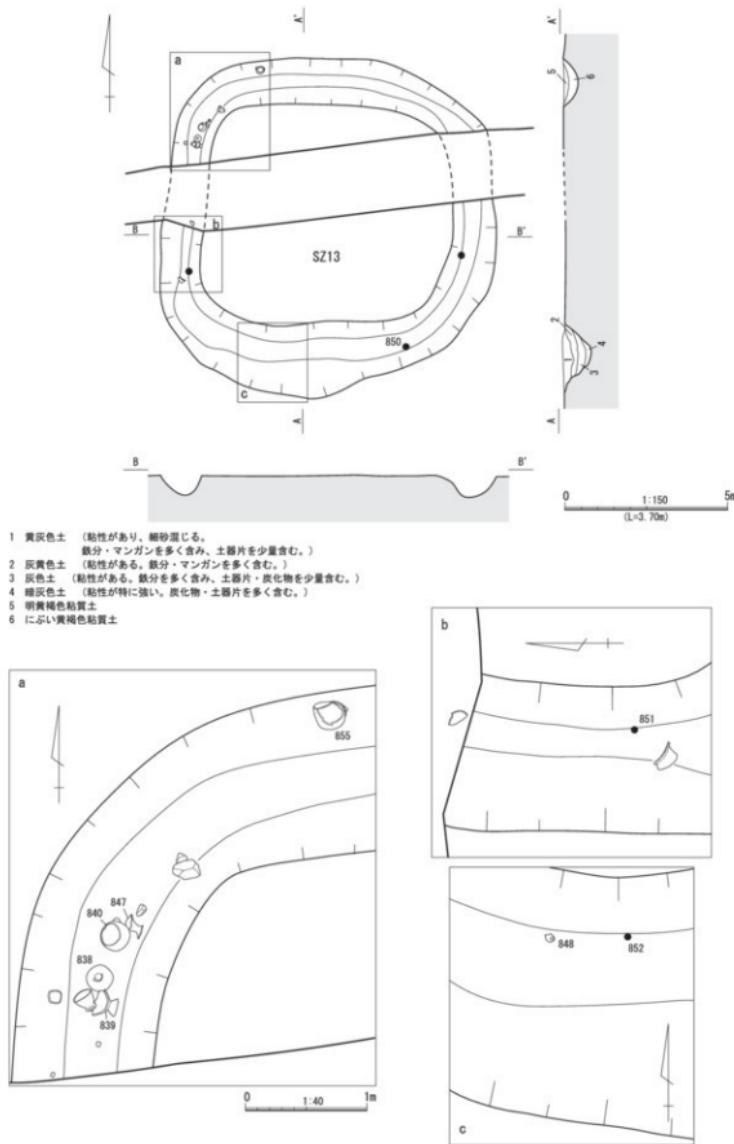


第95図 SZ21実測図、主体部・遺物出土状況図a・b

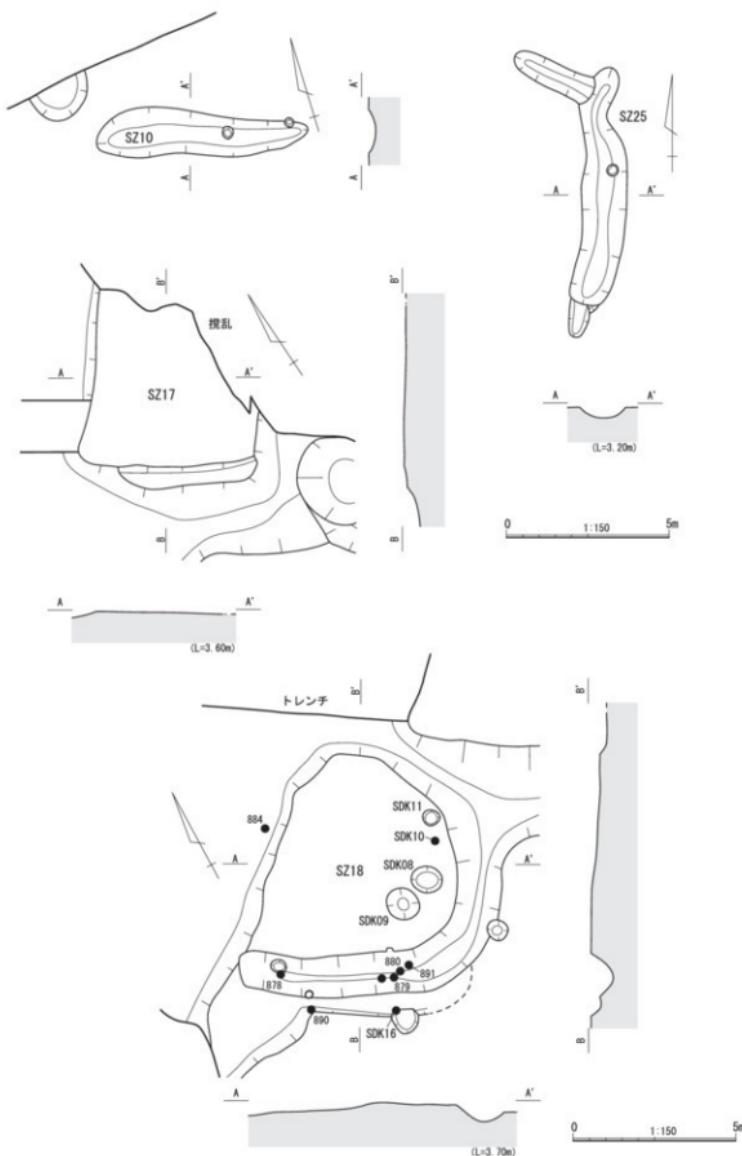


第96図 SZ22・23実測図

遺構（方形周溝墓）

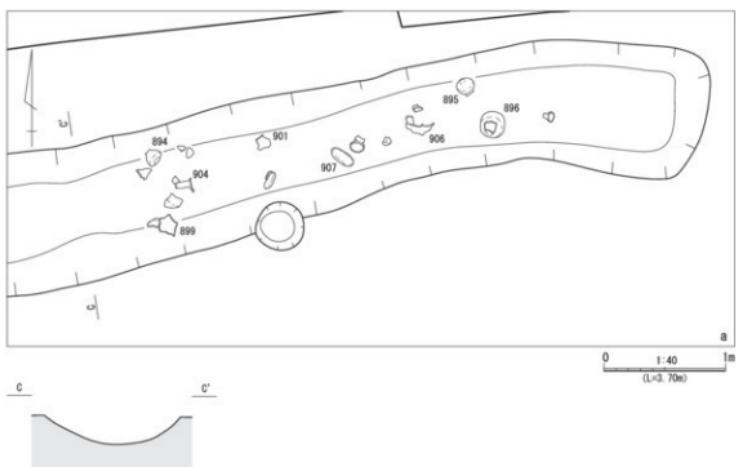
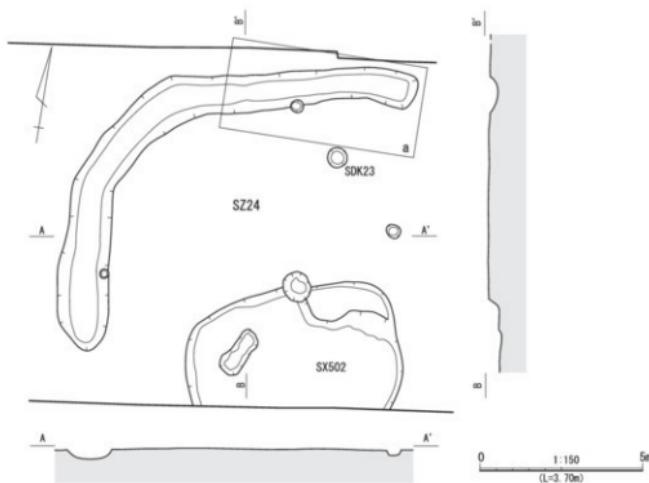


第97図 SZ13実測図、遺物出土状況図a・b・c



第98図 SZ10・17・18・25実測図

遺構（方形周溝墓）



第99図 SZ24実測図・遺物出土状況図

言った特殊な遺物も出土しており、南側周溝（89図-c）ではワイングラス形高杯（第226図-848）、鉢（第226図-852）が出土した。

SZ10（第98図） 南側周溝と西側周溝の一部と見られる溝を検出した。東側周溝と北側周溝が調査区の外に出ているため、全体の規模は不明である。検出できた周溝の規模は、南側周溝で長さ6.5m、幅が1.6m、深さ0.2mである。遺物は周溝内から大型の壺（第228図-870）が1点出土した。

SZ25（第98図） 周溝の一部と見られる溝を検出した。東側の周溝にあたると思われる。溝は長さ8.5m、幅1.5m、深さ0.3mである。溝の中から壺と高杯の一部（第229図-889～892）が出土した。

SZ17（第98図） SZ18とSZ14に切られている上に、東側半分には搅乱が入っているため、形状と規模ははっきりしない。方台部は短軸が5mで、長軸は5m以上あったと推測される。遺物は壺（第229図-871～875）が出土している。

SZ18（第98図） 方形というよりも円形に近い周溝墓である。周溝の規模は幅1.4m、深さ0.7mで、周溝は全周している。方台部は長軸6.2m、短軸5.5mである。方台部では、土器棺を3基（SDK08、SDK09、SDK10）検出した。土器棺は、方台部の南東縁辺部に沿って並んでおり、これら3基の時期は弥生時代後期前半である。同じ並びでSDK11も検出したが、これは中期の土器であることから、SZ18とは関連のない遺構かもしれない。周溝内からは土器（第229図-876～885）が出土しており、弥生時代後期前半に位置付けられる。

SZ24（第99図） 西側周溝と北側周溝と思われる溝を検出した。検出できた範囲が狭いため、形状と規模は不明である。SZ24の方台部にあたる部分でSDK23を検出したが、これが主体部かもしれない。遺物（第230図-893～908）は周溝から出土しており、北側周溝（第99図-a）では高杯（第230図-899、901、904）、壺（第230図-894、895、896）、甕（第230図-906）などが出土した。

5 土器棺墓

今回の調査では土器棺は22基を確認した。うち、中期後半のものが8基、後期前半のものが14基ある。そして、中期後半のものは単独で埋納されるものが多く、後期前半のものは方形周溝墓の方台部が周溝に伴うものが多い。そのため、後期後半のものは方形周溝墓群と同一の分布を示すが、中期後半のものは分布の規則性は見られず、方形周溝墓と土器棺といった墓制による墓域の違いなどは把握できない。土器棺は身に大型の壺を用い、蓋に小型の壺、甕を用いるものが多い。埋置状態は横位埋置13基、縦位埋置が5基である。土器棺内もしくは土器棺に隣接して小型壺、小型甕が出土する場合があり、供獻土器と思われる。

第5表 土器棺墓一覧表

土器棺	埋置状態	施設構成	時期	番号
SDK01	横位埋置	小型壺	身	
SDK02	横位埋置		大型壺	
SDK03	横位埋置		大型壺	
SDK04	横位埋置		大型壺	
SDK05	横位埋置		大型壺	
SDK06	横位埋置		大型壺	
SDK07	横位埋置		大型壺	
SDK08	横位埋置	小型甕	大型壺	
SDK09	横位埋置		大型壺	
SDK10	横位埋置		大型壺	
SDK11	横位埋置		大型壺	
SDK12	横位埋置		大型壺	
SDK13	横位埋置		大型壺	
SDK14	横位埋置		大型壺	
SDK15	横位埋置	小型甕	身	
SDK16	不明		大型壺	
SDK17	横位埋置		大型壺	
SDK18	横位埋置		大型壺	
SDK19	横位埋置		大型壺	
SDK20	横位埋置	大型壺	身	
SDK21	横位埋置		大型壺	
SDK22	横位埋置		身	
SDK23	横位埋置		大型壺	

SDK01（第100図） SB213の上で検出したため、土器棺の掘り方は確認できなかった。土器棺は横位に設置され、身（第232図-3）は、底部が欠損している。（第232図-2）の鉢は土器棺の中から出土した。

SDK02（第100図） 頸部を欠いた壺（第233図-4）が、梢円形の土坑の中心でやや斜位に配置されていた。

SDK03（第101図） 頸部を欠いた壺（第233図-5）が、梢円形の土坑内に横位で設置されていた。

SDK04（第101図） 上半分を欠損した壺（第233図-6）が、梢円形の土坑内に縦位で設置されていた。

SDK05（第101図） 上半分を欠損した壺（第233図-

8）が、楕円形の土坑内に縦位で設置されていた。壺の底部（第233図-7）が身の内部から出土したが、これが蓋になっていたと思われる。

SDK06（第101図） 上半分を欠いた壺（第234図-9、10）が、楕円形の土坑に縦位で設置されていた。

SDK07（第101図） SZ14の北側の周溝に伴って検出した。壺（第234図-11）が、楕円形の土坑内に横位で設置されていた。壺（第234図-12）で壺の口を塞いでいた。また、小型甕（13）も出土しており、これは身の上に置かれていたと推察される。

SDK08（第101図） SZ18の方台部で検出した。SDK08で出土した土器とSZ18で出土した土器の時期が後期前半に位置付けられるため、SDK09はSZ18の主体部に相当すると思われる。壺（第235図-15）が、楕円形の土坑内に横位で設置されていたが、口はやや下を向いていた。小型甕（第235図-14）を蓋に用いていた。壺の中からは、甕か壺の底部（第235図-16）が出土した。

SDK09（第102図） 壺（第236図-18）が、楕円形の土坑に横位で設置されていた。台付甕（第236図-17）を蓋に用いていた。壺の内部からはガラス小玉3点（第236図-19～21）が出土した。SDK08と同じく、SZ18の方台部で検出され、SDK08の東側に並ぶように位置する。出土遺物から後期前半に位置付けられるため、SZ18の主体部に相当すると思われる。

SDK10（第102図） 同じくSZ18の方台部で検出され、壺（第237図-22）が出土したが、掘り方は確認できなかったが、横位だったと考えられる。

SDK11（第102図） 頸部を欠いた壺（第237図-23）が、円形の土坑内に横位で設置されていた。

SDK12（第102図） 口縁部付近を欠いた壺（第237図-24）が、円形の土坑内に横位で設置されていた。蓋は出土していない。

SDK13（第102図） 頸部を欠いた壺（第238図-25）が、円形の土坑内に横位で設置されていた。蓋は出土していない。

SDK14（第102図） 壺（第238図-26）が、円形の土坑内に横位で設置されていた。

SDK15（第103図） 頸部を欠いた壺（第239図-27）が、周溝墓内から出土したもので、縦位で出土した。小型の甕（第239図-28）を蓋に用いていた。

SDK16 掘り方は不明であるが、壺（第239図-29）が円形の土坑内で出土した。身は壺を用い、胸部上半より上は欠失していた。

SDK17（第103図） 胸部上半を欠いた壺（第240図-31）が、楕円形の土坑内に縦位で設置されていた。甕（第240図-30）を蓋に用いていた。

SDK18（第103図） 大型の壺（第241図-32）が、円形の土坑内で横位になって出土した。壺の頸部～口縁部を折り取るようにはずして、小型の壺（第214図-33）で蓋をして、その上に壺の頸部～口縁部を載せてあった。また、蓋の下部には細長い石が据えられており、高さ調整に用いたと思われる。

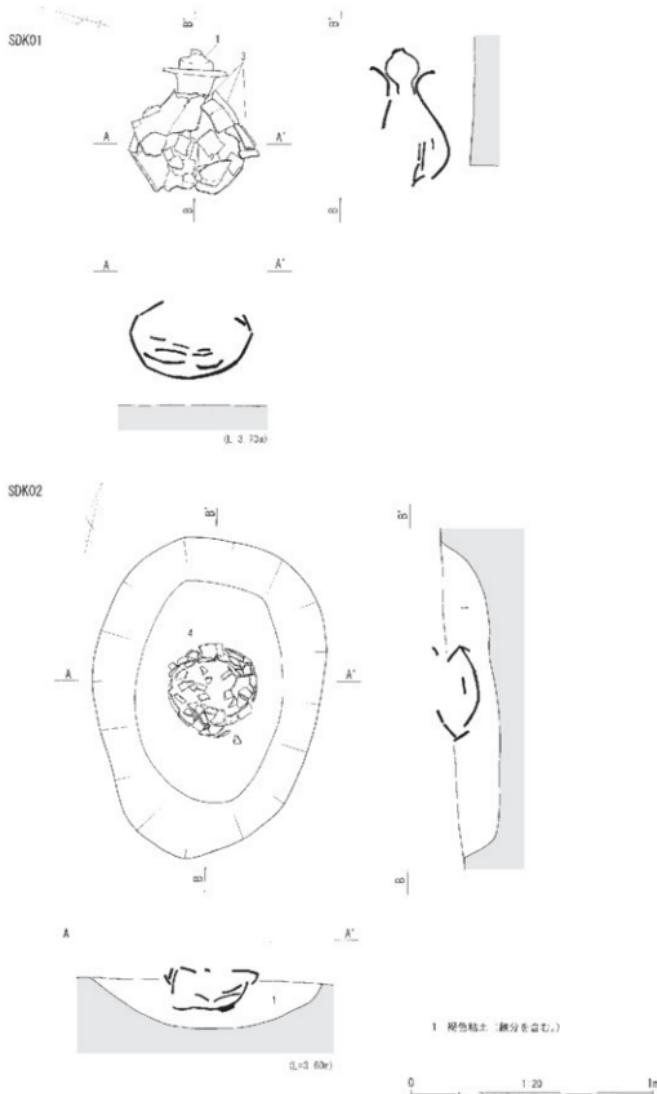
SDK19（第104図） 壺（第241図-34）が、楕円形の土坑内にすえられていた。口縁～頸部が土器集中の中心で出土したことから、縦位で置かれていたと思われる。

SDK20（第104図） 頸部から上を欠いた壺（第242図-35）が、円形の土坑内に斜めに置かれていた。そして、壺の下半部（第242図-36）を蓋にしてかぶせてあった。

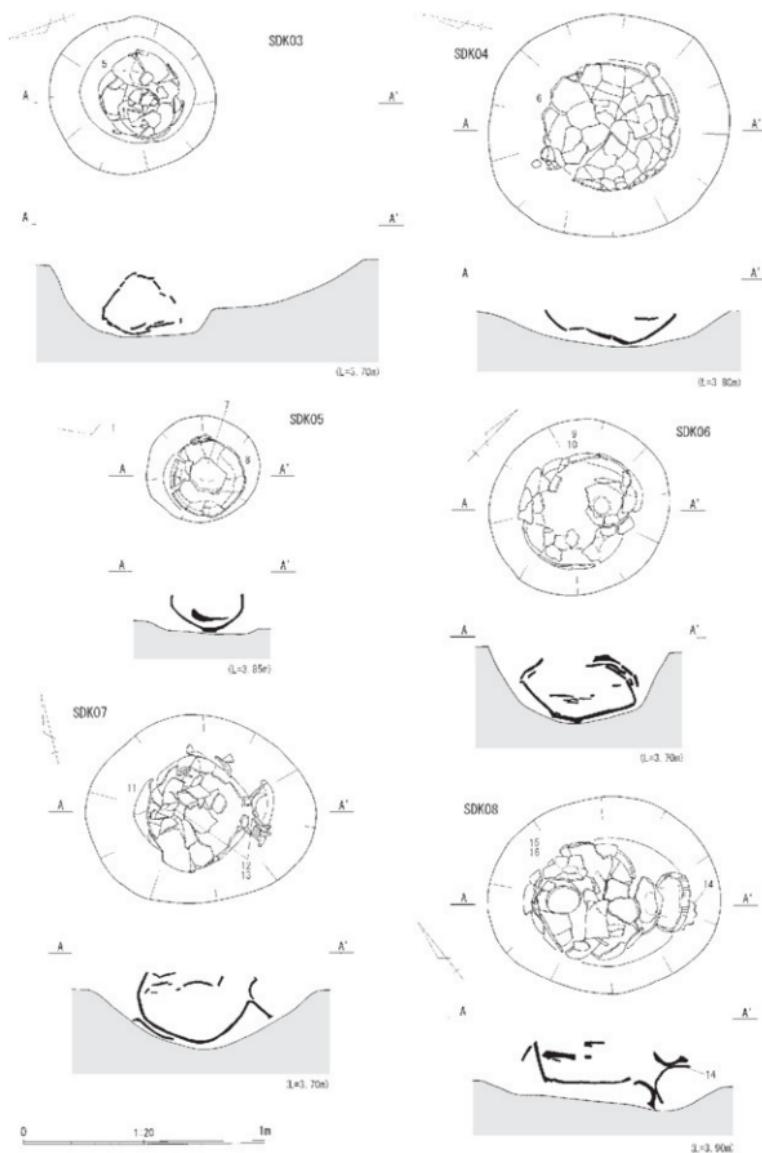
SDK21（第104図） 底部と頸部を欠いた壺（第242図-37）が、円形土坑内に縦位で置かれていた。内部からは小型の壺（第242図-38）が出土した。

SDK22（第104図） 掘り方は不明であるが、壺（第243図-39）が出土した。横位埋置と推測される。そして、底部を欠いた壺（第243図-40）で蓋をしてあった。

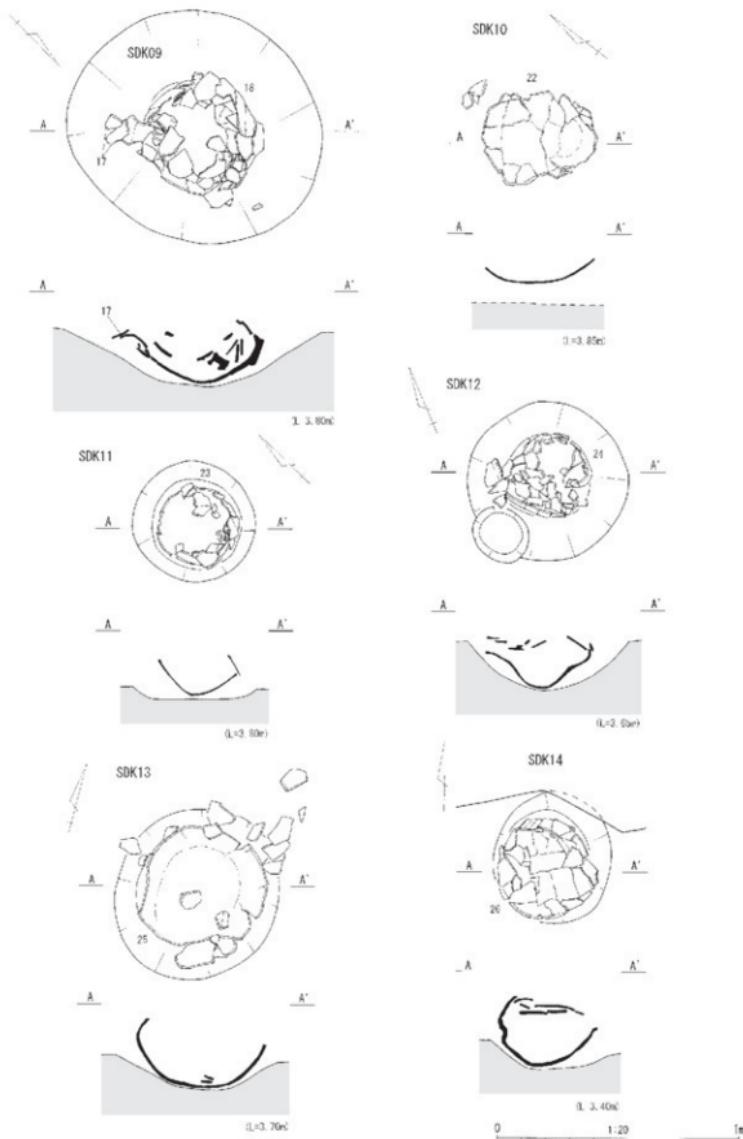
SDK23（第104図） 上半を欠いた壺（第243図-41）が円形土坑の中に縦位で置かれていた。



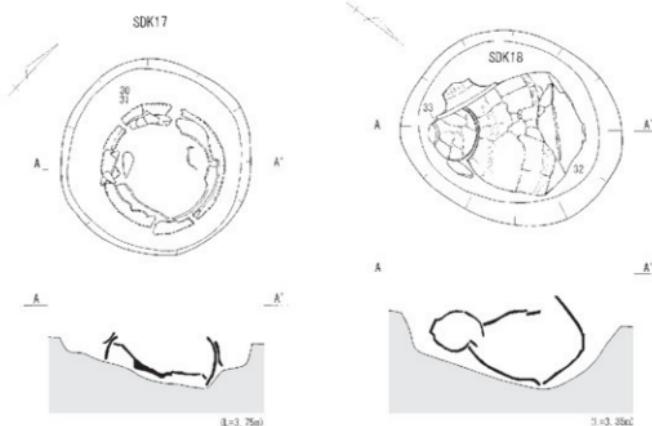
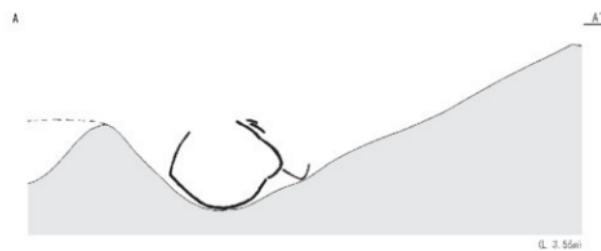
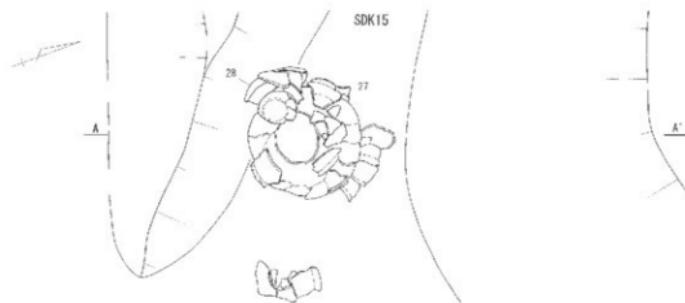
第100図 SDK01・02実測図



第101図 SDK03・04・05・06・07・08実測図

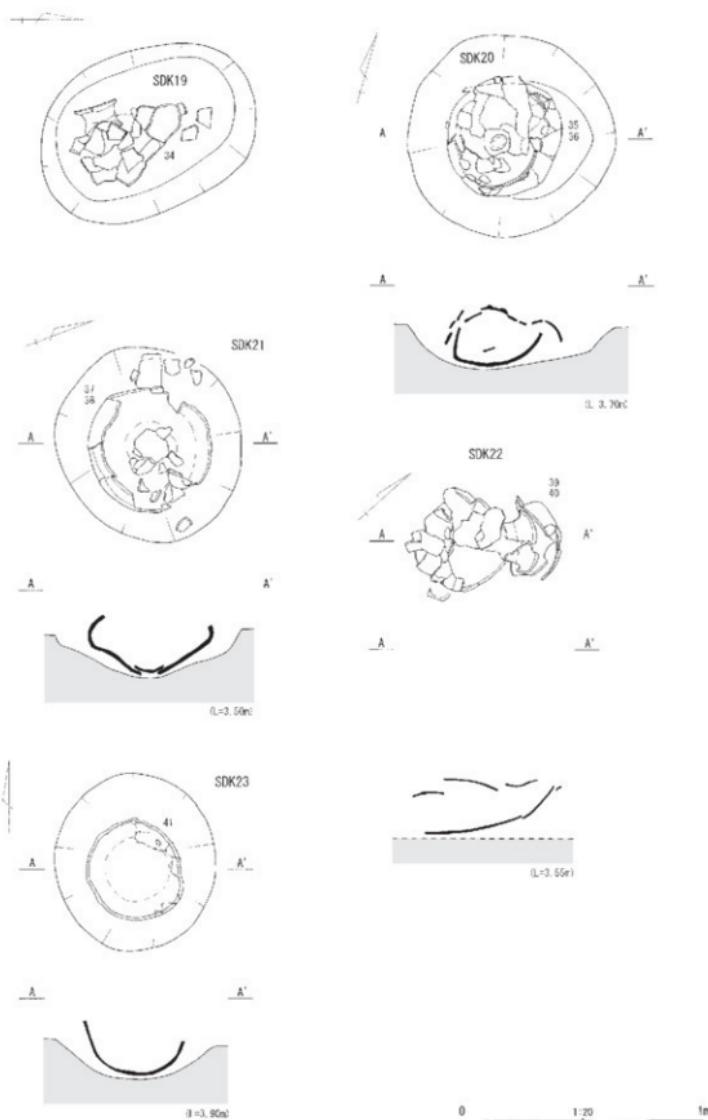


第102図 SDK09・10・11・12・13・14実測図



0 1:20 1m

第103図 SDK15・17・18実測図



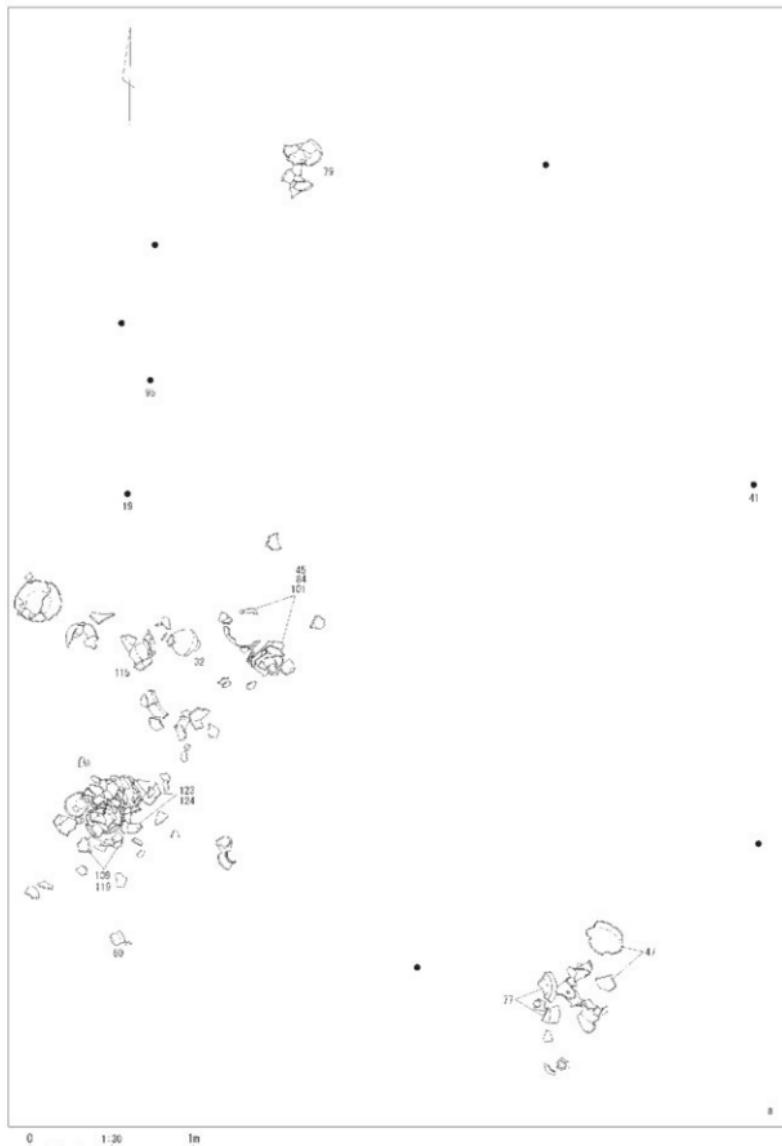
第104図 SDK19・20・21・22・23実測図

6 流路

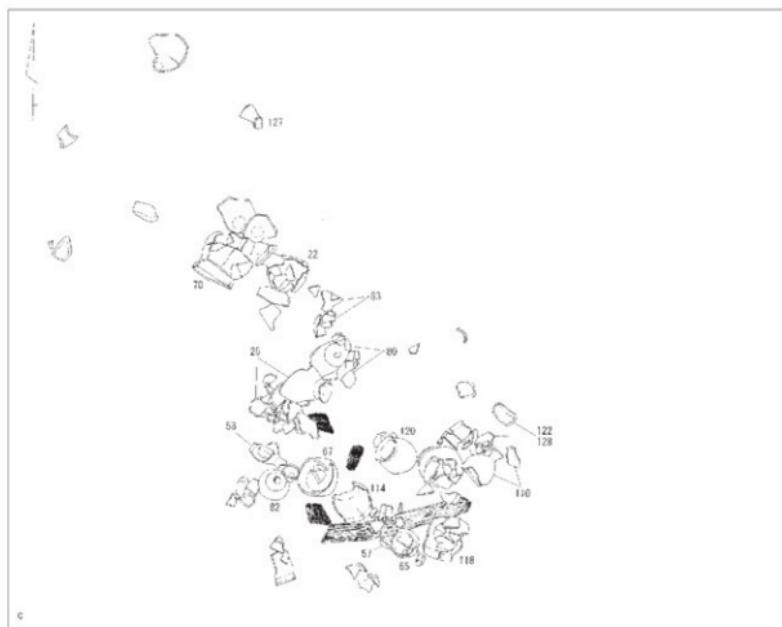
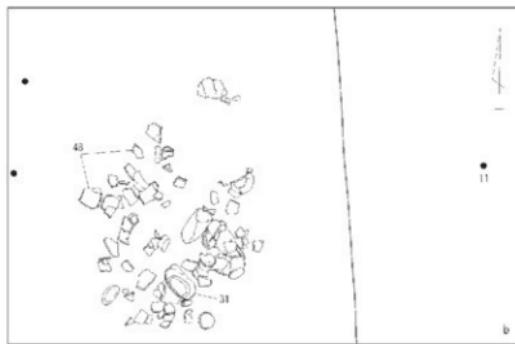
今回の調査では、5本の流路を検出しており、調査区の西側ではSR401、406、501、502を検出し、調査区の北東側ではSR103を検出した。SR406はSR401を切っており、SR501、502はSR401の延長上に位置するため、これらの流路はSR401の流路の変化によりできたものであろう。SR401は遺構が広範囲に渡り、非常に浅いため、流路というよりも沼のような状態であったと思われる。これらの流路は弥生時代後期前半～後期後半の流路である。一方、SR103は調査区の北西から南西へ流れしており、流路の深さも深い。そして、SR103では、弥生時代中期後半から古墳時代前期に位置付けられる土器が出土したため、SR103は弥生時代中期後半以降に集落の外側に形成された河川と考えられる。将監名遺跡でSR401と同時期の遺構には方形周溝墓群があり、この時期の住居址は検出されてない。そのため、中期後半にSR103が形成されたことを考え合わせると、弥生時代後期前半には、洪水等何らかの環境の変化により、集落が廃絶した可能性を指摘できる。遺跡周辺が湿地化したことにより、集落が存在した場所は墓域に変化したのであろう。また、弥生時代後期以降は人の居住をうかがわせる遺構が存在しないことから、将監



第105図 SR401実測図



第106図 SR401遺物出土状況図a

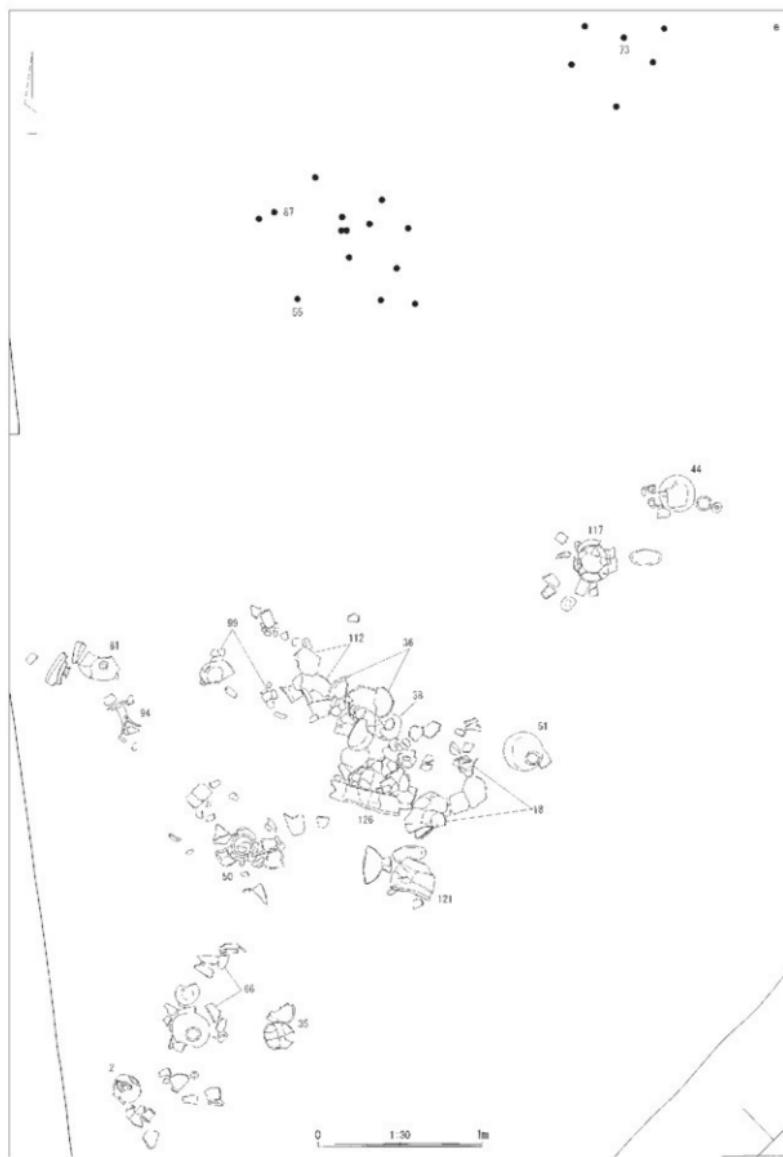


0 1:30 1m

第107図 SR401遺物出土状況図b・c



第108図 SR401遺物出土状況図d



第109図 SR401遺物出土状況図e

名遺跡周辺は、人の居住に適さない場所になってしまったと考えられる。

SR401（第105図～第109図） 調査区の北西端で検出した。北東から南東側へ延びていたと思われる。遺構の大半が調査区外に出ているため、形状の把握は難しい。最低でも幅が21mあったと推察されるが、これに対して深さは約20cmと非常に浅い。第244図-1～第255図-144が出土遺物で、遺物量が多い。SR401の北側の第106図-aで示した箇所では、壺（第245図-19、第247-32、第248図-45、47）、小型壺（第248図-41）、鉢（第249-60）、高坏（第250-77、79、第251図-84、第252図-95、101）、台付甕（第253図-109、115、第254図-119、123、124）が出土しており、1個体に復元可能な土器片が原位置で出土した。第107図-bで示した箇所では、主に壺（第245図-11、第247図-31、第248図-48）が出土し、それ以外にも多くの土器片が集中して出土した。第107図-cで示した箇所では、壺（第246図-22、25）、小型壺（第249図-57）、片口鉢（第249図-65）、鉢（第249図-58、67、70）、高坏（第250図-80、第251図-82、83）、台付甕（第253図-110、114、第254図-118、120、122、127、128）が原位置で、集中して出土した。そして、第108図-cの南に位置する第108図-dで示した箇所でも、1個体に復元可能な土器片が、原位置で出土し、壺（第244図-3、第245図-15、17、第246図-23）、小型壺（第248図-40）、台付広口壺（第252図-104）、台付甕（第253図-116）などが出土した。SR401の南西隅である第109図-eで示した箇所では、壺（第244図-2、第245図-18、第247図-35、36、38、第248図-44、50、51）、小型壺（第249図-55）、鉢（第249図-66）、高坏（第250図-73、81、第251図-87、第252図-94）、装飾高坏の脚部（第252図-99）、台付甕（第253図-112、117）などが原位置で出土した。出土遺物は菊川式、山中式、欠山式など弥生時代後期前半から後期後半にかけてのものが主体である。SR401内では流路の流れが変化した形跡が見られることから、弥生時代後期前半から後半の間の比較的長期間に渡って、流路の方向を変えながら存続したと思われる。

7 古代～中世

古代から中世にかけて検出された遺構は井戸、土坑、溝、流路である。弥生時代後期以降、本遺跡は湿地化して、再び遺跡を形成するのは古墳時代後期である。しかしながら、古墳時代後期から奈良時代までは土坑、溝、流路などが検出されたにすぎず、集落の様相は判然としない。平安時代にはいると井戸が9基検出された。小穴等も検出されているものの遺物量も少なく、時期や建物、柵等の遺構を確認するにいたらなかった。しかし、井戸が確認されたことから周辺に平安時代後期から鎌倉時代にかけて居住空間が存在したと想定される。

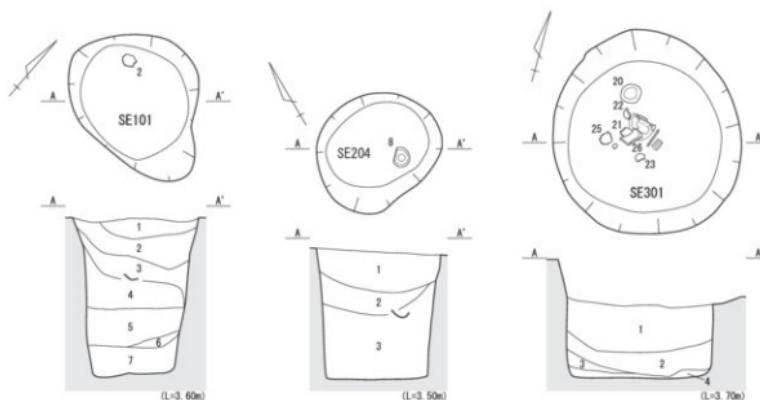
SE101（第110図） 楕円形を呈し、径1.0m、深さ1.2mで素掘りの井戸である。12世紀後半の山茶碗（第268図-1、2）と須恵器杯身（第268図-3）が出土している。

SE204（第110図） 楕円形を呈し、長軸1.08m、短軸0.9mで素掘りの井戸である。3層から12世紀中葉～12世紀後半の遺物（第268図-8～13）が出土している。

SE301（第110図） 楕円形を呈し、径1.6m、深さ1.0mである。中央底部には山茶碗の輪花碗（第268図-20、21）、渥美産の壺（第268図-26）があり、12世紀中葉であろう。

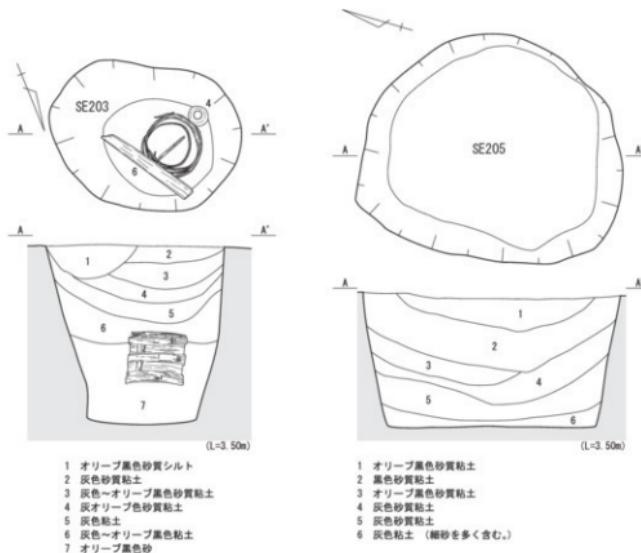
SE203（第110図） 長楕円形を呈し、長軸1.6m、短軸1.2m、深さ1.5mで、曲物を転用した井戸である。曲物は2段で構成される。白磁碗、山茶碗が出土しており、12世紀中葉～12世紀後半であろう。

SE205（第110図） 楕円形を呈し、長軸2.15m、短軸1.85m、深さ1mである。曲物の一部が出土しており、曲物転用の井戸の可能性もある。遺物は白磁碗、山茶碗が出土しており、12世紀中葉～12世紀後半であろう。



- 1 灰オリーブ色砂質シルト
 - 2 灰オリーブ色砂質シルト
(灰色砂質シルトの小ブロックを含み、
山茶礫を若干含む。)
 - 3 灰オリーブ色砂質シルト
(山茶礫を若干含む。)
 - 4 灰色砂質粘土
(山茶礫を若干含む。)
 - 5 灰色砂質粘土
 - 6 灰色粘土
 - 7 灰色砂質粘土
- 1 灰オリーブ色砂質粘土
(灰色が強い。鉄分を含む。)
 - 2 灰オリーブ色砂質粘土
(オリーブ色が強い。鉄分を含む。)
 - 3 オリーブ色砂質粘土

- 1 緑灰色粘土
- 2 青灰色粘土
- 3 灰色シルト
- 4 黄褐色砂層



- 1 オリーブ黒色砂質シルト
 - 2 灰色砂質粘土
 - 3 灰色～オリーブ黒色砂質粘土
 - 4 灰オリーブ色砂質粘土
 - 5 灰色粘土
 - 6 灰色～オリーブ黒色粘土
 - 7 オリーブ黒色砂
- 1 オリーブ黒色砂質粘土
 - 2 黒色砂質粘土
 - 3 オリーブ黒色砂質粘土
 - 4 灰色砂質粘土
 - 5 灰色砂質粘土
 - 6 灰色粘土 (細砂を多く含む。)

0 1:40 2m

第110図 SE101・204・203・205・301実測図

SE401（第111図） 円形を呈し、径2.5mである。素掘りの井戸である。底部には自然木があり、底部脇で山茶碗の碗（第269図-28）が出土した。13世紀前半であろう。

SE404（第111図） 円形を呈し、径1.3mの素掘りの井戸である。中央底部で山茶碗（第269図-29～34）が出土した。12世紀中葉～後葉である。

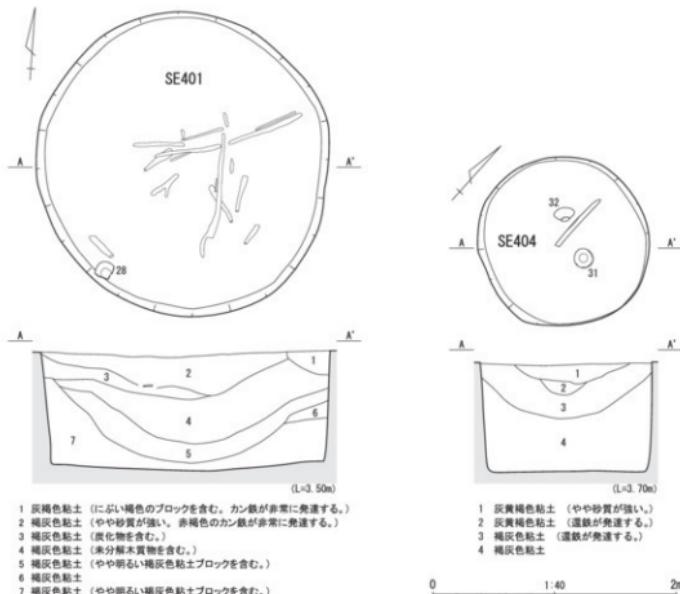
調査区の北東付近で溝状造構を検出した。屋敷地を区画するほどの溝ではなく、小規模なものである。

SR105（第111図） 摂乱、SD108により切られている。土師器鉢（第270図-62、63）が出土しており、8世紀後半であろう。

SD102（第112図） 調査区の北東にあり、長さ15mである。灰釉陶器（第270図-44）が出土しており、10世紀前半であろう。

SR101（第112図） 調査区の南東隅で検出された。須恵器、木製鞍が出土した。7世紀前半であろう。

SD104（第112図） 調査区の東方に延びる。12世紀代の山茶碗（第269図-46～49）が出土している。

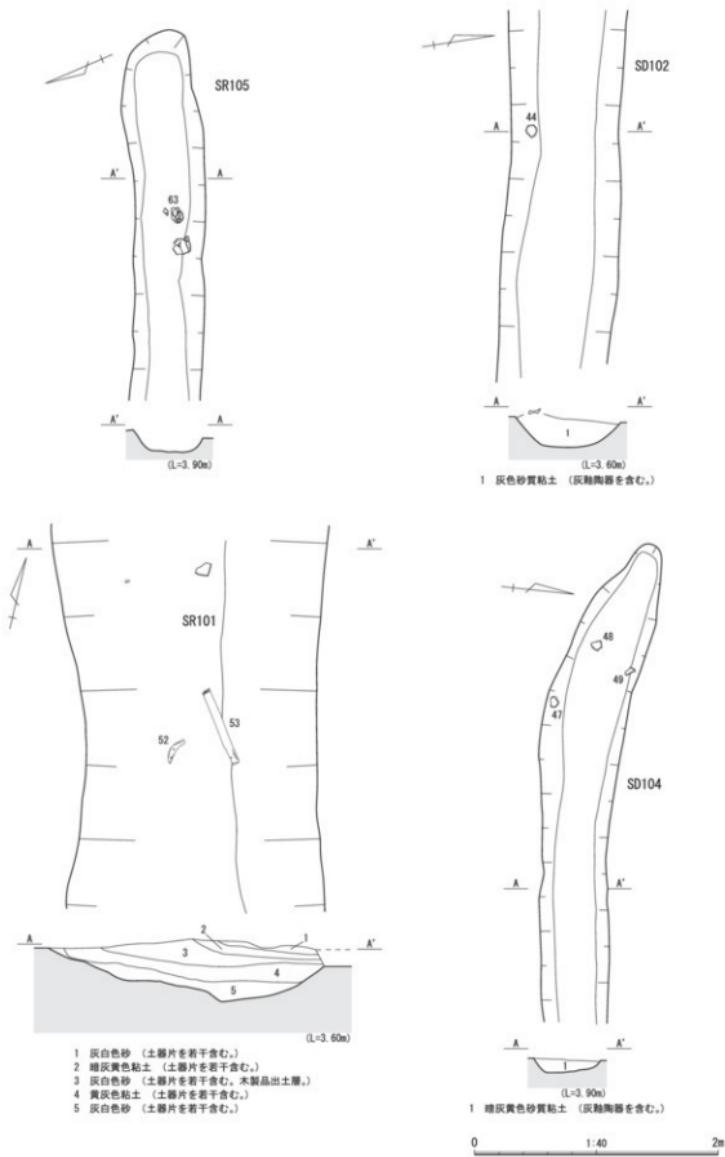


第111図 SE401・404実測図

- 1 灰褐色粘土 (にじいろ褐色のブロックを含む。カン鐵が非常に発達する。)
- 2 植灰色粘土 (やや砂質が多い。赤褐色のカン鐵が非常に発達する。)
- 3 植灰色粘土 (底面物を含む。)
- 4 植灰色粘土 (未分解木質物を含む。)
- 5 植灰色粘土 (やや明るい植灰色粘土ブロックを含む。)
- 6 植灰色粘土 (やや明るい植灰色粘土ブロックを含む。)
- 7 植灰色粘土 (やや明るい植灰色粘土ブロックを含む。)

- 1 灰黄褐色粘土 (やや砂質が強い。)
- 2 灰黄褐色粘土 (還鐵が発達する。)
- 3 植灰色粘土 (還鐵が発達する。)
- 4 植灰色粘土

0 1:40 2m



第112図 SR101・105・SD102・104実測図

第3節 遺 物

1 住居址出土遺物

SB101出土遺物（第113図） 1、2は細頸壺である。口縁端部に格子文がつく。3は口縁を欠くが、頸部には低い突帯が巡る。体部は摩滅しており、文様構成は不明である。4は高環である。碗形の环部に「ハ」の字に開く脚部がつく。环部外面にはハケ調整が残る。5は短く外反する壺の口縁部である。外面は無文である。6は台付壺である。口縁部は短く外反する。体部の張りは弱い。

7は敲石で、溶結凝灰岩の細長い円錐を使用しており、一端に敲打痕が見られる。敲石としてはかなり大型で重量感がある。

SX102出土遺物（第113図） 8は受口状口縁の壺である。外面に斜格子がつき、端部には刺突文が巡る。9は壺である。端部は肥厚し、刻みはない。内面には櫛刺突が巡り、ヘラによる沈線が巡る。外面は櫛による条痕である。

SB102出土遺物（第113図） 10は広口壺である。端部には棒状工具による押圧文がつく。頸部に櫛描横線文が巡る。11は受口状口縁壺で、端部に斜格子文がつく。12~14は嶺田式土器である。13は赤彩が塗られている。15は沈線間に縄文がつく。16は端部が肥厚する壺である。内面にも波状文がつく。17は張り出す突帯に深い刻みが入る。18は無文で、小さく外反する。口縁部は指頭で交互押圧される。19は大型の壺である。短く外反し、下端に刻みが入る。

20は磨製石斧で、緑黒色チャートの扁平な円錐を使用しており、両面を研磨し、側面を敲打している。刃部は細かい剥離を入れた上で研磨しているが、鋭角に仕上がっていないので、未完成品と思われる。

SB103出土遺物（第114図） 21は受口状口縁壺で、端部に斜格子が入り、2個で1対の棒状浮文がつく。22、23は壺の体部である。上半には波状文と直線文が巡る。24は櫛描直線文が巡る。25、26は壺の体部である。外面は摩滅している。27は台付壺の脚部で、細身である。28は口縁部が短く外反し、体部はハケである。

SX101出土遺物（第114図） 29は横線文が巡る。30は小型の鉢である。

SB104出土遺物（第114~115図） 31は櫛描直線文に縦位の直線文がつく。32は小型の壺で、接合痕が明瞭に残る。33はハケ調整の後に櫛描直線文が巡り、下部には波状文がつく。34は短く外反し、端部を丸く仕上げている。35は鉢である。36は低い脚部である。37は内外面とも黒色化している。38は短く屈曲し、折返口縁の壺である。刻みは下端につく。外面はハケ調整である。39は短く外反し、体部最大径は中位にある。上半は横方向のハケ調整で、下部は斜め方向のハケが施される。

SB109出土遺物（第115図） 40は小型の壺である。体部無花果形を呈し、上半は縄文が施される。

SB211出土遺物（第115図） 41は受口状口縁で細頸壺である。42も受口状口縁で、端部に刻みと浮文がつく。43は広口壺である。無文でハケ仕上げである。44は櫛描直線文が巡る。45は弧状文がつく。46は低い突帯がつき、刻みが入る。外面はナデ調整で、内面はハケ調整である。47は突帯がつき、指頭による押圧文に端部には櫛刺突が巡る。48は突帯がつき、刺突文が巡る。端部にも細かい刺突文がつく。外面は櫛条痕文が施される。

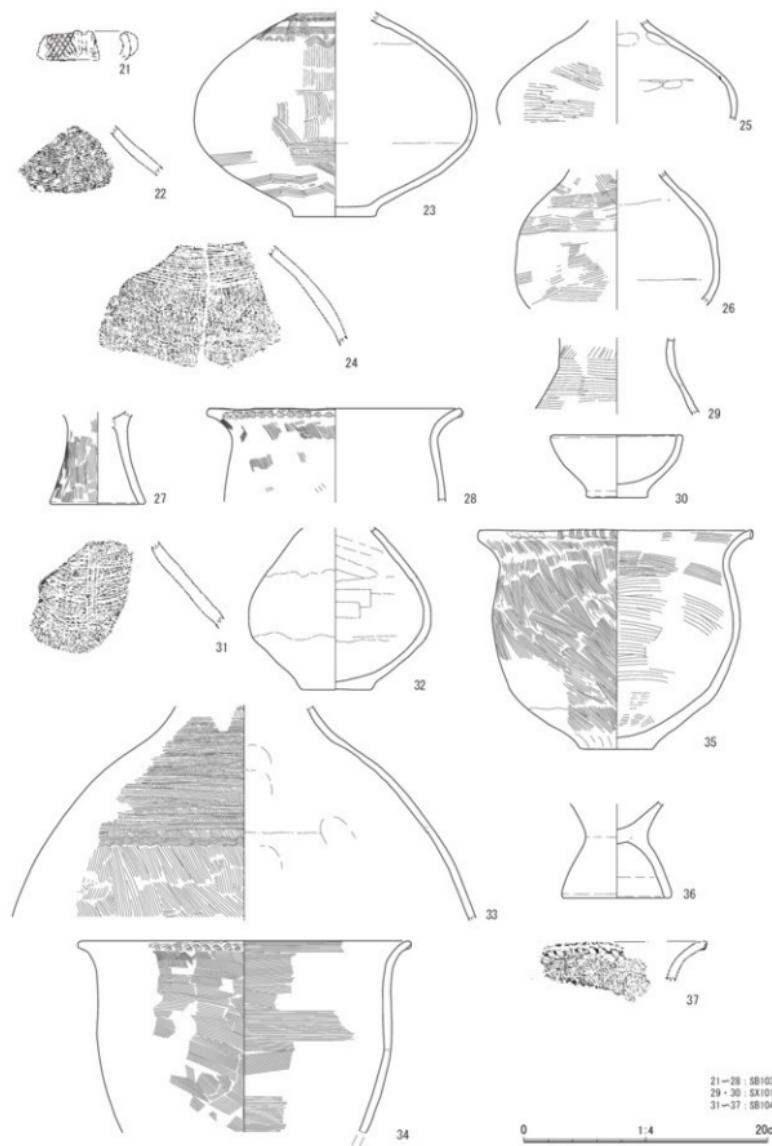
SB212出土遺物（第115図） 49は壺で、下半は横方向のミガキ、上半は縦方向のミガキが施される。50は幅広の横線文に斜位の沈線が施される。丸子式土器であろう。51は斜格子文がつく。

SB312出土遺物（第116図） 52は受口状口縁壺で、端部に斜格子文がつく。53は頸部に円形刺突文が巡り、下にヘラによる沈線がつく。54は櫛描直線文に縦位の波状文がつく。55はRL縄文が施される。56、57は壺の口縁部である。58は台盤状土製品である。

59は打製石鏹である。ホルンフェルス製の薄い剥片を使い、先行剥離面側には器体中央を超える平坦



第113図 SB出土遺物（1）



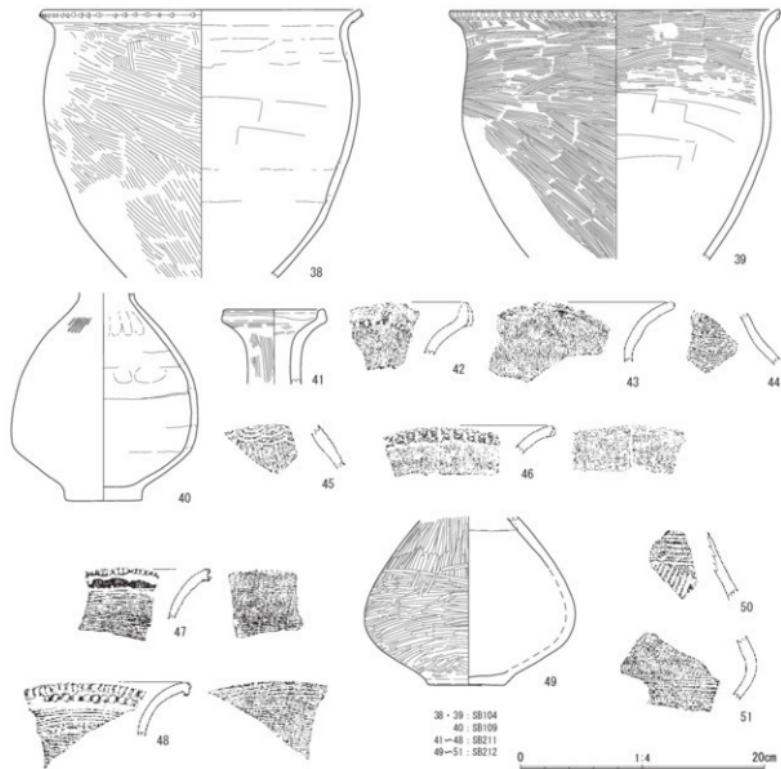
第114図 SB出土遺物（2）

剥離を入れて器体を薄くしているのに対して、主剥離面側は縁辺に細かい剥離を入れるにとどめている。また、基部の両側に抉りを入れて茎部を作っている。

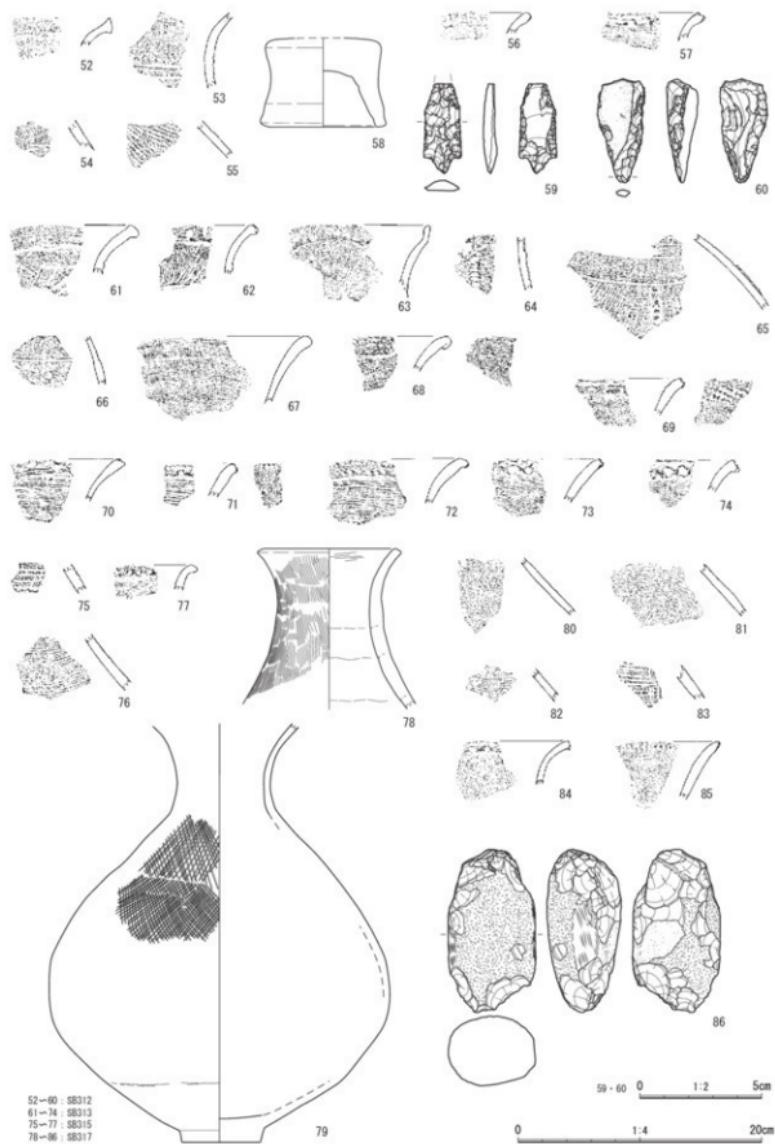
60は石錐である。珪質粘板岩製で、片面に自然面を残した剥片を使い、縁辺から平坦剥離を入れて、一端を尖らせている。

SB313出土遺物（第116図） 61、62の端部は肥厚し、斜位のヘラ描文がつく。63は受口状口縁壺である。細かい縄文を施される。64は縦位の爪形文がつく。65は沈線で無文帯を形成し、櫛描きによる細い斜格子がつき、縦位の刻みが垂下する。66は無文帯を形成し、LR縄文を施す。67～74は甌である。67の端部は肥厚する。68は折返口縁で内面は波状文がつく。69は内面にRL縄文が施される。70の端部は面取りされ、刻みが入る。71は上端と下端に刻みが入る。72～74は口縁下に突帯がつき、刻みが入る。

SB315出土遺物（第116図） 75はハケ調整後、櫛描直線文がつく。76は櫛描直線文が巡る。77は甌で端部は外方へ伸びる。



第115図 SB出土遺物（3）

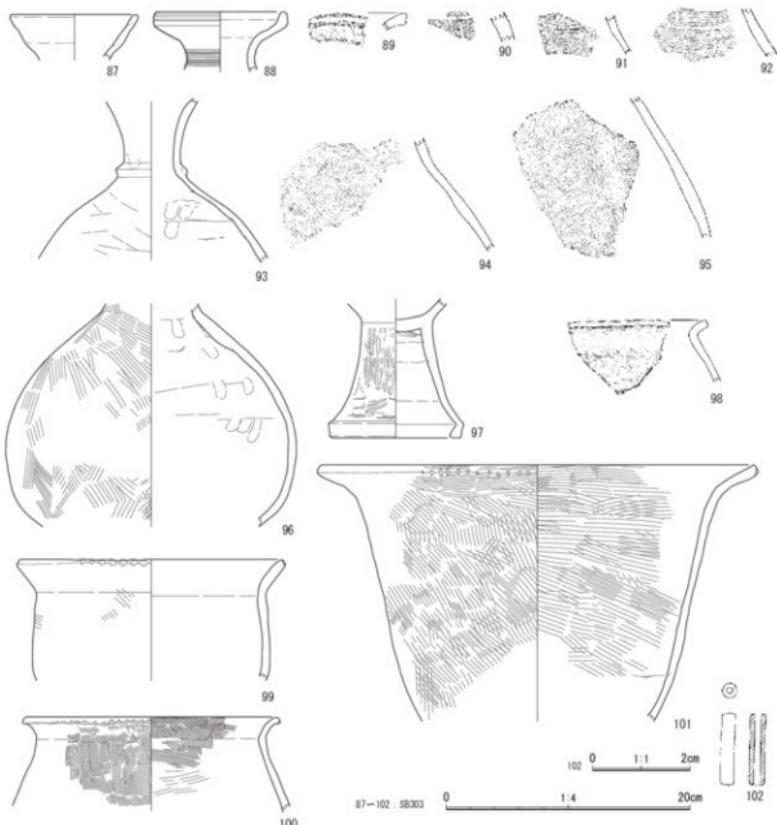


第116図 SB出土遺物（4）

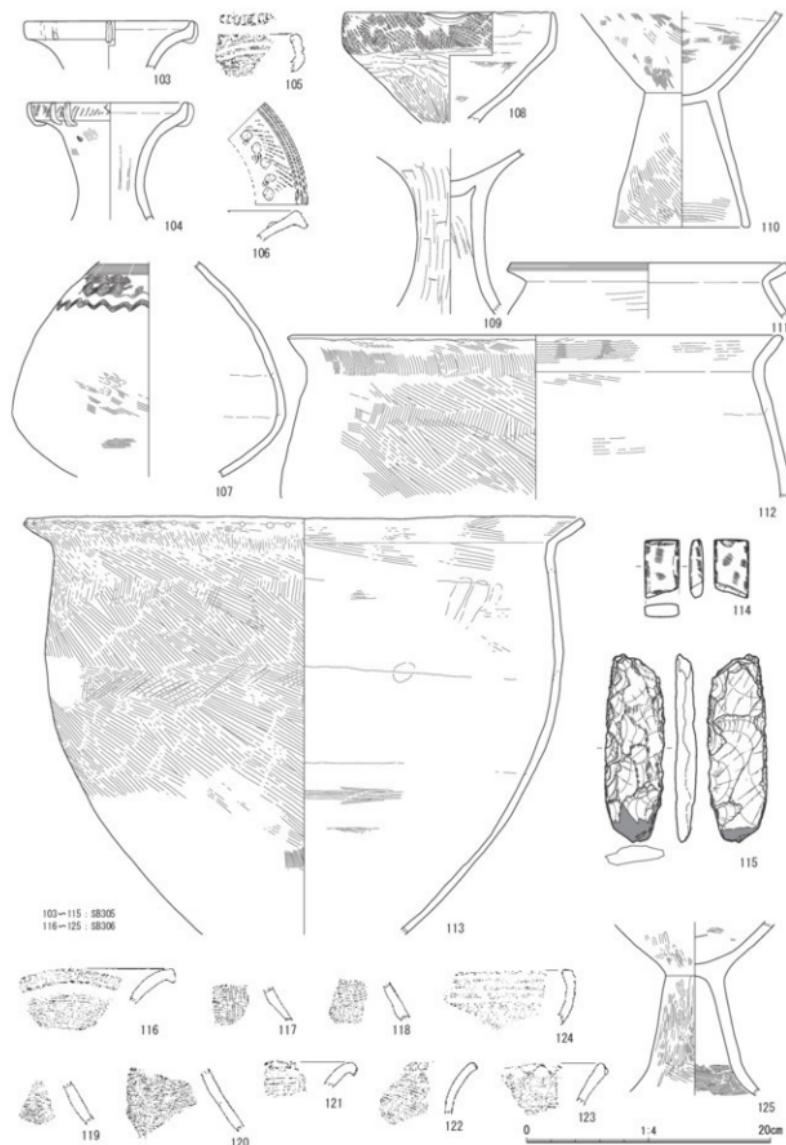
SB317出土遺物（第116図） 78は単純口縁の細頸壺で端部は面取りされる。文様ではなく、ハケ仕上げである。79は「ハ」の字に開き、丸みを帯びた体部をもつ。体部上半には斜格子文が2段つく。80～82は櫛描直線文に斜格子文がつく。83は櫛描直線文に縦位の短線文が施される。84、85は細かいハケ調整の甕である。

86は磨製石斧の未完成品である。褐灰色玄武岩の円礫を使用しており、縁辺から平坦剥離を入れているが、刃部を作り始めたところで製作をやめている。相当な厚みが残っているため、鋭角の刃部を作れないと判断して製作を中止したのであろう。

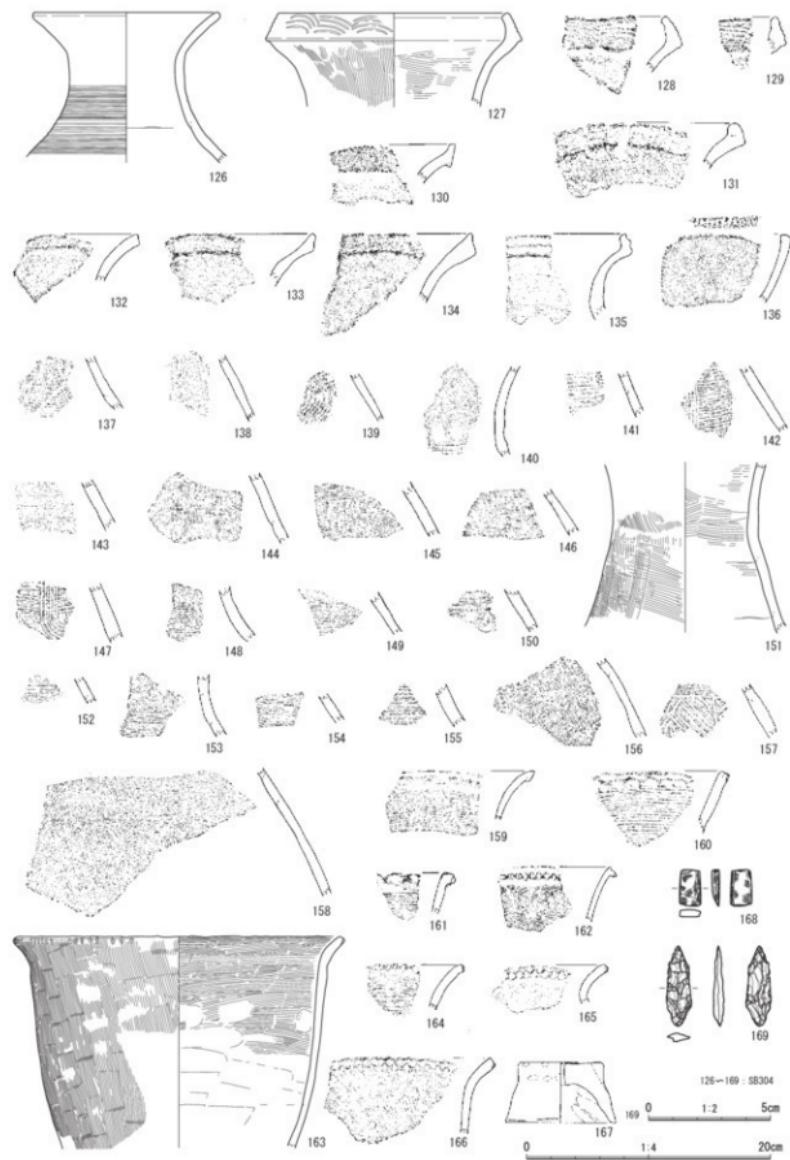
SB303出土遺物（第117図） 87は単純口縁の壺である。88は凹線文系土器の受口状口縁壺である。頸部に櫛描直線文がつく。89は凹線文系土器である。90は細かい矢羽文に横位、縦位の沈線がつく。91の体部に櫛描斜格子文がつき、頸部に横線文が施される。92は櫛描直線文が巡る。93は細長い頸部に丸みを帯びた体部からなる。頸部には低い突帯が1条つく。外面は摩耗しており、明確ではないが、ミガキな



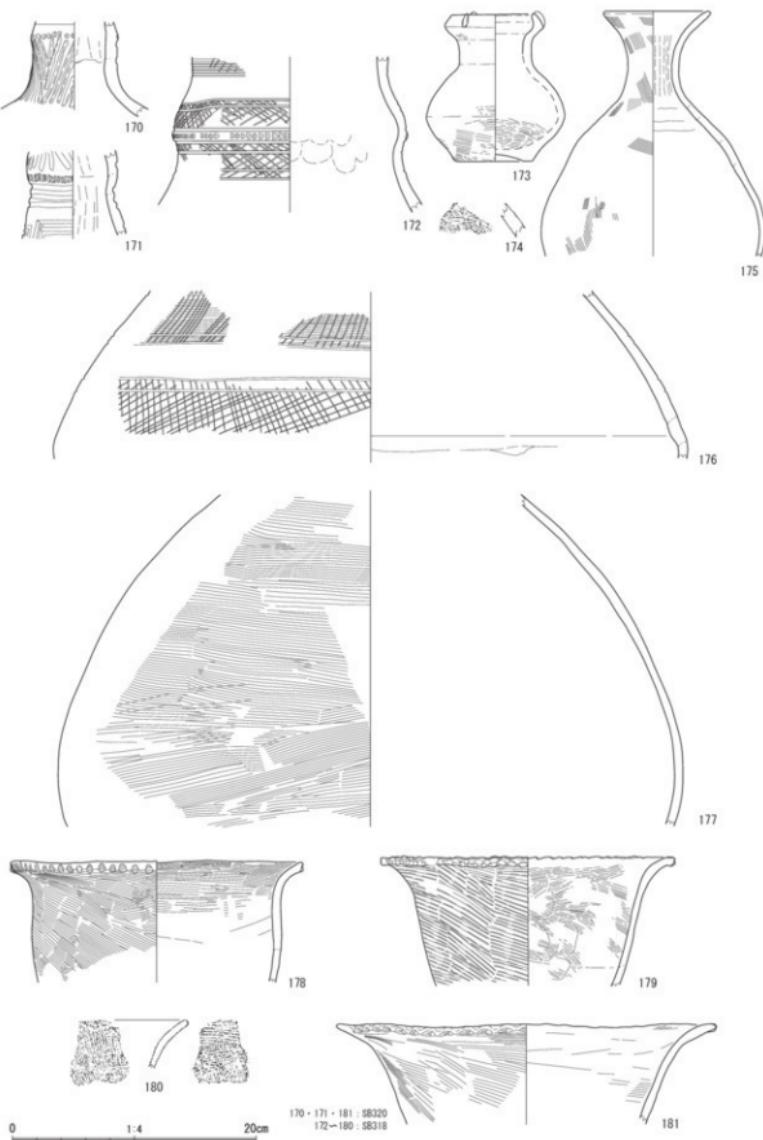
第117図 SB出土遺物 (5)



第118図 SB出土遺物（6）



第119図 SB出土遺物（7）



第120図 SB出土遺物（8）

いしナデの調整が確認できる。94は連弧文が巡り、縦位の無文帯が垂下する。区画内には櫛描斜格子文がつく。95は縦位の無文帯と間際に斜格子文がつく。96は丸みを帯びた体部に外面は斜方向のナデが認められる。97は高環脚部で、端部は内側に屈曲する。脚部上位は縦方向のミガキ、下位には斜方向のミガキが施される。98は「く」の字に短く屈曲する甕である。端部は面取りされる。

99～101は甕である。99の端部は肥厚し、口縁部の外反は緩やかである。100は短く屈曲する。101は短く外方に屈曲し、刻みは下端に入れる。102は管玉である。

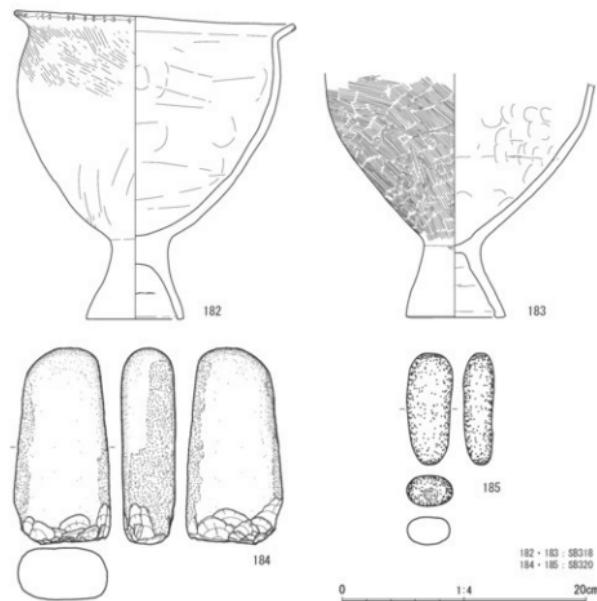
SB305出土遺物（第118図） 103、104は折返口縁の細頸壺で、棒状浮文がつく。105はやや内傾する折返口縁で、折返部には連弧文がつき、端部に連続刺突文が巡る。106は端部が外方に肥厚する。内面には櫛刺突文が施され、浮文が巡る。瘤状ではないが、内面に刺突文と浮文が併用されることから伊勢系であろうか。

108は鉢で、斜方向に立ち上がり、口縁部は直立する。片口がつき口縁部には繩文が施される。体部は横方向、斜め方向のミガキが施される。

109は高环の脚部である。脚部には縦方向のミガキが施される。

110は甕の台部で、外面は細かいハケ調整である。111は「く」の字に短く外反する。端部は凹線が2条巡る。体部は粗いハケがつく。112は緩やかに外反する。下端に刻みが入る。113は大型の甕で、口縁部は外反し、端部下に刻みが入る。ハケ仕上げである。

114は磨製石斧である。赤黒色珪質凝灰岩の円錐を使用しており、全面を研磨して仕上げている。側面も研磨しているため、断面が長方形になっている。刃部を欠損している。

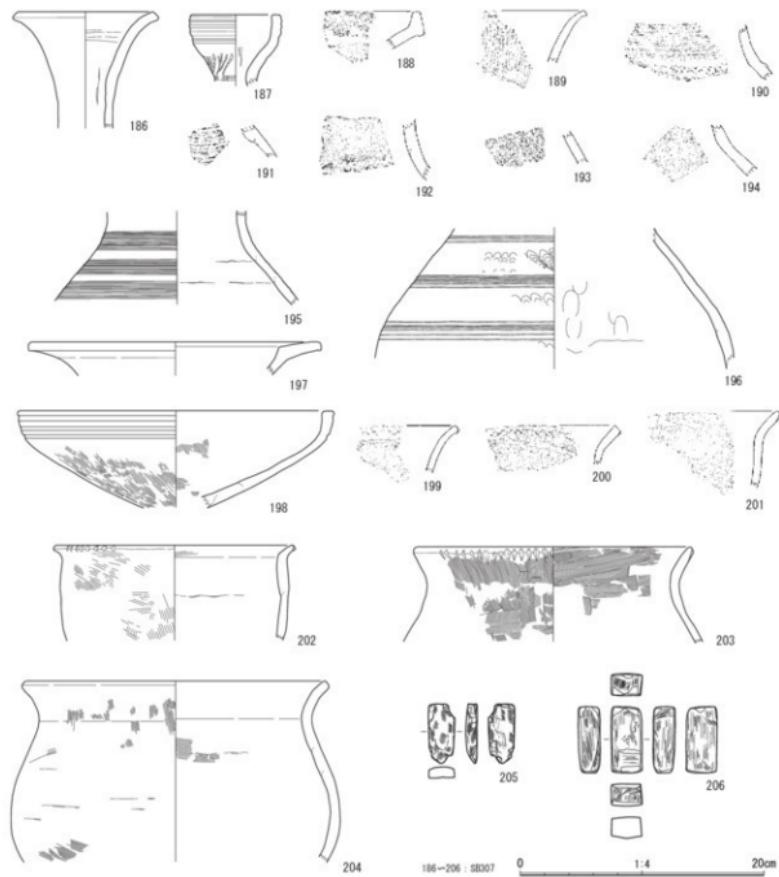


第121図 SB出土遺物（9）

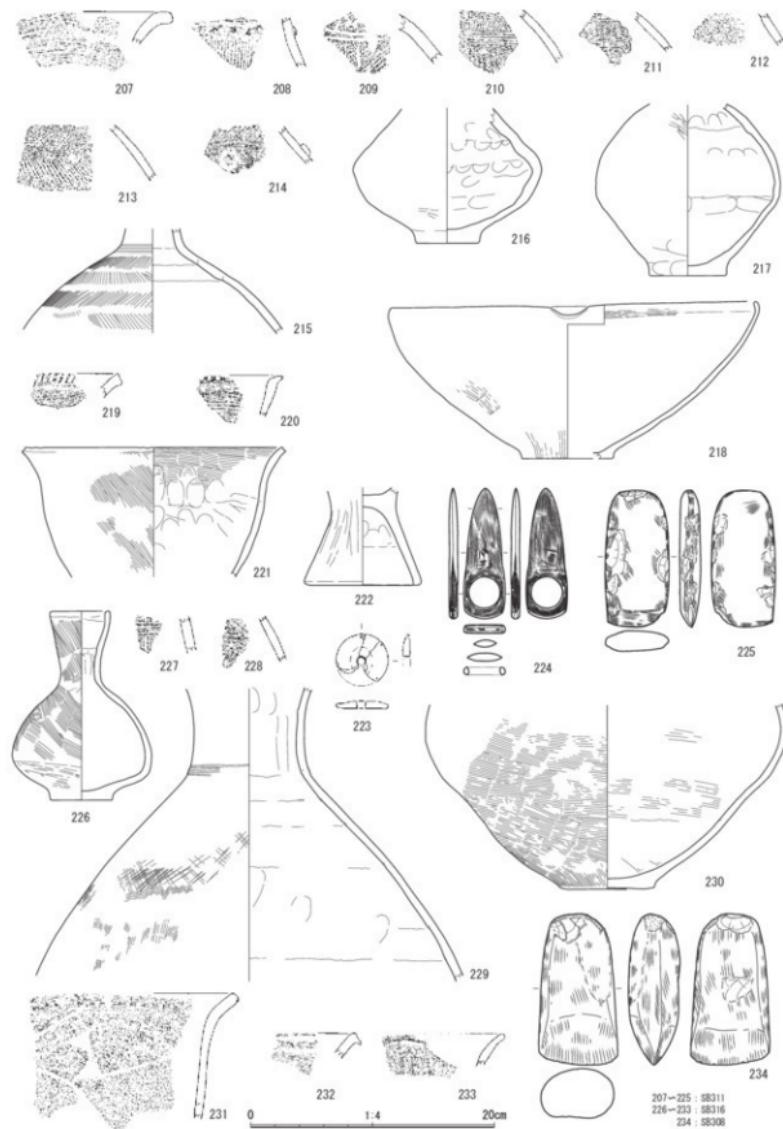
115は粘板岩製の打製石斧である。縁辺から平坦剝離を入れている。刃部は使用によって磨滅しており、実測図左面の胸部と基部には、一部に研磨痕が見られる。

SB306出土遺物（第118図） 116は折返口縁である。117、118は櫛描直線文がつく。119は櫛描直線文と波状文がつく。120はハケ調整後、櫛描直線文が巡る。122、123は壺の口縁部である。124は凹線文系土器の高环で、口縁部は内湾し、4条の凹線が巡る。125は高环の脚部である。脚部下端はやや屈曲する。外面は縦方向のミガキが施される。

SB304出土遺物（第119図） 126は単純口縁の広口壺である。頸部から体部にかけて櫛描直線文がつく。127～129は内傾気味に立ち上がる受口状口縁壺である。端面には連弧文が巡る。130、131は受口状口縁壺である。132、133は凹線文系土器である。134の端部は肥厚し、面取りされる。外面全体にハケ調整が



第122図 SB出土遺物（10）

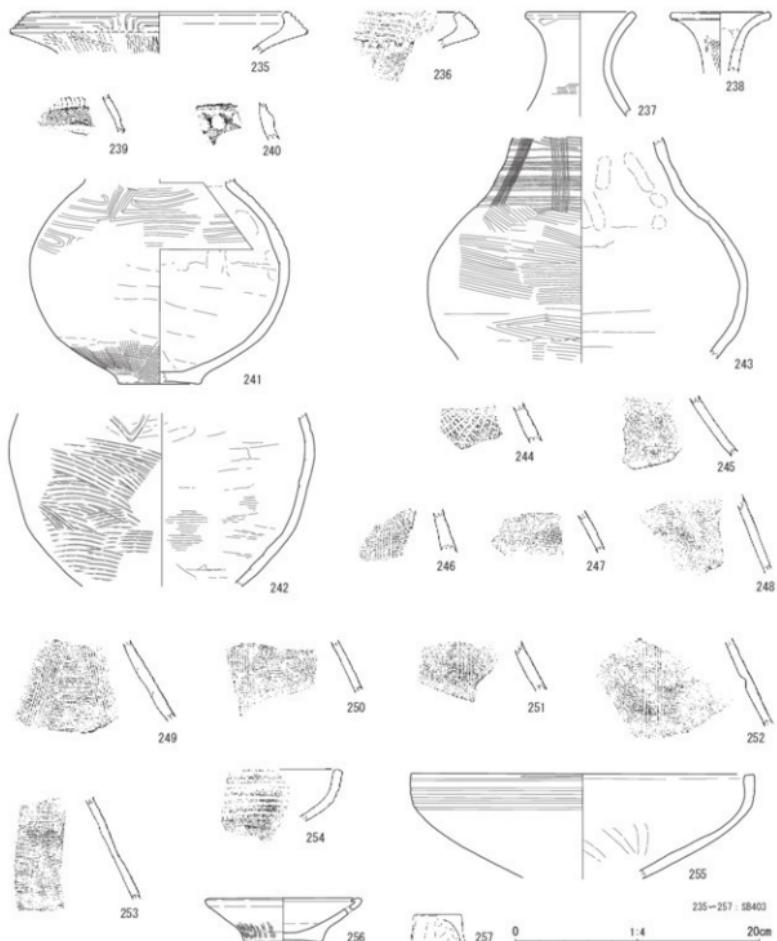


第123図 SB出土遺物 (11)

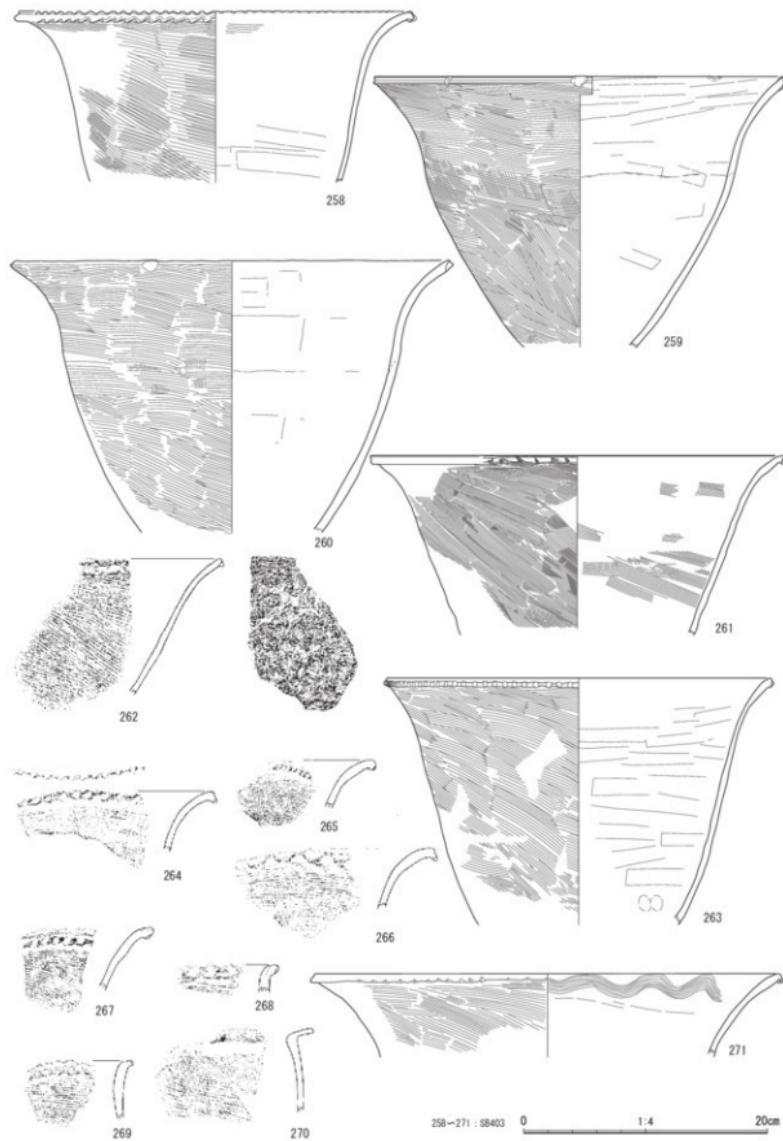
施される。135は凹線文系土器の受口状口縁壺である。2条の凹線が巡り、頸部に櫛描直線文がつく。136は鉢と考えられる。端面には刻みが入る。

137、138は櫛描直線文に「ハ」の字状に直線文がつく。139は縄文に爪形文がつく。140は頸部に円形の刺突文が巡る。141は疑似流水文である。142は櫛描直線文に縦位の直線文がつく。

143、144は櫛描直線文に縦位の波状文がつく。145は櫛描直線文に短線文がつく。147は櫛描直線文にL字状に櫛描文がつく。148は櫛刺突文と直線文がつく。149、150は櫛描直線文と波状文で構成される。151は広口壺の頸部で、ハケ調整が施される。152は櫛描直線文と連弧文で構成される。153は櫛描直線文



第124図 SB出土遺物 (12)



第125図 SB出土遺物 (13)

がつく。154、155はハケ調整が残り、横線文がつく。156は斜格子文がつく。157は櫛描直線文に矢羽文が縦位につく。158は櫛描直線文下に連弧文がつく。

159～166は甕である。160は直線的に延び、幅広の刻みが入る。161は押圧突帯である。159は低い突帯がつく。外面は縦の条痕を施した後に横方向の条痕を施す。164は短く外反する口縁部で下端に刻みが入る。外面は縦方向のハケが全面につく。165は突帯がつき、刻みが入る。外面はナデ調整である。166は面取りされ、下端に刻みが入る。167は台盤状土製品である。

168は扁平片刃石斧である。暗青灰色珪質凝灰岩の円錐を使用し、全面を丁寧に研磨して仕上げている。169は打製石鎌で、ホルンフェルス製の打製石鎌である。両面に平坦剥離を入れて尖頭器のように仕上げている。基部に抉りを入れるような剥離が入っているため、茎部を作り出しているように見える。

SB320出土遺物（第120・121図） 170は頸部中位でやや膨らむ。円形刺突文がつき、斜方向のヘラ描沈線が施される。171は爪形文と、ヘラ描沈線が巡る。嶺田系の土器であろう。その上位には斜方向、下位には方形状に沈線がつく。184は褐灰色中粒砂岩の細長い円錐を使用しており、一端に剥離を入れて刃部を作りかけている。磨製石斧の未完成品であろう。185は敲石で、ホルンフェルスの細長い円錐を使用しており、一端に敲打痕が見られる。

SB318出土遺物（第121図） 172の頸部は中位で膨らむ。無文帯をもち、沈線内には斜格子文、刺突文がつく。173は小型の受口状口縁壺である。端部には棒状浮文がつく。底部は上げ底である。174は単体構成の櫛描直線文がつく。175は細い頸部をもつ単純口縁壺である。体部は無花果形を呈する。176は無文帯をもち、斜格子文と櫛による直線文がつく。177は壺体部である。外面はハケ調整である。178～181は甕である。179は端部上下に刻みが入る。182、183は台付甕である。182は短く屈曲し、端部は面取りされる。外面はやや摩滅しているもののハケ仕上げである。台部と甕部の接合部はやや厚い。

SB307出土遺物（第122図） 186は単純口縁の細頸壺で、端部は面取りされる。白岩式であろう。187は内湾口縁で凹線が巡る。頸部に斜位の刺突文がつく。凹線文系土器である。188は受口状口縁である。189の端部はナデにより短く外方へ伸びる。縦方向に条痕が入る。190は櫛描直線文下に斜格子文がつく。191は櫛描直線文がつく。192は刺突文がつく。193は区画内には斜格子文がつく。194は櫛描直線文がつく。195は単体構成の櫛描直線文がつく。196は櫛描直線文間に波状文がつく。角江式である。

197は高坏の坏部で、外方に屈曲する。198は高坏で、斜方向に立ち上がり、口縁部は垂直に立ち上がる。口縁部には3条の凹線が巡る。外面は粗いハケ調整である。

199～201は甕である。199、200の端部は面取りされる。ハケ調整である。202は短く外反する。203はハケ調整で緩やかに外反する。204は外反し、体部は丸みを帯びる。端部には刻みは入らない。

205は小型磨製石斧で、材質は淡緑灰～黒色縞状チャート製である。縁辺から平坦剥離を入れた後に全面を研磨して仕上げている。剥離が深く入った部分は研磨されずに剥離が残っている。刃部は片刃に仕上げてあり、研磨によって側面を作り出しているため、断面は長方形になっている。206は砥石である。流紋岩質凝灰岩製で、6面を研磨しているため、直方体になっている。

SB311出土遺物（第123図） 207は折返口縁壺で、外方へ屈曲する。端面には連続刺突文がつく。外面は櫛描直線文がつく。208は低い突帯がつき、押圧が施される。下には縦方向の櫛描直線文がつく。209は斜格子文に縦、横の沈線がつく。210は斜格子文下に櫛描直線文がつく。211は単体構成の櫛描直線文がつく。212は矢羽文がつく。213は無文帯と斜格子文がつく。214は斜格子文と櫛描直線文がつき、円形浮文が貼付される。

215は細長い頸部で体部は丸みを帯びる。頸部との境には櫛描直線文がつき、下部には無文帯と斜格子文が4段施される。216は無花果形を呈する。217は丸みを帯びた体部である。外面は摩滅している。218は鉢で、口縁部は内湾する。片口がつく。外面は摩滅している。219は折返し、端部は刻みが入る。220

は短く外反する。221は緩やかに外反し、端部は面取りされる。222は脚部である。

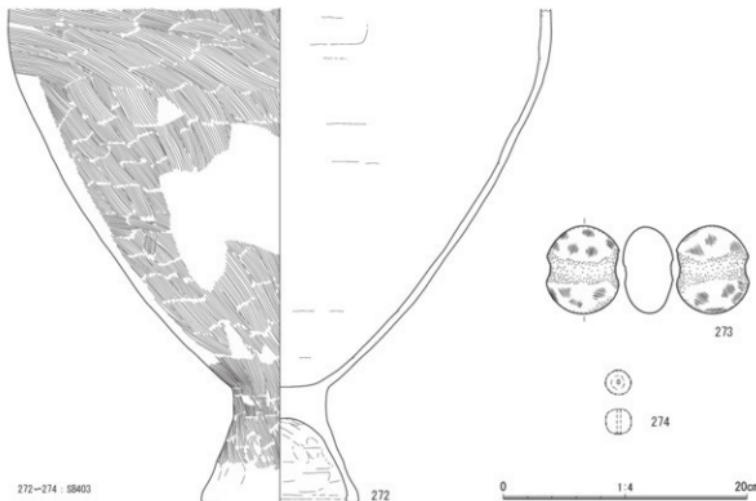
223は骨角製の鋸鍤車である。

224は有孔磨製石剣である。長さ10.7cm、幅3.4cm、厚さ0.7cm、重さ30.2gである。黒色粘板岩製で、全面を非常に丁寧に研磨して仕上げている。研磨方向は、刃部が長軸方向で、穴を開けた部分は長軸に対して斜め方向になっている。孔は両面から空けられている。また、基部の縁辺も研磨して側面を作り出している。225は片刃の磨製石斧である。褐灰色細粒砂岩の扁平な円盤を使用していると思われ、縁辺から平坦剥離を入れて全体の形を作っている。その後、全体を研磨して仕上げている。剥離が器面をえぐった部分は研磨が及ばず剥離面が残っている。刃部は片刃に仕上げてある。

SB316出土遺物（第123図） 226は小型の細頸壺である。外面はハケ調整が残る。227は櫛描直線文、228は斜格子文に櫛描直線文がつく。229は直立する頸部に肩の張らない体部である。頸部との境には櫛描直線文が巡る。体部上位には斜格子文がつき、下には波状文がつく。角江式である。230は丸みをもつ壺体部で外面はハケ調整である。231は短く外反し、端部は面取りされる。外面はナデ調整である。232の端部は下方に垂下し、凹線が巡る。233の端部はわずかに肥厚し外面はナデ調整である。

SB308出土遺物（第123図） 234は磨製石斧である。暗緑灰色蛇紋岩の長楕円形に近い円盤を使用していると思われ、厚みがある。全面を研磨し、胸部の側面を特に研磨しているため、刃部がバチ形に開くように仕上がってている。

SB403出土遺物（第124~126図） 235は内傾する口縁部に端面は4本単位のヘラ描沈線が施される。236の屈曲部には刺突文がつく。237、238は細頸壺である。239はRL繩文に爪形文がつく。240は低い突帶に円形刺突文がつく。241、242、238は体部上位に方形状にヘラ描沈線が施される。嶺田系の土器であろう。243は広口壺で、頸部には櫛描直線文に縱位の直線文がつく。体部はハケ調整である。角江式である。244は斜格子文がつく。245は連弧文がつく。246~252には櫛描直線文に縱位の直線文がつく。

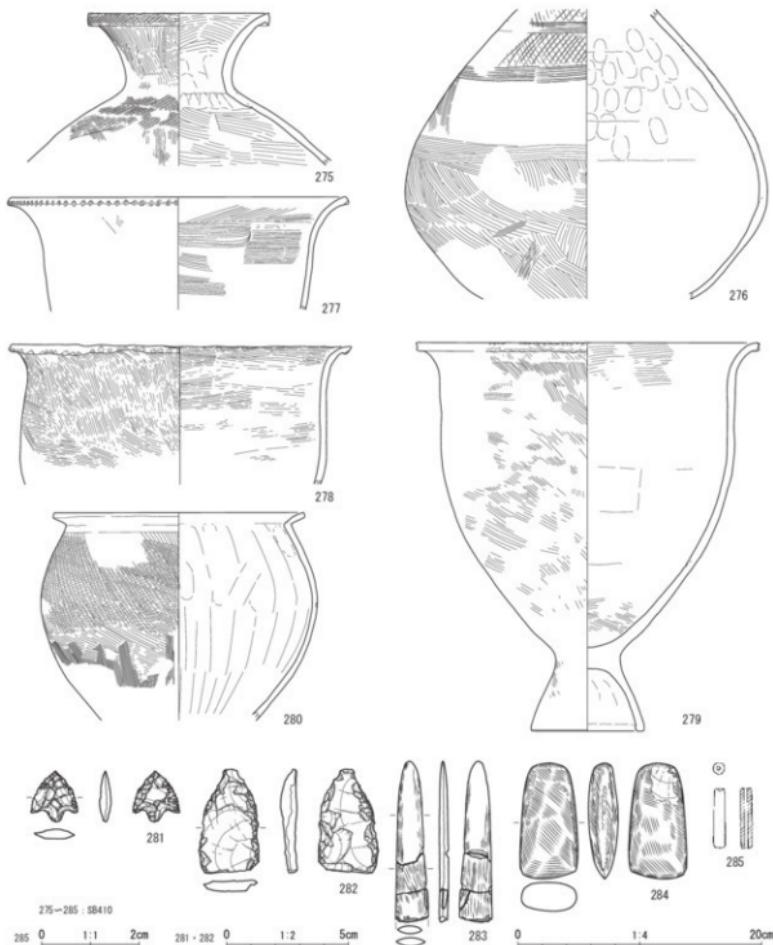


第126図 SB出土遺物（14）

254、255は凹線文系土器の高坏である。254は内湾する口縁部に5条の凹線がめぐる。255は4条の凹線が巡る。坏部は摩滅しており、調整は不明である。256は鉢である。上げ底でハケ仕上げである。

257は台盤状土器品である。

258~271は甕である。258は端部上下に刻みが入る。259の端面は無文で浮文がつく。260の端面には3カ所の押圧が施される。261、263は刻みが入る。262の内面には波状文がつく。271の端部は刻みが入り、内面には櫛描波状文が巡る。270は「く」の字に屈曲する。凹線文系の甕であろう。272は大型の台付甕



第127図 SB出土遺物 (15)

である。台部はやや柱状を呈し、脚部は体部に比して口径は小さい。外面下位は斜め方向のハケ、中位は横方向のハケ調整である。

273は石錐である。花崗岩の楕円形の円礫を使用しており、中央部を敲打してくびれを作り、両端を研磨して丸く仕上げている。274は土製丸玉である。

SB410出土遺物（第127図） 275は短い頸部をもつ広口壺である。端部は面取りされ、端面にはLR縄文が施される。体部上位にはLR縄文帯が3段付けられる。端面と体部上位に縄文があることから有東式であろう。276は無花果形を呈し、体部上位から中位にかけて櫛描直線文間に斜格子文が施される。下位はハケ調整である。角江式である。

277～279は甕である、279は台付甕で、端部上下に刻みを入れる。体部全体にハケを施す。台部は口径に比して小さく低い。280は「く」の字に屈曲する凹線文系土器の甕である。外面はハケ、内面は上下方向にナデが施される。

281は打製石鎌である。黒色粘板岩製の剥片を使用しており、実測図右面に主剥離面の一部が残っている。縁辺が丸みをもつように仕上げてあり、基部には2カ所えぐりを入れて茎部を作っている。282は打製石鎌の未完成品である。赤紫色珪質凝灰岩製の薄い剥片を使用しており、縁辺に細かい剥離を入れて全体の形を作っている。先端が尖っていないことから、未完成品であろう。

283は石剣である。長さ7.5cm、幅2.6cm、厚さ0.75cmである。緑色片岩製で、全体を長軸方向に研磨して剣の形を作っている。284は磨製石斧である。変輝線岩製で、敲打と平坦剥離によって全体の形を作った後に研磨して仕上げているようで、敲打痕と剥離が残っている部分がある。285は管玉である。

SB402出土遺物（第128図） 286は単純口縁細頸壺で、やや丸みを帯びた体部である。櫛描直線文間に斜格子文を施す。角江式である。287は細頸壺で、頸部に円形刺突文と櫛描直線文が巡る。白岩式土器である。288は櫛描直線文間に斜格子文がつく。289は半截竹管状工具による施文である。丸子式土器であろう。290は櫛描直線文に、連弧文がつき、刻みのついた突帯が巡る。291、292は櫛描直線文がつく。293は櫛描直線文に丁子文がつく。294は櫛描直線文に縦位の波状文がつく。295は鋸歯文がつく。

296～302は甕である。297は小型の台付甕である。「く」の字に屈曲し、端部に浮文がつく。体部下位で屈曲する。298の体部は直線的に延び、4カ所に押圧が施される。299は緩やかに外反する。端部に刻みが入る。300の口縁部は短く、緩やかに外反する。体部は長胴気味である。301は緩やかに外反し、体部は丸みを帯びる。302は短く外反し、端部に刻みはない。体部下部で屈曲する。

SB219出土遺物（第129図） 303、304、308は単純口縁の広口壺で端部は面取りされる。305は甕の口縁部である。

307は砥石である。含礫凝灰岩質砂岩の扁平な円礫を使用しており、一面が磨滅している。306は磨製石斧の未完成品である。細粒凝灰岩の細長い円礫を使用しており、ほぼ全面を敲打した上に一部を研磨している。刃部を欠損している。

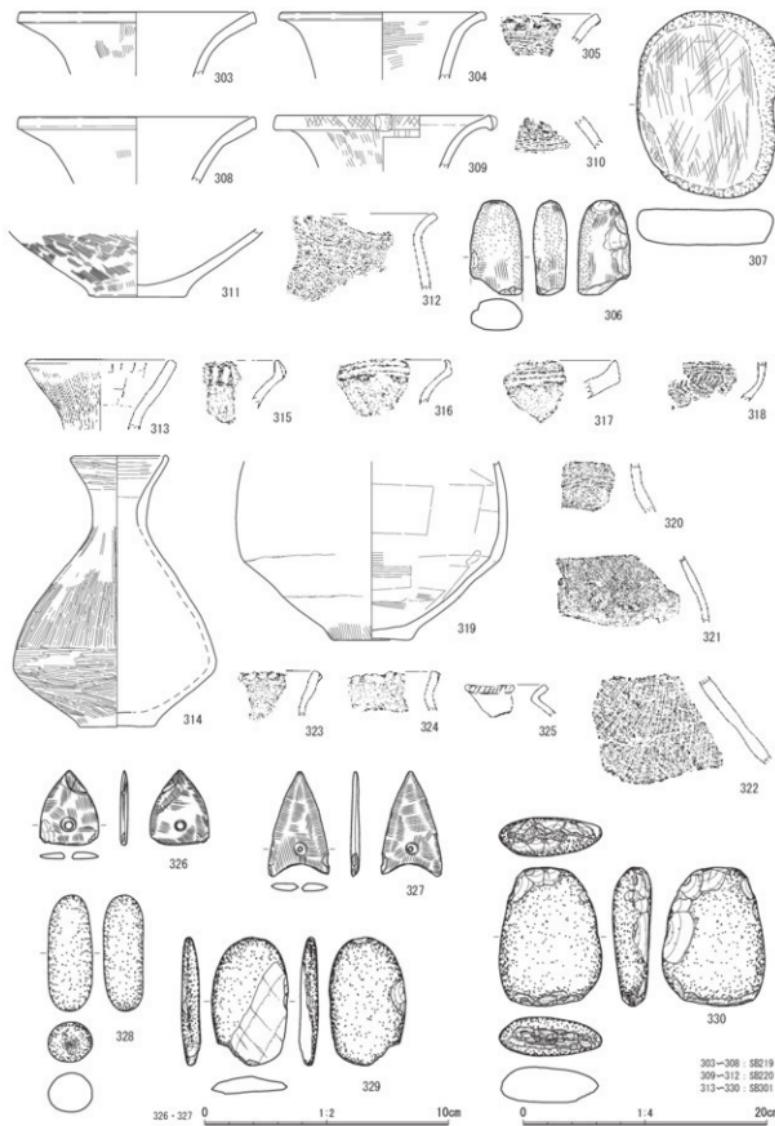
SB220出土遺物（第129図） 309は端部が肥厚し、斜格子文がつく。310は刺突文と櫛描直線文が巡る。311は壺の底部である。312は端部を丸く仕上げ、短く緩やかに外反する。外面はナデ調整である。

SB301出土遺物（第129図） 313は単純口縁の細頸壺である。314は単純口縁の細頸壺である。端部はつまみ上がり、横方向のミガキが施される。体部は縦方向のミガキ、底部から屈曲までは横方向のミガキが施される。315は受口状口縁で端面に浮文がつく。316、317は凹線文系土器である。318は内湾する口縁部である。上部には櫛刺突による直線文がつき、下位には羽状文がつく。319は壺底部である。下位で屈曲する。表面は摩滅しているため不明である。320は櫛描直線文がつく。321は縦位の波状文がつき、その間には斜格子文がつく。白岩式土器であろう。322は荒い斜格子文が施される。

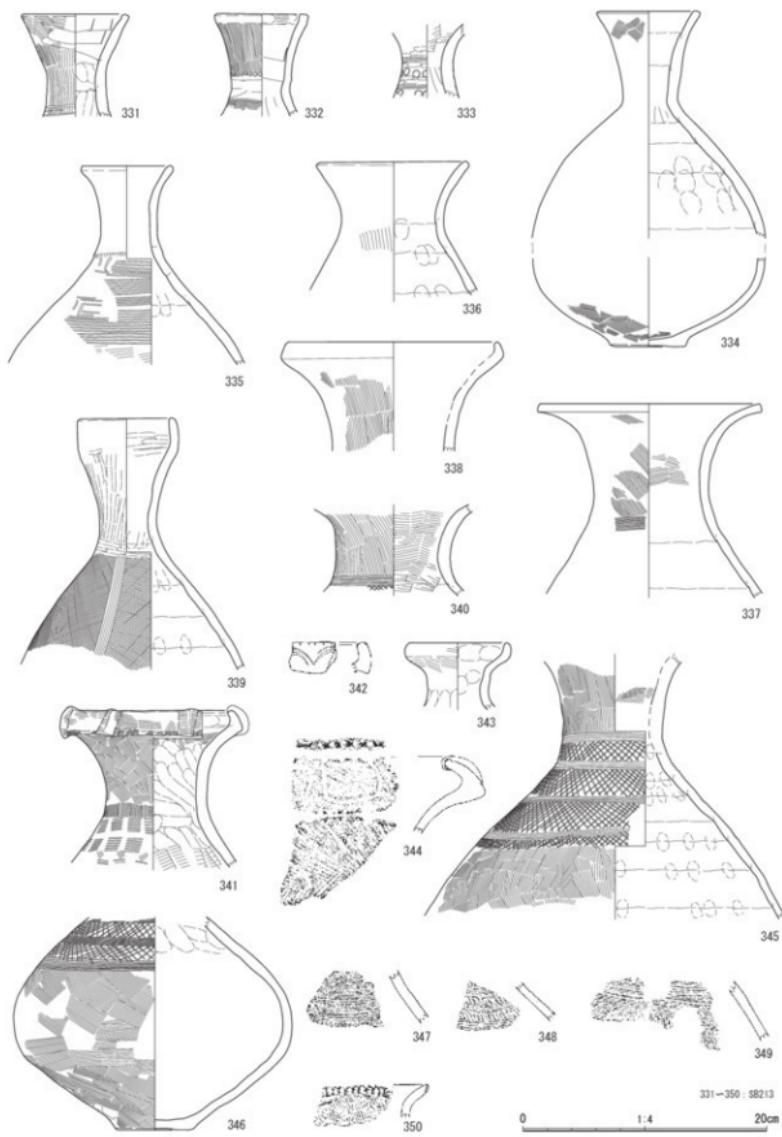
323、324は甕である。324は指頭圧痕がつく。325は「く」の字に短く屈曲する。端部は面取りされ、



第128図 SB出土遺物 (16)



第129図 SB出土遺物 (17)



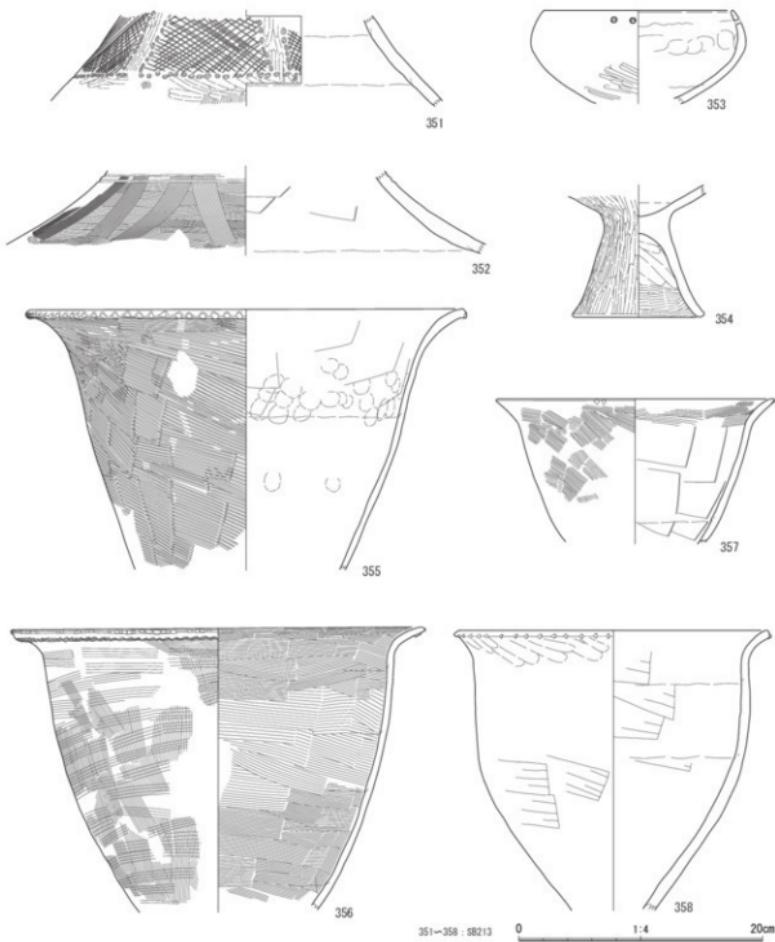
第130図 SB出土遺物 (18)

遺物（住居址出土遺物）

端面には刻みが施される。

326、327は有孔磨製石鏟である。327は凝灰質粘板岩を使用しており、ほぼ全面を丁寧に研磨して仕上げ、中央よりやや基部側に両面から穴を開けている。327はホルンフェルス製で、ほぼ全面を丁寧に研磨して仕上げているが、一部に調整剥離が残っている。中央に両面から孔を開けている。

328、330は敲石である。328は中粒砂岩の円礫を使用しており、細長い円礫の一端に敲打痕が見られる。330は中粒砂岩の扁平な円礫を使用しており、両端に敲打痕と敲打に伴う剥離が見られる。



第131図 SB出土遺物 (19)

329は含礫中粒砂岩の偏平面円礫を使用し、縁辺から平坦剥離が入る。加工が進んでいないため、器種判定が難しいが、縁辺から平坦剥離を入れている状況から、打製石斧を作ろうとしていると思われる。

SB213出土遺物（第130～132図） 331、332は細頸壺である。331には頸部に横線文がつく。332の頸部には円形刺突文が巡り、下部には無文帯がつく。体部は櫛描直線文に縱位の直線文がつく。333は櫛描直線文間に円形刺突文がつく。334は細身の頸部にやや丸みを帯びた体部をもつ。文様はない。335は櫛描直線文に丁字文がつく。337は単純口縁の広口壺である。口縁端部は面取りされる。頸部に櫛描直線文が1条確認できる。338は受口状口縁の広口壺である。外面はハケ調整が施される。339は屈曲の弱い受口状口縁の細頸壺である。頸部外面は縱方向のミガキ、境には横方向のミガキが施される。体部は縱位の櫛描文で、4区分し、区画内には斜格子文を充填する。白岩式土器である。341は受口状口縁の広口壺である。受部には浮文がつき、下端には刻みが巡る。頸部には櫛状工具より縱方向、横方向の刺突文をつける。角江式である。342は受口状口縁壺である。受部には連弧文がつく。343は弱い受口がつく。344は屈曲が強く内傾する。受部には長方形の区画文をつける。端部には刻みがつく。頸部には櫛描きによる羽状文がつく。345は頸部から体部上半にかけて櫛描直線文間に4段の斜格子文がつく。角江式である。346の体部上半には櫛描直線文間に2段の斜格子文がつく。347は直線文に丁字文がつく。348は櫛描直線文間に斜位の刺突文がつく。349は直線文下に波状文が巡る。350は丸く仕上げた端部に刻みを入れる。ハケ調整である。351は円形刺突文で区画された内部に斜格子文が施される。縦区画は円形刺突と無文帯で構成される。352は沈線間に櫛描直線文が施され、「ハ」の字に櫛描文がつく。櫛描による連弧文が巡る。瓜郷式である。

353は鉢である。口縁部は内湾する。口縁部付近には2個の穿孔がみられる。外面底部よりにわずかにミガキが残る。354は高環の脚部である。「ハ」の字に開き、外面は縱方向のミガキ調整が観察される。

355は緩やかに外反し、端部に刻みが1条に入る。356はやや外方に屈曲し、上端、下端に刻みが入る。357は外方に屈曲し、端部は丸く仕上げる。刻みはなく、ハケ調整である。358は短く屈曲し、刻みが入る。外面はナデ調整である。359は短く外反し端部下端に刻みが入る。360は短く外反し、外面の表面は摩耗しており、調整不明である。361は小型の甕である。362は丸みを帯びた体部である。くびれ部に縱方向のハケ、下位には斜位のハケが施される。363は丸みを帯びた体部に「く」の字に屈曲する。端部は面取りされており、連続して刻みが入る。364は口径と体部最大径がほぼ同じである。365は横ナデにより外方につまみ上がる。下端に刻みが入る。内外面にハケ調整である。366は高環の坏部の可能性がある。367は甕の口縁部である。368、369は台付甕の脚部である。370は底部に穿孔される。

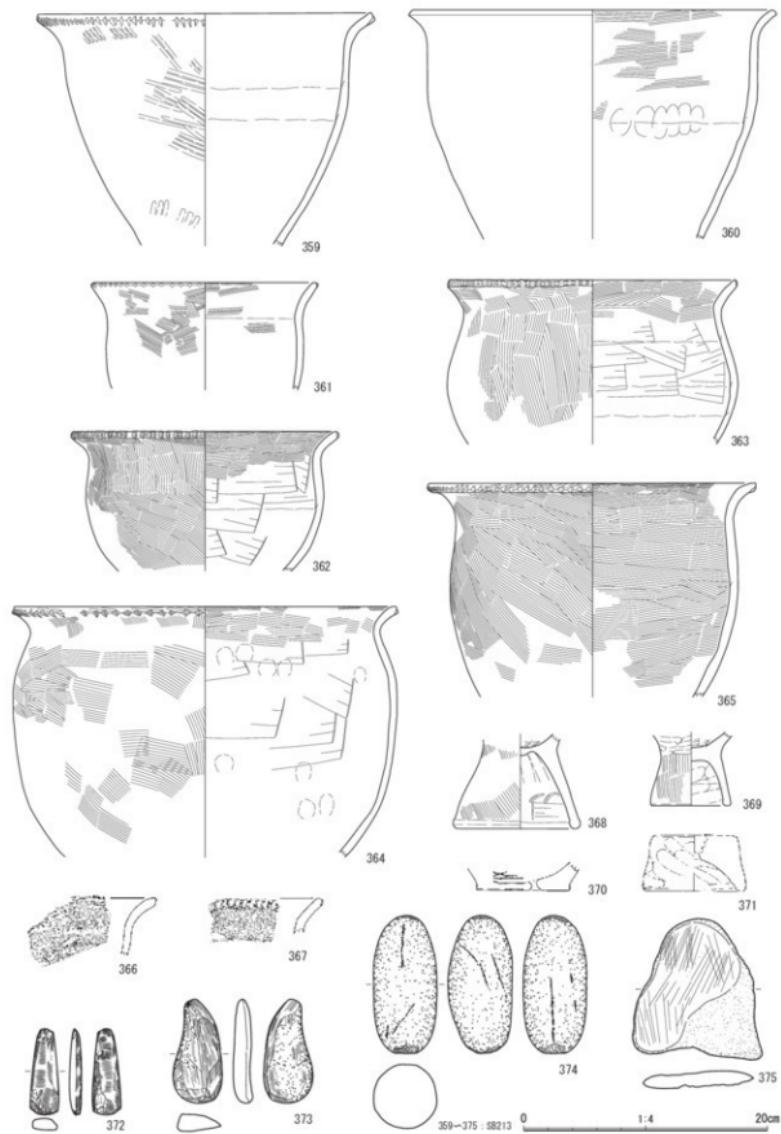
371は台盤状土器である。

372は磨製石斧である。黒色珪質粘板岩製の細長い円礫を使用しており、ほぼ全面が研磨されているため、素材は明らかでない。研磨は進んでいるが、刃部が銳角に仕上がってないことから、未完成品かもしれない。373は流紋岩質凝灰岩の細長い円礫を使用しており、ほぼ全面を研磨しているが、刃部が銳角に仕上がってないことから、磨製石斧の未完成品と思われる。

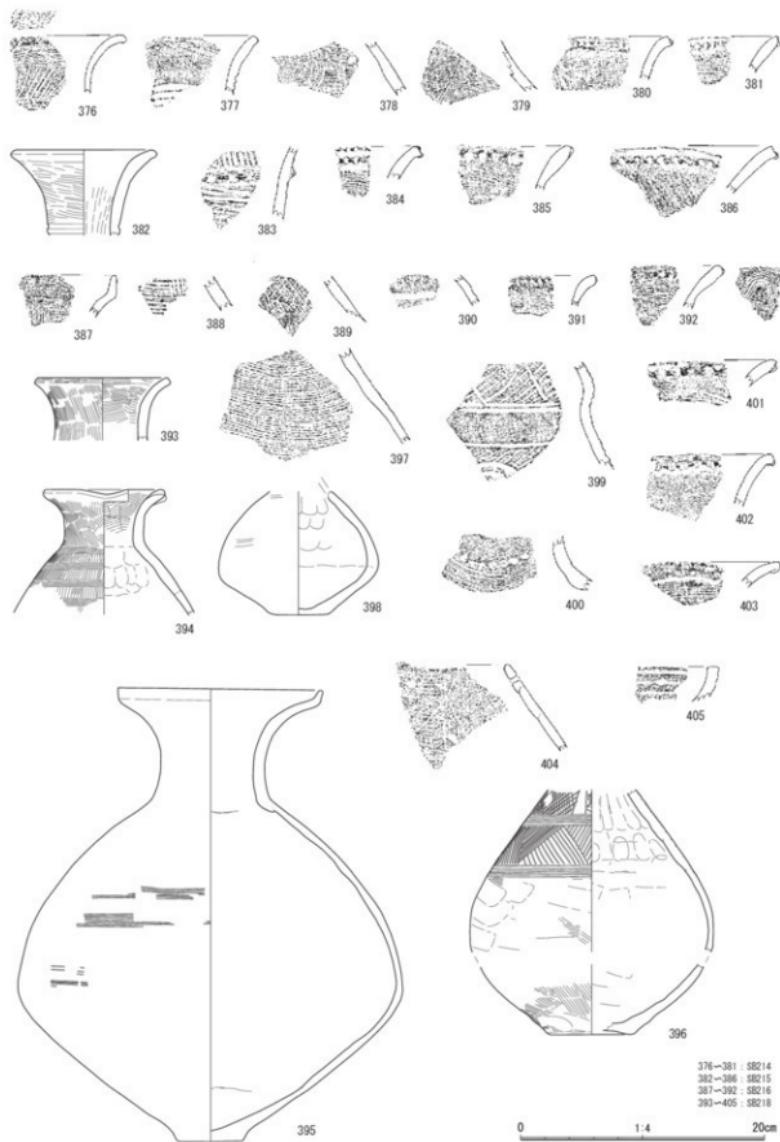
374は敲石で、中粒砂岩の細長い円礫を使用しており、一端に敲打痕が見られる。375は溶結凝灰岩と思われる。扁平で不整形の礫を使用し、表面に研磨痕が見られる。砥石としては形態が整っていない。

SB214出土遺物（第133図） 376は単純口縁に跳ね上げ文がつく。下部には櫛刺突文が巡る。瓜郷式である。377は太く深い沈線が3条確認できる。嶺田式である。378は無文帯に櫛描直線文をもつ。そこに縱位の直線文がつく。380は外に張り出す端部に刻みが入る。表面は摩耗している。381は低い突帯がつき、刻みが入る。外面は櫛条痕文で、突帯下はナデにより消される。

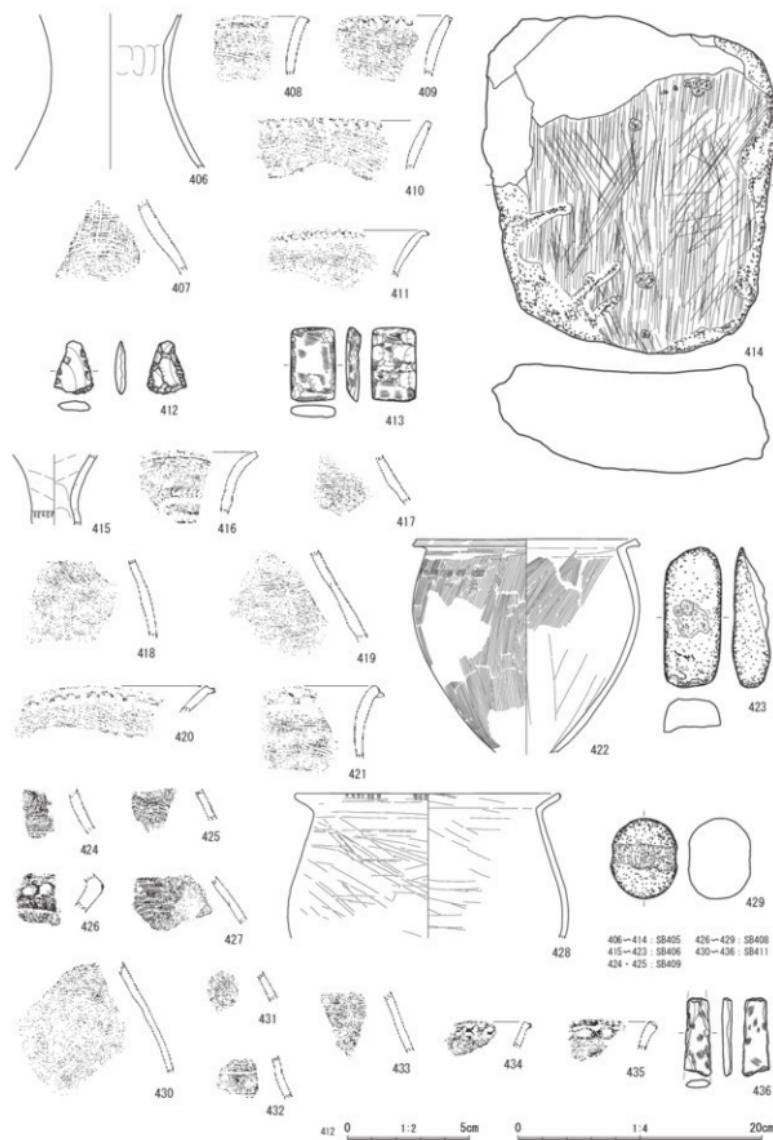
SB215出土遺物（第133図） 382は「ハ」の字に開く細頸壺である。頸部に太い沈線が巡る。383は押圧突帯の上位には斜方向の沈線、下位には横方向の沈線がつく。384は上端、下端に刻みが入る。385は肥



第132図 SB出土遺物 (20)



第133図 SB出土遺物 (21)

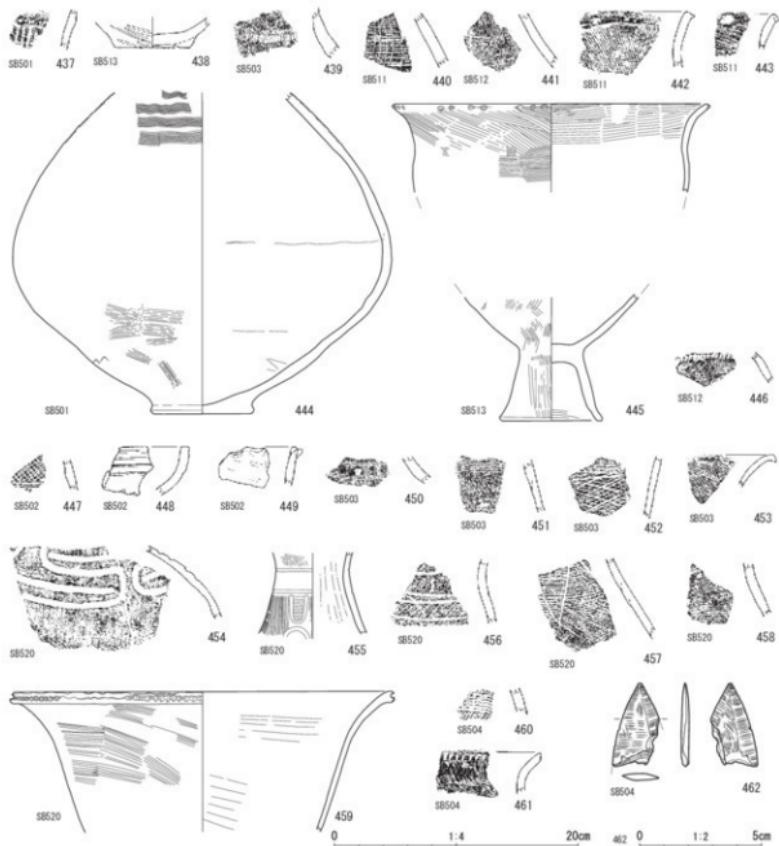


第134図 SB出土遺物 (22)

厚し、幅広の刻みが入る。386の突帯は外方へ延び、刻みが入る。

SB216出土遺物（第133図） 387は受口状口縁壺である。388は深い櫛描直線文に縦位の短線文がつく。389は櫛描の斜格子文がつく。390は太い沈線がつく。外面は赤彩が施される。391は短く外反し、刻みがつく。392の端部は面取りされ、刻みが入る。内面には櫛描の波状文が巡る。

SB218出土遺物（第133図） 393は単純口縁の壺で、ハケ仕上げである。394は単純口縁の壺で、口縁部に片口がつく。上半にはハケ後に櫛描直線文がつく。395は受口状口縁広口壺である。表面は摩滅しており、不明瞭であるが、体部には櫛描直線文が観察できる。396は細身の壺体部である。上位に斜格子文と縦に区画された無文帶で構成され、下位に鋸歯文が巡る。白岩式であろう。397は櫛描直線文が巡る。398は小型の壺である。399は内湾する頸部に沈線で区画された無文帶と格子文帯からなる。斜方向の沈線をつけたのち、沈線間に刺突文をついている。上位には八字文、下位には連弧文がつく。400は頸部に円形



第135図 SB出土遺物 (23)

遺物（住居址出土遺物）

刺突文が巡り、下位に直線文がつく。401～403は壺の口縁部である。404は無頸壺である。摩滅しているが、縦位の沈線で区画された内部は斜格子文と無文帶で構成される。2個1対の孔が認められる。補修孔であろうか。405は凹線文系土器の高环である。端部は面取りされ、3条の凹線が巡る。

SB405出土遺物（第134図）406は広口壺で、内外面は摩滅している。407は横位の櫛描直線文に縦位の直線文、連弧文がつく。408～411は壺である。

412は打製石鎌である。珪質ホルンフェルス製の薄い剥片を使い、縁辺から細かい剥離を入れて全体の形を作っている。先端が尖っていないことから、未完成品と思われる413は磨製石斧で、暗紫灰色珪質凝灰岩の扁平な円盤を使用しており、縁辺から平坦剥離を入れて形を整えた後、全体を研磨して仕上げている。剥離が深く入っている部分は研磨が及ばず、剥離痕が残る。刃部は片刃に仕上げてある。

414は石皿である。含礫中粒砂岩の大きな円盤を使用しており、片面が磨り減って窪んでいる。その裏面にもわずかながら研磨痕が見られる。

SB406出土遺物（第134図）415は頸部に爪形文が巡る。416は太い沈線と爪形文がつく。415、416は嶺田式である。417は横位の横線文に縦位の直線文がつく。418は斜位の櫛描文下に短い斜位の刺突文が巡る。419は細い櫛描直線文が巡る。

420～422は壺である。422は凹線文系土器の壺である。短く屈曲し、端部は面取りされ、外方へ延びる。外面はハケ調整で内面の下部は縦位のケズリ調整が施される。

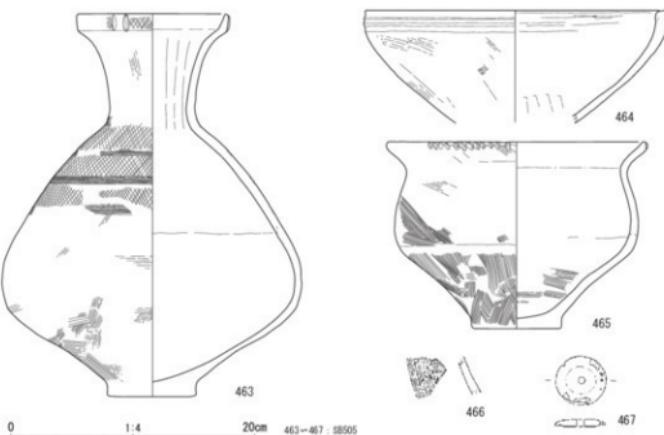
423は敲石で、絹雲母石英片岩の細長い円盤を使用しており、片面に敲打痕が見られる。

SB409出土遺物（第134図）424、425は壺の体部片で櫛描直線文、波状文がつく。

SB408出土遺物（第134図）428の口縁部は短く屈曲し、体部はやや下彫れする。内外面ともハケ仕上げである。

429は石錐である。花崗岩の円盤を使用しており、中央付近を敲打していくれを作っている。

SB411出土遺物（第134図）430は荒い櫛描直線文がつく。431は縦位の櫛描波状文がつく。432は沈線により無文帯を形成し、櫛描直線文がつく。433は櫛描による弧状文がめぐる。434、435は壺である。435は端部上下に刻みを入れる。436は緑色片岩製で、研磨痕が見られるものの、不明石製品である。



第136図 SB出土遺物（24）

SB501出土遺物（第135図） 437は嶺田式土器で、沈線で区画文をつくる。444は丸みを帯びた体部で上位に櫛描波状文直線文がめぐる。

SB511出土遺物（第135図） 440は櫛描直線文に縦位の直線文がつく。442は折返口縁である。443は面取りされた端部に刻みが入る。

SB513出土遺物（第135図） 438は上げ底の底部である。445は外反する口縁で刻みが入る。台部は、端部が外方へわずかに開く。

SB512出土遺物（第135図） 441は櫛描直線文に縦位の直線文がつく。446は嶺田式土器で、爪形文が巡る。

SB502出土遺物（第135図） 447は斜格子文がつく。448は四線文系土器の高坏で、口縁部は内湾する。4条の凹線が巡る。449はナデ仕上げで、端部は押圧が施される。

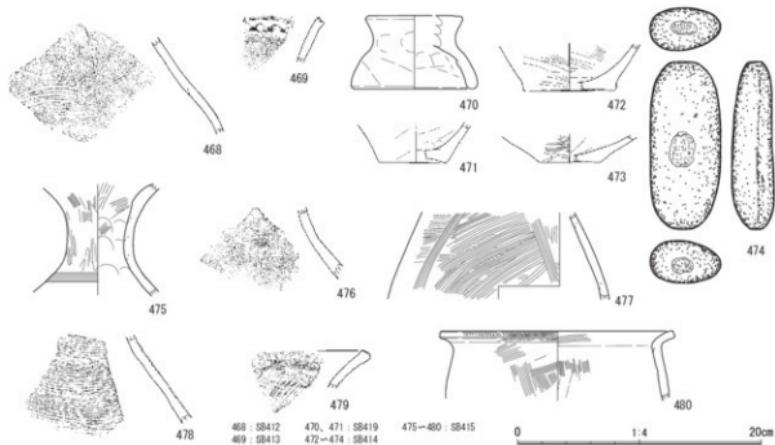
SB503出土遺物（第135図） 439は刺突文がめぐる。450、451は櫛描直線文が縦、横に施される。452は斜格子文がつく。453の口縁部は面取りされる。

SB520出土遺物（第135図） 454は嶺田式土器で、太い沈線が流水文状につく。455は嶺田式土器の頸部で、2条の沈線を施し、縦のハケ後、U字、逆U字状の沈線がつく。456は沈線で無文帶と斜格子文帯を形成する。457は櫛描直線文に山形文がつく。458は櫛描直線文が施される。459は口縁下に突帯を貼り付け、刻みを入れる。ハケ仕上げである。

SB504出土遺物（第135図） 460は櫛描波状文が認められる。461は甕で、刻みが入る。

462は磨製石鎌である。黄灰色粘板岩製で、全面を丁寧に研磨して仕上げてある。断面が平行四辺形になっていることからわかるように、縁辺は鋸行削離をするように磨いてある。

SB505出土遺物（第136図） 463は受口状口縁の細頸壺である。端面には斜格子文が巡り、2個で1單位の棒状浮文がつく。体部は無花果形で、体部上位に斜格子文をつけ、その後6条の櫛描直線文を4段施す。角江式である。464は四線文系土器の高坏で、外面はミガキ後、赤彩が施される。465は甕で、台部はつかない。短胴で、接合痕が観察できる。口縁は屈曲し、刻みがはいる。466は櫛描直線文に斜位の直線文がつく。467は骨角製の紡錘車である。径4.2cmで中央の孔径は0.5cmである。端部付近に2個で1



第137図 SB出土遺物（25）

単位の孔が穿たれる。

SB412出土遺物（第137図） 468はハケ調整後、ヘラ描文が施される。

SB413出土遺物（第137図） 469は甕で刻みがつく。

SB419出土遺物（第137図） 470は台盤状土製品である。471は甕底部に穿孔が1個つく。

SB414出土遺物（第137図） 472、473は平底甕の底部である。474は敲石で、灰緑色片岩の細長い円礫を使用し、両端と片面に敲打痕が見られる。

SB415出土遺物（第137図） 475は細い頸部で横位の櫛描直線文がつく。477は縦位の櫛描直線文間に斜位の櫛描直線文がつく。白岩式である。478は櫛描直線文、櫛描巻状文がつく。479は端部に刻みが入り、ヘラ描きの跳ね上げ文が施される。480は「く」の字に屈曲する四線文系の甕である。端部にはハケが認められる。

SB439出土遺物（第138図） 481、482は横位の櫛描直線文に縦位の櫛描直線文がつく。483は粗い櫛描の条線がつく。

SB420出土遺物（第138図） 484は細頸壺で、端部は面取りされる。体部上位には櫛描で区画された内部には斜格子文が施される。485は短い頸部をもち、体部は下位で強く屈曲する。三角状の無文帯をもち、その頂点には円形の浮文がつく。その内部にはミガキ調整が施される。縦位区画には斜位の櫛描直線文がつく。486、487は細頸壺の口縁部である。白岩式土器である。488は細長い頸部に丸みを帯びた無花果形の体部をもつ細頸壺である。外面は摩滅しており、調整は不明である。489は四線文系土器の高坏である。490は台付き甕の台部である。491は細く高い脚部で、端部は屈曲する。外面は縦方向のミガキ調整が施される。内面は不定方向のミガキ調整が施される。492は低い台部で内湾する。

493は四線文系土器の甕である。口縁部は短く屈曲する。体部上位は縦と横のハケ調整後、波状文、下に連弧文がつく。494～498は甕である。下端に刻みが入る。499は敲石で、含蝶中粒砂岩の細長い円礫を使用しており、一端に敲打痕が見られる。

SB421出土遺物（第139図） 500は磨製石斧である。閃綠岩製の太い石斧の基部で、刃部は蛤刃になっていると思われる。敲打によって全体の形を作った後に研磨をして仕上げている。

SB422出土遺物（第139図） 501は櫛描直線文に丁字文がつく。502は台付き甕の台部である。端部は内側に折り返され肥厚する。504は台付の鉢である。口縁は緩やかに外反する。外面の調整は不明である。

SB423出土遺物（第139図） 505の口縁部は外反し、端部には押圧が施され、跳ね上げ文がつく。506は櫛描直線文がつく。507は体部上位には沈線間に斜格子文が施され、上位には円形刺突文が巡る。508は細長い頸部にやや丸みをもつ体部である。外面は無文である。

509は敲石である。中粒砂岩の細長い円礫を使用しており、一端に敲打痕が見られる。510は磨製石斧で緑黒色カンラン岩製である。縁辺から平坦剥離を入れて全体の形を整えた後、全面を研磨して仕上げている。側面も研磨することで面を作っている。刃部は片刃になっている。

SB425出土遺物（第139図） 511は単純口縁の広口壺である。外面の調整は不明である。

SB427出土遺物（第139図） 512は受口状口縁の壺である。端面には条線を施した後に縦位の短線文、弧状文を施す。上端には刺突文がめぐる。頸部には櫛描直線文が施され跳ね上げ文がつく。513は四線文系土器である。514は浅い櫛描直線文がつく。

SB431出土遺物（第139図） 515は横位の沈線がつく。

SB432出土遺物（第139図） 516は幅広の櫛状工具を用い、直線文、波状文を施す。丸子式であろう。

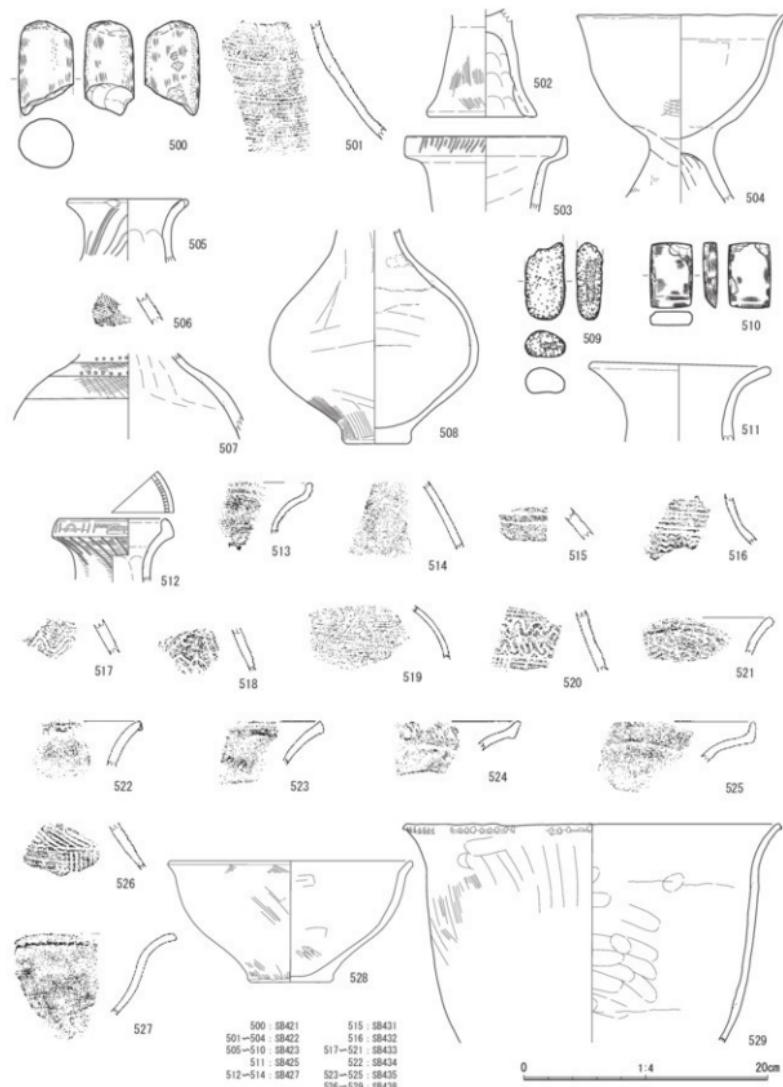
SB433出土遺物（第139図） 518、520は竹管状工具を用い、直線文、波状文が施される。丸子式であろう。519は横位のハケ後、「ハ」の字に櫛描直線文が入れられる。521は甕で、刻みはつかない。

SB434出土遺物（第139図） 522は口縁部に刻みがつき、頸部に沈線がつく。



第138図 SB出土遺物 (26)

遺物（住居址出土遺物）



第139図 SB出土遺物 (27)

SB435出土遺物（第139図） 523の口縁に浅い凹線が1条つく。524、525は受口状口縁で、524の端面に斜格子文がつく。

SB438出土遺物（第139図） 526は半截竹管状工具により波状文、縦位、横位に直線文が施される。丸子式土器である。527の体部はナデ仕上げで、口縁部は外反する。528は鉢で、口縁部は外反する。外面は摩滅しているもののハケ仕上げである。529は緩やかに外反する壺で、端部下に刻みが入る。

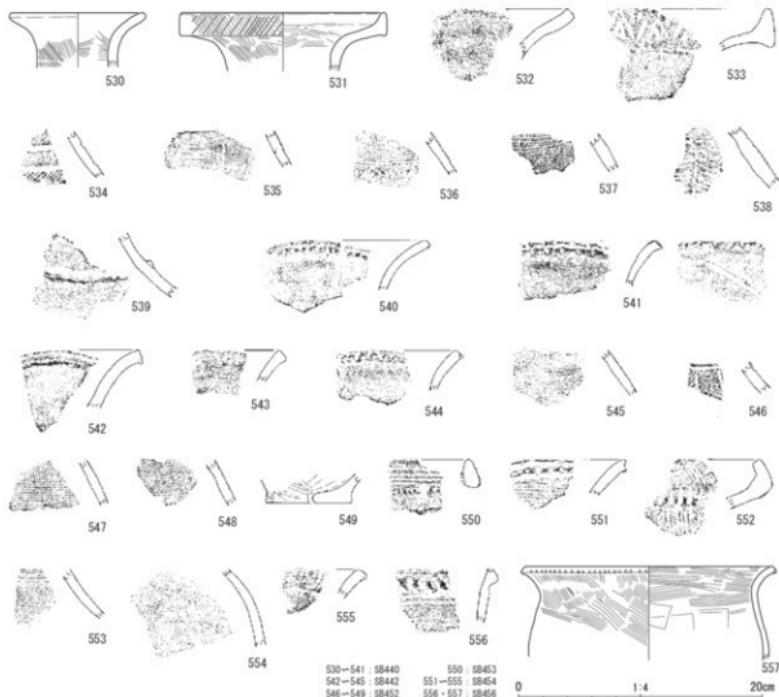
SB440出土遺物（第140図） 530は単純口縁で、ハケ仕上げである。531の端面に斜格子文がつく。532、533は受口状口縁壺である。533の端面は鋸齒状に沈線がつく。534はLR繩文が施され、太い沈線がつく。535は櫛描直線文に「ハ」の字に直線文が垂下する。536は櫛描直線文に刺突文がめぐる。541は端部上下に刻みが入り、外面はハケ調整である。内面上位にはRL繩文が施される。

SB442出土遺物（第140図） 542は端部に2条の凹線文がつく。543の端部は面取りされる。545は櫛描直線文に縦位の直線文がつく。

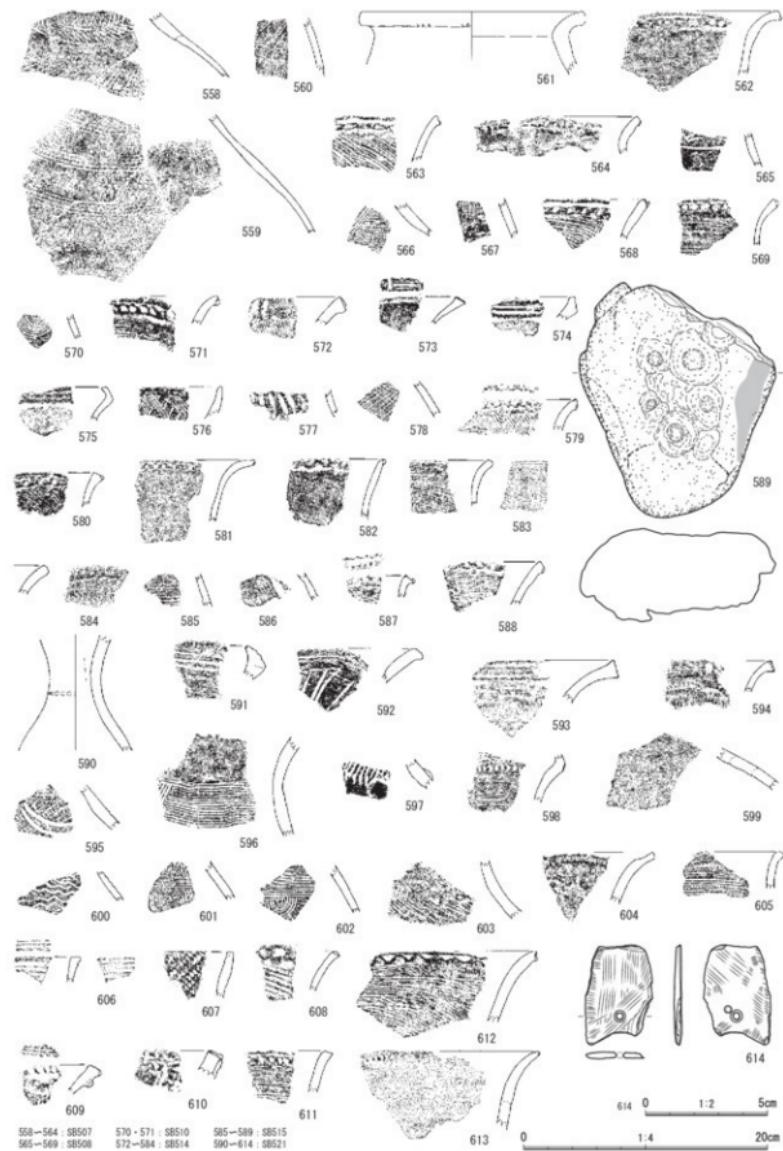
SB452出土遺物（第140図） 546は斜格子文に沈線がつく。547、548はハケ調整後、櫛描直線文がつく。549は壺底部中央に穿孔が施される。

SB453出土遺物（第140図） 550は内傾する口縁で、端面に4条の沈線がつき、屈曲部に刺突文が巡る。

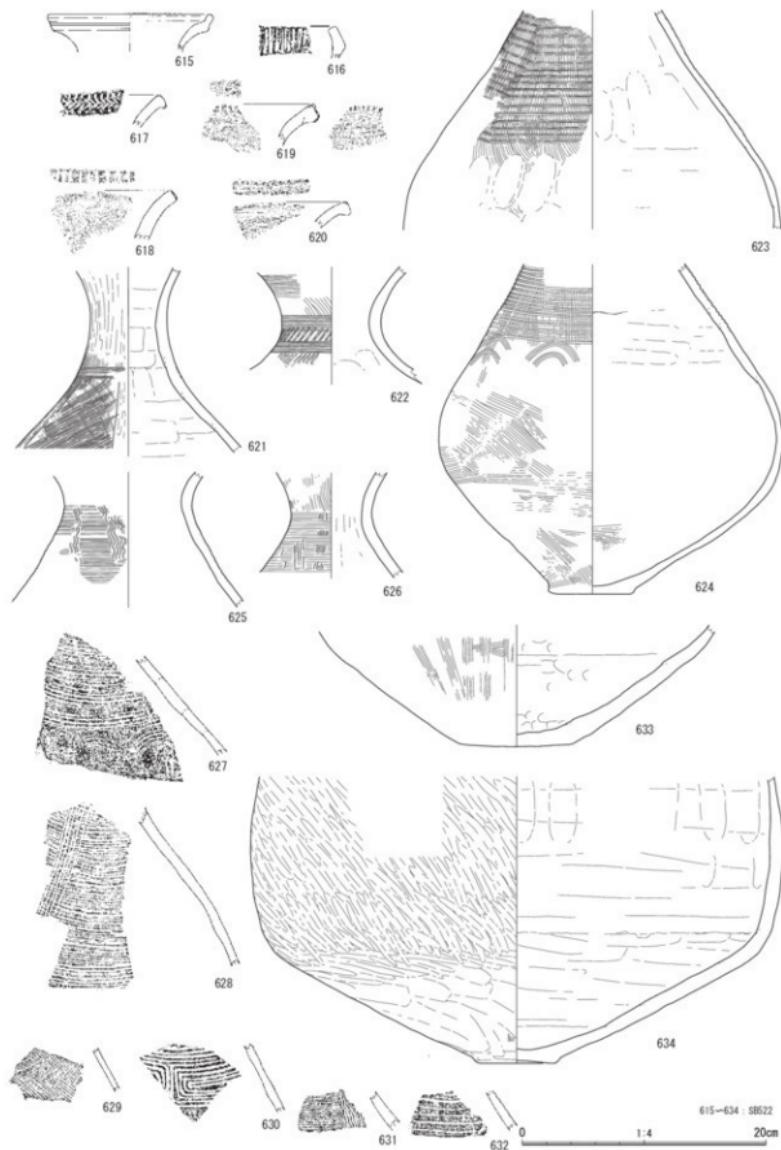
SB454出土遺物（第140図） 552は内傾する受口状口縁壺で端部は面取りされる。端面は斜方向の条線



第140図 SB出土遺物 (28)



第141図 SB出土遺物 (29)



第142図 SB出土遺物 (30)

が施される。屈曲部には刻みが巡る。553は縦、横に櫛描直線文が施される。554は櫛描直線文、波状文がつく。555は折返口縁で、斜位の刺突が入る。

SB456出土遺物（第140図） 556は低い突帯がつき、押圧が施される。557は短く外反する甕で、端部下に刻みが入る。ハケ仕上げである。

SB507出土遺物（第141図） 558は羽状文帯に無文帯がつく。559は単体構成の櫛描直線文が巡る。561は短く外反し、器壁は厚い。下端に刻みが入る。562～564は甕である。563は櫛条痕である。

SB508出土遺物（第141図） 565は斜格子文に太い連弧文、直線文がつく。566、567は櫛描直線文に縦位の直線文がつく。568、569は口縁下に突帯がつき、刻みがはいる甕である。

SB510出土遺物（第141図） 570は櫛描波状文がつく。571は口縁下に突帯がつき、刻みが入る。

SB514出土遺物（第141図） 572は面取りされ、端面には浮文がつく。573～575は凹線文系土器である。575は折返口縁である。576は櫛描きの斜格子文で、鉢の可能性がある。577は嶺田式土器で、太い沈線がつく。578は斜格子文がつく。579～583は甕である。580～582の下端に刻みが入る。583には刻みはつかず、端部に条線が施される。

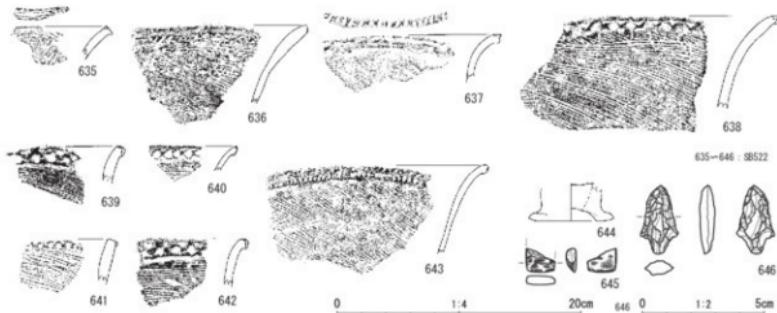
SB515出土遺物（第141図） 585は櫛描直線文がつく。586は嶺田式土器で、太い沈線がつく。赤彩が施される。587、588は甕である。

589は凹石である。礫岩の円礫を使用し、表面に敲打によるくぼみが見られる。

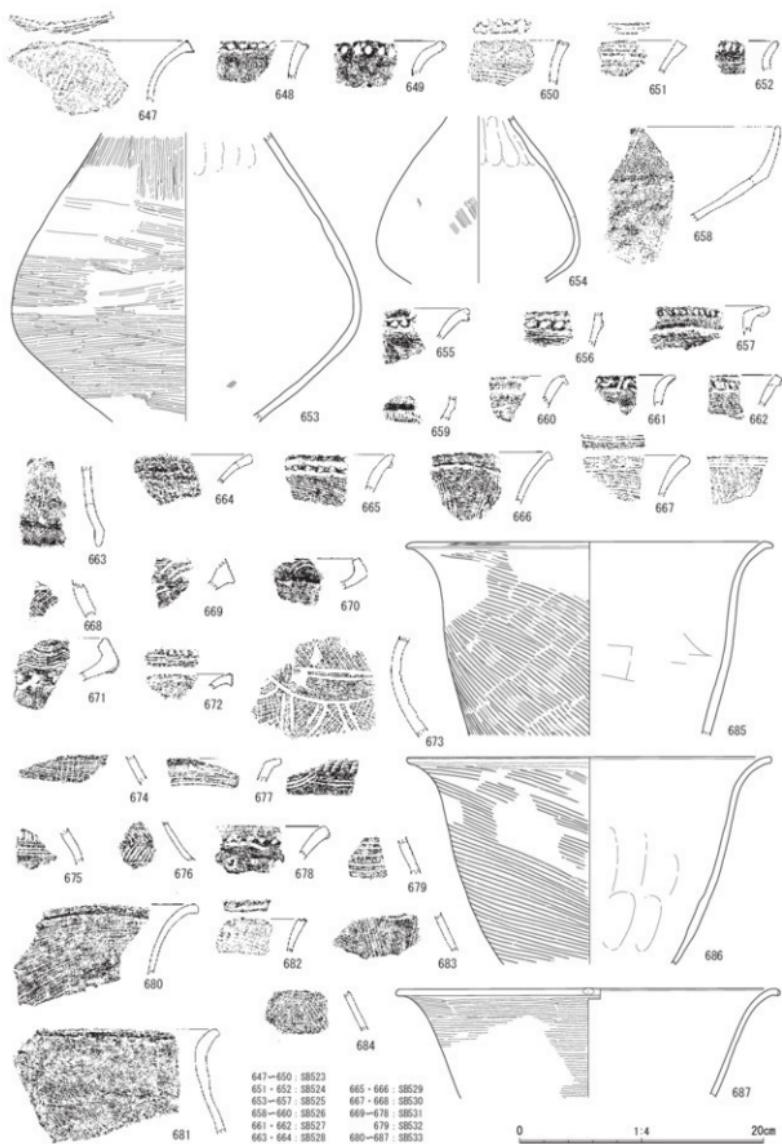
SB521出土遺物（第141図） 590は白岩式の細頸壺である。頸部に円形刺突文がつく。591は内傾する受口状口縁で、端面に沈線が2条巡る。592の端部は肥厚し、跳ね上げ文がつく。593は面取りされた口縁部に凹線がつく。594は肥厚した口縁に浮文がつく。595は斜格子文に連弧文が施される。596は横位の櫛描直線文に縦位の直線文がつく。597は羽状文に円形浮文が貼付される。598は屈曲部に刺突文が施される。599は櫛描直線文、波状文が施される。600は竹管状工具による波状文がつく。601は斜格子文に直線文がつく。602は直線文に連弧文がつく。604は強いナデによる屈曲する高坏の坏部であろうか。

605～613は甕である。605は端部に刻みがつかない。606の端部は面取りされ、条痕調整がみられる。丸子式であろう。607は外面にLR繩文が施される。608の端部は面取りされ、刻みが入る。外面は櫛条痕である。丸子式である。609は口縁下に突帯を付け、押圧痕をつける。端部は櫛条線後に刻みを入れる。610は面取された口縁端部に刻みを付け、縦に突帯をつける。612は口縁下に突帯がつき、刻みが入る。613は細かいハケ調整である。

614は有孔磨製石鎌で暗オリーブ色粘板岩製である。全面を研磨して非常に薄く仕上げてある。中央の



第143図 SB出土遺物 (31)



第144図 SB出土遺物 (32)

やや下側に穴を開けてあり、その横に穴を開けかけた痕跡がある。

SB522出土遺物（第142、143図） 615は受口状口縁で、凹線文系土器である。616は受口状で、端面に縱位に短線が入る。617は面取り部分に羽状文がつく。618は端部に刺突文をいれる。619は端面に条線を施し、上下に刻みを入れる。620は壺で、端部上に刻みが入る。621は細頸壺で、頸部はハケ後に縱方向のミガキ調整を施し、縱位のミガキ区画と斜格子文を文様構成としている。白岩式である。622は頸部に櫛描直線文間に斜位の櫛刺突文を施す。凹線文系土器であろう。623、624は角江式である。623は下膨れの体部で、ハケ調整後に櫛描直線文がつく。624は無花果形の体部で、上半に櫛描直線文が巡る。下位には櫛描きによる2重の連弧文を施す。625は太頸壺で、頸部に櫛描直線文を施し、縱位の波状文を垂下させる。626は頸部から体部上半にかけて櫛描直線文に縱位の短線文をつける。627も櫛描直線文に連弧文がつく。629は櫛刺突の羽状文が施される。630は嶺田系で、方形区画沈線が巡る。631は櫛描直線文に波状文が垂下する。633は壺底部で、擬口縁である。外面は縱横のハケ調整がみられる。634は大型の壺で、体部下位で強く屈曲し、上半にかけて垂直気味に立ち上がる。斜方向のミガキ調整が施される。

635～643は壺である。635は端部に条線を施す。丸子式である。636の外面はハケ調整で刻みはない。637は口縁下に突帯がつき、上端に刻みが入る。638～642は口縁下に突帯がつき、刻みがはいる。644は脚台部である。

645は小型削製石斧である。灰黒色粘板岩製で、全面を研磨した石斧の刃部である。刃部は片刃になっている。646はホルンフェルス製の打製石鎌で、両面に剥片の素材面が残っているため、素材剥片の厚みが分かる資料である。縁辺から平坦剥離を入れて、縁辺をやや内湾させている。基部には茎部を作り出している。厚みが残っているが、加工は進んでおり、完成品と思われる。

SB523出土遺物（第144図） 647は丸子式の広口壺である。648、649は端部に押圧痕がつく。650は広口壺で、端部に条線がつく。外面は幅広の条痕がつく。

SB524出土遺物（第144図） 651の端部には条線が施され、内面に櫛条痕がつく。

SB525出土遺物（第144図） 653は下膨れの体部の壺である。体部下位に横のミガキ、上位に縱のミガキが施される。654は下膨れの体部で調整は不明瞭である。656は口縁下に突帯がつき、押圧が施される。657は折返口縁である。

SB526出土遺物（第144図） 658は鉢で、口縁部は屈曲しながら立ち上がる。端面に鋸歯状にハケが施される。659は嶺田式土器で連続爪形文がつく。660は壺で突帯がつき、屈曲する。

SB527出土遺物（第144図） 661、662は壺で、662は口縁下に突帯がつく。

SB528出土遺物（第144図） 663は高環の脚部で端部は屈曲し、鋸歯状に文様がはいる。664はナデ仕上げの壺である。

SB529出土遺物（第144図） 665は端部に刻みがつく。666の口縁は面取りされ、跳ね上げ文がつく。

SB530出土遺物（第144図） 667は壺で端部、内面に条線が施される。668は沈線間に羽状文がつく。

SB531出土遺物（第144図） 669～671は内傾する受口状口縁である。669、670は連弧文がつく。671は端面には櫛描波状文が巡り、屈曲部には突帯がつき、押圧痕がつく。672は端部に櫛描条線文を施し刻みがつく。673は頸部に太い沈線で無文帶と斜格子文帯をつくり、斜格子文には「ハ」の字の沈線がつく。瓜郷式である。674は櫛描直線文に斜位の櫛描直線文が垂下する。675は櫛描直線文がつく。676は羽状文がつく。677は短く屈曲し、内面は刺突文、連弧文がつく。678は壺で、下端に刻みが入る。

SB532出土遺物（第144図） 679は櫛描直線文がつく。

SB533出土遺物（第144図） 680、681は壺である。680はナデ仕上げであり、瓜郷式であろう。681は短く外反し、端部を丸くおさめる。外面はハケである。685は端部が外方へ屈曲し、面を形成する。端部には条線がつき、外面は斜め方向の櫛条痕が施される。686は緩やかに外反し、端部は丸く收める。外面は

櫛条痕である。687は外方へ延び、685と同様に面を形成する。刻みはないものの、4カ所に押圧がみられる。横方向のハケ調整がみられる。683、684は櫛描直線文に斜位の櫛描直線文が垂下する。

2 土坑出土遺物

SK245出土遺物（第145図） 1は底部穿孔土器である。2は打製石斧である。粗粒凝灰質粘板岩製の大型剥片を使い、縁辺から平坦剥離を入れて全体の形を作り、軽く研磨して仕上げている。刃部が未形成のため、未完成品と思われる。

SK230出土遺物（第145図） 3は小型の甕で、平底である。体部下位で屈曲しながら口縁部は外反する。口縁部は突帯がつき、刻みが入る。4は連弧文が施される。

SK248出土遺物（第145図） 5、6は甕で、口縁部は指頭により4カ所がつまみ上がる。外面は条痕であろう。瓜郷式の甕であろう。

SK252出土遺物（第145図） 7は単純口縁の広口壺である。頸部に櫛描直線文が巡る。角江式である。8は細頸壺で肩の張らない形態である。体部上半に櫛描直線文帯がつき、櫛描波状文が垂下する。角江式である。11は4条の櫛描直線文間に斜格子文が施される。12は台盤状土器品である。

13～15は甕である。13は小型の台付甕である。体部は直線的に立ち上がり、頸部の屈曲は弱い。端部下端に刻みが入る。脚部は低く、内湾してふんばる形態である。15は「ハ」の字に聞く甕である。口縁部に突帯がつき、下端に刻みが入る。

SK244出土遺物（第146図） 16は単純口縁の広口壺である。頸部には斜位の連続刺突文がつく。17は受口状口縁である。18は直線文に波状文が垂下する。19の体部上半には波状文が巡る。20は高环の脚部であろう。

21～23は甕である。21の口縁部には突帯がつき、上端は細かい刻み、下端はやや大きめの刻みが入る。22の口縁部は緩やかに外反する。

24は敲石である。中粒砂岩の細長い円碟を使用しており、一端に敲打痕が見られる。側面の一部にも剥離が見られるが、使用によるものかどうかはっきりしない。

SK302出土遺物（第147図） 25は敲石である。中粒砂岩の細長い円碟を使用しており、敲打痕が見られる。26は受口状口縁壺で受部、頸部に斜線文が施される。

SK310出土遺物（第147図） 27は受口状口縁壺で端面に刺突文がつく。28、29は甕で、細長く長削を呈し、口縁部は短く外反する。面取りされた端部下に刻みが入る。

SK314出土遺物（第147図） 30は丸みを帯びた短胴の甕で口縁は短く外反する。

SK247出土遺物（第148図） 31は磨製石鎌である。黒色粘板岩製で、両面を研磨して非常に薄く仕上げてある。側面にも研磨痕が見られる。

SK249出土遺物（第148図） 32～35は管玉である。

SK246出土遺物（第148図） 36は磨製石斧である。緑灰色蛇紋岩製で、断面が円形になっているよう、太い石斧で、刃部は蛤刃になっている。

SK239出土遺物（第148図） 37は横線文に縱位の直線文が垂下する。

SK264出土遺物（第148図） 38は渦巻き状の沈線内に円形刺突文がつく。

SK270出土遺物（第148図） 39は弧を描くヘラ描沈線が施される。嶺田系土器であろう。

SK250出土遺物（第148図） 40は櫛描の羽状文がつく。丸子式土器であろう。41、42は嶺田式土器である。41は繩文を地文とし、ヘラ描沈線がつく。42は太い沈線と爪形文が施される。

SK317出土遺物（第148図） 43は内傾する受口状口縁壺で受部はヘラ描沈線内に斜線文がつき、屈曲部に刺突文が施される。頸部は跳ね上げ文がつく。



第145図 SK出土遺物（1）

50は打製石鏃である。珪質粘板岩製で、両面に剥片の素材面が残っており、素材の厚さがわかる資料である。縁辺から平坦剥離を入れ全体の形を作っている。茎部を作っているが、縁辺の先端付近にも茎部を作ろうとした抉りがあることから、最初はこちら側に茎部を作ろうとしたのかもしれない。

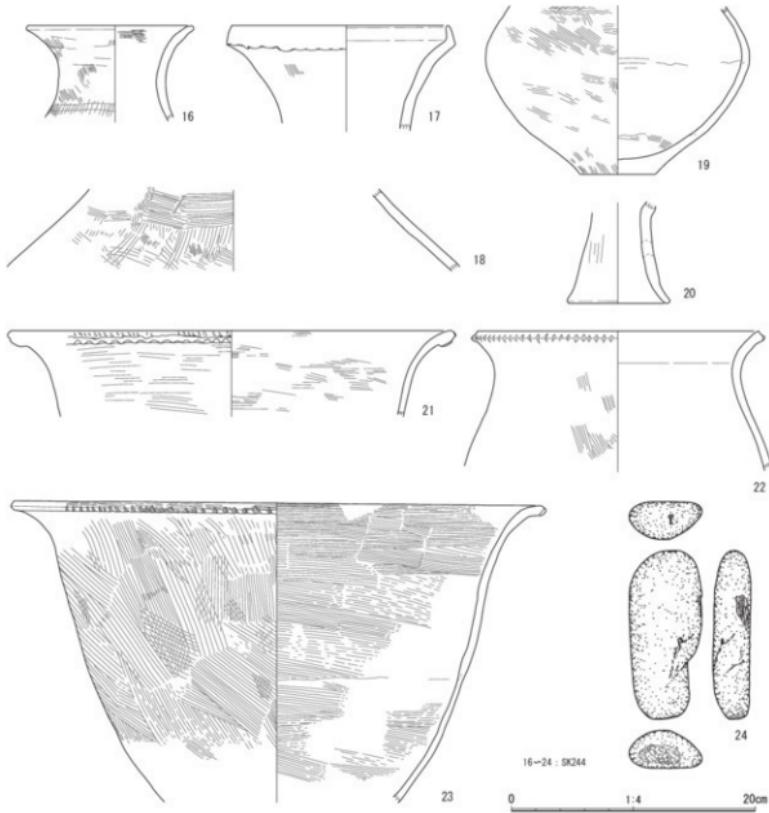
SK301出土遺物（第148図）44は櫛描直線文と波状文がつく壺である。

SK321出土遺物（第148図）45は櫛描直線文帯の下部に櫛刺突文が巡る壺で角江式である。

SK305出土遺物（第148図）46は無文帯を有し、櫛描直線文が施され、直線文が垂下する。瓜郷式である。

SK322出土遺物（第148図）47は横線文帯に短線文が垂下する。48は横線文帯に縦に直線文が垂下する。

SK303出土遺物（第148図）49は壺で「ハ」の字状に開く。斜めのハケ調整である。低い突帯がつき、刻みを有する。



第146図 SK出土遺物（2）

SK318出土遺物（第148図） 51は磨石である。花崗岩の円礫を使用しており、一端に敲打痕があり、研磨を受けたような部分もある。

SK412出土遺物（第149図） 52、55は細頸壺である。53は斜格子文がつく。54は口縁下に突帯がつく壺である。55の頸部から体部には櫛描直線文が巡る。

SK424出土遺物（第149図） 56はハケ調整後、櫛描直線文がつく。57、59は突帯がつかず、刻みが入る。58は端部下位に突帯がつき、刻みが入る。65は丈の低い壺である。

SK428出土遺物（第149図） 60は櫛描直線文に波状文が垂下する。61は櫛条痕が斜め方向に施される。62は長胴状で口縁部は短く緩やかに外反し、刻みは下端につく。外面は斜め方向に条痕が施される。

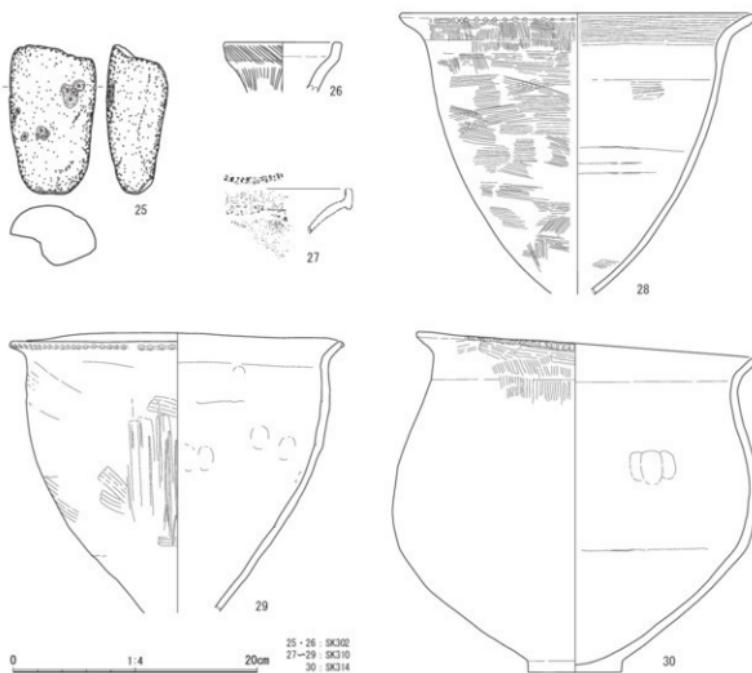
SK419出土遺物（第149図） 63は体部上位に波状文がつく。64は単純口縁の広口壺である。端部は面取りされる。頸部に櫛描直線文がつき、その下は波状文がつく。

SK426出土遺物（第150図） 66は細頸壺である。

SK407出土遺物（第150図） 67は頸部に低い突帯がつき、その上下に円形刺突文が巡る。

SK409出土遺物（第150図） 68は櫛描直線文と波状文で構成される。69は嶺田式土器である。爪形文と太い沈線がみられる。

SK411出土遺物（第150図） 70は口縁下に突帯がつく。71は押圧突帯を施す条痕文土器で、水神平式土器であろう。72は端部に網文を施し、外面はヘラ描きで綾目位に羽状文がつく。丸子式土器であろうか。



第147図 SK出土遺物（3）

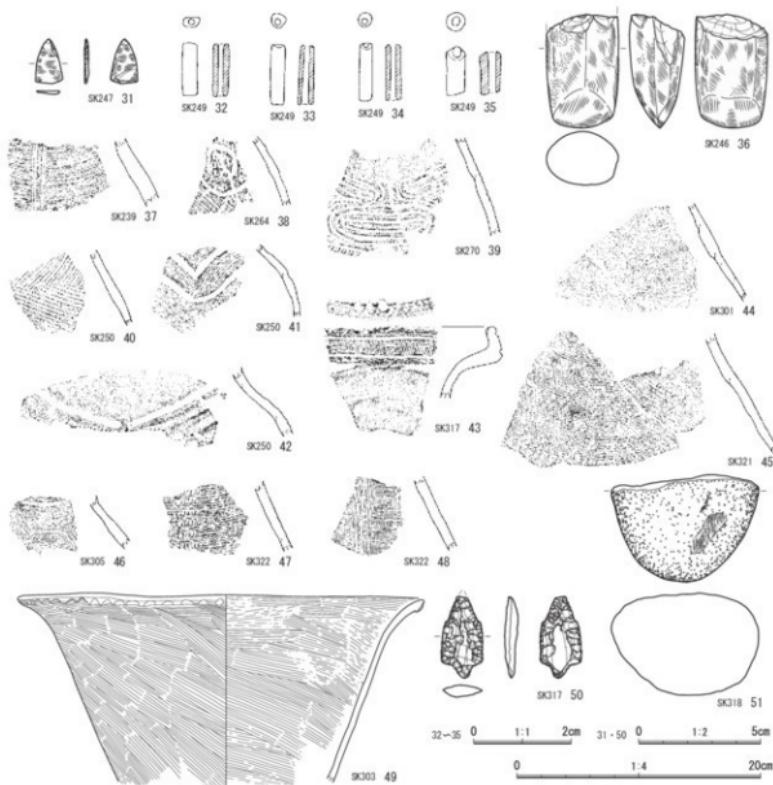
SK417出土遺物（第150図） 73、74は台盤状土製品である。73の脚部は内湾する。

SK418出土遺物（第150図） 75は受口状口縁壺である。受部に斜格子文がつく。76は口縁下に突帯があり、刻みを有する。77は櫛描直線文帶に直線文が垂下する。

SK421出土遺物（第150図） 78は櫛描直線文に縦位の直線文が垂下する。79は櫛描直線文と連弧文がつく。

SK425出土遺物（第150図） 80の端部はつまみ上がり、刻みが入る。外面には跳ね上げ文がつく。瓜郷式である。81はハケ調整後、櫛描直線文が巡る。角江式である。82は横位の櫛描直線文に、縦位の櫛描文がある。

SK429出土遺物（第150図） 83は斜格子文が施される。84は細い頸部で、肩の張らない形態である。外面はミガキ調整が施される。85、86は凹線文系土器の高坏である。87～90は台付壺である。口縁部は短く、「く」の字に屈曲し、長胴を呈する。凹線文系の壺であろう。外面はハケ調整である。88、89の体部上位は縦、斜位のハケが交互に施される。87の端部には細い刻みが入る。89の内部下半部分は縦方向に



第148図 SK出土遺物（4）

ケズリがみられる。90の脚部は口径に比して小さい。

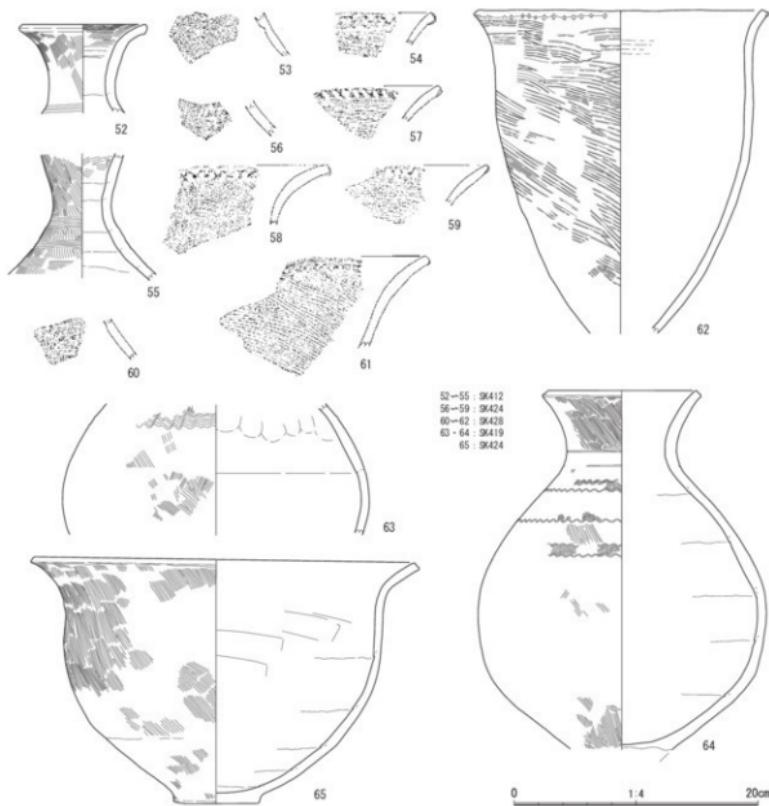
92は砥石である。流紋岩質凝灰岩の細長い円盤を使用しており、両面に研磨痕が付いている。

SK416出土遺物（第150図） 91は敲石である。中粒砂岩の細長い円盤を使用しており、一端に敲打痕が見られる。

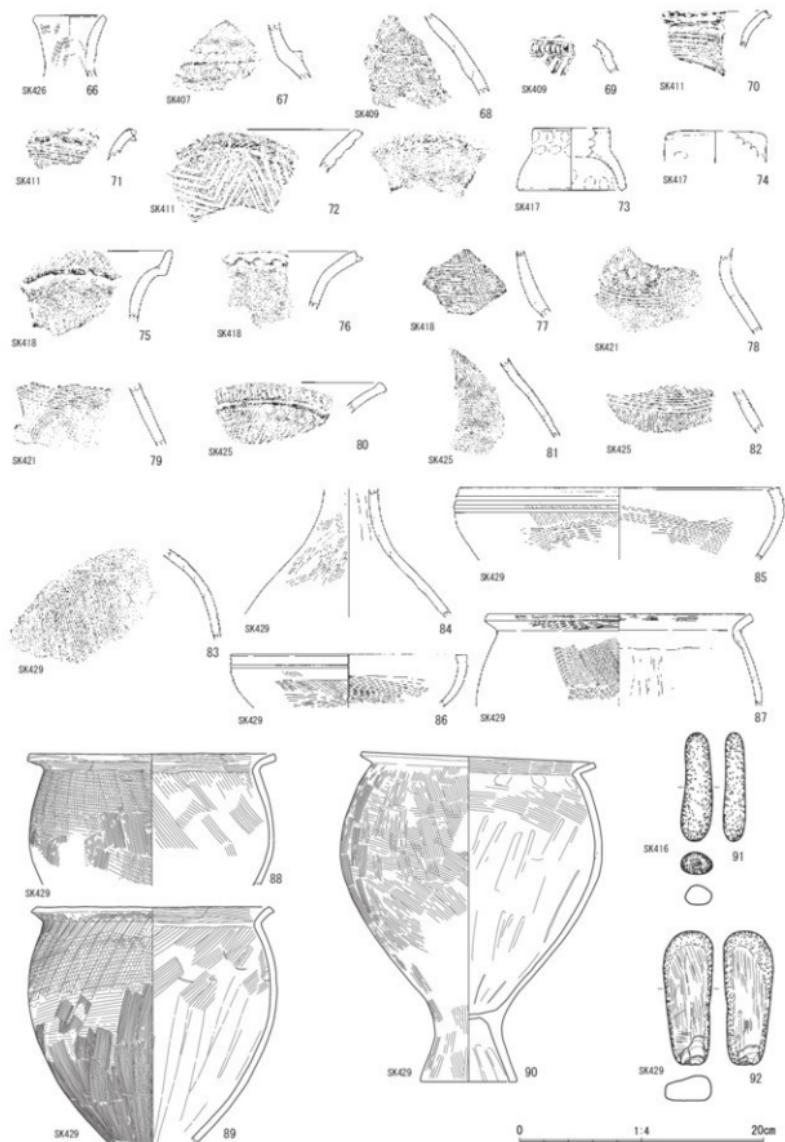
SK434出土遺物（第151図） 93は受口状口縁壺で、受部に波状文、屈曲部に円形刺突文、口縁端部に刺突文がつく。94は櫛描直線文に縦位の直線文が垂下する。95は横位の櫛描直線文と波状文がつく。97は「ハ」の字に聞く壺である。縦方向にハケ調整が施される。

SK443出土遺物（第151図） 98は大型の壺で、「ハ」の字に聞く。突帯を設け押圧による刻みを施す。外面は縦ハケ後に横位のハケ調整を施す。

SK456出土遺物（第151、152図） 99は球胴状を呈し、口縁部は短く屈曲する。端部は上方につまみ上がる。端面には細かい刻みが入る。外面はナデ仕上げで、体部下位にはミガキ調整が施される。三河の

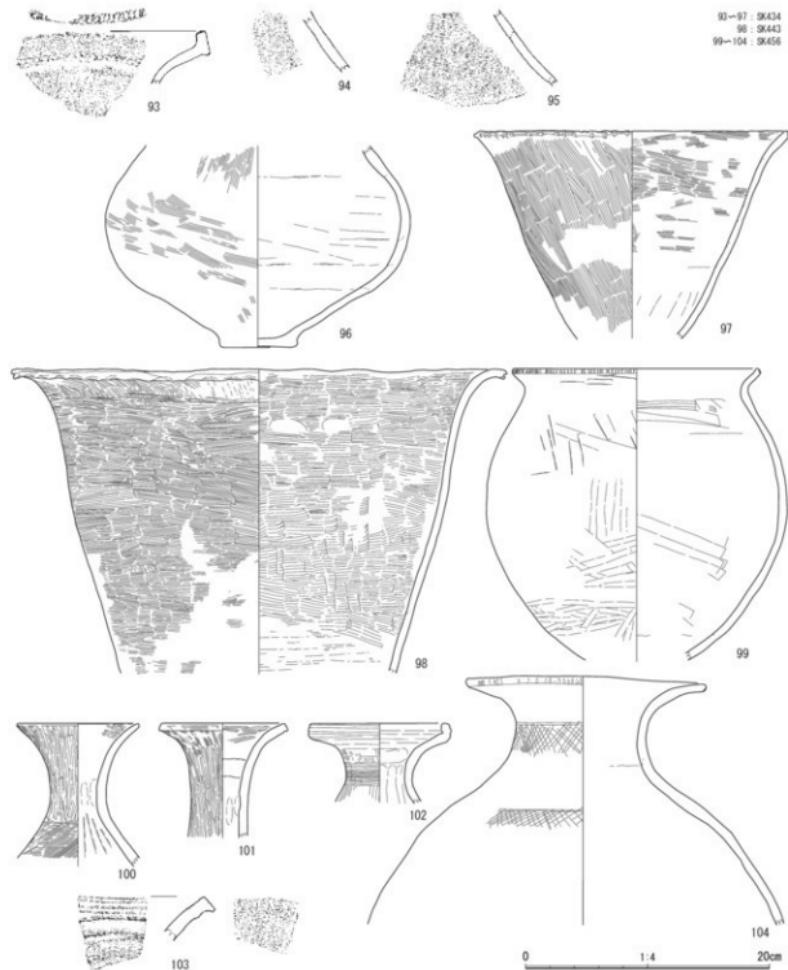


第149図 SK出土遺物（5）

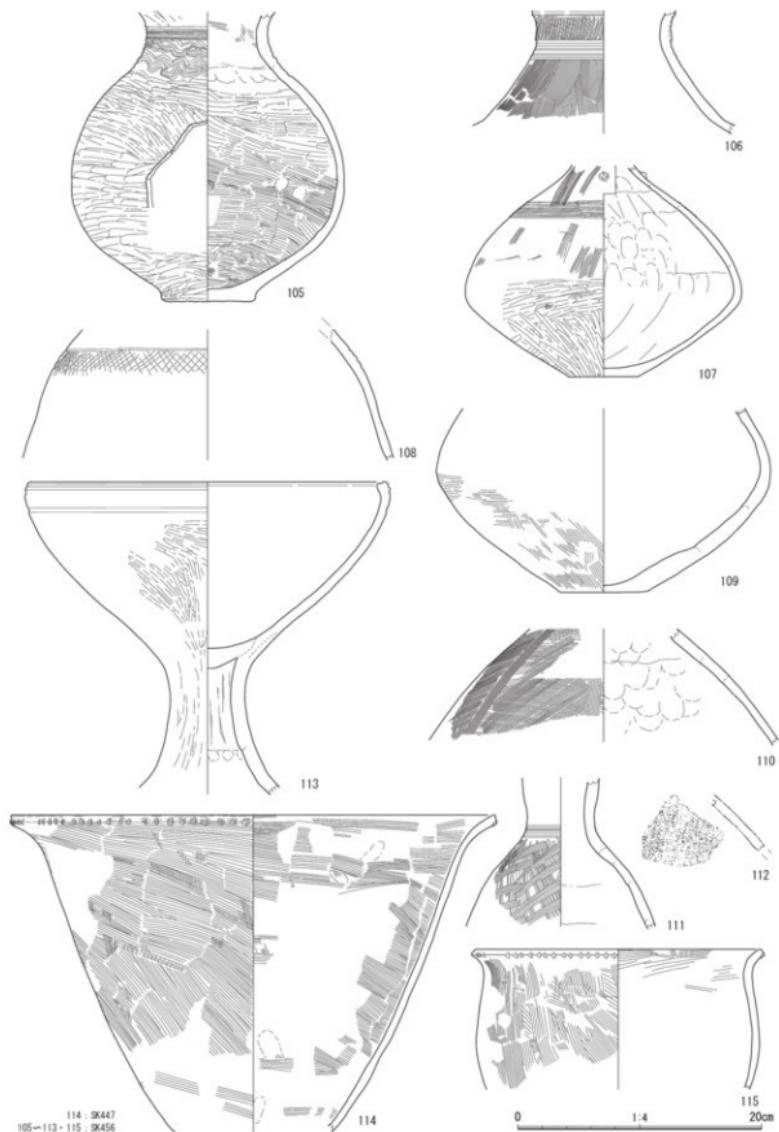


第150図 SK出土遺物（6）

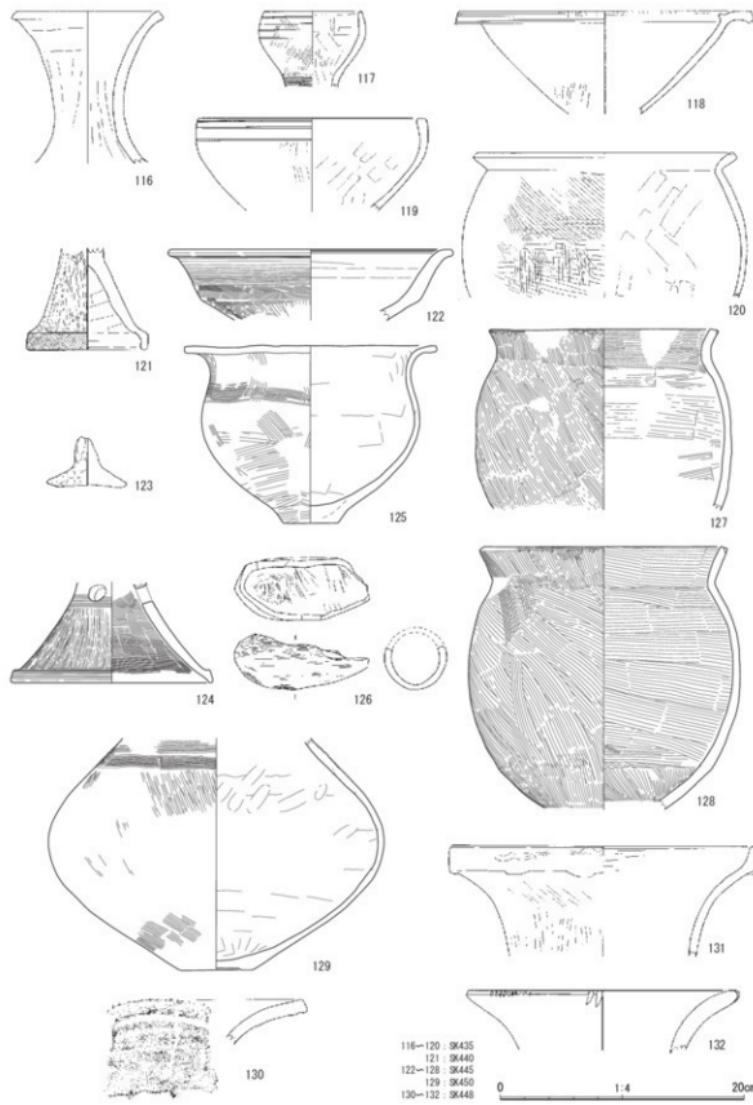
在來の古井式の甌であろう。100、101は細頸甌である。外面は縱方向のミガキ調整が施される。100の体部は斜線文がつく。102、103は凹線文系土器である。102は受口状口縁甌で、短い頸部をもつ。頸部に櫛描直線文がつく。103の端部は面取りされ、内面に扇形文が巡る。104は肩が張らない形態で、広口甌である。口縁部は外反し、端部には刻みを有する。頸部、体部上半にそれぞれ1条の沈線、斜格子文がつく。三河在來の土器で、長床式土器であろう。105は広口甌で頸部に直線文、波状文を2段つける。外面はミガキが施される。体部下位に穿孔が施される。106は頸部の櫛描直線文間に斜位の刺突文がつく。107



第151図 SK出土遺物（7）



第152図 SK出土遺物（8）



第153図 SK出土遺物（9）

は算盤玉状の体部に横位の櫛描直線文と縦位の直線文がつく。108は中位に沈線を1条巡らし、斜格子文が帯状につく。三河の長床式土器であろう。110、112は縦位区画内に斜格子文が施される。112は縦位の無文帯がつく。

113は高环である。凹線文系土器で、口縁部は内湾する。3条の凹線が入り、外面にはミガキ調整が施される。脚部は「ハ」の字に広がる。115の体部は垂直気味に立ち上がり、口縁部は短く外反する。

SK447出土遺物（第152図） 114は「ハ」の字に広がり、端部に刻みが入る。

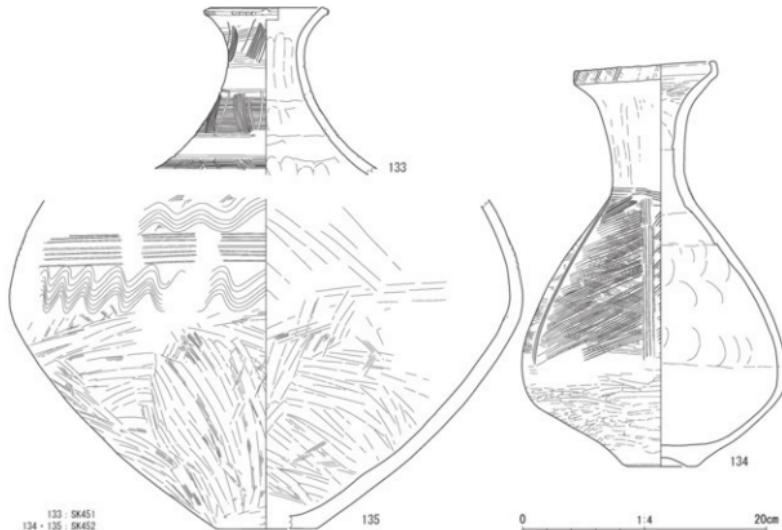
SK435出土遺物（第153図） 116は細頸壺である。117は内湾する口縁で、4条の凹線が巡る。凹線文系土器である。118の环部は直線的に伸び、口縁部は外方へ屈曲する。屈曲部には突窓が設けられる。端面には凹線が巡る。外面の調整は不明である。119は内湾する环部で、凹線文系土器の高环である。120は「く」の字に屈曲する甕である。外面はハケ仕上げである。凹線文系土器の甕であろう。

SK440出土遺物（第153図） 121は高环の脚部である。脚部端は折り返して屈曲させ、外面に斜格子文が入る。

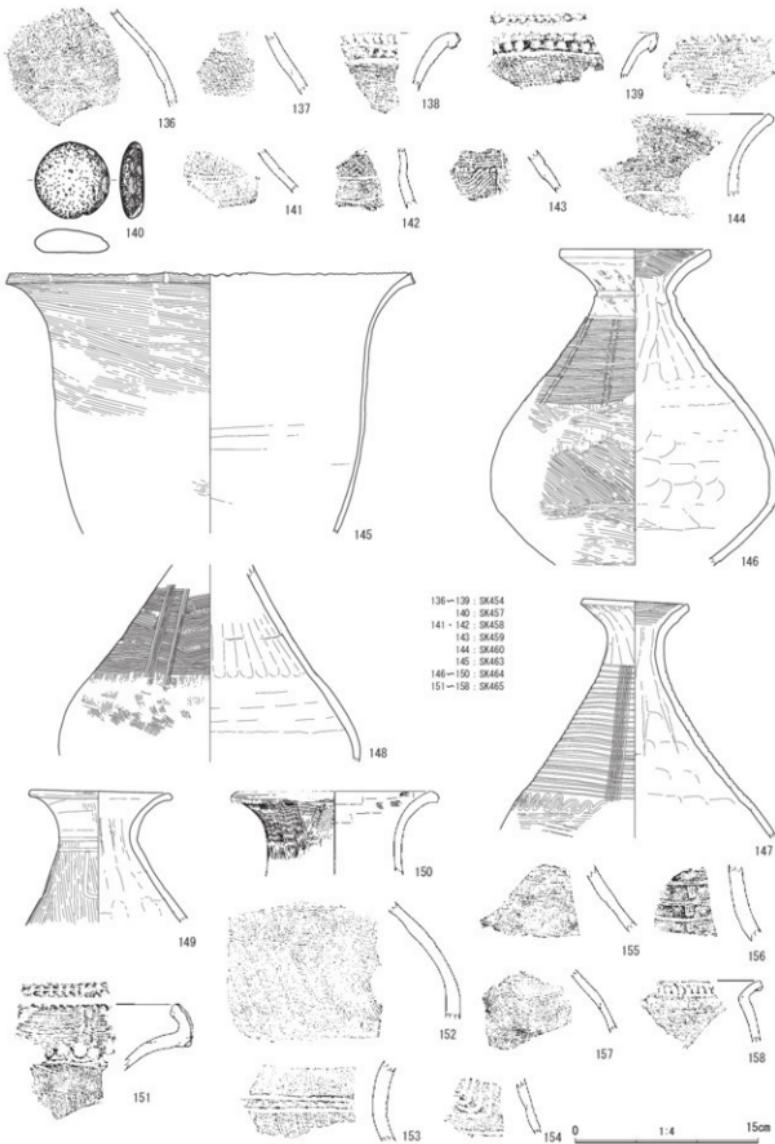
SK445出土遺物（第153図） 122は环部である。下部に稜を持ち、口縁が外反する。123は蓋である。中央にはつまみがつく。124は高环の脚部である。外面は櫛描直線文があり、縦方向のミガキが施される。端部は横ナデにより断面は三角形状を呈する。125は鉢である。体部は球胴状で口縁部は外反する。頸部から体部上位にかけて縦方向の櫛描直線文がつき、横位の櫛描直線文が巡る。弥生時代中期後半の土器であろう。126は筒形土器である。文様はない。127、128は甕である。端部は上方を向く。球胴状で、縦方向のハケ仕上げである。

SK450出土遺物（第153図） 129は算盤玉状の体部に櫛描直線文が巡り、縦位の波状文が垂下する。

SK448出土遺物（第153図） 130は面取りされた広口壺である。口縁下に1条の沈線が入る。131は受口状口縁広口壺で受部に波状文がつく。132は端部に刻みが入り、2個1単位の棒状浮文がつく。



第154図 SK出土遺物（10）



第155図 SK出土遺物 (11)

SK451出土遺物（第154図） 133は瓜郷式土器で、肩の張らない形態である。沈線に区画された無文帯、櫛描直線文帯から構成される。櫛描直線文帯には「ハ」の字状に直線文が垂下する。

SK452出土遺物（第154図） 134は受口状口縁の細頸壺である。受部は内湾し、櫛描きによる斜格子文が施される。細長い頸部には縱方向のミガキの痕跡が残る。体部は無花果形を呈する。体部下位は横向向のミガキが施される。頸部には櫛描直線文が1条巡り、縦位の櫛描直線文が垂下する。区画内には斜格子文がつく。白岩式土器である。

135は大型の壺である。櫛描直線文と振り幅の大きい櫛描波状文がつく。凹線文系土器であろう。

SK454出土遺物（第155図） 136は櫛描直線文間に波状文がつき、縦位の櫛描直線文が垂下する。137は櫛描斜線文と櫛描横線文で構成される。139は突帯がつき、端部上下に刻みが入る。外面は縦の条痕の



第156図 SK出土遺物（12）

後、横に条痕が施される。内面にも横位の条痕が施される。

SK457出土遺物（第155図） 140は敲石である。流紋岩の扁平な円盤を使用しており、側面に敲打痕と敲打によるとと思われる剥離が見られる。

SK458出土遺物（第155図） 141、142は瓜郷式土器である。沈線で区画された無文帯にそれぞれ斜格子文帯、斜線文帯がつく。

SK459出土遺物（第155図） 143は連弧文がつく。

SK460出土遺物（第155図） 144は広口壺で、外面は横線文が施され、頸部に1条の沈線がつく。

SK463出土遺物（第155図） 145は緩やかに外反する壺で端部は面取りされる。端部上端に刻みが付けられる。外面は斜め方向のハケ調整である。

SK464出土遺物（第155図） 146は肩の張らない形態で、短い頸部をもつ。頸部に1条の沈線が巡る。体部は複帯構成の櫛描直線文に2本1単位の櫛描きの短線文が垂下する。147は短い頸部で、口縁は外反する。体部に櫛描直線文帯がつき、最下部に横位の櫛描波状文が巡る。直線文帯には縱方向の直線文が垂下する。148は櫛描直線文に縱方向の櫛描直線文が垂下する。146～148は角江式である。149は短い頸部に2条の沈線がつき、U字文がつく。嶺田系の土器であろう。150は端部が肥厚する広口壺である。ハケ仕上げである。

SK465出土遺物（第155図） 151は内傾する受口状口縁壺で、受部に櫛描直線文が2条つく。端部には刺突文が巡り、屈曲部は押圧が施される。また、刻みが入った棒状浮文が受部につく。152は羽状にハケが施され、上位には波状文がつく。153は沈線による無文帯を有する。154は沈線により重四角文を構成する。156は櫛描直線文帯に縱位の短線文が垂下する。157は瓜郷式土器で、細い沈線間に櫛描直線文帯と無文帯を有する。158は短く屈曲する壺で、端部に刻みが大きく入る。

SK462出土遺物（第156図） 159は「ハ」の字に開く壺で、口縁部は横ナデで仕上げる。外面は斜めの条痕が施される。

SK466出土遺物（第156図） 160は櫛描直線文に縱位の短線文が垂下する。162は櫛描直線文帯の最下部に連弧文がつき、縱位の直線文が垂下する。

SK468出土遺物（第156図） 161は単体で櫛描直線文がつき、間には円形刺突文が施される。直線文には縱位の短線文が垂下する。163、164は壺で、163の端部に刺突文がつく。

SK471出土遺物（第156図） 165は沈線による無文帯があり、沈線の間に斜格子文、連弧文がつく。166、167は端部に刻みが入る。168は鉢で、端部は面取りされる。

SK472出土遺物（第156図） 169は口縁下に突帯がつき、上下に刻みが入る。

SK477出土遺物（第156図） 170は丸子式の壺である。171は瓜郷式で、櫛描直線文帯と無文帯を有する。

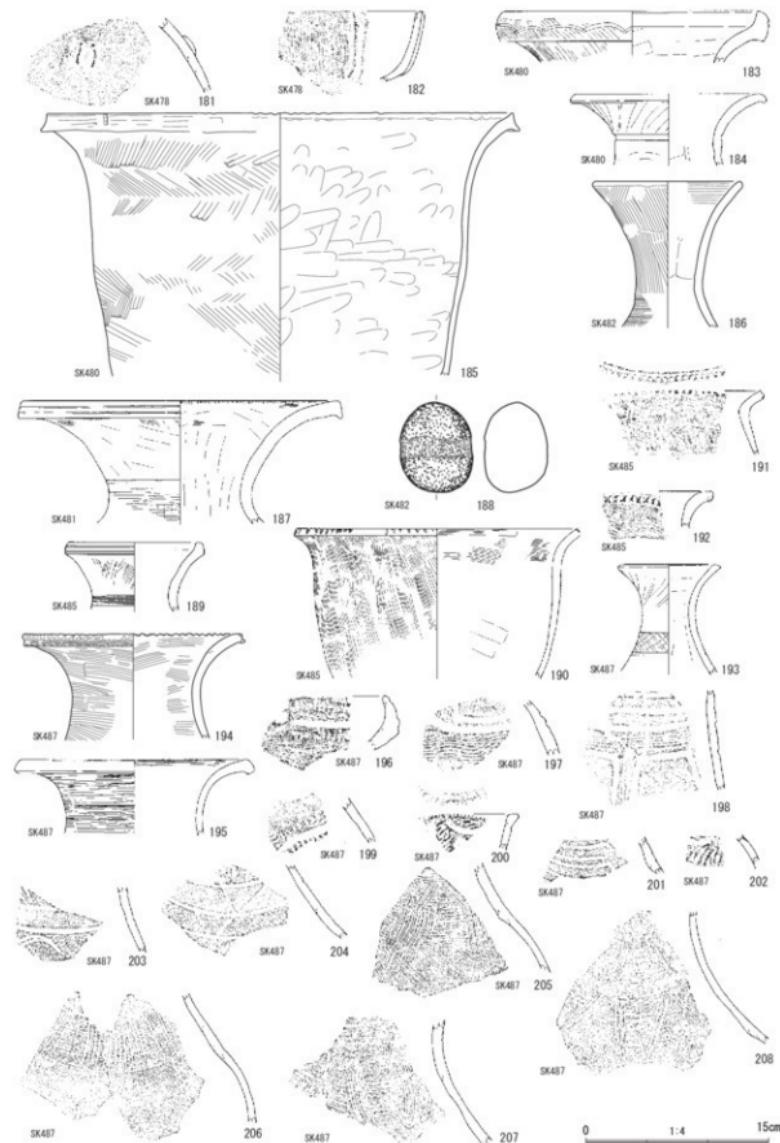
SK488出土遺物（第156図） 172は高环の脚部である。接合部には櫛描刺突文、押引文がつく。脚部端は折り返して屈曲させる。外面には櫛描刺突の斜格子文が施される。菊川式である。

SK491出土遺物（第156図） 173は内傾する受口状口縁壺で、受部に斜線文を施し、2条の沈線が巡る。外面は条線文がつく。瓜郷式である。

SK492出土遺物（第156図） 174は沈線内に縄文を充填する。175は櫛描直線文に縱位の直線文が垂下する。

SK496出土遺物（第156図） 176は細頸壺で外反する。ハケ仕上げである。白岩式土器である。177は広口壺で、端部に条線文がつき、部分的に押圧がつく。外面は縦の条線文がつく。178は瓜郷式土器で、無文帯と櫛描直線文帯がある。179は端部に刻みが入る壺である。

SK495出土遺物（第156図） 180は敲石である。流紋岩の細長い円盤を使用しており、両端に敲打痕と



第157図 SK出土遺物 (13)

敲打によるとと思われる剥離が見られる。

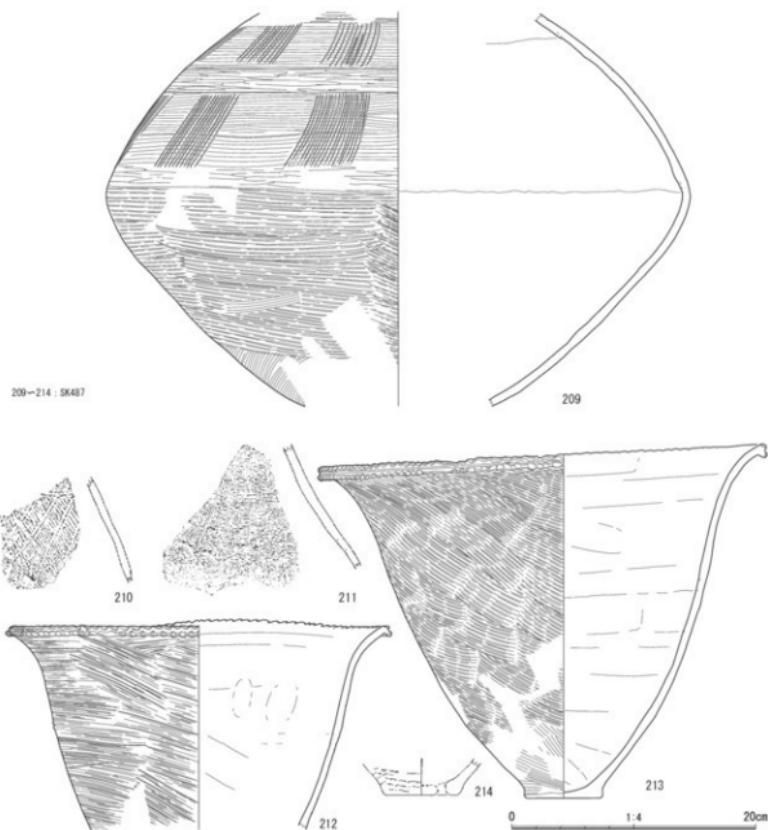
SK478出土遺物（第157図） 181は体部に扇形文、櫛描直線文がつく。その下部には棒状浮文がつく。182は複合口縁壺で、複合部には振り幅の大きい櫛描波状文がつく。棒状の粘土帯がつく。後期後半であろう。

SK480出土遺物（第157図） 183は受口状口縁壺で、連弧文がつく。184は頸部に1条の沈線がつく。外面に跳ね上げ文があり、瓜郷式であろう。185の端部は三角形を呈し、垂下する。外面は横に羽状文が施される。嶺田式の壺であろう。

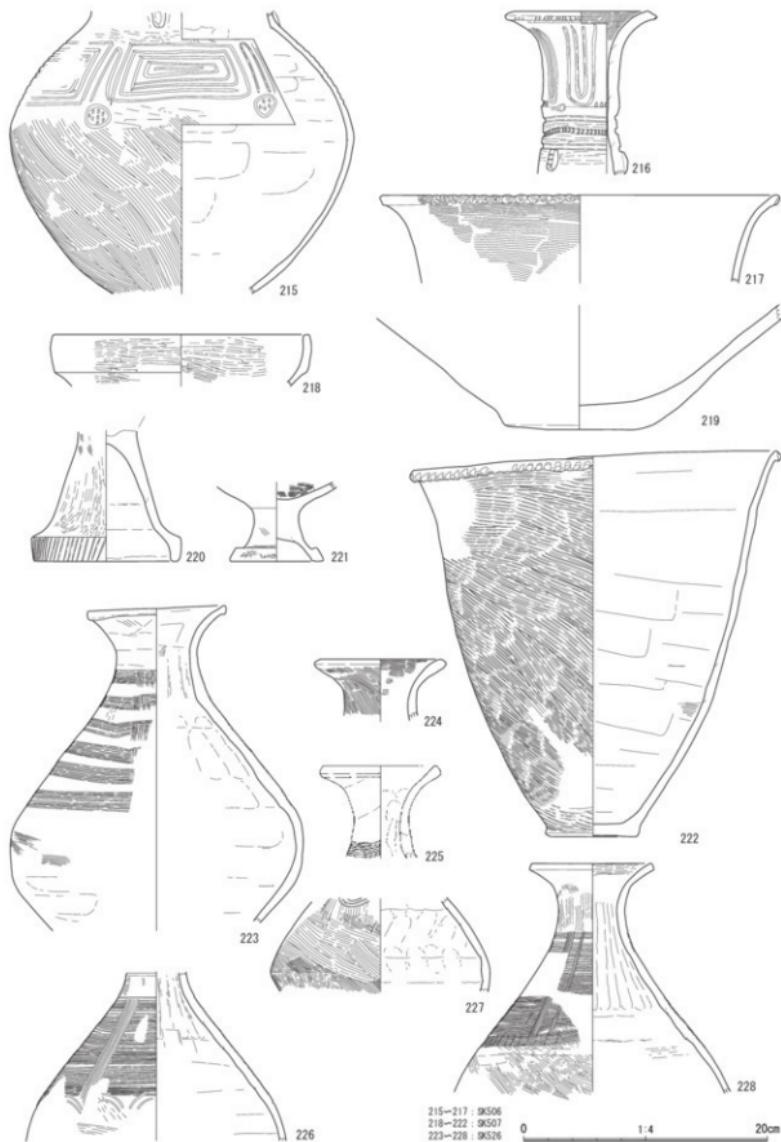
SK482出土遺物（第157図） 186は細頸壺で、頸部に櫛描直線文がつく。白岩式であろう。

188は石錐である。花崗岩の円錐を使用しており、中央付近を敲打してわずかにくびれを作っている。

SK481出土遺物（第157図） 187は面取りされた広口壺である。端部には細い沈線がつき、内面に円弧



第158図 SK出土遺物（14）



第159図 SK出土遺物 (15)

文が巡る。

SK485出土遺物（第157図） 189は凹線文系土器の受口状口縁壺である。2条の凹線が受部につき、頸部に櫛描直線文が巡る。190～192は壺である。190の端部は面取りされ上方から刻みを入れる。外面は縦のハケ仕上げである。

SK487出土遺物（第157、158図） 193は細頸壺である。頸部に沈線があり、その間に斜格子文が入る。194、195は広口壺である。横方向の櫛描きがつく。194の端部は両端に刻みを配し、195は横ナデで仕上げている。丸子式土器であろう。

196～202は嶺田式土器である。196は受口状口縁壺で、太い沈線と爪形文がつく。197、198は櫛描きとヘラ描沈線で構成される。199はヘラ描沈線と爪形文である。200は長頸壺の口縁部で、縄文を地文に太い沈線で構成される。端部は刻みが入る。201はヘラ描沈線のみが施される。

203～208は瓜郷式土器である。203、204は太い沈線区画で構成されるもので、206は細い沈線区画を有する。207、208は区画のない無文帶で、縦位に「ハ」の字の直線文が施される。

209は大型の壺で、算盤玉状を呈する。体部下位には横方向のハケ、沈線で区画された無文帶には横方向のミガキが施され、いわゆる付加沈線研磨技法である。櫛描直線文帶には縦位に櫛描直線文が垂下する。瓜郷式土器である。210は斜格子文がつく。211は櫛描直線文帶の下部は波状文がつき、縦位に櫛描直線文が垂下する。角江式である。

212、213は壺で、口縁は大きく聞く形態である。突帯がつき両端に刻みが入る。内面は横ナデで仕上げる。外面は斜め方向の櫛条痕であろう。214は底部穿孔土器である。

SK506出土遺物（第159図） 215、216は嶺田式土器である。215は長頸壺の体部で丸みを帯びる。体部上位には重四角文が横位につき、その間には逆U字文、刺突を施した円文がつく。216は長頸壺の口縁部で端部は面取りされ、外方へ伸びる。端部は刻みが入る。外面はヘラ描きによるU字文がつき、沈線、爪形文が施される。棒状浮文は3ヵ所に付けられる。217は壺で、刻みを有する。外面は横ハケである。

SK507出土遺物（第159図） 218は鉢の可能性がある。横方向にミガキ調整が施される。220は高环の脚部で、端部に櫛刺突文がつく。221は低い脚部で、端は屈曲する。端面に櫛描波状文が施される。222は長胴を呈し、体部は直線的に伸びる。端部は突帯がつき、刻みを有する。

SK526出土遺物（第159、160図） 223～228は角江式である。223は短い頸部で、無花果形を呈する。端部はやや肥厚する。体部上半に櫛描直線文が施され、縦位に櫛描短線文がつく。226は頸部に沈線による無文帶をもつ。体部上半は櫛描直線文に縦位の櫛描直線文が垂下する。横位の櫛描直線文帶の下部には連弧文がつく。228は短い頸部に肩の張らない形態である。口縁端部は面取りされる。櫛描直線文帶に縦位の櫛描直線文が垂下する。横位の櫛描直線文帶の下部には簾状文が巡る。229～232は壺の破片である。230、231は櫛描きによるもの、229はヘラ描きによるもので、瓜郷式である。232は縦位に櫛刺突が垂下する。233～235は壺の口縁部である。口縁下に突帯を有し、刻みを施す。

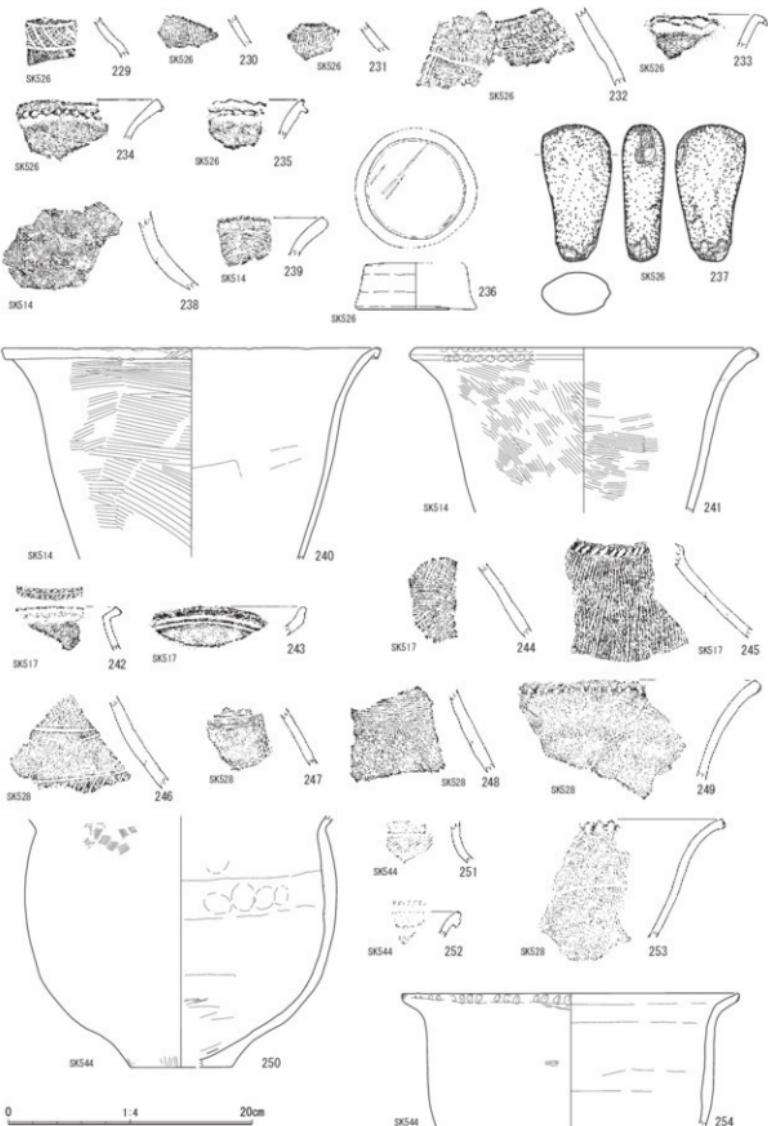
236は台盤状土器品である。円柱状を呈する。

237は敲石である。中粒砂岩の細長い円盤を使用し、両端に敲打痕と敲打による剥離が見られる。

SK514出土遺物（第160図） 238は櫛描波状文がつく。240、241は壺である。突帯がつき、端部上下に刻みを入れる。外面はハケ調整である。

SK517出土遺物（第160図） 242は凹線文系の壺である。「く」の字に屈曲し、端部に細かい刻みを入れる。243は受口状口縁壺である。244は櫛描直線文に斜格子文がつく。245は突帯に刻みを入れる。ハケ仕上げである。

SK528出土遺物（第160図） 246はヘラ描沈線間に斜格子文がつく。247、248は櫛描直線文が施される。249、253は面取りされた壺で、端部に細かい刻みが入る。外面は縦ハケが施される。



第160図 SK出土遺物 (16)

SK544出土遺物（第160図） 250は球胴状を呈する甕である。254の端部は外方へ伸び、端部はナデによりつまみ上がる。端部には刻みが入る。外面は摩滅しており調整は不明である。

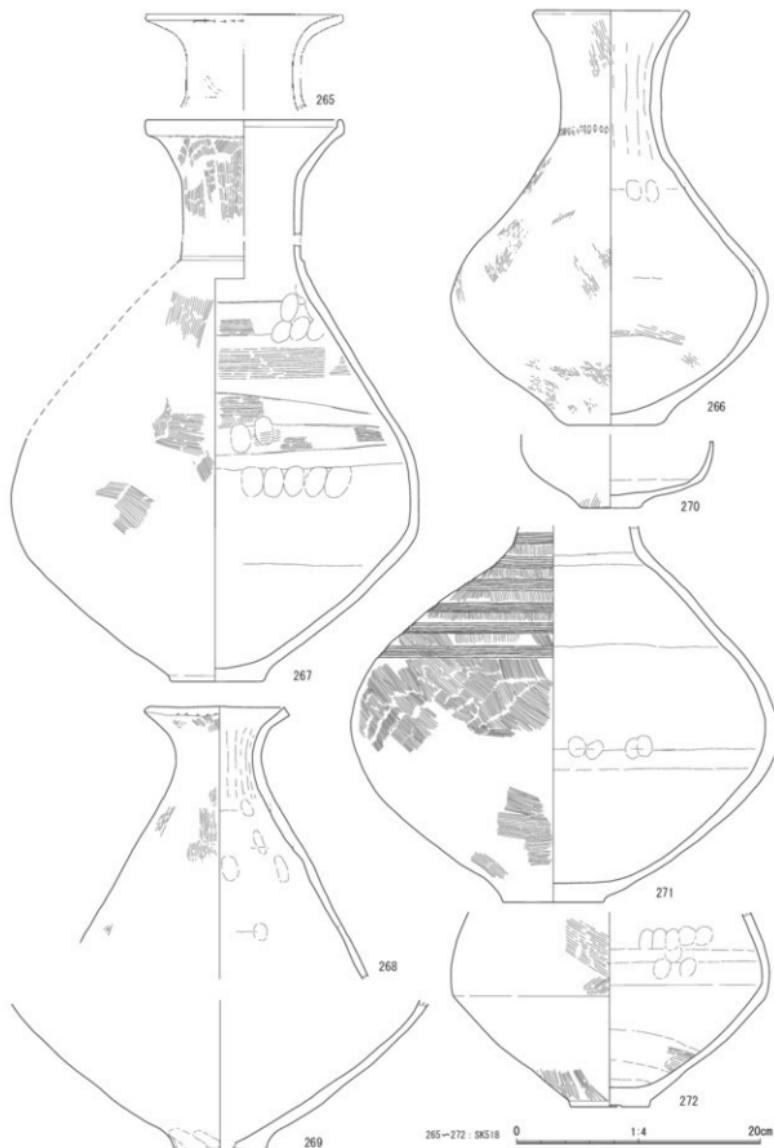
SK518出土遺物（第161～165図） 出土状況から一括性の高い資料である。壺と甕で構成され、色調はすべて明褐色系で占められる。西遼江のIV様式にあたり、角江式である。今回の資料の中では四線文系土器を含まない。

255～261は広口壺である。端部は面取りされたもの、丸く仕上げるものがある。257は端部に刻みが入る。260は頸部には刺突文、直線文、山形文がみられる。櫛描直線文が施されるものは255、262がある。262～264は体部である。259、262は同一個体の可能性が高い。262は櫛描きの山形文、直線文、簾状文がつく。263、264は櫛描直線文帯の下部には扇形文が巡る。

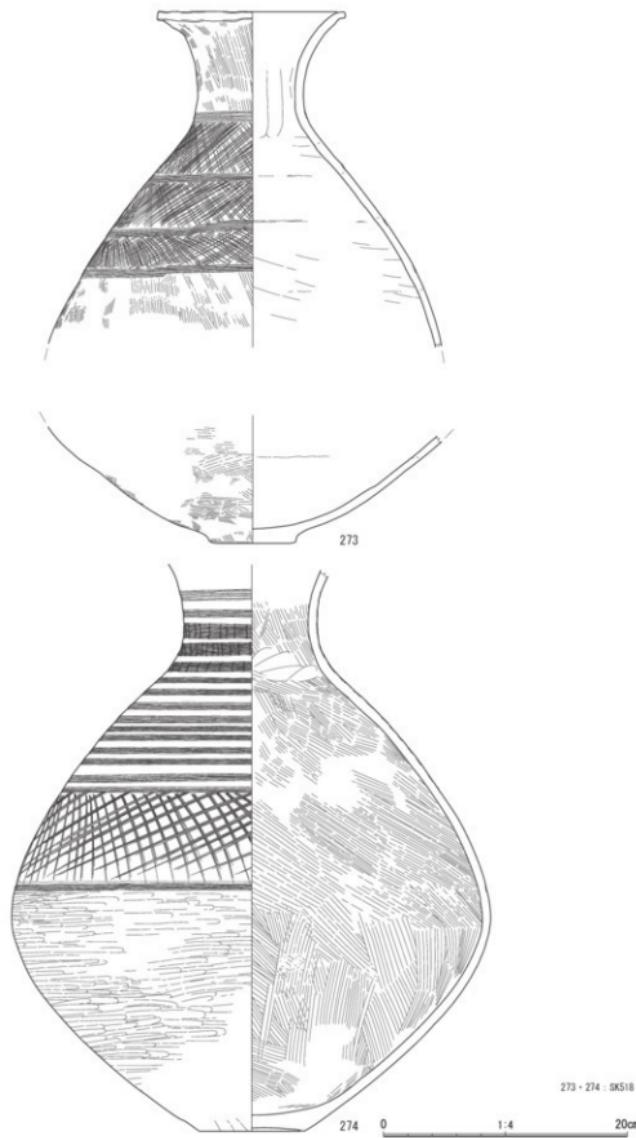
266は単純口縁の壺で頸部に刺突文が巡る。外面はハケ仕上げである。267は受口状口縁広口壺である。



第161図 SK出土遺物 (17)

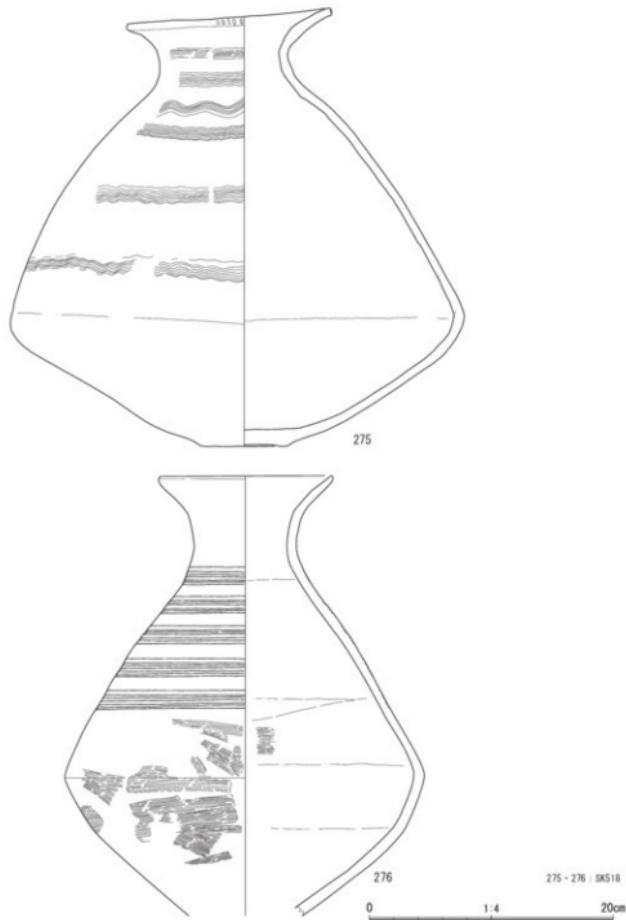


第162図 SK出土遺物 (18)

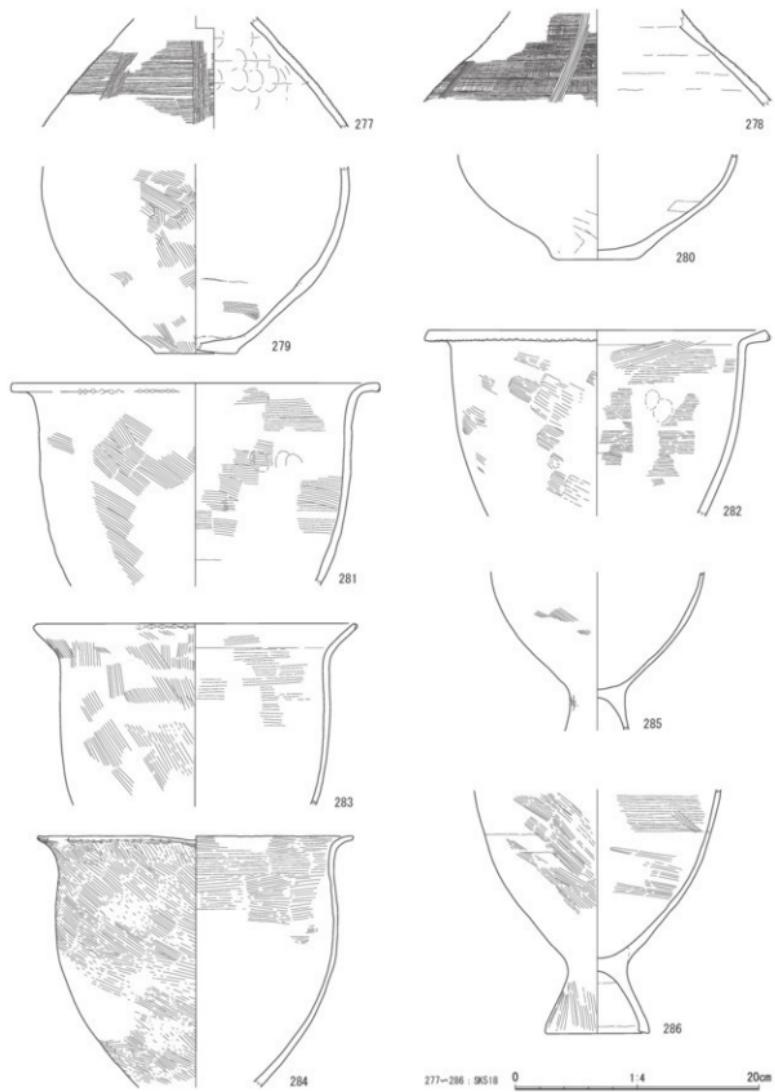


第163図 SK出土遺物 (19)

受部下端に刻みを有する。無花果形を呈し、外面はハケ仕上げである。268は肩の張らない形態で面取りされる。端部に刻みが入る。271は丸みを帯びた算盤玉状の体部にハケ後、櫛描直線文を6条施す。273は単純口縁の広口壺で、肩の張らない形態である。櫛描直線文間に斜格子文を3段施す。274は広口壺で、頸部から体部上位は櫛描直線文を16段施す。櫛描直線文間に櫛描の斜格子文を施す。体部下位は横方向のミガキ調整が施される。275は短い頸部に体部下位で強く屈曲する形態である。口縁端部は面取りされ、刻みを有する。頸部から体部下位にかけて櫛描直線文、波状文が施される。波状文には振り幅の大きいものと小さいものがある。276は単純口縁の広口壺である。体部下位で強く屈曲する形態であ



第164図 SK出土遺物 (20)

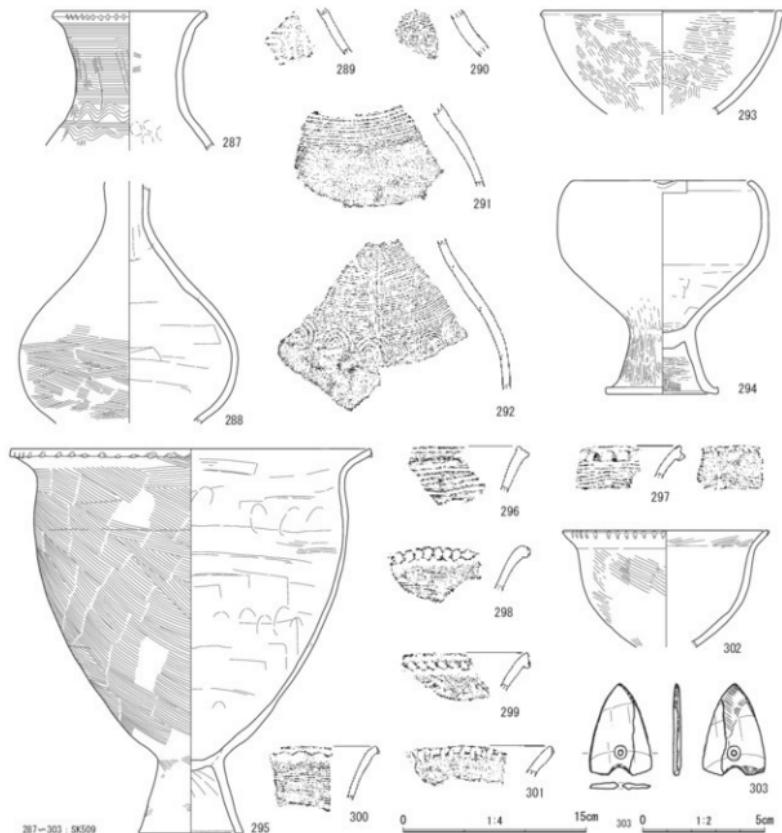


第165図 SK出土遺物 (21)

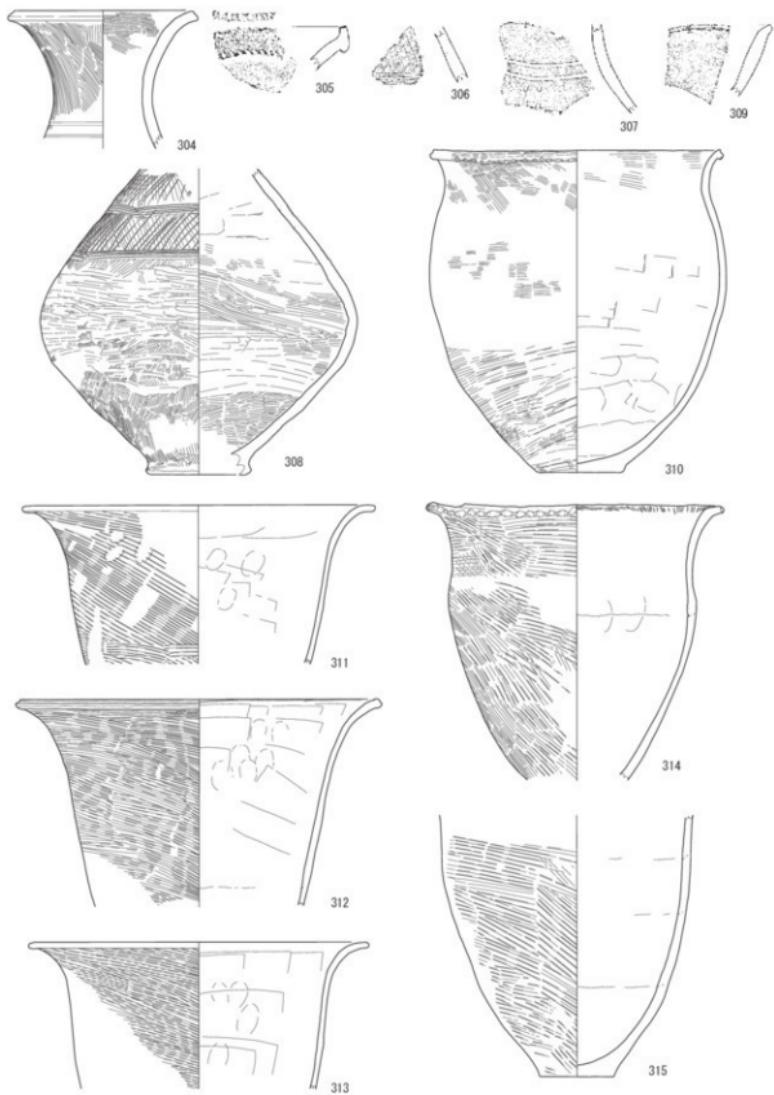
る。頸部～体部上位にかけ、櫛描直線文が5段巡る。277は櫛描直線文に波状文が垂下する。278の外面は縦位の櫛描きに横位の櫛描直線文を施す。そして、縦位に櫛描直線文を垂下させる。

281～286は壺である。281の口縁部は外方へ屈曲する。283、284の口縁部は緩やかに外反する。285、286は台付壺である。外面はハケ調整である。脚部は低く、小さい。

SK509出土遺物（第166図） 287～292は壺である。287は広口壺で端部に刻みをいれる。外面は横位の条線が施され、頸部に櫛描波状文がつく。288は細頸壺である。外面は摩滅しており調整は不明である。白岩式土器であろう。289は嶺田式土器で、ヘラ描沈線による重四角文がつく。290は櫛描波状文がつく。292は櫛描直線文帯の下部に連弧文が巡る。上には櫛描直線文が垂下する。293、294は高环である。294は片口がつく。口縁部は内湾し、ワイングラス形を呈する。外面は縦方向のミガキ調整が施される。

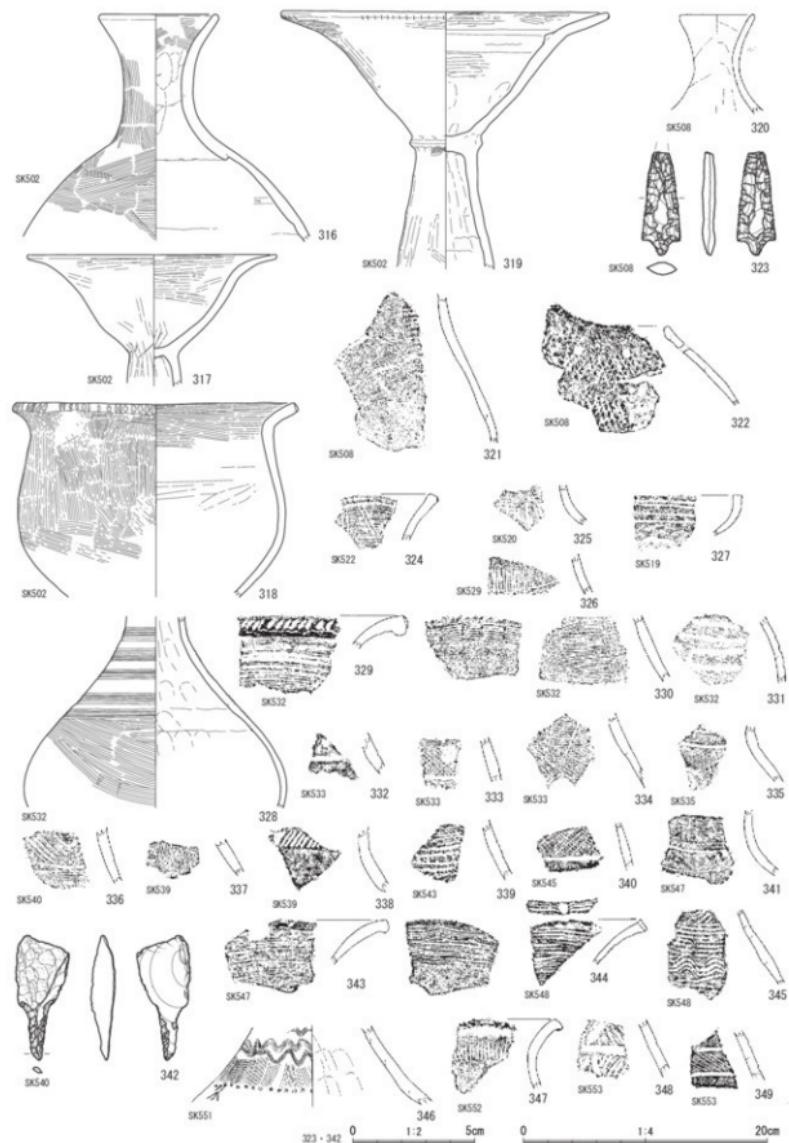


第166図 SK出土遺物 (22)



304-310 : 9K521 311-315 : 9K556 0 1:4 15cm

第167図 SK出土遺物 (23)



第168図 SK出土遺物 (24)

295～302は甕である。295は長胴状を呈する。「く」の字に緩やかに外反する。外面はハケ調整である。296の端部は面取りされ、端部にも条痕を施す。丸子式土器であろう。297～300は口縁下に突帯を付け、刻みをつける。302は小型の球胴状の甕で、口縁は外方に屈曲する。

303は有孔磨製石鏡である。暗緑灰色千枚岩質粘板岩で縁辺を磨くことで全体の形状を作っている。

SK521出土遺物（第167図） 304は広口甕で、端部は強い横ナデにより、外方へ延びる。305は受口状口縁甕で、受部にはヘラ描きによる斜格子文、上下端部に刻みを有する。306は斜格子文が入り、櫛描横線文が入る。307は2条の沈線が入り、刺突文が4つ入る。308は算盤玉状を呈する体部で、上半は櫛描直線文間に斜格子文帯を2段つける。角江式である。309は鉢であろう。310は平底の甕で、口縁部は緩やかに外反する形態である。突帯を設け、端部下端に刻みをつける。外面は斜位のハケ調整である。

SK556出土遺物（第167図） 311～315は甕である。311～313は「ハ」の字に大きく開く形態である。口縁部はナデ仕上げで、刻みはつかない。外面は条痕調整である。瓜郷式の甕である。

314は長胴状を呈し、体部上位でやや緩やかに括れながら、外反する。内面に刺突文があぐり、端部は外方へ伸び、刻みが入る。外面は櫛条痕で、下位は斜位の条痕、上位は横方向の条痕が施される。口縁部が長いことから東遠江の甕であろう。315は平底の甕で、細長い形態である。外面は条痕であろう。

SK502出土遺物（第168図） 316は細頸甕である。外面はハケ仕上げである。317は深い环部で口縁は外反する。外面は摩滅しているが、縱、横のミガキが観察される。318は短胴の甕である。体部下位で横ハケ、上位で縱ハケが施される。319は深い环部で、外方へ屈曲する。脚部は細く長い。接合部は肥厚する。外面は縱、横のミガキ調整が施される。内面は横方向のミガキ調整がつく。

SK508出土遺物（第168図） 320は単純口縁細頸甕である。321は櫛描直線文が横位に巡り、縱の刺突文が垂下する。角江式である。322は無頸甕で、補修孔がみられる。外面は斜格子文がつく。

323は打製石鏡である。珪質ホルンフェルス製で、石鏡というよりは有茎尖頭器に近い。両面に剥片の素材面が残っていることから、素材剥片の厚さがわかる資料である。縁辺から平坦剥離を入れているが、もともと素材剥片が薄いため、全体の形状を整える加工になっている。

SK522出土遺物（第168図） 324は端部に刻みが入り、半截竹管による沈線が縱に入る。

SK520出土遺物（第168図） 325は縱に直線文が入る。

SK529出土遺物（第168図） 326は横方向の櫛描直線文の後、縱線文が入る。

SK519出土遺物（第168図） 327は四線文系土器の高坏である。

SK532出土遺物（第168図） 328は細頸で、頸部から体部にかけて櫛描直線文が5段施される。角江式である。330はハケ後、櫛描直線文が施され、短線文が垂下する。331は嶺田式である。

SK533出土遺物（第168図） 329は幅広の突帯がつき、刻みが入る。外面は条痕調整で、内面は刺突文が巡る。丸子式である。333は沈線に斜格子文がつく。334は櫛描直線文に「ハ」の字の細い沈線がつく。

SK535出土遺物（第168図） 335は2条の沈線が入り、櫛描波状文がつく。

SK540出土遺物（第168図） 336は櫛描直線文に櫛描羽状文が縱位につく。342は石錐である。黒色粘板岩製で、片面に自然面が残る剥片の一端を加工して錐にしている。

SK539出土遺物（第168図） 337は櫛描直線文に波状文が垂下する。338は頸部に斜位の刺突文がつく。四線文系土器であろう。

SK543出土遺物（第168図） 339はヘラ描沈線がつく。

SK545出土遺物（第168図） 340は沈線に斜格子文がつく。

SK547出土遺物（第168図） 343の端部は肥厚する。内面に波状文がつく。瓜郷式の甕である。

SK548出土遺物（第168図） 344の端部は面取りされ、外面は条痕が付けられる。345は幅広の直線文に波状文がつく。いずれも丸子式土器であろう。

SK551出土遺物（第168図） 346の頸部には波状文が3条施され、刺突文が巡る壺である。

SK552出土遺物（第168図） 347の端部は肥厚し、刻みがつく。口縁部は外反し、外面には下からハケが施される。

SK553出土遺物（第168図） 348は嶺田式土器でヘラ描沈線に斜線文が充填される。349は瓜郷式土器で沈線間に斜線文が入る。

3 環濠出土遺物

環濠1出土遺物（第169、170図） 1は面取された端面下に突帯を付け、押圧痕を残す。外面は縦位の条痕を残す。内面には波状文を2段施す。2は端部上に刺突文、面上に直線文をつける。口縁下には太い突帯がつき、押圧痕を残す。外面は太い櫛描きで刺突文をつけ、羽状文を構成する。3は面を持ちながら、折り返し端面にLR縄文を施す。下には刻みを入れる。端面に棒状浮文を貼付する。1～3は丸子式土器である。4の端部は外方に肥厚し、端面には3条の沈線がつく。5の端部は肥厚し、3条の沈線が巡る。屈曲部には刻みが入る。6は端部に2条の沈線が入り、外面は条痕が残る。7は外面に半截竹管状工具による波状文が施される。端部上下に刻みが入る。6、7は丸子式土器であろう。8は受口状口縁で、端面に櫛条痕を施す。屈曲部に刻みを入れる。内側端部に刺突文をつける。9は折返口縁で、端部に条線をつける。外面は跳ね上げ文が施される。10は折り返し口縁で端面に櫛描波状文が巡る。外面は跳ね上げ文が施される。11は面取りされ、外面に跳ね上げ文が付けられる。12の端部は内側に折り返され、外面は貝殻条痕が押圧される。13の端部は張り出し、端面に櫛描波状文が巡る。14は沈線間に斜位の櫛描文が施される。15は羽状文がつく。16は櫛描直線文に斜位の櫛描直線文が施される。17は櫛描直線文がつく。18は丸子式の壺である。

19は太い沈線が渦巻き状に施される。20はLR縄文に太い沈線がつく。21はLR縄文に半截竹管状工具による曲線が描かれる。22は縄文を地文とし、太い沈線がつく。23は沈線間に縄文がつく。平沢式系統の土器であろう。

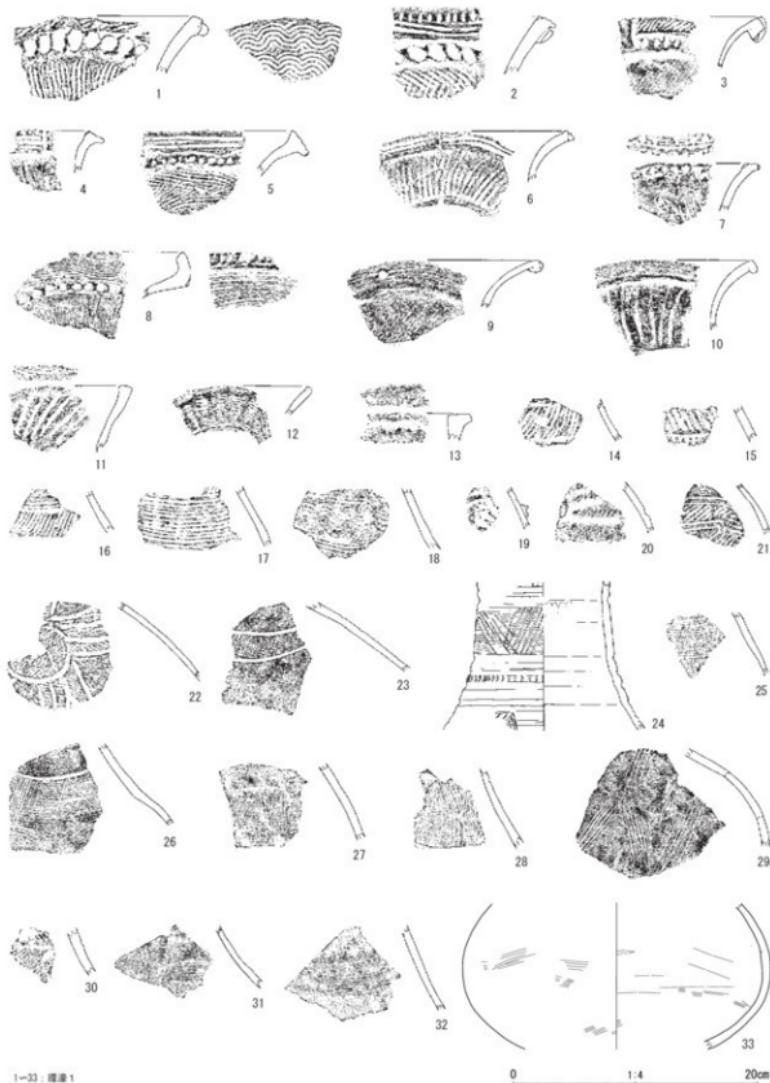
24～29は瓜郷式である。24は太い沈線、刺突文が巡る。頸部中位に横位の櫛描直線文が巡り、斜位の櫛描直線文がつく。26～28は沈線間に無文帶と櫛描直線文帯を構成し、「ハ」の字の櫛描直線文を入れる。29は無文帶があり、横位の櫛描直線文に「ハ」の字に櫛描直線文がつく。30は羽状文がつく。31は櫛描直線文と波状文が施される。33は丸みを帯びた壺の体部である。

34～53は甕の口縁部である。34は底部の中央に孔が穿たれる。端部に刻みはなく、四方向に押圧痕が付けられる。外面は斜方向の櫛条痕が施される。35～40は端部に櫛条痕が施されるものである。41～44は両端に刻みが付けられるものである。45～47は口縁下に突帯がつき、やや大きめの刻みを入れるものである。48、49は内側に張り出し、刻みを入れるものである。

54は底部穿孔土器である。

55は蔽石である。花崗岩で扁平な円碟を使用しており、表面と端部に敲打痕が見られる。

環濠2出土遺物（第171、172図） 56～71は瓜郷式土器である。56は内湾する口縁で端部は面取される。斜位に直線文が施され、太いヘラ描沈線、櫛描直線文、ミガキ調整が入った無文帶を形成する。櫛描直線文に丁字文が施される。57は受口状口縁で、受部は櫛描波状文を施し、後に連弧文を入れる。下の端部には刻みを巡らす。頸部はヘラ描きの跳ね上げ文が付けられる。58は内側に屈曲する受口状口縁で、受部に櫛描直線文を施す。部分的に縦位の突帯をつけ、刻みを入れる。端部には刺突文がつく。屈曲部には低い突帯をつけ、刻みを巡らせる。59の端部は肥厚し、面取りされる。頸部にはヘラ描きの跳ね上げ文が付けられる。60はヘラ描きの跳ね上げ文がつき、3条の沈線が巡り、その下には斜格子文がつく。61の端部は肥厚し、面取りされる。外面に跳ね上げ文がつき、内面には櫛描弧状文が施される。



1-33：環濠

第169図 環濠出土遺物（1）

62は端部に刻みが入り、外面は跳ね上げ文、内面には櫛描直線文を施した後にヘラ引きの弧状文が付けられる。63、64はヘラ引きの斜格子文が付けられる。65は面取りされた端部に刻みが入る。頸部は櫛描直線文とヘラ描沈線文、無文帯からなる。ヘラ描沈線が斜位に入る。66、67は面取りされた口縁部をもち、沈線で区画された無文帯をもつ。68は頸部中位で膨らむ。膨らむ部分は斜格子文がつき、ヘラ引きの連弧文がつく。沈線による無文帯を形成する。69～71は頸部に無文帯をもつが、沈線区画はない。72は単純口縁の広口壺である。端部に刻みを有する。外面は櫛条痕で、頸部にヘラ描沈線が3条巡る。73は受口状口縁の細頸壺である。受部に櫛描波状文を巡らせ、屈曲部に斜位の刺突文をつける。外面は櫛描直線文がつく。74は緩やかに屈曲した受口状を呈する。頸部に沈線区画の無文帯を有する。

75の端部は肥厚し、刻みが入る。頸部に円形刺突文、沈線が巡る。嶺田式土器である。76の頸部は長い。頸部上半にはヘラ描沈線間に鋸歯文を入れる。頸部下から体部上半にかけて羽状にヘラ描沈線を入れる。嶺田式土器である。77は細長い頸部をもち、屈曲しながら外方へ延びる。口縁部にはLR繩文が施される。78は単純口縁の広口壺で、肩の張りは弱く丸みを帯びる。体部上半には櫛描直線文を施し、直線文間に波状文がつく。文様帶下は斜め方向のミガキ調整がみられる。79は小型壺である。

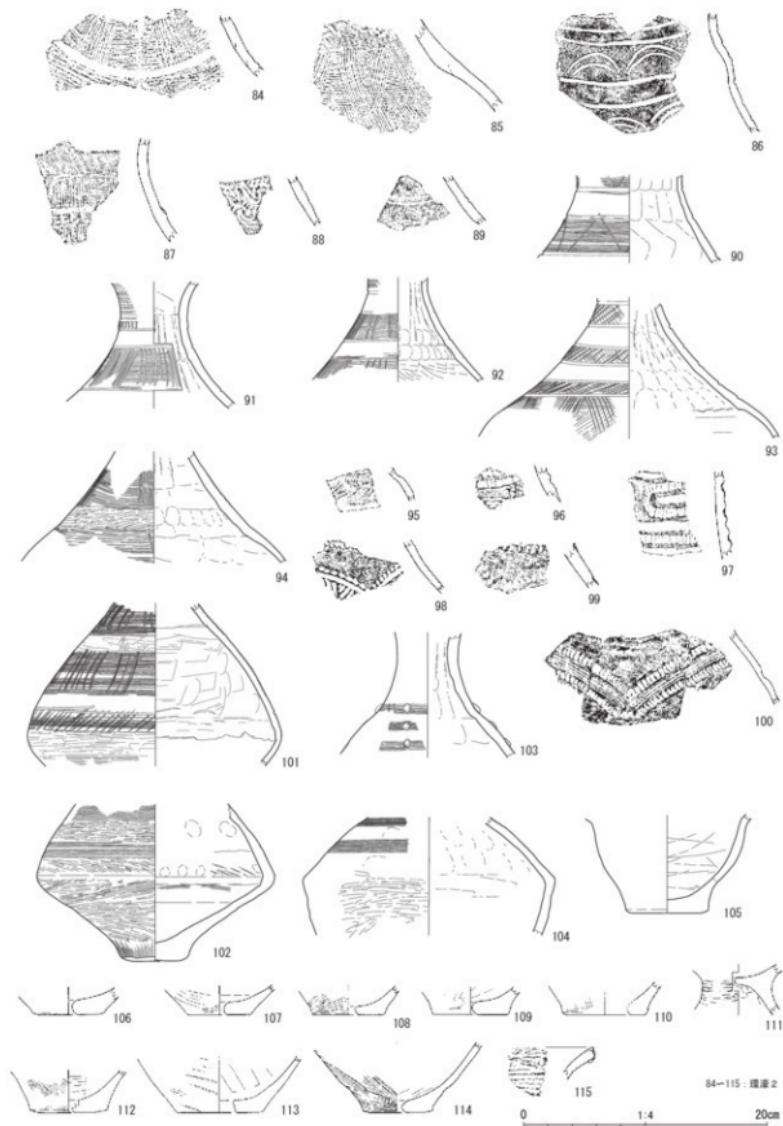
80～83は瓜郷式である。81は肩が張った形態で、ヘラ描沈線間にミガキ調整の入った無文帯、斜格子



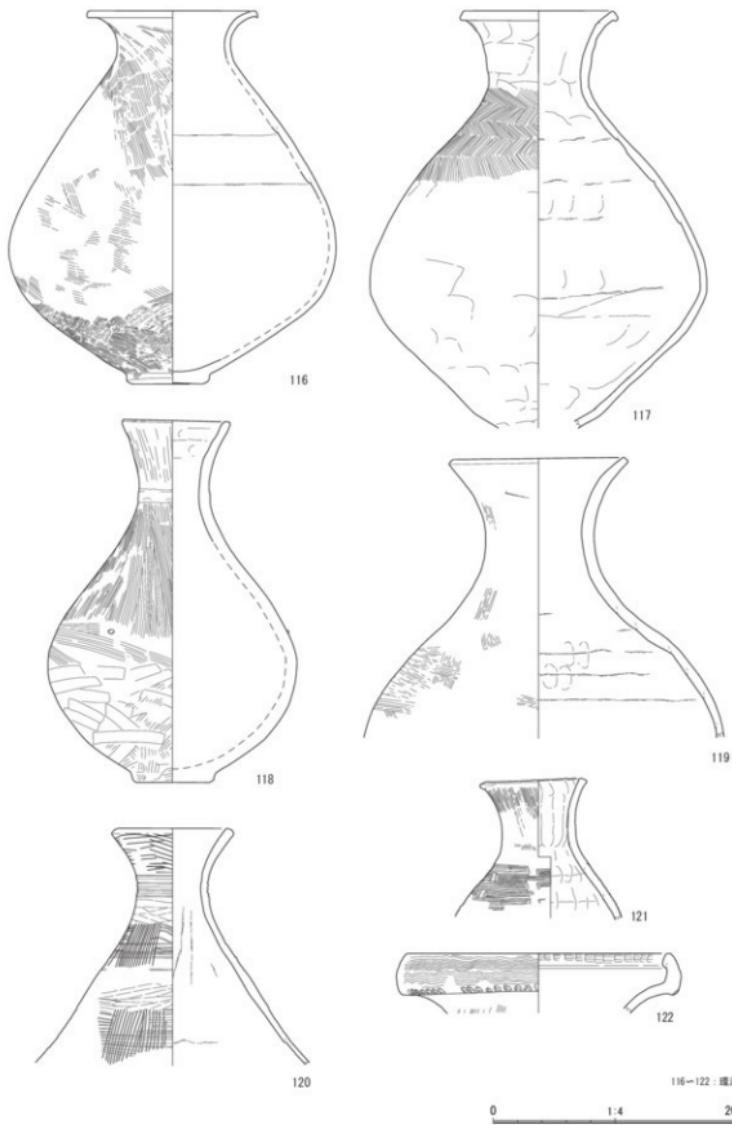
第170図 環濠出土遺物（2）



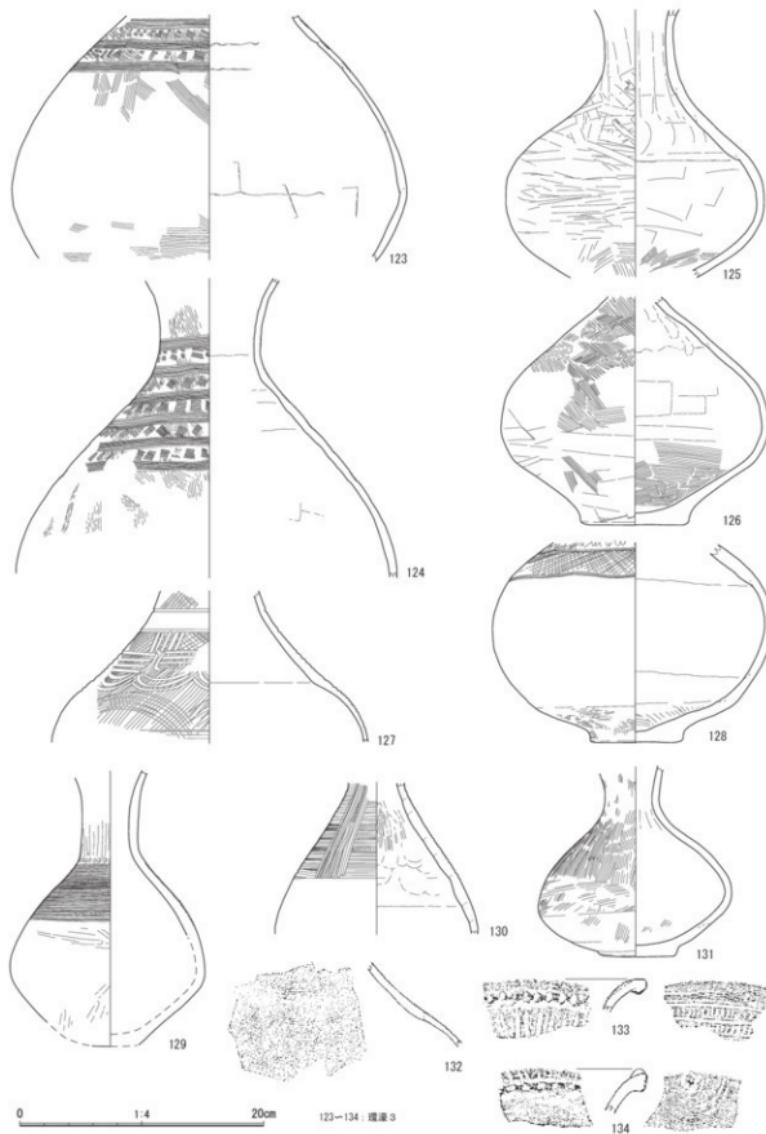
第171図 環濠出土遺物（3）



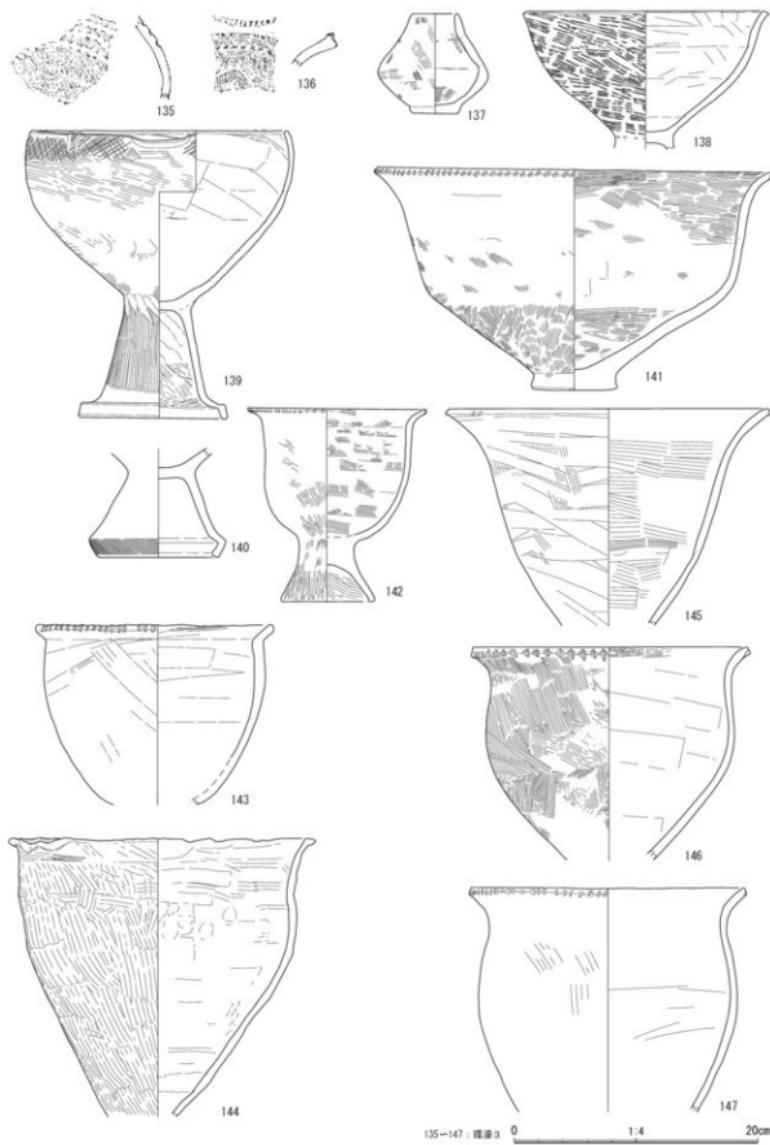
第172図 環濠出土遺物（4）



第173図 環濠出土遺物（5）



第174図 環濠出土遺物（6）



第175図 環濠出土遺物（7）

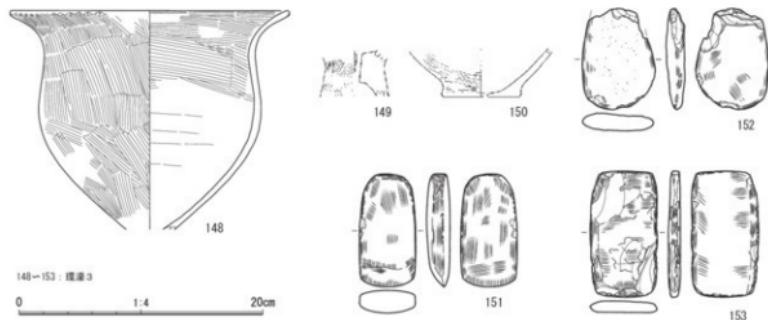
文帯、櫛描直線文帯から成る。斜格子文帯にはヘラ描連弧文がつく。体部上半には「ハ」の字の櫛描直線文が垂下する。82は横位の櫛描直線文にヘラ描きの区画帯、縦位にヘラ描文をつける。83は丸みを帯びた体部で、上半は区画沈線が施され、ヘラ描きの斜線文がつく。その下には櫛描連弧文が付けられ、連弧文間に櫛描直線文が垂下する。84~93は瓜郷式土器である。84は横位の櫛描直線文に縦位の直線文が垂下する。85は無文帯をもち、横位の櫛描直線文に「ハ」の字の櫛描直線文が垂下する。86の頸部は中位で膨らむ形態である。ヘラ描沈線区画には無文帯があり、斜格子文帯には連弧文がつく。87は低い突帯がつき、刺突文が施される。横位の櫛描直線文に縦位の櫛描直線文が垂下する。88は半截竹管状工具による波状文がつく。90~93は沈線で区画された無文帯をもつ。櫛描直線文には「ハ」の字、丁字文が垂下する。93は沈線で区画された無文帯と斜格子文帯をもつ。その下には櫛描のハ字文がつく。体部下半はハケ仕上げである。94は無文帯を有するが、沈線区画はない。櫛描直線文帯に櫛描文が垂下する。

95~100は嶺田式土器である。95は縄文を地文とし爪形文、ヘラ描沈線がつく。97は爪形文と沈線から成り、爪形文による梢円形区画を形成する。沈線内には鋸歯文とおぼしき沈線が施される。100は体部の爪形文間に櫛描連弧文がつく。98はヘラ描沈線に沿って刺突文がつく。

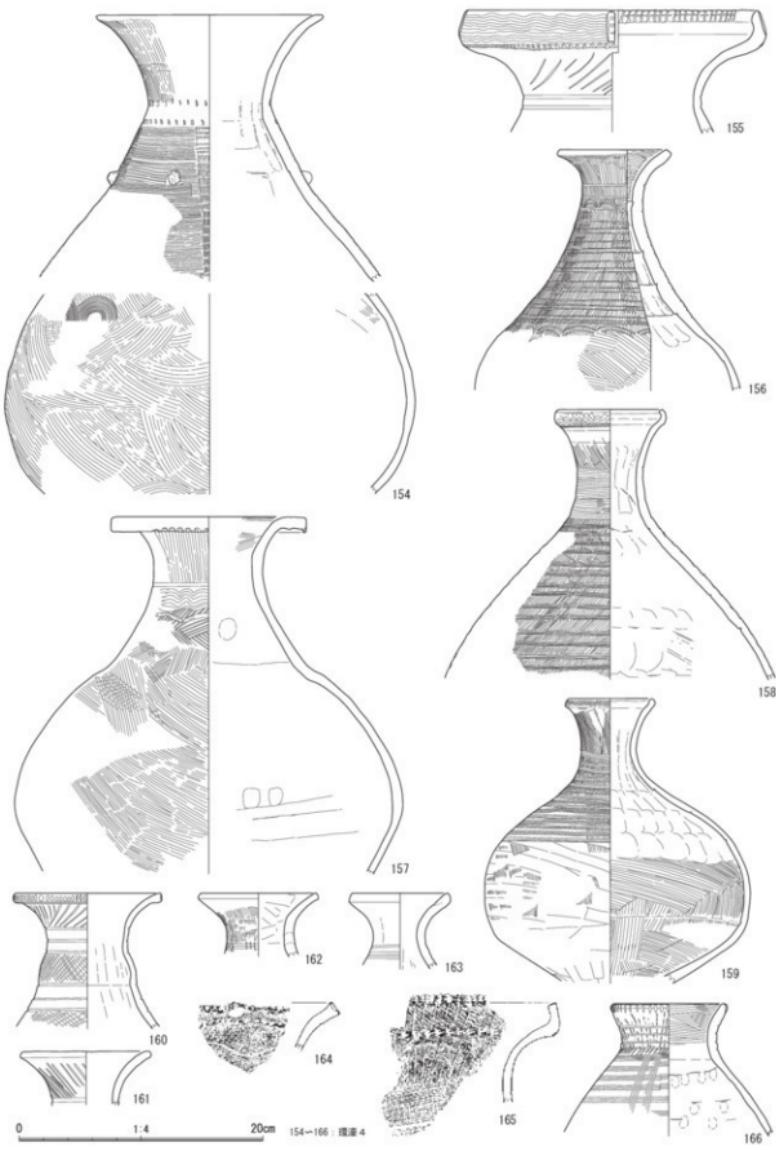
101は下位で緩やかに屈曲する形態で、ミガキが入った無文帯と櫛描直線文帯から構成される。頸部から体部の直線文帯には縦に直線文が垂下する。最下部の文様帯には沈線が1条巡り、斜線文がつく。102は体部下位で屈曲する形態で、横方向のミガキ調整が施される。文様は横位の櫛描直線文がみられる。101、102は研磨帯を有することから貝田町式土器であろうか。103は細長い頸部をもち、体部上半は横位の櫛描直線文が3段つく。直線文帯には円形浮文が貼付される。104は屈曲する体部で、下位には横方向のミガキ調整が施される。体部上半は横位の櫛描直線文が2段巡る。

105は口縁が外反する小型の鉢である。ナデ仕上げである。106~114は底部に穿孔が施される。大半が壺の底部であるが、111は台部中央に孔が穿たれる。115は樫王式土器で、口縁部直下に押圧突帯がつく。

環濠3出土遺物（第173~176図） 116は単純口縁の広口壺で、頸部は短い。外面の調整はハケ仕上げで、文様はない。117の端部は面取りされ、肥厚する広口壺である。体部上半に羽状文をもつ。118は単純口縁の細頸壺である。頸部に横ナデがあり、区画される。体部は無花果形で、上半は縦方向のハケ調整が施される。119は口縁部が面取りされた単純口縁の壺である。外面は摩滅しており、文様は不明である。ハケ仕上げである。120は肩の張らない体部である。口縁部は単純口縁で端部はやや丸く仕上げる。頸部に櫛描直線文が巡り、ミガキ調整の無文帯を2段もつ。横位の櫛描直線文を施したのちに縦方向に



第176図 環濠出土遺物（8）



第177圖 環濠出土遺物（9）

櫛描直線文を付ける。

121の口縁部は外方に直線的に延びる。端部は面取りされる。外面は疑似流水文がつく。頸部は縦ハケである。122は内傾する受口状口縁壺である。端面に刺突文をつける。受部には櫛描波状文を全面に付け、屈曲部に刺突文が巡る。

123は丸みを帯びた無花果形の体部に櫛描直線文が巡り、その間には斜位の櫛描刺突文が巡る。124は細頸壺で頸部から体部上半にかけて櫛描直線文が6条巡る。その間には櫛描刺突文がつく。125は細頸壺である。体部は肩が張らず、丸みを帯びた形態である。外面の調整は不明瞭であるが、体部下半に櫛条痕が残存する。126は細頸壺で、肩の張らない形態である。体部上半に櫛描きによる羽状文を施す。127は肩の張らない形部で頸部に無文帯を有する。斜格子文を施した後、縦位の短線文、連弧文をつける。128は丸みを帯びた体部で、上半に斜格子文を施し、櫛描直線文で区画する。129は細頸壺で、頸部と体部の境には円形刺突文が巡る。体部上半には櫛描直線文が施される。130は細頸壺で肩が張らない形態である。体部上半にハケ調整後、櫛描直線文を付け、縦位に櫛描直線文が垂下する。131は小型の細頸壺で、肩の張らない形態である。ハケ仕上げである。132は無文帯と櫛描直線文を有する。

133は折返口縁壺で、刺突文がつく。外面は跳ね上げ文をつける。内面には波状文、沈線間に刺突文を巡らす。134は折返口縁に刻みを入れ、内面には円形浮文を貼付する。それを中心に櫛描弧状文を施す。丸子式である。

135はRL縄文を地文に円形刺突文を3条つける。嶺田式土器であろう。136の端部は面取りされ、上端に刺突文がつく。端面には縄文を施し、下端に刻みを入れる。外面は沈線内に縄文が付けられる。137は短い頸部をもつ小型壺である。138は深い坏部を有する高坏である。口縁部は緩やかに外反し、端部は面取りされる。外面はハケ調整である。139は深い坏部を有する高坏で、口縁部は内湾する。片口がつき、櫛描きによる斜格子文が巡る。2本で1単位の棒状浮文が3カ所つく。脚部端は屈曲する。外面は縦方向のハケ調整である。140は高坏の脚である。脚部端は内側に屈曲する。

141は甕である。底部は小さく、体部下位で屈曲し、口縁部は外反する。口縁下端に刻みを入れる。外面はハケ仕上げである。142は小型の台付甕である。やや垂直気味に立ち上がり、短く外反する。端部に刻みが入る。台部はやや柱状を呈する。台部外面は縦方向のミガキ調整が見られる。143の口縁部は短く屈曲し、刻みが入る。内外面とも表面は剥離しており、調整は不明瞭である。144は緩やかに外反する。端部は短く外方へ張り出す。端部は押圧痕が顕著である。外面は粗いハケ調整である。口縁部が長いことから白岩式の甕であろう。145の口縁は外反し、ラッパ形を呈する。端部には部分的に刻みが入れられる。ハケ仕上げである。146は体部下位でやや屈曲をもしながら立ち上がり、口縁部は外反する。刻みを入れ、外面はハケ調整である。147は緩やかに外反する甕である。端部下端に刻みが入る。内外面とも摩滅しており、調整は不明である。

148は体部中位で膨らみ、口縁部はやや強く外反する。端部は丸く仕上げ、下端に刻みが入る。外面はハケ仕上げである。149は台付甕で、中央に孔が穿たれる。150は甕で、底部中央に穿孔が確認できる。

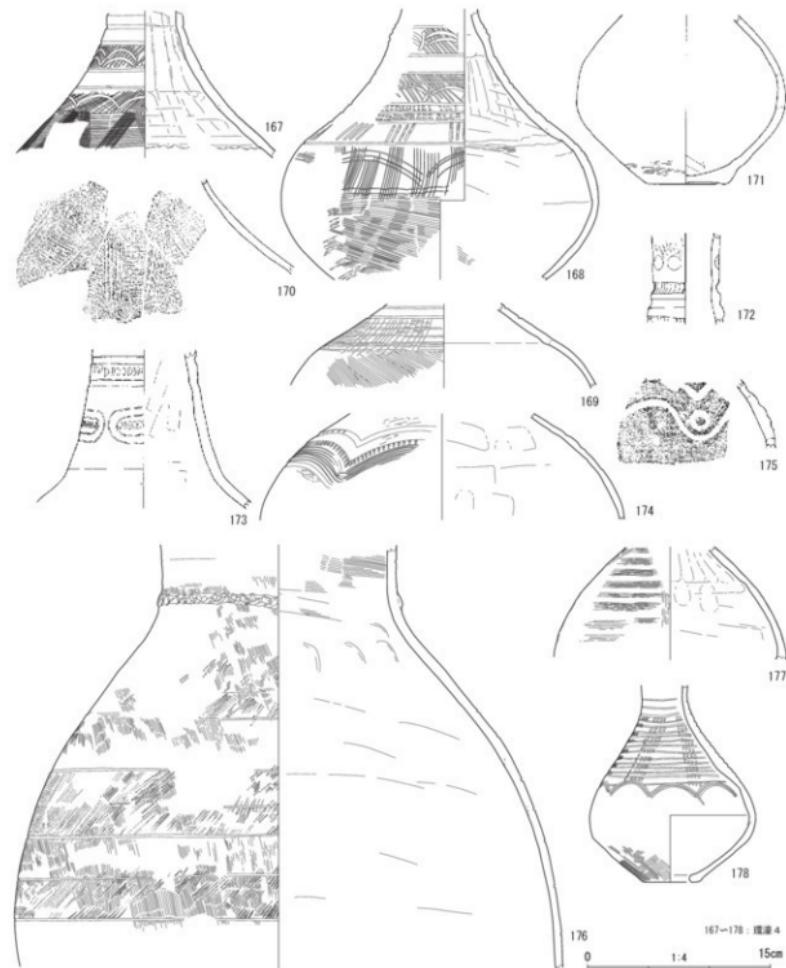
151～153は磨製石斧である。151は暗緑灰色珪質凝灰岩製で、全面を磨いて、片刃に仕上げてある。152は褐灰色雲母片岩製で、使用している。ほぼ全面を磨いてあり、基部には、欠損後の剥離が見られることが、再生していると思われる。153は褐灰色中粒砂岩製で、ほぼ全面を磨いてある。刃部が鋭角になつてないことから、未完成品と思われる。

環濠4出土遺物（第177～180図） 154は単純口縁の広口壺で、体部は丸みを帯びる。頸部には櫛刷突文を2段施す。体部上半には横位の櫛描直線文を施し、円形浮文を6カ所貼付する。櫛描きの簾状文が垂下する。文様帶下部には櫛描きによる連弧文が一部確認できる。155は内傾する受口状口縁の広口壺である。受部には櫛描波状文が巡り、屈曲部に刻みを有する。また、刻みを入れた棒状浮文がつく。面取

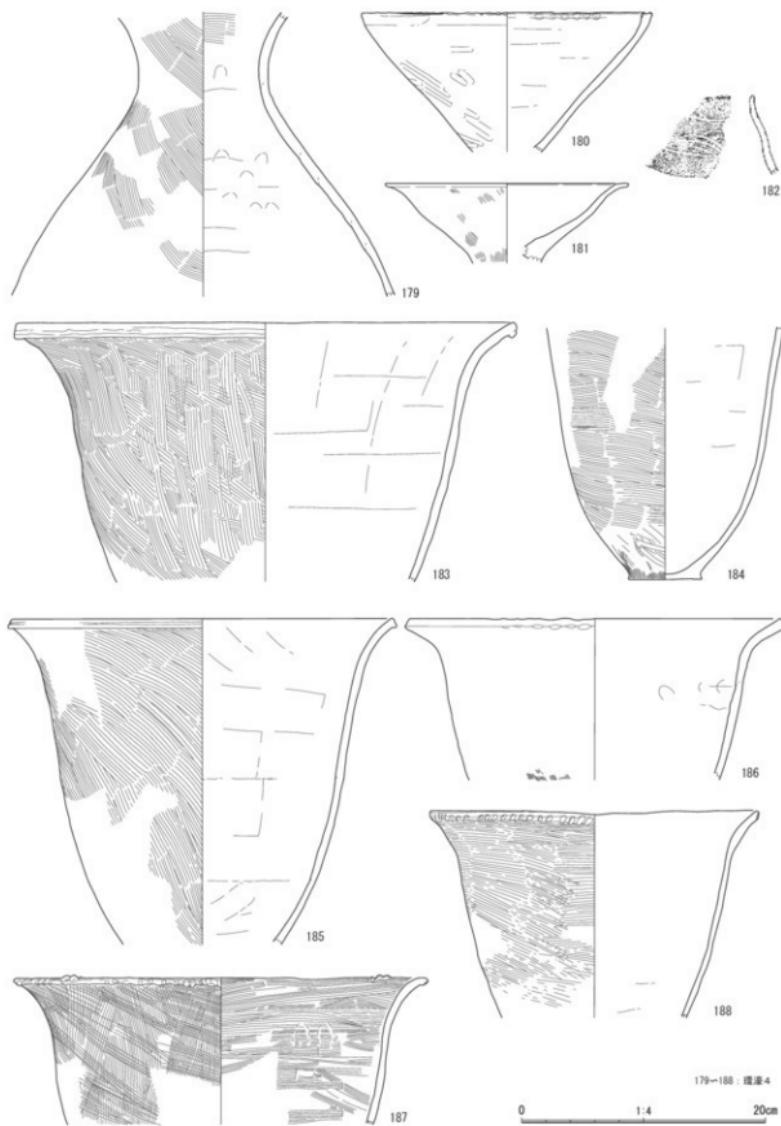
りされた端部には櫛刺突文が巡る。外面は跳ね上げ文がつき、2条の沈線が確認できる。瓜郷式である。156は肩の張らない単純口縁の細頸壺である。端部は面取りされる。外面はハケ調整が施され、頸部上位と下位に連弧文がつく。縦位に櫛刺突文が垂下する。角江式である。

157は折返口縁広口壺である。体部下位でやや屈曲する。端部下端で刻みがつく。頸部には1条の沈線、波状文がつく。外面は条痕であろう。丸子式の最終末段階のものであろう。

158は受口状口縁の細頸壺である。受部に櫛描波状文がつく。頸部には櫛描直線文が巡る。体部はハケ



第178図 環濠出土遺物（10）



第179図 環濠出土遺物 (11)

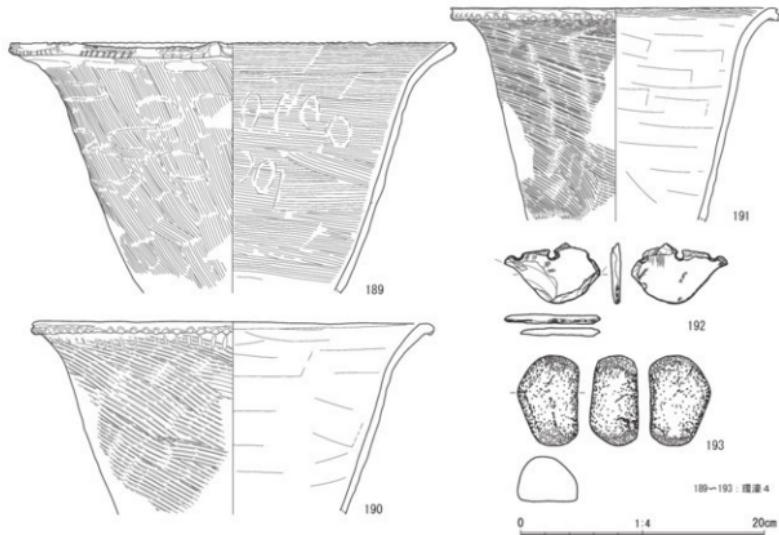
調整後、櫛描直線文をつけ、縦位に刺突文を垂下させる。159は小さい受口状口縁である。細い頸部から体部にかけて櫛描直線文と波状文を交互に施す。

160は瓜郷式土器で、頸部中位で膨らむ形態である。端部には刻みを入れ、跳ね上げ文がつく。沈線で無文帯、斜格子文帯を形成する。161は跳ね上げ文がつき、頸部に沈線が巡る。162、163は単純口縁の細頸壺である。162の頸部には櫛描直線文に縦位の刺突文がつく。163の頸部には櫛描直線文が巡る。164は波状口縁である。頂部には円形押圧をつける。端面にはLR縄文を帶状に施す。外面は沈線区画内に縄文を充填する。165は受口状口縁で、受部に斜格子文がつき、端部、屈曲部に刺突文が巡る。頸部には跳ね上げ文、櫛描直線文、ヘラ描沈線がみられる。166は短い頸部で、肩が張らない形態である。口縁端部には刻みを入れ、4条の沈線が巡り、沈線間に斜位の刺突文がつく。体部は横位の櫛描直線文が巡り、縦位に櫛描直線文が垂下する。

167～169は瓜郷式土器である。167は肩の張らない形態である。沈線で無文帯、斜格子文帯を区画し、斜格子文帯にはヘラ描きの連弧文が巡る。下位には櫛描直線文を施したのちに「ハ」の字に櫛描直線文を垂下させる。168は細頸の壺で、体部は丸みを帯びる。沈線で区画された無文帯をもち、連続刺突文、ヘラ描きによる斜線文が施される。下位には連弧文、縦位に櫛描直線文が垂下する。体部下半は斜め方向のハケ調整が施される。169はヘラ描沈線間に櫛描直線文がつき、縦に櫛描直線文が垂下する。170は無文帯を有し、櫛描直線文を施す。「ハ」の字に櫛描直線文を入れ、下位に連弧文を施す。

172～175は嶺田式土器である。172は頸部に円形刺突文がつき、爪形文、沈線が巡る。173は沈線間に爪形文が巡り、下位には梢円形内に爪形文が施される。174は体部上半にヘラ描沈線、爪形文、櫛描きによる連弧文が巡る。175は沈線区画内に櫛描文がつき、ヘラ描きによる円文が施される。

176は広口壺である。体部中位から上位にかけてハケ調整後、LR縄文を施す。沈線で3ないし4区画



第180図 環濠出土遺物（12）

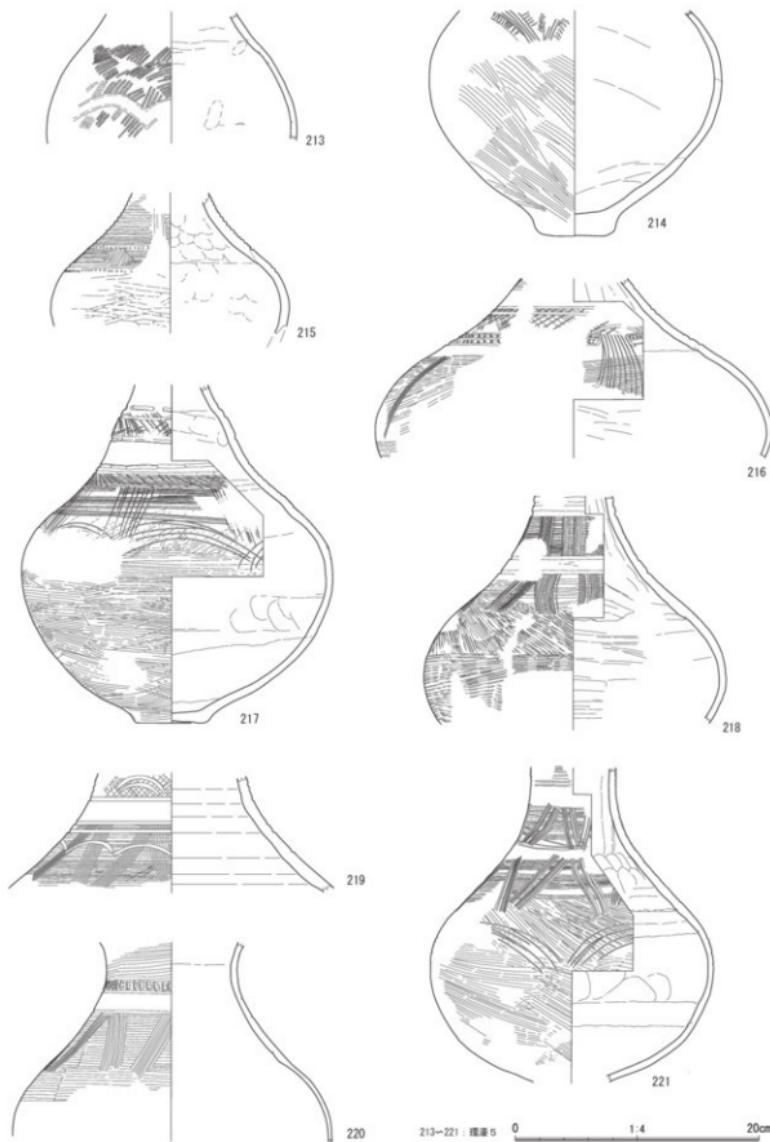
し、縄文帯と無文帯を形成する。頸部には刻みを入れた突帯が1条巡る。尾張地方の貝田町系の土器であろう。

177は櫛描直線文が巡る。178は細頸壺でヘラ描沈線文を施し、下位に連弧文をつける。縦位に櫛描短線文を垂下させる。角江式である。179は広口壺で、ハケ仕上げである。

180は鉢である。直線的に伸び、口縁部に刻みが入る。尾張系の鉢であろう。



第181図 環濠出土遺物 (13)



第182図 環濠出土遺物 (14)

181は高杯で、口縁は外反する。182はほぼ垂直に立ち上がる。沈線間に櫛描直線文、ヘラ描きの連弧文が巡る。183～190は甕である。183、185の端部はナデ仕上げである。外面はハケ調整である。瓜郷式である。187の外面は櫛による条痕調整である。口縁は刻みを入れる。189は端部上下に刻みを入れ、波状口縁である。外面はハケ仕上げである。190は口縁下に突帯を付け、刻みを入れる。その下には連續刺突文が巡る。191は口縁下に突帯を付け、刻みを入れる。外面は櫛による斜め方向の条痕調整である。

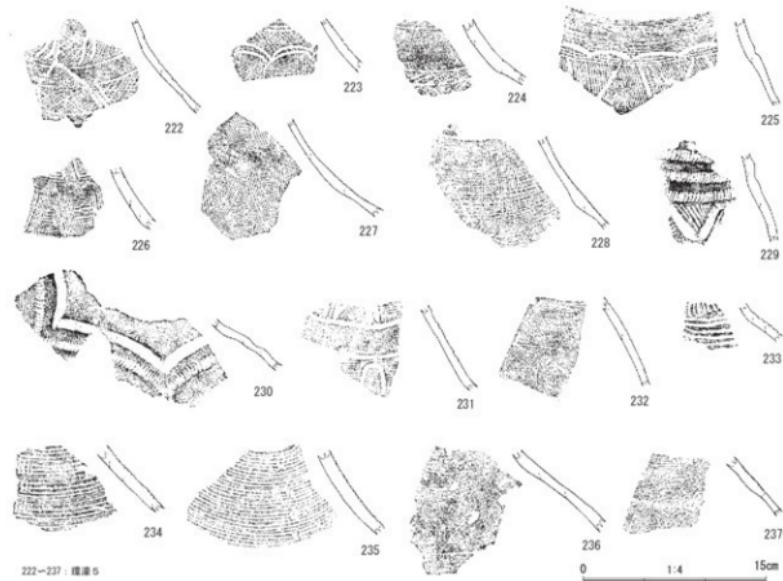
192は黒色結晶片岩製で、石包丁である。縁辺から平坦剥離を入れて形を整えた後、両面を磨いて仕上げている。穴は3カ所確認できる。中央付近に二つの穴を開けてあるが、穴の部分で欠損している。

193は蛇紋岩の円錐を用いた敲石である。端部に敲打痕が見られる。

環濠5出土遺物（第181図～189図） 194～196は単純口縁の細頸壺の口縁部である。194の頸部には横位の櫛描直線文がつく。体部には櫛描直線文が巡り、縦位の櫛描直線文が垂下する。195は沈線間に無文帶、刺突文、斜方向の刺突文がつく。

197～203は受口状口縁壺である。197は受部にハ字文をつけ外面にヘラ描きによる跳ね上げ文が巡る。頸部には沈線を施し、無文帶、ヘラ描きによる羽状文をつける。198、199は細い沈線を巡らせ、狭い無文帯をつくる。横位の櫛描直線文に縦方向の直線文を垂下させる。200は受部と頸部に円形刺突文を巡らせる。201は頸部の上下に連弧文を施す。その間には刺突文をつける。203は受部に櫛描直線文が垂下し、端部内側に刻みが入る。頸部は櫛描きによる羽状文がつき、沈線による無文帯下には斜格子文がつく。

204～206は内傾する受口状口縁壺である。204の口縁端部には刻みが入り、受部下に2条の沈線が巡る。205の受部には櫛描直線文が巡る。206の受部には沈線間に櫛刺突文が巡る。207は端部が外方へ肥厚

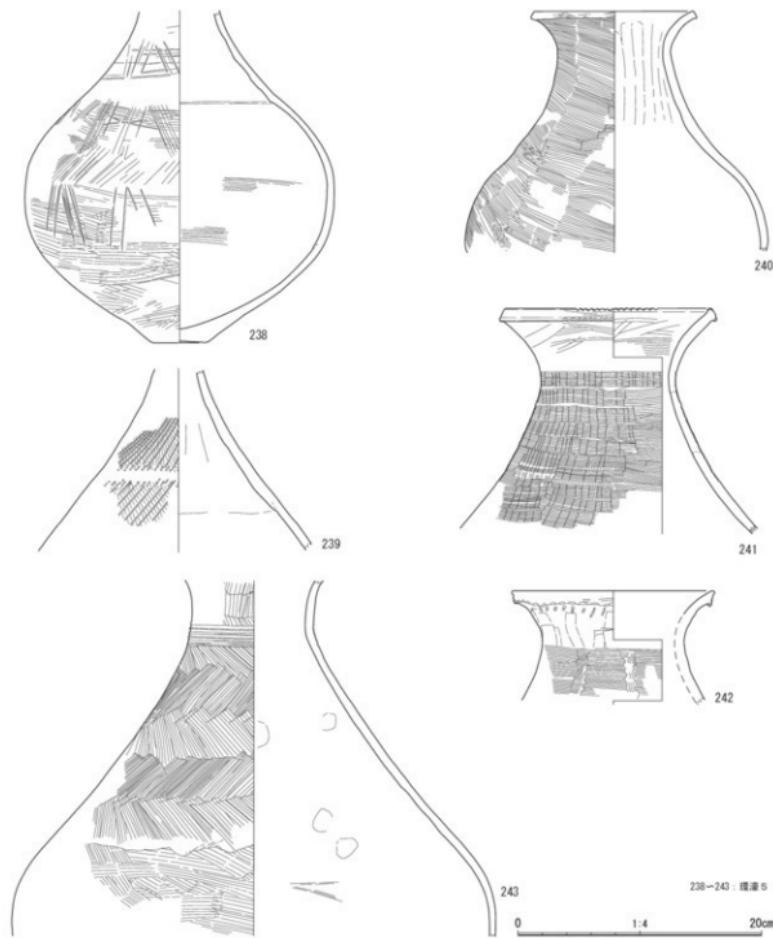


第183図 環濠出土遺物（15）

する広口壺である。外面は跳ね上げ文がつき、頸部に低い突帯がつく。内面には櫛描波状文が巡る。

208~212は長頸壺で、嶺田式土器である。208は爪形文、太い沈線で区画され、区画内には短線文が縦位に巡る。209は円形刺突文、爪形文が2条つき、その下に梢円形文が巡る。211は円形刺突文、爪形文が交互につく。爪形文で幅広に区画された内部はさらに太い沈線で山形に区画し、斜位にヘラ描沈線を施す。212の頸部は細く強く外反する。外面はLR繩文が施される。

213、214は長頸壺の体部である。213はLR繩文を地文とし、沈線による連弧文を施す。214は爪形文、櫛描文がみられる。215は肩の張らない形態である。ヘラ描直線文を体部上位に施し、縦位の沈線で4区

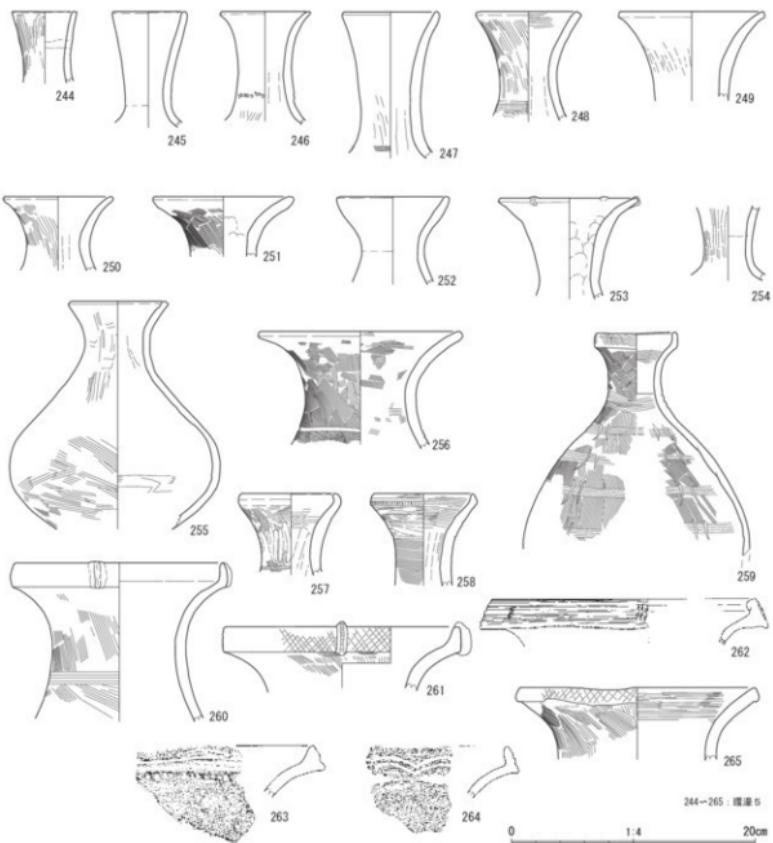


第184図 環濠出土遺物 (16)

画する。下位には刺突文間にヘラ描きの重四角文を充填する。体部下半はミガキ調整が施される。

216~221は瓜郷式土器である。216は沈線区画の無文帯をもち、ミガキ調整がみられる。217は肩の張らない形態である。沈線区画で無文帯をつくり、体部上半部分は櫛描直線文を施した後、ヘラ描きによる斜位の刺突文が付けられる。体部中位には櫛描きによる連弧文、縦位の直線文が垂下する。体部下半は横方向のハケ調整である。218は無文帯を持ち、浅い沈線による区画が認められる。横位の櫛描直線文に縦位の直線文が垂下する。体部下半は斜め、横方向の条痕調整が施され、古い様相を残す。221は沈線による区画はなくなり、無文帯の幅も狭くなる。櫛描直線文には櫛描きによる山形文が付けられ、下には連弧文が巡る。

222~228は瓜郷式土器である。222は沈線区画があり、無文帯と斜格子文帯がつく。224は横位の櫛描直線文と縦位の櫛描直線文がつく。その境には連弧文がつき、下にヘラ描きの山形文がつく。226、227



第185図 環濠出土遺物 (17)

は沈線による区画ではなく、無文帶は狭い。横位の櫛描直線文に櫛描きの山形文がつく。

229～231は嶺田式土器である。229は爪形文間に山形文、斜位の沈線が充填される。231は沈線間に横位の櫛描文を入れ、逆U字状文をつける。

232はLR縄文を地文とし細い沈線で区画し、無文帶は磨り消している。縄文帶には縦位に弧状文をつける。貝田町系の土器であろうか。234、235は櫛描直線文に縦に短線文が垂下する。236は櫛描直線文を縦、横に施し、格子状を呈する。237は櫛描直線文下に波状文が施される。

238は瓜郷式土器である。無文帶、横位の櫛描直線文帶はくずれている。「ハ」の字の櫛描文がつく。239は櫛刺突文間に無文帶を形成し、斜格子文を2段施す。240～243は条痕調整の広口壺である。240は単純口縁で、端部は面取りされる。外面は斜方向の櫛条痕が施される。241は単純口縁で、端部両端に刻みが入る。頸部から体部にかけて櫛描直線文、簾状文が施される。242は端部に刻みが入る広口壺である。体部に櫛描直線文が巡り、櫛描波状文が垂下する。243は広口壺で頸部に櫛描直線文が巡る。頸部から体部にかけて羽状文が施される。

244～249は細頸壺で単純口縁である。246は円形刺突文が巡る。255は短い頸部で体部は丸みを帯びる。文様帶はなくハケ仕上げである。257～259は受口状口縁の細頸壺である。259の受部には櫛描波状文が巡り、頸部から体部にかけて櫛描直線文が巡る。直線文には「ハ」の字の短線文がつく。260～264は受口状口縁の広口壺である。260、261の受部に棒状浮文がつく。262～264は内傾し、受部には直線文、連弧文が巡る。265の端部は面取りされ、端面に斜格子文がつく。

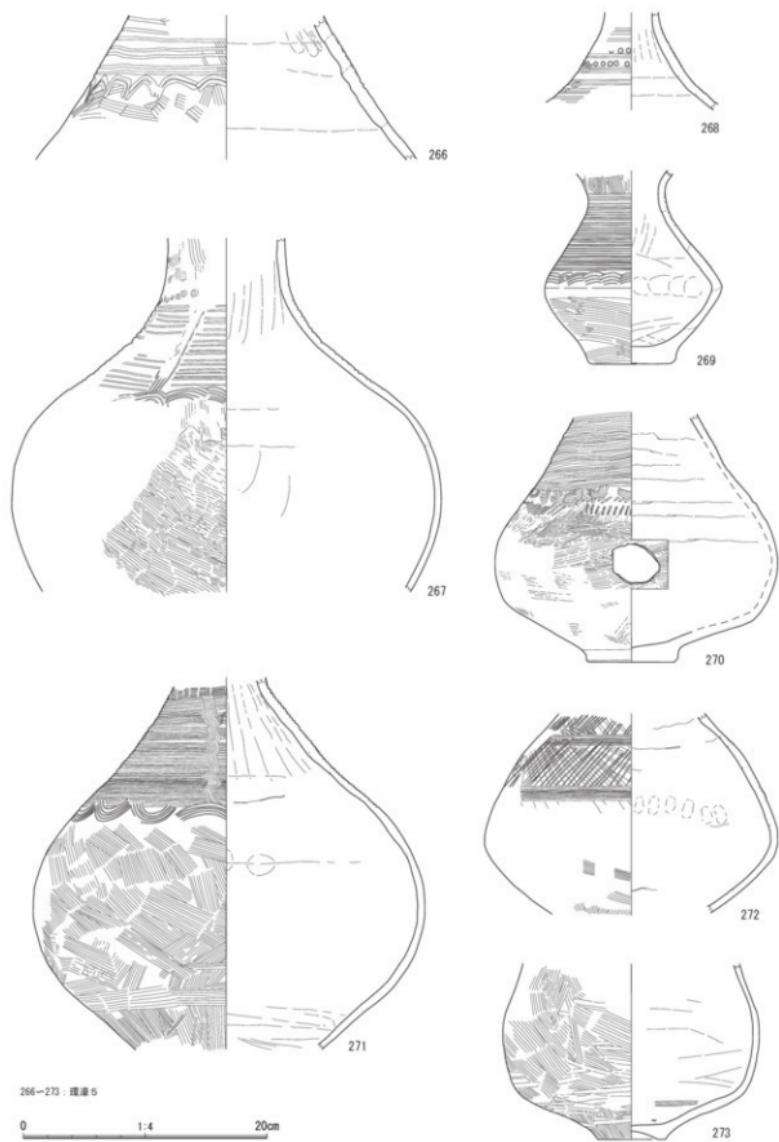
266～273は壺の体部である。268は櫛描直線文間に円形刺突文が2段つく。縦位に短線文が垂下する。267は頸部に円形刺突文が巡り、下に櫛描直線文がつく。最下部には連弧文が巡り、縦位の櫛描直線文がつく。269は小型壺で、体部下半で屈曲する。櫛描直線文が施され、4本単位の連弧文がつく。270は肩の張らない形態で、櫛描直線文が巡り、下部に連弧文、斜位の刺突文がつく。体部下半に穿孔が認められる。271は上部に櫛描刺突文、櫛描直線文帶を有し、下部に連弧文をつける。直線帶には縦位に波状文が垂下する。272は丸みを帯びた無花果形の体部で、上半には斜格子文、櫛描直線文をつける。

274～290は甕である。274は4カ所に押圧痕が認められる。斜め方向の櫛条痕である。瓜郷式の甕である。275は口縁下に突帯を設け、上端は小さい刻み、下端に大きな刻みを入れる。276は口縁下に突帯を付け、下端に刻みを入れる。277は外面に刻み、内面に櫛刺突文が巡る。278は端部下に刻みを入れる。279は突帯を付け、上下端に刻みを入れる。外面は斜め方向の櫛条痕が施される。280は上下端に刻みを入れる。275～280は嶺田式の甕である。

281、282は突帯下端に刻みが入る。281は横方向のハケ調整である。283はやや上げ底で、やや膨らみながら立ち上がり、口縁部は外方へ伸びる。刻みが入り、外面は斜め方向の櫛条痕で仕上げる。285は「く」の字に屈曲し、端部下端に刻みを入れる。

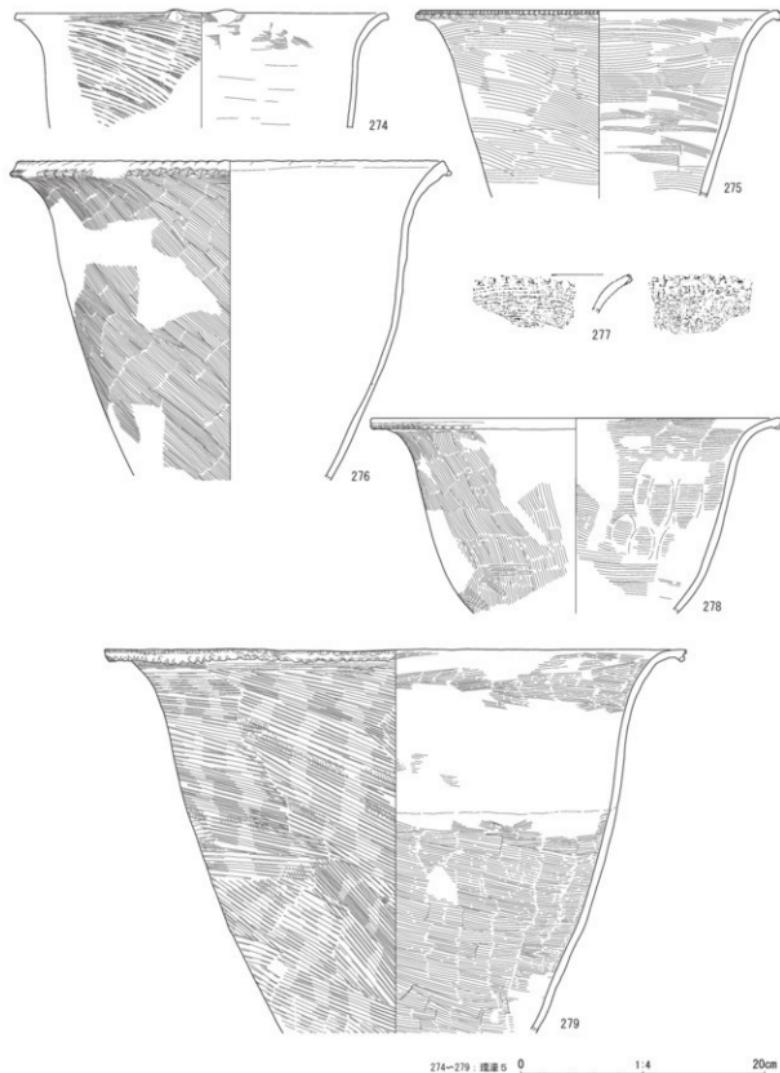
286は緩やかに外反し、外面はナデ仕上げである。287の外面は縦方向のハケ調整が施される。288は口縁部が横ナデされており、ハケ調整が消される。289の端部は折り返され、刻みが入る。291は内湾する高环で、端部は横ナデが施される。外面はハケ仕上げである。292は直線的に延び、口縁部は屈曲しながら肥厚する。293は高环の脚部である。脚部端は屈曲する。外面は縦方向のミガキ調整が施される。294には粘土帶による把手がつき、孔が穿たれる。295は甕底部で脇から孔が穿たれる。296～299は甕底部で、中央に穿孔が施される。300～303は台盤状土製品である。300の上部中央には孔がつき、脚台状である。301は円柱状を呈する。

304、305、307～311は敲石である。304は中粒砂岩の円碟を使用しており、側面に敲打によるとと思われる細かい剥離が見られる。305は石英脈付細粒砂岩の扁平な円碟を使っており、端部に敲打によるとと思われる剥離が見られる。307は中粒砂岩の円碟を使用しており、端部に敲打痕が見られる。308は変輝綠岩

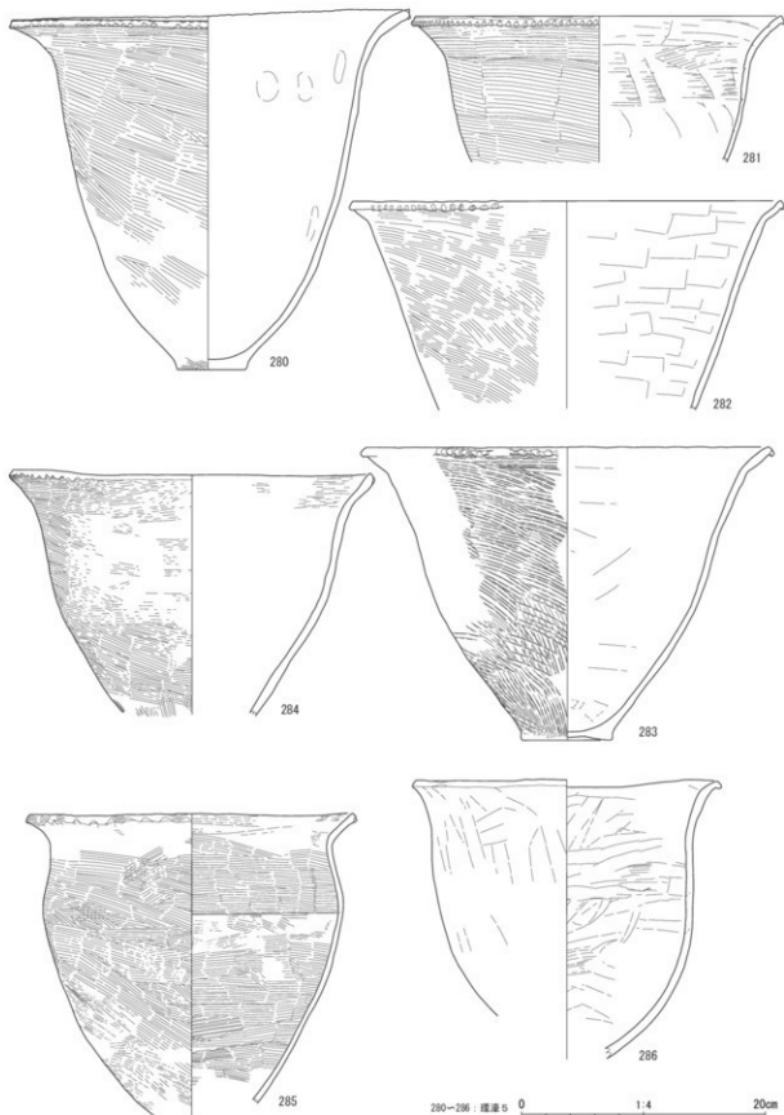


第186図 球塚出土遺物 (18)

遺物（環濠出土遺物）



第187図 環濠出土遺物 (19)

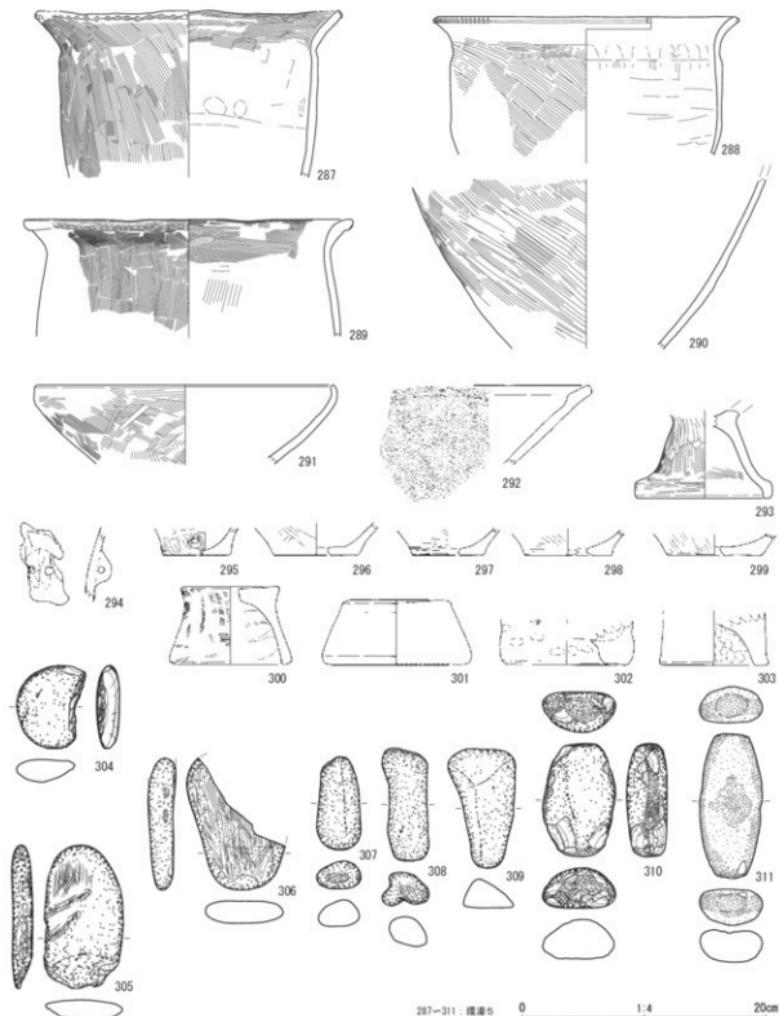


第188図 環濠出土遺物 (20)

遺物（環濠出土遺物）

の細長い円礫を使用しており、端部に敲打痕が見られる。309は細粒砂岩の細長い円礫を使用しており、端部に敲打痕が見られる。310は中粒砂岩の扁平な円礫を使用しており、側面全面に敲打痕と敲打に伴う剥離が見られる。311は砂質凝灰岩の円礫を使用しており、両端に敲打痕が見られる。

306は砾石である。流紋岩質凝灰岩の円礫を使用しており、表面に磨滅が見られる。



第189図 環濠出土遺物 (21)

4 方形周溝墓出土遺物

SZ01出土遺物（第190図） 1は櫛描直線文に斜格子文がつく。2は外面に櫛描直線文と波状文がつく。

SZ02出土遺物（第190～194図） 3、4は細頸壺である。7は単純口縁壺で、体部は無花果形を呈する。口縁端部に刻みが入る。体部上半は櫛描直線文帯に波状文が下部につく。その上から櫛描直線文が垂下する。8は頸部に円形刺突文が巡る。9は頸部に連弧文がつく。10は体部下位に穿孔がみられる。11は広口壺で、頸部から体部にかけて櫛描直線文帯がつく。下部は斜格子文帯がつく。12は単純口縁広口壺で、口縁端部に刻みが入る。頸部から体部にかけて櫛描直線文帯に巻状文が下部につく。

13～15は受口状口縁壺である。14の受部には綫位に波状文、その上から棒状浮文がつく。15は斜格子文が受部に施される。16は面取りされた広口壺で、頸部に連弧文がつく。17は端部が肥厚し、三角形状に垂下する。端面には斜格子文がつく。18は細頸壺で、口縁下に横ミガキ、頸部は綫ミガキがみられる。体部は連弧文がつき、そこから斜格子文が施され、綫位区画の櫛描直線文がつく。19は丸みを帯びた体部に細頸がつく。体部には櫛描直線文間に櫛刺突羽状文が施される。20は丸みを帯びた体部に細い頸部がつく形態である。頸部から体部にかけて直線文が施される。体部中位までは斜めハケ、下位には綫ハケが施される。

21は球胴状の体部に櫛描直線文と斜格子文が上位に施される。22は体部下位で屈曲する形態の広口壺である。ハケ仕上げである。

23～29は壺の頸部から体部である。23～27は細頸壺である。23の体部上半には櫛描直線文帯の下部に波状文がつく。文様帯の上から櫛描直線文が垂下する。28は丸みを帯びた体部である。29は下膨れの形態でミガキ調整による綫位区画に斜格子文がつく。無文帯下には円形浮文が貼付される。30～32は高坏の脚部である。30の脚部端は横ナデにより三角状を呈する。33は鉢で、口縁部は短く外反する。頸部に円孔が認められる。

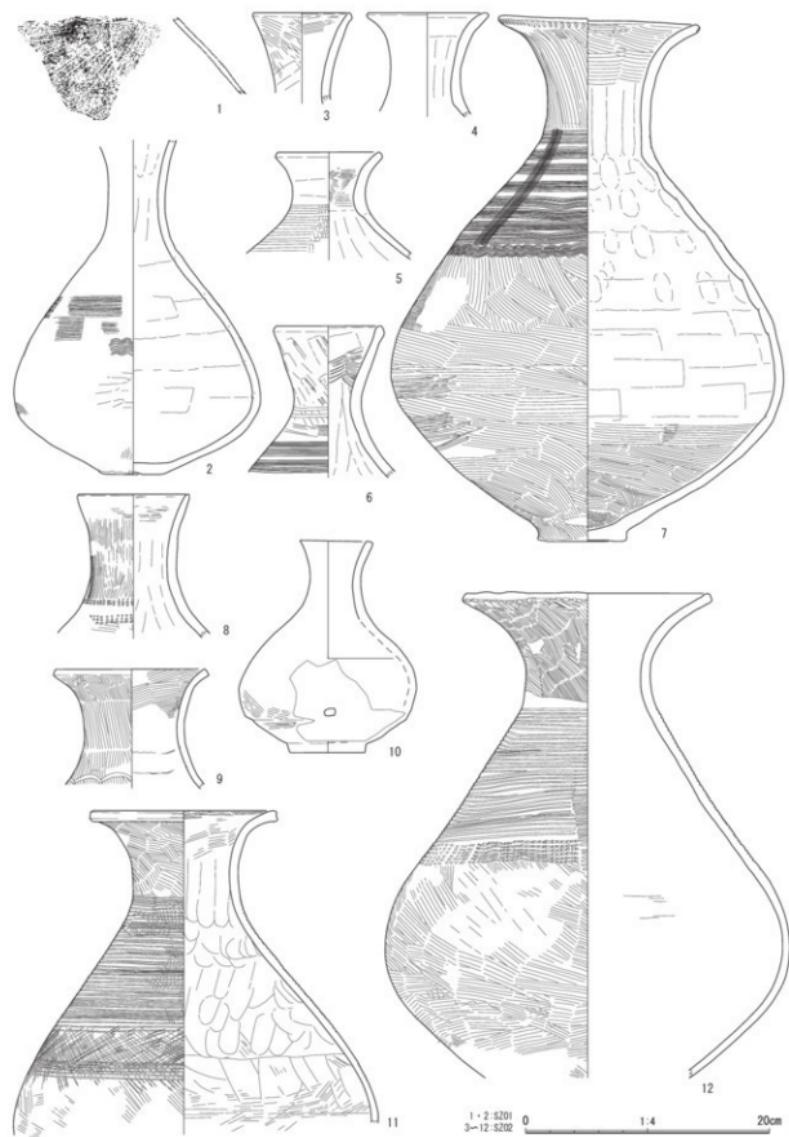
34、35は「ハ」の字に聞く壺で突帯がつき、下端に刻みを入れる。34は両端に刻みを入れる。36は突帯を付けず、そのまま刻みを入れ、37～43も同様である。外面は綫ないし斜めハケ調整である。45～47は底部穿孔土器である。48、49は台盤状土器製品である。51は不明土器製品である。棒状を呈し、外面にはハケ調整が施される。接合痕が残ることから把手の可能性がある。

52～69は周溝内から出土した石器である。敲石が多く認められる。52は砥石である。流紋岩質凝灰岩製で、両面に研磨痕がある。

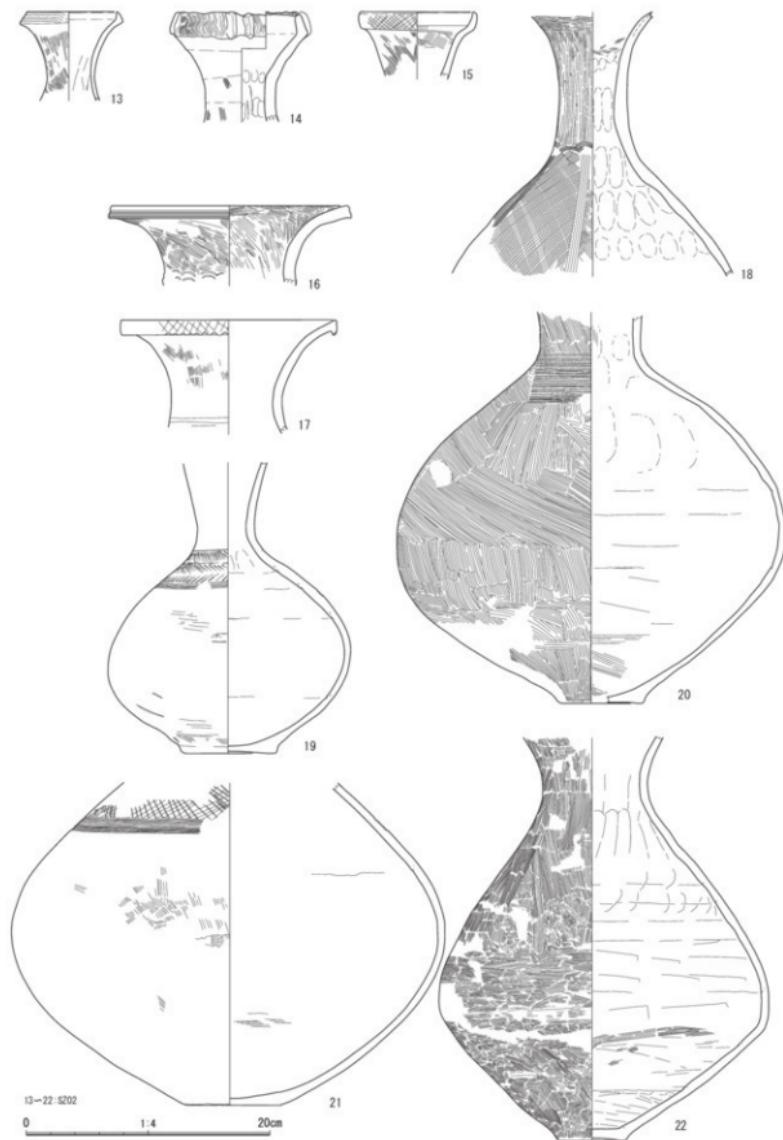
53は小型の磨製石斧である。暗緑灰色チャート製で、厚みのない石斧である。両面を研磨してある。側面も研磨して縁辺が曲線を描くように仕上げている。刃部は片刃にしている。54は磨製石斧である。暗灰色中粒砂岩の円礫を使用しており、周縁からの平坦剥離と敲打によって全体の形を整え、最後に研磨して仕上げている。55は磨製石斧の未完成品である。角閃岩の細長い円礫を使用しており、一端に両面から剥離を入れてことから、石斧の刃部を作ろうとしていると思われる。

56は石錐である。砂質ホルンフェルスの円礫を使用しており、両端を研磨して溝を作っている。

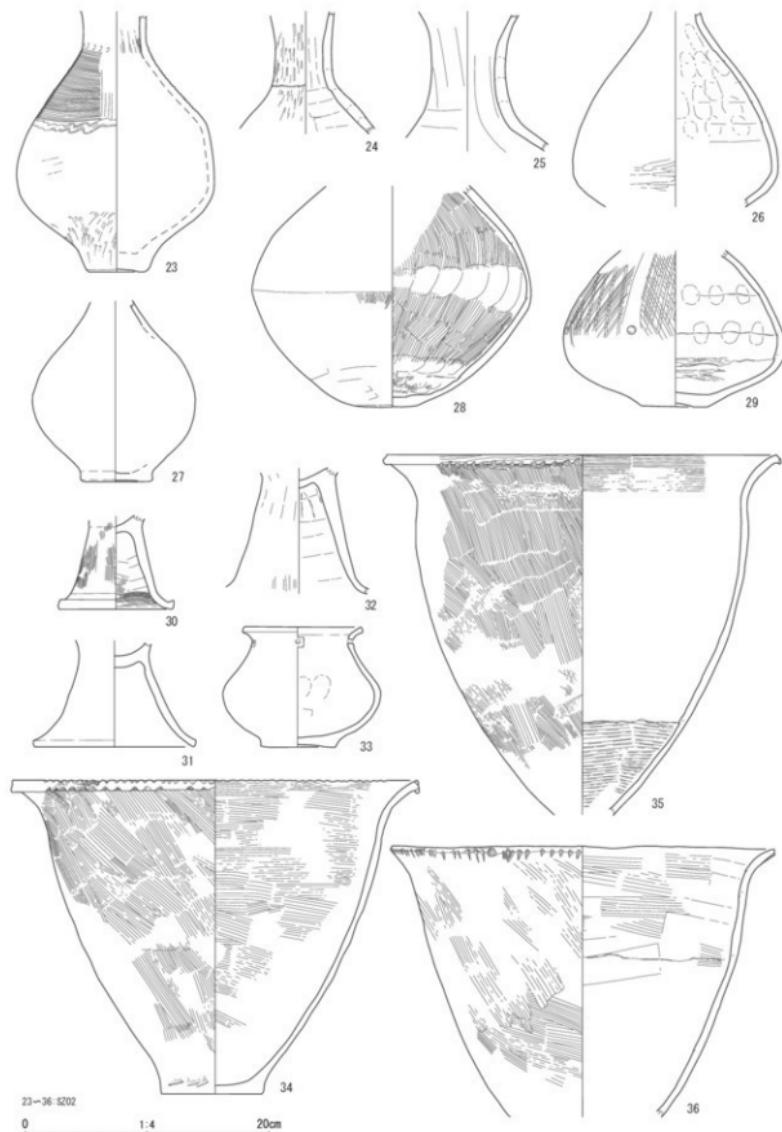
58～68は敲石である。形状は棒状もの、塊状のもの、扁平なものが認められる。58は含礫粗粒砂岩の細長い円礫を使用しており、両端に敲打痕が見られる。使用の途中で綫に割れたと思われる。59は含礫中粒砂岩の細長い円礫を使用しており、一端に敲打痕が見られる。60は含礫中粒砂岩の細長い円礫を使用しており、一端と表面の一部に敲打痕が見られ、また、表面に擦れたような痕跡が見られる。62は変輝綠岩の細長い円礫を使用しており、一端に敲打痕が見られる。63は含礫中粒砂岩の細長い円礫を使用しており、両端に敲打痕と敲打に伴うと思われる剥離が見られる。64は含礫中粒砂岩の細長い円礫を使用しており、両端と表面、側面に敲打痕が見られる。65は含礫中粒砂岩の細長い円礫を使用しており、両端と側面に敲打痕



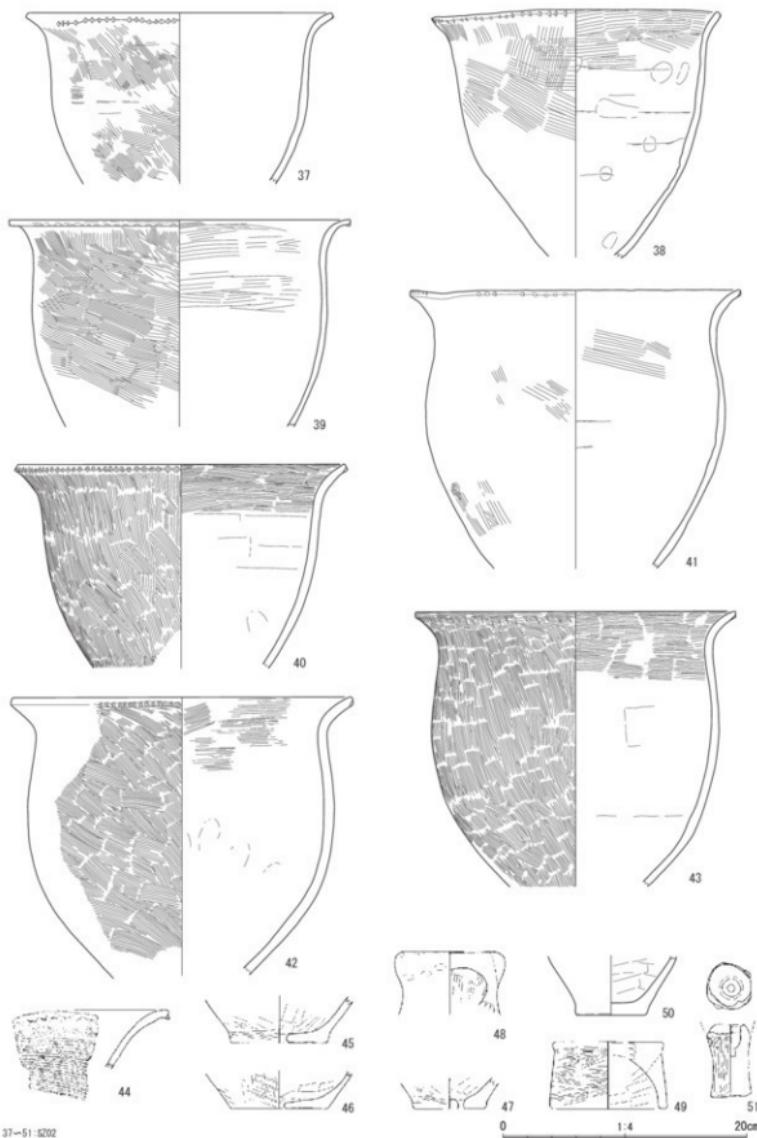
第190図 SZ出土遺物（1）



第191図 SZ出土遺物（2）

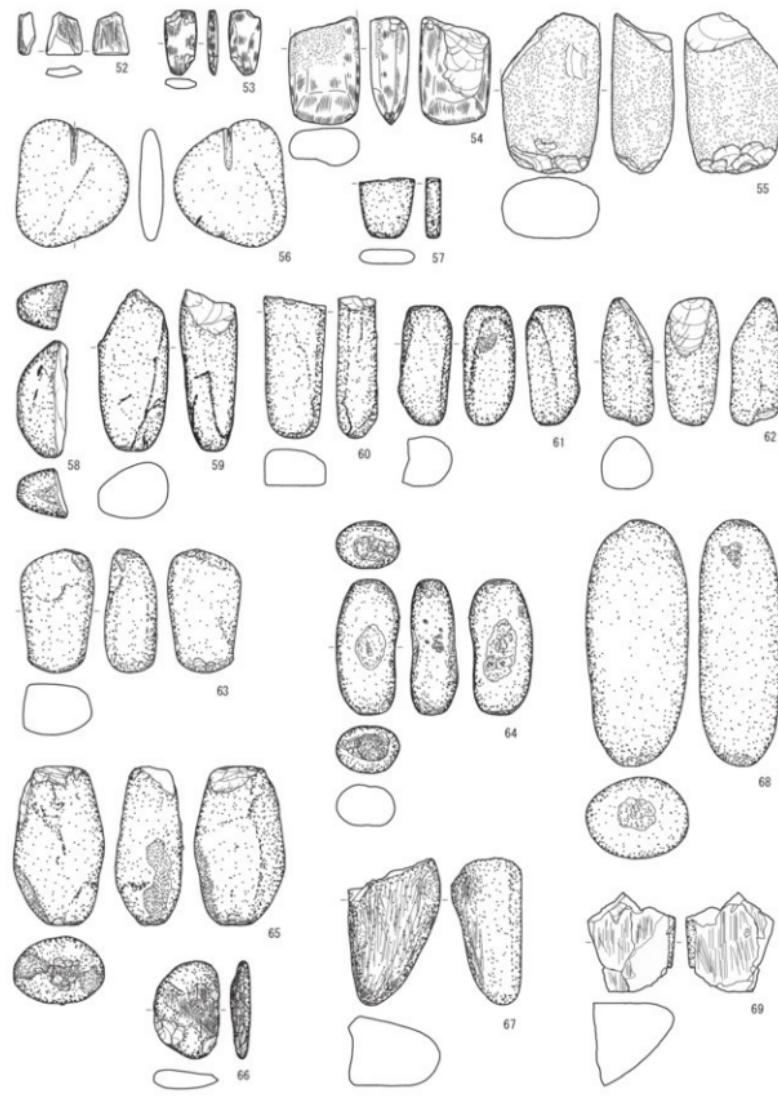


第192図 S2出土遺物（3）



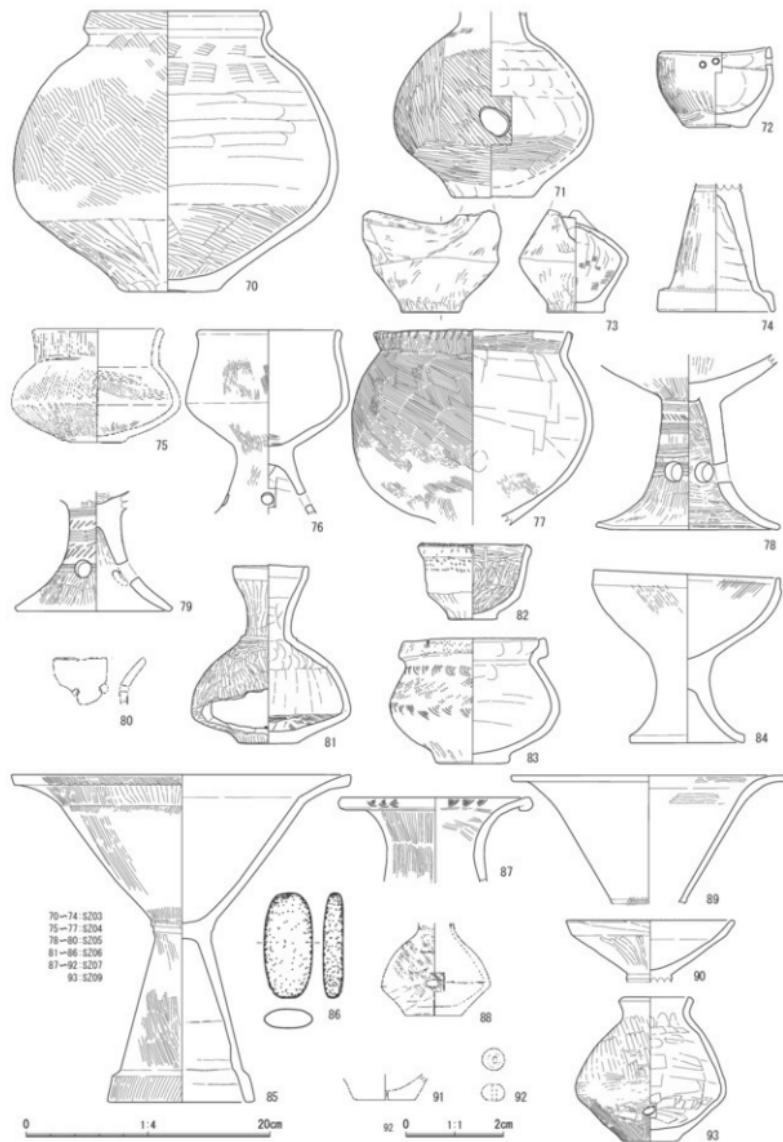
37-51:5202

第193図 SZ出土遺物（4）

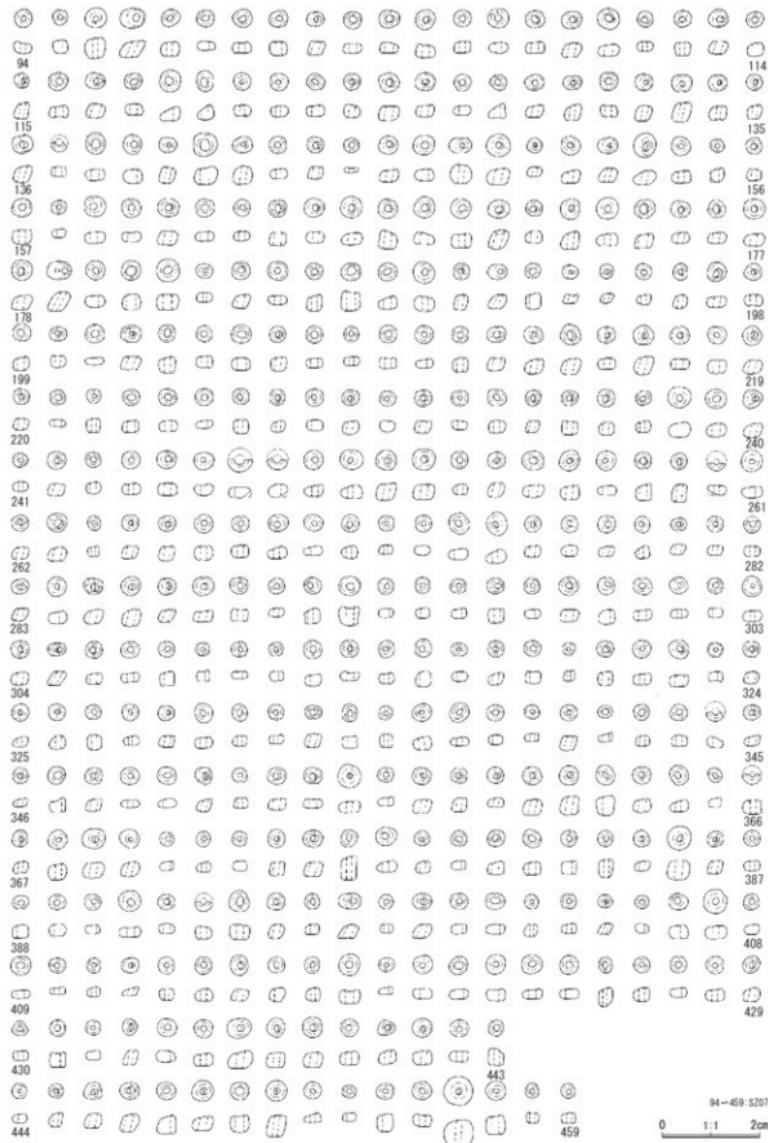


SZ-69-S202 0 1:4 20cm

第194図 SZ出土遺物（5）



第195図 SZ出土遺物（6）

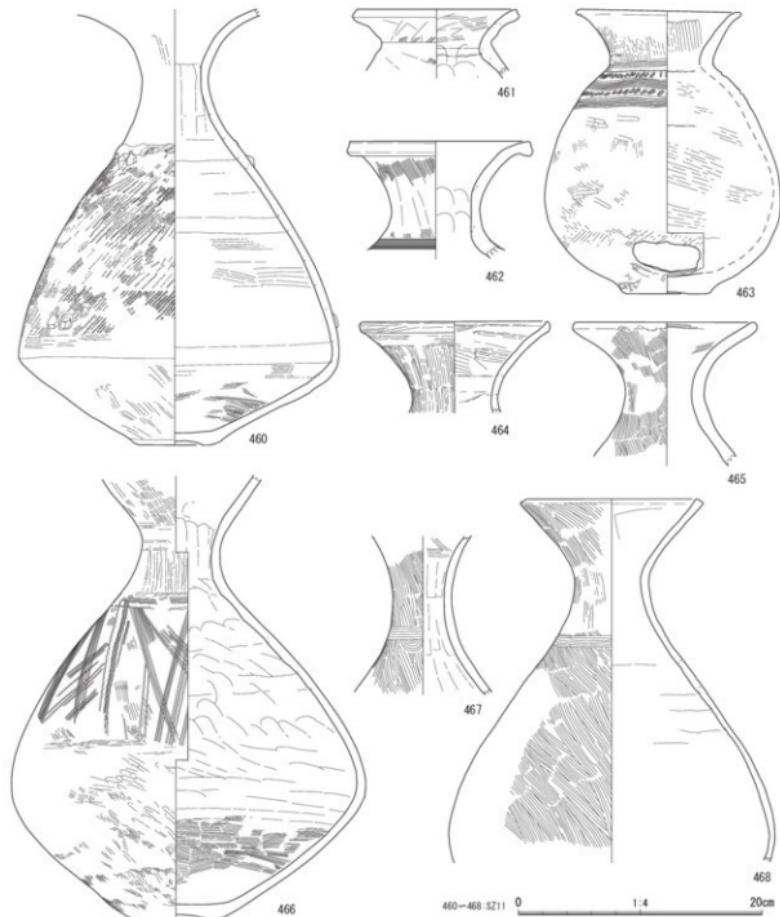


第196図 SZ出土遺物（7）

と敲打に伴う剥離が見られる。66は粗粒砂岩の扁平な円碟を使用しており、表面に敲打痕があり、側面には敲打痕と敲打によると思われる剥離が見られる。また、表面には研磨したような痕跡も見られる。

67は磨石である。中粒砂岩の円碟を使用しており、表面に研磨痕がある。68は花崗岩の細長い円碟を使用しており、両端と側面の一部に敲打痕が見られる。

69は石皿で、含礫粗粒砂岩の厚みのある円碟を使用しており、表面が研磨されている。



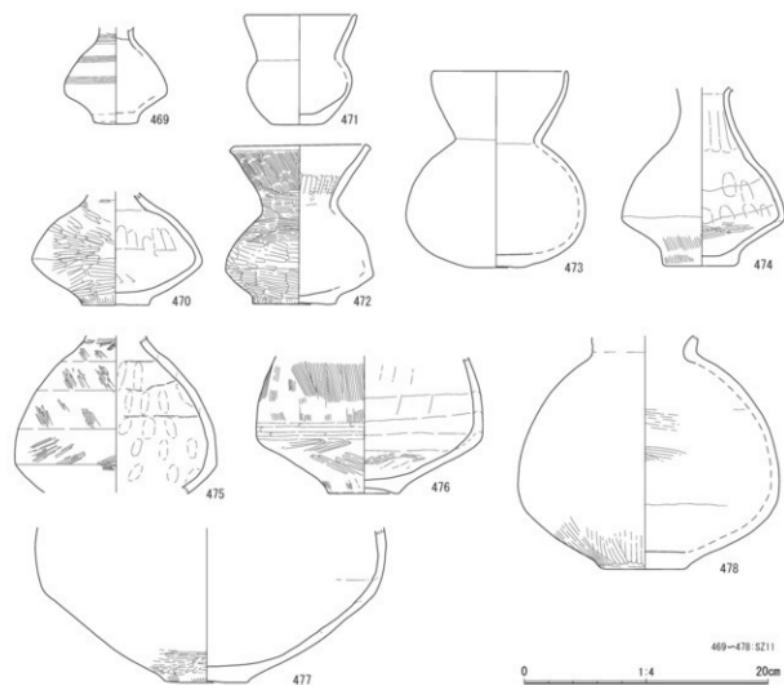
第197図 SZ出土遺物（8）

SZ03出土遺物（第195図） 70は鉢である。口縁は受口状に屈曲し、受部にはハケ調整が施される。71は細頸壺で、体部下位に横ミガキ、上半は斜めにミガキが施される。体部下位に穿孔が施される。72は小型鉢である。縦位にミガキが施される。口縁下に2ヵ所の円孔がみられる。73は鳥形土器である。壺形で、鳥の頭部ではなく注口部として、反対側に尖った尾部を作る。注口部の径は3.2cmである。体部外面の下位はハケのちにミガキ調整を施す。背面はハケ調整が施される。74は菊川式の高環の脚部である。

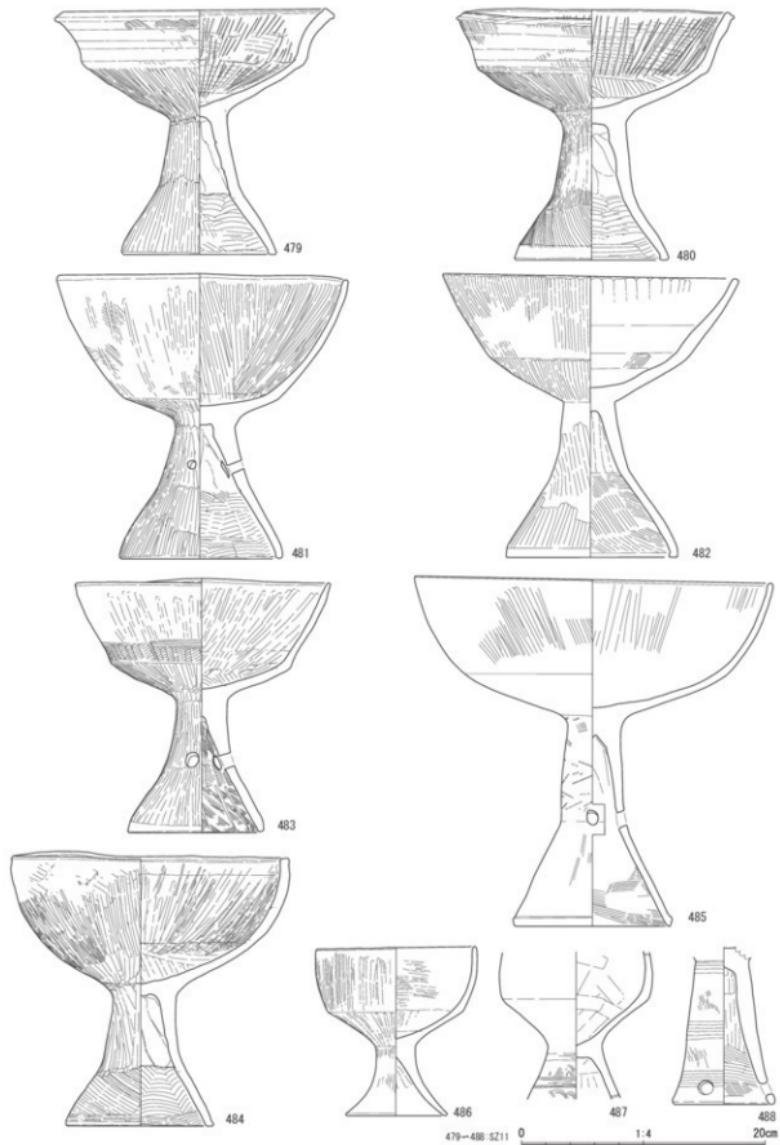
SZ04出土遺物（第195図） 75は小型の鉢である。体部中位で最大径をとり、口縁は直立する。外面は縦位のミガキが施される。76はワイングラス形高環である。外面は縦位のミガキが残る。77は甌で球制状である。

SZ05出土遺物（第195図） 78、79は高環の脚部である。「ハ」の字に広がり、櫛描直線文と櫛刺突文で構成される。80は頭部に2個の円孔が見られる。

SZ06出土遺物（第195図） 81は単純口縁細頸壺である。外面はミガキが全面に施される。頸部と体部の境に低い突帯がつく。体部下半は穿孔が施される。82は小型の鉢である。端部は面取りされ、刻みがある。外面は刺突文がめぐる。内面は縦方向のミガキが施される。83は受口状の口縁をもつ鉢である。受部に櫛刺突文、体部外面に扇形文が2段、櫛描刺突文がつく。84は碗形の环部を有する高環である。口縁は横ナデにより屈曲する。85は深い环部で、口縁は外方へ屈曲する。脚部は高く、端部で屈曲する。



第198図 SZ出土遺物（9）



第199図 SZ出土遺物 (10)

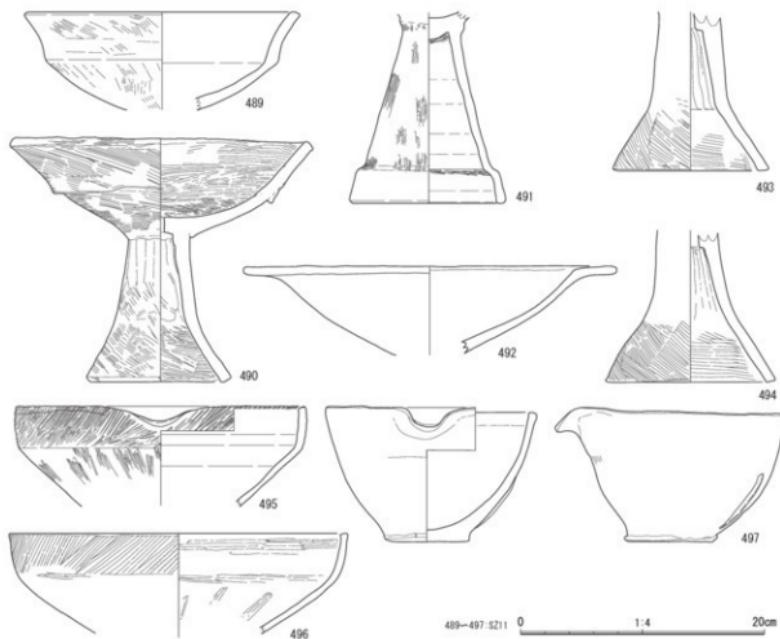
端部には櫛刺突、接合部には1条の沈線が巡る。

86は含碟中粒砂岩の細長い円碟を用いた敲石で、両端に敲打痕と敲打に伴う剥離がある。

SZ07出土遺物（第195図、第196図） 87は折返口縁壺である。外面に扇形文がめぐる。88は小型壺で、体部に穿孔が認められる。91は底部穿孔土器である。92は周溝から出土したガラス小玉である。94～443は第1主体部から出土したガラス小玉である。444～459は第2主体部出土のガラス小玉である。

SZ09出土遺物（第195図） 93は短い頸部をもつ小型壺である。外面は斜位にミガキが施される。

SZ11出土遺物（第197～201図） 460は細頸壺で、口縁は強く外反する。肩の張りがなく、体部下半で屈曲する。体部にはLR繩文が施される。繩文帯の上下には2個1単位の円形浮文が貼付される。461、462は単純口縁壺である。463は単純口縁広口壺で、体部は丸みを帯びる。体部上半は櫛描直線文、間に櫛刺突文が巡る。体部下位には穿孔が施される。464は強い横ナデにより端部はつまみ上がる形態である。466は口縁部が直線的に開く形態で、体部は無花果形である。頸部は縱方向のミガキが施され、体部上半は櫛描きにより斜格子状に直線文、波状文をつける。467は細い頸部で、連弧文が施され、横位の櫛描直線文が1条巡る。468は口縁部が直線的に伸びる形態で、頸部に櫛描直線文が1条つく。外面はハケ仕上げである。469、470、472、474は小型の壺である。469は櫛描直線文が3条巡る。470は算盤玉状の体部をもつ。472の口縁部は直線的に伸びる。体部下半は横ミガキ、上位はハケ仕上げである。471、473は壺である。474は細頸で、体部は屈曲する。475～478は壺体部である。無花果形を呈するもの、球胴を



第200図 SZ出土遺物（11）

呈するものがある。476は上げ底である。

479～494は高环である。479、480は外反口縁の高环である。縦方向のミガキ調整が施される。脚部は内湾して開く。481～483は环部下位に稜をもち、深い环形である。脚部は内湾して開く。縦方向のミガキ調整が顕著である。483の外面には櫛描直線文と櫛刺突文が巡る。484は内湾する环部で、脚部端で直線的に開く。环部外面ともに縦のミガキ調整が施され、脚部外面上位は縦のミガキ、下位はハケ仕上げとなっている。485は皿状の环部で、口縁は内湾する。脚部は細く、端は「ハ」の字に直線的に開く。脚部外面は櫛刺突羽状文がつく。486、487は小型高环で、ワイングラス形である。外面は縦方向のミガキ調整が施される。488は高环脚部で、櫛描直線文で構成される。円孔は脚端に近い位置にある。490は



第201図 SZ出土遺物 (12)

浅い环部で、外面は貼り付け突帯により屈曲する形態である。环部、脚部とともにハケ仕上げである。色調、技法は493、494と同様である。492は浅い环部で、口縁部は外方へ屈曲する。491は高环脚部で端は屈曲する。493、494は脚部が広がる形態でハケ仕上げである。495、497は鉢である。495、496は直立する口縁部で、斜位の櫛刺突文が施される。495～497は片口がつく。497は直線的に伸びる鉢である。端部は面取りされる。

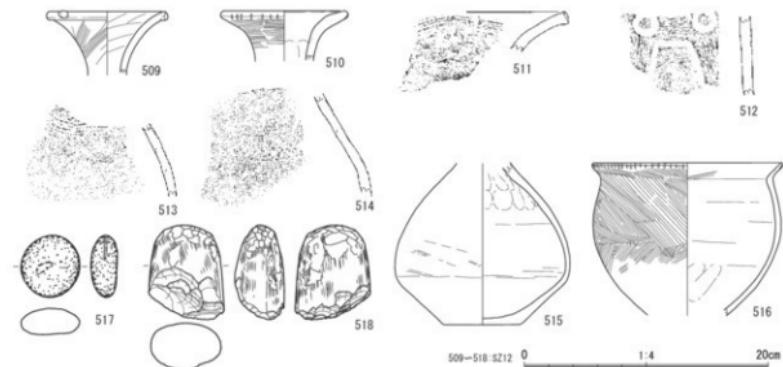
498～503は台付壺である。498の体部は直線的に伸び、口縁部は短く外反する。脚部は高く、直線的に「ハ」の字に開く。接合部には粘土帯がつく。499、500の口縁部は短く外反し、刻みが入る。499は短胴状である。502、503は小型の台付壺である。502の口縁部は直線的に上方に伸びる。外面の口縁部は縦のハケ、体部は横ハケである。505は台盤状土器製品である。

506は有孔磨製石鑿である。凝灰質粘板岩製で、両面を丁寧に研磨して薄く仕上げている。中央のやや基部側に両面から穴を開けている。507は敲石である。流紋岩質凝灰岩の円盤を使用しており、側面に敲打痕があり、表面の数カ所に研磨した痕跡が見られる。508は凹石である。含蝶中粒砂岩の円盤を使用しており、表面に敲打によるくぼみが見られる。

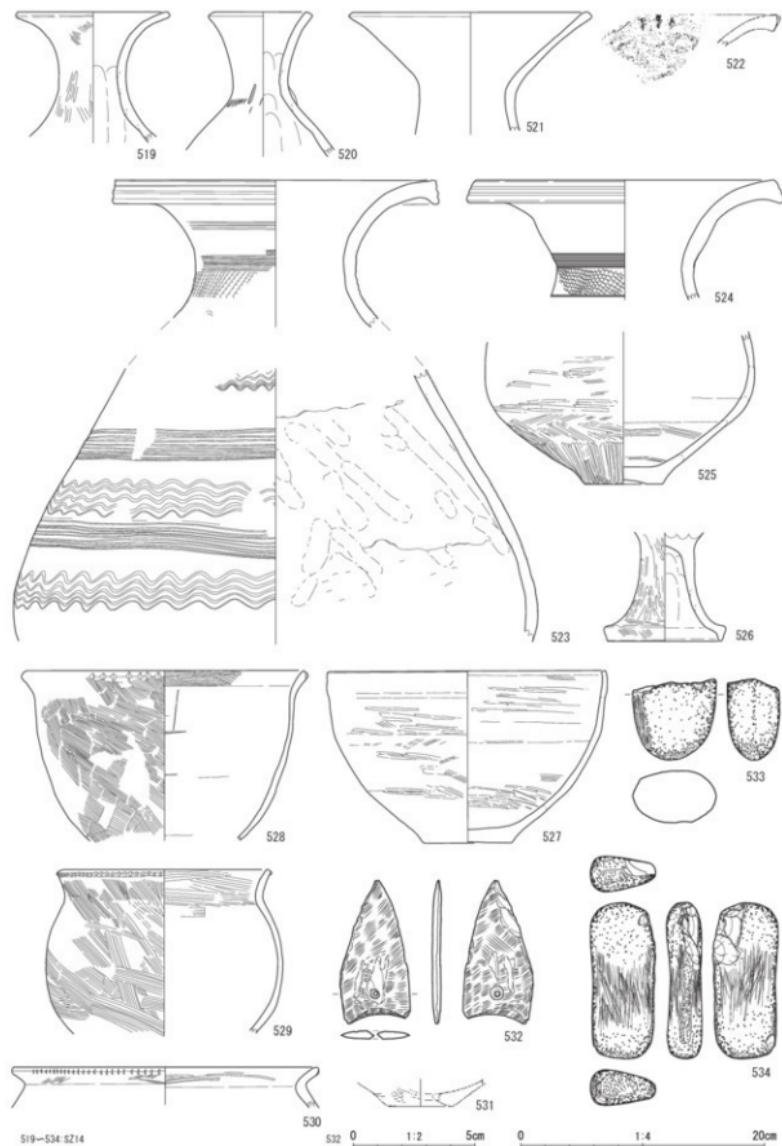
SZ12出土遺物（第202図） 509は折返口縁壺である。510は単純口縁の壺で、端部に刻みが入り、外面に横方向の櫛描直線文がつく。511の端部は面取りされる。512は嶺田式土器の頸部で、ヘラ描沈線間に櫛描文が施される。513は櫛描直線文に連弧文がつく。514は櫛描直線文、斜格子文、円形刺突文が巡る。516は「く」の字に開く台付壺である。

517は敲石である。細粒花崗岩の円盤を用いており、側面の一部と表面の一部に敲打痕が見られる。518は磨製石斧である。暗緑灰色蛇紋岩の厚みのある円盤を使用しており、両端と側面に剥離を入れて形を整えている。実測図下側の端部に刃部を作ろうとした剥離が見られるが、剥離角が鈍角に近く、加工が困難だったと思われる。

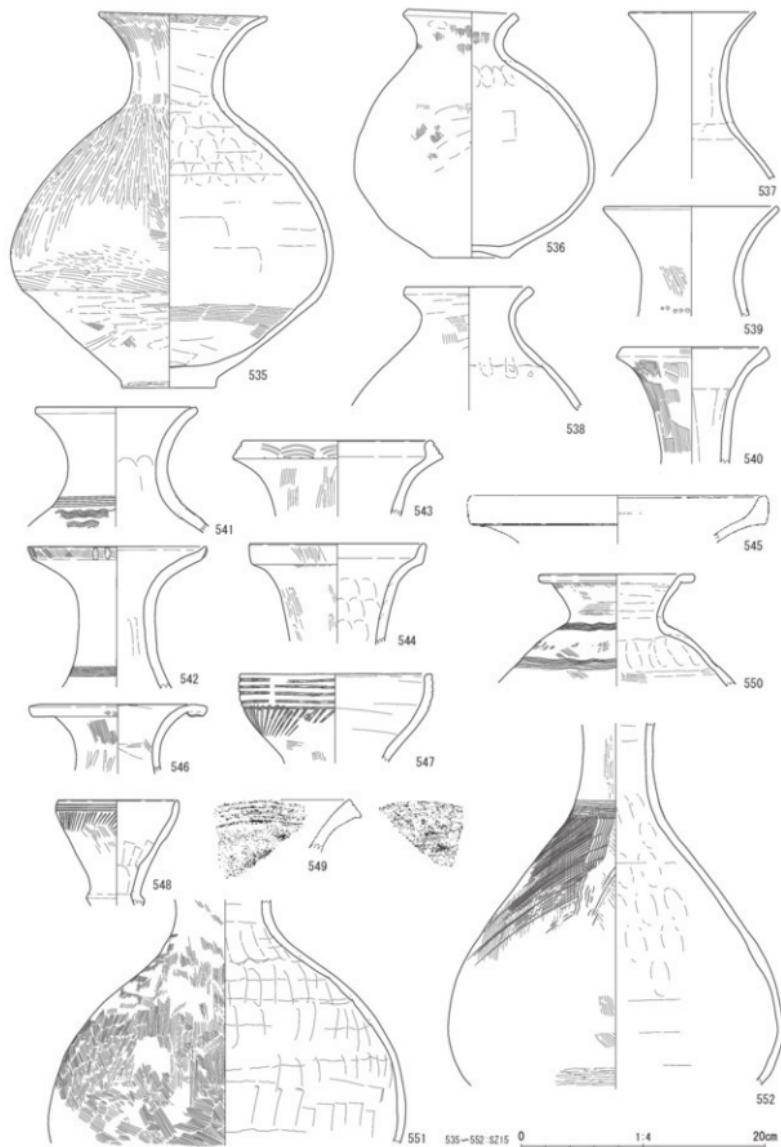
SZ14出土遺物（第203図） 519、520は細頸壺で、519は外反し、520は直線的に伸びる。521は頸部から直線的に広がる形態である。523、524は四線文系土器である。523は短い頸部をもち、体部は無花果形を呈する。口縁部に3条の凹線がつく。頸部は櫛描直線文と櫛刺突文がつく。外面は櫛描直線文と振り幅の大きい波状文を交互に施す。526は高环脚部で端部は屈曲する。縦方向のミガキが施される。527は口縁部が内湾する鉢である。528～530は甌である。529は球胴状である。530は短く外反する。



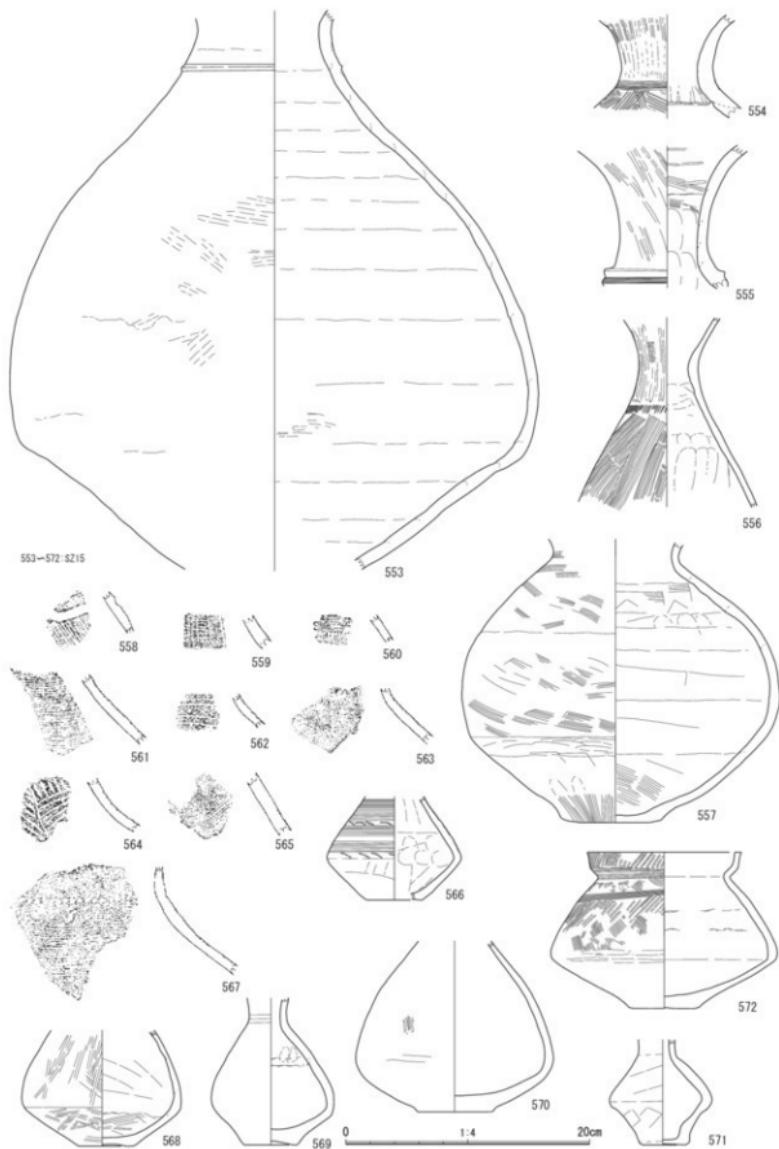
第202図 SZ出土遺物（13）



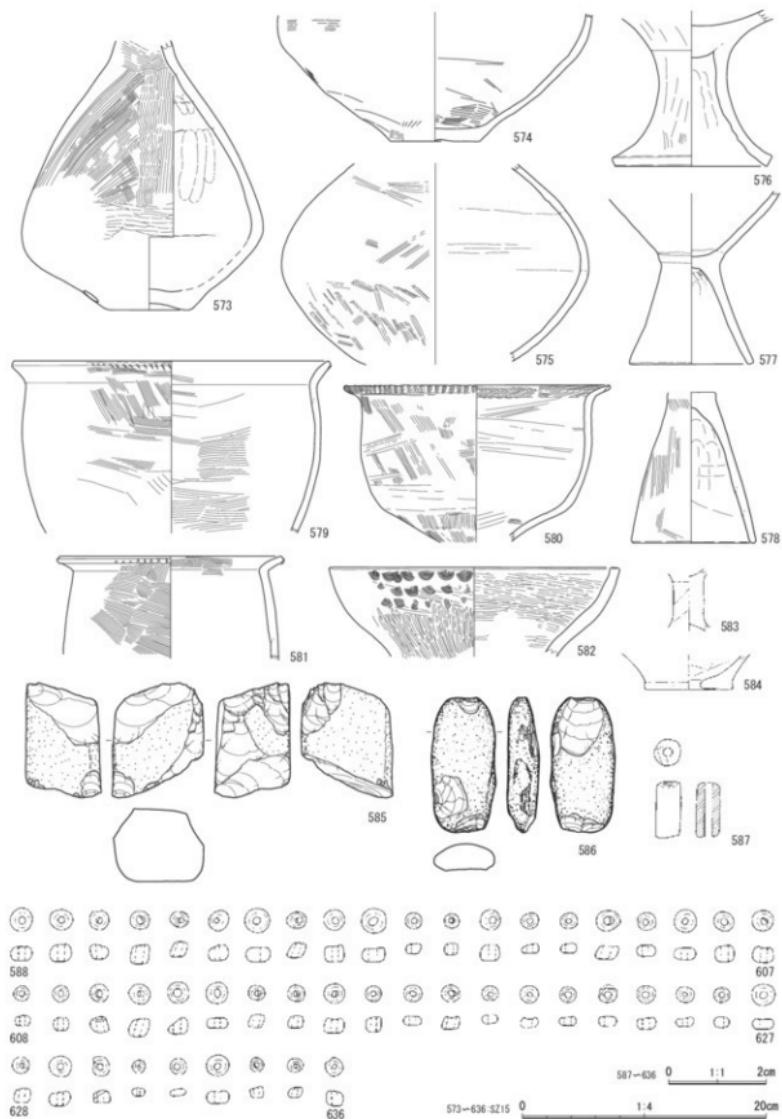
第203図 SZ出土遺物 (14)



第204図 SZ出土遺物 (15)



第205図 S2出土遺物 (16)

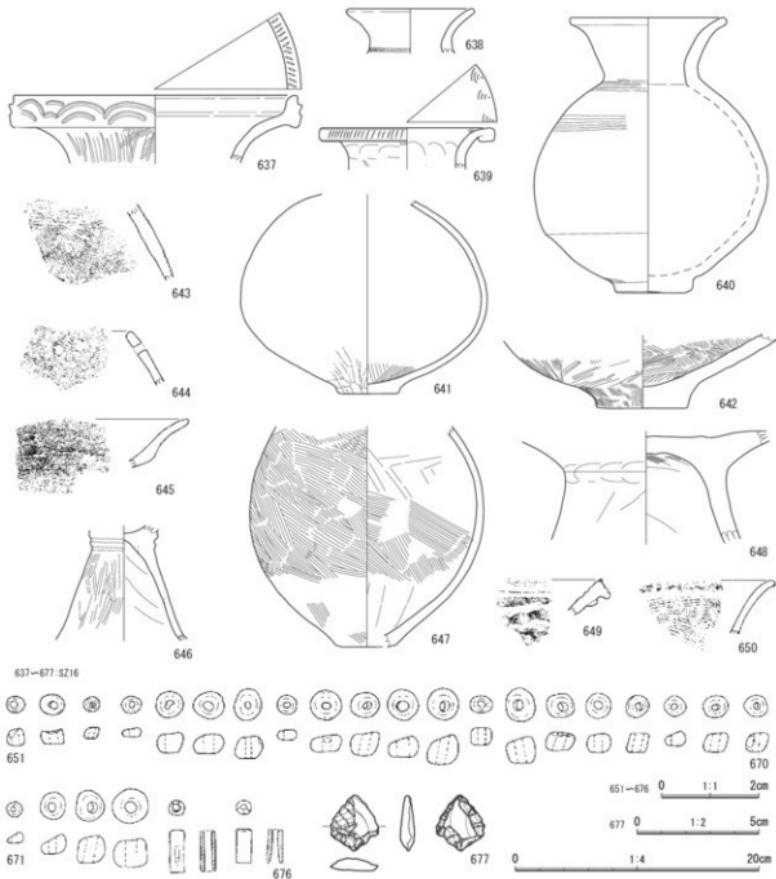


第206図 S2出土遺物 (17)

532は有孔磨製石鏃である。オリーブ灰色粘板岩製で、両面を丁寧に研磨して薄く仕上げている。中央よりやや基部側に両面から穴を開けている。

533は敲石で流紋岩質凝灰岩の円礫を使用しており、端部に敲打痕があり、側面にも研磨したような痕跡がある。534は流紋岩質凝灰岩の細長い円礫を使用しており、両端と側面に敲打痕がある。側面には敲打に伴うと思われる剥離が見られる。

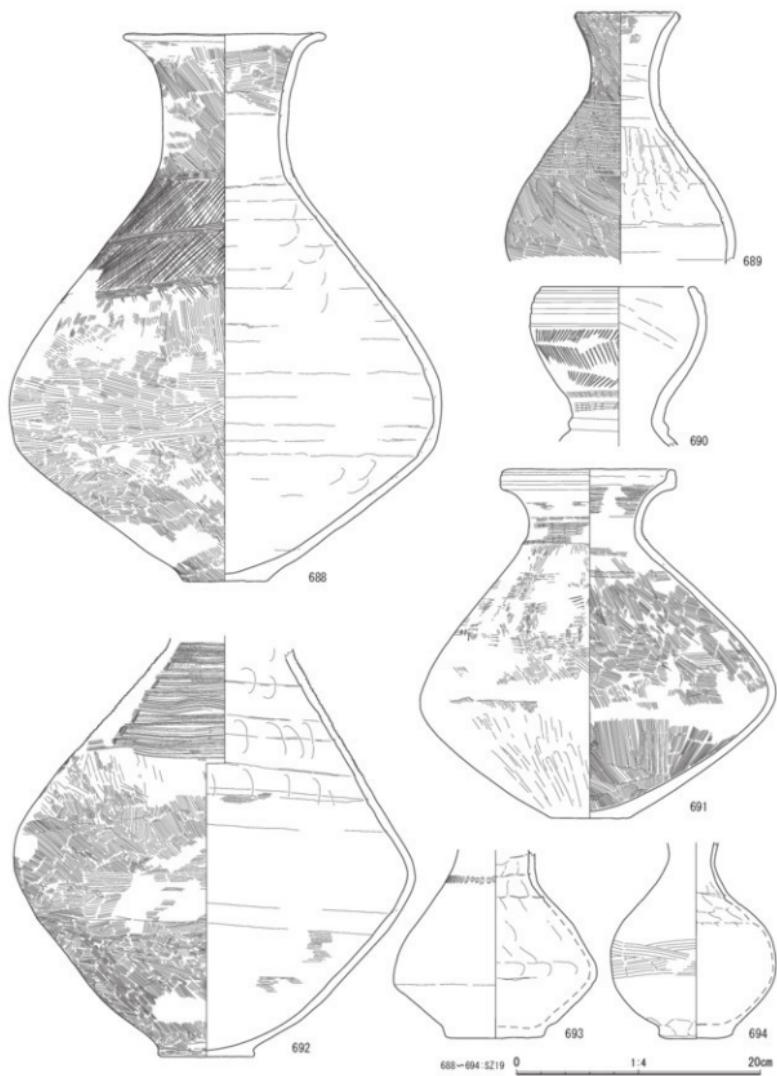
SZ15出土遺物（第204～206図） 535～541は単純口縁の広口壺である。535の体部下位に最大径をもつ。上半は縦方向のミガキ調整、下半は横方向のミガキ調整が施される。536は短い頸部をもち、球胴状を呈する。ハケ仕上げである。537、540、542、544は細頸壺である。539は頸部に円形刺突文が巡る。541は櫛描直線文、波状文の構成である。542には棒状浮文がつく。543～545は受口状口縁壺である。543は連



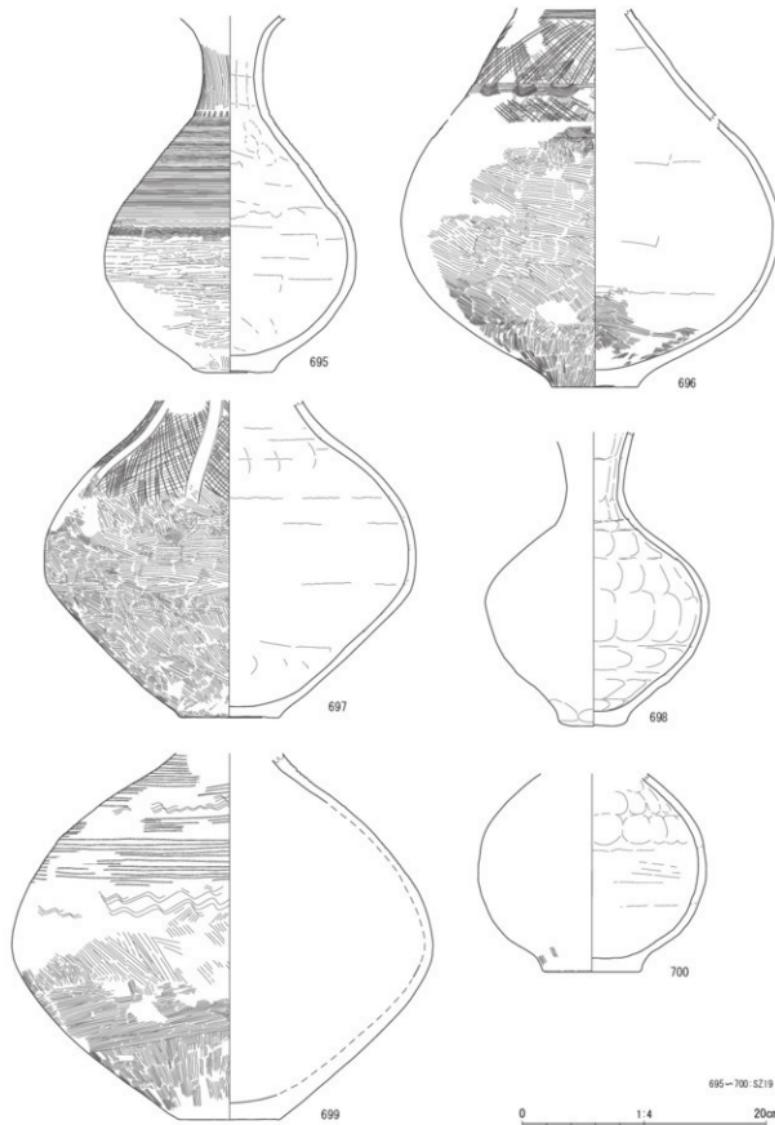
第207図 SZ出土遺物 (18)



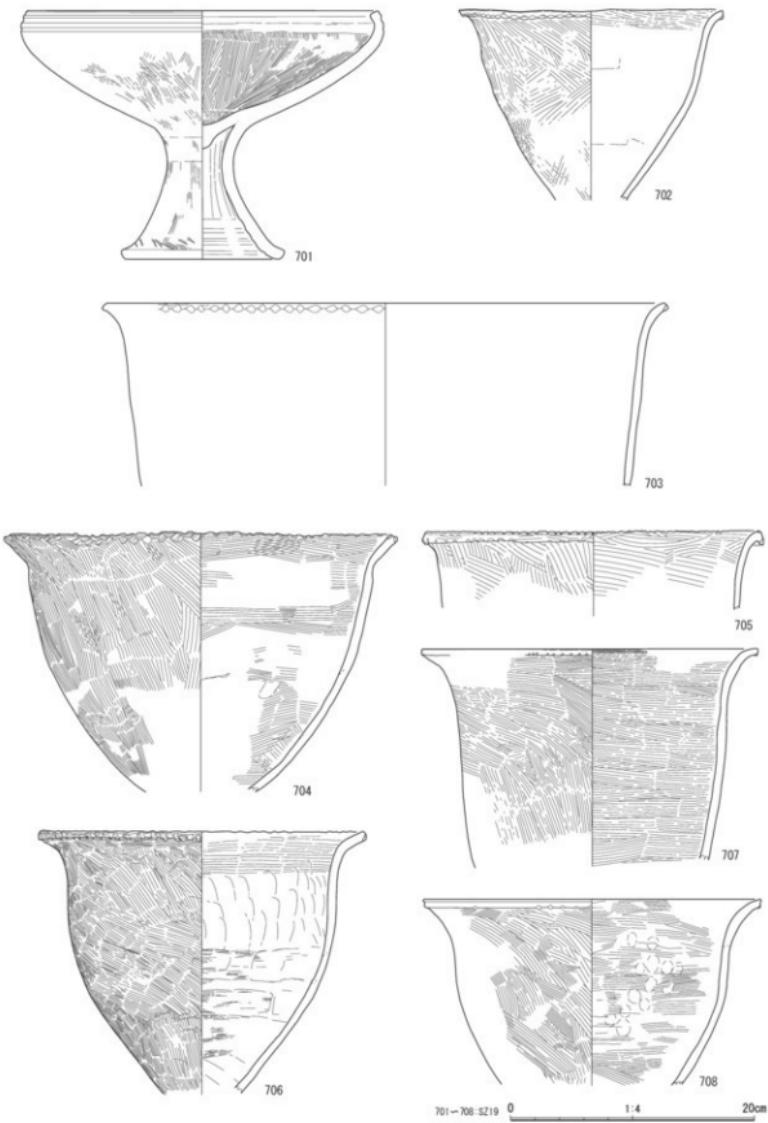
第208図 SZ出土遺物 (19)



第209図 S2出土遺物 (20)



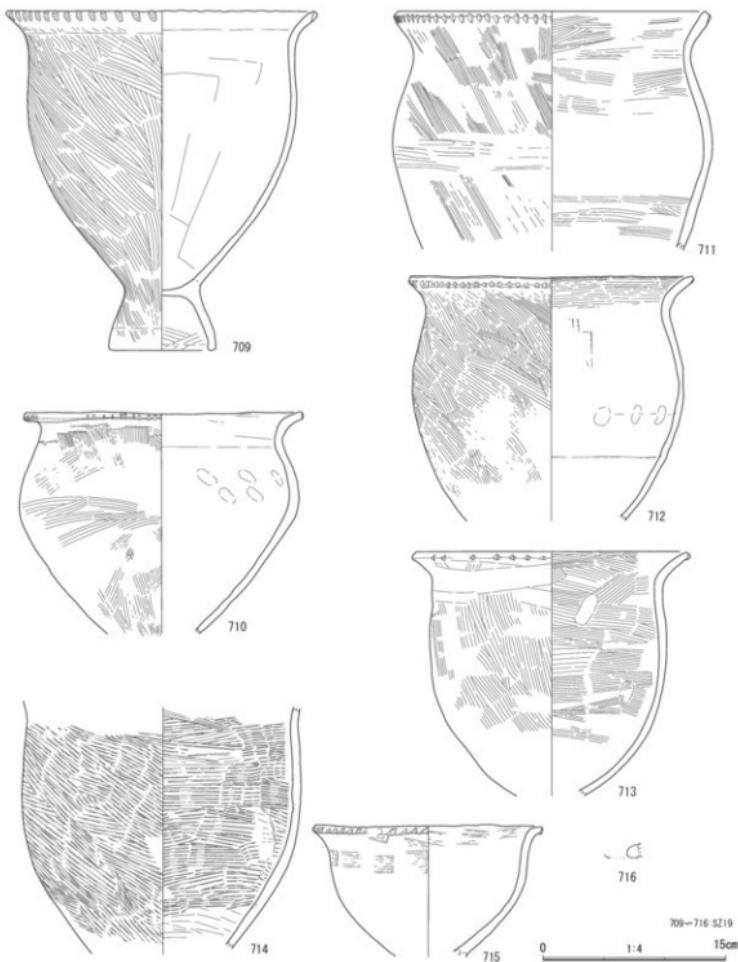
第210図 SZ出土遺物 (21)



第211図 S2出土遺物 (22)

弧文が受部につく。546、550は折返口縁壺である。547、548は内湾する口縁部で、櫛描きによる凹線が巡る。下部には櫛刺突文が斜位に巡る。549は面取りされた端部に凹線が巡り、内面に扇形文が2段つく。550は櫛描波状文がつく。551は細頸で、体部は丸みを帯びる。552は細頸で、体部は無花果形である。櫛描直線文下には斜格子文が施され、縦位に櫛描波状文が垂下する。

553は大型の壺で、頸部に低い突帯がつく。わずかにミガキが残存する。556は細い頸部で櫛描刺突文が巡る。体部はハケ状工具を用い、斜位に施す。557は丸みを帯びた体部である。



第212図 S2出土遺物 (23)

558～567は体部片で、嶺田式土器、瓜郷式土器が含まれる。これらは下層からの混入によるものと思われる。572は鉢である。口縁部には櫛描きによる斜位の刺突文、頸部に直線文、体部上半には扇形文、直線文、櫛描刺突文がつく。体部屈曲部は横方向のミガキが施される。573は波状文下に斜格子文が施される。その上から櫛描波状文が垂下する。

576～578は高环脚部である。578は环部との接合が剥がれた状態のものである。

579～581は甕である。579の口縁部は短く屈曲する。580は短胴で、下位で屈曲する形態である。582は肩状文が3段つき、下部はミガキ調整である。583は柱状高台であろう。584は底部穿孔土器である。

585、586は石斧未完成品である。585は中粒砂岩の細長い円盤を使用しており、両端と側面に剥離が見られる。側面から平坦剥離を入れて厚みを取る意図がうかがえること、実測図下端に見られる両面から入れた平坦剥離は、鋭角になった一端を作ろうとしていることなどから、石斧を作ろうとしていると思われる。586は含礫粗粒砂岩の、厚みのある円盤を使用しており、側面から剥離を入れて厚みを取る意図がうかがえることから、石斧製作の初期段階の資料と思われる。



第213図 S2出土遺物 (24)



第214図 S2出土遺物 (25)

587は管玉である。588～636はガラス小玉である。

SZ16出土遺物（第207図） 637は受口状口縁壺で、受部に連弧文、外面に跳ね上げ文がつく。639は折返口縁壺で、端部に刺突文が巡る。640は単純口縁壺で、丸みを帯びた体部をもつ。櫛描直線文が2条確認できる。643は櫛描直線文と振り幅の大きい波状文がつく。644は無頸壺である。2カ所の円孔が認められる。645は屈曲口縁の高环で波状文がつく。646は高环脚部で接合部に沈線が2条施される。647はラグビーボール形の体部で外面は斜位のハケを施す。648は大型の脚部である。649、650は中期の甌である。651～674はガラス小玉である。675、676は管玉である。

677は打製石鎌である。珪質ホルンフェルス製で、両面に剥片の素材面が残っていることから、薄い剥片を使っていることが分かる。そして、縁辺から平坦剥離を入れて全体の形を作っている。実測図正面の右縁辺に未加工部分があるが、この部分は素材剥片の末端に当たっており、もともと薄いことから、両面から加工する必要はなかったと思われる。

SZ19出土遺物（第208～213図） 678は単純口縁の壺である。ナデによる仕上げで、頸部は指圧痕が横方向に残る。679は丸みをもつ体部で、細頸壺である。頸部には櫛描直線文、波状文が巡る。体部下位には穿孔が施される。680は肩の張らない体部で、縦方向のハケ調整の後に櫛描文を施す。684～687は受口状口縁壺である。684は受部にLR繩文、体部に3段のLR繩文を施す。685は細頸壺で、外面は縦方向のミガキ調整を施す。686は受部に櫛刺突文を施す。頸部は縦方向のミガキを施し、境に櫛描直線文が巡る。体部はミガキによる無文帶を形成し、縦区画内には斜格子文がつく。外面は横方向のミガキが施される。上げ底である。687は受部に斜位の櫛刺突を施し、頸部は縦方向のミガキを施す。頸部と体部の境には円形浮文が3点付けられる。沈線による縦区画内には斜格子文がつく。体部下位にはミガキが施され、底部は上げ底である。

688は単純口縁広口壺で、外面はハケ調整が施される。文様帶の上位と下位には櫛描直線文上に扇形文をつける。文様帶内には5本単位の櫛描斜格子文がつく。689の外面はハケ調整が施される。口縁端部には刻みが施される。体部上位は5本1単位の櫛描直線文が4条巡る。

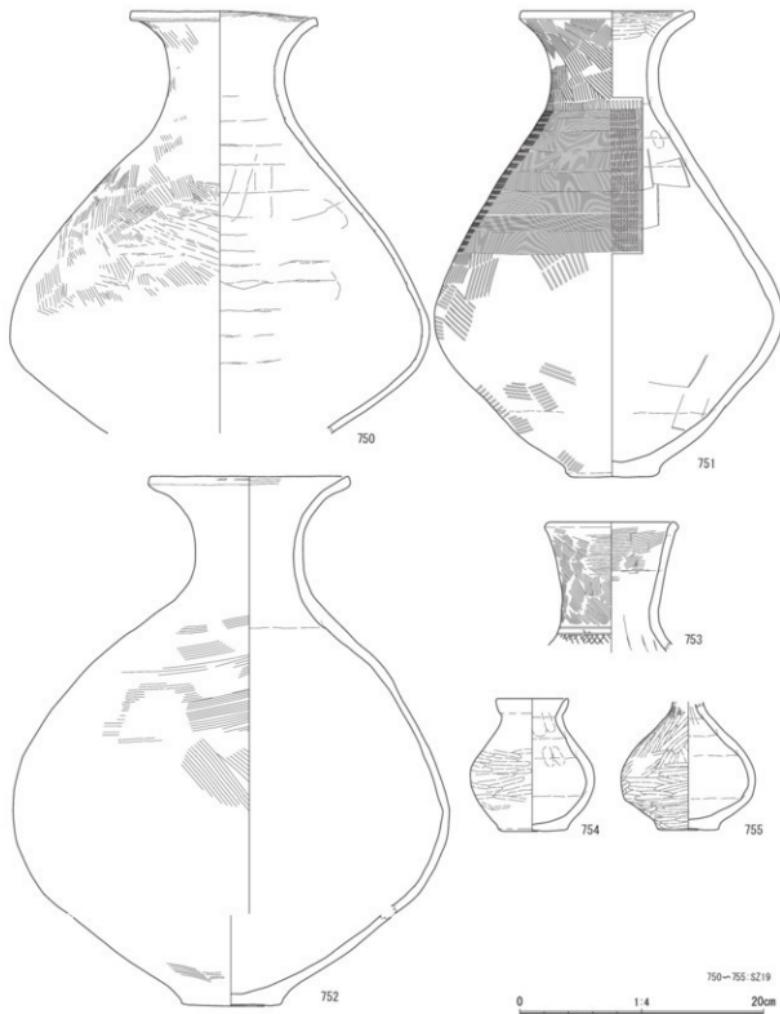


第215図 SZ出土遺物 (26)

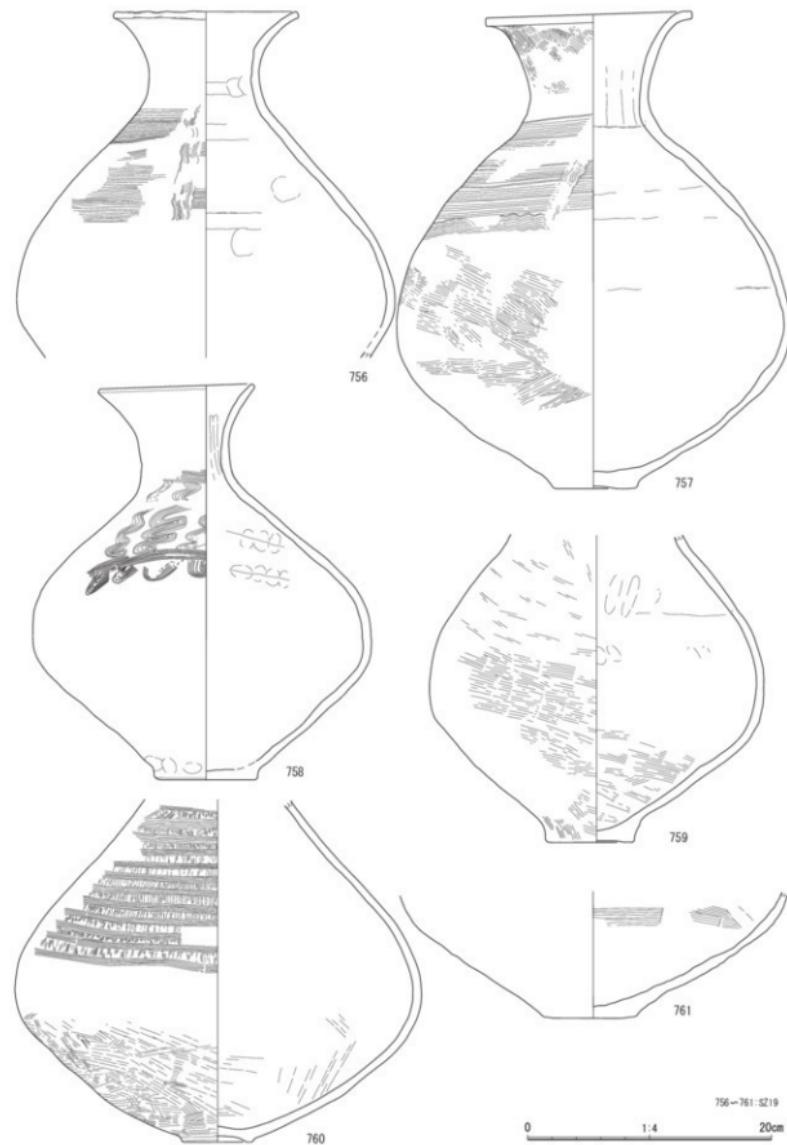
遺物（方形周溝墓出土遺物）



第216図 SZ出土遺物 (27)



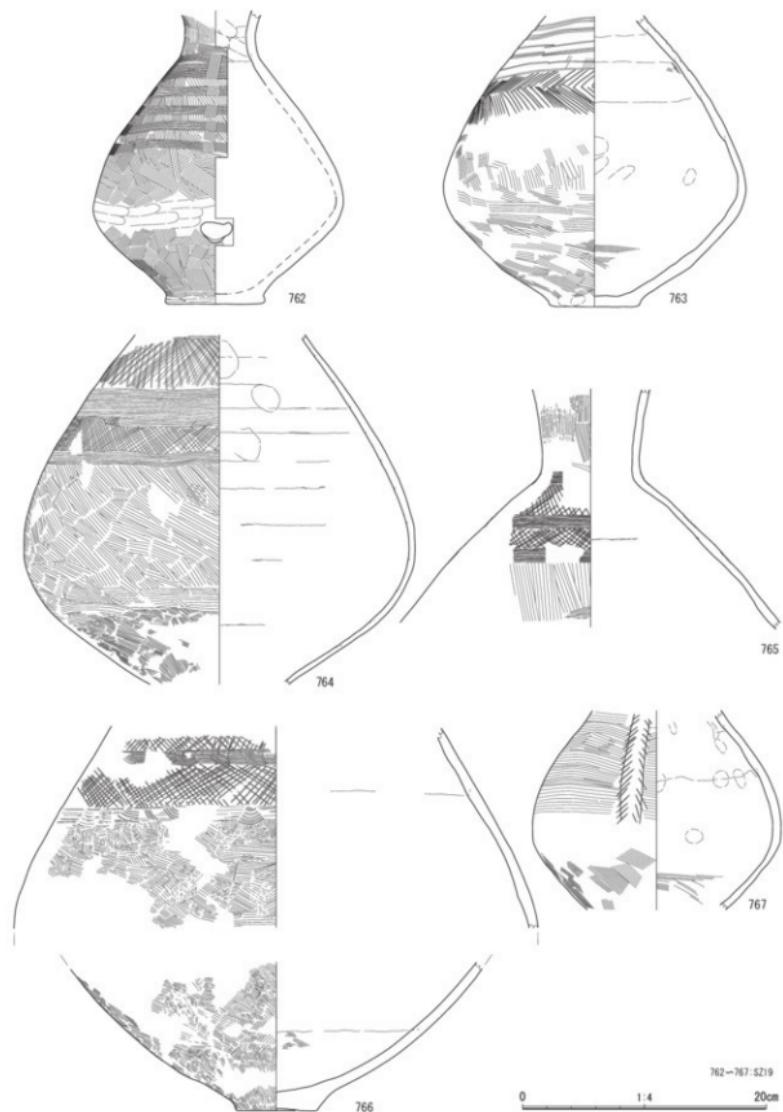
第217図 SZ出土遺物 (28)



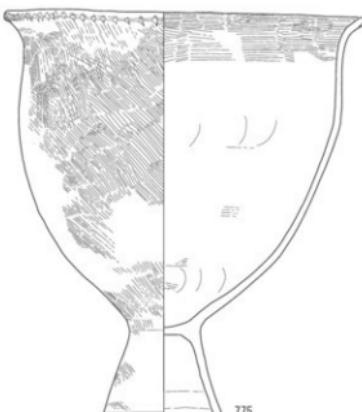
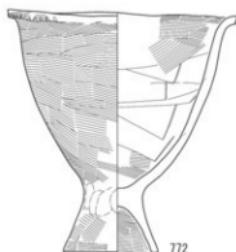
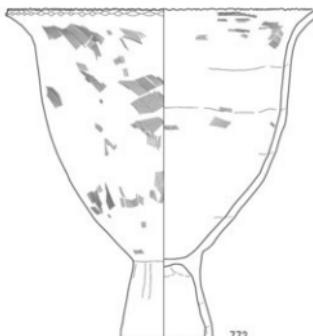
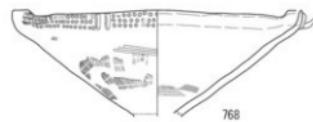
756-761: S219

0 1:4 20cm

第218図 SZ出土遺物 (29)

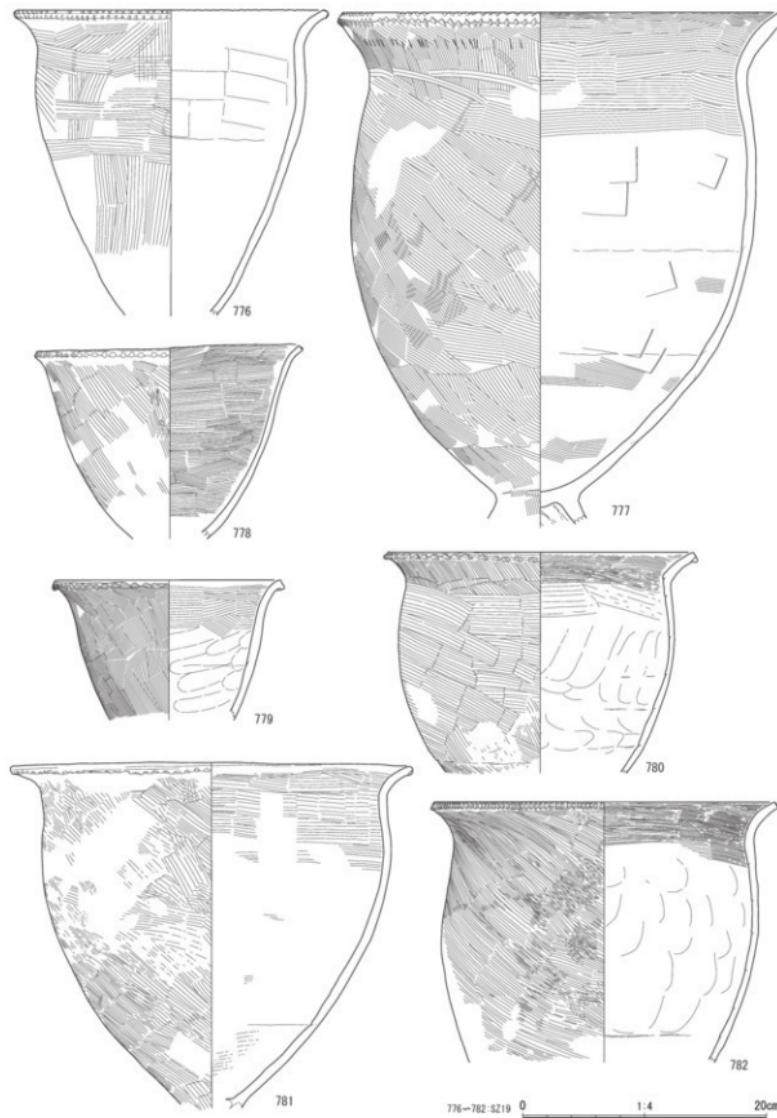


第219図 SZ出土遺物 (30)

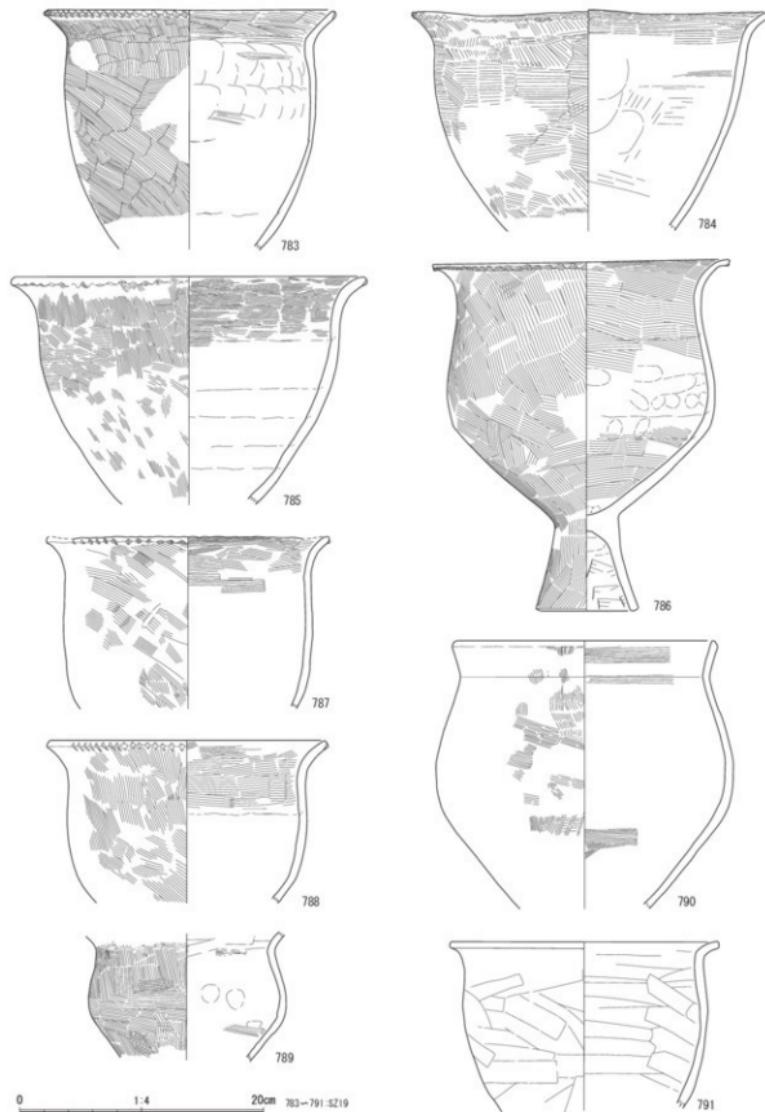


768—775: S219 0 1:4 20cm

第220図 SZ出土遺物 (31)



第221図 S219出土遺物 (32)



第222図 S2出土遺物 (33)

690は内湾する口縁部で、4条の凹線が巡る。外面には櫛刺突羽状文、簾状文が施される。691は受口状口縁壺である。短い頸部に算盤形の体部を有する。頸部には櫛描簾状文が施される。692は体部上位に櫛描文が施され、縦位に短線文がつく。693の頸部には櫛刺突文が巡る。694は細頸壺で、体部に丸みがつく。

695は細頸壺で体部上半は櫛刺突文が巡り、5本単位の櫛工具を用い、直線文帯をつける。下部には波状文が施される。696は上位に櫛描直線文がつく。中位、下位の直線文帯の上には扇形文を施す。斜格子文帯が2段つく。697は縦の沈線が垂下し、研磨帯を形成する。縦位区画は斜格子文帯が施される。体部外面はハケ仕上げである。698は細頸壺である。699は四線文系土器の体部である。体部上位は振り幅の広い波状文がつき、直線文が施される。体部外面下位は縦方向のハケが施される。

701は四線文系土器の高环である。皿状の环部で、口縁部は内湾する。凹線は3条つく。脚部は「ハ」の字に広がる。脚端は櫛刺突文が施される。内外面ともハケ仕上げである。

702~715は壺である。704、705の口縁両端には刻みが入る。709は台付壺である。低く小さい脚部がつく。口縁部は緩やかに外反する。外面は斜め方向のハケである。707の外面下位は縦ハケ、上位は横ハケ、内面は横ハケが施される。710、711は体部上位に最大径があり、口縁部は外反する。口縁下端に刻みが入る。715は小型で短胴の壺である。

717~724はSZ19の周溝から出土した石器である。敲石の出土が多く、他の周溝墓と同様に敲石の出土率が高い。717は黒色珪質頁岩の扁平な円礫を使用しており、一端に両面から剥離を入れて鋭角な部分を作ろうとしていることから、石斧の未完成品と思われる。718~721は敲石である。718は中粒砂岩の細長い円礫を使用しており、一端に敲打痕が見られる。719は黒色ホルンフェルスの細長い円礫を使用しており、一端が大きく剥離している。敲打に伴って破損したと思われる。720は含礫中粒砂岩の細長い円礫を使用しており、一端に敲打痕が見られる。721は含礫粗粒砂岩の細長い円礫を使用しており、一端に敲打痕が見られる。下端を打面にした剥離が見られ、一部に敲打痕も見られることから、敲打に伴う剥離であろう。また、表面にトーンを付けた部分には磨滅が見られる。722は含礫中粒砂岩の細長い円礫を使用しており、両端と側面、表面に敲打痕が見られる。723は砥石で凝灰岩質砂岩の扁平な円礫を使用しており、両面が研磨されている。724は中粒砂岩の円礫を使用しており、表面に敲打痕が見られる。欠損部分から考えて本来は石皿か台石のような石器であったと考えられる。

SZ19東溝上層出土遺物（第214、215図）725、726は単純口縁壺である。725の口縁部は面取りされ、頸部に刺突文がつく。体部上半には櫛描文が3段つき、やや曲線的である。櫛描文上には斜位の刺突文が施される。726の端部には刻みが入る。頸部には円形刺突文間に櫛描文が施される。上半は横位に沈線による羽状文が施される。727、728は四線文系土器である。727は2条の凹線が巡り、頸部に4条の沈線が施される。外面上位はハケのち横のミガキが施される。730は細頸で、やや外方へ屈曲する。頸部に櫛描文が巡る。731は体部に上から櫛描直線文、扇形文、直線文、波状文が施される。732は受口状口縁壺である。受部に斜位の櫛刺突文がつき、外面は縦位のミガキが施される。体部は櫛描に縦位に区切り、斜格子文が施される。体部下位に横方向のミガキが施される。736は大型の壺で、口縁部が外反する。端部下に刻みが入る。738の口縁部は外方へ屈曲する高环で、内面に突帯がつく。

740は骨角製の紡錘車である。

SZ19東溝下層出土遺物（第216~223図）741~745は単純口縁壺である。742には端部上下に刻みが入る。743は細頸で、縦のミガキが入る。体部は櫛幅の狭い直線文が施される。745の端部は横ナデが施される。外面はハケ仕上げである。746は櫛描直線文帯がつき、下位に波状文が巡る。747はナデにより受口状となる。748は緩やかな受部で、外面に斜格子文がつく。体部上半は櫛幅の広い直線文に縦方向の櫛描文が垂下する。749は受口状口縁壺で、受部に櫛描波状文がつき、棒状浮文が3カ所につく。頸部から

体部上半にかけて櫛描直線文間に鋸歯文がつく。文様帶下位に波状文が巡る。

750は広口壺で、無花果形を呈する。外面はハケ仕上げである。751は広口壺で、櫛刺突文がつき、櫛描直線文帯がつく。縦位に櫛描短線文が垂下する。752はハケ仕上げの広口壺である。754、755は小型の壺である。754は頸部に形の休止点である疑口縁が認められる。755の頸部に櫛刺突文がつく。横、縦のミガキが施される。

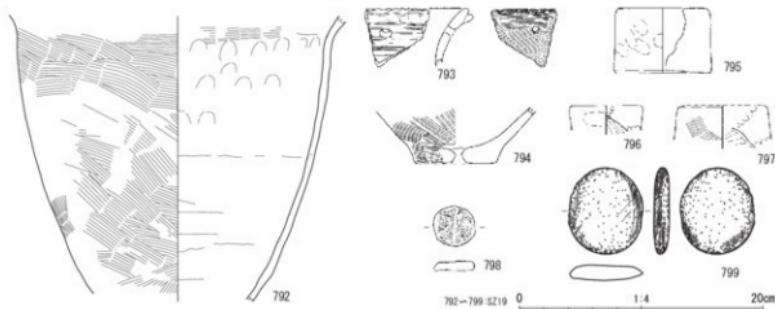
756～758は広口壺である。756、757は櫛描直線文帯に縦の波状文が垂下する。757の最下部には櫛描波状文が施される。758は櫛描直線文間に縦の波状文が巡る。760は縦のハケ調整後、櫛描直線文が巡る。

762はハケ調整後、櫛描直線文が6段巡り、短線文が垂下する。763は櫛描直線文が施され、下部にはヘラ描きによる横位の羽状文が施される。764～766は櫛描直線文と斜格子文で構成されるものである。764は中位の櫛描直線文は幅広にしている。765の斜格子文帯は上位の文様帶が幅広である。766は櫛描直線文帯の上には扇形文が巡る。767は櫛描横線文に、縦方向に羽状文が入る。

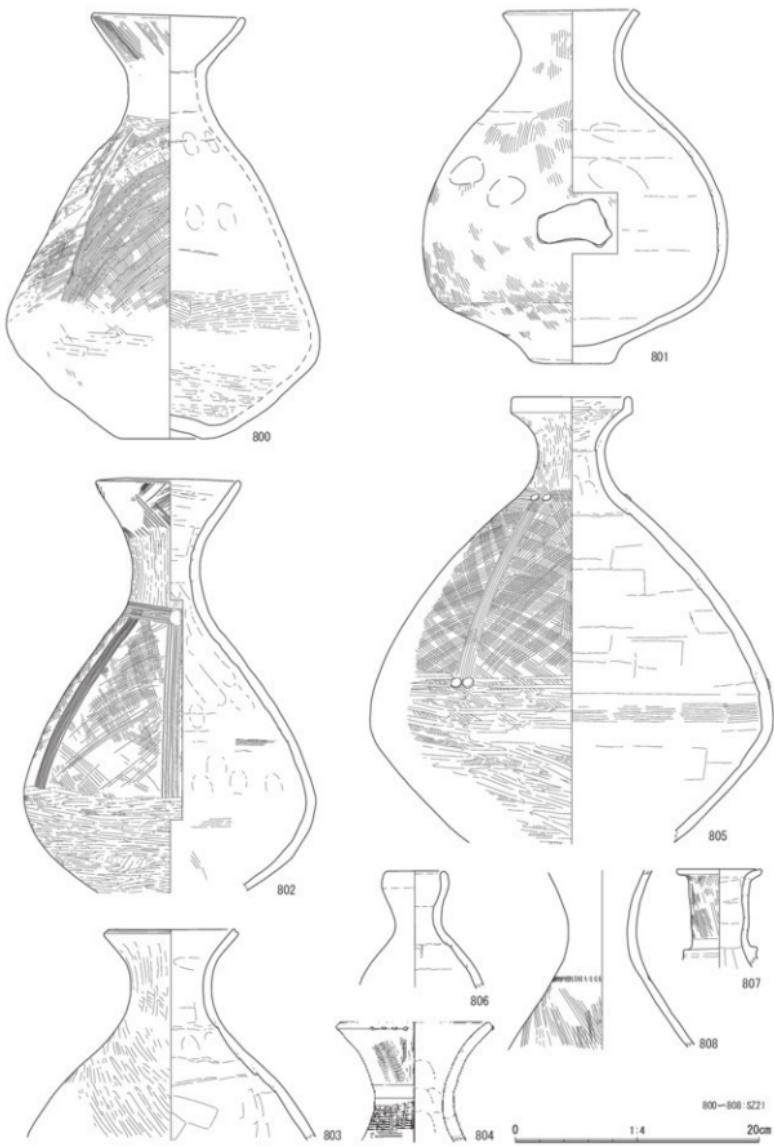
768は片口をもつ高坏である。受部には円形刺突文が3段巡り、棒状浮文がつく。769は体部下部で屈曲し、直線的に延びる。口縁部は緩やかに外方に伸び、端部は肥厚する。内外面とも横方向のミガキが施される。器形は木製品の模倣であろうか。770は深い环形で外面はハケ仕上げである。脚部は直線的に延び、端部はゆるやかに屈曲する。横方向のミガキが施される。771は鉢である。脚部は低い。鉢部は浅く、口縁部は緩やかに外反する。端部には刻みが入る。外面は横方向のミガキが施され、内面上部はハケ仕上げで、内面底部にはミガキが施される。

772～775は台付甕である。772は小型の甕で低い脚部がつく。長胴状で口縁部は短く外反する。外面は横方向のハケ調整である。773の端部上下には刻みが入る。脚部は縦方向のナデがみられる。774の体部は中位でやや屈曲する。775は端部下に刻みが入る。776は長胴状で端部上下に刻みが入る。777は大型の台付甕である。長胴状で口縁部は外反する。端部上下に刻みが入る。体部外面は斜め方向のハケ調整である。778、779は小型の甕で直線的に延び、口縁部は短く外反する。外面は縦位のハケである。780、781は端部下に刻みが入る。782は面取り部に刻みが施される。外面は斜め方向のハケ調整が施される。786は台付甕である。細い脚部を有する。甕は体部下位でゆるやかに屈曲し、口縁部は外反する。刻みは下端に入る。外面は斜、縦のハケが観察される。790は体部中位で最大径があり、口縁部は直立する。791は内外面とも板ナデによる仕上げである。793は口縁下に突帶がつき、押圧を残す。櫛条痕で補修孔が認められる。

795～797は台盤状土製品である。798は壺の破片を用いた円盤状土製品である。



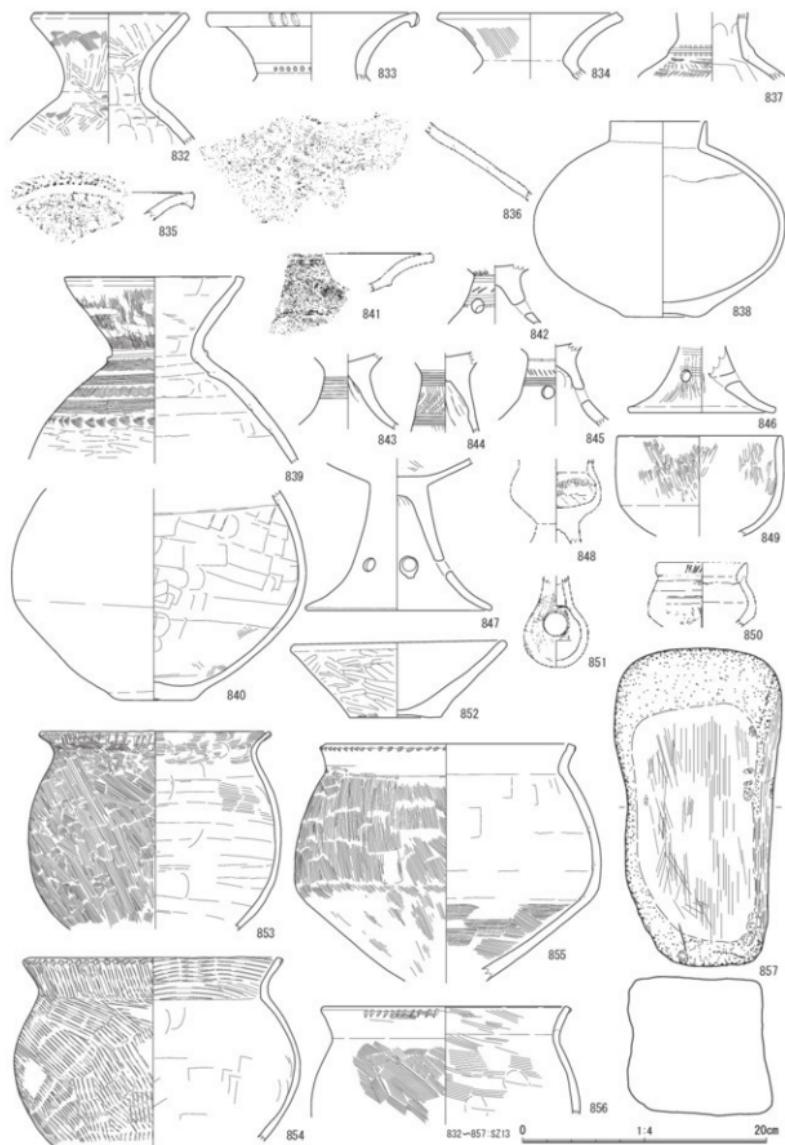
第223図 S2出土遺物 (34)



第224図 S2出土遺物 (35)



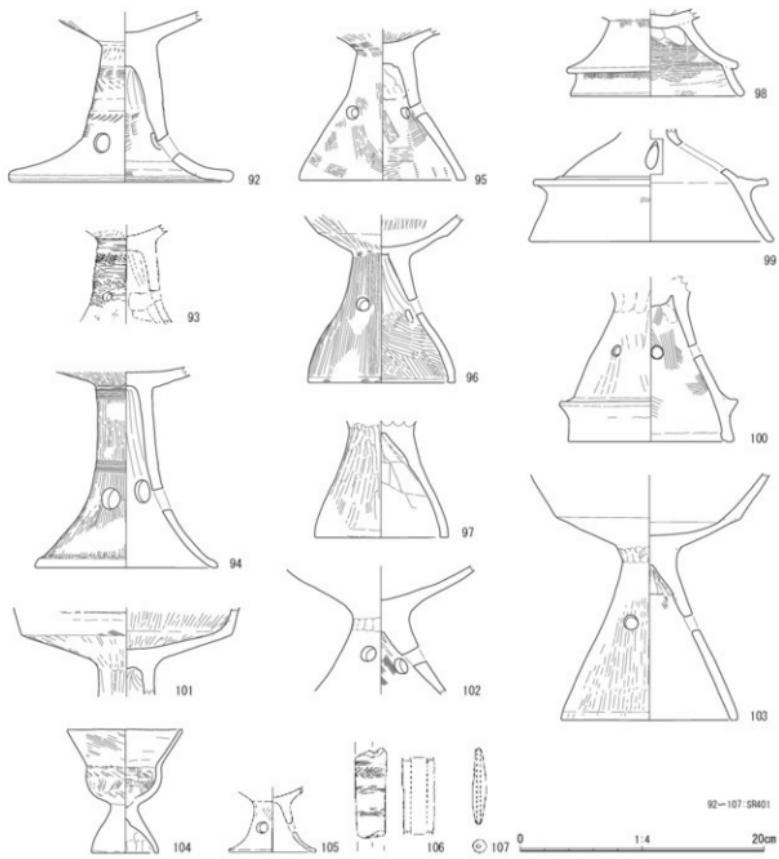
第225図 SZ出土遺物 (36)



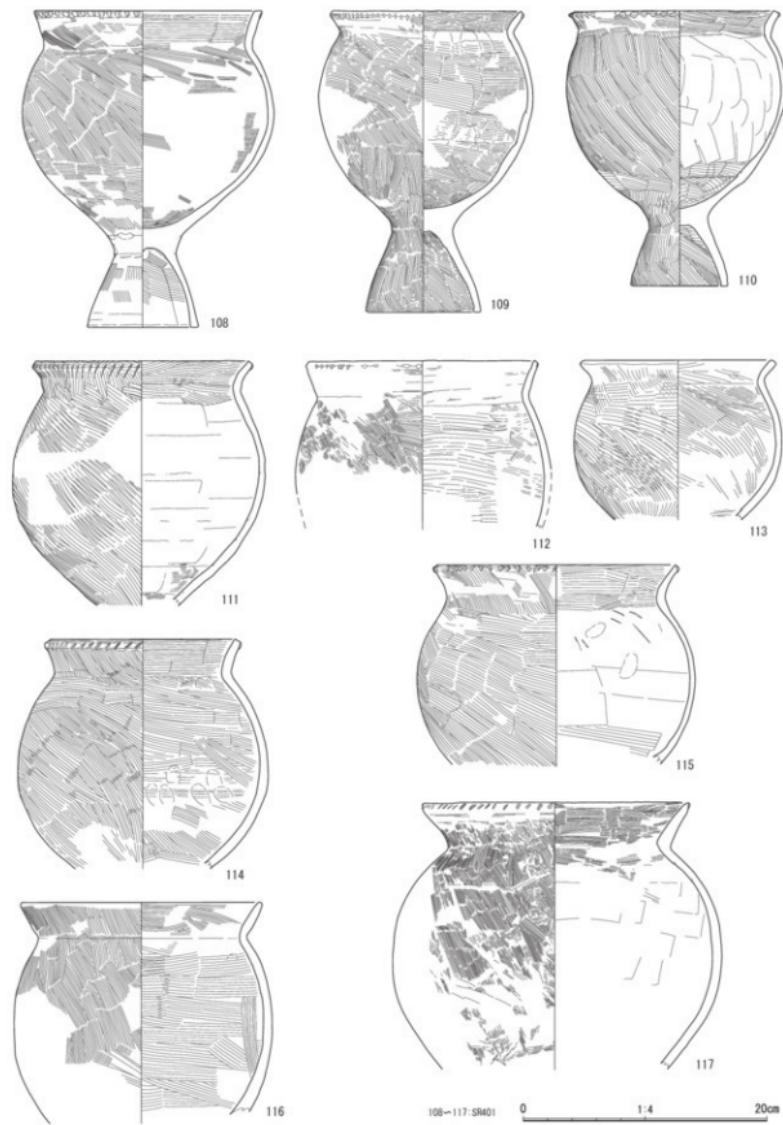
第226図 SZ出土遺物 (37)

の鉢であろうか。60～70は鉢である。60は口縁部に櫛刺突文をつける。61は縦位にミガキが施される。63、64はハケ仕上げの鉢である。65は口縁部の屈曲は弱く、片口である。66は横方向のミガキが施される。67の口縁部は折り返され、肥厚する。68の口縁部は肥厚し、端面に斜位の連続刺突文を施す。69の体部は屈曲が強く、端部は肥厚する。外面は縦位のミガキ調整が施される。70は口縁部に櫛描羽状文を施す。体部は縦位にミガキ調整を施す。

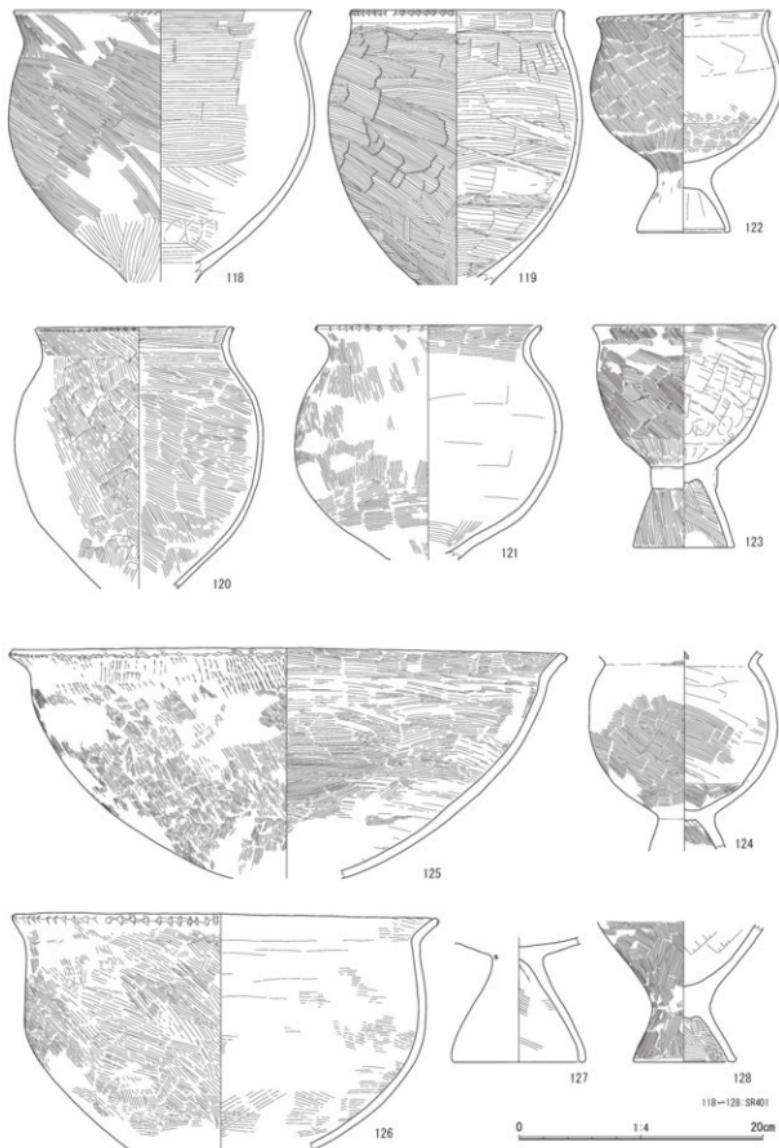
71～90は高坏の坏部である。71～78は外反口縁の高坏である。71、72は坏部上半に波状文が巡り、下半はミガキが顯著である。77は内外面にヘラミガキが施される。71は脚部に櫛描直線文が施される。79～81は碗形の坏部で、口縁は外方へ屈曲する。79は外面は縦方向にミガキがつき、内面は横方向のミガキが施される。脚部は櫛描直線文が2条つく。端部は強い横ナデが施される。80の内面は丁寧なヘラミガキが施される。坏部に円孔が1カ所認められる。



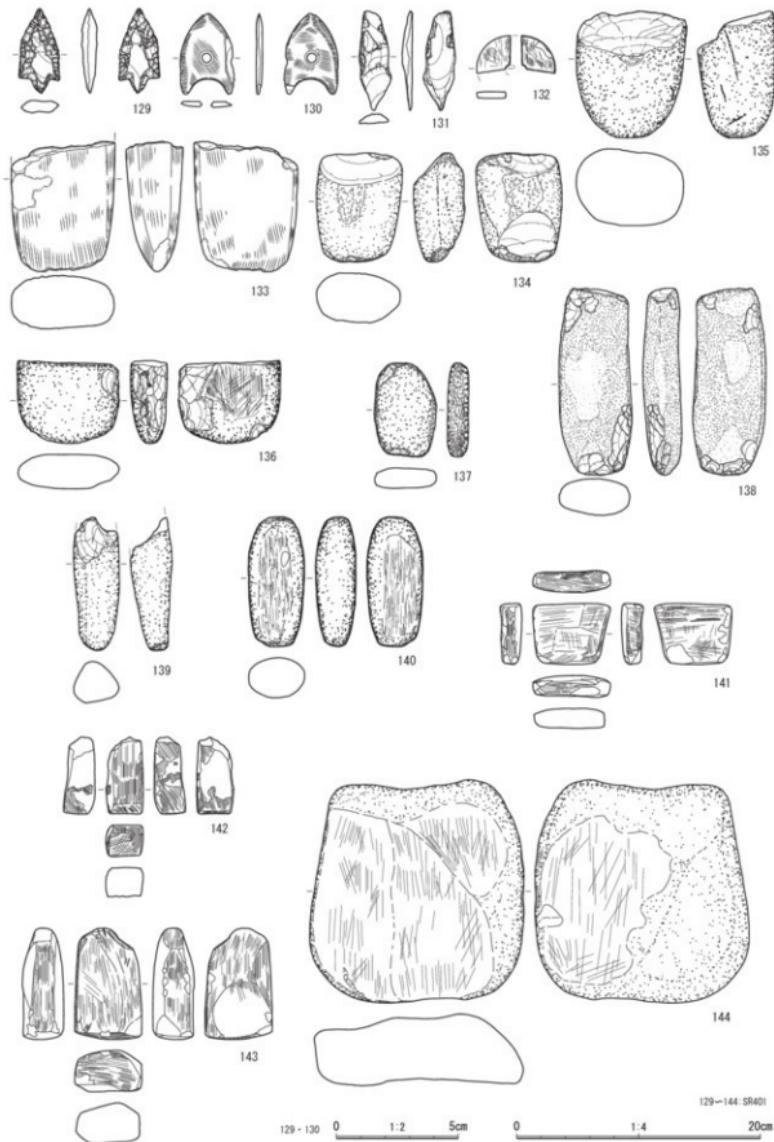
第252図 SR出土遺物（9）



第253図 SR出土遺物 (10)



第254図 SR出土遺物 (11)



第255図 SR出土遺物 (12)

82、83は环部に稜をもち、口縁部、脚部が内湾する。欠山式の高环である。縦のミガキが施される。84～87は环部が碗形を呈する高环である。84の口縁部は内湾し外面は丁寧なミガキ調整が施される。88は环部が直線的に伸び、口縁部が外方へ届曲する。外面は縦方向のミガキ調整、内面は横方向のミガキ調整が施される。端部には刻みを有する。脚部と环部の境には櫛刺突がつく。90の环部は長頸壺形状で、装飾は認められない。89はワイングラス形高环である。口縁部の届曲は弱く、环部は深い。脚部は縦方向のミガキ調整が施される。91は大型の装饰鉢に脚台部がついたものである。口縁部に櫛刺突の羽状文が巡る。内外面とも丁寧なミガキ調整が施される。脚部端は肥厚し、横ナデが施される。

92～103、105は高环の脚部である。櫛描直線文と刺突文の組み合わせは92、93である。櫛描直線文のみは94である。内湾する脚部は95～97である。2段に届曲し、装饰性に富むものは98～100である。103は直線的に伸びる高い脚部をもつ欠山式の高环であろう。

104は台付広口壺である。106は棒状を呈し、中央に孔がある。外面は櫛描直線文に櫛刺突の羽状文がつく。107は土鍤である。

108～128は台付壺である。108～117は「く」の字に届曲し、体部は丸みを帯び、球胴状を呈する。

108は緩やかに届曲し、球胴状を呈する。端部は上に向くようになる。109の口縁部は短く外反する。脚部はやや内湾する。端部が面取りされるものは111、112、114、115で、丸く仕上げるものは113、116、117である。

119、120の口縁部は緩やかに外反し、刻みが入る。体部は長胴状を呈し、口径より体部最大径が上回る。119の口縁部はナデによりハケ調整が消される。120は斜め方向のハケ調整が施される。

122～124は小型壺である。122の届曲は弱く、体部は丸みを帯びる。脚部は内湾しながらふんばる形態である。123の脚部は直線的に伸び、接合部に粘土帯が貼付される。

125は「く」の字状に届曲し、体部は口径に比して器高は低い形態で、壺形を呈する。端部は面取りされる。刻みは下端に付けられる。外面は届曲部付近では粗いハケ調整で、下は縦方向のハケが施される。126も「く」の字に届曲し、口径に比して器高は低い形態で壺形を呈する。端部は刻みを配する。外面はハケ仕上げで、内面は板ナデがみられる。

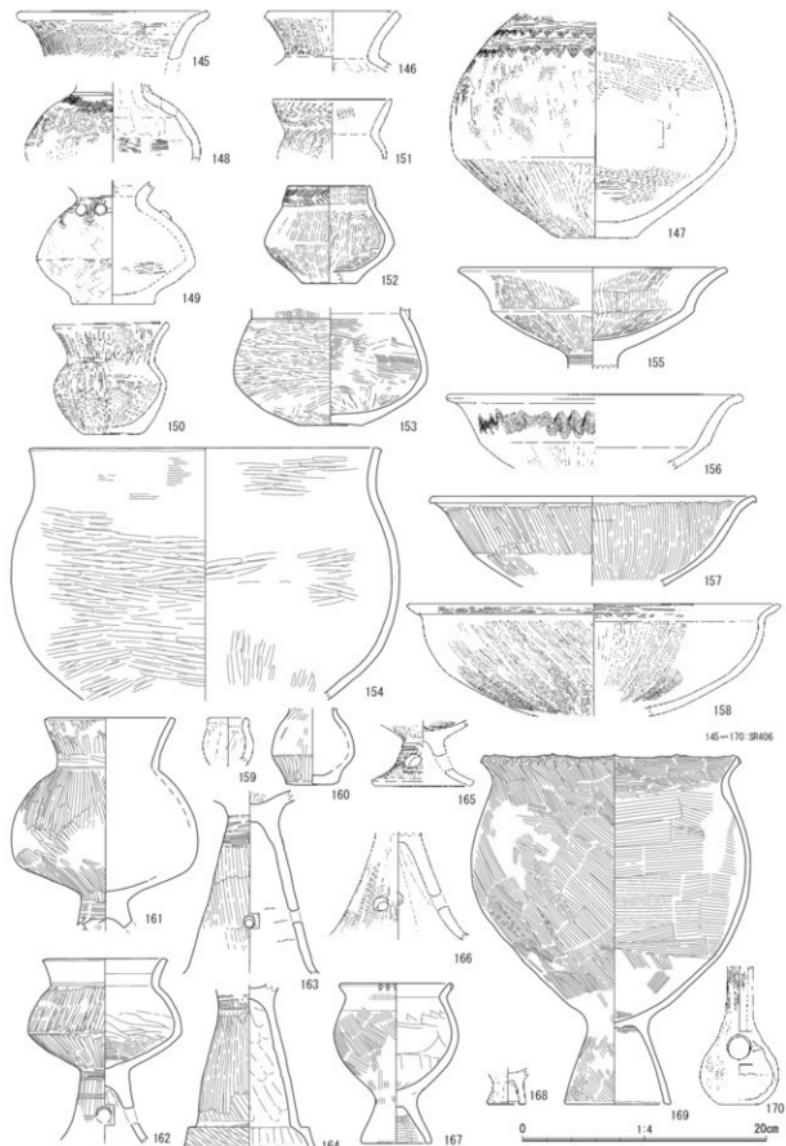
129～144は石器である。石斧、敲石の出土が多く認められる。

129は打製石鑿で淡褐緑色チャートの剥片を使用し、縁辺から平坦剥離を入れている。基部には茎部を作っている。130は有孔磨製石鑿である。凝灰質粘板岩製で、両面を丁寧に磨いた後、中央付近に両側から穴を開けてある。131は緑色片岩の剥片を使い、縁辺から平坦剥離を入れて形を整えようとした形跡がある。加工の仕方から考えれば、石鑿か尖頭器の未完成品とも考えられるが、柔らかい石材を使っていていることから、石製品の未完成品と考えた。

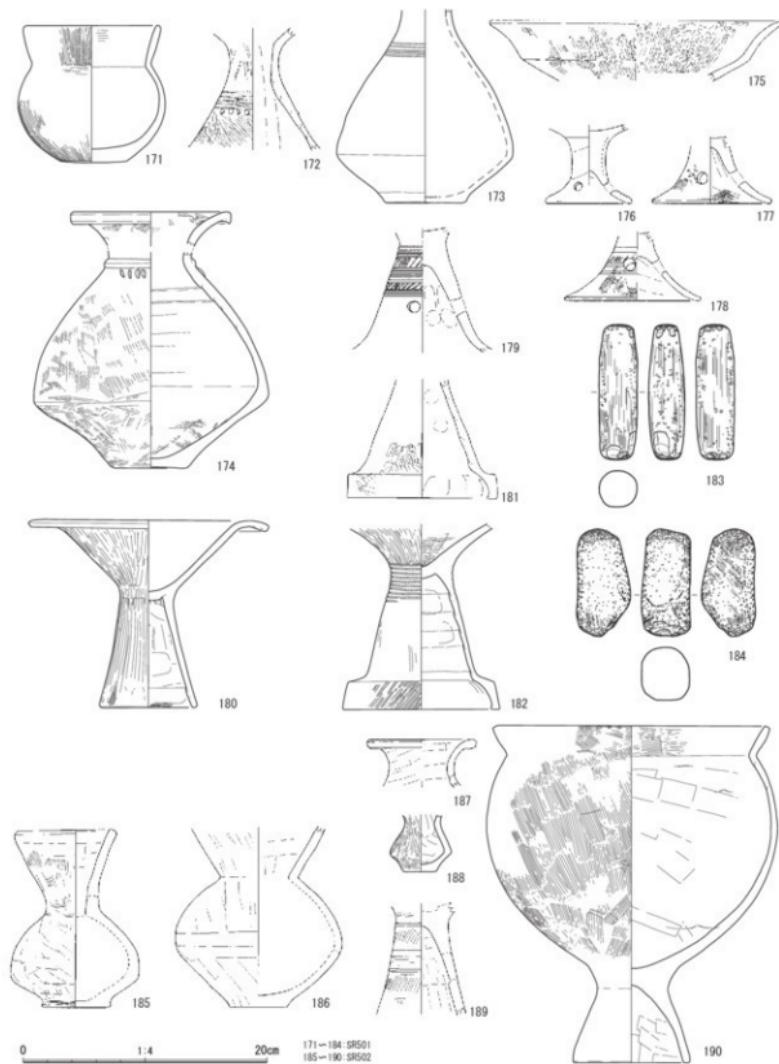
132は紡錘車である。凝灰質粘板岩製で、両面を丁寧に磨いてある。133は磨製石斧である。暗緑色変班れい岩製で、両面を磨いてある。

134は敲石で、中粒砂岩の円礫を使用しており、端部に敲打痕と敲打に伴う剥離が見られる。135は敲石で、花崗岩の円礫を使用しており、器体の中央付近に敲打痕が見られる。この敲打の最中に欠損したと考えられる。136は敲石で、含礫中粒砂岩の円礫を使用しており、側面に敲打痕と敲打に伴う剥離が見られる。137は敲石である。中粒砂岩の円礫を使用しており、側面に敲打痕と敲打に伴う剥離が見られる。138は淡褐灰色細粒砂岩の円礫を使用しており、側面から平坦剥離が入っている。特に実測図の下部には、両面から平坦剥離を入れていることから、石斧の刃部を作ろうとしていると思われる。139は敲石で、緑色ホルンフェルスの円礫を使用しており、端部に敲打痕と敲打に伴う剥離が見られる。140は珪質ホルンフェルスの円礫を使用した敲石で、両端部に敲打痕が見られる。

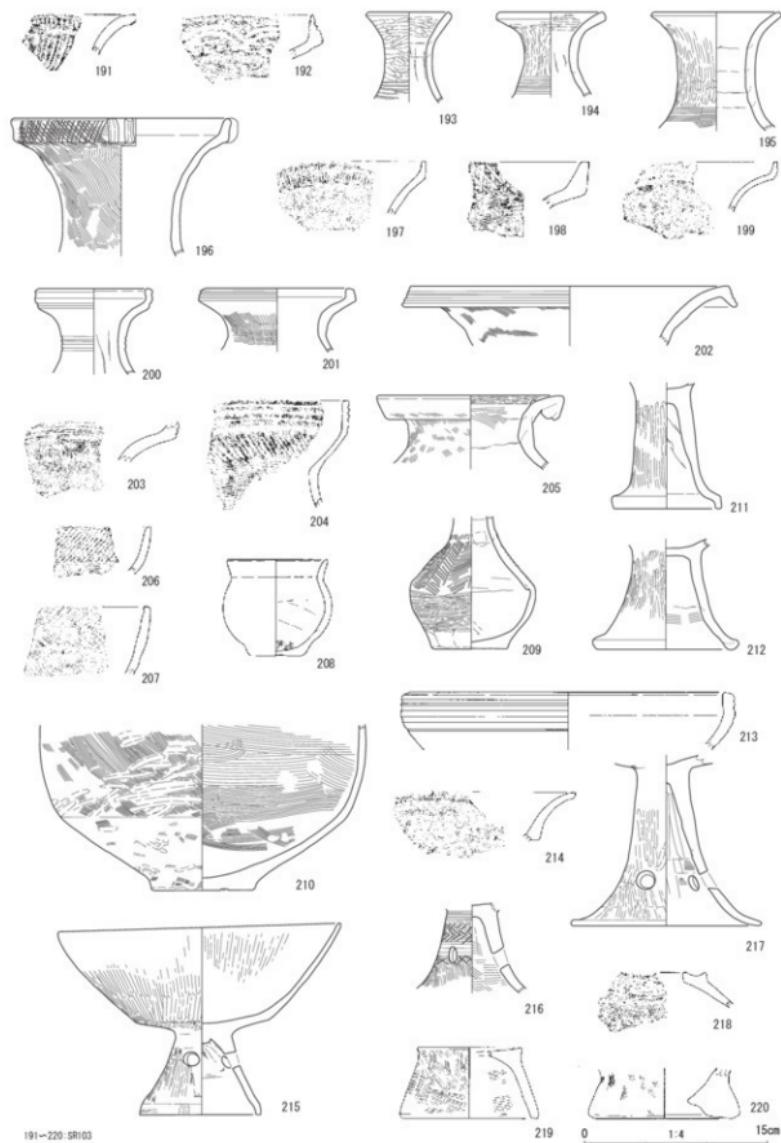
141～143は砥石である。141は流紋岩質凝灰岩製で、六面を磨いているため、直方体になっている。142



第256図 SR出土遺物 (13)



第257図 SR出土遺物 (14)



191~220 SR:03

第258図 SR出土遺物 (15)

は凝灰質粘板岩製で、6面を磨いているため、直方体になっている。143は流紋岩質凝灰岩製で、ほぼ全面に研磨痕がある。

144は石皿である。含礫粗粒砂岩の扁平な円碟を使用しており、両面に研磨痕が見られる。

SR406出土遺物（第256図） 145、146は単純口縁の口縁部である。147は体部下位で屈曲し、体部は丸みを帯びる。上位には櫛描直線文間に扇形文が施される。148は櫛描直線文、斜位の刺突文、連弧文、波状文が施される。149は小型壺で、屈曲が強い。櫛描直線文にU字文が垂下する。円形浮文がつく。150は小型壺で、外面は縦方向のミガキ調整が施される。

151は小型の鉢で口縁部に櫛刺突羽状文がつく。152は小型の鉢で、口縁部は短く、屈曲は弱い。櫛刺突羽状文が施され、縦方向のミガキ調整が施される。153は通有の鉢で体部は横方向のミガキ調整が施される。154は大型の鉢で口縁部の屈曲は弱く、短く立ち上がる。体部外面は横方向のミガキ調整が施される。159、160はミニチュアの壺である。

155～158は高坏の坏部である。155～157は坏部中位に稜をもち、口縁部が外反するもので、156は波状文が施される。155、157は縦方向に丁寧なミガキ調整が施される。158は口縁部が短く外方へ延び、碗形を呈する。坏部は縦方向、口縁部は横方向のミガキ調整が施される。161、162は単純口縁壺に脚部がつく。外面は丁寧な縦方向のミガキ調整が施される。162は櫛描直線文と円形刺突文が施される。164は端部が屈曲し、接合部に櫛刺突文、縦方向のミガキ調整が施される。165は低い脚部で櫛描直線文と櫛刺突文がつく。

167は小型の甕で、短く屈曲し、丸い体部を有する。169は台付甕で外面には斜め方向のハケ、内面は横方向のハケ調整が施される。170は瓢形土製品である。

SR501出土遺物（第257図） 171は小型壺で、縦方向のミガキ調整が施される。174は折返口縁壺で、頭部に突帶をもつ。4個で1単位の棒状浮文がつく。175は体部中位で屈曲する外反口縁の高坏である。内外面ともミガキ調整が施される。176は古墳時代の開脚高坏の脚部であろうか。177、178は小型高坏の脚部である。179は櫛描直線文と櫛刺突文がつく。180は直線的に延びる細長い脚部を有し、坏部の口縁は外方へ強く外反する。ハケ後に縦方向のミガキ調整を施す。181は端部が屈曲する。182の接合部には櫛刺突文、脚部には斜位の櫛刺突文がつく。

183、184は敲石である。183は変質斑レイ岩の細長い円碟を使用しており、両端に敲打痕と敲打による剥離が見られる。184は輝緑岩の円碟を使用しており、両端部に敲打痕と敲打による剥離が見られる。

SR502出土遺物（第257図） 185、186は壺である。185は長頭で、体部下位で屈曲する。187は折返口縁壺である。188は小型壺で、縦方向にミガキがつく。189は摩滅しているが、櫛描直線文に櫛刺突文がつく。内面には接合痕が観察できる。190は台付甕である。口縁部は短く屈曲し、体部は丸みを帯び、球胴状である。

SR103出土遺物（第258～260図） 191は広口壺で、端部に刻みが入り、跳ね上げ文がつく。192は内傾する受口状口縁壺で、連弧文、屈曲部に刺突文を施す。

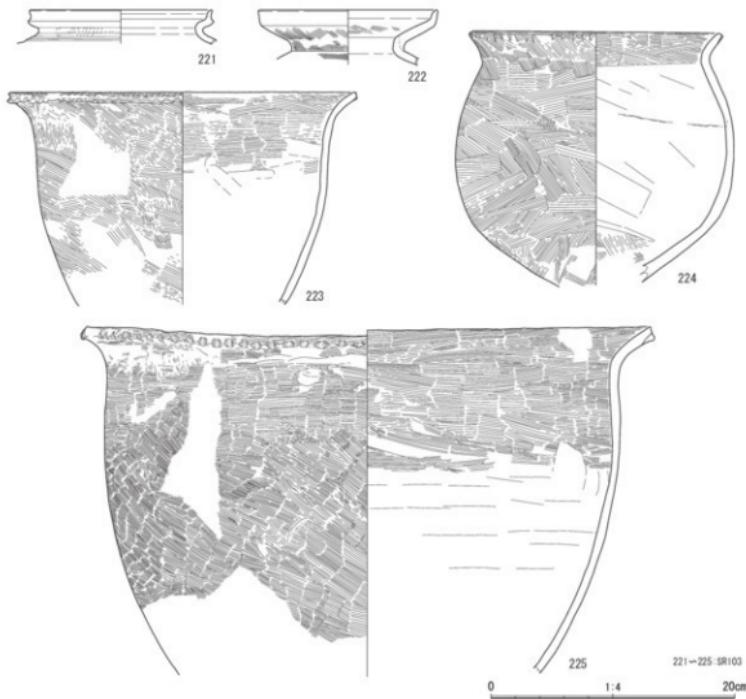
193～195は単純口縁の細頭壺で、いずれも端部は面取りされる。193は横方向のミガキ、194、195は縦方向のミガキ調整が施される。

196～198は受口状口縁壺である。196は端面に斜格子文がつき、棒状浮文がつく。外面はハケ仕上げである。199～204は凹線文系土器である。200、201は受口状口縁で、2条の凹線が巡る。202は端部が下方に屈曲する。3条の凹線がつく。204は内湾する口縁である。口縁に4条の凹線がつき、頭部に斜位の櫛刺突文、櫛描直線文が施される。205は折返口縁壺で幅広の端面をもつ。206の端部は面取りされ、LR縄文が施される。高坏の坏部かあるいは鉢であろう。207は口縁部に櫛刺突羽状文がつき、装飾の鉢であろうか。209は小型壺で頭部に刺突文が巡り、縦位区画内に羽状文がつく。

211～217は高環である。211は脚部端で屈曲する高環で、縦方向にミガキ調整が施される。214は外反口縁をもつ环部で、外面に櫛描直線文と波状文が施される。217は「ハ」の字に開く脚部である。縦方向にミガキ調整が施される。213は四線文系土器の高環で、口縁部は内湾する。端部は面取りされ、3条の凹線が巡る。215は环部下位で稜をもつわゆる欠山式の高环である。縦方向のミガキ調整が施される。脚部端はやや直立に屈曲する。216は櫛描直線文と櫛刺突羽状文、斜格子文がつく脚部である。219、220は台盤状土製品である。

221～225は甕である。221はS字甕である。口縁部の屈曲がするとく、頸部にハケが残ることから赤塚分類のB類であろう。222は受口甕である。224は球胴状の体部に短く屈曲する口縁部を有する。斜方向のハケ調整が施される。225は「ハ」の字状に開く大型の甕である。口縁端部は面取りされ下端に刻みを施す。外面は斜め方向のハケ調整で、内面は体部上位まで横ハケで、下位はナデ調整が施される。

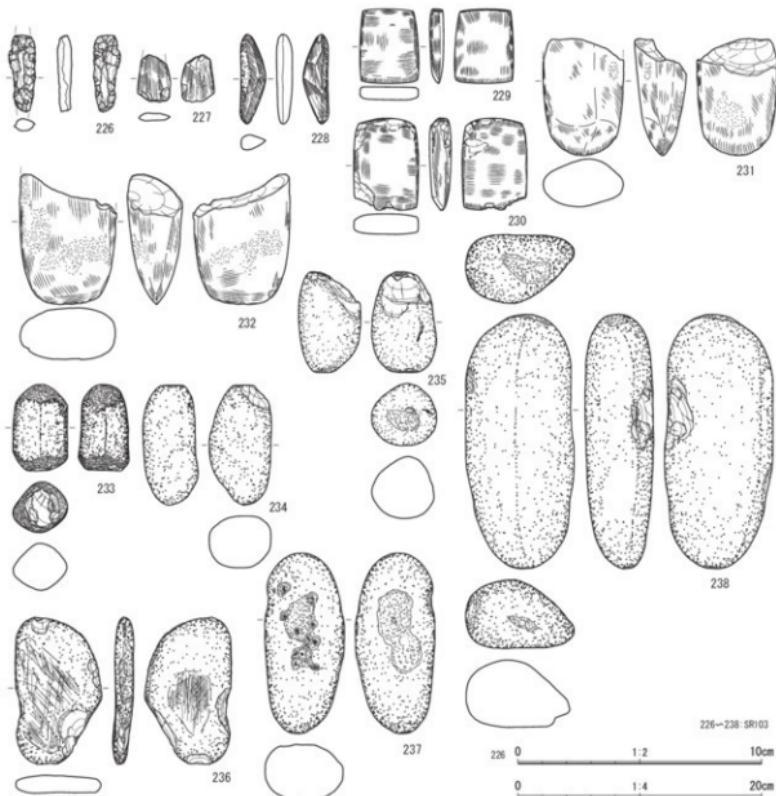
226～238は石器である。磨製斧、敲石の出土量が多い。226は粘板岩製の石錐で、両側から平坦剥離を入れて細長い形態を作り出している。一部に素材面が残っていることから、薄い剥片を使っていることがわかる。227は小型の磨製石斧である。緑色片岩製で、両面を磨いている。研磨の方向は長軸方向が主体だが、一部に斜め方向の研磨も見られる。228は凝灰岩質砂岩の円錐の一端を研磨して鋭角の刃部を作り出している。軟質の素材を用いていることから武器形石製品とした。



第259図 SR出土遺物（16）

229は磨製石斧である。蛇紋岩製で、両面を磨いている。刃部は片刃になっている。側面も磨いて面を作り出している。230は暗紫灰色珪質凝灰質粘板岩製で、縁辺から平坦剥離を入れて全体の形を作った後、全面を磨いている。剥離が深く入った部分は研磨が及んでいないため、加工の痕跡が残っている。刃部は片刃になっている。231は褐灰色中粒砂岩製で、全面を敲打して形を整えた後、磨いて仕上げている。刃部は船刃になっている。232は暗灰色中粒砂岩製で、全面を敲打して形を整えた後、全面を磨いて仕上げている。刃部は船刃になっている。

233～238は敲石である。233は輝緑岩の円礫を使用しており、両端に敲打痕が見られる。上端は、敲打によって丸みを帯びている。下端には敲打以前に入った剥離が見られる。剥離は下端に平坦面を作るように入っている。敲打痕は、その平坦面の周縁に入っている。このことから、下端に平坦面を作り、それによってできた角を敲打点にしていると考えられる。234は閃緑岩の円礫を使用しており、両端部に敲打痕と敲打による剥離が見られる。235は中粒砂岩の円礫を使用しており、両端部に敲打痕と敲打による剥離が見られる。236は中粒砂岩の扁平な円礫を使用しており、側面に敲打痕と敲打による剥離が見られ



第260図 SR出土遺物 (17)

る。237は安山岩の円碟を使用しており、表面に敲打痕が見られる。238は含碟中粒砂岩の大きな円碟を使用しており、両端部と縁辺に敲打痕と敲打による剥離が見られる。敲石としてはかなり大型で重量感がある。

7 包含層出土遺物

包含層出土遺物（第261～267図） 1は単純口縁の広口壺で、端部は面取りされる。ハケ仕上げで肩部に直線文が巡る。2は緩く外反する広口壺の口縁で、端部は面取りされる。頸部に櫛状工具による刺突文が巡る。3は単純口縁の広口壺で、端部は面取りされる。肩部は直線文に縱位の短線を施した丁字文がつく。4は内湾する口縁部に細い頸部がつく。体部は無花果形で、やや丸みを帯びる。体部下位には径1.5cmほどの穿孔が認められる。体部上半は斜方向のミガキ調整が施される。

6は細頸の壺で、口縁部はラッパ状に広がる。7は摩滅により文様構成は不明である。9はヘラによる沈線文間に無文帶と櫛描きによる斜格子文がつく。無文帶には横方向のミガキ調整がみられる。下部には縱方向の直線文がつく。5、7、8、11は壺の体部である。10は細い頸部に丸みを帯びた体部である。肩部には櫛描直線文間に波状文がつく。波状文は5条で1単位の櫛描きが2段つく。12は頸部に1条の沈線が巡る。底部は上げ底である。

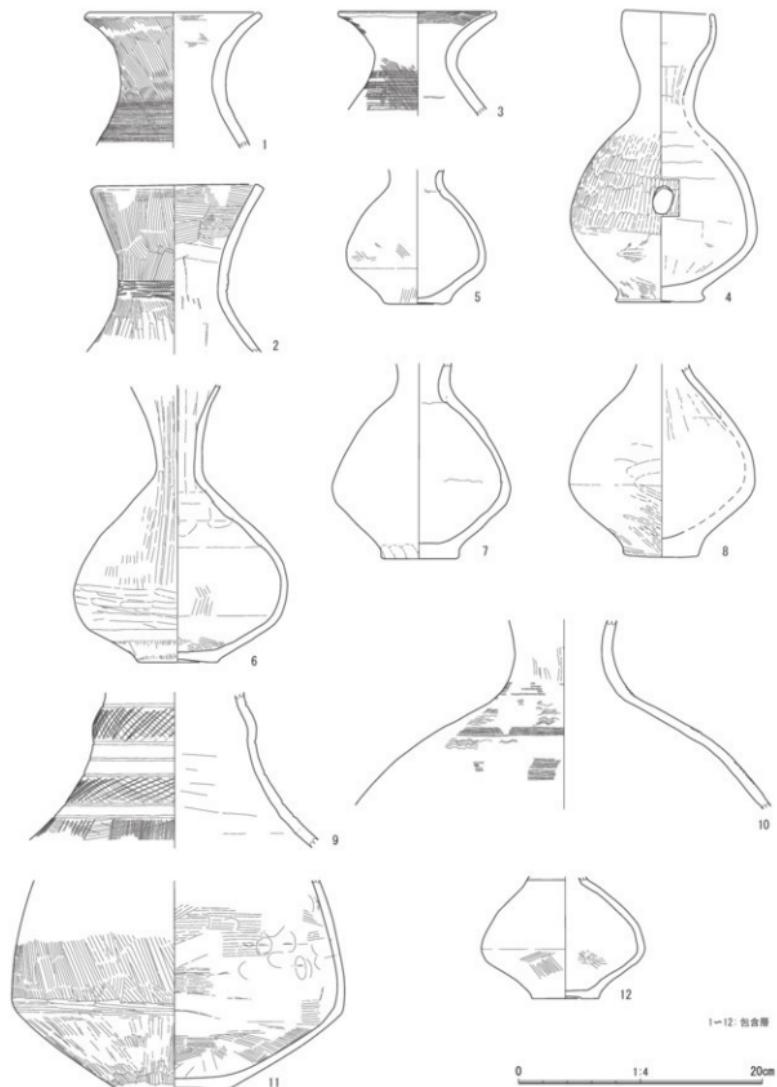
13は鉢である。13の内面は縱位のミガキ調整が施される。15は高环で、四線文系土器である。16～18は後期の甌である。17、18の口縁部は短く屈曲する。19は中期の甌である。「ハ」の字に開き、口縁部は緩やか外反する。端部は肥厚し、刻みが入る。

20～24は小型の壺で、口縁部を欠損している。21はフ拉斯コ形を呈する。24は体部下位に最大径があり、算盤玉に近い形状である。25、26は小型の壺で、完形である。25は肩部に横線文を入れ、その間に縦線文が入る。27は小型の台付甌である。

28は甌の底部には穿孔が施される。29～31は台盤状土器製品である。31は中央で括れる。32は棒状を呈する土製品である。文様等は確認できない。34は蓋である。1/4の残存であるが、2個1対の穿孔が施される。35は動物形土器製品である。頭部、脚部、尻尾部は欠損しており、体部のみである。体部外面には円形の刺突が施される。33は脚部であろう。36は骨角製の紡錘車であろう。37は小型の勾玉である。38は管玉で、一部は欠損している。

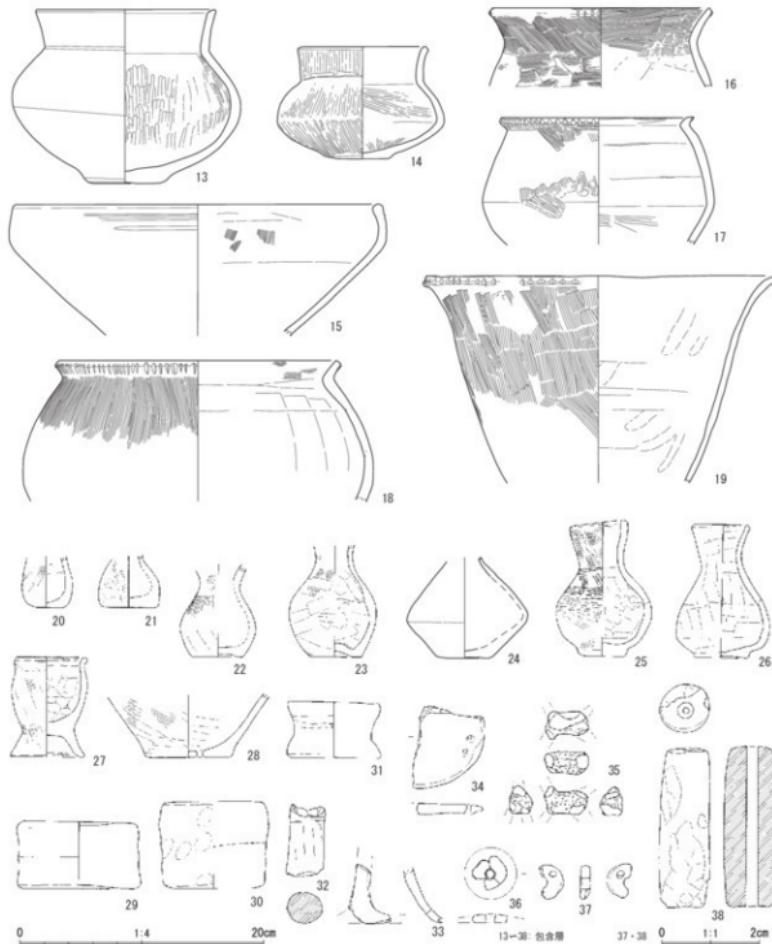
39～56は打製石器、未完成品である。39は黒色チャート製で、両面に剥片の素材面が残っていることから、薄い剥片を使っていることがわかる。そして、縁辺から平坦剥離を入れて全体の形を作っている。基部には茎部を作り出している。40は黒色チャート製で、両面に剥片の素材面が残っている。縁辺から平坦剥離を入れて全体の形を作っているが、裏面の加工は浅い。また、基部には茎部を作っている。41は珪質粘板岩製で、両面に剥片の素材面が残っている。縁辺から平坦剥離を入れて、器体を薄くしながら形を整えているが、中央付近では厚みが残っている。基部には茎部を作り出している。42は半透明のチャート製で、縁辺から細長い平坦剥離を入れて期待を薄くしながら全体の形を整えている。43は淡灰色チャート製で、両面に剥片の素材面が残っている。縁辺から平坦剥離を入れているが、剥片の厚みがそのまま残っている。もともと細長い剥片を使っているようで、厚みを取り除くためにこれ以上加工すると、器体が細くなるため、これで完成品としたのであろう。

44は黒色チャート製で、縁辺から細長い平坦剥離を入れて、器体を薄くしながら形を整えているが、器体中央付近では厚みが残っている。45は半透明のチャート製で、縁辺から細長い平坦剥離を入れて器体を薄くしながら全体の形を整えている。46はホルンフェルス製で、基部と先端を欠損しているが、有茎尖頭器になると思われる。47は粘板岩製で、縁辺から細長い平坦剥離を入れている。平坦剥離の大きさと方向は揃っており、丁寧な加工をうかがわせる。また、縁辺は加工によって鋸歯状になっている。



第261図 包含層出土遺物（1）

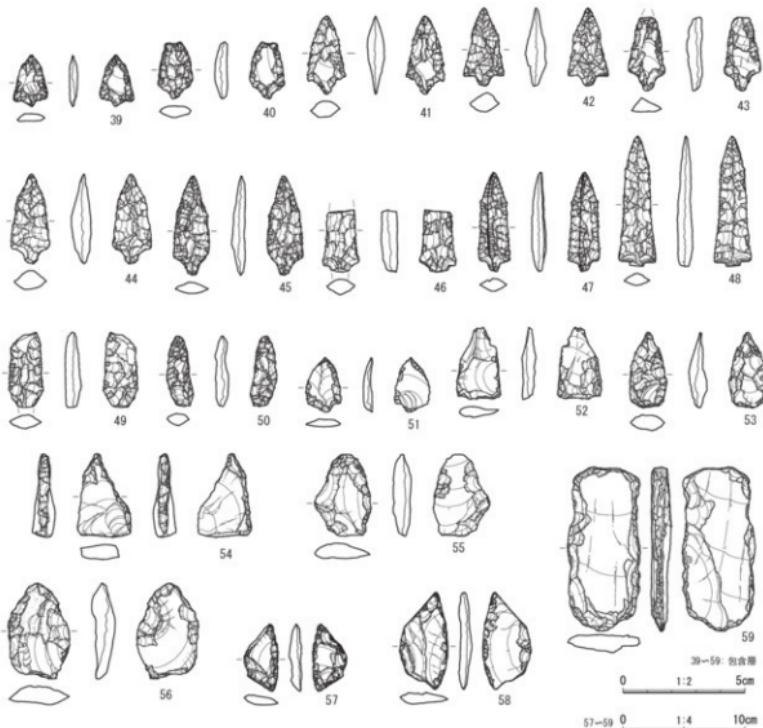
48はチャート製で、縁辺から平坦剥離を入れている。茎部には研磨痕がみられる。剥離を入れ、茎部を作った後に磨いて仕上げている珍しい例である。49は珪質ホルンフェルス製で、先端と基部を欠損している。両面に剥片の素材面がわずかに残っている。50は淡灰色チャート製で、加工は進んでいるものの、器体が左右対称にならず、先端、基部も形成されていない。この時点で細長く、これ以上加工しても完成には至らないと思われる。51は黒色ホルンフェルス製で、縁辺から平坦剥離を入れただけで、両面に剥片の素材面が残っている。先端と基部が形成されており、これで完成品なのである。



第262図 包含層出土遺物（2）

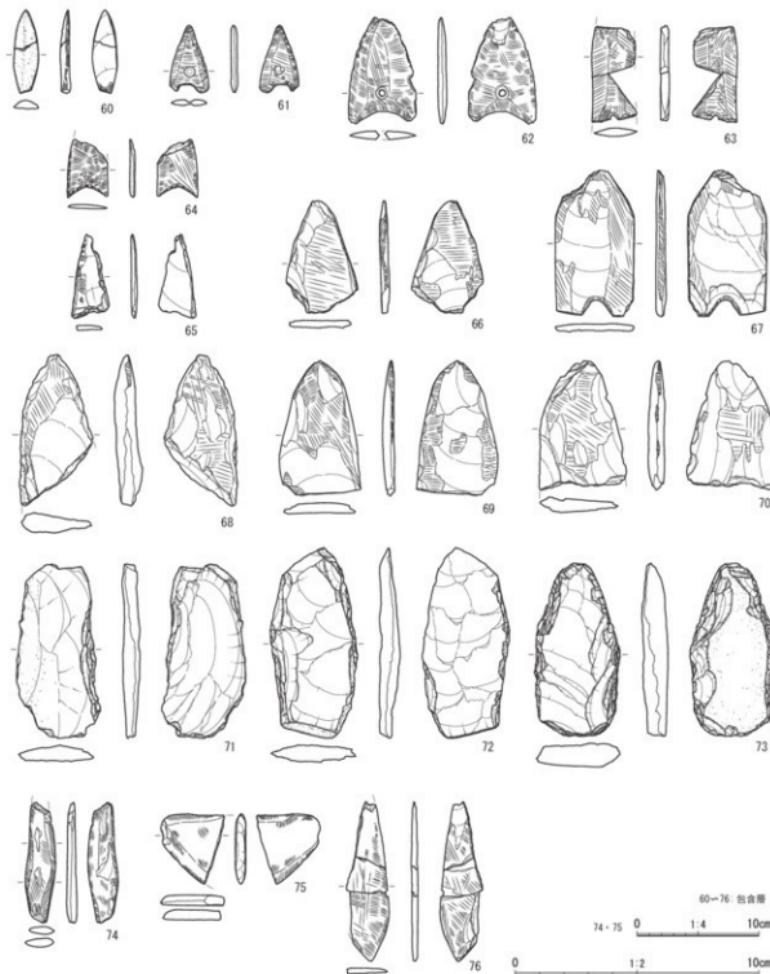
52は赤紫色チャート製剥片の縁辺に表面から平坦剥離を入れている。先端が尖っているように見えるが、これは加工によって尖らせているのではなく、剥片の末端が尖っているだけである。この大きさから製作可能なのは石鏃以外に考えにくいくことから、石鏃の未完成品と思われる。53はチャート製で、縁辺から平坦剥離を入れて加工している。加工は表面の方が細かい。器体中央に厚みが残る。54は黒色粘板岩製剥片の縁辺に急角度の剥離を入れている。縄文時代以降にはあまり見られない加工で、旧石器時代の彫器の未完成品、あるいはナイフ形石器の基部に見えないこともないが、旧石器時代の遺物の混入と考えるよりも石鏃の未完成品と考えた方が良い。55は珪質ホルンフェルス製剥片の縁辺から平坦剥離を入れている。加工は両面に入っており、この大きさから石鏃の未完成品であろう。

56はチャート製剥片の縁辺に平坦剥離を入れている。一端を尖らせるように加工しており、大きさから考えても石鏃の未完成品と考えるのが妥当である。57は珪質黒色粘板岩製剥片の縁辺を加工しているが、一辺だけ特に念入りに両面から加工している。石匙を作る際、剥片の一辺だけ念入りに加工して刃部を作ることがあり、これも念入りに加工した縁辺を刃部と考えると、石匙の未完成品か、つまみが折れた後に再加工した石匙と考えられる。58は珪質ホルンフェルス製剥片の末端を両面から加工している。また、打面も両面からの加工によって除去されている。いずれも平坦剥離による加工で、剥片の末端に



第263図 包含層出土遺物（3）

遺物（包含層出土遺物）



第264図 包含層出土遺物（4）

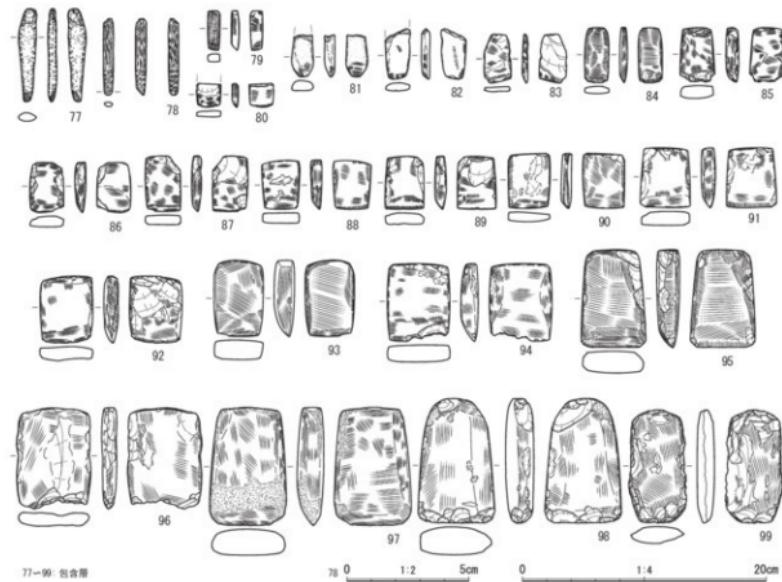
当たる一辺を集中的に加工している点では石匙の刃部形成と考えられる。

59は打製石斧である。緑色片岩製の大きな剥片を使っており、縁辺から両面に平坦剥離を入れるとともに、縁辺には敲打痕も見られる。

60～73は磨製石鎌、未完成品である。60は緑灰色凝灰岩質粘板岩製で、縁辺と基部を磨いて全体の形を作っている。表面には自然面、裏面には剥片の主剥離面が残っている。縁辺を磨いて木の葉形にしただけである。61は黒色粘板岩製で両面を磨いて仕上げてある。器体中央に両面から穴を開けようとした痕跡がある。62は暗緑灰色粘板岩製で、両面を磨いて仕上げてある。器体中央に両面から穴を開けてある。先端を欠損している。63は黒色粘板岩製で、先端と基部を欠損しており、基部側には両面から穴を開けた跡が残っている。石鎌とするなら、細長い形態になると思われる。64は黒色粘板岩製で、両面を磨いて仕上げている。

65は暗灰色粘板岩製剥片の一部に研磨痕が見られ、末端には抉りを入れるような剥離が見られる。磨製石鎌の未完成品であろう。66は暗紫灰色粘板岩製剥片の両面を磨いている。縁辺を磨いて先端をとがらせるようにしていることから、磨製石鎌を作ろうとしていると思われる。67は灰色粘板岩製剥片の両面を磨いており、剥片の末端は抉りを入れるように磨いている。磨製石鎌の未完成品と思われる。68は暗緑灰色凝灰岩製で、縁辺から平坦剥離を入れ、尖頭器と同様の石器を作った後に、両面と縁辺を磨いている。磨いて仕上げるとは言え、打製の段階で完成品に近い状態にまで仕上げていることがわかる。

69～72の4点は束の状態で出土した。69は暗青灰色凝灰岩質粘板岩製の薄い剥片を使い、縁辺から平坦剥離を入れて尖頭器状の石器を作った後に両面と縁辺を磨いている。70は暗青灰色凝灰岩質粘板岩製剥片の縁辺から平坦剥離を入れて、尖頭器状の石器を作った後、両面と縁辺を磨いている。71は暗青灰色凝



第265図 包含層出土遺物（5）



第266図 包含層出土遺物（6）

灰質粘板岩製剥片の打面を除去するように両面から剥離を入れてある。他には、縁辺にわずかに加工と見られる剥離があるだけで、さらに加工して打製石斧に仕上げるには大きさ、厚さとも足らない。この大きさから仕上がる石器と言えば、石鎌の可能性が高い。さらに、打製石鎌に使う石材とは異なるため、最終的には研磨して磨製石鎌にするつもりだったと思われる。72は暗青灰色凝灰質粘板岩製剥片の縁辺から両面に平坦剥離を入れている。打製石斧の未完成品としても良いが、石斧に仕上げるには厚さが足らないようである。縁辺の加工は、上端に向かって幅を縮めようとする意図がうかがえることから、先端を尖らせる目的があると思われる。石斧であれば、一端を尖らせる必要はないため、尖頭器が石鎌の未完成品と言う可能性が浮上する。尖頭器でこの石材を使った例はないことから、石鎌の可能性の方が高くなる。また、打製石鎌に使う石材ではないことから、磨製石鎌に仕上げる意図があったと思われる。

73は暗灰色粘板岩製で、片面に自然面が残る剥片の縁辺を両側から加工している。加工の特徴は、上端で器体の幅を狭めようとしていることで、石鎌の未完成品と思われる。74は暗緑灰色結晶片岩製で、全面を磨いてあり、縁辺は刃部を作るよう磨いてある。全体の形状が整っているとは言い難いが、刃部を作る意図がうかがえることから石剣の未完成品と考えられる。

75は細粒砂岩製で、両面を磨いて仕上げている。半分以上欠損しているが、刃部が突出している形状から考えて石包丁の可能性が高い。

76は黒色粘板岩製で、全面を磨いている。欠損部分が多く、全体の形状がわかりにくいか、一端が尖った細長い石製品と思われる。このことから考えられるのは、磨製石剣の未完成品の可能性がある。

77は黒色粘板岩製の石盤である。一端を磨いて幅の狭い刃部を作り出している。刃部の形状から盤のような機能を想定できる。78は石錐である。黒色粘板岩製で、全面を磨いて丸く細長い形状に仕上げている。磨製石鎌や石包丁といった石器に見られる穴を開ける時に使った錐の可能性が高い。

79~108は磨製石斧、未完成品である。79は蛇紋岩製で、全面を磨いてある。刃部は片刃になるように仕上げてある。形状から考えてかなりの小型である。

80は緑黒色チャート製で、全面を磨いてある。刃部は片刃になるように仕上げてある。81は黒色粘板岩の細長い円錐を使い、一端を磨いて幅の狭い刃部を作り出している。石斧のように素材の幅を利用した刃部ではなく、側面も磨くことで、素材の幅よりも狭い刃部を作り出している。

82は暗緑灰色結晶片岩の扁平な円錐を使っており、側面と一端を磨いてある。刃部は片刃になるように仕上げてある。

83は赤紫色珪質凝灰岩の剥片を使っており、末端を両面から磨いて刃部を作っている。胴部は先行剥離面側だけを磨いている。側面をあまり磨いていないため、全体の形状は整っていない。84は輝緑灰岩製で、全面を磨いてある。刃部は片刃に近い。

85は黒色珪質粘板岩製で、胴部と側面は最終段階まで磨いてあると思われるが、刃部は全く磨いてない。刃部を磨くと片刃になると思われるが、片刃石斧の場合、刃部の研磨が最終工程になることを示す資料である。

86は暗灰色砂岩製で、刃部は形成されているが、側面では、形態形成時の平坦剥離が残っている。87は石英脈の入った黒色珪質粘板岩製で、両面を磨いてあるが、形態形成時の剥離が大きく残っている。

88は暗緑色珪質凝灰岩製で、刃部は片刃になっている。胴部が短く、正方形に近い形状になっている。

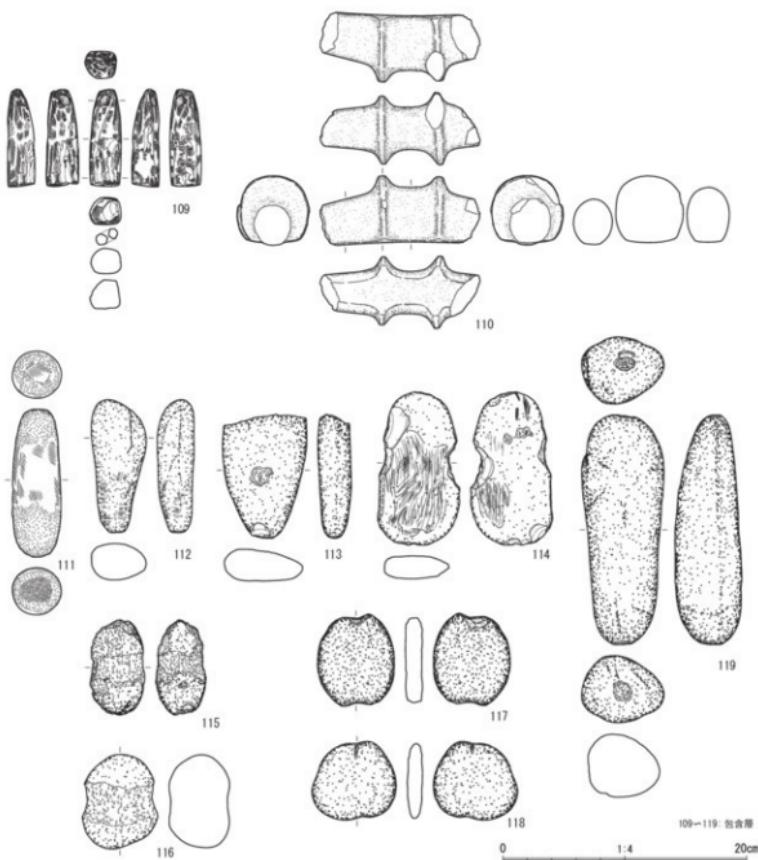
89は暗赤灰色珪質凝灰岩製で、刃部は片刃になっている。胴部が短く、正方形に近い形状になっている。90は黒色ホルンフェルス製で、刃部は片刃になっている。両面の一部に形態形成時の剥離が残っている。91は紫黒色珪質凝灰岩製で、刃部は片刃になっている。大きさに比べてやや厚みがあり、両面に形態形成時の剥離が残っている。

92は赤黒色珪質凝灰岩製で、刃部は片刃よりも両刃に近い。裏面には形態形成時の剥離が残っている。

93は細粒ホルンフェルス製で、大きさに比べて厚みがある。刃部は片刃になっている。94は蛇紋岩製で、刃部は片刃になっているが、使用によると思われる剥離が入って、刃部が大きく欠損している。95は橄欖岩製で、刃部は片刃になっている。刃部がやや聞く形状になっている。

96は褐灰色砂質粘板岩製で、胴部は両面磨いてあるが、刃部は、裏面は磨いてあるものの、表面は形態形成時の剥離が残っている。このまま刃部を磨くと片刃になると思われるが、これも刃部研磨は最終工程であることを示す資料である。

97は暗緑色蛇紋岩製で、刃部をやや片刃に仕上げてある。また、胴部に比べて刃部の幅がやや広がる形状にしてある。



第267図 包含層出土遺物（7）

98は暗紫灰色細粒砂岩と思われる石材を使っており、胸部は両面を磨いてあるが、刃部は剥離が残っている。刃部の研磨が最終工程になることを示している。

99は緑色片岩製で、縁辺から平坦剥離を入れた後、両面を磨いている。刃部にはわずかに研磨痕が見られるだけで、刃部は未形成と思われる。これも刃部の研磨が最終工程であること示している。

100は凝灰岩の円礫を使っており、一端に平坦剥離を入れて蛤刃状の刃部を作っている。刃部を研磨していないため、未完成品としているが、使用に耐えられる程度には仕上がっているようである。

101は暗紫灰色蛇紋岩製で、刃部は蛤刃になっている。大きさに比べて厚みがある。

102は変質斑レイ岩製で、両面を磨いて刃部を蛤刃状に仕上げてある。

103は暗緑灰色凝灰岩製で、両面と側面に研磨痕が見られることから、石斧の基部の破片と思われる。

104は蛇紋岩製で、両面を丁寧に磨いてある。刃部は蛤刃状に仕上がっている。

105は灰色中粒砂岩の円礫を使い、表面に平坦剥離を入れてある。礫は平坦面をもっており、裏面には大きな剥離を入れて平坦面を作っている。このことから、自然面を剥がしながら、円礫を直方体に近づける意図がうかがえる。直方体に仕上がる石器と言えば、石斧の可能性が浮上する。

106は石斧の未完成品である。黒色頁岩の円礫を使い、一端で不定形の剥片を剥離している。

107は灰色中粒砂岩製で、刃部にする部分を敲打して刃部の形状を作り出している。研磨痕が見られないため、未完成品と考えた。

108は暗灰色粗粒砂岩の円礫を敲打して一端を薄くしている。全体の形状と一端を薄くして刃部を作る意図がうかがえることから、石斧の未完成品と思われる。

109は銅鐸の舌である。E（-3）グリッドからの出土で、層位的には中期の包含層である。長さ7.9cm、幅2.5cm、重さ71.8gである。頭部の表裏を平坦に仕上げ、穿孔を施すタイプである。チャート製で、平坦剥離を入れて全体の形を作った後に全面を研磨して、最後に上端に穴を開けている。穴の下部には使用痕と思われる敲打痕が観察される。遺跡内に銅鐸が持ち込まれた可能性を示す資料である。

110は独鉛石である。閃綠岩製で、全面を非常に細かく研磨して作ってある。色調は赤味を帯びており、熱を受けている。

111～113、119は敲石である。111は溶結凝灰岩と思われる細長い円礫の一端に敲打痕が見られる。112は珪質輝綠片岩の細長い円礫の一端に敲打痕が見られる。113は中粒砂岩の扁平な円礫の表面に敲打痕が見られ、一端には敲打によると思われる剥離が見られる。119は敲石で、礫を含んだ中粒砂岩の細長い円礫の両端に敲打痕が見られる。

114～118は石錘である。114は礫を含んだ砂岩の扁平な円礫に抉りを入れるように剥離が入っている。このような加工は、打製石斧の胸部に見られる加工だが、打製石斧の胸部に抉りを入れる場合、縁辺から平坦剥離を入れて全体の形状を整えながら抉りを入れるのが通常の工程で、この資料のように、抉りだけを先に入れるのは不自然である。この資料に見られる加工は、抉りを入れることが目的と思われるため、石錘と考えた。

115は暗緑灰色凝灰岩の円礫を敲打して、中央付近にくびれを作っている。116は片状花崗岩の円礫を敲打して、中央付近にくびれを作っている。117は黒雲母片岩の扁平な円礫の両端に剥離を入れている。118はホルンフェルスの扁平な円礫の両端に抉りが入っている。上端の抉りは研磨によって作られ、下端の抉りは小さな剥離を入れて作ってある。

8 古代～中世遺構出土遺物

SE101出土遺物（第268図） 1、2は山茶碗の底部である。いずれも山茶碗II期に属するものである。3は須恵器环身である。底部は平底でヘラ削りが認められる。中央には「十」のヘラ記号が残る。体部は直線的に延び、受け部は短く張り出す。須恵器遠江編年III期末葉であろう。

SE203出土遺物（第268図） 4、5は山茶碗の碗である。体部は直線的に延びることから山茶碗II期に属するであろう。6は長さ83cmの板材である。上下端には切断面が残存する。表裏にも加工痕が残る。針葉樹で板目である。7は加工板である。両端は欠損している。上端には木釘の穴が確認できる。表面にはうすく加工痕が残存する。針葉樹で板目である。

SE204出土遺物（第268図） 8～12は山茶碗の底部である。9の高台部にはススが付着する。8、9は山茶碗II期であろう。10は潰け掛けが確認できることから山茶碗I～2期であろう。8、11、12は山茶碗の碗である。11の内部にはススが付着し、口縁部が外反することから山茶碗I～2期であろう。8、12の高台端には粉殻痕がつく。13は白磁碗の口縁部で、玉縁である。白磁碗IV類で、12世紀後半に比定できる。

SE205出土遺物（第268図） 14は山茶碗の碗である。胎土から尾張系と考えられる。内面には釉が付着し、重ね焼き痕が残る。山茶碗I～b期に相当するであろう。15は白磁碗の底部である。削り出し高台である。12世紀後半であろう。16は山茶碗の碗である。潰け掛けがあることから山茶碗I～2期であろう。

17は全長12.1cmのナスピ形鍔で、ミニチュア製品と考えられる。針葉樹で板目である。19は残存長11.4cmの箸状製品である。両端は欠損している。針葉樹で板目である。18は曲物の側板である。表面にケビキを施す。左側上部に樺皮が残存する。漆もわずかであるが残存する。

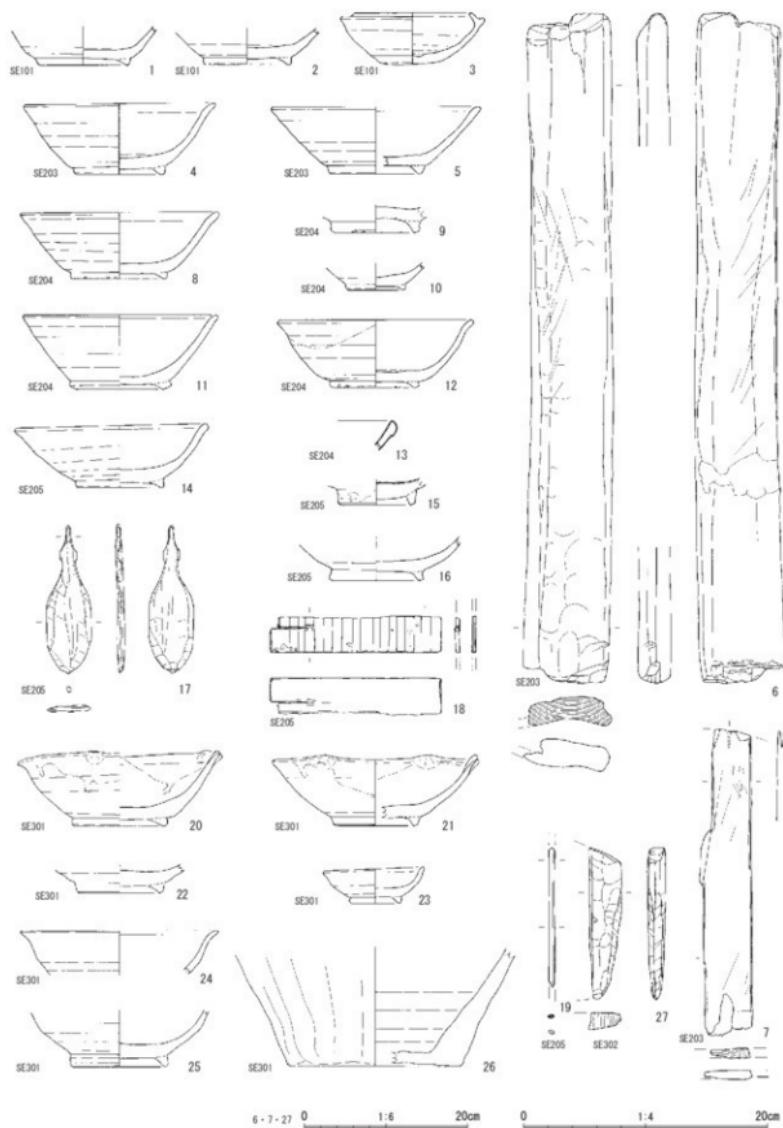
SE301出土遺物（第268図） 20、21は山茶碗の輪花碗である。20の外面はススが全面に付着する。釉は3カ所の浸け掛けが確認できる。口縁部は外反する。21の口縁部に浸け掛けが2カ所確認できる。内面底部は使用痕が観察できる。山茶碗I～1期であろう。22の底部内面には重ね焼き痕が残存する。これらも山茶碗I期に属するであろう。23は山茶碗の小碗である。口径は8cm台である。内面に自然釉が付着する。山茶碗I～2期であろう。24は山茶碗の口縁部で、外反する。25の底部にはスノコ痕が残る。26は渥美産の壺である。外面は紙方向のナデがみられる。12世紀代であろう。

SE302出土遺物（第268図） 27は加工材である。両面とも斜めに削り出している。広葉樹で柾目である。

SE401出土遺物（第269図） 28は山茶碗の碗である。低い高台で口縁部は外反する。外面はススで覆われる。高台が低いことから山茶碗III～1期で、13世紀前半であろう。

SE404出土遺物（第269図） 29は山茶碗の碗である。高台は三角高台を呈する。山茶碗II期であろう。31、32は山茶碗の碗である。31は輪花碗で低い高台に体部は直線的に延びる。内面全面にススが付着する。32の口径は16cm台で、口縁部は外反する。高台には粉殻痕が顕著につき、底部糸切り未調整である。これら2点は山茶碗I～2期であろう。33は山茶碗の小皿である。口径は8.5cmで、底部には糸切り痕が残る。山茶碗II期である。34の外面底部には「一」の墨書が認められる。山茶碗I～1期であろう。

SE403出土遺物（第269図） 35は須恵器の無台杯である。外面は摩滅しており、調整は不明瞭であるが8世紀後半であろう。36は須恵器の甕である。外面は斜方向にタタキ、内面には青海波のタタキがわずかに残る。37は土師器の摘み蓋である。円形の宝珠つまみがつく。8世紀後半であろう。38は土師器の長胴甕の口縁部である。8世紀代であろう。「く」の字に開き、外面はハケ調整である。39は甕である。口縁部は短く外反する。頸部は直立し、肩は張り、外面にはハケ調整が認められる。9世紀前半代であろう。



第268図 古代～中世遺構出土遺物（1）

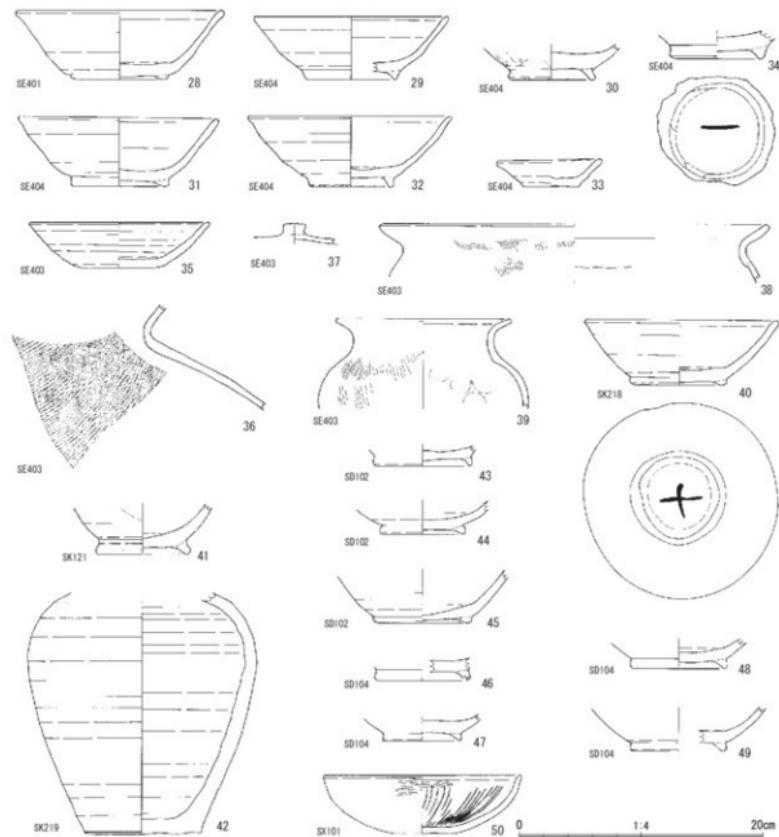
SK218出土遺物（第269図） 40は山茶碗の碗である。底部外面には「十」の墨書がみられる。低い高台に体部は直線的に延びる。口縁部は弱く外反する。内面には使用痕が認められる。山茶碗III-1期であろう。

SK121出土遺物（第269図） 41は灰釉陶器の碗である。外面には漬け掛けの痕跡がわずかに残る。

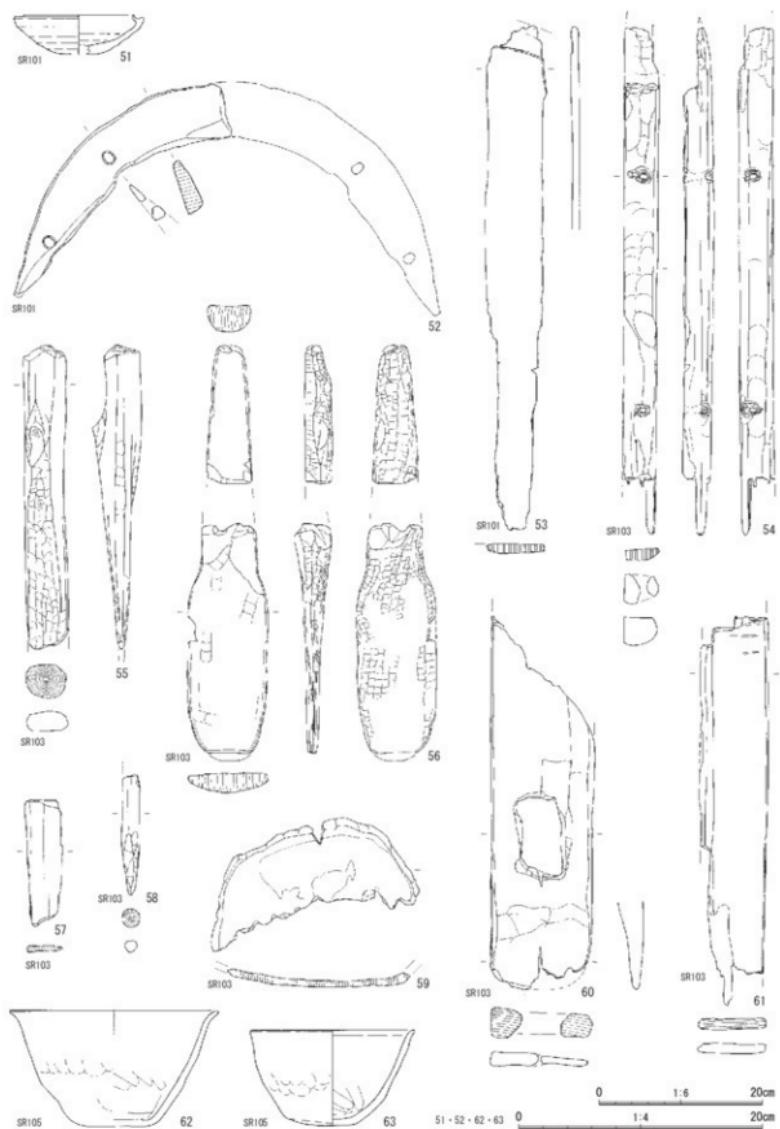
SK219出土遺物（第269図） 42は涅美産の壺である。肩部はやや丸みを帯びる。12世紀代であろう。

SD102出土遺物（第269図） 43は山茶碗の碗である。低い高台がつき、内面にススが付着する。44は灰釉陶器の碗で内面には重ね焼き痕が残る。外面底部の糸切り痕は未調整である。O53窯式併行期であろう。

SD104出土遺物（第269図） 46～49は山茶碗の碗である。I期～II期であろう。



第269図 古代～中世遺構出土遺物（2）



第270図 古代～中世遺構出土遺物（3）

SX101出土遺物（第269図） 50は土師器坏で、内面に放射状の暗文が巡る。端部はナデによりつまみ上がる。

SR101出土遺物（第270図） 51は須恵器坏身である。底部は丸みを帯び、口縁部は受部より張り出す。須恵器遼江編年IV期前半であろう。

52は弧状を呈し、断面は三角形状である。孔は2カ所あり、幅1cmである。木製の鞍の可能性がある。後輪とすれば、上部の孔は鞍座金具を装着する孔の可能性がある。孔の下は幅3cmの抉りが認められる。裏面は平坦である。広葉樹で柾目である。

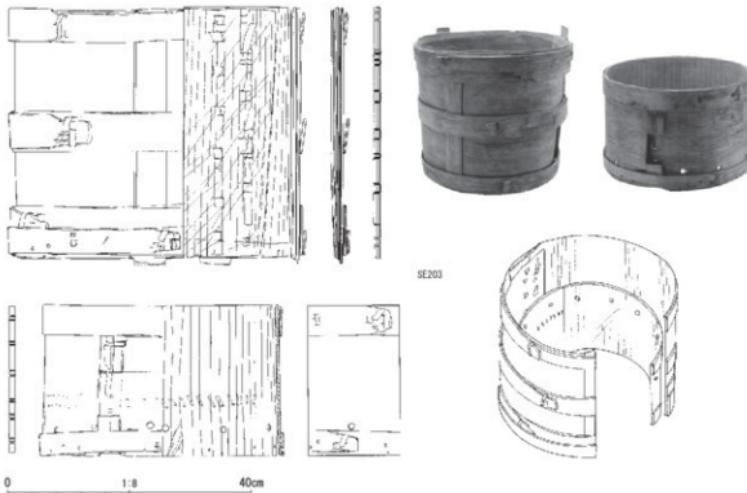
53は残存長67.3cmで曲物の底板と考えられる。幅3.4cmのかき底を作り出している。広葉樹で柾目である。

SR103出土遺物（第270図） 54は残存長67.2cm、幅4.5cmの建築材である。両端とも長さ7cm、幅1.7cm分を切り欠く。横長の梢円孔が2カ所残存する。孔と孔の間隔は29cmある。針葉樹で柾目である。

55は残存長37.8cmの楔である。針葉樹の芯持ち材である。上端は敲打痕が残る。両面とも下方に向けて細く削り出している。

56は曲柄鋤身である。刃部幅10cmで、ゆるやかにくびれる。刃の先端は欠損しているが、周囲は細かく欠けており、使用痕と思われる。広葉樹で柾目である。57は加工板である。上部は直線的に切断している。針葉樹で柾目である。58は丸杭である。4方向から削り出している。広葉樹である。59は剖物容器である。表面は炭化している。針葉樹で柾目である。60は残存長46.5cm幅12.1cmの建築材である。長さ11cm幅7cmの長方形の孔を有する。先端は斜めに削り出している。針葉樹の板目である。61は加工板である。両端は欠損している。表面の一部は炭化している。針葉樹で板目である。

SR105出土遺物（第270図） 62、63は土師器鉢である。口縁部は横ナデにより外反する。124の体部外面上に円形の浮文がつく。8世紀後半であろう。



第271図 古代～中世遺構出土遺物（4）

第4節 将監名遺跡出土炭化材樹種・炭化種子同定

株式会社古環境研究所

I 炭化材樹種同定

1 はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2 試料

試料は、将監名遺跡より出土した炭化材19点である。

3 方法

試料を剖析して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4 結果

第6表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

ヒノキ属 *Chamaecyparis* ヒノキ科 写真

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅は狭い。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、やや小型で1分野に2個存在するが、分野壁孔の型が不明瞭なヒノキである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりヒノキ属に同定される。ヒノキ属にはヒノキ、サワラがあり、どちらも本州、四国、九州、屋久島に分布する日本特産の常緑高木である。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 写真

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性が強く、水温によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸のほだ木など広く用いられる。

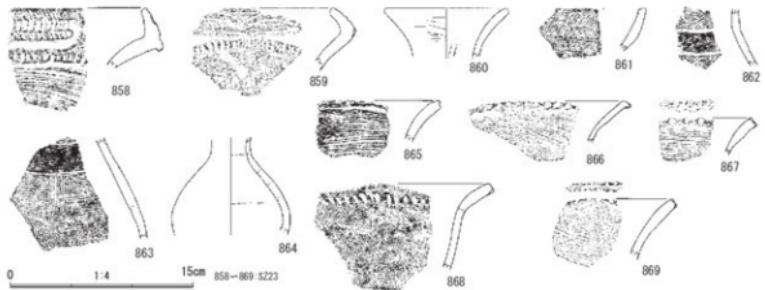
799は敲石である。中粒砂岩の扁平な円礫を使用しており、側面に敲打痕と敲打に伴うと思われる剥離が見られる。

SZ21出土遺物（第224、225図） 800は短い頸部をもち、口縁部は直線的に延びる。体部下位で屈曲し、無花果形である。外面は櫛描直線文下に斜格子が施され、縦位の波状文が垂下する。801は短い頸部をもち、体部に穿孔が認められる。802は単純口縁の細頸壺である。頸部は縦方向のミガキが施される。頸部下位には櫛描直線文が1条巡る。5本の縦位の櫛描直線文が垂下し、6区画内には斜格子文が施される。体部下位には横方向のミガキが施される。804は端部に刻みが入り、頸部に沈線が巡る。その下には横位の櫛描直線文に縦位の直線文がつく。805は受口状口縁壺で、短い頸部をもつ。体部は口縁部に比して大きく、体部上半には縦区画の櫛描直線文が垂下する。その直線文の上下には円形浮文が貼付される。区画内には斜格子文が施される。体部下半はハケ調整後、ミガキが施される。806は内湾する口縁部である。807は頸部に突帶がつき、直立しながら、口縁部は屈曲する。808は頸部に櫛刺突文が施される。

809、811は壺底部で上げ底である。810は頸部に突帶がつく。811は斜位の櫛刺突文が施され、下位にミガキが施される。812～814は高环である。812の脚部は櫛描直線文と櫛刺突文で構成される。813、814の脚部は直線的に延び、端部は屈曲する。815は甕で、稜をもつ突帶がつき、刺突文が巡る。外面は縦のハケ調整後、横のハケが施される。816は浅い鉢であろう。

SZ22出土遺物（第225図） 817は横ナデによりやや内湾する口縁をもつ壺である。体部上位には櫛描直線文間に斜格子文が施される。818は小型の壺で、短い頸部をもつ。体部上半は振幅の異なる櫛描波状文が施される。819は内傾する口縁部で、受部にヘラ描きによる連弧文、屈曲部に刺突文が巡る。外面は跳ね上げ文がつく。823、824は重四角文が施される。821、822は流水文状の文様が施される。829、830は高环の脚部である。829の端部は内傾する。外面はミガキが施される。830は「ハ」の字に広がり、端部は横ナデにより三角形状を呈する。831は体部上位に最大径をもち、口縁部は肥厚しながら外方へ延びる。弥生時代後期の鉢の可能性もある。825～828は甕である。825はナデによるものである。826は口縁下に刻みがつく。827の端部は外方へ延びる。端面には波状文が施される。

SZ13出土遺物（第226図） 832、834は単純口縁壺である。834の端部は面取りされる。833は折返口縁壺で、端部に3個で1単位の棒状浮文がつく。円形刺突文が頸部に巡る。836は櫛描直線文間に扇形文を配する。837は頸部に低い突帶がつく。その上下に円形刺突文が巡り、櫛刺突羽状文がつく。838は丸みを帯びた体部で、上げ底である。839は内湾口縁壺である。頸部に低い三角状の突帶がつき、波状文と直線文を交互につけ、下部に扇形文を施す。841は屈曲口縁の高环で、外面に波状文を施す。



第227図 SZ出土遺物（38）

842～847は高杯脚部である。842～846は櫛描直線文で構成され、842、844、845は櫛描直線文と斜位の櫛刺突文がつくものである。848は小型のワイングラス形高杯である。849は鉢で、口縁部は直線的に延び、内外面に縦位のミガキが施される。850は口縁部外面に櫛刺突文が施される。852は直線的に伸びる浅い鉢である。851は瓢形土製品である。853～856は壺である。頸部は短く屈曲する。853、854は球胸状を呈する。854の口縁部外面は口縁部にあわせて斜位のハケ、体部外面は口縁部と異なる斜めのハケが施される。口縁部内面は横ハケが施される。855は体部下位で屈曲する形態である。

857は石皿で、含穀粗粒砂岩の円碟を使用しており、両面と側面に研磨痕がある。

SZ23出土遺物（第227図） 858、859は内傾する口縁部である。858の受部には櫛描斜線文にヘラ描きの沈線、爪形文が施される。859の受部は連弧文、刺突文が施される。861は受部にLR繩文が施される。862は沈線間に無文帯がつき、斜格子文が施される。863は無文帯と櫛描直線文帯で構成される。文様帯に櫛描直線文が垂下する。865～869は壺である。865は1条の沈線がつく。866は突帯がつき、刻みが入る。867は端部上下に刻みが入る。868は屈曲する口縁部である。869の端部は面取りされる。

SZ10出土遺物（第228図） 870は単純口縁広口壺である。頸部に櫛目1条の沈線が巡る。外面はハケ仕上げである。

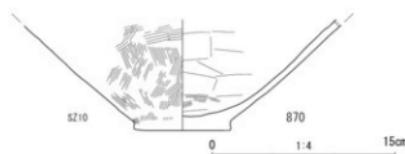
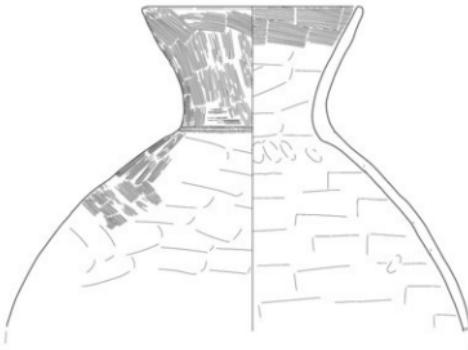
SZ17出土遺物（第229図） 871は無花果形の体部で櫛描直線文間に斜位の櫛刺突文を施す。その下には6個の円形浮文がつく。屈曲部にかけて櫛を用い、縦位に波状文を連続して施す。872は頸部に櫛描刺突文が巡る。873は受口状口縁で受部に櫛刺突文がつく。874は鉢であろうか。

SZ18出土遺物（第229図） 876は折返口縁壺である。877は口縁部が直線的に伸びるもので、櫛描直線文、櫛描刺突文がつく。878は体部上半に櫛描直線文、扇形文、波状文が施される。外面は縦のミガキ調整が施される。879は頸部に低い突帯がつく。外面は縦のハケが施される。内面は櫛刺突羽状文を2段、波状文を2段施す。881～883は低脚で櫛描直線文と櫛刺突で構成される。884、885は甕の脚部で、885の接合部に粘土帯がつく。

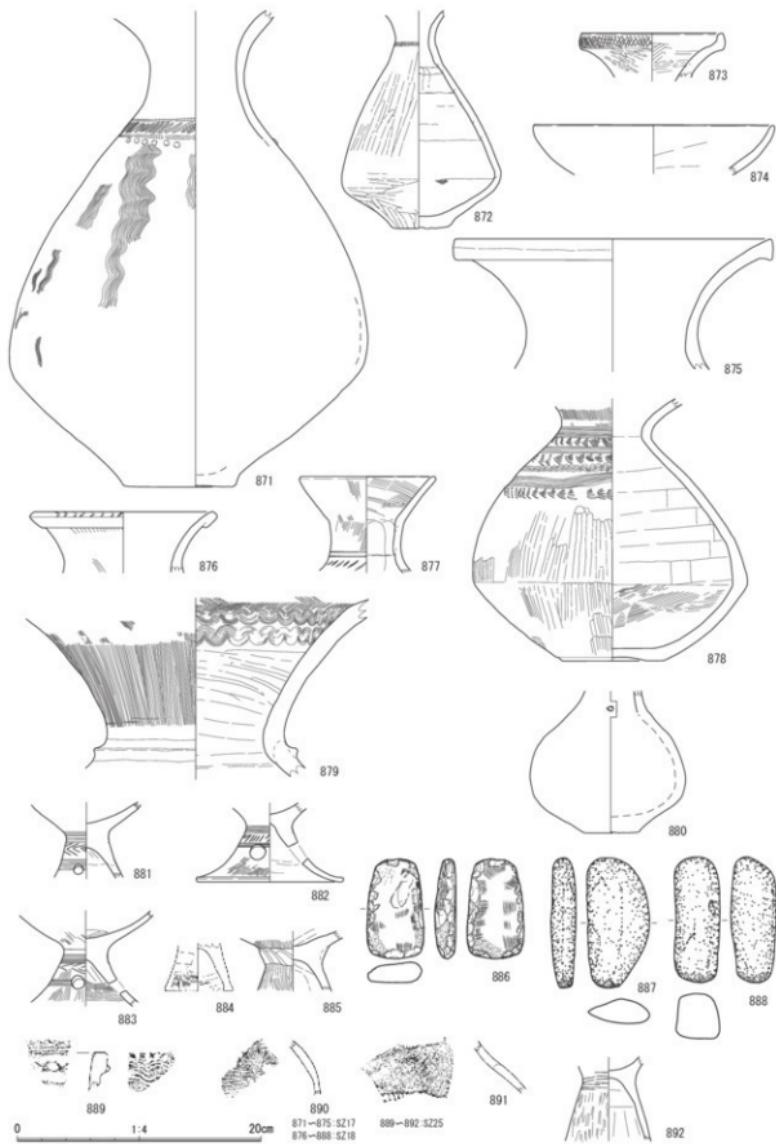
886は石斧未完成品である。褐灰色細粒砂岩の扁平な円碟を使用しており、側面から平坦剥離を入れて全体の形を作っている。刃部にも剥離が入っているが、鋭角の部分ができるないため、未完成品と思われる。

887、888は敲石である。細長い円碟を使用しており、一端に敲打痕が見られる。887は中粒砂岩を使用しており、888は珪質ホルンフェルスを使用している。

SZ25出土遺物（第229図） 889の端部は押引文が施される。外面は突帯が付き、内面は波状文が巡る。丸子式の甕であろう。890は櫛描直線文の



第228図 SZ出土遺物（39）



第229図 SZ出土遺物 (40)

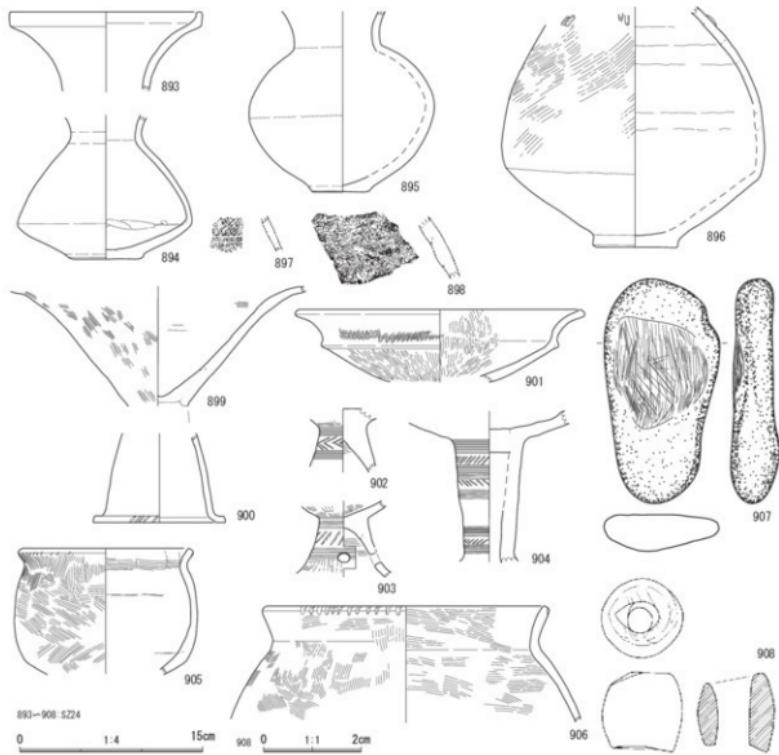
間に扇形文が施される。891は壺の体部片で、嶺田式である。892は高坏の脚部である。外面は縦方向のミガキが施される。

SZ24出土遺物（第230図） 893は受口状口縁壺である。895は丸みを帯びた体部である。894、896は屈曲した体部をもつ。898は櫛描波状文が巡る。899は直線的に延びる深い环部に外方に屈曲する。900の高坏脚部は膨らみ、端部は屈曲する。901は屈曲口縁に櫛描波状文が巡る。902、903は櫛描直線文と斜位の刺突文で構成される。905は小型の甕である。

907は石皿で、溶結凝灰岩と思われる扁平な円盤を使用し、表面に研磨痕が見られる。908は玉である。SD415出土遺物（第231図） 909は単純口縁部壺で、体部に穿孔が施される。

SD417出土遺物（第231図） 910は端部、内面に扇形文が施される。911は頸部に突帶がつく。912は深い环部をもつ。内外面ともミガキが施される。

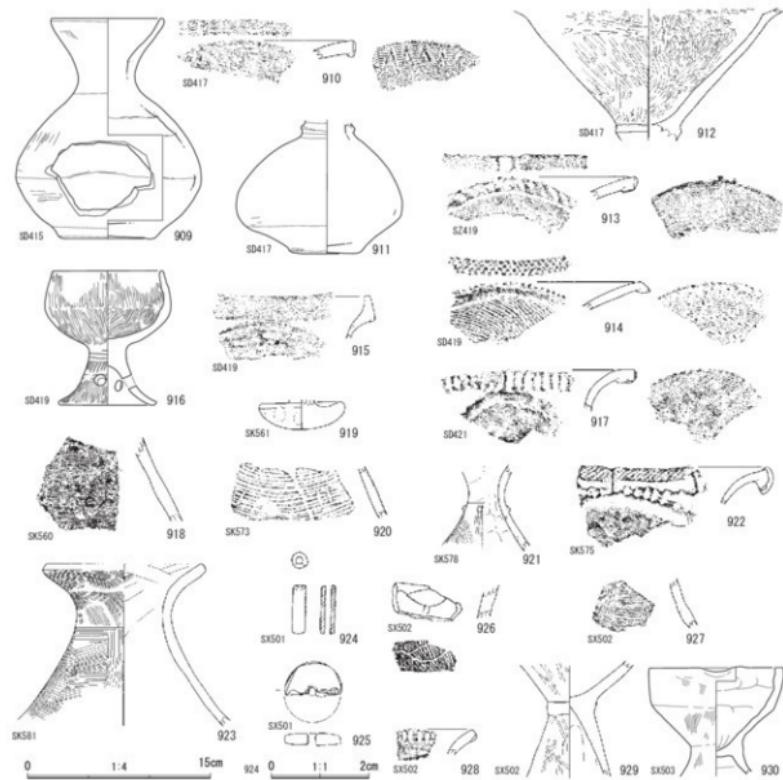
SD419出土遺物（第231図） 913、914は折返口縁壺である。914は折返部には斜格子文、内面には櫛描刺突文、扇形文が巡る。915は受口状口縁壺である。端部には斜格子文が施される。916はワイングラス形高坏である。内外面とも縦方向のミガキが施される。脚部は櫛描直線文と斜位の刺突文がつく。



第230図 SZ出土遺物（41）

遺物（方形周溝墓出土遺物）

- SD421出土遺物（第231図） 917は折返口縁で、端部に刻みが入る。内面は口縁部に、繩文が施される。
 SK560出土遺物（第231図） 918は櫛描直線文が巡る。
 SK561出土遺物（第231図） 919はつまみがつく蓋である。
 SK573出土遺物（第231図） 920は櫛描直線文に短線文が垂下する。
 SK578出土遺物（第231図） 921は縦区画に斜格子文がつく。
 SK575出土遺物（第231図） 922は口縁部に突帯がつき、端部は垂下する。LR繩文に刻みがつく。
 SK581出土遺物（第231図） 923は単純口縁広口壺である。
 SX501出土遺物（第231図） 924は管玉である。925は土製紡錘車である。
 SX502出土遺物（第231図） 926は鹿と思われる絵画土器で、壺体部にあたる。顔は左向きに配され、頭、脚を線で表現し、胴部は三日月形に表現される。中期後半であろう。
 929は台付甕の脚部で粘土帯がつく。
 SX503出土遺物（第231図） 930の口縁部は直立し、片口がつく。



第231図 SZ関連遺構出土遺物

5 土器棺墓出土遺物

SDK01出土遺物（第232図） 1は小型の壺である。体部は外反しながら立ち上がり、体部最大径は中位にある。口縁部はやや内湾しながら、直立気味に立ち上がる。体部には横方向のミガキ調整が施され、体部下部には接合痕が観察できる。

2は片口の鉢である。底部は上げ底で、口縁部は内湾しながら立ち上がる。内外面ともにミガキ調整が施される。土器棺墓の蓋にあたる。

3は凹線文系土器の広口壺で、土器棺墓の身に相当する。算盤玉に近い体部で、底部は欠損している。体部下位にはハケ調整が施される。頸部から体部上位には櫛描文が施される。頸部には上から波状文、斜位の刺突文がつく。体部は櫛描横線文と波状文が交互につき、体部中位には櫛描波状文が2条施される。口縁端部は肥厚し、端面に凹線がつく。口縁内面には2段の櫛描円弧文が巡る。西遠江IV様式に比定される。

SDK02出土遺物（第233図） 4は頸部から口縁部を欠損した壺である。体部最大径は下位にあり、無花果形である。内外面とも摩滅が顕著である。

SDK03出土遺物（第233図） 5は頸部上位から口縁部を欠損した壺である。体部最大径は中位にあり、細長く丸みを帯びる。頸部と体部の境には4個で1単位の円形貼付文がつき、その上位には波状文が2条確認できる。西遠江V-1様式に比定できる。

SDK04出土遺物（第233図） 6は壺の体部である。底部外面は木葉痕が確認できる。底部から体部にかけて丸みを帯びながら立ち上がる。外面は細かいハケ調整が施される。

SDK05出土遺物（第233図） 7は壺の底部で、蓋としての利用であろう。8は壺の体部である。底部から中位にかけて丸みを帯びる。外面には縱方向のミガキ調整が認められる。

SDK06出土遺物（第234図） 9は壺の体部である。外面は斜め方向のミガキ調整がみられる。体部下位で緩やかに屈曲する。10は壺の体部である。内外面とも表面が剥離している。丸みをもつ体部である。

SDK07出土遺物（第234図） 11は凹線文系土器の広口壺である。口縁部内面には繩文がつく。体部は丸みを帯び、最大径は体部の下位にくる。体部上位には櫛描横線文と波状文が交互につき。頸部と体部の境には突帯が1条巡る。西遠江IV様式に比定できる。

12は甌である。口縁部と体部の径はほぼ同じで、短い脚部をもつ。口縁部は短く屈曲する。13は小型の甌である。口縁部は短く屈曲する。口径と体部径がほぼ同じで、体部下半は屈曲する。

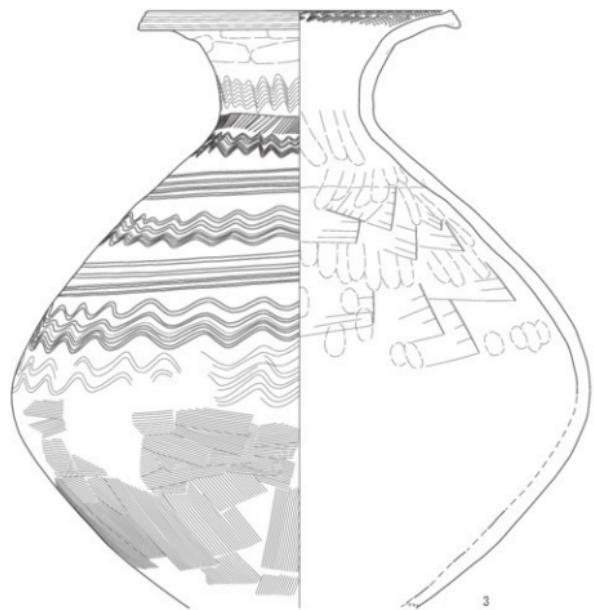
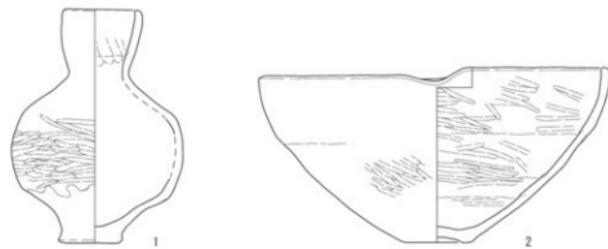
SDK08出土遺物（第235図） 14は小型の甌である。丸みを帯びており、底部・口縁部を欠損する。体部はやや荒いハケ調整が施される。

15は大型の折返口縁壺である。端面には刺突羽状文がつき、5本1単位の棒状浮文がつく。頸部には斜位の刺突文が巡る。体部最大径はやや下位にあり、無花果形を呈する。外面はハケ調整が施される。菊川式土器であり、V-2様式に比定できる。16は壺の底部である。底部外面には木葉痕が残る。外面には荒いハケ調整が残る。

SDK09出土遺物（第236図） 17は台付甌である。口縁部と脚部を欠損している。底部は「ハ」の字状に直線的に伸びる。脚台との接合部には粘土帯がつく。V様式に比定できる。18は大型の広口壺である。単純口縁で、頸部から直線的に伸び、上位で外方に屈曲する。頸部は太く、突帯は付かない。体部下位で屈曲し、無花果形を呈する。頸部と体部の境には櫛刺突による羽状文が巡り、3個1単位の円形浮文がつく。菊川式土器でV-4様式である。19~21はガラス小玉である。色調は水色である。

SDK10出土遺物（第237図） 22は丸みを帯び、やや細長い壺の体部である。内外面の調整は不明瞭であった。

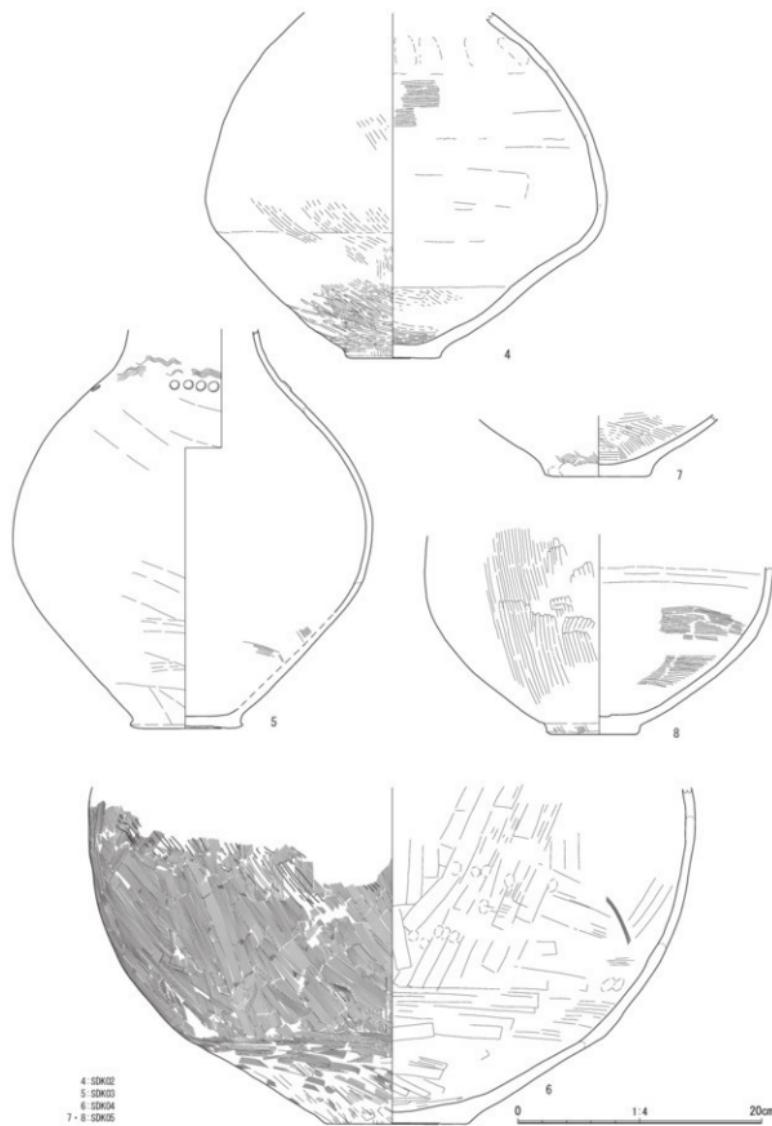
SDK11出土遺物（第237図） 23は壺の体部である。口縁部は欠損している。体部は丸みを帯び最大径は



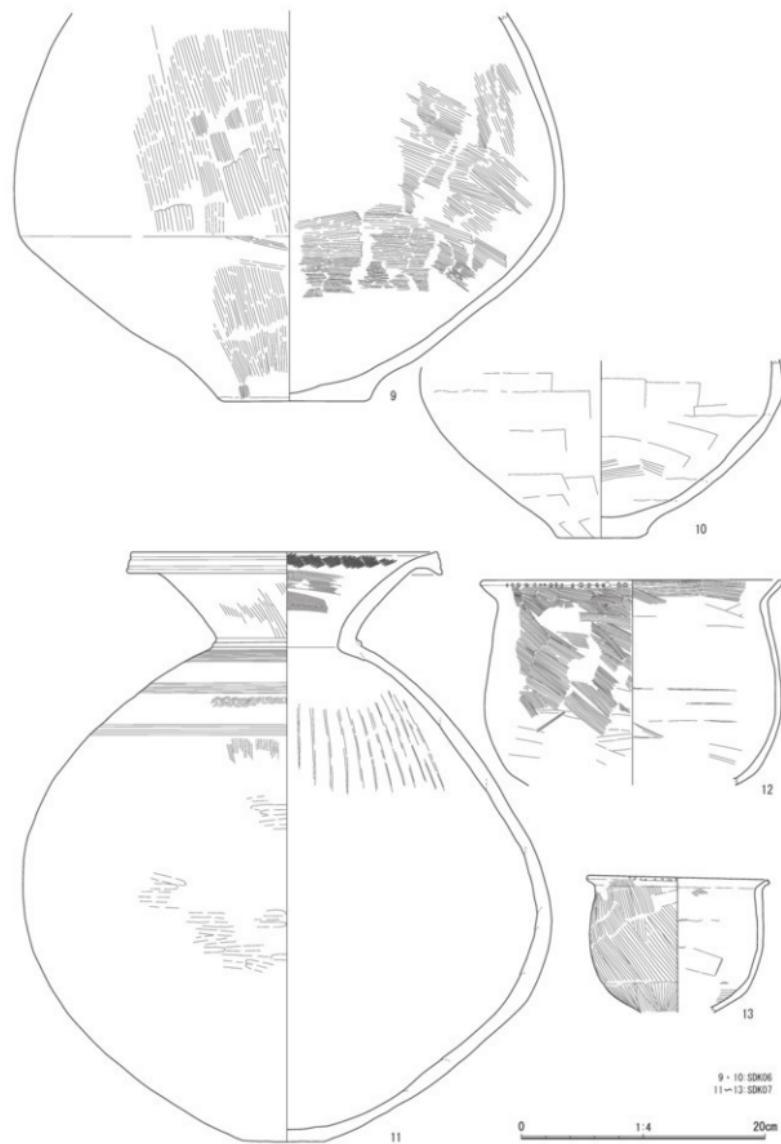
1-3: SDK01

0 1:4 20cm

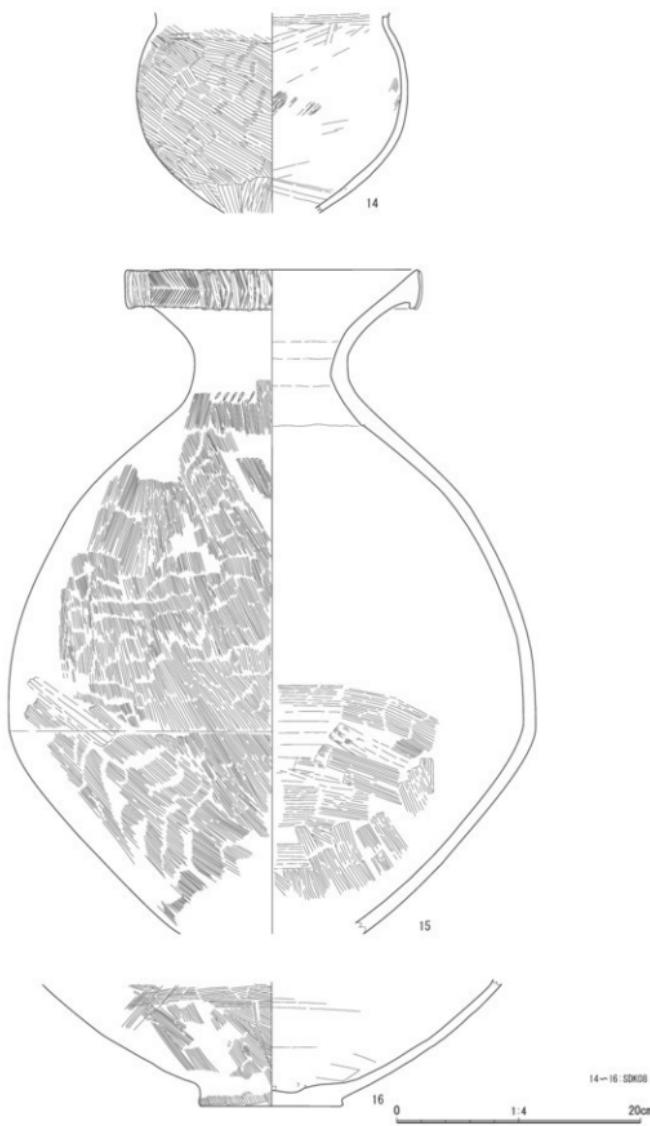
第232図 SDK出土遺物（1）



第233図 SDK出土遺物（2）



第234図 SDK出土遺物（3）



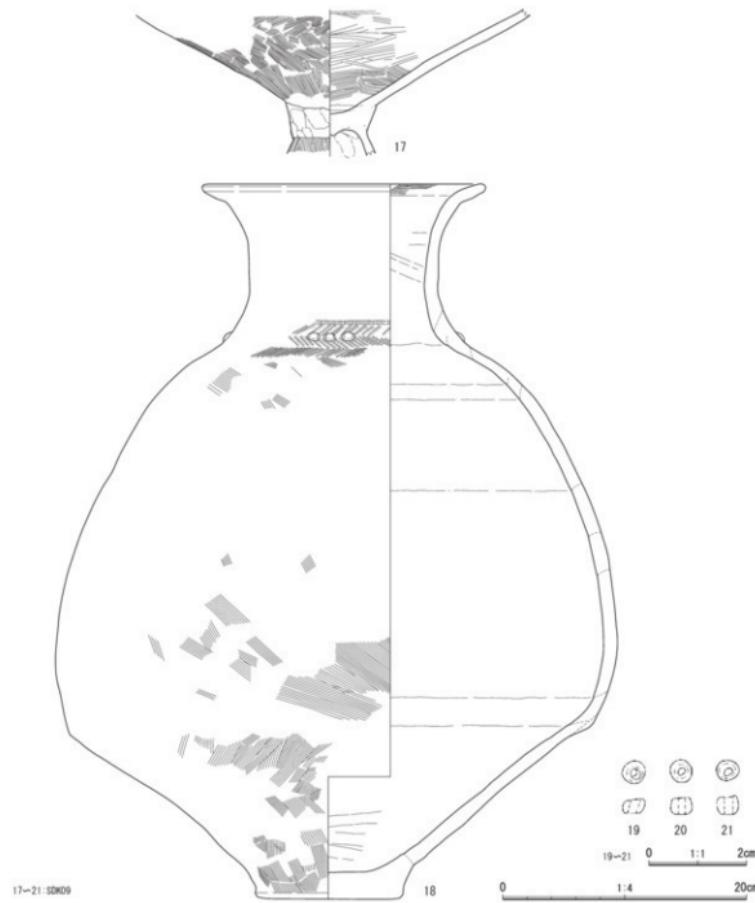
第235図 SDK出土遺物（4）

中位にくる。体部上位には櫛描波状文と櫛描直線文が交互につく。体部の形態から西遠江IV様式であろう。

SDK12出土遺物（第237図） 24は口縁を欠損した細頸壺である。底部は上げ底で、最大径は下位にあり、無花果形を呈する。頸部には櫛描横線文が巡り、体部上位には縦位に櫛描波状文がつく。白岩式土器でIV-3、4様式であろう。

SDK13出土遺物（第238図） 25は口縁部を欠損した球胴状の壺である。内外面とも調整は不明瞭である。

SDK14出土遺物（第238図） 26はやや丸みを帯びた体部に頸部で屈曲する広口壺である。口縁端部は強

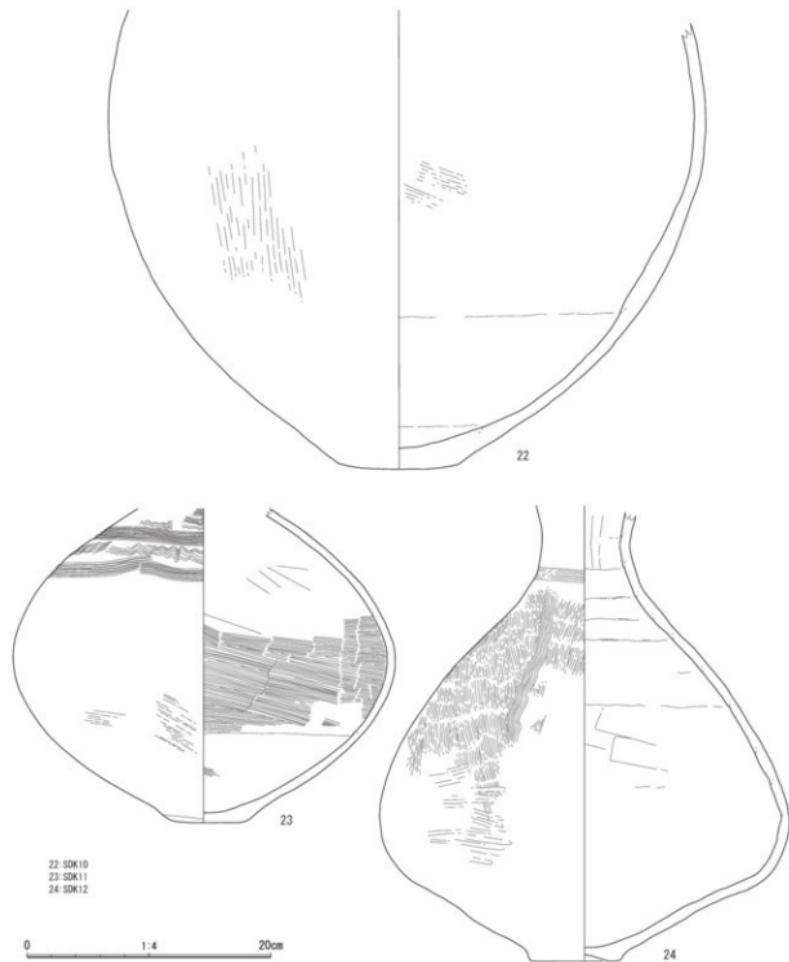


第236図 SDK出土遺物（5）

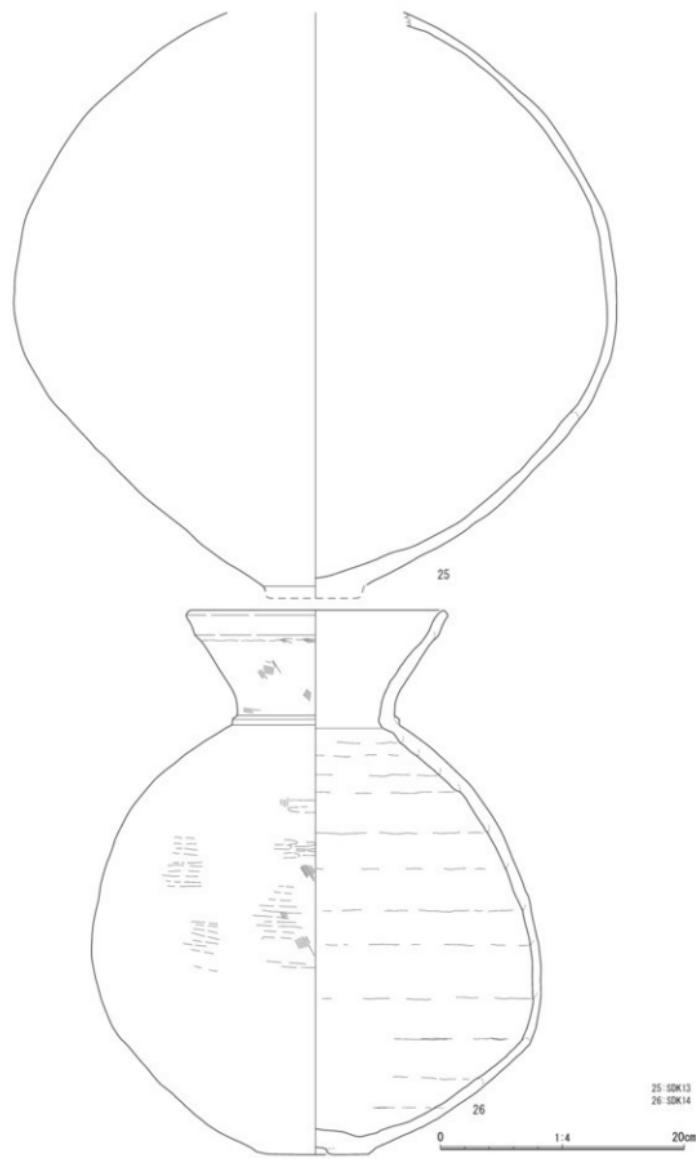
い横ナデによりやや外反する。頸部には低い突帯が巡る。体部外面にはわずかにミガキが残る。VI様式であろう。

SDK15出土遺物（第239図） 27は口縁部を欠損した大型の壺である。算盤玉に近い体部で外面にはミガキ調整が顕著にみられる。底部は上げ底である。西遠江IV様式であろう。

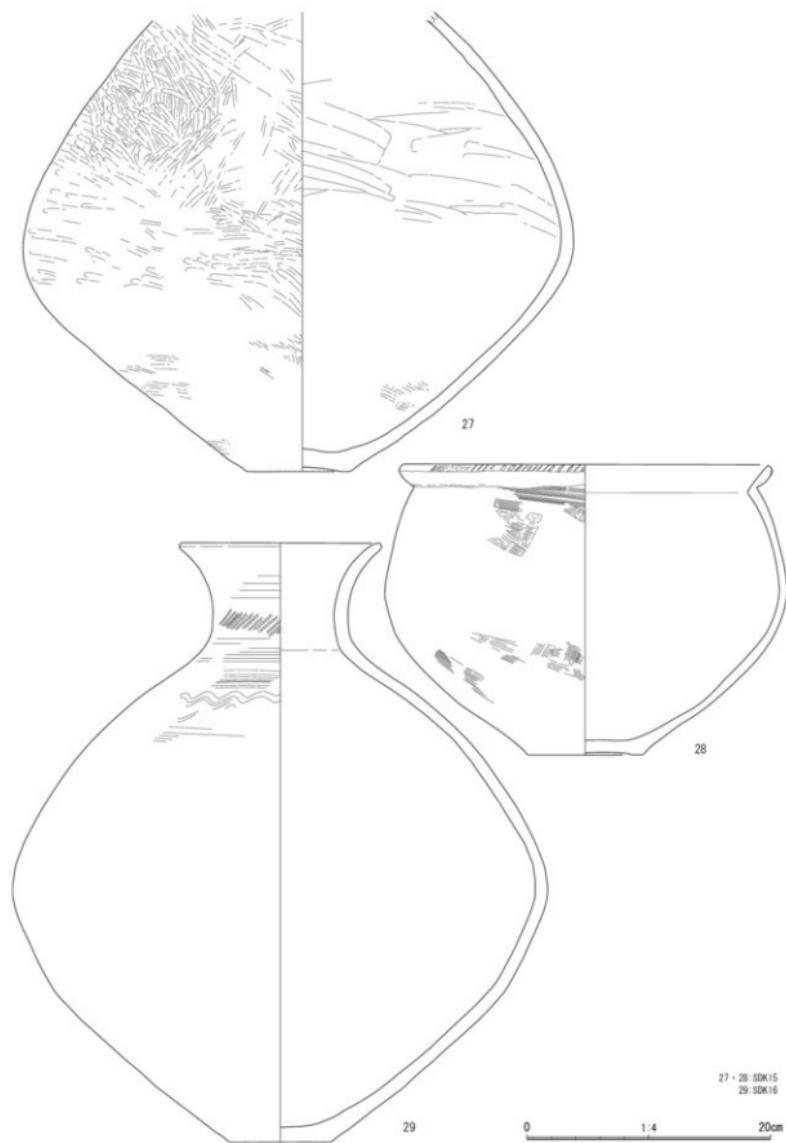
28は鉢である。短く外に屈曲し、折り返し口縁である。端部には刻みが施される。体部中位に最大径があり、外面には細かいハケ調整が施される。



第237図 SDK出土遺物（6）



第238図 SDK出土遺物（7）



第239図 SDK出土遺物（8）

SDK16出土遺物（第239図） 29は大型の単純口縁の壺である。体部中位よりやや下で最大径がある。頸部は短く、直立気味に立ち上がり、外反する。口縁端部は丸く仕上げる。頸部外面に櫛刺突文、櫛描直線文、波状文を施す。体部外面の調整は摩滅しており不明である。西遠江IV様式に比定される。

SDK17出土遺物（第240図） 30は口径45cmの大型の壺である。口縁端部は肥厚し、短く緩やかに外反する。31は体部下半で、強く屈曲する大型の壺である。外面は細かいハケ調整が施される。

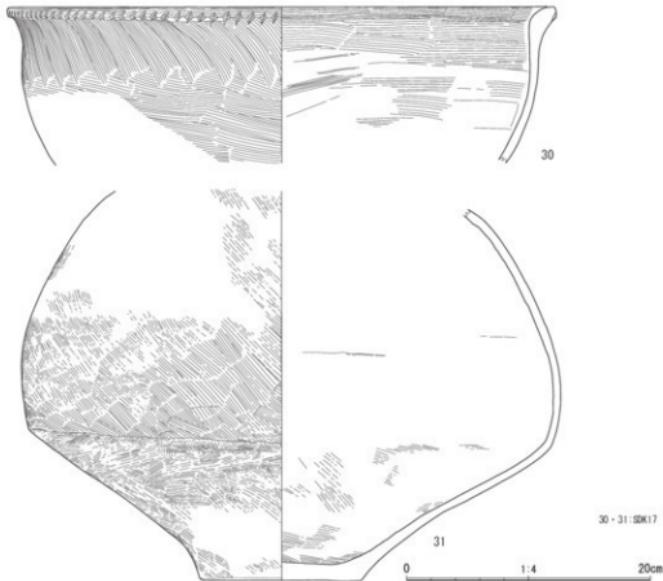
SDK18出土遺物（第241図） 32は単純口縁の広口壺である。短い頸部に口縁部は強く外反する。口縁端部は凹線が巡り、その上下端には刻みがつく。また2個で1単位の棒状浮文がつく。体部は下位で屈曲し、無花果形を呈する。2条の沈線で区画された斜格子文は頸部、体部上位、体部下位に帯状につく。体部と頸部の境には段差がつく。東三河の在来系土器と四線文系の要素をもつ。従来の長床式土器であり、三河VII様式に比定できることから西遠江IV様式に併行する。

33は口縁を欠損した壺である。球胴状で、細い頸部へとつながる。外面は摩滅で調整は不明瞭である。

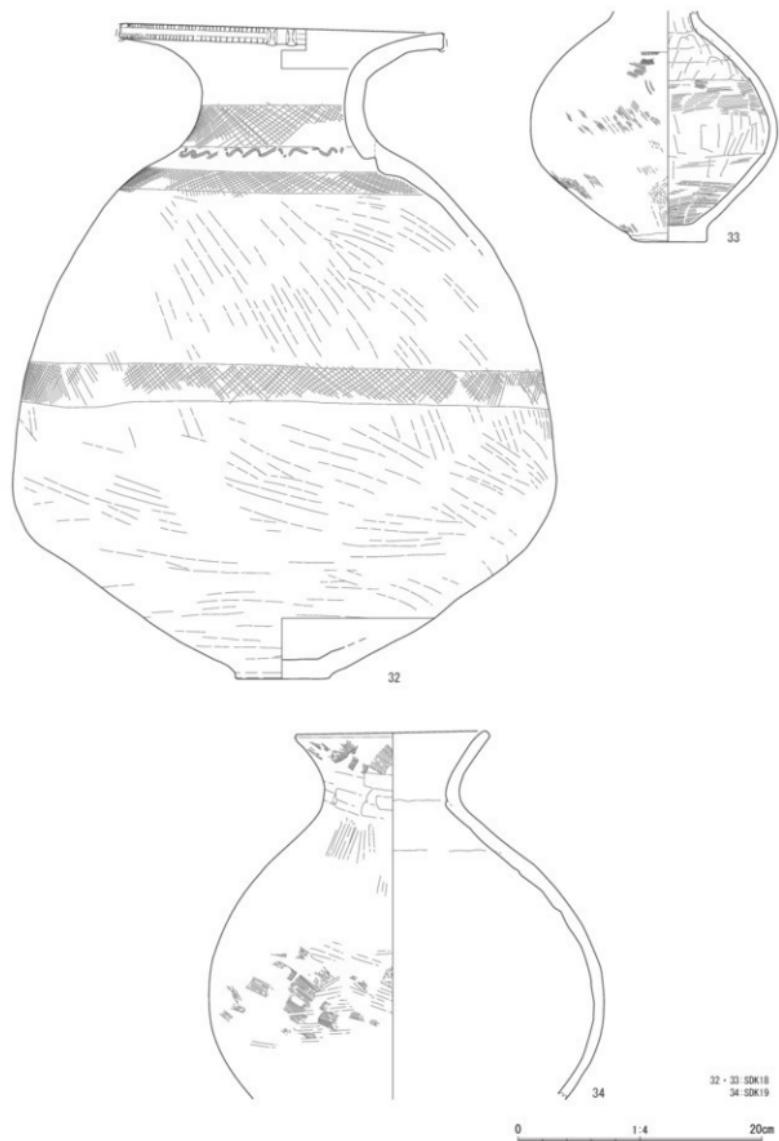
SDK19出土遺物（第241図） 34は単純口縁の壺である。口縁は短く外反する。底部は欠損しているものの、球胴状の体部をもつ。外面の調整は不明瞭であるが、ミガキ・ハケ調整が残る。

SDK20出土遺物（第242図） 35は球胴状の壺である。口縁は欠損している。上位には櫛描直線文が連続してつき、下位には直線文とやや振り幅の大きい波状文が交互につく。西遠江のIV様式であろう。36は壺の体部である。上げ底である。体部は丸みを帯びながら立ち上がる。外面の調整は摩滅により不明瞭である。

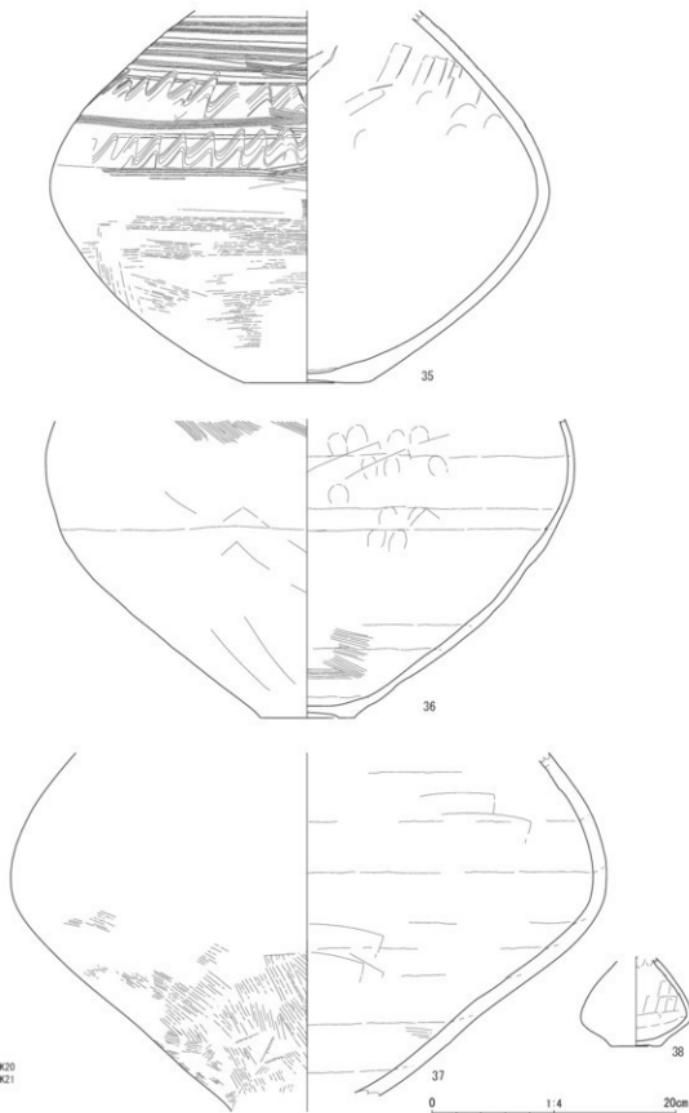
SDK21出土遺物（第242図） 37は底部、口縁を欠損した壺である。算盤玉に近い形状である。内面は接合痕が明瞭に残る。38は小型の壺である。上げ底の底部で、体部は下位で屈曲する。



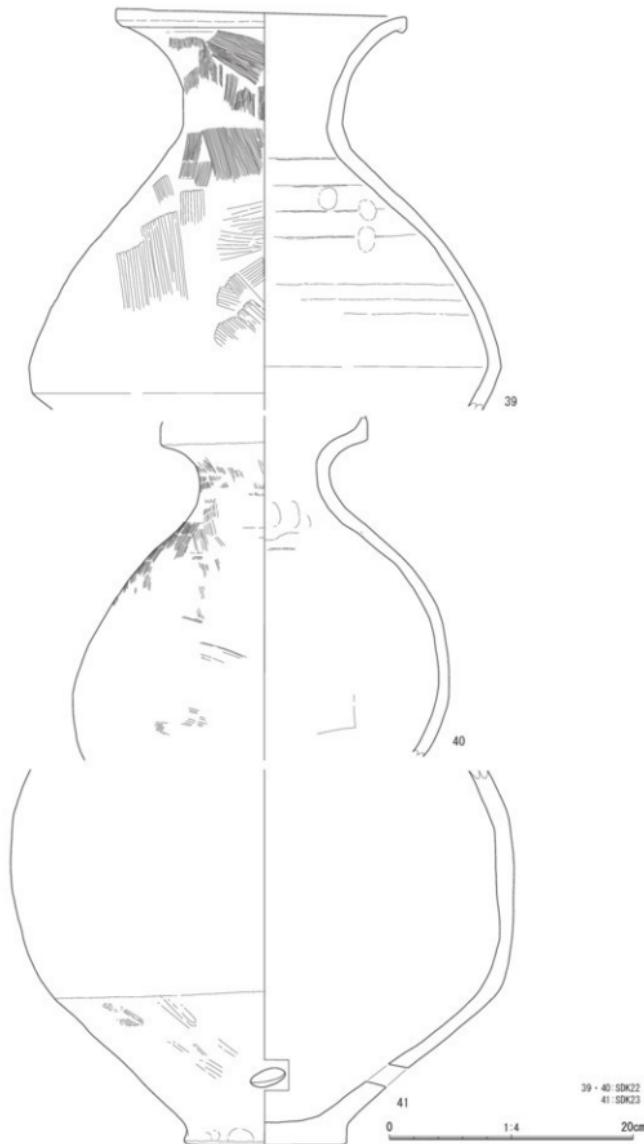
第240図 SDK出土遺物（9）



第241図 SDK出土遺物（10）



第242図 SDK出土遺物 (11)



第243図 SDK出土遺物 (12)

SDK22出土遺物（第243図）39は折返口縁の広口壺である。体部は下位で屈曲し、無花果形である。40は受口状口縁の広口壺である。体部は球胴状で、斜方向のハケ調整が残る。摩滅により不明瞭であるものの、頸部には横線文がわずかながら残る。

SDK23出土遺物（第243図）41は体部上位を欠く壺である。体部中位は直立気味に立ち上がる。下位には穿孔がある。

6 流路出土遺物

SR401出土遺物（第244～255図）1～6は単純口縁壺である。いずれも端部は面取りされる。1、2の肩部には櫛描直線文間に櫛描波状文がつく。5の体部下位は屈曲が強い形態である。頸部には櫛描直線文、波状文、刺突文が施される。6は3条の櫛描直線文間に櫛描波状文が巡る。

7～9は内湾口縁壺である。7、8の頸部と体部の境には低い突帯がつく。7は幅広の櫛描直線文帶の間に斜位の刺突文が巡る。8の櫛描直線文帶の上位には5個で1単位の円形浮文が3カ所認められる。下には円形刺突文が巡る。9は口縁に低い突帯がつき、横ナデにより、端部は段差をもつ。内面における口縁部と頸部の境には段差が残る。体部は細長く、外面は摩滅しており、ハケがわずかに残る。

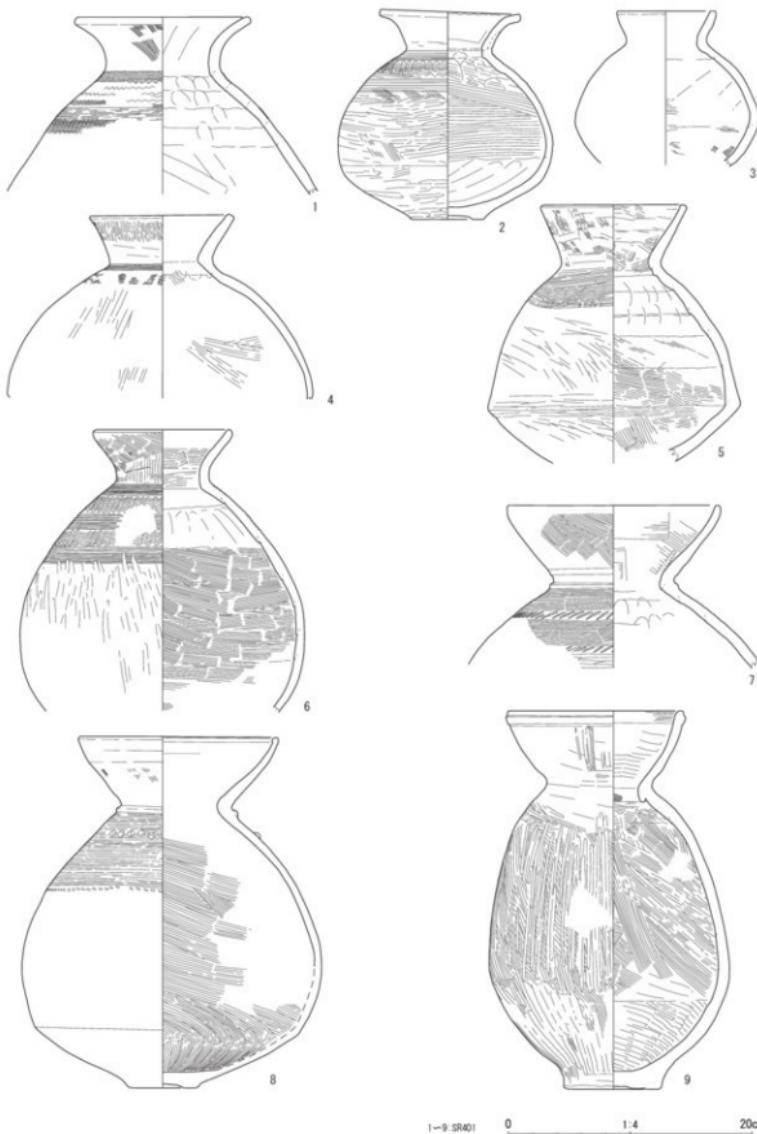
10は端部を外方に引き出す口縁である。体部は丸みを帯び、上半は櫛描直線文帶に櫛刺突を斜位に施す。中位から下位にかけて横方向のミガキ調整がみられる。11、12は複合口縁の壺である。11の外面には8段以上の羽状文がつく。12は縦位に沈線がつく。

13～20は折返口縁壺である。14の端部は縦位の沈線が巡る。15の口縁内面に簾状文が巡る。頸部と体部の境には段差をもつ。頸部には低い突帯がつき、羽状文が巡る。下位には斜め方向のミガキ調整が施される。16の頸部と体部の境には突帯がつき、刻みが入る。その下には斜格子文帯がつき、櫛刺突文帯と櫛描直線文帯が巡る。櫛描直線文帯には2個1対の円形浮文がつく。17は幅広の折返口縁の広口壺である。内面には扇形文、羽状文が2段ずつつく。端面には6個で1単位の棒状浮文がつく。頸部には低い突帯に羽状文、円形浮文がつく。18の端面にRL繩文、頸部に羽状の繩文、体部に結節繩文を施す。19の折返部は幅広で、端部に棒状浮文がつく。内面には櫛刺突文が巡る。20は端面、内面にハケ原体による斜格子文をつける。21は内湾状を呈し、端部は折返口縁である。体部は無花果形で下位に櫛描による大きな流水文が施される。頸部には低い突帯が2条つき、櫛刺突羽状文、斜格子文、直線文、扇形文が組み合わさる。斜格子文、櫛刺突文の間に円形浮文が貼付される。22の体部はハケ仕上げである。23は折返口縁で、三角状に垂下する。端面に棒状浮文、体部上位に円形浮文がつく。

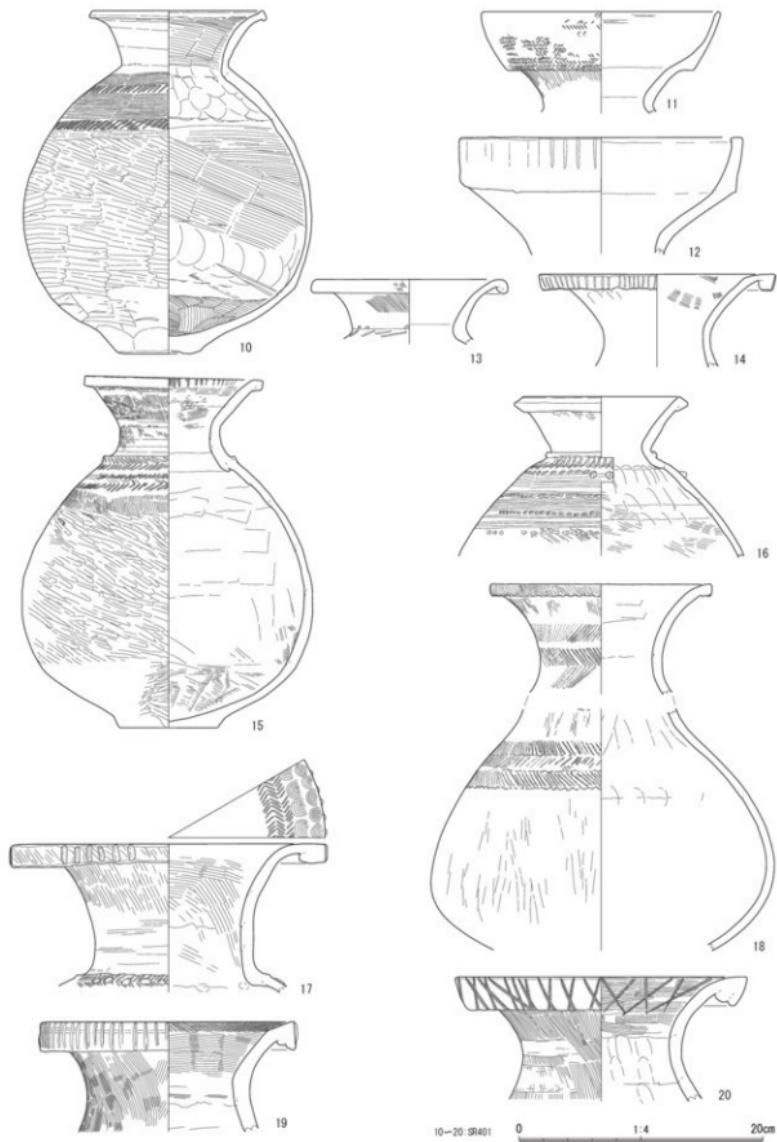
25、26は内湾口縁壺であろう。体部には斜位の刺突文に5個1単位の棒状浮文がつく。内面は頸部と体部の接合には段差が残る。26の体部の文様構成は明瞭ではないが、上位に櫛刺突羽状文、体部にRL繩文が施される。27は細長い頸部を有し、体部上位から中位にかけてLR繩文が施される。4個1単位の円形浮文が頸部と体部の境に貼付される。28は無花果形の体部である。上から櫛刺突文帯、櫛描の押引文が巡る。そこから下位はLR繩文帯を3段配する。上位、中位に2段の扇形文が部分的に施される。

29～51は壺体部である。29～31は菊川式土器である。いずれも頸部と体部の接合には段差が明瞭に残る。29は低い突帯に羽状文がつき、3個1単位の円形浮文がつく。33は丸みを帯びた小型壺の体部に櫛描直線文、櫛刺突文が巡る。やや大きめの円形浮文がつく。35の体部上位に櫛刺突文、櫛描直線文が巡る。34、36は丸みを帯びた体部に櫛描直線文、櫛描波状文がつく。37は体部上位に斜め方向のミガキ調整が残る。38～51は壺体部下半部分である。丸みを帯びるもの、体部下位で屈曲するもの、屈曲し、直線的に立ち上がるものなどがある。

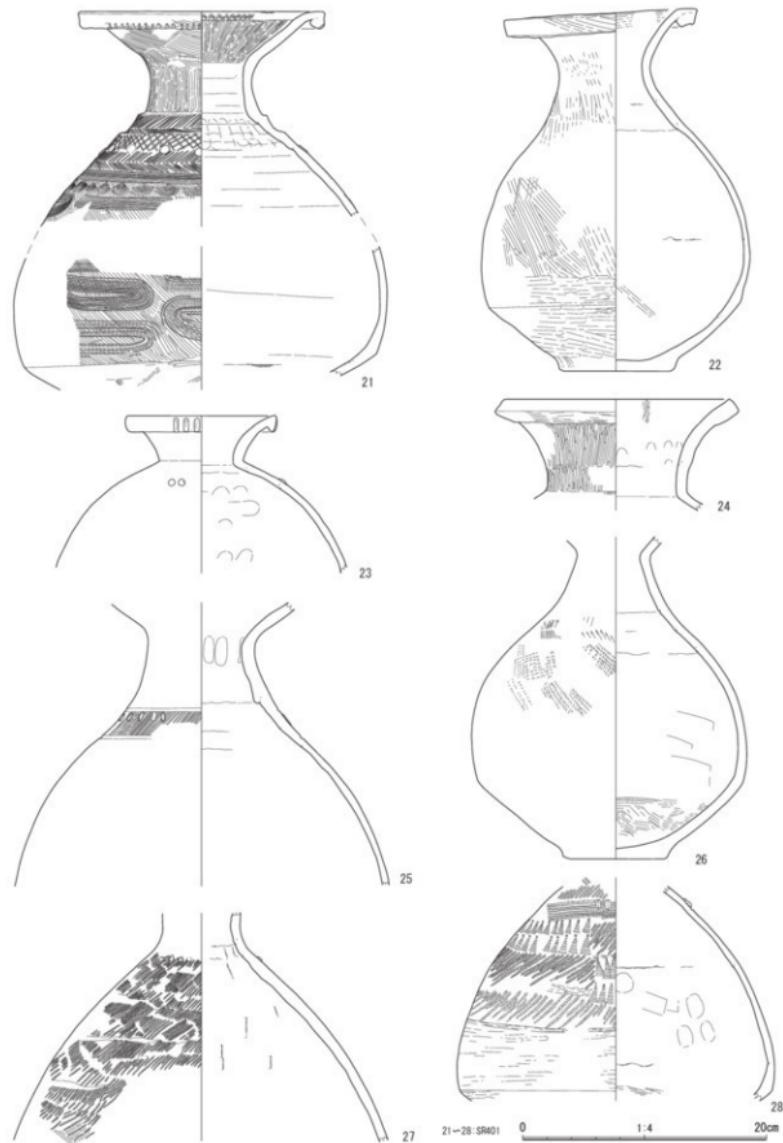
52～57は小型の壺である。53の頸部には円形刺突文がつき、口縁は内湾する。54は折返口縁壺で、体部は屈曲が強い形態である。59はコップ形を呈する。櫛描直線文と波状文で文様を構成する。58は小型



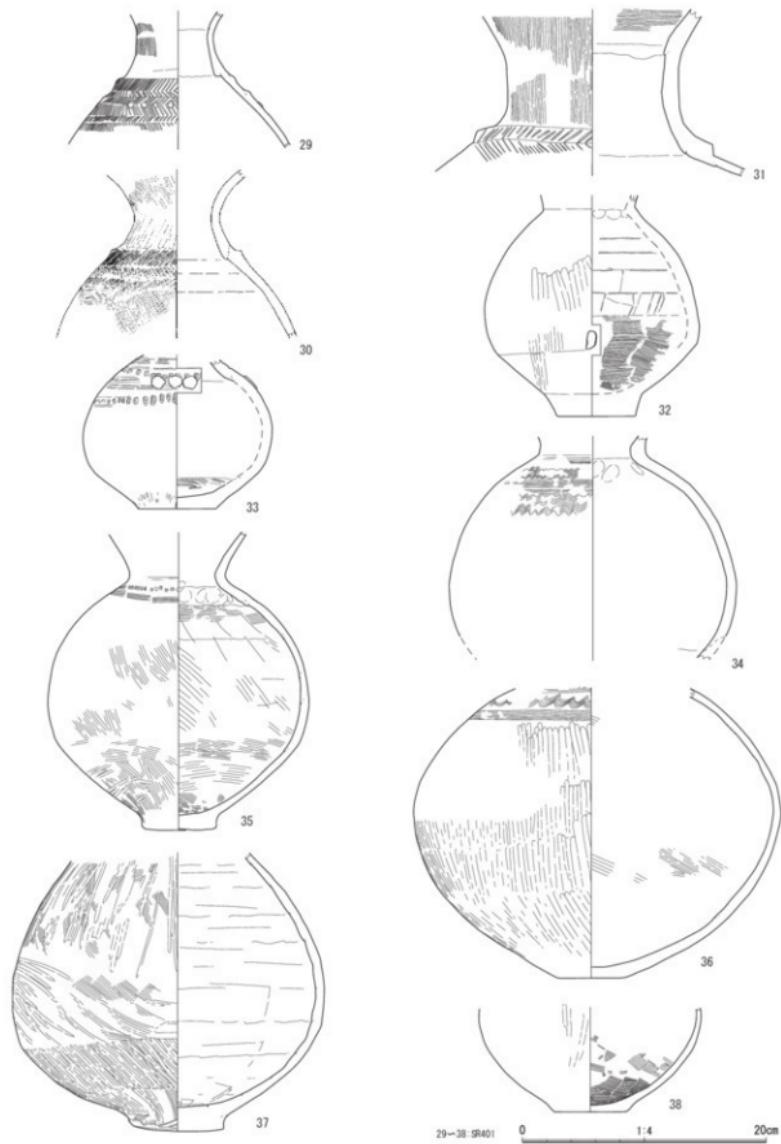
第244図 SR出土遺物（1）



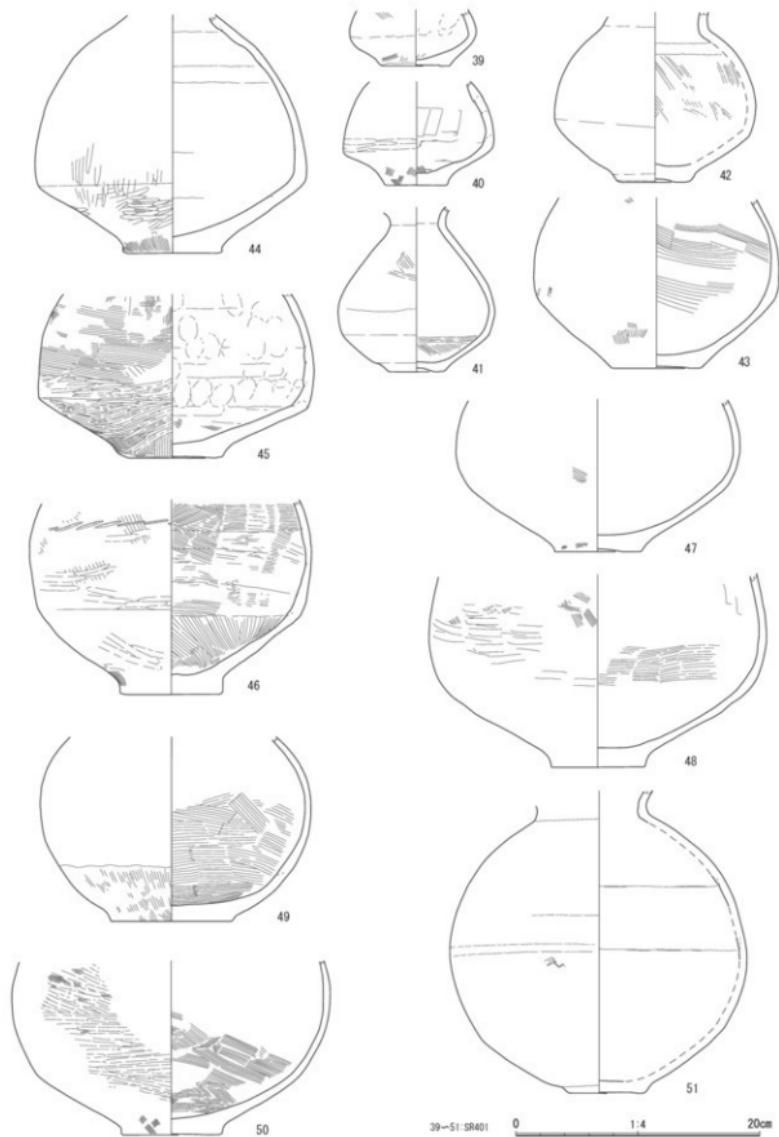
第245図 SR出土遺物（2）



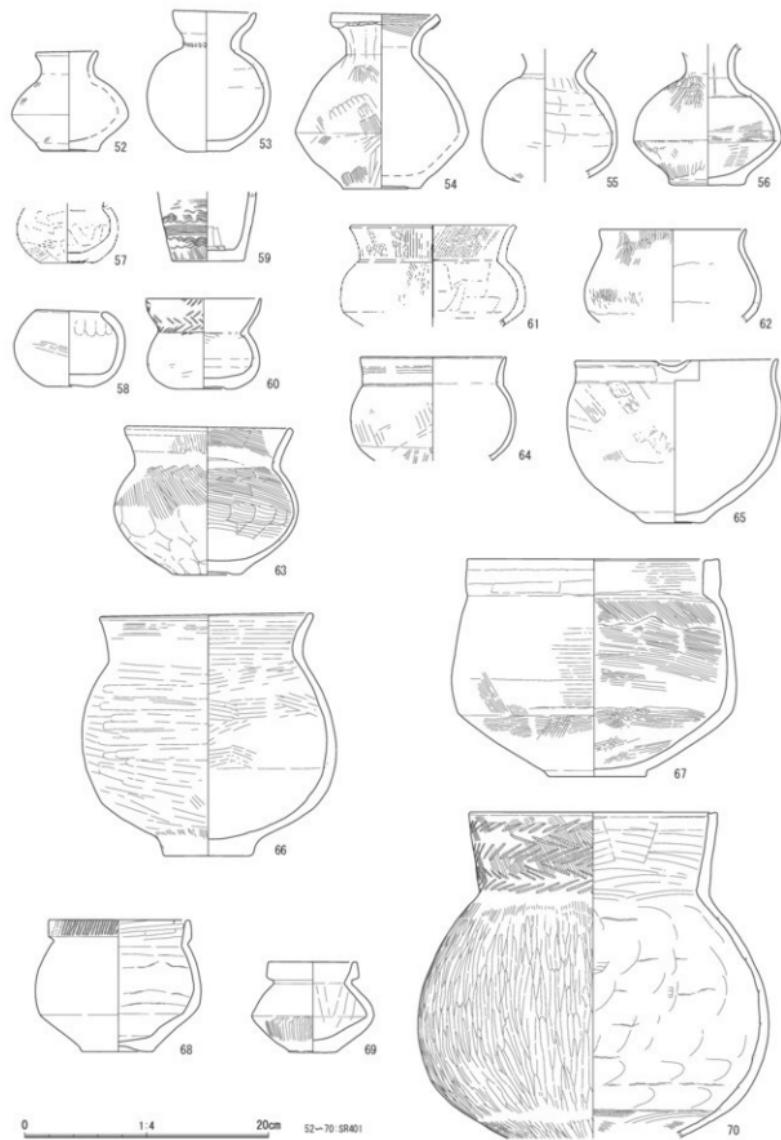
第246図 SR出土遺物（3）



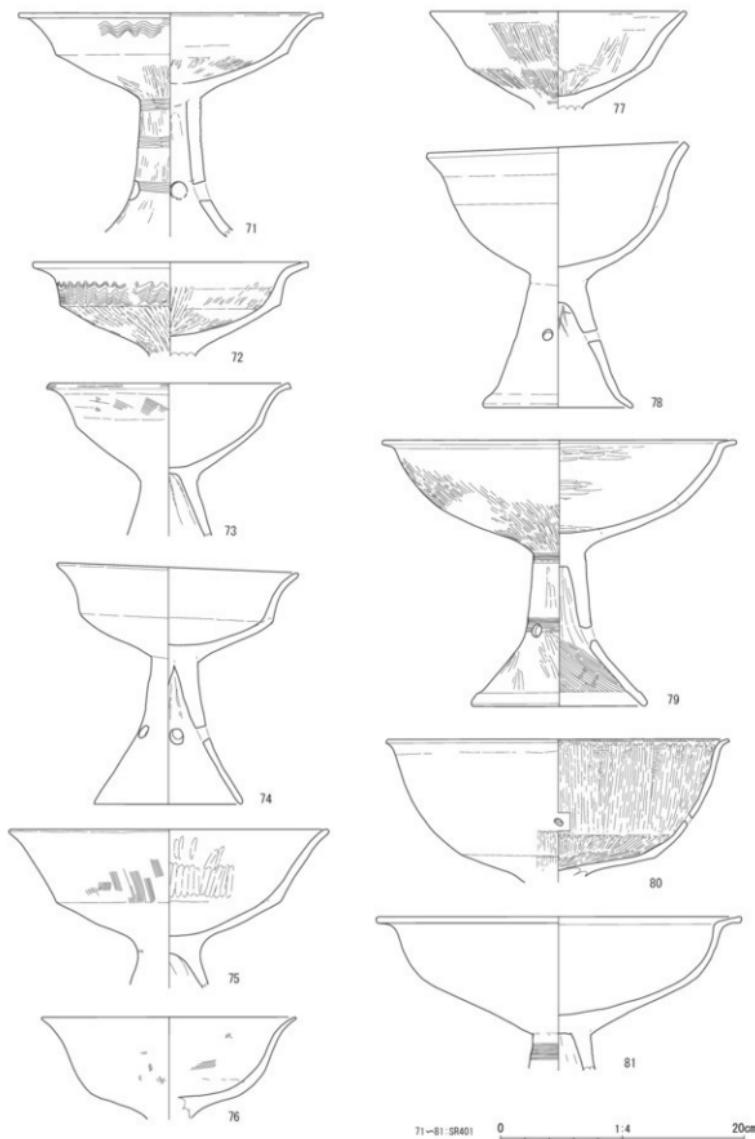
第247図 SR出土遺物（4）



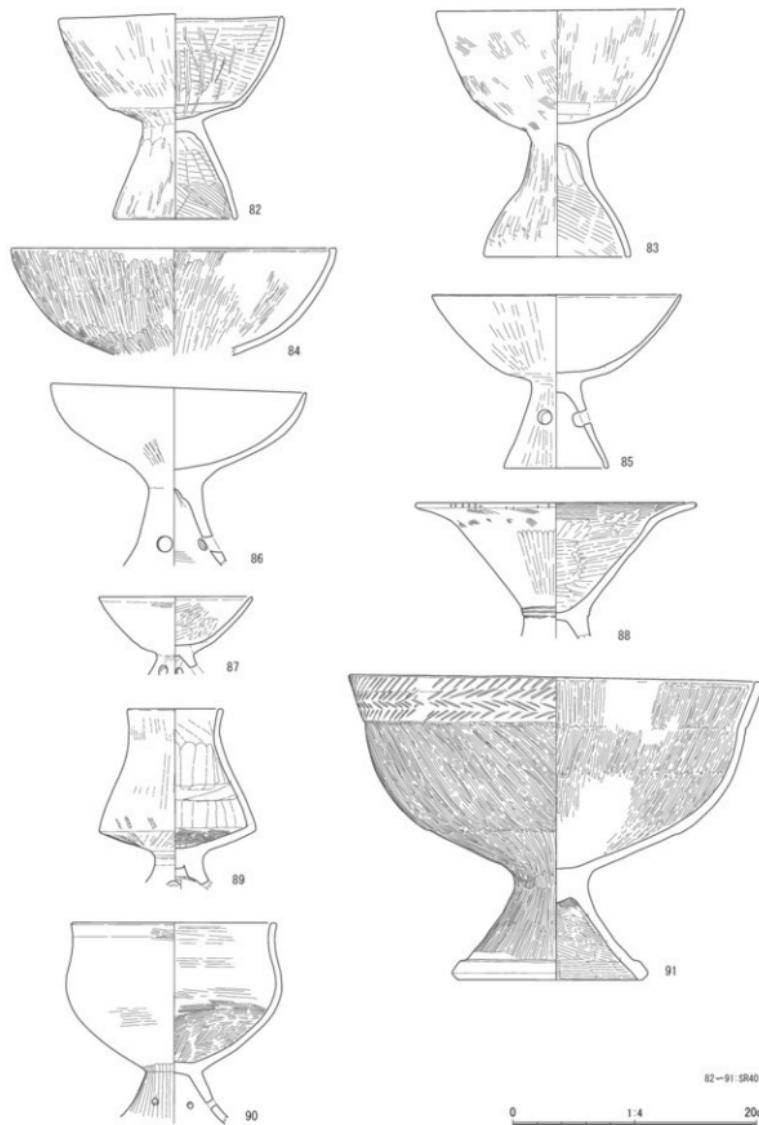
第248図 SR出土遺物（5）



第249図 SR出土遺物（6）



第250図 SR出土遺物（7）



第251図 SR出土遺物（8）

コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Pinus* ブナ科 写真

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科 写真

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靭で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

エノキ属 *Celtis* ニレ科 写真

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が1～2列配列する環孔材である。孔圈部外の小道管は多数複合して円形、ないし斜線状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部に方形細胞が見られる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～2細胞幅の小型のものと、8～10細胞幅ぐらいで硝細胞をもつ大型のものからなる。

以上の形質よりエノキ属に同定される。エノキ属にはエゾエノキ、エノキなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。落葉の高木で、高さ25m、径1.5mに達する。材は建築、器具、薪炭などに用いられる。

ヤマグワ *Morus australis* Poiret クワ科 写真

横断面：年輪のはじめに中型から大型の丸い道管が、単独あるいは2～3個複合して配列する環孔材である。孔圈部外の小道管は複合して円形の小塊をなす。道管の径は徐々に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部の1～3細胞幅ぐらいは直立細胞である。

接線断面：放射組織は上下の縁辺部が直立細胞からなる異性放射組織型で、1～6細胞幅である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりヤマグワに同定される。ヤマグワは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ10～15m、径30～40cmである。材は堅硬、韌性に富み、建築などに用いられる。

カツラ *Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc. カツラ科 写真

横断面：小型で薄壁の角張った道管が、単独ないし2～3個複合して密に散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～40本ほどである。放射組織は異性である。道管内にチロースが多数存在する。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、2細胞幅である。

以上の形質よりカツラに同定される。カツラは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ15～20m、径50～60cmであるが、大きいものは高さ35m、径2mに達する。材は軽軟で韌性であり加工しやすく、建築材などに用いられる。

草本 grass 写真

横断面：基本組織である柔細胞の中に並立維管束が不規則に分布する。並立維管束は木部と師部からなり、その周囲に維管束鞘が存在する。

放射断面及び接線断面：柔細胞及び維管束、維管束鞘が桿軸方向に配列している。

以上の形質より草本に同定される。

不明 unknown

木材の形質を呈していない。

5 所見

同定の結果、将監名遺跡出土の炭化材は、コナラ属コナラ節6点、クリ3点、コナラ属クヌギ節2点、エノキ属2点、ヒノキ属1点、ヤマグワ1点、カツラ1点、草本2点、不明1点であった。

コナラ属コナラ節は、温帯を中心に広く分布する落葉高木で、日当たりの良い山野に生育する。ミズナラなどの冷温帶落葉広葉樹林の主要構成要素や暖温帶性のナラガシワ、二次林要素でもあるコナラなどが含まれる。コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯に広く分布する落葉広葉樹で、山林や乾燥した台地、丘陵地に生育し二次林要素でもある。コナラ属コナラ節やコナラ属クヌギ節のコナラ属の木材は、概して弾力に富んだ強い材と言える。クリは、温帯に広く分布する落葉高木であり、暖温帶と冷温帶の中間域では純林を形成することもある。乾燥した台地や丘陵地を好み、二次林要素でもある。木材は重硬で保存性が良い材である。エノキ属は温帯を中心に広く分布する落葉高木で、谷あい、斜面、河川沿いや平坦地に生育する。強さは概して中庸で、やや堅く從曲性に富んでいる。ヤマグワは、温帯に広く分布する落葉高木で、谷間や緩傾斜地の適潤な深層の肥沃地を好む。材質はやや堅硬で韌性に富み、削りものによく用いられる。カツラは水湿のある谷間等に生育する落葉高木である。材は軽軟均質で、耐朽性、保存性は低いが、切削、加工が極めて容易である。ヒノキ属にはヒノキ、サワラがあり、温帯を中心に分布する常緑高木である。木材は、大きな材がとれる良材である。いずれの樹種も温帯域に分布する樹種ばかりであり、当遺跡周辺か近隣地域に分布しもたらされたと考えられる。

〈参考文献〉

佐伯浩・原田浩 1985 「針葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版, p.20-48.

佐伯浩・原田浩 1985 「針葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版, p.49-100.

島地謙・伊東隆夫 1988 「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣, p.296.

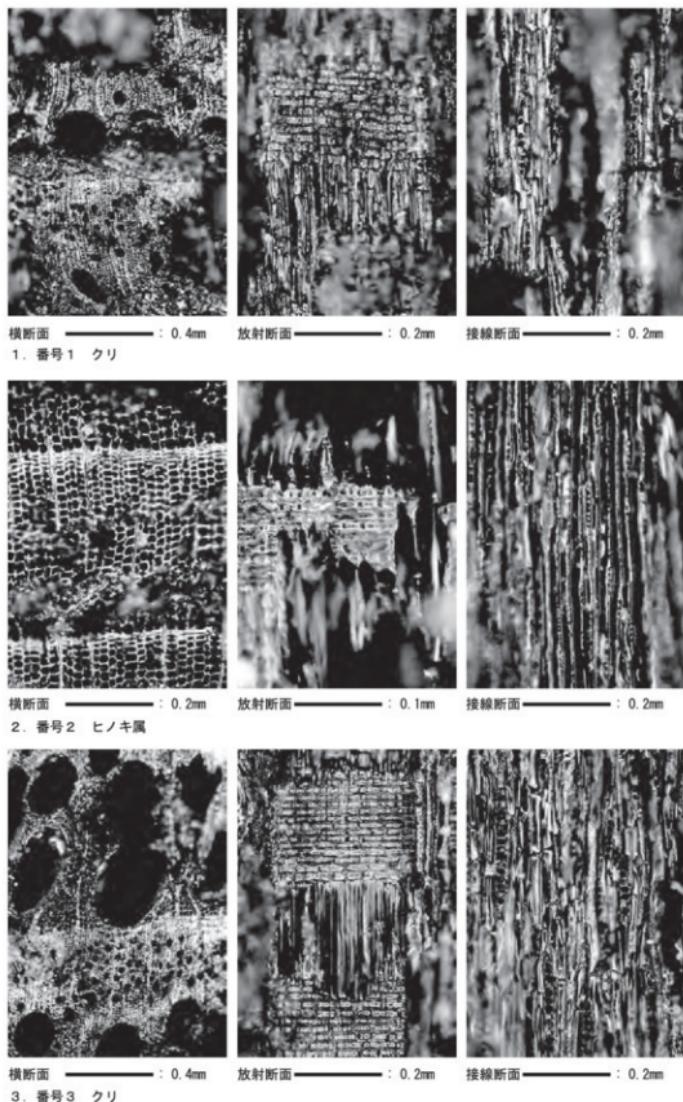
山田昌久 1993 「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成」『植生史研究特別第1号』植生史研究会, p.242.

第6表 将監名遺跡における炭化材樹種同定結果

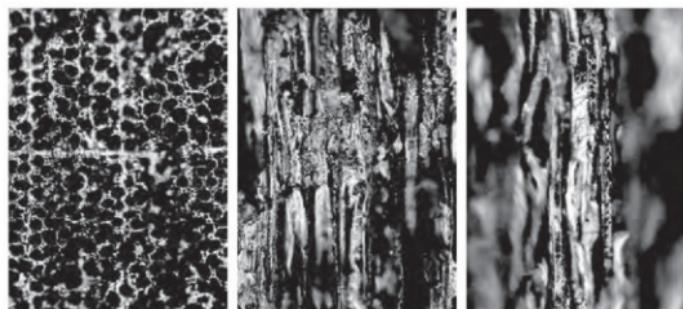
番号	取上番号	調査区	遺構	遺物名	結 果 (学名/和名)
1	13	1	SB102	C-7	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
2	14	1	SB102	C-8	<i>Chamaecyparis</i> ヒノキ属
3	17	1	SB102	C-11	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
4	138	2	SB214	w5	<i>Cercidiphyllum japonicum</i> Sieb. et Zucc. カツラ
5	147	2	SB214	w14	grass 草本
6	150	2	SB214	w17	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ
7	156	2	SB214	w23	grass 草本
8	161	2	SB214	w28	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
9	168	2	SB214	w35	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
10	176	2	SB214	w43	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
11	11	3	SB311	板炭サンブル①	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i> コナラ属クヌギ節
12	21	3	SB318	炭サンブル2	<i>Celtis</i> エノキ属
13	48	4-1	SB405	炭サンブル①	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
14	50	4-1	SB402	炭サンブル1	<i>Celtis</i> エノキ属
15	52	4-1	SB410	炭サンブル	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
16	4	5	SB501	炭サンブル1	<i>Morus australis</i> Poir. ヤマグワ
17	6	5	SB503	炭サンブル1	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i> コナラ属クヌギ節
18	12	5	SB505	炭サンブル1	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
20	20	5	SK518	炭化物サンブル	unknown 不明



第272図 SB214炭化材出土状況図



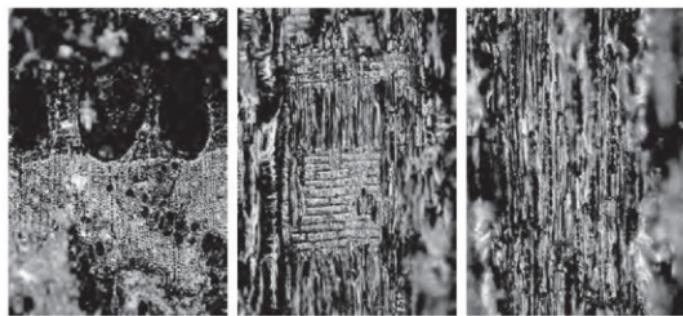
第273図 将監名遺跡の炭化材（1）



横断面 放射断面 接線断面
4.番号4 カツラ

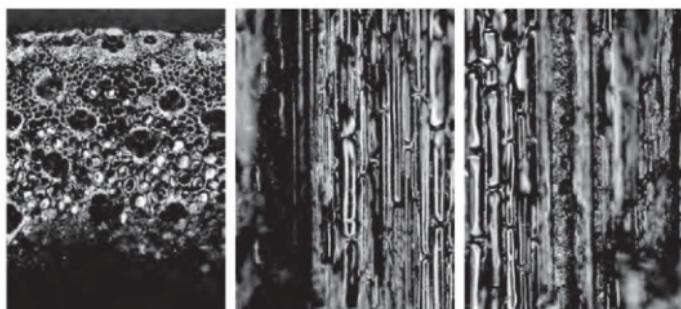


横断面 放射断面 接線断面
5.番号5 草本

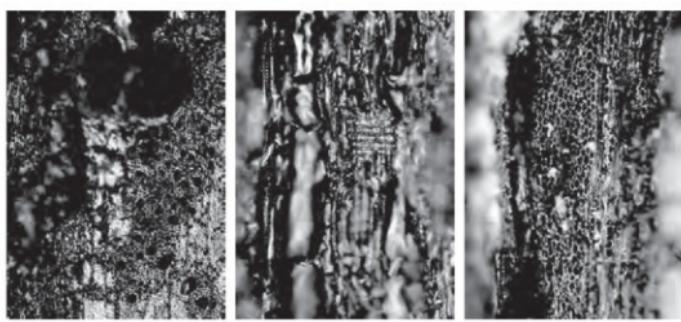


横断面 放射断面 接線断面
6.番号6 クリ

第274図 将監名遺跡の炭化材（2）



7. 番号7 草本

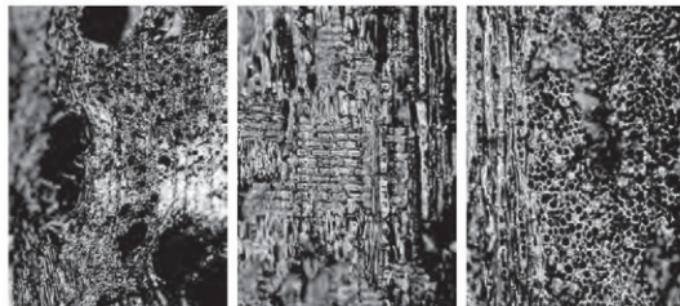


8. 番号8 コナラ属コナラ節

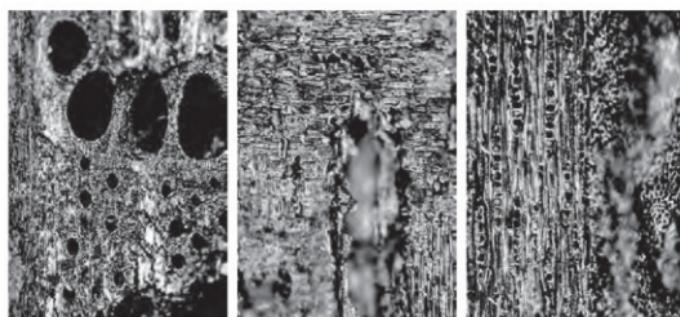


9. 番号9 コナラ属コナラ節

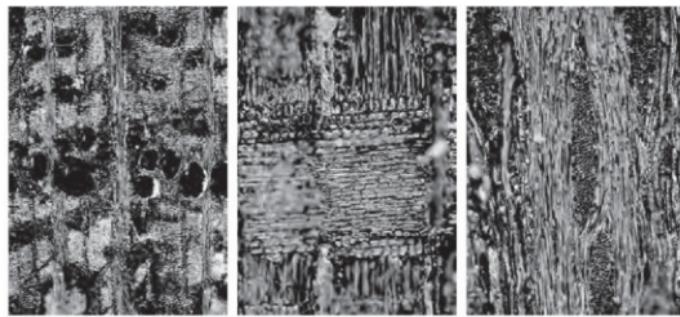
第275図 将監名遺跡の炭化材（3）



横断面 ━━━━ : 0.4mm
放射断面 ━━━━ : 0.2mm
接線断面 ━━━━ : 0.2mm
10.番号10 コナラ属コナラ節

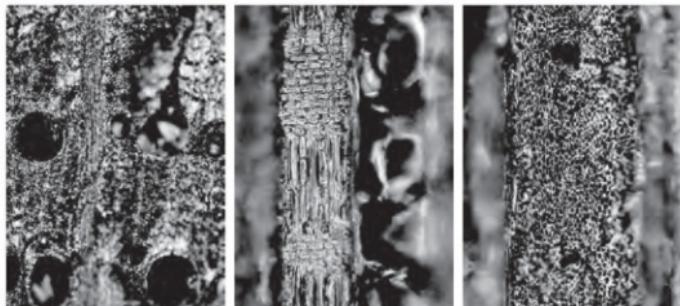


横断面 ━━━━ : 0.4mm
放射断面 ━━━━ : 0.2mm
接線断面 ━━━━ : 0.2mm
11.番号11 コナラ属クスギ節

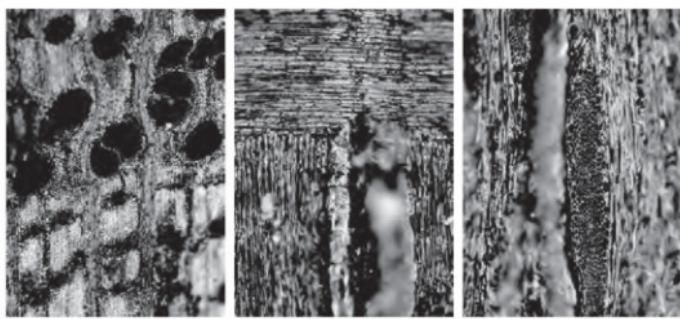


横断面 ━━━━ : 0.4mm
放射断面 ━━━━ : 0.2mm
接線断面 ━━━━ : 0.2mm
12.番号12 エノキ属

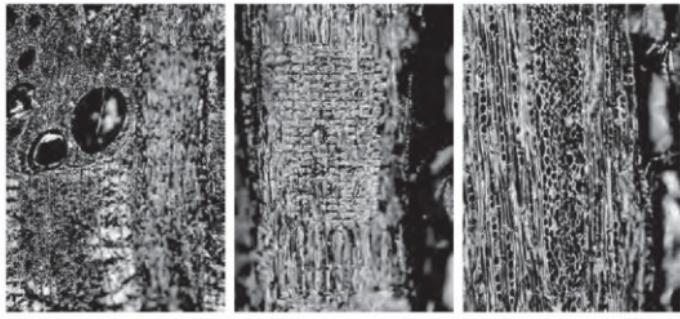
第276図 将監名遺跡の炭化材 (4)



13. 番号13 コナラ属コナラ節

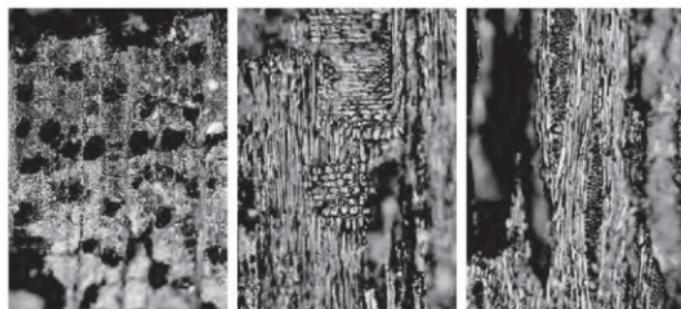


14. 番号14 エノキ属

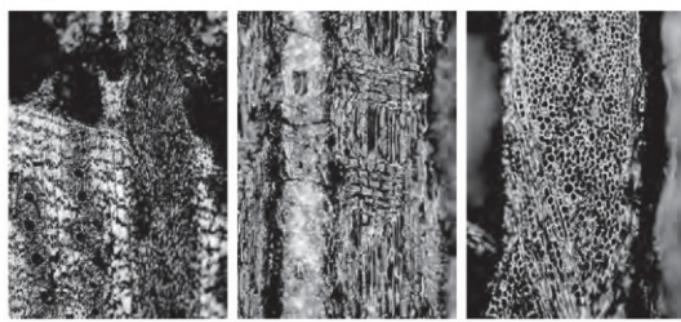


15. 番号15 コナラ属コナラ節

第277図 将監名遺跡の炭化材（5）



横断面 放射断面 接線断面 : 0.2mm
16. 番号16 ヤマグワ



横断面 放射断面 接線断面 : 0.2mm
17. 番号17 コナラ属クスギ節



横断面 放射断面 接線断面 : 0.2mm
18. 番号18 コナラ属コナラ節

第278図 将監名遺跡の炭化材（6）

II 炭化種実同定

1 はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出し、その群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

将監名遺跡の弥生時代の試料は、炭化した栽培植物の種実であった。なお、方法および同定は、奈良教育大学金原正明氏の教示を得た。

2 試料と方法

試料は、将監名遺跡の弥生時代の堆積層から水洗選別された、試料19（取上番号16、5区G1からG(-4)）、試料21（取上番号24、5区H(-4)）、試料22（取上番号29、5区G(-4)）の炭化種実である。比較的良好な状態のものが多い。

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴によって同定分類を行った。結果は属や種の階級で示した。栽培植物であるため、完形のものの大きさはすべて計測した。また、栽培植物でへそなど特徴のある部位が残るものは、すべて個体の写真を撮影した。

3 結果

同定の結果、草本2分類群が同定された。学名、和名および粒数を第7表に示し、計測値を第8表に示す。主なものと、へそなど特徴のある部位が残るもの写真に示した。

(1) 分類結果

1) 試料19

ササゲ属炭化種子完形12、完形（へそ欠）68、半形133、破片224が分類された。いずれも炭化している。

2) 試料21

イネ炭化果実（炭化米）完形18、破片56が同定された。

3) 試料22

ササゲ属炭化種子完形36、完形（へそ欠）105、半形150、破片1206が分類された。

(2) 分類群について

1) イネ *Oryza sativa* L. 果実 イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。大きさの計測値を第7表に示した。大きなもので長さ4.64mm、幅2.68mm、小さなもので長さ3.83mm、幅2.13mmである。粒形および大きさは、すべて短粒で、ほとんどが極小であり、一部小の範囲であった。

2) ササゲ属 *Vigna* 種子（炭化） マメ科

黒色で楕円形を呈す。へそは縦にやや細長い。完形はやや少ないが、へそまで残るものがある。大きさは変異があり、長さ7.84mmから3.59mmある。

ササゲ属の分類は、吉崎（1992）は初生葉の形態分類からアズキの可能性を示唆し、小畠・佐々木・仙波（2007）は現生種のへその形態分類からササゲ属アズキ亜属を分類している。本試料ではへその確認できない個体も多く、また現代の種（しゅ）と同様な分類ができるか不明なところもあり、ササゲ属 *Vigna* と分類した。

4 所見とまとめ

将監名遺跡の種実はいずれも炭化しており、イネ果実、ササゲ属種子が分類された。イネは、粒形が短粒で大きさが極小を主に小であり、弥生時代から古墳時代で出土する炭化米の標準的な範囲である。ササゲ属は、縄文時代から検出され、弥生時代にはイネと共に出土し中世にも出土例が多い。以前はリヨクトウとされ、その後アズキの可能性が高いとされていたものであるが、吉崎（1992）の初生葉の形態分類、小畑・佐々木・仙波（2007）のヘソ（臍）の形態分類でも、現状では保存状態も含め明白な分類が困難なため、ササゲ属とした。また、本試料は、大きさがやや大きなものや、ヘソがやや短く偏るものもあるという特徴を有し、アズキ亜属ではない固体がある可能性がある。以上、将監名遺跡（弥生時代）の種実類では、イネに加え、畑作物のササゲ属が比較的多く同定され、マメの畑作が示唆される。

〈参考文献〉

- 笠原安夫 1988 「作物および畠作の種類」『弥生文化の研究第2巻生業』雄山閣, p.131-139.
 南木睦彦 1991 「栽培植物」『古墳時代の研究第4巻生産と流通I』雄山閣, p.165-174.
 南木睦彦 1993 「穀・果実・種子」日本第四紀学会編『第四紀試料分析法』東京大学出版会, p.276-283.
 吉崎昌一 1992 「古代雑穀の検出」『月刊考古学ジャーナルNo.355』ニューサイエンス社, p.2-14.
 小畑弘己・佐々木由香・仙波靖子 2007 「縄文時代後・晩期におけるダイズ栽培」『植生史研究第15巻第2号』, p.97-114.

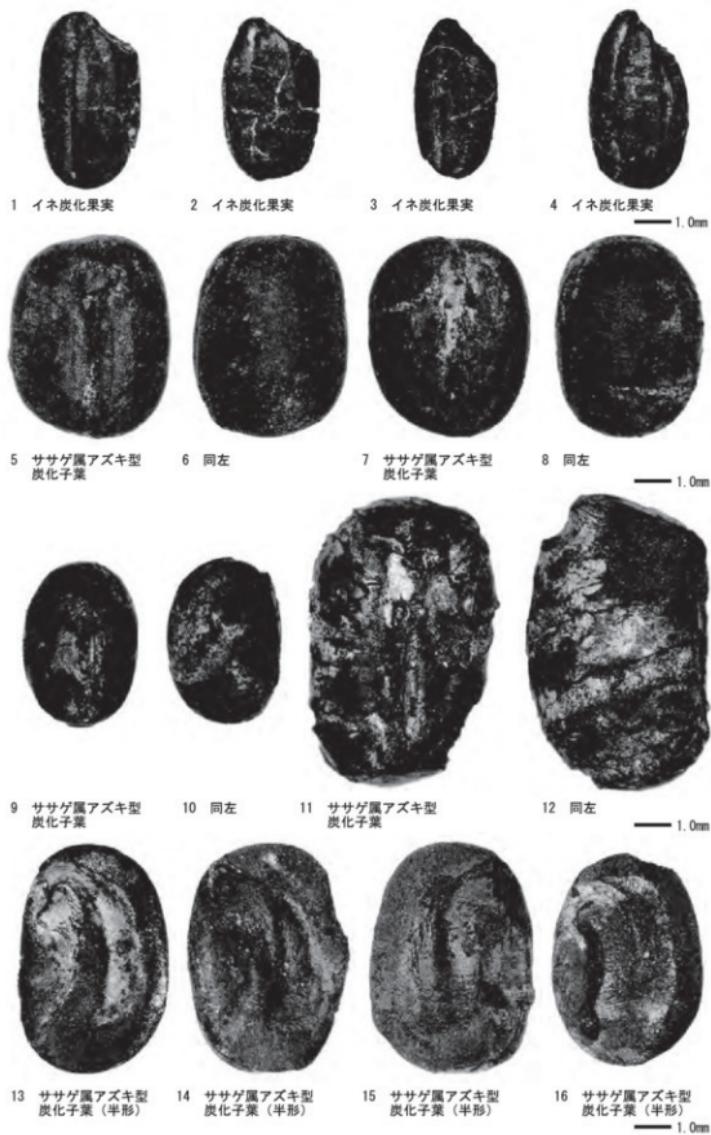
第7表 将監名遺跡における炭化種実同定結果

番号	取上番号	調査区	遺構	分類群		部位	個数
				学名	和名		
19	16	5	G1からG (-4)	<i>Vigna</i>	ササゲ属	種子（子葉） (臍欠) (半形) (破片)	12 68 133 224
21	24	5	H (-4)	<i>Oryza sativa L.</i>	イネ	果実 (破片)	18 56
22	29	5	G (-4)	<i>Vigna</i>	ササゲ属	種子（子葉） (臍欠) (半形) (破片)	36 105 150 1206

第8表 将監名遺跡 イネ炭化果実計測値およびイネの粒形とその大きさ：試料21（24）H (-4)

長さ(mm)	幅(mm)	粒形	粒大				合計	%
			極々小 ~	極小 ~	小 ~	中 ~		
4.64	2.68							
4.63	2.76							
4.62	2.56							
4.57	2.54							
4.56	2.46							
4.48	2.42							
4.42	2.58							
4.41	2.56							
4.34	2.80							
4.32	2.65							
4.29	2.67							
4.25	2.22							
4.23	2.61							
4.19	2.56							
4.16	2.46							
4.13	2.31							
4.00	2.62							
3.83	2.13							
合計				15	3		18	100
% %				83.3	16.7		100	

* 計測値は、粒長/粒幅で粒形を表し、粒長×粒幅で粒の大きさを表す。



第279図 将監名遺跡の種実

・試料19 5区 G1からG(-4)



・試料22 5区 G(-4)



第280図 将監名遺跡の種実 ササゲ属

第3章 まとめ

1 将監名遺跡の変遷

将監名遺跡では、住居址、土坑、環濠、方形周溝墓、土器棺墓、流路、井戸などの弥生時代中期～中世の遺構が検出された。ここでは、遺構と遺物の年代を踏まえた上で、将監名遺跡の変遷と遺跡の性格についてまとめてみたい。

弥生時代中期 まず、環濠1では丸子式土器、瓜郷式土器が主体となって出土したことから、弥生時代中期中葉の古段階の遺構と位置付けられる。したがって、将監名遺跡において、集落の形成が開始したのは弥生時代中期中葉以降と考えられる。環濠1と同時期の遺物は住居址では出土していないことと、環濠1は調査区の南西側で検出されたことから、当該時期においては、今回の調査区のさらに西側もしくは南西側に集落の中心があったと思われる。また、環濠1は、弥生時代中期以降の遺物が出土しておらず、中期中葉の住居址に切られていることから、中期には廃絶したと判断できる。その他の環濠2～5においても、瓜郷式、嶺田式といった弥生時代中期中葉の土器と弥生時代中期後半の土器が出土したことから、これらの環濠は中期後半に至るまでの短い期間に次々と構築されたと考えられる。また、環濠2は環濠3に切られており、環濠2と環濠3は中期後半の住居址と方形周溝墓に切られているため、このような遺構の切り合いからも、弥生時代中期中葉から中期後半にかけての短期間に、構築と廃絶を繰り返したことが窺える。環濠4も同様に、弥生時代中期中葉頃に構築されたと見られるが、中期後半の住居に切られるため、中期後半には既に廃絶していたであろう。その中で、環濠5は中期後半に相当する土器が多く出土していることから、弥生時代中期後半に至っても存続していた可能性がある。

次に住居址についてまとめていく。住居址は、弥生時代中期中葉から中期後半に相当するものが主体であり、調査区の広範囲に広がっている。そして、住居跡は3群に分かれて分布しており、南西側の一群は中期中葉に位置付けられ、中央付近と南東側の一群は中期後半に位置付けられる。これらの住居址群と環濠の構築順序から、将監名遺跡における集落の変遷を整理していきたい。まず、南西側の一群は、環濠1を切っているため、環濠1の廃絶後に構築された住居址群と考えられ、環濠2、3と同時期の土器が出土したことから、環濠2、3と同時期の住居址群と考えられる。また、弥生時代中期中葉に位置付けられる住居は、SB450やSB320など、調査区の中央付近の一群や南東側の一群でもいくつか存在することから、環濠4と環濠5の構築に伴って、居住域も東に移動していく様相が窺える。

今回の調査では、中期後半に位置付けられる住居址が最も多く検出されており、環濠5と調査区の中央と南東の住居址群が、中期後半における将監名遺跡の集落の中心であったと思われる。

ただし、調査区の北東隅では弥生時代中期後半に位置付けられる住居が3軒検出されているため、今後の調査によっては集落の範囲が、さらに北東側に広がる可能性も指摘できる。

さらに墓制の変遷と集落と墓域の位置関係についてまとめていく。将監名遺跡では、中期中葉の方形周溝墓や土器棺は検出されていないことから、今回の調査区以外の場所に墓域が存在したと考えられる。ただし、中期中葉の土坑が、遺跡内3基検出されており、これらの土坑には土坑墓が含まれる可能性が指摘できる。SK411、SK477、SK509では、丸子式の土器などが出土しており、SK477は環濠2の内側で住居址のない部分、SK411、SK509は環濠2の外側に位置するため、中期中葉段階では集落の外側、もしくは環濠内に墓域を設定していたと考えられる。

中期後半になると、土坑の他に、方形周溝墓と土器棺墓が構築されるようになり、その中でも、SZ02は規模が大きく、SZ09は遺物の量が多く出土していることから、集落の中でも中心的な墓と捉える事ができるだろう。この時期の方形周溝墓は、調査区の中央付近にまとまっており、同じ中期後半の住居址

の上に構築されていることから、住居址群の廃絶後すぐに、墓域を形成したと考えられる。

この将監名遺跡に居住していた人々の生業を窺える資料として、炭化米と石包丁の出土が挙げられる。将監名遺跡周辺では、中期に位置付けられる水田遺構は検出されていない。しかし、炭化米が出土したことによって、将監名遺跡周辺においても水稻耕作が行われていたことは間違いないであろう。また、炭化米の他にササゲ属の豆類が出土したことから、水稻耕作以外に豆類の畑作も行っていた可能性が指摘される。当時の食生活を知る上でも有効な資料となるであろう。

その他の石器の組成からも、将監名遺跡の生業を窺うことができる。将監名遺跡では、敲石、砥石などの加工工具と共に、石斧の未製品、破損品および大量の剥片が多く出土しており、包含層からは有孔磨製石鏟の穿孔に使用されたと考えられる石錐も出土していることから、将監名遺跡に居住していた人々は石器製作も行っていたと考えられる。

弥生時代後期 弥生時代後期に至ると、住居址は一切見られなくなり、方形周溝墓、土器棺、流路が遺跡の主体になる。方形周溝墓は調査区の中央と南東側の2群に分かれており、いずれも後期前半の土器が出土している。調査区の中央付近の一群は、後期前半のSR401に切られていることから、墓域は後期前半の短期間に内に、その役割を終えるようである。これらの周溝墓からは菊川式、伊場式、山中式に比定される土器が出土しており、将監名遺跡周辺が墓域へ変化した後も、周辺に居住する人々が東遠江や三河など他地域との交流を継続させていたことを示す。

墓域が廃絶した後はSR401が形成される。SR401は後期前半に形成されてから後期後半まで継続しており、それ以後は古墳時代から中世の井戸や流路が点在するのみで、人の居住の痕跡は見られなくなる。

将監名遺跡の評価 将監名遺跡周辺では山の神遺跡など弥生後期の遺跡が知られている程度で、弥生時代中期から後期にかけての人々の活動は、不明な部分が多くあった。そのような中で、将監名遺跡における中期中葉から中期後半に至る集落の確認と、それに伴う多量の遺物の出土は、当時の状況を知る上で大きな手掛かりになるであろう。将監名遺跡の遺物に関しては、土器は中期中葉の嶺田式や瓜郷式、中期後半の白岩式や凹線文系土器が出土していることから、弥生時代中期中葉から中期後半を通して東遠江や三河と盛んに交流を行っていたことが窺える。また、一部に尾張の貝田町式といった土器が混入していることから、三河以外のさらに広い範囲との交流の可能性も指摘できる。以上の事から、将監名遺跡は天竜川沖積平野の南部における中期の拠点集落と位置付けることができる。

2 特殊遺物について

将監名遺跡では、多量の土器の他に、県内では類例の少ない遺物も出土した。ここではそのような特殊遺物について述べていく。

鳥形土器 弥生時代における鳥を表現した模造品は、木製品、土製品などの立体物によって表現されるものや、絵画土器、絵画銅鐸に表現される例が知られる。その中で鳥形土器は二類に分けられ、一つは頭部を表現するもので、もう一つは頭部を表現せず、注口が付くものである。県内の出土例は、前者については浜松市井通遺跡の出土例が知られ、後者は浜松市角江遺跡と磐田市藏平遺跡の出土例が知られる。将監名遺跡出土の鳥形土器も、同じように中空であり、頭部がなく、頭部に注口が付く形態であることから、後者に属するものである。

このような鳥形土器の評価について、井上義光氏は愛知県朝日遺跡出土の鳥形土器を例に挙げ、水鳥の静止状態を表現し、平坦な部位に置くものと考えている（井上1985）。将監名遺跡で出土した鳥形土器は、朝日遺跡で出土した鳥形土器と形態が類似しているため、同じように水鳥を表現し、設置を目的としたものと考えられる。

また、井上氏は大阪府池上遺跡出土の鳥形木製品のように、鳥の飛翔を表現し杵頭に刺して掲げて使用したと考えられるものをA類、水鳥を表現し、平坦部に置くものをB類とし、A類は農耕儀礼にあって、朝鮮半島で行われた天的宗儀に基づく立竿信仰的に使用されたと考えている。一方で、B類はA類とは別の祭祀行為を推測している。県内の出土例を見ても、藏平遺跡の鳥形土器は性格不明の土坑で出土しており、角江遺跡の鳥形土器も自然流路での出土であるため、その用途やどのような祭祀行為が行われていたかは判然としなかった。そのような中で、将監名遺跡出土の鳥形土器は、方形周溝墓（SZ03）に伴って出土しており、将監名遺跡周辺において弥生時代後期前半には、死者の埋葬の際に鳥形土器を用いて、死者を送る祭祀行為が行われていた可能性が指摘できる。

銅鐸の舌 静岡県では3例目の出土で、浜松市角江遺跡と袋井市愛野向山遺跡の出土例が知られる。将監名遺跡出土の銅鐸の舌は、舌上部を平坦に仕上げ、穿孔を施すもので、服部信博氏の分類による所の1bタイプに相当する。1bタイプは弥生時代後期に属するものが大半であり、全体を研磨され、実際に使用されたものではなく、「見る銅鐸」に伴っていた舌である可能性を指摘している（服部2002）。一方、将監名遺跡出土の銅鐸の舌は、弥生時代中期の包含層で出土したことから、多くの1bタイプの舌とは時期を異にする。また、側面下部に使用痕と考えられる敲打痕がある事から、実際に使用されたものと考えられ、いわゆる「聞く銅鐸」、もしくは小銅鐸に伴っていたのであろう。西遠江は銅鐸祭祀の東限にあたり、将監名遺跡においても銅鐸が持ち込まれた可能性が想定できる。

有孔磨製石剣 磨製石剣は柄部に相当する部分に、大きな穿孔を施す特異な形状を呈しており、県内はもちろんのこと全国的に見ても珍しい形態であると思われる。

この有孔磨製石剣は、刃部に対して柄部が非常に短いことから単体では使用せず、木などの柄部を別に作って装着して使用したと考えられる。使用方法としては、柄に対して刃部を直角に装着する「戈」のような使用方法や、組合式短剣のような使用方法が考えられるが、穿孔部分は丁寧に研磨されており、擦痕等も確認できないため、どのように柄を装着したのかははっきりしないが、刃部の形状は石剣に類似しており、石戈に見られるような身と内の中軸線の傾きも見られないことから、組み合わせ式短剣のような使用方法であったと想定できる。

最後に系譜について考えてみると、この石剣は石材鑑定の結果から天竜川水系で見られる粘板岩であるということが分かっており、西日本で見られる組合式短剣とは柄部や穿孔の大きさが異なることを考え合わせると、西日本からの搬入品である可能性は低いと考えられる。一方で、中部高地で出土する変形銅戈形石製品には、内に大きな穿孔を施すという類似性が見られるため、この有孔磨製石剣は中部高

地から系譜が辿れる可能性があり、今後さらに研究が必要となるであろう。

〈参考文献〉

- 井上義光 1985 「祭祀研究の一視点—鳥形模造品を中心として—」『末永先生米壽記念獻呈論文集』末永先生米壽記念会
- 岩本 貴 1996 『角江遺跡II 遺物編1（土器・土製品）』静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 柴田 稔 1980 『静岡県歲平遺跡発見の鳥形土器』『考古学雑誌66巻1号』日本考古学会
- 寺前直人 2010 『武器と弥生社会』大阪大学出版会
- 服部信博 2002 『銅鐸に伴う「舌」について』『研究紀要 第3号』愛知県埋蔵文化財センター
- 馬場信一郎 2008 『武器形石製品と弥生中期栗林式文化』『赤い土器のクニ』の考古学』雄山閣

3 総括および今後の展望

将監名遺跡の調査では、住居址が少なくとも117基、土坑は遺物の出土したものだけでも98基、環濠が5本、方形周溝墓が少なくとも25基、土器棺墓が23基、弥生時代の流路が5本検出された。調査の成果として、将監名遺跡は弥生時代中期中葉から中期後半までの集落と、弥生時代後期前半の墓域へと変化していく過程が判明した。将監名遺跡周辺においては、弥生時代後期以降の遺跡が主体であったため、今回の調査で弥生時代中期の集落が検出されたことにより、将監名遺跡周辺の弥生中期から後期に至る歴史を知る上で重要な成果が得られたと言える。また、出土遺物に關しても三河と東遠江の土器以外にも尾張の土器が出土したことから、天竜川平野の南部地域における弥生時代中期の交流範囲を知る上でも重要な成果が得られた。ただし、今回の調査では、遺構と遺物も膨大な量になったため、まだ検討すべき余地は残されており、今後更なる調査と研究によって、地域の歴史が明らかにされていくことを期待したい。

本報告の作成にあたっては、以下の方々に有益な御指導・御助言を頂きました。ここに記してお礼申し上げます。(敬称略、五十音順)

伊藤通玄、篠原和大